

長野市

ISHIKAWAJORI

石川条里遺跡

HASETSURUSAKI

長谷鶴前遺跡群

一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4  
—長野市内1—

2024. 3

国土交通省関東地方整備局  
長野県埋蔵文化財センター





石川条里遺跡 遠景（西南から）

(2016年7月)



長谷鶴前遺跡群 遠景（南から）

(2017年9月)



石川条里遺跡 3b・4a区弥生時代の水田跡（東から）



石川条里遺跡 7b・8区弥生時代の畦畔 芯材出土状況（東上方から）



石川条里遺跡 11c区平安時代の水田跡（北西が上）



長谷鶴前遺跡群 2区平安時代の水田跡（南から）



長谷鶴前遺跡群 SC01道路跡（北から）



長谷鶴前遺跡群 ST01長谷窯工房跡（西から）



石川条里遺跡 鍬形兜前立 (SD191出土)



長谷鶴前遺跡群 上：三方の側板 下：三方板復元 (SD40出土)



長谷鶴前遺跡群 陶器（素焼き）



長谷鶴前遺跡群 陶器（本焼き）



## 例 言

- 1 本書は、長野県長野市に所在する、石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。受委託契約については第1章を参照願いたい。なお、同一契約内で実施した塩崎遺跡群（2013～2017年度調査）の発掘調査報告書は、別途刊行予定である。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』33～36・38で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000）・国土地理院電子地形図25000『稲荷山』『信濃松代』『信濃中条』『長野』、長野市都市計画図（1：2,500）『91-3』『01-1』をもとに作成した。
- 5 本書で取り扱っている国土座標は国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅱ系の原点を基準としている。座標値は日本測地系を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託または御指導・御協力を得た（敬称略）。  
○業務委託  
花粉分析：株式会社古環境研究所（石川条里遺跡 2018・2019年度）  
株式会社古環境研究所（長谷鶴前遺跡群 2017・2018年度）  
珪藻分析：株式会社古環境研究所（石川条里遺跡 2018・2019年度）  
プラント・オパール分析：株式会社古環境研究所（石川条里遺跡 2015～2019年度）  
株式会社古環境研究所（長谷鶴前遺跡群 2018年度）  
放射性炭素年代測定：株式会社パレオ・ラボ（石川条里遺跡 2015年度）  
株式会社古環境研究所（石川条里遺跡 2016・2018・2019年度）  
株式会社加速器分析研究所（長谷鶴前遺跡群 2017年度）  
株式会社古環境研究所（長谷鶴前遺跡群 2018年度）  
樹種同定：株式会社古環境研究所（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群 2020年度）  
株式会社パレオ・ラボ（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群 2022年度）  
土壌分析：信州大学理学部特任教授 保柳康一（石川条里遺跡 2019・2021年度）  
信州大学理学部特任教授 保柳康一（長谷鶴前遺跡群 2018年度）  
元素マッピング分析：株式会社パレオ・ラボ（石川条里遺跡 2022年度）  
赤外分光分析：株式会社パレオ・ラボ（石川条里遺跡 2023年度）  
遺物実測・トレース：株式会社アルカ（石川条里遺跡 2021年度）  
X線透過撮影：長野県立歴史館（石川条里遺跡 2021年度）  
応急的保存処理：株式会社文化財ユニオン（長谷鶴前遺跡群 2023年度）

遺物写真撮影 : 信毎書籍印刷株式会社 (長谷鶴前遺跡群 2019・2022 年度)  
信毎書籍印刷株式会社 (石川条里遺跡 2022 年)

○調査指導

遺跡調査指導 : 信州大学理理学部特任教授 保柳康一 (2017 年度)  
元愛知県陶磁美術館副館長 仲野泰裕 (長谷鶴前遺跡群 2017 年度)

遺物調査指導 : 元愛知県陶磁美術館副館長 仲野泰裕 (長谷鶴前遺跡群 2018・2019 年度)

人骨・出土骨鑑定 : 京都大学名誉教授 茂原信生  
獨協医科大学医学部解剖学講座献体事務室事務長 櫻井秀雄  
総合研究大学院大学准教授 本郷一美  
(長谷鶴前遺跡群 2018、石川条里遺跡 2020～2023 年度)  
日本大学松戸歯学部准教授 五十嵐由里子 (石川条里遺跡 2020～2023 年度)

- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の機関・諸氏に御指導・御協力いただいた。お名前を記して感謝の意を表する(敬称略、五十音順)。

〔機関〕愛知県陶磁美術館 一里塚本業窯 瀬戸蔵ミュージアム 長野県立歴史館 長野市埋蔵文化財センター 長野市立博物館 松代陶苑

〔個人〕飯島哲也 市澤英利 岩井 理 岩淵 寛 小林正春 風間栄一 笹澤 浩 白沢勝彦

- 8 発掘作業・整理作業の担当者等は第1章第2節4に記載した。

- 9 本書の執筆担当分担は、以下のとおりである。

執筆分担

第1章 西香子

第2章 市川隆之

第3章 第1節 市川、第2節 市川・風間真起子、第3節 風間、第4節 市川

第4章 第1節 市川、第2節 市川・風間、第3節 柴田洋孝・風間、第4節 市川・馬場伸一郎

第5章 第1節 風間

第6章 第1節 市川、第2節 柴田・市川、第3節 市川

校閲 調査部長 川崎保

なお、第5章第2節は五十嵐由里子先生・茂原信生先生・櫻井秀雄先生・本郷一美先生より、第3節は保柳康一先生より玉稿を賜った。

- 10 本書に添付した DVD には、以下の内容を収録した。

報告書 PDF、遺物一覧表、自然科学分析報告書他

## 凡 例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘調査で欠番としたもの、整理作業において遺構と認定しなかったために欠番としたものがある。
- 2 遺構番号は、本報告書の本文・図版・写真すべてに共通する。
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
  - (1) 遺構実測図  
掘立柱建物跡・欄列（1：80、1：100）、水田跡（1：400、1：500、1：1000）、畦畔（1：40、1：60、1：100）、溝跡（1：40、1：150、1：200、1：250、1：400）、墓跡（1：20）、井戸跡（1：60）
  - (2) 遺物実測図  
土器・陶器・磁器・瓦（1：4）、土製品（1：2、1：3、1：4）、ガラス製品（1：3）  
石器・石製品（2：3、1：3、1：6）、金属製品（2：3、1：2、1：3）  
木製品（1：4、1：6、1：8、1：12）、窯道具（1：3、1：4）
  - (3) 遺物写真  
原則として遺物実測図と概ね共通であるが、任意縮尺にしているものがある。
- 4 遺物の器種名は、過去の長野県埋蔵文化財センター報告書などを参考にして一般的と思われる名称を用いた。
- 5 基本層序および遺構埋土、土器の色調、粒径の区分等は「新版 標準土色帖」に準拠した。
- 6 実測図中のスクリーントーン等の凡例は、以下のとおりである。

### 遺構図

かく乱

硬化範囲

地山

土器・土製品 ●

石器・石製品 ●

金属製品 ▲

歯骨 ○

玉類 ●

木製品 ●

### 遺物図

土器・陶器・磁器

赤彩土器

黒色土器

墨書・墨

漆

灰釉

銅緑釉

鉄釉

透明釉

(断面壁)

須恵器・須恵質

平安時代灰釉陶器

石器・石製品

摩耗

炭化物

ガジリ

顕著な磨面（ロウ状光沢）

木製品

黒変

炭化

木皮

欠損

### 土坑・溝断面分類記号

土坑

A: 深くならかな温状

B: 深くU字状

C: 逆台形状

D: 溝ち込みが直で、底面が平坦

E: 底面に凹凸がある

F: 底面が凹がある

G: その他



溝

A: 深くならかな温状

B: 逆台形状

C: U字状

D: V字状

E: その他



- 7 本報告書の遺構分布図で、SKは遺構番号のみの表記とした。その他の遺構については、遺構記号(SC・SD等)も表記した。
- 8 本報告書の本文・表で、遺構重複について、(新)は記述遺構より新しい遺構、(旧)は記述遺構より古い遺構のことを示す。
- 9 本報告書の本文で、畦畔等の遺構から横たわった状態で出土した木材を「横木」と表記した。
- 10 本報告書の本文で、放射性炭素年代測定の表記は、原則として<sup>14</sup>C年代(年BP)を使用した。

# 目 次

巻頭写真	
例 言	
凡 例	
目 次	
図版目次	
写真図版目次	

第1章 発掘調査の経過	
第1節 調査に至る経過	
1 事業の概要	1
2 これまでの調査（埋蔵文化財発掘調査の状況と履歴）	1
3 保護措置の調整	1
4 行政手続きの経過	1
第2節 発掘調査の経過	
1 発掘作業の経過	7
2 整理等作業の経過	8
3 普及啓発活動	9
4 発掘作業と整理作業の体制	11
5 作業日誌抄録	13
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	19
第2節 歴史的環境	21
第3章 石川条里遺跡	
第1節 遺跡の概要	29
第2節 調査の概要	
1 調査の方法	32
2 基本層序	39
第3節 遺構	
1 弥生時代の遺構	50
(1) 概要 (2) 水田跡 (3) 溝跡 (4) 遺物集中	
2 古墳時代の遺構	59
(1) 概要 (2) 水田跡 (3) 土坑 (4) 溝跡 (5) 遺物集中	
3 古代の遺構	62

	(1) 概要 (2) 水田跡 (3) 土坑 (4) 溝跡	
4	中近世の遺構	71
	(1) 概要 (2) 掘立柱建物跡 (3) 柵列跡 (4) 井戸跡・土坑 (5) 墓跡	
	(6) 溝跡 (7) 天地返し跡	
第4節 遺物		
1	土器・陶器・磁器	78
	(1) 弥生時代の土器 (2) 古墳時代の土器 (3) 古代の土器	
	(4) 中近世の土器・陶器・磁器	
2	土製品	98
3	石器・石製品	99
4	金属製品	102
5	木製品	104
第4章 長谷鶴前遺跡群		
第1節	遺跡の概要	111
第2節	調査の概要	
1	調査の方法	112
2	基本層序	115
第3節	遺構	
1	中世(第4調査面)の遺構	121
	(1) 概要 (2) 水田跡 (3) 居館堀跡 (4) 道路跡 (5) 溝跡 (6) 集石遺構	
2	中世～近世(第3調査面)の遺構	123
	(1) 概要 (2) 居館堀跡 (3) 道路跡・溝跡 (4) 掘立柱建物跡	
	(5) 井戸跡・土坑 (6) 集石遺構 (7) 畝状遺構	
3	近世末～近代(第1調査面・第2調査面)の遺構	128
	(1) 概要 (2) 長谷窯工房跡 (3) 土坑 (4) 暗渠・溝跡	
第4節	遺物	
1	中世の遺物	131
	(1) 土器・陶器 (2) 土製品 (3) 石製品 (4) 木製品・漆製品	
2	近世・近代の遺物	135
	(1) 長谷窯関連遺物 (2) その他遺物	
第5章 自然科学分析		
第1節	分析の目的	143
第2節	出土骨	
1	石川条里遺跡出土人骨	145
2	石川条里遺跡出土動物骨	153
第3節	石川条里遺跡の古環境解析	163

## 第6章 総括

第1節 石川条里遺跡	
1 弥生時代～平安時代の水田面・遺構出土土器の年代	173
2 弥生時代中期後半水田跡	181
3 平安時代条里型水田跡	186
4 1区の中世前期居住遺構の変遷	194
5 近世遺構の変遷	198
第2節 長谷鶴前遺跡群	
1 居館跡の変遷	203
2 長谷窯	208
第3節 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群の変遷	215
引用・参考文献	221
付表	225
遺構図版・遺物図版	
写真図版	
報告書抄録	
添付 DVD	

## 挿図目次

第1図	坂城更埴バイパス位置図	4	第31図	石川条里遺跡出土の動物骨3	161
第2図	調査区略図	19	第32図	石川条里遺跡出土の動物骨4	162
第3図	遺跡位置図	20	第33図	試料採取	163
第4図	周辺遺跡分布図	24	第34図	分析装置1	164
第5図	遺跡範囲・調査範囲図	30	第35図	分析装置2	165
第6図	調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称	33	第36図	石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群における試料採取地点	166
第7図	石川条里遺跡 年度別調査範囲図	34	第37図	石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群周辺の地質図	166
第8図	石川条里遺跡 基本層序	44	第38図	長谷鶴前遺跡群地点⑦深掘りトレンチにおける土層累重と分析結果	168
第9図	基本層序(詳細図1)	45	第39図	地点⑦深掘りトレンチの試料から産出した珪藻遺骸	169
第10図	基本層序(詳細図2)	46	第40図	西暦888年仁和洪水砂層の分布	170
第11図	基本層序(詳細図3)	47	第41図	古墳時代土器の器種別組成(石川条里遺跡・榎田遺跡)	175
第12図	基本層序(詳細図4)	48	第42図	遺跡の条里地割図	187
第13図	基本層序(詳細図5)	49	第43図	遺跡周辺の条里地割図	191
第14図	飛鳥～奈良時代土器の焼物種別組成	85	第44図	1区居住遺構の変遷(Ⅰ段階)	195
第15図	飛鳥～奈良時代土器の器種別組成	85	第45図	1区居住遺構の変遷(Ⅱ段階)	195
第16図	平安時代前期土器の焼物種別組成	88	第46図	須恵質播鉢とカワラケの形態	196
第17図	平安時代前期土器の器種別組成	88	第47図	中世前期の掘立柱建物跡規模(松本市内)	197
第18図	中世前期播鉢の産地別組成	91	第48図	中世後期の掘立柱建物跡規模(松本市内)	197
第19図	近世播鉢の産地別組成	96	第49図	中世の大型掘立柱建物跡	197
第20図	近世焼物の器種別組成	96	第50図	近世用水模式図(1区、2区)	199
第21図	石川条里遺跡出土の田下駄の分類	106	第51図	近世用水模式図(3a区、3b・4a区)	200
第22図	田下駄の法量	106	第52図	近世用水模式図(5区、7a区)	201
第23図	建築部材・不明木製品の法量	109	第53図	居館跡の変遷図	205
第24図	長谷鶴前遺跡群 年度別調査範囲図	113	第54図	内耳鍋の口縁形態	207
第25図	長谷鶴前遺跡群 基本層序	120			
第26図	三方模式図	134			
第27図	分析試料採取位置図	143			
第28図	石川条里遺跡出土の人骨(歯)	152			
第29図	石川条里遺跡出土の動物骨1	159			
第30図	石川条里遺跡出土の動物骨2	160			



## 挿表目次

第1表	石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群 受委託契約の経過 (含塩崎遺跡群)……………	3	第19表	飛鳥～奈良時代土器の地区別出土破片数……………	85
第2表	石川条里遺跡 調査のための発掘にかかわる行政手続 (文化財保護法第92条関係)……………	5	第20表	平安時代前期土器の地区別出土破片数……………	88
第3表	長谷鶴前遺跡群 調査のための発掘にかかわる行政手続 (文化財保護法第92条関係)……………	5	第21表	中世焼物の地区別出土破片数1……………	92
第4表	石川条里遺跡 埋蔵物の発見にかかわる行政手続 (文化財保護法第102・105・108条関係)……………	6	第22表	中世焼物の地区別出土破片数2……………	92
第5表	長谷鶴前遺跡群 埋蔵物の発見にかかわる行政手続 (文化財保護法第102・105・108条関係)……………	6	第23表	近世焼物の地区別出土破片数……………	96
第6表	周辺遺跡一覧……………	25	第24表	長谷鶴前遺跡群の時期別遺構検出数……………	111
第7表	石川条里遺跡の時期別遺構検出数……………	29	第25表	道路跡 (SC01等) に関連する溝跡の地区別変遷……………	124
第8表	石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群の発掘調査履歴……………	31	第26表	その他自然科学分析一覧……………	144
第9表	石川条里遺跡の基本土層遺構検出面と各地区調査面との対応……………	35	第27表	石川条里遺跡の出土人骨一覧……………	145
第10表	弥生時代遺構の地区別検出数……………	50	第28表	SM001 菌の計測値……………	146
第11表	古墳時代遺構の地区別検出数……………	59	第29表	SM002 菌の計測値……………	147
第12表	石川条里遺跡 古代遺構の地区別検出数……………	62	第30表	SM003 菌の計測値 (乳菌)……………	148
第13表	長谷鶴前遺跡群 古代遺構の地区別検出数……………	62	第31表	SM003 菌の計測値 (永久菌)……………	148
第14表	中近世遺構の地区別検出数……………	71	第32表	SM004 菌の計測値……………	149
第15表	弥生時代中期後半土器の地区別出土破片数……………	78	第33表	石川条里遺跡から出土したイス……………	156
第16表	弥生時代後期土器の地区別出土破片数……………	80	第34表	石川条里遺跡から出土したウマ……………	156
第17表	古墳時代土器の地区別出土破片数……………	82	第35表	石川条里遺跡から出土したウシ……………	157
第18表	古代土器の地区別出土破片数……………	85	第36表	石川条里遺跡から出土したイノシシ……………	157
			第37表	石川条里遺跡から出土した不明破片……………	157
			第38表	石川条里遺跡から出土したイスの計測値……………	157
			第39表	石川条里遺跡から出土したウマの計測値……………	158
			第40表	地点⑦深掘りトレンチの試料から産出した珪藻遺骸……………	168
			第41表	古墳時代土器の器種別破片数……………	175
			第42表	2区南部溝跡の重複関係……………	204

## 図版目次

### 【石川条里遺跡】

- 図版 1 弥生時代の遺構配置図  
図版 2 弥生時代の遺構分布図 1  
図版 3 弥生時代の遺構分布図 2  
図版 4 弥生時代の遺構分布図 3  
図版 5 3b・4a 区第 2 水田  
図版 6 3b・4a 区第 2 水田等高線図  
図版 7 7a 区第 3 水田、7b・8 区水田跡  
図版 8 7a 区第 3 水田、7b・8 区水田跡等高線図  
図版 9 7b・8 区 SC061 芯材出土状況  
図版 10 7b・8 区 SC063 芯材出土状況  
図版 11 9 区 SC115、10 区 SC105、11c 区 SC101 芯材出土状況  
図版 12 11a 区 SC089 芯材出土状況  
図版 13 古墳時代の遺構配置図  
図版 14 古墳時代の遺構分布図 1  
図版 15 古墳時代の遺構分布図 2  
図版 16 古墳時代の遺構分布図 3  
図版 17 3b・4a 区古墳時代の水田跡  
図版 18 9 区 SC106・107 杭列  
図版 19 9 区 SC106・107 杭列・芯材出土状況  
図版 20 SX002 遺物出土状況  
図版 21 古代の遺構配置図  
図版 22 古代の遺構分布図 1  
図版 23 古代の遺構分布図 2  
図版 24 古代の遺構分布図 3  
図版 25 古代の遺構分布図 4  
図版 26 古代の遺構分布図 5  
図版 27 10 区・11 区第 1 水田等高線図  
図版 28 12 区第 1 水田・長谷鶴前遺跡群第 1 水田等高線図  
図版 29 11c 区 SC094・096・097・098、12a 区 SC081 洪水復旧痕跡  
図版 30 11b 区 SC058 芯材出土状況  
図版 31 11c 区 SC092 芯材出土状況  
図版 32 11c 区 SC093・095 芯材出土状況  
図版 33 12a 区 SC081・086 芯材出土状況  
図版 34 長谷鶴前遺跡群 1 区 SC04・SC11 芯材出土状況  
図版 35 古代の土坑・溝跡 1  
図版 36 古代の溝跡 2  
図版 37 中近世の遺構配置図  
図版 38 中近世の遺構分布図 1  
図版 39 中近世の遺構分布図 2  
図版 40 中近世の遺構分布図 3  
図版 41 中近世の遺構分布図 4  
図版 42 中近世の遺構分布図 5  
図版 43 中近世の遺構分布図 6  
図版 44 中近世の遺構分布図 7  
図版 45 中近世の遺構分布図 8  
図版 46 中近世の遺構分布図 9  
図版 47 中近世の遺構分布図 10  
図版 48 1 区中近世の遺構分布図 1  
図版 49 1 区中近世の遺構分布図 2  
図版 50 1 区中近世の遺構分布図 3  
図版 51 1 区中近世の遺構分布図 4  
図版 52 ST001 (1) 掘立柱建物跡  
図版 53 ST001 (2) 掘立柱建物跡  
図版 54 ST002 掘立柱建物跡  
図版 55 ST003・004 掘立柱建物跡  
図版 56 ST005・006 掘立柱建物跡  
図版 57 SA001・003・004 欄列  
図版 58 SA002・005 欄列  
図版 59 中近世の井戸跡 1  
図版 60 中近世の井戸跡 2  
図版 61 中近世の井戸跡 3  
図版 62 中近世の井戸跡 4  
図版 63 中近世の井戸跡 5  
図版 64 中近世の井戸跡 6  
図版 65 中近世の井戸跡 7  
図版 66 中近世の井戸跡 8  
図版 67 中近世の井戸跡 9

- 図版 68 中近世の井戸跡 10  
 図版 69 中近世の井戸跡 11  
 図版 70 中近世の土坑 1  
 図版 71 中近世の土坑 2  
 図版 72 SM001・002 墓跡  
 図版 73 SM003・004・005 墓跡  
 図版 74 中近世の溝跡 1  
 図版 75 中近世の溝跡 2  
 図版 76 中近世の溝跡 3  
 図版 77 中近世の溝跡 4  
 図版 78 中近世の溝跡 5  
 図版 79 中近世の溝跡 6  
 図版 80 12c 区 SD191 居館堀跡  
 図版 81 12c 区 SD188 塩崎用水  
 図版 82 12c 区断面図 (1)  
 図版 83 12c 区断面図 (2)  
 図版 84 弥生時代の土器 1  
 図版 85 弥生時代の土器 2・古墳時代の土器 1  
 図版 86 古墳時代の土器 2  
 図版 87 古墳時代の土器 3  
 図版 88 古代の土器 1  
 図版 89 古代の土器 2  
 図版 90 古代の土器 3  
 図版 91 中近世の土器・陶器・磁器 1  
 図版 92 中近世の土器・陶器・磁器 2  
 図版 93 中近世の土器・陶器・磁器 3  
 図版 94 土製品・玉類  
 図版 95 石器 1  
 図版 96 石器 2  
 図版 97 石器 3  
 図版 98 石器 4  
 図版 99 石器 5・石製品  
 図版 100 金属製品 1 鉄製品  
 図版 101 金属製品 2 銅製品  
 図版 102 金属製品 3 銅製品  
 図版 103 弥生時代の木製品 1  
 図版 104 弥生時代の木製品 2  
 図版 105 古墳時代の木製品 1  
 図版 106 古墳時代の木製品 2  
 図版 107 古墳時代の木製品 3  
 図版 108 古墳時代の木製品 4  
 図版 109 古墳時代の木製品 5  
 図版 110 古墳時代の木製品 6  
 図版 111 古墳時代の木製品 7  
 図版 112 古墳時代の木製品 8  
 図版 113 古墳時代の木製品 9  
 図版 114 古墳時代の木製品 10  
 図版 115 平安時代の木製品 1  
 図版 116 平安時代の木製品 2  
 図版 117 平安時代の木製品 3  
 図版 118 平安時代の木製品 4  
 図版 119 平安時代の木製品 5  
 図版 120 平安時代の木製品 6  
 図版 121 平安時代の木製品 7  
 図版 122 平安時代の木製品 8  
 図版 123 平安時代の木製品 9  
 図版 124 平安時代の木製品 10  
 図版 125 平安時代の木製品 11  
 図版 126 平安時代の木製品 12  
 図版 127 平安時代の木製品 13  
 図版 128 平安時代の木製品 14  
 図版 129 平安時代の木製品 15  
 図版 130 平安時代の木製品 16  
 図版 131 平安時代の木製品 17  
 図版 132 平安時代の木製品 18・中近世の木製品  
**【長谷鶴前遺跡群】**  
 図版 133 第 4 調査面 遺構配置図  
 図版 134 第 4 調査面 遺構分布図 1  
 図版 135 第 4 調査面 遺構分布図 2  
 図版 136 第 4 調査面 遺構分布図 3  
 図版 137 SD59 居館堀跡、SC20 道路跡 1  
 図版 138 SC20 道路跡 2  
 図版 139 SH06 集石遺構、中世の溝跡  
 図版 140 第 3 調査面 遺構配置図  
 図版 141 第 3 調査面 遺構分布図 1  
 図版 142 第 3 調査面 遺構分布図 2  
 図版 143 第 3 調査面 遺構分布図 3  
 図版 144 SD40 居館堀跡 1、SH04 集石遺構  
 図版 145 SD40 居館堀跡 2  
 図版 146 SD40 居館堀跡 3

- 図版 147 SC01 道路跡 1、道路跡関連の溝跡 1  
 図版 148 SC01 道路跡 2、道路跡関連の溝跡 2  
 図版 149 SC01 道路跡 3、道路跡関連の溝跡 3  
 図版 150 道路跡関連の溝跡 4  
 図版 151 道路跡関連の溝跡 5、2 区南壁道路跡  
 図版 152 中世の井戸跡 1  
 図版 153 中世の井戸跡 2、ST03 掘立柱建物跡  
 図版 154 第 1 調査面・第 2 調査面 遺構配置図  
 図版 155 第 1 調査面・第 2 調査面 遺構分布図 1  
 図版 156 第 1 調査面・第 2 調査面 遺構分布図 2  
 図版 157 第 1 調査面・第 2 調査面 遺構分布図 3  
 図版 158 ST01 長谷窯工房跡 1  
 図版 159 ST01 長谷窯工房跡 2  
 図版 160 ST01 長谷窯工房跡 3  
 図版 161 長谷窯関連遺物出土状況  
 図版 162 近代の土坑  
 図版 163 近代の溝跡  
 図版 164 中世の土器  
 図版 165 中世の土製品、石器・石製品  
 図版 166 中世の木製品 1  
 図版 167 中世の木製品 2  
 図版 168 中世の木製品 3  
 図版 169 中世の木製品 4  
 図版 170 長谷窯関連遺物 1 陶器  
 図版 171 長谷窯関連遺物 2 陶器  
 図版 172 長谷窯関連遺物 3 陶器  
 図版 173 長谷窯関連遺物 4 陶器  
 図版 174 長谷窯関連遺物 5 陶器  
 図版 175 長谷窯関連遺物 6 陶器  
 図版 176 長谷窯関連遺物 7 陶器  
 図版 177 長谷窯関連遺物 8 陶器  
 図版 178 長谷窯関連遺物 9 陶器  
 図版 179 長谷窯関連遺物 10 陶器  
 図版 180 長谷窯関連遺物 11 陶器  
 図版 181 長谷窯関連遺物 12 陶器  
 図版 182 長谷窯関連遺物 13 素焼き製品  
 図版 183 長谷窯関連遺物 14 素焼き製品  
 図版 184 長谷窯関連遺物 15 素焼き製品  
 図版 185 長谷窯関連遺物 16 窯道具  
 図版 186 長谷窯関連遺物 17 窯道具  
 図版 187 長谷窯関連遺物 18 窯道具  
 図版 188 長谷窯関連遺物 19 窯道具  
 図版 189 長谷窯関連遺物 20 窯道具  
 図版 190 長谷窯関連遺物 21 窯道具  
 図版 191 近代の磁器 1  
 図版 192 近代の磁器 2、陶器  
 図版 193 近代の瓦 1  
 図版 194 近代の瓦 2  
 図版 195 近代の瓦 3  
 図版 196 近代の石器・石製品  
 図版 197 近代の金属製品、ガラス製品

## 写真図版目次

### 【石川条里遺跡】

PL 1	弥生時代の遺構 1	PL36	石器 2
PL 2	弥生時代の遺構 2	PL37	石器 3・石製品
PL 3	古墳時代の遺構	PL38	金属製品 1
PL 4	古代の遺構 1	PL39	金属製品 2
PL 5	古代の遺構 2	PL40	弥生時代の木製品 1
PL 6	古代の遺構 3	PL41	弥生時代の木製品 2
PL 7	古代の遺構 4	PL42	古墳時代の木製品 1
PL 8	古代の遺構 5	PL43	古墳時代の木製品 2
PL 9	古代の遺構 6	PL44	古墳時代の木製品 3
PL10	中近世の遺構 1	PL45	古墳時代の木製品 4
PL11	中近世の遺構 2	PL46	古墳時代の木製品 5
PL12	中近世の遺構 3	PL47	古墳時代の木製品 6
PL13	中近世の遺構 4	PL48	古墳時代の木製品 7
PL14	中近世の遺構 5	PL49	古墳時代の木製品 8
PL15	中近世の遺構 6	PL50	古墳時代の木製品 9
PL16	中近世の遺構 7	PL51	平安時代の木製品 1
PL17	中近世の遺構 8	PL52	平安時代の木製品 2
PL18	中近世の遺構 9	PL53	平安時代の木製品 3
PL19	中近世の遺構 10	PL54	平安時代の木製品 4
PL20	中近世の遺構 11	PL55	平安時代の木製品 5
PL21	中近世の遺構 12	PL56	平安時代の木製品 6
PL22	中近世の遺構 13	PL57	平安時代の木製品 7
PL23	中近世の遺構 14	PL58	平安時代の木製品 8
PL24	中近世の遺構 15	PL59	平安時代の木製品 9
PL25	中近世の遺構 16	PL60	平安時代の木製品 10
PL26	中近世の遺構 17	PL61	平安時代の木製品 11
PL27	弥生時代の土器	PL62	平安時代の木製品 12
PL28	古墳時代の土器	PL63	平安時代の木製品 13
PL29	古代の土器 1	PL64	平安時代の木製品 14
PL30	古代の土器 2	PL65	平安時代の木製品 15
PL31	中近世の土器・陶器・磁器 1	PL66	中近世の木製品
PL32	中近世の土器・陶器・磁器 2	【長谷館前遺跡群】	
PL33	中近世の土器・陶器・磁器 3	PL67	第 4 調査面の遺構
PL34	土製品、玉類	PL68	第 3 調査面の遺構 1
PL35	石器 1	PL69	第 3 調査面の遺構 2
		PL70	第 3 調査面の遺構 3

PL71	第3調査面の遺構 4	PL80	長谷窯関連遺物 3
PL72	第1・2調査面の遺構 1	PL81	長谷窯関連遺物 4
PL73	第1・2調査面の遺構 2	PL82	長谷窯関連遺物 5
PL74	中世の土器、土製品、石器・石製品	PL83	長谷窯関連遺物 6
PL75	中世の木製品 1	PL84	長谷窯関連遺物 7
PL76	中世の木製品 2	PL85	長谷窯関連遺物 8
PL77	中世の木製品 3	PL86	長谷窯関連遺物 9
PL78	長谷窯関連遺物 1	PL87	ロクロ台石、瓦
PL79	長谷窯関連遺物 2	PL88	石器・石製品、近代の陶器、金属製品

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

### 1 事業の概要

国道18号坂城更埴バイパス（以下「坂更BP」という。）改築工事は、国土交通省関東地方整備局長野国道事務所（以下「長野国道」という。）が実施する埴科郡坂城町南条から千曲市大字屋代に至る延長19.2kmのバイパス事業で、現道に存在する粟佐交差点（千曲市）、杭瀬下交差点（同）をはじめとする交通混雑の緩和及び交通事故の減少を目的に進められている。

現在、千曲市大字八幡から同市大字稲荷山までの延長3.0km区間が開通しており、千曲市大字稲荷山から長野市篠ノ井塩崎の延長2.6km区間を坂更BP（延伸）として整備を進めている。工事は、2026年供用開始を目指して現在も継続している（第1図）。

### 2 これまでの調査（埋蔵文化財発掘調査の状況と履歴）

石川条里遺跡は、長野県北部の長野市南部に所在し、千曲川左岸の後背低地に立地する水田遺跡である。これまでに、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）、長野市教育委員会（以下「市教委」という。）、長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）により複数回調査が行われている。中でも中央自動車道長野線工事に伴って1988～1991年度に埋文センターが行った調査では、小高い地からみつかった古墳時代の祭祀行為に関連する遺構や、出土した同時期の多量の木製遺物等が特に注目された。

長谷鶴前遺跡群は、長野市南部、前述の石川条里遺跡西側に所在し、千曲川左岸の山々が形成する崖錐地の傾斜地と低湿地に立地する集落遺跡である。これまでに、1987～1989年度に県教委、市教委、埋文センターにより調査が行われ、調査結果から当該地の生産域と生活域の境界を明らかにする上で重要な遺跡とされた。なお調査履歴の詳細については第3章第1節に記した。

### 3 保護措置の調整

2010（平成22）年11月、県教委・市教委は坂更BP改築工事に係る埋蔵文化財の保護について、長野国道と調整を行い、当該事業に係る塩崎遺跡群、石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群の保護措置は記録保存調査とした。2011（平成23）年9月に埋文センターを加えた四者協議により、当該事業に伴う発掘調査は、長野国道が埋文センターへ委託して実施することで合意した。

### 4 行政手続きの経過

長野国道は文化財保護法第94条に基づき、2013（平成25）年3月1日付け国開整長国工第184号で、県教委あてに「土木工事のための埋蔵文化財発掘の通知」を提出した。これを受けて県教委は同年3月5日付け24教文第8-385号で埋蔵文化財の発掘を実施するよう勧告するとともに、事前に、埋文センターと協議するよう通知した。埋文センターは、県教委を交えて長野国道と協議を行い、以下のとおり協定を締結することにした。

なお、この協定は2022（令和4）年3月4日に変更し、第6条の発掘調査の期間を令和7年度まで、第7条の概算総額を1,868,650,757円としている。

埋文センターは、文化財保護法第92条に基づき発掘届を年度ごと県教委に提出し、協定第8条に基づいて長野国道と契約を締結し、13年に亘る事業を実施することとなった。

一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書

一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査（以下「発掘調査」という。）の実施について、国土交通省関東地方整備局（以下「甲」という。）と長野県教育委員会（以下「乙」という。）と一般財団法人長野県文化振興事業団（以下「丙」という。）とは、次のとおり協定を締結する。

（目的）

第1条 この協定は、事業に伴う埋蔵文化財の取扱い及び発掘調査の実施方法等について定めることを目的とする。

（適用区間）

第2条 この協定を適用する区間は、長野県長野市塩崎の位置図に示す区間とする。

（発掘調査の体制）

第3条 甲は丙に、前条の適用区間の発掘調査を委託する。

2 丙は、発掘調査を実施する組織を速やかに編成し、別添実施計画書に基づき発掘調査を実施する。

（発掘調査の指導）

第4条 乙は、丙が行う発掘調査内容・方法に対し、検査、指導、監督にあたるものとし、問題があった場合は改善を求めることができる。

（発掘調査場所及び対象面積）

第5条 発掘調査の実施場所及び対象面積は別添年度別計算書のとおりとする。

2 前項に予定する発掘調査の実施場所及び対象面積に変動ある場合は、甲乙丙協議して定める。

（発掘調査の期間）

第6条 丙は平成29年3月31日までに現場における全体の発掘作業を終了し、平成36年3月31日までに出土品及び図面・写真等の記録類の整理作業と報告書の作成を完了する。

2 発掘作業の着手順序及び範囲は、甲乙丙協議して定める。

（発掘調査の費用）

第7条 この調査に要する費用は、別添年度別計算書のとおり概算総額1,671,309,150円とし、甲が負担する。

2 前項の費用は、工事区間内で新たに埋蔵文化財を発見した場合及び物価賃金の変動等により増減が生じた場合には、甲乙丙協議して変更する。

（発掘調査の契約及び経費の支払方法）

第8条 甲と丙は、前条第1項に定めた概算額の範囲内において、年度ごとの発掘調査について別途契約する。

2 前条第1項の費用は、前項の契約に基づいて各年度ごとに作業の進捗に応じて支払う。

（報告書の提出）

第9条 丙は、業務が完了した時は、調査報告書を甲と乙に提出する。

2 丙は、各年度の発掘調査に係る業務実績報告書を、年度ごとに甲と乙に提出する。

（出土品及び記録類の取扱い）

第10条 発掘された出土品に係る処置については、丙が法令の定めるところにより行う。

2 甲及び丙は、出土品についての権利を放棄する。

3 乙は、報告書刊行後、出土品及び記録類を保管する。



(著作権の帰属及び譲渡)

第11条 発掘調査に係る図面・写真等の記録類及び調査報告書の著作権は、乙に帰属するものとし、著作権法上、丙に著作権が生じた場合でも、丙は著作権を乙に無償で譲渡する。

(協定の変更)

第12条 この協定を変更する必要が生じたときは、甲乙丙協議して定める。

(協定の有効期限)

第13条 この協定の有効期限は、協定の締結の日から第6条の発掘調査が完了し、委託金の精算行為が完了した日までとする。

(その他)

第14条 この協定に定めのない事項又は疑義を生じた事項については、その都度、甲乙丙が協議して処理する。

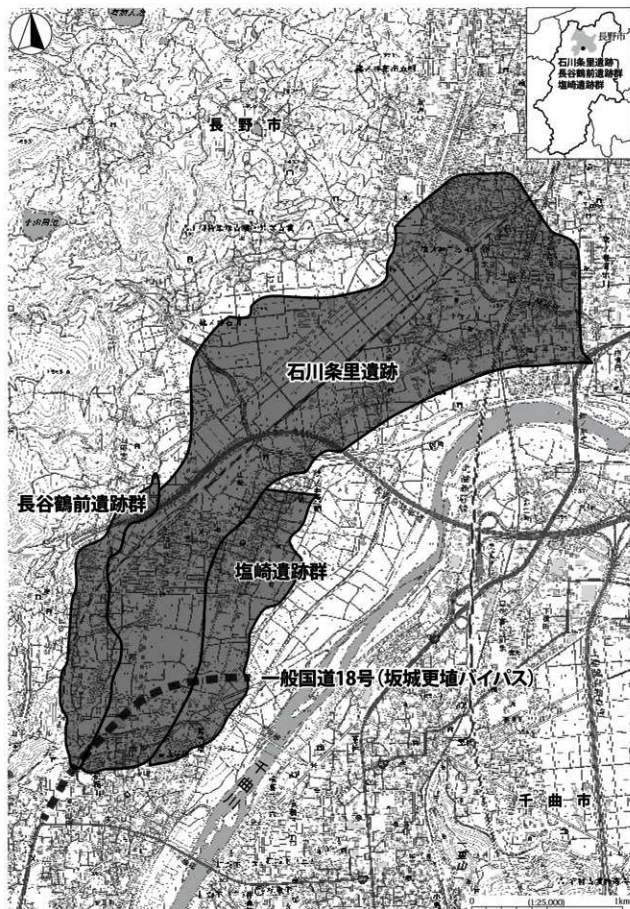
この協定締結の証として本書3通を作成し、甲乙丙記名押印のうえ、各々1通を保有する。

平成25年 3月29日

甲 国土交通省関東地方整備局長  
森北佳昭  
乙 長野県教育委員会教育長  
山口利幸  
丙 財団法人長野県文化振興事業団理事長  
和田恭良

第1表 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群 受委託契約の経過 (含塩崎遺跡群)

年 度	当 初		第1回変更		精 算		備 考
	契約日	金 額	契約日	増減額	完了日	金 額	
H25 (2013)	2013. 4. 1	158,424,000	2014. 3. 5	91,455,000 -66,969,000	2014. 3.31	91,455,000	塩崎遺跡群発掘調査
H26 (2014)	2014. 4. 1	216,540,000	2015. 3.13	200,981,000 -15,559,000	2015. 3.31	200,981,000	塩崎遺跡群発掘調査
H27 (2015)	2015. 4. 9	271,551,000			2016. 3.31	271,551,000	塩崎遺跡群発掘調査、石川条里遺跡確認調査
H28 (2016)	2016. 4. 1	250,528,000	2017. 2.16	272,751,000 22,223,000	2017. 3.31	272,751,000	塩崎遺跡群・石川条里遺跡発掘調査
H29 (2017)	2017. 4. 3	254,589,000	2018. 2. 8	244,663,200 -9,925,800	2018. 3.30	244,663,200	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群発掘調査、塩崎遺跡群整理等作業
H30 (2018)	2018. 4. 2	229,419,000	2019. 2. 5	202,734,000 -26,685,000	2019. 3.19	202,734,000	石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群発掘調査、塩崎遺跡群整理等作業
H31 (2019)	2019. 4. 1	219,600,000	2020. 2.21	202,596,991 -17,003,009	2020. 3.24	202,596,991	石川条里遺跡発掘調査、塩崎遺跡群・長谷鶴前遺跡群整理等作業
R 2 (2020)	2020. 4. 1	99,869,000	2021. 2. 3	94,849,409 -5,019,591	2021. 3.19	94,849,409	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群整理等作業
R 3 (2021)	2021. 4. 1	96,208,750	2022. 2. 9	93,547,907 -2,660,843	2022. 3.16	93,547,907	塩崎遺跡群発掘調査、塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群整理等作業
R 4 (2022)	2022. 4. 1	79,598,750	2023. 1.27	53,459,296 -26,139,454	2023. 3.16	53,459,296	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群整理等作業
R 5 (2023)	2023. 4. 1	78,610,000	2024. 1.31	61,645,062 -16,964,938	2024. 3.29	61,645,062	塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群整理等作業
計						1,790,233,865	



国土地理院電子地形図25000「福壽山」「信濃松代」を使用

第1図 坂城更埴バイパス位置図 (1 : 25,000)

第2表 石川系遺跡 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備 考
2015.10.16	27長埋第1-5号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	47,000㎡（当初）
2015.10.27	27教文第6-7号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2015.12.04	27長埋第4-9号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	415㎡
2016.03.04	27長埋第1-11号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	12,000㎡
2016.03.18	27教文第6-12号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2017.01.16	28長埋第12-11号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	16,000㎡
2017.03.03	28長埋第9-12号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	5,000㎡
2017.03.13	28教文第6-14号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2017.12.25	29長埋第4-7号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	5,500㎡
2018.03.02	29長埋第1-5号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	13,500㎡
2018.03.12	29教文第6-9号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2018.12.27	30長埋第5-4号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	13,500㎡
2019.03.01	30長埋第2-5号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	12,500㎡
2019.03.12	30教文第6-8号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2019.12.26	元長埋第4-4号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	12,100㎡
2021.02.25	2長埋第1-11号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	400㎡
2021.03.12	2教文第6-14号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2021.06.09	3長埋第4-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	400㎡

第3表 長谷鶴前遺跡群 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備 考
2017.03.03	28長埋第9-13号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	8,500㎡
2017.03.13	28教文第6-15号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2017.12.25	29長埋第4-6号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	7,200㎡
2018.03.02	29長埋第1-6号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	1,300㎡
2018.03.12	29教文第6-10号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施及び終了報告提出等を指示
2018.12.12	30長埋第5-3号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	1,300㎡

第4表 石川条里遺跡 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備 考
2015.12.04	27 長埋第2-8号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器1箱
2015.12.15	27 埋第197号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2015.12.28	27 教文第560号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2016.06.08に県帰属
2017.01.17	28 長埋第10-11号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・石製品・金属製品・木製品・骨他29箱
2017.03.31	28 埋第247号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2017.04.05	29 教文第18号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2017.07.19に県帰属
2017.12.25	29 長埋第2-7号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・石製品・金属製品4箱
2018.01.17	29 埋第181号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2018.01.22	29 教文第678号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2018.06.27に県帰属
2018.12.27	30 長埋第3-5号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・ガラス小玉・木製品16箱
2019.01.16	30 埋第205号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2019.01.21	30 教文第619号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2019.06.28に県帰属
2019.12.26	元長埋第2-4号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・石器・木製品・玉類31箱
2020.01.15	元埋第237-3号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2020.01.23	元教文第551号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2020.06.27に県帰属
2021.06.09	3 長埋第2-1号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・石製品・木製品・金属製品3箱
2021.06.24	3 埋第79-3号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2021.06.29	3 教文第181号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2021.12.11に県帰属

第5表 長谷鶴前遺跡群 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備 考
2017.12.25	29 長埋第2-6号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・陶磁器・竈道具・木製品・石製品・金属製品・獣骨108箱
2018.01.17	29 埋第180号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2018.01.22	29 教文第677号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2018.06.27に県帰属
2018.12.12	30 長埋第3-3号	埋文センター	埋蔵物発見届	長野南警察署	土器・木製品・獣骨42箱
2019.01.16	30 埋第204号	市教委	埋蔵物の文化財認定通知	埋文センター	
2019.01.21	30 教文第618号	県教委	文化財の県帰属通知	埋文センター	2019.06.14に県帰属

## 第2節 発掘調査の経過

### 1 発掘作業の経過

#### 2015（平成27）年度

石川糸里遺跡は、市教委により、千曲川左岸の後背湿地に広がる生産遺跡として登録される。本事業における調査地区は、遺跡の南端部にあたり、本年度は、次年度の調査開始に先駆け確認調査を行った。調査範囲内に6本のトレンチを設定し、遺構・遺物の状況を確認した。

洪水砂層や泥炭層に覆われた明確な水田は確認できなかったが現耕作土の下に水田土壌と考えられる層が複数堆積していた。また、西側トレンチでは、溝跡や井戸の可能性のある土坑等が検出された。検出面からは、弥生時代～平安時代の土器片が出土しており、遺構の時期を示唆している。

#### 2016（平成28）年度

石川糸里遺跡の本格的な調査が開始となる。堆積状況等から弥生時代後期以前、古墳時代～奈良時代、平安時代前期末の3時期の水田跡の存在が想定されていたが、弥生時代と古墳時代～平安時代の水田遺構は検出したものの、平安時代前期末の洪水砂層の堆積がなかったため、その時期の水田跡は検出できなかった。一方、鎌倉時代後期には微高地上に掘立柱建物群を主体とする3×7間の大型掘立柱建物跡や井戸跡等を含む集落域が形成されていたことが判明した。

#### 2017（平成29）年度

石川糸里遺跡では、前年に引き続き中近世以降の居住遺構、平安時代と古墳時代の水田遺構、弥生時代の水田遺構を検出した。弥生時代の水田跡は一筆の面積が5～25㎡と一定しないが、北西側にある微高地から東側へ傾斜する地形に合わせた畦畔の構築状況等を把握できた。

長谷鶴前遺跡群は、市教委により、弥生時代～平安時代の集落遺跡として登録される。本事業における調査地区は、遺跡の南端部にあたり、本年度から発掘作業を開始した。

遺跡からは、平安時代の洪水砂層に覆われた水田跡、中世の居館の堀跡や道路跡、近代の陶器製作工房跡等を検出した。特に、明治時代に操業していた長谷焼に関連する工房跡からは、全国的にも珍しい貴重な事例のロクロ台石が据えられた状態で出土している。

#### 2018（平成30）年度

石川糸里遺跡では、水田の時期的変遷と分布域の消長を把握することを目標として作業を行い、弥生時代と平安時代の水田遺構を確認した。平安時代の大畦畔には芯材として木材が埋設され、田下駄や建築部材等が含まれていた。弥生時代の大畦畔の中からは、芯材と共に水田の時期を裏付ける資料である弥生時代中期から後期の土器が出土している。

長谷鶴前遺跡群では、調査範囲の北東側から平安時代の水田跡を検出した。また、前年度調査した中世の道路跡や堀跡の西側から、更に古い時期の道路跡と堀跡を検出し、居館が作り替えられていたことが判明した。

本年度で、長谷鶴前遺跡群発掘作業は完了した。

#### 2019（平成31、令和元）年度

石川糸里遺跡では、南側に隣接する長谷鶴前遺跡群の調査成果も合わせて、自然堤防外側の後背湿地の土地利用を明らかにすることを目標として作業を行い、古墳時代の水田遺構や杭列、遺物集中、平安時代以降の水田跡や溝跡等を検出した。なお、前年度に確認した弥生時代の水田跡は水田面を被覆する泥炭層

の遺存状態が悪く、検出できなかった。また、古墳時代前期の水田遺構からは、小形丸底土器や高坏、ミニチュア土器等の遺物がまとまってみつかり、その周辺からは管玉と勾玉も出土している。中央自動車道長野線建設に伴う調査では、当該期の祭祀遺構が確認されているため、祭祀遺物の出土状況を注視・研究する必要があることが判明した。

#### 2021（令和3）年度

石川条里遺跡では、平安時代の水田跡や中世の堀跡や土塁跡、近世の水田跡等の遺構を検出した。

平安時代の水田跡上層には30cm程度の洪水砂層が堆積しており、洪水後に地形環境が大きく変わったことが考えられる。中世の堀跡からは折り曲げられた鋸形兜前立一対が出土している。また、現塩崎用水の直下からは、明暦堰や新堰の一部と思われる溝跡も確認できた。

本年度で、石川条里遺跡の発掘作業は完了した。

## 2 整理等作業の経過

#### 2018（平成30）年度

長谷鶴前遺跡群の本格整理作業を開始した。主な作業は出土遺物の接合と復元作業で、近代の工房跡から出土した大量の焼き物を中心に実施した。工房跡から出土した焼き物には素焼きと釉薬をかけた木焼きのものがあり、焼成工程が2段階に分かれていた状況が判明した。

#### 2019（平成31、令和元）年度

長谷鶴前遺跡群の遺物実測及び遺構・遺物実測図のデジタルトレース作業を行った。また、中世の居館の堀跡から出土した箱状の木製品が三方であると判明した。

#### 2020（令和2）年度

石川条里遺跡の本格整理作業を開始した。

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群とも主な作業は、出土木製品の实測図作成及び報告書掲載用の遺物写真撮影である。また、樹種同定等の自然科学分析業務委託を行った。木製品の出土遺構の時期は弥生時代から中近世であり、なかでも平安時代の畦畔の芯材に37点の田下駄が出土していた事は注目される。

#### 2021（令和3）年度

石川条里遺跡では、金属製品の応急的保存処理、出土遺物の分類・図化・トレース、遺構図のトレース作業を行った。金属製品の応急的保存処理は県立歴史館の施設を利用して行い、クリーニング作業を終了した。

長谷鶴前遺跡群では、遺物整理・遺構整理をほぼ終了し、報告書掲載に向けて資料の体裁を整える等の作業を進めた。

#### 2022（令和4）年度

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群とも主な作業は、遺物の写真撮影、報告書掲載図版や観察表の作成、原稿執筆等を実施した。特に、検出遺構の帰属時期の確認や、千曲川洪水砂の被覆状況等遺跡形成に関わる土層図や遺構分布図の作成を行い、弥生時代中期後半から中近世に至るまでの土地利用の状況や水田跡の変遷を明らかにした。

#### 2023（令和5）年度

石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群とも主な作業は、報告書の原稿執筆・編集作業、原稿や図版の校正及び印刷製本を行い、発掘調査報告書を刊行した。刊行した報告書を関係各所へ配布すると共に、資料移管に備えて、記録類や遺物の整理収納をして移管台帳等を作成した。

## 3 普及啓発活動

埋文センターは発掘調査の開始から終了までの間、様々な場面で埋蔵文化財に対する理解を深めてもらう機会を設けている。石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群でも、発掘作業中に行う発掘調査現場の公開や発掘体験等の連報性を重視した活動、整理作業時に行う展示会や講演会といった調査成果の報告等の活動を行ってきた。その活動内容は以下のとおりである。

## (1) 遺跡説明会および発掘体験等

2016.05.20	南相木村立南相木小学校、北相木村立北相木小学校見学受入れ（石川条里遺跡）	29名
2016.06.01	長野市立広徳中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3名
2016.07.05～07	現地説明会実施（石川条里遺跡）	151名
2016.07.06	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	7名
2016.07.26	長野市立川中島中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	4名
2016.07.27	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3名
2016.08.09	「体験発掘モニターツアー」発掘体験受入れ（石川条里遺跡）	20名
2016.08.30～09.02	国立長野工業高等専門学校インターンシップ生受入れ（石川条里遺跡）	5名
2016.10.12	長野市立犀陵中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	5名
2016.10.13	長野市立松代中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	5名
2016.10.18	長野県小諸高等学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	20名
2016.11.04	長野市立通明小学校発掘体験受入れ（石川条里遺跡）	32名
2016.11.21	長野市立塩崎小学校見学受入れ（石川条里遺跡）	43名
2017.07.05	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3名
2017.07.10	長野市立川中島中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群）	5名
2017.07.19	長野市立広徳中学校職場体験受入れ（長谷鶴前遺跡群）	1名
2017.07.20	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群）	5名
2017.09.30	現地説明会実施（長谷鶴前遺跡群）	100名
2017.10.17	長野県小諸高等学校就業体験受入れ（石川条里遺跡）	22名
2017.10.26	長野市立大岡中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	1名
2018.08.28	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	5名
2018.10.11	長野市立川中島中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3名
2018.11.23	現地説明会実施（石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群）	130名
2019.07.13	現地説明会実施（石川条里遺跡）	70名
2019.07.17	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3名
	長野市立川中島中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3名
2019.08.19	金沢学院大学インターンシップ生受入れ（石川条里遺跡）	1名
2019.08.21	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ（石川条里遺跡）	3名
2019.10.24	長野県小諸高等学校就業体験受入れ（石川条里遺跡）	10名

## (2) 展示会および講演会等

2017.02.18～02.24	『掘るしん in しなのい 2017』で出土品展示（石川条里遺跡）	埋文センター	199名
2018.02.18	川柳文化講演会・郷土歴史講演会で「平成29年度坂城更埴バイパス改築工事に伴う発掘調査報告～弥生時代から幕末明治時代まで～」を報告し、出土品展示（長谷鶴前遺跡群）	長野市篠ノ井公民館 川柳分館	65名
2018.03.17～06.03	巡回展「長野県の遺跡発掘2018」で出土品展示（長谷鶴前遺跡群）	長野県立歴史館	8,485名
2018.07.13～08.02	＊	長野県伊那文化会館	492名
2018.08.11～09.17	＊	塩尻市立平出博物館	1,406名
2018.09.29～11.25	＊	浅間縄文ミュージアム	1,455名
2019.02.14～02.22	『掘るしん in しなのい 2019』で出土品展示	埋文センター	270名
2019.03.16～06.23	2019年長野県立歴史館巡回展「長野県の考古学一時代を映す「匠」の技」で出土品展示	長野県立歴史館	12,975名
2019.07.27～09.16	＊	塩尻市立平出博物館	1,545名
2019.10.27～11.10	＊	飯田市美術博物館	2,449名
2022.03.19～06.12	『掘るしん 2022』で出土品展示（石川条里遺跡）	長野県立歴史館	3,427名

(3) 調査概要等の発行

2016.05.10～07.19	「発掘だより」通巻No 11～15 (石川条里遺跡)
2017.03.24	「発掘調査の概要 石川条里遺跡」『年報』33
2017.05.10～09.15	「発掘だより」通巻No 16～18
2018.02.02	「最新調査成果から4 明治時代の長谷窯の工房跡発見」『信州の遺跡』第12号 (長谷鶴前遺跡群)
2018.03.23	「発掘調査の概要 石川条里遺跡」『年報』34
2018.03.23	「発掘調査の概要 長谷鶴前遺跡群」『年報』34
2018.05.15～11.05	「発掘だより」通巻No 19～21
2019.03.22	「発掘調査の概要 石川条里遺跡」『年報』35
2019.03.22	「発掘調査の概要 長谷鶴前遺跡群」「整理等作業の概要 長谷鶴前遺跡群」『年報』35
2019.05.31～2020.01.14	「発掘だより」通巻No 22・23 (石川条里遺跡)
2020.03.23	「発掘調査の概要 石川条里遺跡」『年報』36
2020.03.23	「整理等作業の概要 長谷鶴前遺跡群」「調査研究ノート 長谷のかめやき—長谷焼調査の覚書—」『年報』36
2020.08.03	「特集 埋文展示室から 長野市石川条里遺跡出土—古墳時代の小型丸底土器—」『信州の遺跡』第15号
2021.03.23	「整理等作業の概要 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群」『年報』37
2021.07	「江戸時代の「塩崎用水」」『季刊考古学』156号 (石川条里遺跡)
2021.08.06	「珍しきもの 三方」『信州の遺跡』第17号 (長谷鶴前遺跡群)
2022.03.25	「発掘作業の概要 石川条里遺跡」「整理等作業の概要 塩崎遺跡群・石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群」『年報』38
2022.07.30	「珍しきもの 兜の立物「鍔形」」『信州の遺跡』第19号 (石川条里遺跡)
2023.03.17	「整理等作業の概要 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群」『年報』39
2024.03.15	「整理等作業の概要 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群」『年報』40

(4) その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載。



川柳文化講演会・郷土歴史講演会 出土品展示 (2018年)



巡回展『長野県の遺跡発掘2018』出土品展示 (2018年)



## 4 発掘作業と整理事業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

## 2015（平成27）年度 石川条里遺跡

所長：	会津敏男	副所長：	多城 哲	調査部長：	平林 彰	担当課長：	川崎 保
調査担当：	廣瀬昭弘	太田光春					
作業員：	池田豊一	風間三次	久保寛志	小林博美	塩入孝幸		

## 2016（平成28）年度 石川条里遺跡

所長：	会津敏男	副所長：	竹内 誠	調査部長：	平林 彰	担当課長：	川崎 保
調査担当：	市川隆之	鶴田典昭	綿田弘実	藤原直人	石丸敦史	柴田洋孝	廣瀬昭弘
	飯島公子	風間真起子	杉木有紗	大久保邦彦			
作業員：	青山珠実	朝日奈富士子	朝日奈菜樹	新井明子	荒井初彦	池田豊一	石黒章一
	上原美千代	宇賀村節子	岡村敏孔	岡村美喜子	風間三次	春日久子	加藤周子
	神林貴子	北村マユミ	久保寛志	倉科千文	小島美香	小島光夫	児玉径子
	小林和夫	小林とも子	小林奈美江	小林 博	小林博美	近藤由枝	佐藤重夫
	塩入孝幸	島田茂子	下平光秋	瀬在節雄	田村多恵子	田村 哲	戸塚 篤
	富澤修二	中沢輝行	西沢雅彦	野中敏彦	野中久代	原 恵美	半田純子
	深澤優子	福田 茂	福田三智子	堀巻香奈子	増田千加代	町田隆三	松本光正
	三沢真由美	南澤建一	南澤憲吾	宮尾千幸	宮崎勝夫	宮下 豊	宮原昭彦
	村田きよ子	森下晃治	森山茂隆				

## 2017（平成29）年度 石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群

所長：	会津敏男	副所長：	岡崎修二	調査部長：	平林 彰	担当課長：	櫻井秀雄
調査担当：	（石川条里）	河西克造	廣瀬昭弘	風間真起子	小林伸子		
	（長谷鶴前）	近藤尚義	柴田洋孝	市川隆之	風間真起子	小林伸子	
作業員：	青山珠実	朝日奈富士子	朝日奈菜樹	新井明子	荒井初彦	池田豊一	石黒章一
	宇賀村節子	岡村敏孔	岡村美喜子	風間三次	春日久子	加藤周子	北村マユミ
	久保寛志	倉科千文	小島美香	小島光夫	児玉径子	小林和夫	小林とも子
	小林奈美江	小林 博	小林博美	近藤由枝	佐藤重夫	塩入孝幸	島田茂子
	瀬在節雄	田村多恵子	田村 哲	戸塚 篤	富澤修二	中沢輝行	西沢雅彦
	野中敏彦	野中久代	半田純子	福田 茂	増田千加代	町田隆三	南澤憲吾
	峯村知佳	宮尾千幸	宮崎勝夫	宮原昭彦	森下晃治	森山茂隆	

## 2018（平成30）年度 石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群

所長：	会津敏男	副所長：	岡崎修二	調査部長：	平林 彰	担当課長：	櫻井秀雄
調査担当：	（石川条里）	河西克造	廣瀬昭弘	風間真起子			
	（長谷鶴前）	柴田洋孝	市川隆之				
作業員：	青山珠実	朝日奈富士子	新井明子	荒井初彦	宇賀村節子	岡村敏孔	風間三次
	春日久子	北村マユミ	久保寛志	倉科千文	小島美香	小島光夫	児玉径子
	小林とも子	小林奈美江	小林博美	近藤由枝	塩入孝幸	島田茂子	瀬在節雄
	田村多恵子	田村 哲	西沢雅彦	野中久代	半田純子	福田 茂	増田千加代
	町田隆三	南澤憲吾	峯村知佳	宮尾千幸	宮原昭彦	森下晃治	森山茂隆

山本希一 (発掘作業)  
小林 愛 清水正夫 田中富子 中村恵美 (整理作業)

## 2019 (令和元) 年度 石川糸里遺跡、長谷鶴前遺跡群

所 長： 原田秀一 副 所 長： 関崎修二 調査部長： 平林 彰 担当課長： 櫻井秀雄  
調査担当： (石川糸里) 河西克造 村井大海 廣瀬昭弘 風間真起子 伊藤 愛  
(長谷鶴前) 柴田洋孝  
作 業 員： 青山珠実 朝日奈富士子 新井明子 荒井初彦 池田豊一 宇賀村節子 岡村敏孔  
風間三次 春日久子 北村マユミ 久保寛志 小島美香 小島光夫 小林とも子  
小林奈美江 小林博美 近藤由枝 塩入孝幸 島田茂子 瀬井節雄 祖山克彦  
田村多恵子 田村 哲 西沢雅彦 野中久代 半田純子 福田 茂 増田千加代  
南澤憲吾 宮原昭彦 森下晃治 森山茂隆 (発掘作業)  
朝日奈富士子 荒井君江 石田和子 井澤広行 伊藤由美 岩原英治 大澤正明  
柄澤登紀子 窪田 順 小林 愛 酒井実姫 清水栄子 清水正夫 白井弓子  
田中富子 中村智恵子 西村はるみ 原 恵美 樋口典子 平林昌子 堀内慎一  
南澤憲吾 宮澤理恵子 山下千幸 吉田 稔 (整理作業)

## 2020 (令和2) 年度 石川糸里遺跡、長谷鶴前遺跡群 (整理作業)

所 長： 原田秀一 副 所 長： 山田秀樹 調査部長： 川崎 保 担当課長： 櫻井秀雄  
調査担当： 市川隆之 馬場伸一郎 大竹憲昭 風間真起子  
作 業 員： 赤川雅俊 荒井君江 石田和子 岩原英治 大澤正明 柄澤登紀子 小林 愛  
清水栄子 清水正夫 白井弓子 田中富子 樋口典子 平林昌子 宮澤理恵子  
宮下亜衣香

## 2021 (令和3) 年度 石川糸里遺跡、長谷鶴前遺跡群

所 長： 原田秀一 副 所 長： 山田秀樹 調査部長： 川崎 保 担当課長： 西 香子  
調査担当： 市川隆之 馬場伸一郎 大竹憲昭 風間真起子  
作 業 員： 久保寛志 小島光夫 小林博美 塩入孝幸 寺澤政俊 (発掘作業)  
石田和子 大澤正明 柄澤登紀子 清宮利花 窪田 順 小林 愛 清水秋子  
清水栄子 清水陽向 白井弓子 相馬麻織 田中富子 中村恵美 中村智恵子  
樋口典子 平林昌子 宮澤理恵子 宮下亜衣香 吉田 稔 (整理作業)

## 2022 (令和4) 年度 石川糸里遺跡、長谷鶴前遺跡群 (整理作業)

所 長： 原田秀一 副 所 長： 山田秀樹 調査部長： 川崎 保 担当課長： 西 香子  
調査担当： 杉木有紗 市川隆之 風間真起子  
作 業 員： 荒井君江 石田和子 柄澤登紀子 窪田 順 小久保輝 小林 愛 清水秋子  
清水栄子 白井弓子 相馬麻織 中村智恵子 樋口典子 宮澤理恵子 宮本和真  
吉田 稔

## 2023 (令和5) 年度 石川糸里遺跡、長谷鶴前遺跡群 (整理作業)

所 長： 原田秀一 副 所 長： 草間ちづる 調査部長： 川崎 保 担当課長： 柳澤 亮  
調査担当： 市川隆之 風間真起子  
作 業 員： 荒井君江 石田和子 窪田 順 小林 愛 是枝敦子 塩野入奈葉美 清水栄子  
白井弓子 相馬麻織 樋口典子 堀内慎一 宮澤理恵子 吉田 稔

## 5 作業日誌抄録

## 2015（平成27）年度

## 石川糸里遺跡

4月1日	長野国道と受委託契約を締結	3月4日	科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、プラントオパール分析）
11月16日	確認調査開始		
11月30日	確認調査終了	3月18日	整理作業員基礎整理作業終了
12月1日	整理作業員基礎整理作業開始		本年度委託契約終了
1月12日	科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、プラントオパール分析）	3月31日	基礎整理作業終了

## 2016（平成28）年度

## 石川糸里遺跡

4月1日	長野国道と受委託契約を締結	9月26日	長野国道と支障物件等について協議
4月12日	発掘作業開始		科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、プラントオパール分析）
4月18日	長野国道と本年度調査について協議	10月3日	長野国道によるU字溝用水撤去作業・仮設用水移設立会（～14日）
4月25日	測量業務委託契約	10月12日	長野市立岸陵中学校職場体験受入れ
5月12日	長野国道、県教委、市教委と本年度調査について協議	10月13日	長野市立松代中学校職場体験受入れ
5月20日	南相木村立南相木小学校、北相木村立北相木小学校見学受入れ	10月18日	長野県小諸高等学校職場体験受入れ
5月23日	長野国道、県教委と支障物件等について協議	10月19日	県教委上田典男氏視察
6月1日	長野市立広徳中学校職場体験受入れ	10月24日	長野国道と次年度調査について協議
6月7日	洪水砂留下に平安時代前期の大畦畔確認	11月4日	長野市立通明小学校発掘体験受入れ
6月15日	長野国道と調査環境について協議		大阪大学大学院生ジョセフ・ライオン氏見学
	長野県考古学会長小林正春氏見学	11月7日	中国寧夏固土資源庁視察団5名見学
6月16日	千曲市教育委員会平林大樹氏見学	11月10日	長野国道、長野テクトロン株式会社と調査環境について協議
6月22日	長野国道と調査環境について協議	11月18日	県文化財保護審議委員笹澤浩氏見学
6月29日	長野国道、塩崎上町地区区長ほか12名来跡	11月21日	長野市立塩崎小学校5年生見学
7月1日	長野国道、県教委、塩崎地区区長、塩崎上町地区区長と支障物件等について協議	11月22日	篠ノ井歴史の会27名見学
	須坂市教育委員会田中一穂氏ほか4名見学	11月25日	長野国道、長野市管財課、道路課、消防局と支障物件、次年度調査について協議
7月5日	現地説明会実施（～7日）	11月28日	石川糸里遺跡2区北垣戻し開始
7月6日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ		科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、プラントオパール分析）
7月8日	長野県立歴史館館長笹本正治氏、文献資料課長中野亮一氏見学	12月7日	長野国道、県教委、市教委と次年度調査について協議
7月11日	長野国道、県教委と調査工程について協議	12月22日	発掘作業終了
7月26日	長野市立川中高等学校職場体験受入れ	1月4日	整理作業員基礎整理作業開始
7月27日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ、篠ノ井有線取材対応	1月23日	科学分析業務委託契約（プラントオパール分析）
8月4日	長野国道と調査環境について協議	1月25日	長野国道、株式会社サンタキザワと支障物件について協議
8月9日	「体験発掘モニターツアー」発掘体験受入れ		
8月22日	長野国道と増工、次年度調査について協議	2月18日	「掘るしん in しなのい」展示会展示（～24日）
8月30日	国立長野工業専門学校インターンシップ生受入れ（～9月2日）	3月2日	測量業務委託完了
9月6日	長野国道と支障物件等について協議	3月16日	本年度委託契約終了
9月8日	塩崎地区区長と支障物件等について協議		整理作業員基礎整理作業終了
9月12日	市教委風間栄一氏・鈴木時夫氏見学	3月22日	科学分析業務委託完了（プラントオパール分析）
9月16日	中世の火葬施設より銭貨、数珠玉5点出土	3月31日	基礎整理作業終了

## 2017（平成29）年度

## 石川糸里遺跡

4月1日	長野国道と受委託契約を締結
4月13日	長野国道と支障物件等について協議 発掘作業開始
4月26日	測量業務委託契約
5月12日	信州大学理学部特任教授保康一氏による土壌の堆積状況についての指導
7月4日	長野国道、県教委、市教委と支障物件、調査工程等について協議
7月5日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ
7月10日	長野市立川中島中学校職場体験受入れ
7月20日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ
10月13日	国土交通省による現存井戸撤去工事立会い
10月17日	長野県小諸高等学校就業体験受入れ
10月26日	長野市立大岡中学校職場体験受入れ
11月7日	科学分析業務委託契約（プラントオパール分析） 測量委託業者による空中写真撮影
11月10日	長野国道、県教委、市教委と支障物件、調査工程等について協議
11月13日	県教委谷和隆氏視察
12月1日	整理作業員基礎整理作業開始
12月8日	発掘作業終了
12月18日	長野国道、県教委と引き渡しについて協議
2月7日	測量委託完了
3月1日	科学分析業務委託完了（プラントオパール分析）
3月9日	測量業務委託完了
3月16日	整理作業員基礎整理作業終了 本年度委託契約終了
3月31日	基礎整理作業終了

## 長谷鶴前遺跡群

4月1日	長野国道と受委託契約を締結
4月13日	発掘作業開始
4月21日	市教委風岡栄一氏調査指導
4月26日	測量業務委託契約
4月27日	委託測量・基準点設置
5月12日	信州大学理学部特任教授保康一氏による土壌の堆積状況についての指導
5月30日	科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定）
6月7日	県文化財保護審議会委員市澤英利氏調査指導
6月13日	元愛知陶磁美術館副館長長仲野泰祐氏による近世の遺構・遺物についての指導 県文化財保護審議会委員笹澤浩氏、総合情報課長大竹昭明氏、県立歴史館文庫資料課長中野亮一氏見学
6月14日	県文化財保護審議会委員市澤英利氏調査指導
6月20日	窯道具の円錐ビンの型出土
6月27日	科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定）
7月10日	長野市立川中島中学校職場体験受入れ 信州大学理学部特任教授保康一氏、学生4名見学
7月19日	長野市立広徳中学校職場体験受入れ
7月20日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験受入れ
9月20日	元愛知陶磁美術館副館長長仲野泰祐氏による近世の遺構・遺物の調査方法についての指導
9月26日	長野市民新聞社・篠ノ井有線放送取材対応
9月30日	現地説明会実施 長野ケーブルテレビ取材
10月24日	信州大学理学部特任教授保康一氏による低湿度の土層堆積についての指導
11月6日	測量委託業者による第2回空中写真撮影
11月13日	県教委谷和隆氏視察
11月15日	県文化財保護審議会委員市澤英利氏視察
11月26日	科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定） 科学分析業務委託契約（花粉分析）
11月28日	整理作業員基礎整理作業開始
12月1日	測量業務委託完了
12月15日	発掘作業終了
2月18日	長野市篠ノ井公民館川柳分館で調査成果報告会・展示 65名
3月9日	科学分析業務完了（放射性炭素年代測定）
3月15日	科学分析業務完了（花粉分析）
3月16日	整理作業員基礎整理作業終了 本年度委託契約終了
3月17日	巡回展『長野県の遺跡発掘2018』展示品展示（～6月3日）
3月30日	基礎整理作業終了



石川糸里遺跡 遺構検出作業

## 2018（平成30）年度

## 石川糸里遺跡

4月1日	長野国道と受委託契約を締結
4月5日	発掘作業開始
4月19日	長野国道と石川糸里遺跡・長谷鶴前遺跡群に係る市道埋設物の取り扱ひ等について協議
5月10日	測量業務委託契約
6月22日	須坂市教育委員会三ツ井芳恵氏ほか1名見学
6月25日	科学分析業務委託契約（プラントオーバー分析）
7月3日	科学分析業務委託試料採取（プラントオーバー分析）
8月8日	東海大学生1名、同志社大学生1名見学受入れ
8月16日	科学分析業務委託完了（プラントオーバー分析）
8月28日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ
9月5日	長野国道、国立長野工業高等専門学校生、東海大学生、國學院大学生見学
10月11日	長野市立川中島中学校職場体験受入れ
10月17日	測量委託業者による空中写真撮影
11月23日	現地説明会実施
11月26日	長野県立歴史館近藤高義氏見学
11月27日	長野市立塩崎小学校見学
11月29日	須坂市教委田中一穂氏ほか2名見学
12月3日	測量委託業者による空中写真撮影
12月12日	高森町教委岩田義雄氏見学
12月17日	科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、花粉・珪藻・プラントオーバー分析）
12月18日	科学分析業務委託打合せ（花粉・珪藻・プラントオーバー分析）
12月26日	坂更BPに係る保護協議、調査地引き渡し（長野国道、県教委、市教委）協議 発掘作業終了
1月7日	整理作業員基礎整理作業開始
2月14日	『掘るしん in し のい 2019』で出土品展示 270名
3月8日	測量業務委託完了
3月14日	科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、花粉・珪藻・プラントオーバー分析）
3月15日	整理作業員基礎整理作業終了 本年度委託契約終了
3月16日	2019年長野県立歴史館巡回展『長野県の考古学一時代を映す“匠”の技』で出土品展示（～6月23日）
3月29日	基礎整理作業終了



石川糸里遺跡 デジタル測量システムを用いた測量

## 長谷鶴前遺跡群

4月1日	長野国道と受委託契約を締結
4月5日	発掘作業開始
4月19日	長野国道と石川糸里遺跡・長谷鶴前遺跡群に係る市道埋設物の取り扱ひ等について協議 畦畔から芯材と推測される木材出土
4月24日	測量業務委託契約
5月10日	測量委託業者による空中写真撮影
5月18日	信州大学理学部特任教授保柳康一氏による科学分析試料採取
5月21日	整理作業員本格整理作業開始
7月2日	信州大学理学部特任教授保柳康一氏と委託研究契約（土壌分析）
10月11日	長野市立川中島中学校職場体験受入れ 科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、花粉分析）
11月23日	現地説明会実施
11月26日	県立歴史館近藤高義氏視察
11月27日	長野市立塩崎小学校見学
11月29日	須坂市教委田中一穂氏ほか2名見学
12月3日	整理作業員基礎整理作業開始
12月10日	発掘作業終了
12月12日	科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、花粉分析）
12月17日	科学分析業務委託契約（プラントオーバー分析）
12月26日	坂更BPに係る保護協議、調査地引き渡し（長野国道、県教委、市教委）協議
2月14日	『掘るしん in し のい 2019』で出土品展示（～2月22日）
2月19日	京都大学名誉教授茂原信生氏ほか2氏による出土骨鑑定指導（～2月21日）
2月28日	信州大学理学部特任教授保柳康一氏による委託研究完了（土壌分析）
3月5日	元委知陶磁美術館副館長仲野泰裕氏による近代窯関係資料の整理指導（～6日）
3月8日	測量業務委託完了
3月14日	科学分析業務委託完了（プラントオーバー分析）
3月15日	整理作業員基礎整理作業、本格整理作業終了 本年度委託契約終了
3月16日	2019年長野県立歴史館巡回展『長野県の考古学一時代を映す“匠”の技』で出土品展示（～6月23日）
3月29日	基礎整理作業、本格整理作業終了



長谷鶴前遺跡群 現地説明会

2019（平成31）年度

石川条里遺跡

- 4月1日 長野国道と受委託契約を締結
- 4月12日 発掘作業開始
- 4月25日 測量業務委託契約
- 5月7日 長野国道と発掘調査開始に伴う協議
- 5月8日 測量委託業者による空中写真撮影
- 6月27日 長野県総合教育センターの研修会受入れ
- 7月1日 信州大学理学部特任教授保柳康一氏と委託研究契約（土壌分析）
- 7月10日 測量委託業者による空中写真撮影
- 7月13日 現地説明会実施
- 7月17日 長野市立篠ノ井東中学校、同川中島中学校職場体験受入れ
- 7月24日 信州大学理学部特任教授保柳康一氏による科学分析試料採取（～25日）
- 8月8日 長野国道の親子見学会受入れ
- 8月19日 金沢学院大学インターンシップ生受入れ
- 8月21日 長野市立篠ノ井西中学校職場体験受入れ
- 9月4日 長野県文化振興事業団事務局長視察
- 10月7日 篠ノ井歴史の会見学受入れ
- 10月24日 長野県小諸高等学校就業体験受入れ
- 11月22日 信州大学理学部特任教授保柳康一氏による科学分析試料採取
- 12月2日 整理作業員基礎整理作業開始
- 12月13日 発掘作業終了  
科学分析業務委託契約（放射性炭素年代測定、プラントオーバー・花粉・珪藻分析）
- 12月24日 長野国道と本年度調査区の引き渡しについて協議
- 2月28日 信州大学理学部特任教授保柳康一氏による委託研究完了（土壌分析）
- 3月6日 測量業務委託完了
- 3月13日 科学分析業務委託完了（放射性炭素年代測定、プラントオーバー・花粉・珪藻分析）
- 3月19日 整理作業員基礎整理作業完了  
本年度委託契約終了
- 3月27日 基礎整理作業終了



石川条里遺跡 科学分析試料採取

長谷鶴前遺跡群

- 4月1日 長野国道と受委託契約を締結  
本格整理作業開始
- 4月3日 整理作業員本格整理作業開始
- 10月18日 長野市有限会社松代 松代陶庵で近代産業関連資料調査
- 12月17日 遺物写真撮影業務委託契約
- 2月4日 愛知陶磁美術館松代分館ほかで近代産業関連資料調査（～5日）
- 3月4日 元愛知陶磁美術館副館長仲野泰裕氏による近世室及び関連遺物の整理指導（～5日）
- 3月13日 遺物写真撮影業務委託完了
- 3月19日 整理作業員本格整理作業終了  
本年度委託契約終了
- 3月31日 本格整理作業終了



長谷鶴前遺跡群 ロク台石の写真撮影

## 2020（令和2）年度

## 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡

- 4月1日 長野国道と受委託契約を締結  
本格整理作業開始
- 4月6日 整理作業員本格整理作業開始
- 6月4日 遺物写真撮影業務委託契約
- 7月3日 遺物写真撮影業務委託完了
- 9月25日 科学分析業務委託契約（樹種固定）
- 10月21日 京都大学名誉教授茂原信生氏ほか2氏による出土骨鑑定指導（～23日）
- 3月10日 京都大学名誉教授茂原信生氏ほか2氏による出土骨鑑定指導（～12日まで）
- 3月11日 科学分析委託業務完了（樹種固定）
- 3月19日 整理作業員本格整理作業終了  
本年度委託契約終了
- 3月31日 本格整理作業終了



石川条里遺跡 木製品の実測

## 2021（令和3）年度

## 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡

- 4月1日 長野国道と受委託契約を締結  
本格整理作業開始
- 4月6日 整理作業員本格整理作業開始
- 4月15日 発掘作業開始（石川条里遺跡）
- 4月20日 測量業務委託契約（石川条里遺跡）
- 4月22日 長野国道、県教委と調査区内支障物件等について協議
- 5月20日 銀形党前立出土（石川条里遺跡）
- 5月26日 測量委託業者による空中写真撮影（石川条里遺跡）  
長野市立更北中学校見学（石川条里遺跡）
- 6月1日 信州大学理学部特任教授保柳康一氏と科学分析業務委託契約（土壌分析）（石川条里遺跡）
- 6月7日 発掘作業終了（石川条里遺跡）  
基礎整理作業開始（石川条里遺跡）
- 6月29日 X線透過撮影（石川条里遺跡）（～7月21日）
- 6月30日 基礎整理作業終了（石川条里遺跡）
- 7月16日 測量業務委託完了（石川条里遺跡）
- 10月7日 遺物実測・トレース業務委託契約（石器）
- 11月18日 長野国道と契約、協定について協議
- 12月7日 京都大学名誉教授茂原信生氏ほか2氏による出土骨鑑定指導（～9日）
- 3月7日 京都大学名誉教授茂原信生氏ほか2氏による出土骨鑑定指導（～9日）
- 3月9日 遺物実測・トレース業務委託完了（石器）
- 3月18日 整理作業員本格整理作業終了
- 3月19日 「掘るしん 2022」で出土品展示（～6月12日）
- 3月31日 信州大学理学部特任教授保柳康一氏による科学分析業務委託完了（土壌分析）（石川条里遺跡）  
本格整理作業終了  
本年度委託契約終了

## 2022（令和4）年度

## 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡

- 4月1日 長野国道と受委託契約を締結  
本格整理作業開始
- 4月6日 整理作業員本格整理作業開始
- 8月29日 京都大学名誉教授茂原信生氏ほか2氏による出土骨鑑定指導（～8月31日）
- 10月7日 遺物写真撮影業務委託契約
- 12月16日 遺物写真撮影業務委託完了
- 1月19日 科学分析業務委託契約（元素マッピング分析）  
科学分析業務委託完了（元素マッピング分析）
- 3月17日 整理作業員本格整理作業終了  
本年度委託契約終了
- 3月31日 本格整理作業終了

## 2023（令和5）年度

## 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡

- 4月1日 長野国道と受委託契約を締結  
本格整理作業開始
- 4月6日 整理作業員本格整理作業開始
- 5月30日 京都大学名誉教授茂原信生氏ほか2氏による出土骨鑑定指導（～6月1日）
- 10月17日 遺物応急の保存処理業務委託契約
- 3月15日 報告書刊行
- 3月25日 遺物応急の保存処理業務委託完了
- 3月29日 本年度委託契約終了





## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

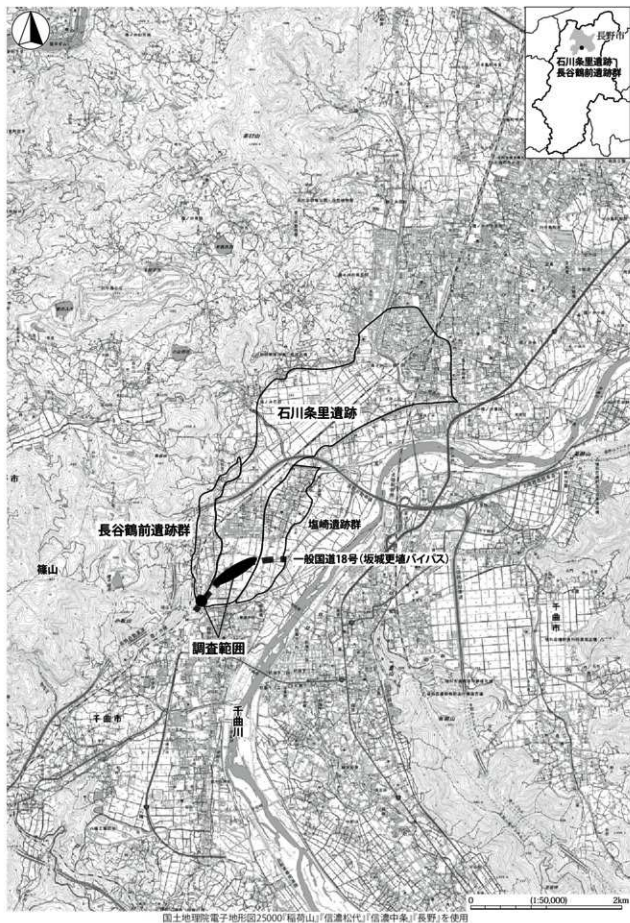
**遺跡の立地：**石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群は長野市南部の千曲川左岸の塩崎地区に所在する。南から流れ下った千曲川は長野盆地に入って塩崎地区北部周辺で北側からの犀川扇状地に押されて大きく北東方向に流れを変える。この千曲川に沿って塩崎遺跡群が立地する自然堤防、石川条里遺跡が立地する後背低地、長谷鶴前遺跡群が立地する篠山麓の屋簷地形や小規模な扇状地が並列する。石川条里遺跡の立地する後背低地は千曲川沿いの自然堤防に沿って南西―北東方向に細長く弧状に延びる。後背低地内は一様に低い地形ではなく、北側の聖川周辺は低く、南側の低地は高く島状の小微高地が点在する。これは後背低地南端が千曲川の蛇行する攻撃面にあたり、そこにちょうど千曲川支流の佐野川が合流して段丘が途切れて低いため、破堤洪水等により形成されたと思われる直線的な洪水性土砂が後背低地南部へ流れ込みやすく、それらによって形成された砂堆（シュートバー）とみられる。

**調査区の地形：**今回、石川条里遺跡南部の後背低地を横断するように調査したが、その現地表面は自然堤防寄りの1区、2区周辺が最も低く、緩やかに東側へ傾斜する。発掘調査では、調査区内は微視的に東端部、中央部、西部3つの地形環境に分けられることが判明した。東端部1区の最下部は自然堤防端部にかかるが、そこから西の7a区周辺までの中央部が後背低地の比較的低い部分にあたり、ここは千曲川の砂層等の比較的粒径の粗い堆積物が堆積する傾向が認められ、地下水位が低く木質遺物や泥炭層が残りにくい状況であった。また、とくに3b・4a区西側では、島状の僅かに高い小微高地が所々にみられ、2区周辺も基本土層VI層の堆積で僅かに高い地形に変わっており、地形変化が著しい場所であったとみられる。西部7b・8区～10区は、遺跡西方の谷から平地に向かって形成される扇状地先端が千曲川の堆積層分布と接触する部分にあたり、弥生時代水田層より下層には山から運ばれた粗い砂質堆積物が認められた。地下水位が高く木質遺物も遺存し、泥炭層も発達する。また、11区～長谷鶴前遺跡群は山地と扇状地に挟まれた窪地で、千曲川堆積層も扇状地の堆積物も少なく弥生時代中期後半の水田層相当層より下層は泥炭層が発達する。

**洪水と干害：**遺跡の所在する塩崎地区は、近世において千曲川洪水と干害に悩まされたことが知られる。洪水は千曲川に隣接することによるが、干害は塩崎地区内に取水源となる中小河川が少ないためである。塩崎地区西側の篠山は長野盆地西逸断層群の南端延長先にあたるためか、山麓には長い谷があまり発達せず小規模な沢しかない。北部には西側山地から流れ下る聖川があるが、上流域が隣接した石川地区にあるため、塩崎地区での取水がままならなかったものといえる。



第2図 調査区略図



第3図 遺跡位置図(1:50,000)

## 第2節 歴史的環境

**同心円的な景観**：石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群の所在する長野市南部塩崎地区は、長野県内でも有数の弥生～古墳時代の遺跡密集地域として知られる。後背低地の水田遺跡である石川条里遺跡を中心に、自然堤防上に塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群、山手の崖灘地形に長谷鶴前遺跡群等の弥生時代～平安時代の広大な集落遺跡が取り巻く。その背後の山地や山麓には前方後円墳の川柳將軍塚古墳、中郷古墳、前方後方墳の姫塚古墳、大型円墳の越將軍塚古墳、渡来系の馬具を出土した飯綱社古墳をはじめ、後期古墳も数多く分布し、自然堤防上の千曲川脇では篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群で古墳時代中期の円墳周溝が確認された。このように塩崎地区では水田遺跡である石川条里遺跡を中心に、広大な集落遺跡群が取り巻き、さらに古墳時代ではその外側の山地や自然堤防端部に墓域が広がる同心円的な景観が形成されている。石川条里遺跡が中心にあることから、この景観は稲作中心の弥生時代以後に形づくられたといえる。なお、先立つ縄文遺跡は西側山地内に点在し、低地では石川条里遺跡（中央自動車道長野線、以下「高速道地点」という。）で縄文前期の遺跡が確認されたのみであるが、千曲川対岸の屋代遺跡群のような川沿いの低地に立地する縄文遺跡が厚い堆積土に覆われている可能性がある。

**弥生時代～古墳時代の様相**：これまでの調査で、千曲川沿岸地帯の弥生時代～古墳時代の遺跡は全期を通じて遺跡が密集・継続しておらず、時期によって粗密がある。縄文晩期には本格的な人間活動が篠ノ井遺跡群で確認され、弥生時代の直前には現地地形の自然堤防が形成されたと捉えられている。なお、この自然堤防上の篠ノ井遺跡群では縄文時代晩期の土器棺墓が確認され、篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群内でも弥生時代前期末頃の土器が点在して出土している。なかでも塩崎遺跡群では中期初頭までの土器棺再葬墓、貯蔵穴と共に逸賀川系の土器が一定量出土した。また、篠ノ井遺跡群では人骨集積遺構、長谷鶴前遺跡群内の鶴萩七尋岩陰遺跡では土器棺再葬墓とみられる条痕文系壺が出土した。弥生時代中期中葉では塩崎遺跡群でかつて伊勢宮式と呼ばれた土器群と共に、少数の堅穴建物跡や数多くの木棺墓群がみついている。つづく栗林1式期頃には塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群等で集落跡が捉えられている。栗林2式期は不明瞭ながら、栗林3式期頃の集落跡は塩崎遺跡群に分布し、石川条里遺跡で確認された水田関連遺構で最も古いものが弥生時代中期後半にあたる。また、既出資料ながら塩崎遺跡群では平形銅剣の先端部も発見されている。続く弥生時代後期前半の集落遺構は塩崎遺跡群のみであるが、弥生時代後期では篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群、長谷鶴前遺跡群等で遺構が広範囲に分布し、篠ノ井遺跡群では環濠集落と隣接して周溝墓群や鉄剣・鉄銅を出土した墓坑等が分布し、新幹線地点では数多くの円形周溝墓が集中する様相が確認される。また、当該期では北陸系の土器が流入していることが複数の遺跡で確認され、石川条里遺跡の高速道地点では弥生時代後期の水田跡が広範囲に確認されている。

古墳時代前期も同様に篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群で集落跡、石川条里遺跡高速道地点では当該期の水田跡が確認されている。また、高速道地点の石川条里遺跡北部の微高地では古墳時代前期後半頃とみられる幅10mの溝跡に圍繞された居館跡、掘下地点でも居館跡とみられる遺構が確認された。ほぼ同時期の川柳將軍塚古墳との関連も注目される。古墳時代中期は塩崎遺跡群で集落跡が点在し、塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群では古墳周溝も確認されるが、集落跡の密度は低く、これに続く古墳時代後期の集落跡や水田遺構は確認されていない。ところが、古墳時代後期末頃から再び集落跡が篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群等で広範囲に認められる。

**古代の様相**：その後奈良時代中頃に一旦不明瞭となるが、これは長野盆地一帯で一般的な傾向のようである。一方で長谷鶴前遺跡群等のような短期かつ小規模な集落跡の存在も確認されている。隣接する石川条里遺跡では当該期の水田遺構は不明瞭だが、遺物は出土しているので水田利用はあったとみられる。なお、篠ノ井遺跡群東端付近の現国道近くでは、奈良時代の平行する北西方向に延びる溝跡が確認されているが、当時国府が所在したとされる上田方面から千曲川を渡河した場所にあたる東山道支道の道路側溝の可能性もある。また、隣接した石川地区には石川条里遺跡北辺に接して古代寺院の上石川庵寺跡が存在する。

平安時代は石川条里遺跡に条里型水田がみられ、それを取り巻いて篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群、長谷鶴前遺跡群等で大規模な集落跡がみつかつており、篠ノ井遺跡群では瓦塔、仏像を型取った埴も出土している。石川条里遺跡の条里型水田は888（仁和4）年とされる洪水で埋没し、その洪水直後には溝跡等が確認され水田復旧も試みられているようだが、集落跡は塩崎地区では確認されていない。11世紀頃の土器等は自然堤防を中心に少量確認され、石川条里遺跡内でも新たな用水掘削も捉えられている。なお、平安時代には松本へ国府が移転し、越後国府と信濃国府を繋ぐ東山道支道が千曲川左岸に移ったとされるが、今のところ当該期の確実な遺構は見つかっていない。

**中世～近世の様相**：中世の遺跡では、遺存状態が悪く詳細不明ながら篠ノ井遺跡群等で井戸跡が確認され、現集落と重なった自然堤防上に集落跡が分布する可能性がある。また、平安時代末～鎌倉時代にかけて現代の道や土地境と同方位の溝跡が確認され、自然堤防部分も条里と異なる土地区画整備が施工されて耕地化が進んだとみられる。中世後期では石川条里遺跡の水田内の微高地に1辺50m四方の居館跡、今回の調査では長谷鶴前遺跡群南端で居館跡が確認されている。戦国時代の山城は塩崎城跡、塩崎城見山砦跡、塩崎新城（赤沢城跡）がある。当地城南に隣接する千曲市稲荷山にも上杉景勝が造ったとされる稲荷山城があったとされる。

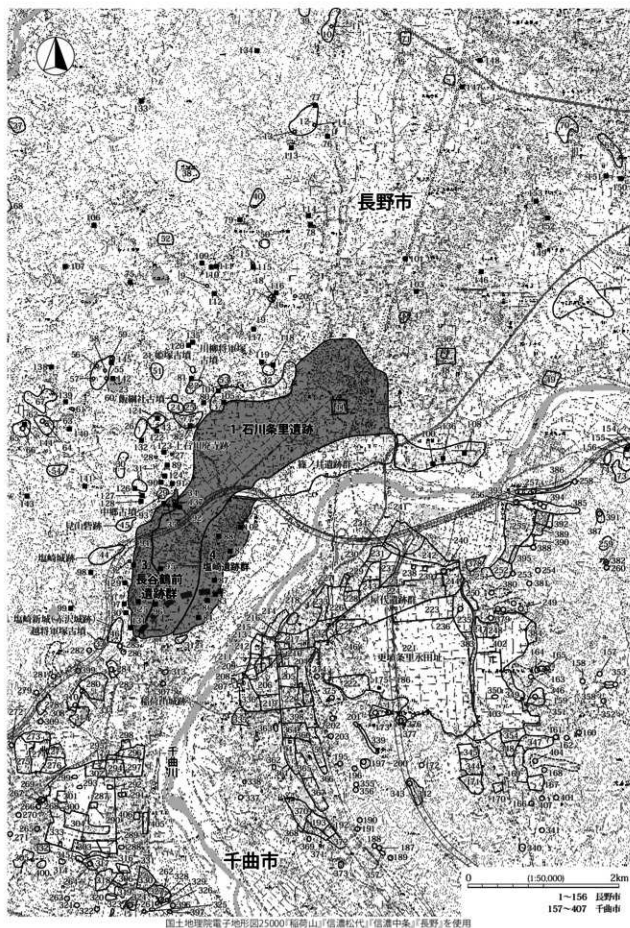
また、遺跡ではないが、中世に遡る寺院として長谷寺、康楽寺がある。長谷寺は背後の山から1151（仁平元）年に銘経筒が出土し、諏訪門忠寄進状にもその名がみえて平安時代末期から鎌倉時代には存在したことが知られる。伝承では長谷寺を建てた白助の屋敷跡と呼ばれる平坦地が篠山山中にあり、もともと観音信仰による山寺であった可能性がある。康楽寺は親鸞と行動を共にした西仏坊が東御市（旧東部町）に開いた寺が16世紀前半に当地に移転してきたとされる。武田信玄が越後に侵攻する際に野伏を出すように依頼した文書がある。また、石山合戦では北信で最も大量の兵糧米を本願寺へ送っていることも知られる。室町時代の紙本着色親鸞上人伝絵を伝え、江戸時代は「絵解の家」とも呼ばれた。これ以外に塩崎地区北側の石川地区の丘陵上に作見寺という寺があったとされ、その山麓に平安時代とされる石造多層塔が残されているが関係は不明である。

**文献資料から見た塩崎地区**：文献資料を交えて当地域の中世以後の様相を若干補っておく。平安時代に施工された条里型地割の水田は更級郡の石川条里遺跡、埴科郡の更埴条里遺跡、高井郡内の川田条里遺跡等で認められているが、いずれも同方位の同じ半折区画方法で、類似時期に信濃国府主導で施工されている可能性がある。発掘調査では9世紀末の洪水埋没以後の11世紀に再開発されると推定されるが、これ以後所領関係の変遷は不明瞭である。「吾妻鏡」には、1186（文治2）年の不納荘園として四ノ宮荘・石川荘が挙げられており、石川条里遺跡内は二つの荘園に分割されていたようである。このうち塩崎にあたる四ノ宮荘には鎌倉時代に地頭として諏訪氏一族（神氏）の四宮氏がいた。四宮氏は北条氏滅亡以後の1335（建武2）年に中先代の乱に関連して船山守護所を襲った四宮川原の戦いに敗れ、以後は同じ諏訪氏

一族ながら室町幕府と結びついた諏訪円忠が地頭となる。その諏訪円忠は1346（貞和2）年、四ノ宮荘北条を天龍寺へ寄進する目録を作成し、そこに水田の面積や現地名と対応する地名がみえる。ただ、石川条里遺跡南部の地名はなく調査区周辺の当該期の様相は不明である。また、この諏訪円忠の書状では一部守護小笠原氏関係の所領があったことが知られ、その関連からか信濃国内で諏訪大社造営の費用負担を割り当てた諏訪御符礼古書に、四ノ宮の頭役武士として1459（長祿3）年、小笠原氏配下とみられる「赤沢対馬代官千田源康信」の名がみえる。これ以後は赤沢氏の名はみえず、千田氏は1469（応仁3）年にも記載されるが、1480（文明12）年、四ノ宮では初代として桑原六部次郎が現れ、家屋を新築したため御符の受け入れを延期したことが記される。この桑原氏は1485（文明17）年には塩崎貞光を名乗っているが、1479（文明11）年まで四ノ宮の頭役で藤原幸光・藤原対馬守幸光・桑原対馬幸光等として記載される同じ「桑原」を冠する人物と同族なのか不明な点が多い。詳細は不明であるが、散在する所領を代官が監理していたが、地域的結合が強まる動きのなかで遠隔地所領が維持できなくなり、各地の土豪や代官が独立や新たな地域の関係を構築し、あるいは所領の争いが増えた変化を反映しているとみられる。これ以後、当地域は武田氏、織田氏、上杉氏の支配下となるが、塩崎氏は上杉氏支配時代に屋代氏と共に徳川氏に通じて反抗したが敗れて出奔し、当地域では清水氏等の土豪の名がみえるようになる。清水氏は配下の武士と共に塩崎衆と呼ばれ、やがて上杉氏の移封に従って転出するが、一族の一部は地元に残ったようである。

なお、当地域で行われた大きな戦闘として、1181（治承5）年、あるいは1182（寿永元）年の木曾義仲と城氏の横田川原の合戦、1400（応永7）年の守護小笠原長秀の善光寺からの帰路を在地位国人等が襲った大塔合戦がある。この時に塩崎城の名がみえ、その直後の幕府直轄領時代に細川氏が入国した際に1403（応永10）年に塩崎新城（赤沢城跡）に国人が立てこもった記録がある。戦国時代では、1564（永祿7）年、武田氏と上杉氏の川中島の合戦第5次戦では武田方が塩崎城に立て籠もっているが、にらみ合いが続いて大きな戦闘にはならなかったようである。また、『川中島戦記次第上杉家之記』では上杉方の中条氏が護衛した荷駄隊を塩崎の農民が襲っていることが記される。当地域は近世に善光寺街道が通過していたように、中信地域から善光寺へむかう道が東信から続く道と接続する交通の要所にあり、そこは各地域の勢力が接触した軍事的な要衝の地でもあったとみられる。

江戸時代には塩崎地区は幕府領となるが、千曲川に接するために千曲川氾濫と、中小河川がないために干害に悩まされた。特に干害は甚大な被害をもたらし、その対策として猪平、川越池等の溜池の構築や千曲川取水の明暦用水、塩崎用水が構築された。ただ、明暦用水も洪水で取水口が破壊されて途絶し、耕作地は荒れる一方ながら、人口は増え続けて次第に困窮し、18世紀中頃には騒動も起こっている。こうしたなかで、次第に商品作物の栽培も増加し、幕末に千曲川堤防と塩崎用水が完成したことで、現在みえるような水田が広がる景観になったのだろう。



第4図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)

第6表 周辺道跡一覧

地図番号	道跡名	所在地	道跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近代	
1	石川桑里道跡	篠ノ井	E-①		○	○	○	○	○	
2	石川方田道跡群	篠ノ井	E-②		○	○	○	○		
3	長谷崎前道跡群	篠ノ井	E-③		○	○	○	○		
4	塩崎道跡群	篠ノ井	E-④		○	○	○	○		
5	篠ノ井道跡群	篠ノ井	E-⑤		○	○	○	○		
6	横田道跡群	篠ノ井	E-⑥		○	○	○	○		
7	上石川道跡	篠ノ井	E-011		○	○				
8	南宮道跡	篠ノ井・川中島	E-032				○			
9	菅原塚古墳	篠ノ井	E-104						○	
10	農村古墳群(3基)	篠ノ井	E-106							○
11	粟村1号墳(徳川前方後円墳)	篠ノ井	E-106-1							○
12	境内古墳群(3基)	篠ノ井	E-107							○
13	境内1号墳(中尾山古墳)	篠ノ井	E-107-1							○
14	境内2号墳(諏訪古墳)	篠ノ井	E-107-2							○
15	上大久保1号墳	篠ノ井	E-110-01							○
16	布旗塚古墳群(3基)	篠ノ井	E-112							○
17	布旗塚1号墳	篠ノ井	E-112-1							○
18	布旗塚2号墳	篠ノ井	E-112-2							○
19	布旗塚3号墳	篠ノ井	E-112-3							○
20	海道北山古墳	篠ノ井	E-113							○
21	惣塚古墳	篠ノ井	E-118							○
22	川柳将軍塚古墳	篠ノ井	E-119							○
23	奥瀬社古墳	篠ノ井	E-120							○
24	大田和古墳群(3基)	篠ノ井	E-121							○
25	宮下古墳群(2基)	篠ノ井	E-122							○
26	諏坂古墳群(6基)	篠ノ井	E-125							○
27	洲内古墳(丸山4号古墳)	篠ノ井	E-127							○
28	池の上古墳(池ノ上古墳)	篠ノ井	E-128							○
29	中郷古墳(中郷神社古墳)	篠ノ井	E-130							○
30	葉山山古墳群(7基)	篠ノ井	E-132							○
31	野原山古墳	篠ノ井	E-133							○
32	穂苅古墳	篠ノ井	E-137							○
33	越待塚古墳	篠ノ井	E-141							○
34	宮之前1号古墳	篠ノ井	E-142							○
35	宮之前2号古墳	篠ノ井	E-143							○
36	169 横田城跡	篠ノ井	史跡-01							○
37	須立城跡	篠ノ井	E-201							○
38	有原城跡(伝野山脚跡)	篠ノ井	E-202							○
39	小松原城跡	篠ノ井	E-203							○
40	篠の城跡(篠ノ城跡)	篠ノ井	E-204							○
41	大塔城跡(大当館跡)	篠ノ井	E-205							○
42	二ツ柳城跡	篠ノ井	E-206							○
43	石川城跡	篠ノ井	E-207							○
44	塩崎城跡	篠ノ井	E-208							○
45	見山宮跡	篠ノ井	E-209							○
46	塩崎新城(赤沢城跡)	篠ノ井	E-210							○
47	布旗城跡	篠ノ井	E-211							○
48	横田城跡(会館跡)	篠ノ井	E-212							○
49	小森館跡	篠ノ井	E-214							○
50	宮の城跡	篠ノ井	E-215							○
51	有原の城山	篠ノ井	E-216							○
52	有原古城跡	篠ノ井	E-217							○
53	諏の入神社城跡	篠ノ井	E-219							○
54	宮の下道跡	信濃町	D-051	○						○
55	藤塚古墳群(5基)	信濃町	D-103							○
56	藤塚1号墳?	信濃町	D-103-1							○
57	藤塚2号墳?	信濃町	D-103-2							○
58	藤塚3号墳?	信濃町	D-103-3							○
59	藤塚4号墳?	信濃町	D-103-4							○
60	藤塚5号墳?	信濃町	D-103-5							○
61	白山塚古墳	信濃町	D-104							○
62	赤田大塚古墳群(2基)	信濃町	D-105							○
63	赤田大塚古墳(不自然)	信濃町	D-105-1							○
64	赤田2号墳	信濃町	D-105-2							○
65	田野1大塚古墳群(4基)	信濃町	D-106							○
66	田野1大塚古墳(前方後方墳)	信濃町	D-106-1							○
67	西の城・東の城跡	篠ノ井	D-209							○
68	新山城跡	篠ノ井	D-222							○
69	田代宿道跡	川中島	H-005							○
70	上九反道跡	朝明町	H-008							○
71	内儀館跡	川中島	H-201							○
72	於下館跡	川中島	H-202							○
73	清野古墳群	松代町	F-101							○
74	伝妻女山脚跡	松代町	F-212							○
75	上手沖道跡	信濃町	E-002	○						
76	湯沢穴道跡	篠ノ井	E-003	○	○					
77	光林寺裏道跡	篠ノ井	E-004	○	○					
78	寺内道跡	篠ノ井	E-005	○	○					
79	新田道跡	篠ノ井	E-006	○	○					
80	宮下道跡	篠ノ井	E-007	○	○					
81	諏の入上道跡	篠ノ井	E-008	○	○					
82	上石川殿寺跡	篠ノ井	E-012	○	○					
83	伊勢宮道跡	篠ノ井	E-013	○	○					
84	松部道跡	篠ノ井	E-014	○	○					
85	町屋敷道跡	篠ノ井	E-015	○	○					
86	中条道跡	篠ノ井	E-016	○	○					
87	一本木道跡	篠ノ井	E-017	○	○					
88	散畑屋敷道跡	篠ノ井	E-018	○	○					
89	河越池道跡	篠ノ井	E-019	○	○					
90	上見林道跡	篠ノ井	E-020	○	○					
91	下見林道跡	篠ノ井	E-021	○	○					
92	クネ下道跡	篠ノ井	E-022	○	○					
93	中郷道跡	篠ノ井	E-023	○	○					
94	観音下道跡	篠ノ井	E-025	○	○					
95	戸部之間道跡	篠ノ井	E-026	○	○					
96	立町道跡	篠ノ井	E-027	○	○					
97	会下道跡	篠ノ井	E-028	○	○					
98	下辺道跡	篠ノ井	E-029	○	○					
99	箕平道跡	篠ノ井	E-030	○	○					
100	富士宮道跡	篠ノ井	E-031	○	○					
101	築地道跡	川中島	E-033	○	○					
102	殿屋敷道跡	篠ノ井	E-035	○	○					
103	篠ノ井南条道跡	川中島	E-036	○	○					
104	山田道跡	篠ノ井	E-037	○	○					
105	東郷道跡	篠ノ井	E-038	○	○					
106	大久保道跡	篠ノ井	E-039	○	○					
107	十二中山道跡	篠ノ井	E-041	○	○					
108	東横田道跡	篠ノ井	E-043	○	○					
109	北石津古墳	篠ノ井	E-101	○	○					
110	六部塚古墳	篠ノ井	E-102	○	○					

地図番号 1～156 長野市  
 地図番号 157～407 千曲市

## 第2章 遺跡の位置と環境

地図番号 1～156 長野市  
地図番号 157～407 千曲市

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	近代
111	黒龍石古墳	篠ノ井	E-103			○				
112	南石古墳	篠ノ井	E-105			○				
113	岡田屋古墳	篠ノ井	E-108			○				
114	寺内古墳	篠ノ井	E-109			○				
115	上大久保古墳群	篠ノ井	E-110			○				
116	大平古墳群	篠ノ井	E-111			○				
117	藤沢古墳群	篠ノ井	E-114			○				
118	山崎新田古墳群	篠ノ井	E-115			○				
119	藤塚古墳	篠ノ井	E-116			○				
120	湖の入古墳群	篠ノ井	E-117			○				
121	石川城古墳	篠ノ井	E-123			○				
122	虚空蔵平古墳群	篠ノ井	E-124			○				
123	丸山古墳群	篠ノ井	E-126			○				
124	八ツ塚古墳群	篠ノ井	E-129			○				
125	八幡宮古墳	篠ノ井	E-131			○				
126	大泊町古墳	篠ノ井	E-134			○				
127	小石向古墳	篠ノ井	E-135			○				
128	秋葉山古墳	篠ノ井	E-136			○				
129	平古墳	篠ノ井	E-138			○				
130	城山古墳	篠ノ井	E-139			○				
131	東谷古墳	篠ノ井	E-140			○				
132	王塚遺跡	篠ノ井	E-144			○				
133	八石古墳	篠ノ井	E-145			○				
134	四十二古墳	篠ノ井	E-148			○				
135	茶臼跡跡	篠ノ井	E-218					○		
136	横田跡跡	篠ノ井	E-220					○		
137	西ノ宮氏館跡	篠ノ井	E-221					○		
138	寺尾敷遺跡	篠ノ井	D-047			○				
139	卒塔原遺跡	篠ノ井	D-048	○						
140	山田屋敷遺跡	篠ノ井	D-049	○		○				
141	薬山遺跡	信更町	D-050			○				
142	小山田池遺跡	篠ノ井	D-052	○	○					
143	戸川遺跡	信更町	D-059			○				
144	大塚遺跡	信更町	D-079	○						
145	小山田藤塚古墳	篠ノ井	D-108			○				
146	五輪塚	川中島	H-001			○				
147	於下遺跡	川中島	H-006			○				
148	長峰遺跡	川中島	H-007			○				
149	合戦場遺跡	川中島	H-009			○				
150	広田城跡(昌龍寺)	船里町	H-204			○				
151	藤牧城跡(東昌寺)	船里町	H-205			○				
152	富部氏館跡	川中島	H-206					○		
153	藏治原敷跡	川中島	H-207					○		
154	四ツ屋原寺跡	松代町	F-001			○				
155	道島庵寺跡	松代町	F-002			○				
156	四ツ屋遺跡	松代町	F-003			○	○			
157	大綱A古墳	倉科・生置	8-1			○				
158	大綱B古墳	倉科・生置	8-2			○				
159	石帆古墳・石帆A古墳	倉科	9-1・2			○				
160	田端A古墳	倉科	10-1			○				
161	田端B古墳	倉科	10-2			○				
162	田端C古墳	倉科	10-3			○				
163	倉科村塚古墳	倉科・生置	11-1			○				
164	倉科2号古墳	倉科・生置	11-1			○				
165	倉科3号古墳	倉科・生置	11-2			○				

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代						
				縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	近代
166	白塚古墳	森	12			○				
167	森北山遺跡	森	13	○	○	○				
168	黒山古墳	森	14			○				
169	中ノ宮遺跡	森	15			○				
170	旧森小学校遺跡	森	16			○	○			
171	阿森遺跡	森	17			○	○			
172	阿地古墳	森	18			○				
173	森狩塚古墳	森	19			○				
174	森2号古墳	森	20			○				
175	森3号古墳	森	20-1			○				
176	森4号古墳	森	20-2			○				
177	森5号古墳	森	20-3			○				
178	森6号古墳	森	20-4			○				
179	森7号古墳	森	20-5			○				
180	森8号古墳	森	20-6			○				
181	森9号古墳	森	20-7			○				
182	森10号古墳	森	20-8			○				
183	森11号古墳	森	20-9			○				
184	森12号古墳	森	20-10			○				
185	森13号古墳	森	20-11			○				
186	森14号古墳	森	20-12			○				
187	大岩古墳	寂師	21-1			○				
188	寂師A古墳	寂師	21-2			○				
189	寂師B古墳	寂師	21-3			○				
190	寂師C古墳	寂師	21-4			○				
191	寂師D古墳	寂師	21-5			○				
192	法正寺遺跡	寂師	22			○	○			
193	西王子遺跡	寂師	23			○	○			
194	土井合遺跡	桜堂	24			○				
195	打沢古墳	打沢	25-1			○				
196	御塚古墳	打沢	25-2			○				
197	打沢A古墳	打沢	25-3			○				
198	打沢B古墳	打沢	25-4			○				
199	打沢C古墳	打沢	25-5			○				
200	打沢D古墳	打沢	25-6			○				
201	有明山將軍塚古墳	小島	26			○				
202	東山神社古墳	小島	27-1			○				
203	お坊塚古墳	小島	27-2			○				
204	粟在遺跡群	粟在	28			○	○	○		
205	五輪堂遺跡	粟在	28-1			○	○	○		
206	南沖遺跡	粟在	28-2			○	○	○		
207	宮西遺跡	粟在	28-3			○	○	○		
208	粟在神社遺跡	粟在	28-4			○	○	○		
209	南村遺跡	粟在	28-5			○	○	○		
210	戸輪遺跡	粟在	28-6			○	○	○		
211	後待遺跡	粟在	28-7			○	○	○		
212	巾下遺跡	粟在	28-8			○	○	○		
213	瀬訪宮遺跡	粟在	28-9			○	○	○		
214	尾原尾遺跡	粟在	28-10			○	○	○		
215	北村遺跡	粟在	28-11			○	○	○		
216	北村浦畑遺跡	粟在	28-12			○	○	○		
217	宮裏遺跡	厩代	28-13			○	○	○		
218	中田島遺跡	厩代	28-14			○	○	○		
219	東沖遺跡	机藤下	28-15			○	○	○		
220	尾原島遺跡	小島	28-16			○	○	○		



地図番号 1～156 長野市  
地区番号 157～407 千曲市

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代					
				縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近代
221	史蹟美里小田址	南宮	29		○	○	○	○	
222	原代清水遺跡	原代	29-1	○	○	○	○	○	
223	町田遺跡	南宮	30		○	○	○	○	
224	原代遺跡群	原代	31	○	○	○	○	○	
225	大塚遺跡	原代	31-1			○	○	○	
226	地之日遺跡	原代	31-2			○	○	○	
227	一丁田尻遺跡	原代	31-3			○	○	○	
228	馬口遺跡	原代	31-4			○	○	○	
229	荒井遺跡	原代	31-5		○	○	○	○	
230	松ヶ崎遺跡	原代	31-6		○	○	○	○	
231	城ノ内遺跡	原代	31-7	○	○	○	○	○	
232	古道遺跡	原代	31-8			○	○	○	
233	一丁田遺跡	原代	31-9			○	○	○	
234	龜王遺跡	原代	31-10		○	○	○	○	
235	生仁遺跡	南宮	31-11	○	○	○	○	○	
236	生仁館跡	南宮	31-12			○	○	○	
237	大境遺跡	原代	31-13	○	○	○	○	○	
238	下条遺跡	南宮	31-14	○	○	○	○	○	
239	灰塚遺跡	南宮	31-15	○	○	○	○	○	
240	原代寺跡	南宮	31-16			○	○	○	
241	窪河原遺跡	南宮	31-17	○	○	○	○	○	
242	北野遺跡	南宮	31-18	○	○	○	○	○	
243	北中原遺跡	原代	31-19			○	○	○	
244	大宮遺跡	南宮	31-20	○	○	○	○	○	
245	町浦遺跡	南宮	31-21	○	○	○	○	○	
246	福津遺跡	原代	31-22			○	○	○	
247	島遺跡	生簀	32-1	○	○	○	○	○	
248	道前遺跡	生簀	32-2	○	○	○	○	○	
249	生簀北山古墳群	生簀	33			○	○	○	
250	渡崎遺跡	南宮	34	○	○	○	○	○	
251	土ノ原坂遺跡	土口	35	○	○	○	○	○	
252	日ノ尾遺跡	土口	36	○	○	○	○	○	
253	日ノ尾古墳	土口	37			○	○	○	
254	老ノ塚古墳	土口	38			○	○	○	
255	土口遺跡	土口	39	○	○	○	○	○	
256	古大穴神社古墳	土口	40			○	○	○	
257	土口將軍塚古墳	土口	41			○	○	○	
258	五層塚古墳	土口	42			○	○	○	
259	堂平A～H古墳	土口	43-1～8			○	○	○	
260	坂山古墳	生簀	44			○	○	○	
261	押山古墳	八幡	54			○	○	○	
262	吉野塚古墳	八幡	55			○	○	○	
263	上人塚古墳	八幡	56			○	○	○	
264	八幡丸山古墳	八幡	57			○	○	○	
265	鵜塚古墳	八幡	58			○	○	○	
266	矢先山下古墳	八幡	59			○	○	○	
267	矢先山古墳	八幡	60			○	○	○	
268	矢先山経塚	八幡	61			○	○	○	
269	矢先山遺跡	八幡	61-1	○	○	○	○	○	
270	山ノ神古墳	八幡	62			○	○	○	
271	二がの塚古墳群	八幡	63			○	○	○	
272	塚ノ山古墳	桑原	69			○	○	○	
273	沼町遺跡	桑原	71-1			○	○	○	
274	後安遺跡	桑原	71-2			○	○	○	
275	宮沖遺跡	桑原	71-3			○	○	○	

地図番号	遺跡名	所在地	遺跡番号	時代					
				縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近代
276	湯屋遺跡	桑原	71-4			○	○	○	
277	駒清水遺跡	桑原	71-5			○	○	○	
278	小坂西遺跡	桑原	72	○	○	○	○	○	
279	遠見塚古墳	桑原	73			○	○	○	
280	元町遺跡	桑原	74			○	○	○	
281	小坂城跡	桑原	75			○	○	○	
282	塚六古墳	船岡山	76			○	○	○	
283	一本松古墳	船岡山	77			○	○	○	
284	岡ノ崎遺跡	船岡山	78			○	○	○	
285	東谷古墳	船岡山	79			○	○	○	
286	岡ノ崎古墳群	船岡山	80			○	○	○	
287	八幡遺跡群	八幡	85			○	○	○	
288	大伝寺遺跡	八幡	85-1			○	○	○	
289	成沢遺跡	八幡	85-2			○	○	○	
290	中道遺跡	八幡	85-3			○	○	○	
291	北城遺跡	八幡	85-4			○	○	○	
292	御湯免遺跡	八幡	85-5			○	○	○	
293	船村遺跡	八幡	85-6			○	○	○	
294	青木遺跡	八幡	85-7			○	○	○	
295	外くむ遺跡	八幡	85-8			○	○	○	
296	六反田遺跡	八幡	85-9			○	○	○	
297	横まくり遺跡	八幡	85-10			○	○	○	
298	志川遺跡	八幡	85-11			○	○	○	
299	真光寺遺跡?	八幡	85-12	○	○	○	○	○	
300	北なめり石遺跡	八幡	85-13			○	○	○	
301	日塚遺跡	八幡	85-14			○	○	○	
302	北船付遺跡	八幡	85-15			○	○	○	
303	社宮河遺跡	八幡	85-16			○	○	○	
304	大道遺跡	八幡	85-17			○	○	○	
305	赤坂遺跡	八幡	86	○	○	○	○	○	
306	東中曾根遺跡	八幡	89			○	○	○	
307	船岡山城跡	船岡山	91			○	○	○	
308	楯見塚古墳	桑原	92			○	○	○	
309	小坂塚古墳	桑原	93			○	○	○	
310	小坂東遺跡	桑原	94			○	○	○	
311	沼田地遺跡	船岡山	95			○	○	○	
312	野高場遺跡	船岡山	96			○	○	○	
313	町屋敷遺跡	船岡山	97			○	○	○	
314	柳下遺跡	八幡	102			○	○	○	
315	冨遺跡	八幡	103			○	○	○	
316	宮川遺跡	八幡	104			○	○	○	
317	峯崎遺跡	八幡	105			○	○	○	
318	西中曾根遺跡	八幡	106			○	○	○	
319	舞台遺跡	八幡	107			○	○	○	
320	城跡遺跡	八幡	108			○	○	○	
321	杉ノ木古墳	八幡	109			○	○	○	
322	城跡塚六古墳	八幡	110			○	○	○	
323	坪山A遺跡	八幡	111			○	○	○	
324	坪山B遺跡	八幡	112			○	○	○	
325	丸山遺跡	八幡	114			○	○	○	
326	下吉野B遺跡	八幡	116			○	○	○	
327	下吉野C遺跡	八幡	117			○	○	○	
328	下吉野C-1遺跡	八幡	117-1			○	○	○	
329	下吉野C-2遺跡	八幡	117-2			○	○	○	
330	東條遺跡	八幡	118			○	○	○	

第2章 遺跡の位置と環境

地図番号 1～156 長野市  
地図番号 157～407 千曲市

地図 番号	遺 跡 名	所在地	遺跡 番号	時 代					
				縄 文	弥 生	古 墳	奈 ・ 平	中 世	近 代
331	外西川原遺跡	八幡	119		○	○	○		
332	石原A遺跡	八幡	120	○			○		
333	石原B遺跡	八幡	121				○		
334	元町焼窯址	桑原	131						○
335	堂河原遺跡	杭瀬下	140				○	○	
336	田中沖遺跡	杭瀬下	141		○	○			
337	東光塚遺跡	新田	142				○		
338	西上川原遺跡	新田	143				○		
339	有明山原塚群	打沢	144					○	
340	新田遺跡	森	145					○	
341	南上平古墳	森	146				○		
342	清水製鉄址	森	147	○	○	○	○		
343	清水製鉄1号古墳	森	147-1				○		
344	道土池遺跡	道土池	148		○	○	○		
345	屋代J遺跡	森	149				○		
346	駕尾城跡	倉科	150					○	
347	南東水遺跡	倉科	152		○	○	○		
348	稲玉遺跡	倉科	153		○	○	○		
349	倉科古屋遺跡	倉科	154		○	○	○		
350	鳥居町遺跡	倉科	155				○	○	
351	倉科北山遺跡	倉科	156				○	○	
352	原藤塚	倉科	157				○		
353	十二様原城跡	倉科	158					○	
354	南正徳遺跡	倉科	160				○		
355	虚空蔵山A古墳	板堂	164-1				○		
356	虚空蔵山B古墳	板堂	164-2				○		
357	大岩遺跡	森野	165	○					
358	大峯遺跡	倉科	166				○	○	
359	小島窪田遺跡	小島	167				○		
360	武台遺跡	小島	168				○		
361	水引遺跡	板堂	169				○		
362	欠口遺跡	板堂	170				○		
363	板堂西沖遺跡	板堂	171				○		
364	板田遺跡	板堂	172				○	○	
365	大从遺跡	打沢	173		○	○			
366	大壺山遺跡	打沢	174				○		
367	中島遺跡	跡物師屋	175				○	○	
368	花岡遺跡	跡物師屋	176		○				
369	跡物師屋清水遺跡	跡物師屋	177				○		
370	跡物師屋遺跡	跡物師屋	178		○	○			
371	鳥山遺跡	波野	179				○	○	
372	天水下遺跡	波野	180				○	○	
373	高河原遺跡	波野	181				○		
374	一馬山御岳神社古墳	屋代	182				○		
375	屋代城跡	屋代	183				○		
376	大穴遺跡	森	184	○	○	○	○		
377	大穴古墳(1号～6号)	森	184-1～6				○		
378	横田島遺跡	南宮	185				○	○	
379	鳥見山古墳	生簀	186				○		
380	朝日城跡	土口・生簀	187					○	
381	糠地山古墳	生簀	188				○		
382	天城城跡	土口・生簀	189					○	
383	本賢寺遺跡	生簀	190		○	○	○		
384	生簀石原遺跡	生簀	191		○	○	○		
385	土口北山A～G古墳	土口	193-1～7				○		

地図 番号	遺 跡 名	所在地	遺跡 番号	時 代					
				縄 文	弥 生	古 墳	奈 ・ 平	中 世	近 代
386	土口北山原塚群	土口	194				○		
387	堂平大塚古墳	土口	195				○		
388	万年堂古墳	土口	196				○		
389	土口東遺跡	土口	197				○	○	
390	万年堂遺跡	土口	198				○	○	
391	堂平遺跡	土口	199				○		
392	梵遺跡	土口	200				○	○	
393	土口北山遺跡	土口	201					○	
394	土口北山製鉄址	土口	202					○	○
395	八刃遺跡	土口	203					○	
396	西久保瓦窯址	八幡	204						○
397	西久保遺跡	八幡	205					○	
398	小島遺跡	板堂	206				○	○	
399	寺山遺跡	桑原	208				○		
400	白石遺跡	八幡	209				○	○	
401	大峰塚	森	210				○	○	
402	生簀水田址	生簀	211-1					○	○
403	倉科水田址	倉科	211-2					○	○
401	黒山城跡	森	212					○	
405	武水領神社遺跡	八幡	213					○	○
406	松田御跡	八幡	214					○	○
407	南殿入古墳址	森	215					○	

遺跡番号は所在する長野市・千曲市の遺跡地図の番号を示す

## 第3章 石川条里遺跡

### 第1節 遺跡の概要

石川条里遺跡は長野市南部の篠ノ井塩崎・石川・二ツ柳地区に及ぶ千曲川左岸の後背低地に立地する広大な水田遺跡である。ここにはかつて地表面に条里遺構を思わせる畦区画が認められ、古代条里の名残として「篠ノ井条里」（森嶋ほか1978）、あるいは良好に残る石川地区の名を冠して「石川条里」ともよばれていた。条里遺構の発掘調査を1961年に先立って行った更埴条里遺跡では、地表面下に埋没した古代水田跡が確認され、地表の畦区画は古代条里そのものではないことが判明しており、そのためか1982年から行った市教委による発掘調査の報告書では「石川条里的遺構」と呼称されている。この発掘調査では平安時代洪水砂層に埋もれた水田跡が確認され、畦区画は方位を合わせた長地区画と推定された。また、条里水田下層で古墳時代の水田跡が確認されたこともあったためか、1989年の市教委4次調査報告書では水田遺跡「石川条里遺跡」の名称に変更されている。

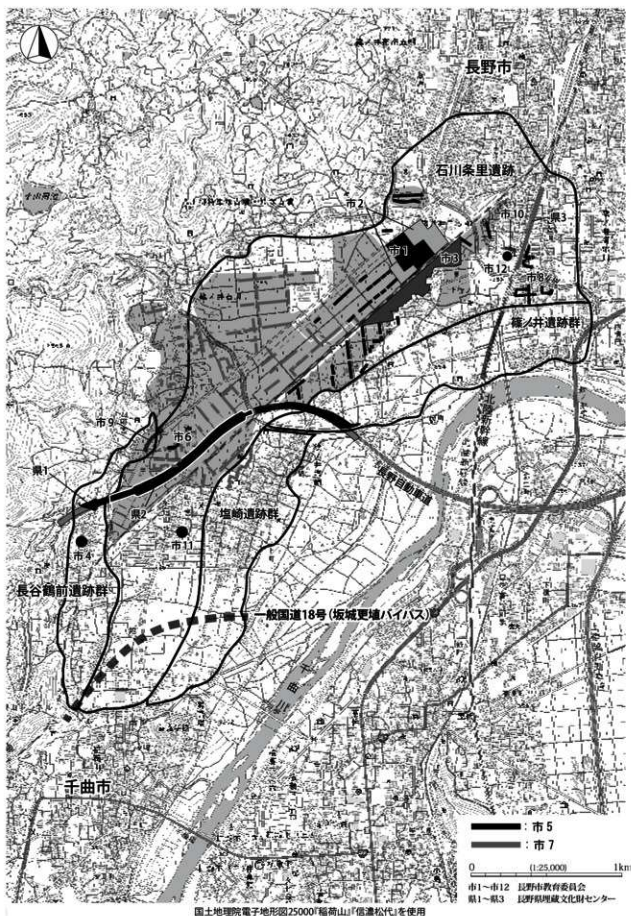
石川条里遺跡の範囲は現在、地表面に条里地割を残す石川・塩崎地区北部のみならず、後背低地を含む広域にわたると捉えられている。古代水田遺構の範囲は、東側は自然堤防まで、長野新幹線整備関連の調査によってしなの鉄道東側にまで広がる可能性が明らかにされ、西側は1994年報告の市教委8次調査、埋文センターの中央自動車道長野線整備の調査で山手の長谷鶴前遺跡群の集落域との境が確認された。南側範囲については調査歴がないが、直線的に画される長野市・千曲市境までとされている。

また、遺跡の性格は後背低地に立地する弥生時代～中近世の水田遺跡とされているが、高速道地点の発掘調査（1988～1991年）では、石川条里遺跡の中央西側付近では鳥状微高地が点在することが判明し、その一つでは古墳時代前期の祭祀遺跡か居館跡・特殊な居住遺構、さらに下層では縄文時代前期の集落跡がみつかった。この鳥状微高地は高速道地点より南側に点在するとみられ、稲荷山駅南方地点での市教委11次調査では平安時代の畑跡と古墳時代の集落跡がみつかった。このように基本的に水田遺跡ではあるが、小規模な鳥状微高地では、異なる土地利用が行われる複雑な様相もある。

これまでの市教委、埋文センターの調査は、第5図に示したようにいずれも石川条里遺跡の中央付近から北部の調査が中心であり、今回の発掘調査対象となった石川条里遺跡の南部では、近隣の調査例がない中での本格的な発掘調査となった。本調査で検出した時期別の遺構数は、以下の第7表のとおりである。

第7表 石川条里遺跡の時期別遺構検出数

時代	掘立柱建物跡 (ST)	欄列 (SA)	水田跡		土坑 (SK)	墓跡 (SM)	溝跡 (SD)	天地返し跡 (SL)	遺物集存 (SQ, SX)
			水田	畦畔 (SC)					
弥生時代			2	23			8		1
古墳時代				26	15		3		1
古代			1	53	8		29		
中近世	6	5		1	454	5	146	4	
合計	6棟	5条	3面	103条	477基	5基	186条	4面	2基



第5図 遺跡範囲・調査範囲図 (1 : 25,000)

第8表 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群の発掘調査履歴

番号：第5図に対応

番号	遺跡名	地点名	調査年	文献
市1	石川条里遺跡		1982年	長野市教育委員会1983『浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』長野市の埋蔵文化財第13集
市2	石川条里遺跡		1983年	長野市教育委員会1984『石川条里的遺構・上胸沢遺跡』長野市の埋蔵文化財第14集
市3	石川条里遺跡		1984年	長野市教育委員会1985『石川条里的遺構(3) (付・上胸沢遺跡)』長野市の埋蔵文化財第16集
市4	長谷鶴前遺跡群	中部電力送電用鉄塔	1988年	長野市教育委員会1989『鶴前遺跡・塩崎城跡』長野市の埋蔵文化財第33集
市5	石川条里遺跡		1988年	長野市教育委員会1989『石川条里遺跡(4)』長野市の埋蔵文化財第34集
市6	石川条里遺跡	石川条里遺跡消防塩崎分署	1990年	長野市教育委員会1991『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』長野市の埋蔵文化財第39集
市7	石川条里遺跡	篠ノ井西部地区景観劇場	1987～91年	長野市教育委員会1992『石川条里遺跡(6)』長野市の埋蔵文化財第45集
市8	石川条里遺跡	県営住宅みこと川団地	1987～91年	長野市教育委員会1993『石川条里遺跡(7)』長野市北野土地地区画整理事業』長野市の埋蔵文化財第57集
市9	石川条里遺跡	宮之前	1993年	長野市教育委員会1994『石川条里遺跡(8)』長野市の埋蔵文化財第66集
市10	石川条里遺跡	市道篠ノ井南64号線	1994年	長野市教育委員会1995『塩崎遺跡群(8)・石川条里遺跡(9)』長野市の埋蔵文化財第72集
市11	石川条里遺跡	灰塚団地	2002年	長野市教育委員会2003『浅川扇状地遺跡群浅川端遺跡(2)・安茂里遺跡群差出遺跡・三合塚西古墳・石川条里遺跡(10)』長野市の埋蔵文化財第102集
市12	石川条里遺跡	特別養護老人ホーム桜荘	2005年	長野市教育委員会2005『石川条里遺跡(11)・本村東沖遺跡(3)・上長畑遺跡』長野市の埋蔵文化財第111集
県1	長谷鶴前遺跡群	中央自動車道長野線	1988～89年	長野県埋蔵文化財センター1994『鶴前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書17
県2	石川条里遺跡	中央自動車道長野線	1988～91年	長野県埋蔵文化財センター1997『石川条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26
県3	石川条里遺跡	北陸新幹線	1993～95年	長野県埋蔵文化財センター1998『石川条里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書33

## 第2節 調査の概要

### 1 調査の方法

#### (1) 発掘調査の方法

##### ア、調査区とグリッドの設定

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センターが統一的に調査を行うために作成した「発掘調査の方針と手順」に則して実施した。

##### 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、石川条里遺跡 (ISHIKAWA JORI)「BIKB」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット3文字または4文字で表したもので、1文字目の「B」は長野県内を10分割した長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡の地区を示し、2文字目と3文字目は遺跡名のローマ字表記の2文字を選択したものである。石川条里遺跡は、長野県埋蔵文化財センターで2度調査が行われており、1998～1991年の調査(中央自動車道長野線)では「BIS」、1993～1995年の調査(北陸新幹線)では「MIS」といずれも3文字の表記であったため、4文字目を加えて、過去の調査と区別した。遺跡記号は各種記録類や遺物の注記等に用いている。

##### 調査区・グリッドの設定と略称 [第5図]

国土地理院の平面直角座標系の原点(長野県第Ⅷ区、 $X=0.0000$   $Y=0.0000$ )を基準に、200の倍数値を選んで測量基準線を設け、本遺跡に隣接する長谷鶴前遺跡群・塩崎遺跡群を含む調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定した。なお、座標値は日本測地系である。

「大々地区」は、200×200mの区画で16地区を設定し、北西から南東へローマ数字で表記した。

「大地区」は、大々地区を40×40mの25区画に分割し、北西から南東へA～Yまでのアルファベットで表記した。

「中地区」は、大地区を8×8mの25区画に分割し、北西から南東へ01～25のアラビア数字で表記し、調査では中地区を遺構測量等の基準単位とした。

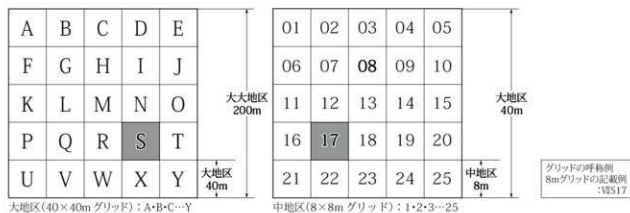
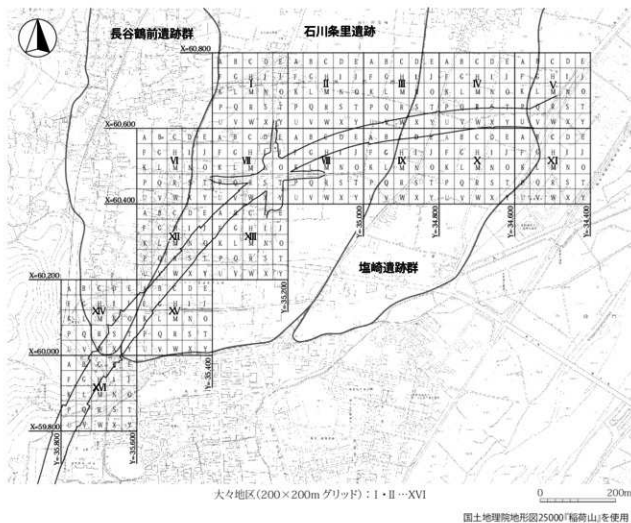
また、グリッド設定は、遺構検出を開始する段階で業務委託により行った。

##### 調査範囲と調査区 [第6図]

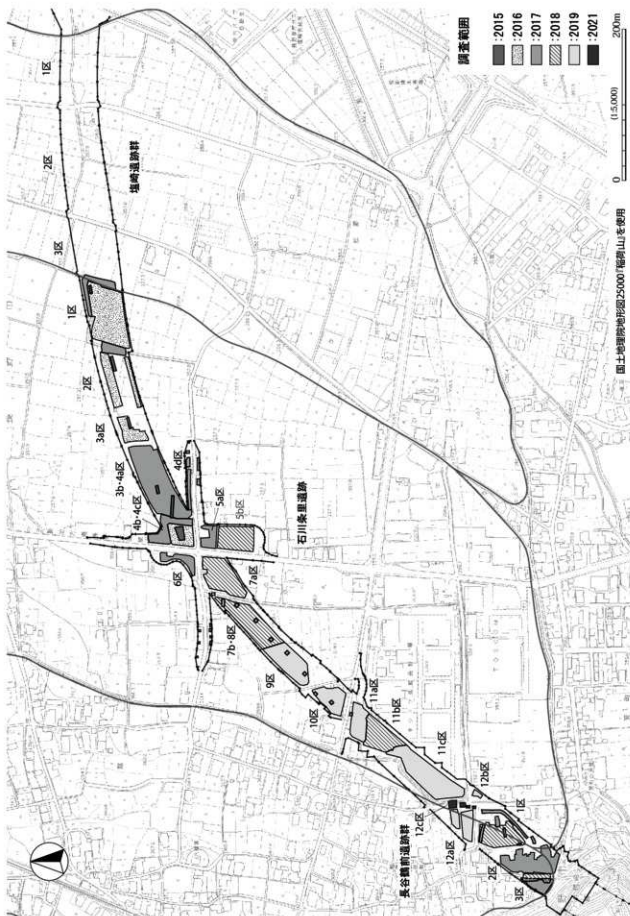
調査範囲は広範囲に及ぶため、市道・県道を境に、東から西へ1区から12区までの12地区を設定し、地区内を細分化する場合は、小文字アルファベットを付した。農道や用水の切り回し等、地区内の一部を調査する場合には、地区名末尾に方角を付し、トレンチ調査の場合には地区名に枝番を付した。また、12地区をまたいだ調査の場合は、「3b・4a区」「7b・8区」のように地区名を併記した。

##### イ、土の掘削と遺構の検出 [第6図]

はじめに重機によるトレンチ掘削を行い、土層堆積状況や遺構検出面の確認を行った。次に重機で表土を掘削し、前述のようにグリッドを設定して、人力で遺構検出を行った。本遺跡では、遺構調査面を2～4面確認したので、上位の調査面の調査が終了した後、下位の調査面までの間層を重機により掘削する、という手順で調査を行った。狭小地区では安全上の理由と、また土層堆積状況や遺存状況等から判断して、トレンチ調査にとどめた場合がある。遺構検出の際、出土した遺物は包含された層位名、またはグリッド



第6図 調査範囲・グリッド設定図、グリッドの呼称(1:10,000)



第7図 石川糸里遺跡 年度別調査範囲図（1：5,000）



名、あるいは帰属遺構名を付して取り上げた。

#### 基本土層の遺構検出面と各地区での調査面との対応

調査範囲が広範囲で土層堆積状況に相違があること、また調査が複数年度に渡ることから、調査時に各地区の調査面を統一することは困難であったため、整理作業時にその対応関係を検討し、基本土層の遺構検出面を設定した。この基本土層の遺構検出面は、序数に「検出面」を付して表記する。基本土層の遺構検出面は、第1検出面（平安時代の水田跡）、第2検出面（古代～中世の遺構）、第3検出面（古墳時代の遺構）、第4検出面（弥生時代の遺構）の4面である。

一方、各地区での調査時の遺構検出面は、序数に「調査面」を付して表記する。基本土層の遺構検出面と、各地区での調査面との対応は以下の第9表ようになる。なお、長谷鶴前遺跡群の第5調査面にあたる平安時代の水田跡検出面は、本道跡で検出した平安時代の水田跡の広がり的一部と捉え、本章3節で報告することとしたため、第9表に加えてある。

各年度の概要は以下のとおりである。

#### 2015（平成27）年度

次年度調査予定の1区～4区の範囲で、6か所でトレンチ掘削による確認調査を行った。

#### 2016（平成28）年度

1区～4区の範囲の調査を実施した。トレンチ調査を行った1区では、中世遺構検出面が確認できたため、そのまま全面調査へ移行した。調査面の設定は、第1調査面を中世遺構の検出面、洪水砂層下を第2調査面、その下層を第3調査面とした。秋に2区で地層確認用トレンチを掘削した時点で、出土土器から、洪水砂層の時期は古墳時代であることが判明し、1区～4区では平安時代の洪水砂層（以下、「平安洪水砂層」という。）の堆積がみられないことを確認した。また、2区の地層確認用トレンチでは、弥生時代の遺構検出面を確認し、これを第4調査面とした。3b・4a区では、時間的な制約から第1調査面のみの調査にとどめ、2面以下の調査については次年度へ持ち越しとした。なお、自然堤防端部に位置する1区で弥生時代の遺構検出面の有無を確認するため、第4調査面・第5調査面を設定して調査を行ったが、遺構の確認はできなかった。

第9表 石川条里遺跡の基本土層遺構検出面と各地区調査面との対応

1 調：第1調査面を示す。

基本土層	地 区													
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11	12a, 12b	12c
第1検出面 (Ⅳ層上面) 平安時代の水田跡											1 調	1 調	1 調	2 調
第2検出面 (Ⅴ層上面) 古代～中近世の遺構	1 調 2 調	1 調 2 調	1 調 2 調 3 調	1 調 2 調	1 調 2 調	1 調	1 調	1 調	1 調	1 調				1 調 (Ⅱ層)
第3検出面 (Ⅴ2・4層) 古墳時代の遺構	3 調	3 調	3 調	3 調			2 調			2 調				
第4検出面 (Ⅲ層) 弥生時代の遺構		4 調		4 調		2 調		2 調	2 調		2 調	2 調	2 調	

中近世の遺構の検出は、Ⅲ層（平安時代の洪水砂層）の堆積のない9区以東ではⅤ層上面、10区以西では平安時代の水田検出面で行った。12c区のみ中世の盛土があるため、近世の遺構検出面がⅡ層中となる。（本節第2項基本土層に詳細を記した。）

#### 2017（平成29）年度

3b・4a区と4d区での調査面の設定については昨年度を踏襲し、第4調査面では泥炭層に薄く被覆された弥生時代の水田跡を検出した。4区～6区の他の調査区では、土層の堆積状況等から、2面調査や1面調査にとどめ、2面調査の場合は、第1調査面を古代～中近世の遺構検出面、第2調査面を弥生時代の遺構検出面と設定した。また、本遺跡に隣接する長谷鶴前遺跡群の2区第5調査面で、平安洪水砂層に被覆された水田跡を検出した。次年度調査予定の7区～11区の範囲で、9か所でトレンチ掘削による確認調査を行った。

#### 2018（平成30）年度

5b区、7a区、7b・8区、11b区調査では、昨年度に引き続き、調査面は2面調査とし、第1調査面を平安時代の水田跡検出面または古代～中近世の遺構検出面、第2調査面を弥生時代の遺構検出面と設定した。11b区の第1調査面では遺存状態が悪いものの、平安洪水砂層の堆積があった。また、12区に隣接する長谷鶴前遺跡群1区第5調査面では、平安洪水砂層が厚く堆積した水田跡を検出した。11区を除く調査区の第1調査面では、古代～中近世の遺構を検出した。7a区第2調査面では、泥炭に被覆された弥生時代の水田跡を検出、7b・8区でも泥炭層に一部被覆された弥生時代の水田跡に伴う畦畔を検出した。

#### 2019（平成31）年度

9区～11区の範囲では2面調査とし、昨年度の調査面を踏襲した。12a区、12b区では、1面調査にとどめた。平安洪水砂層の堆積する10区～12区は平安時代の水田跡検出面を第1調査面とし、長谷鶴前遺跡群から広がる水田跡を検出した。平安洪水砂層の堆積しない9区では、古代～中近世の遺構検出面を第1調査面とした。第2調査面については、10区、11a区、11b区では、弥生時代の水田層を被覆する泥炭層の堆積がなく、水田面が遺存していなかったため、水田跡に伴う芯材を出土した大畦畔基部のみの部分的な調査を行った。9区では、多数の杭列と古墳時代の遺物を出土する遺構を検出した。

#### 2021（令和3）年度

市道下の12c区の調査を実施し、近世の道路跡が検出されたことから、第1調査面を中近世の遺構検出面とし、平安洪水砂層下の平安時代の水田検出面を第2調査面とした。

#### ウ. 遺構調査

埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。なお遺構調査を進めた結果、登録時の性格と異なる遺構となった場合も、出土遺物の登録等との整合性を図るため、原則的に当初登録番号を変更していない。

SA：SBよりも平面形が小さな掘り込みや石が列として配置するもの。【欄列】

SB：2mを目安とし、それ以上の大きさの方形・円形・楕円形の掘り込み。【竪穴建物跡・竪穴状遺構】

SC：連続する固い面や帯状の盛り土やSDに挟まれる帯状の面。【畦畔】

SD：帯状の掘り込み。【溝跡・自然流路他】

SK：単独、もしくはほかの掘り込みとの関係がない2mより小さな掘り込み。【土坑】

SL：複数の帯状の掘り込みや盛り上がりが規則的に配列し、ひとつの面を形成しているもの。【水田面、  
天地返し跡】

SM：方形、円形、もしくはそれらが組み合わせた形の盛り上がり。【木棺墓・土坑墓】

SQ：遺物が面的に集中するもの。【土器等の廃棄場】

ST：SBより小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、円形に配置するもの。【掘立柱建物跡】

SX：以上に記した以外のもの。

遺構精査は、土坑・墓(SK・SM)については、検出面での遺構の形状を確認後に半裁し、土層断面の記録後に完掘し、プラン全体を記録した。溝跡(SD)は、検出面での遺構の形状を確認後にサブトレンチで断面の形状や深さを確認、土層断面の記録後に完掘し、全体を記録した。水田跡(SL)は、前年度の確認調査やサンプルによるプラント・オパール分析、年度当初のトレンチ調査から、水田層の存在と広がり・遺存状況等を確認してから、面的調査を行った。埋没水田跡は、水田面の認定、被覆層の種類と厚さ、畦畔・田面の遺存状況等、連続耕作水田跡は畦畔の遺存状況等を確認し、全体を記録した。畦畔(SC)は、検出面での形状を確認後にサブトレンチで、断面の形状や高まり、芯材の有無を確認し、土層断面の記録後、必要に応じて解体を行い、芯材を露出させて記録した。畦畔の認定は、①畦畔状(帯状)の高まりが直線的にのびるもの、②田面全域に凹凸が分布するなかで、凹凸が存在しない帯状部分が直線的に認められたもの、③高まりが認められず、酸化鉄集積密集部が直線的な帯状をなすもの(上位層の酸化鉄集積・溶脱による転写で、本来耕作された土層より下層に残存した畦畔痕跡)、④高まりはないが直線的にのび方向性をもつ杭列・芯材等で区画が想定できるもの、の4つの観点のいずれかに合致するかどうかを判断基準とした。

遺物は遺構ごとに層位を分けて取り上げ、出土地点の必要なものには遺構ごとの遺物番号を付して取り上げた。

なお、調査区土層断面からは、科学分析を行うことを目的に土壌サンプルを採取し、プラント・オパール分析、花粉分析、土壌分析等を実施した。畦畔跡から出土した芯材からもサンプルを採取し、放射性炭素年代測定(AMS)・樹種同定を実施した。墓等からの出土骨については、専門家による鑑定指導を受けた。

## エ. 記録作成

遺構の記録は、調査研究員の指導のもと発掘作業員が行った。前述の測量基準杭を用いた電子平板測量を基準としたが、一部業務委託による単点測量も併用した。中地区(8×8m)単位に図面用紙に記録した割付平面図と、必要に応じて個別の遺構ごとの図面用紙に記録した個別図を作成した。土層断面図は図面用紙に記録した。遺構図は1/20の縮尺を基本とし、必要に応じて1/10の縮尺で測量した。また、トレンチ配置図、調査範囲図、地形測量図も電子平板により作成した。

遺構の記録写真は、6×7リバーサル・モノクローム、フルサイズ1眼レフデジタルカメラを併用し、撮影は調査研究員が行った。また、調査区全体等の空中写真撮影は、業務委託によって、6×7リバーサル・モノクローム、フルサイズ1眼レフデジタルカメラで実施した。デジタル写真データの保存形式は、JPEGとRAWとした。

## (2) 整理事業等の方法

### ア. 整理事業

#### 遺物の整理

ブラシを用いた水洗作業後、取り上げ袋ごとに台帳登録をした。土器・土製品・石器・石製品は微細な資料を除き、全て注記した。金属製品・木製品はラベルを添付した。遺跡名は遺跡記号BIKB、出土地点は以下の表記を用いた。

検出面：検 第2検出面：2検 表土：表 かく乱：カク 表採・排土：Z トレンチ：T 壁：カベ  
拡張区：カクチョウ 埋土：フ 水田層：水田 微高地：ピコウチ

土器は、遺構別、グリッド別に分類し、遺構の時期決定等資料化が必要なものを出出し、管理台帳を作

成した。土製品・石器・石製品・木製品は、器種分類し報告書掲載資料を抽出し、管理台帳を作成した。金属製品は、発掘調査後はシリカゲルを入れた密閉容器に保管し、長野県立歴史館においてX線透過写真を撮影し、その後に報告書掲載遺物を抽出し管理台帳を作成し、保存処理を実施した。遺物の実測は手実測を基本とし、石器・石製品の一部は業務委託により行った。

出土骨は、土砂取りや水洗・乾燥後、鑑定指導を受け、必要な資料については写真撮影を行った。

#### 遺構図の整理

原図は、記載内容を点検・修正しながら整理し、台帳に登録した。全体図、個別遺構図はこれらをもとに作成し、Adobe Illustrator CC を用いてデジタルトレースを行った。

#### 写真の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、撮影台帳を作成し、撮影日、撮影番号と内容を記した。写真データのRAW形式データは、Adobe BridgeとPhotoshop Camera Rawを使用して、グレースケールを移し込んだ画像をもとにホワイトバランスを補正し、TIFF形式に現像している。その後、JPEG形式・TIFF形式・RAW形式のデータ別に、撮影番号順にポータブルハードディスクとDVDに記録した。

### イ. 報告書の作成と資料収納

#### 報告書の作成

本格的な編集作業は2022年度（令和4年度）から着手した。報告書の作成にあたり、編集会議を2023年9月13日に行った。報告書は、埋蔵文化財関係機関、大学、地域の図書館等に配布する。

#### 資料収納

遺物は、材質・種類ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けた上で、出土遺構・地区等の地点別にテンパコに収納し、最終的な収納用テンパコ番号を付与し、遺物収納台帳を作成した。

写真は、遺構・遺物写真ともに整理段階で作成したアルバムと台帳をテンパコに収納した。

遺構割付図・断面図等の実測図面は、通し番号（図面番号）を付けて図面台帳に登録し、図面ファイルに収納した。また、遺構・遺物のデジタルデータはポータブルハードディスクに保存した。

## 2 基本層序

### (1) 土層の概要

今回の調査は、石川条里遺跡南部を千曲川と直交方向に自然堤防の塩崎遺跡群に接する1区から後背低地に立地する石川条里遺跡を横断し、調査区西端は崖錐地形に立地する長谷鶴前遺跡に接するまでの範囲を調査対象としている。対象地の遺跡地形は後背低地を中心とするが、調査区中央部の7a区～10区は西側山麓に発達した小河川由来の扇状地堆積物が下層にある扇状地端部にあたり、やや高い地形となる。ここを境に東側の5b区や6区以東は後背低地最低部2区に向かって緩やかに傾斜し、西側も11区から長谷鶴前遺跡群1区へむかって傾斜する。西側調査区は平安時代洪水砂層を除くと千曲川堆積土が少なく、粒径も細かい土質傾向だが、東側の後背低地の低い場所を中心に千曲川から供給された洪水土が埋積し、時代と共に地表面が顕著に上昇している。なお、長谷鶴前遺跡群2区、3区の山際のやや高い地形は、中世後期以後の雨水等による山側から選ばれた堆積土増加と人為的造成土によるもので、平安時代までは石川条里遺跡から土層が連続する低地であることが確認できた。

遺跡内の土層は、千曲川の氾濫等で供給された土砂を基調とし、腐植土・泥炭層、あるいは水田層等の2次的に変質した土層が重なって構成される。上記地形と関連し、調査区西側扇状地端部にあたる7a区前後を境に様相が異なる。調査区東側の1区～7a区の後背低地の低い場所では、千曲川由来の洪水堆積層が厚く堆積し、細砂やシルト等のやや粒径が粗い土で構成される。また、東に向けて地下水位が低くなるため、東端ほど泥炭質ではなく腐植土層となる傾向がある。一方、調査区西側の7b区以西では堆積土層が薄く粒径も細かい粘土質で、扇状地端部にあって地下水位も高く泥炭層が発達する傾向となる。風化岩石由来の粗粒砂を多く含む土層が局所的にみられ、土層全体にも粗粒砂が混在する。

石川条里遺跡南部の土層については事前情報が少なく、発掘調査時には各地区で基本土層を把握し、調査を進める中で土層の追加や土層番号の振り直しを行った。整理作業時には各地区の土層の対比関係を再検討し、本遺跡の基本土層としてⅠ層からⅤ層を新たに振り直した。基本層序図(第8～13図)では遺構検出を行ったⅣ～Ⅷ層に、調査時の各調査区での基本土層名・土層注記を併記している。

以下に各層の性状を記す。

#### Ⅰ層 黄灰色～褐灰色シルト質埴土層

表土層で、グライ化したシルト基調の現代の水田耕作土層。一部に工場や道路の盛り土が上位に存在する。5区以西は、山手から運搬された粗粒砂が混在する。

#### Ⅱ層 灰黄褐色シルト質埴土～褐灰色軽埴土層

Ⅰ層とⅢ層(Ⅲ層が確認できない地点ではⅣ層)の中間の土層群を一括した。千曲川の洪水で供給されたと思われる細砂やシルトを基調とするが、洪水堆積土層は残存せず、すべて耕作等で攪拌されて場所ごとに異なる様相を示す。そのため広域に連続した土層としては捉えきれなかった。土質の傾向は、7a区以東の調査区東側ではシルト・砂質が強く、腐植化した黒味を帯びた暗褐色～灰黄褐色を呈する。調査区西側7b区～12区前後は山からの粗粒砂を混じりながらも粒子の細かい粘質の強い土質を基調とし、西側ほど粘りも締まりも強まって10区～12区では粘性が強い灰色の重埴土傾向の土質となる。

本層群中には、局所的に特徴的な土層が認められた。近世に構築された猪平池から引かれた用水の脇にあたる調査区10区、11区では、本層上部に山から供給された粗粒砂が厚く何層も重なっていた。また、西端部の12a区、12c区では中世居館跡に伴う造成土、近世末の水田の埋め立て土層等の人為的盛土層等がある。さらに、長谷鶴前遺跡群から本遺跡5区までの範囲ではⅢ層(平安時代の洪水砂層)直上に腐植土

層が断片的に残存していた。本土層群には平安時代後期以前の土器も混在するが、中近世の焼物を含み、中近世遺構埋土はⅡ層が基調となる。

#### Ⅲ層 ぶい黄褐色～褐灰色シルト・細砂層（平安時代の洪水砂層）

シルト～細粒砂基調の平安時代前期の洪水堆積砂層。

本層は千曲川の洪水による堆積土層で、第2検出面の条里型水田面を被覆する。土質は細砂～シルトで、粒径は保柳氏の分析（第5章第3節）により、土層上部ほど粒径が細くなる正級化構造と捉えられた。長谷鶴前遺跡群～11区では下部に粘土ブロック（擬礫）が混じり、かなり流速の早い洪水で形成された土層とみられる。本層は調査区南西端部付近の長谷鶴前遺跡群～11区・12区に厚く、10区で薄くなり、9区で断片的な残存のみとなる。それ以东で本層は認められず、1区、2区等の東端では溝跡埋土の一部のみ残存する。本層は同じ千曲川の洪水堆積土層であるⅥ層と異なり、地形的には高い調査区南西端に厚く分布するが、調査区の南東側にある千曲川の蛇行部から流れの早い洪水が直線的に氾濫を起こして調査区南西部に堆積した土層と推測される。長谷鶴前遺跡群の本層が被覆する水田面から平安時代前期末の完形の須恵器坏が出土し、平安時代前期末の長野盆地南部にみられる所謂「仁和の洪水」土層に対比しうる。

#### Ⅳ層 黒褐色シルト質埴土～重埴土層（奈良・平安時代の耕土層）

遺跡内の広域に分布する古墳時代末以後～平安時代後期の耕作土層。黒味を帯びた腐植土を基調とし、西端の長谷鶴前遺跡群は若干グライ化する。下層の古墳時代前期末のⅤ層以後に植物が繁茂して形成された土壌が母材とみられる。

本層は調査区全域に分布するが、9区～長谷鶴前遺跡群ではⅢ層に被覆された条里型水田耕作土層にあたり、本層以上に平安時代前期の土器が含まれる。しかし、Ⅲ層洪水土層の被覆がない調査区東側の1区～4区では本層から平安時代後期の土師器も出土し、平安時代後期まで耕作された可能性がある。その中間の5区～8区は平安時代後期の土器の出土がなく、平安時代後期の耕作の有無は明らかにしえなかった。また、Ⅲ層に被覆された長谷鶴前遺跡群1区Ⅳ層では、シルトや泥炭層に覆われた平安時代に耕作されずに古い水田のまま残存したとみられる区画があり、4c区～7b・8区でも本層を埋土とする奈良時代の溝跡がⅤ層上面で検出された。本層と土質・色調の共通する様相から同一層と捉えたが、少なくともⅤ層以後の奈良時代前後から耕作土として利用され、上面がⅢ層に被覆される9区～長谷鶴前遺跡群では平安時代前期まで、Ⅲ層の被覆がない7b・8区以东では平安時代後期まで耕作されたと推測される。

なお、9区ではⅣ層下にⅣ層とⅤ層の中間の色調のⅣ層類似土層が局所的にあり、その下部で古墳時代前期末の水田遺構（畦畔）が検出された。

#### Ⅴ層 灰白色シルト質埴土～褐灰色軽埴土・細砂層（古墳時代の耕土層）

Ⅳ層下にある灰白色～褐灰色を呈する土層群をⅤ層と括った。本層は調査区東側の1区～7a区では数枚の細砂ブロックを混じる層や、灰白色や褐灰色のシルト質埴土に分層されるが、7b区以西では細砂は混じらず1～2枚の灰色の強い褐灰色～灰黄褐色の粘性の強い軽埴土に集約されている。

調査区東側の1区～7a区では本層がⅤ-1層灰白色シルト質埴土、Ⅴ-2層褐灰色埴土～軽埴土、Ⅴ-3層橙色細砂混シルト質埴土、Ⅴ-4層埴土～褐灰色軽埴土の4層に分層された。Ⅴ-1層は灰白色シルト主体の特徴的な土層で、1～5b区まで広域に認められる。粒径が均一で洪水性堆積土層とも考えたが、1区～3a区では、下面Ⅴ-2層上面で本層が被覆する明確な畦畔は確認されなかった。また、Ⅴ-3層は細

砂や細砂ブロックが混じる。3b・4a区では層厚が厚いことからV-3・4層で面的調査を実施した。ここでは古墳時代前期の土器を伴うV-4層が高まる畦畔（SC038）を検出し、V層は古墳時代前期末を含む水田層と判明した。V-3層に含まれる砂層ブロックは、耕作の攪拌によるものと考えられるが、2区以東は明瞭な水田遺構は確認できず、水田か、あるいは畑かは明らかにできなかった。また、本層群中の砂層を埋土としたSD100が1区で検出され、出土土器は古墳時代前期末の所産であるが、V-3層とは直接の連続性が捉えられず同一層の洪水砂層とは断定できなかった。

調査区西側の7a区では、3b・4a区のV-3・V-4層がV-2層下部で途切れるため、7b・8区以西ではV-2層がV-3・4層を含んで連続耕作されたとみられる。そのため7b・8区以西では、7a区以東のV-2・3・4層に帰属する遺構も同一面で検出している可能性がある。また、7b・8区ではV-2層直下のⅦ層直上で弥生時代後期の畦畔の基部（SC061・065・069）が検出された。このことから本層は弥生時代後期の水田耕作土層を含み、古墳時代前期まで耕作されたと考えられる。調査区西端の11区～長谷鶴前遺跡群でも本層と思われる土層があり、11区ではSC089が検出された。芯材3点の放射性炭素年代測定分析（2019年度）では、 $1810 \pm 20$ 、 $1760 \pm 20$ 、 $1780 \pm 20$ 年BPと、弥生時代後期～古墳時代前期の年代を示したが、出土土器からは弥生時代中期後半～後期の可能性があり、西端部での本層の連続性は明らかにしえなかった。

#### Ⅵ層 黄褐色シルト・褐灰色シルト層（弥生時代後期前半の洪水土層）

V層直下にある比較的厚いシルト～細砂の洪水土層である。

後背低地の地形的に低い調査区東側の2区～7a区にのみ分布し、扇状地端部付近の地形的にやや高い7b・8区より西側には分布しない。土質は2区南西部が細砂、3b・4a区はシルトである。地点毎に粒径が異なるが、途中で耕作土層や腐植土層は挟まないことから、堆積時の流速の違いから粒径の違いが生じたと捉え、洪水性堆積土層として一括した。2区北壁の本層中から吉田式期の壺が出土し、本層は弥生後期前半を含む時期とみられ、千曲川左岸下流に位置する長野市松原遺跡（照理文2000）の弥生後期前半の洪水土層に対比しうる可能性がある。

#### Ⅶ層 泥炭・黄白色シルト層

Ⅵ層直下に位置する層厚数cmの泥炭層や黒褐色泥炭質粘土を基調とし、きめ細かい灰色シルトの薄層を縞状に含む。灰色シルトは若干腐植化し、酸化鉄の集積がみられるところもある。本層はⅦ層水田を被覆し、Ⅶ層水田耕作放棄後に草が繁茂する湿地性環境下で、洪水土層が薄く流入・堆積した土層群とみられる。

本層は2区～7a区周辺まで連続して分布するが、7b区～10区東側で上層V層に削平されて断片的な残存となる。西側の10区～長谷鶴前遺跡群でⅦ層と類似した土層上に同様の泥炭層や黒色粘土層が認められたが、Ⅶ層は一旦途切れる上に上面にⅥ層の被覆もないため、Ⅶ層自体が連続耕作されている可能性もあり、両者が同時期の同一層かは断定できなかった。

本層に伴うと断定できた土器はないが、7b・8区の泥炭層の炭化物3点の放射性炭素年代測定分析（2018年度）では $1940 \pm 20$ ・ $2030 \pm 20$ ・ $1970 \pm 20$ 年BPの年代が得られ、弥生時代中期末～後期初頭の時期とされた。Ⅶ層水田面積はこれを若干遡る時期とみられ、出土土器との年代には矛盾がない。

#### Ⅷ層 灰色～黒褐色重粘土層（弥生時代中期後半の水田層）

泥炭粒を混在する粘土層で、4b区、5b区～9区では2枚に分層され、Ⅶ層上層をⅧ-1層、下層をⅧ-2

層とした。このⅣ層下のⅢ層上部に母材とみられる泥炭質粘土層があり、本層も黒味を帯びる。

Ⅳ-1層の上面はⅣ層（泥炭・シルト層）に被覆され、Ⅳ-1層上面で畦畔が検出されたことから水田耕作土層と捉えられる。ただし、長谷鶴前遺跡群～12区にもⅣ-1層と類似土層が認められたが、面的に水田遺構の検出は行っておらず、プラント・オパール分析等も実施していないため、水田利用の有無は確認できていない。また、3b・4a区、5b区・9区に分布するⅣ-2層のプラント・オパール分析（2019年度）ではイネのプラント・オパールが高密度で検出され、Ⅳ-2層も水田耕作土層とみられる。Ⅳ-1層から栗林2式後半～3式とみられる土器が出土し、9区のⅣ-2層から栗林1式とみられる土器が出土した。このことから本層が弥生時代中期後半の水田土層と捉えられる。本層下は自然堆積層とみられるⅢ層となり、弥生時代中期後半より古い遺構・遺物は認められなかった。

#### Ⅲ層 黒色～褐色泥炭層・泥炭質土層・灰色粘土層（弥生時代中期後半以前の自然堆積土層）

本層は泥炭と千曲川洪水土、西側山地からの沢で運搬された風化岩石由来の粗粒砂層の互層で、遺構・遺物の検出もなく、水田化以前の自然堆積層として括った。その様相は地点ごとに異なる。調査区西側の4c区～長谷鶴前遺跡群付近では薄い泥炭層と灰白色粘土・シルト層が互層に堆積し、山際の長谷遺跡群では最下部に樹木片が多く混在する泥炭層がみられる。一方、調査区東側の4b区以東は比較的層厚がある粘土層や泥炭質が弱い黒褐色腐植土層が交互にみられる。本層以下は遺構・遺物の検出もないため調査終了面とした。9区と11区では本層内に砂層が確認され、9区では沢とみられる窪みも確認されたことから西側山地から流れ下る沢がかつて存在した可能性がある。これが弥生時代以後の水田の主要水源になっていたと推察する。また最底部までは確認していないが、長谷鶴前遺跡群の泥炭層の放射性炭素年代測定（2017・2018年度）では $3500 \pm 30 \sim 2772 \pm 24$ 年BPと、縄文時代後期～晩期の年代が得られている。

#### （2）遺構の検出面

調査区内は場所により堆積土層の様相が異なって調査面や遺構検出土層も一様ではないが、本遺跡での遺構検出面は、第1検出面（平安時代の水田面）、第2検出面（平安時代～中近世の遺構）、第3検出面（古墳時代の遺構）、第4検出面（弥生時代中期後半の遺構）を設定した。

#### 第1検出面 平安時代の水田跡（Ⅳ層上面）

本遺跡10区～12区と長谷鶴前遺跡群1区～3区では、Ⅲ層（平安時代の洪水砂層）に被覆されたⅣ層（耕作土層）上面で平安時代の水田面を調査した。これが第1検出面にあたる。洪水砂層に被覆された同一時期の水田面ながら、長谷鶴前遺跡群1区では平安時代に耕作されずに古墳時代末～奈良時代の水田面が泥炭層に覆われた状態で残存する区画が検出された。この区画内の泥炭層は局所的な堆積で、改めて別の検出面番号は付していない。なお、調査時では、10区～12a・12b区では本検出面が第1調査面で、隣接する長谷鶴前遺跡群では第5調査面にあたるが、整理時に石川条里遺跡第2検出面にまとめた。

#### 第2検出面 平安時代～中近世の遺構（Ⅴ層上面）

Ⅲ層の被覆がない1区～8区ではⅤ層上面を第2検出面とした。1区～7a区でⅣ層を僅かに残したⅤ-1層上面、Ⅴ-1層がない7b・8区～9区ではⅤ-2層上面で、Ⅳ層より上層から掘りこまれる中近世遺構、Ⅳ層耕作でⅤ層境に残された平安時代水田畦畔基部を検出した。なお、9区周辺では上層Ⅳ層とⅤ層中間色調の土層がⅣ層直下に1層あり、その下面のⅤ-2層上面で古墳時代前期末の畦畔の高まりが検出されている。



この第2検出面は最初に調査着手した調査区東側ではⅢ層が分布せず、Ⅳ層の年代も捉えられなかったため、中近世遺構が明瞭に捉えられたⅤ層上面で設定したものである。後に11区や長谷鶴前遺跡群でⅢ層とⅣ層が確認され、Ⅴ層が古墳時代の土層であることが判明した。なお、本来Ⅴ層より上層にある条里型区画に一致するSD046やSC029はⅤ-1層下の検出だが、SD046は近世溝跡が重複していたため存在がわからず下面で検出したもので、SC029は畦畔自体ではなく下層に浸透した酸化鉄集積の有無により検出している。また、12c区の中世居館跡にかかる遺構は盛土を伴いⅡ層中で検出している。

### 第3検出面 古墳時代の遺構（Ⅴ-2・3・4層）

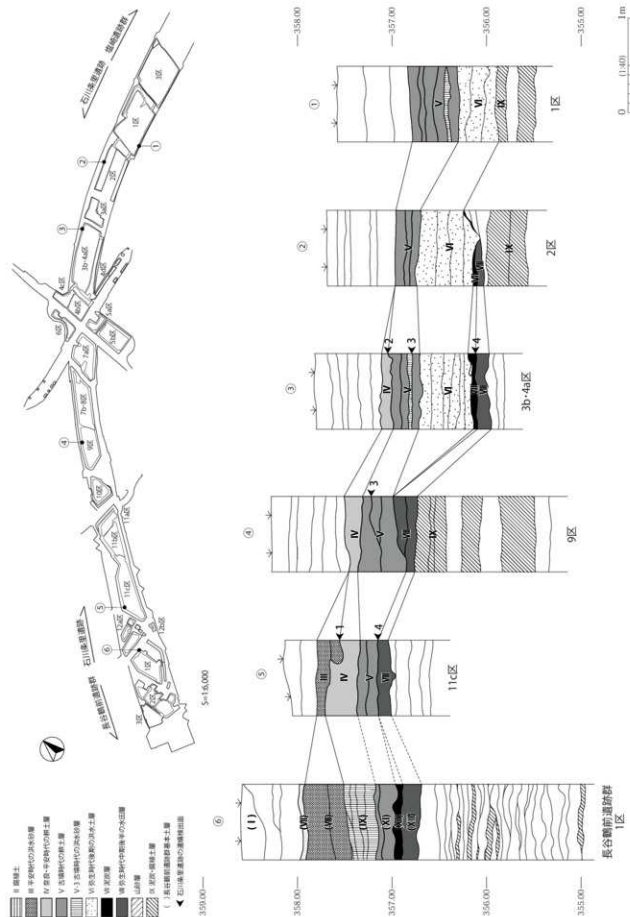
調査区東側の1区～4b区で砂層ブロックを多く混じるⅤ-3層が分布し、特に厚く残存する3a区、3b・4a区では古墳時代の水田跡をⅤ-3層上面で検出した。これが第3検出面にあたる。砂層被覆の水田面が良好に遺存すると期待されたが、砂層は耕作で攪拌されており、耕作されずに残された畦畔の基部、土器集中を検出した。Ⅴ層が細分された東側調査区の1区～3a区ではⅤ-1層を除去したⅤ-2層上面やⅤ-4層等でも遺構検出を試みたが、溝跡や帯状の酸化鉄集積を検出したものの、確実に各Ⅴ層に帰属すると捉えられた遺構はない。一方、Ⅴ-3層が分布しない7b・8区以西の西側調査区ではⅤ-2層上面の第1検出面のみ古墳時代の遺構を調査した。そのなかで9区のみⅣ層とⅤ層の中間的な色調の土層が局所的にあり、その下のⅤ-2層上面で畦畔とみられる高まりが認められた。また、7b・8区では弥生時代後期の土器を出土した畦畔（SC061・065）はⅤ層最下部のⅤ層境で認められ、Ⅴ層は弥生時代後期の耕作土層も含むと捉えられる。

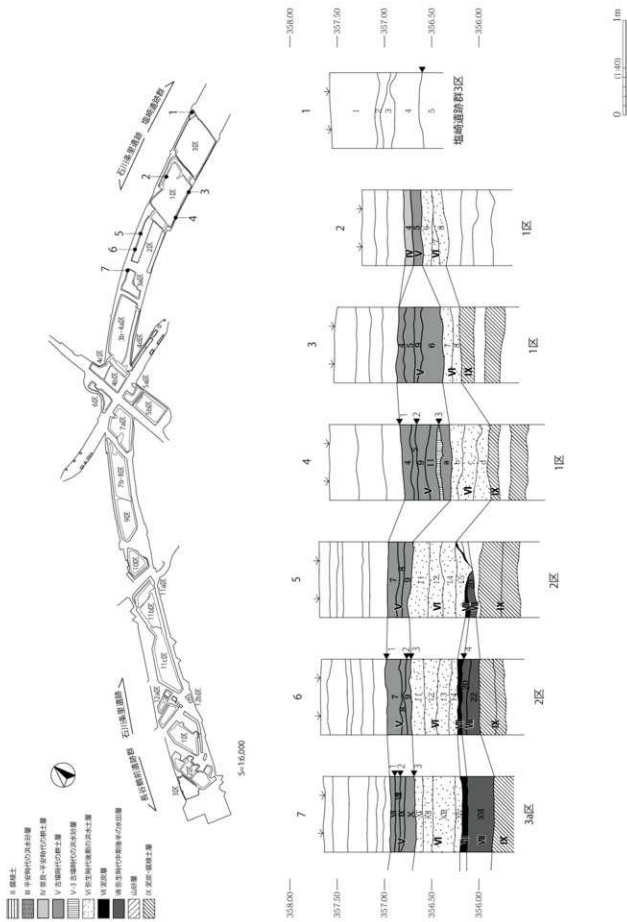
11区～長谷鶴前遺跡群ではⅤ層中では被覆土層もないため面的調査を実施せず、トレンチ等で木芯の畦畔が確認された地点のみ遺構周囲を拡幅調査した。そのなかで11区SC089の芯材はⅤ層の可能性のある土層で検出し、出土木材の放射性炭素年代測定も弥生時代後期～古墳時代とされた。しかし、出土土器から弥生時代中期後半～後期の可能性もあり、11区～長谷鶴前遺跡群のⅤ層の様相は明らかとならなかった。

### 第4検出面 弥生時代中期後半の遺構（Ⅵ層）

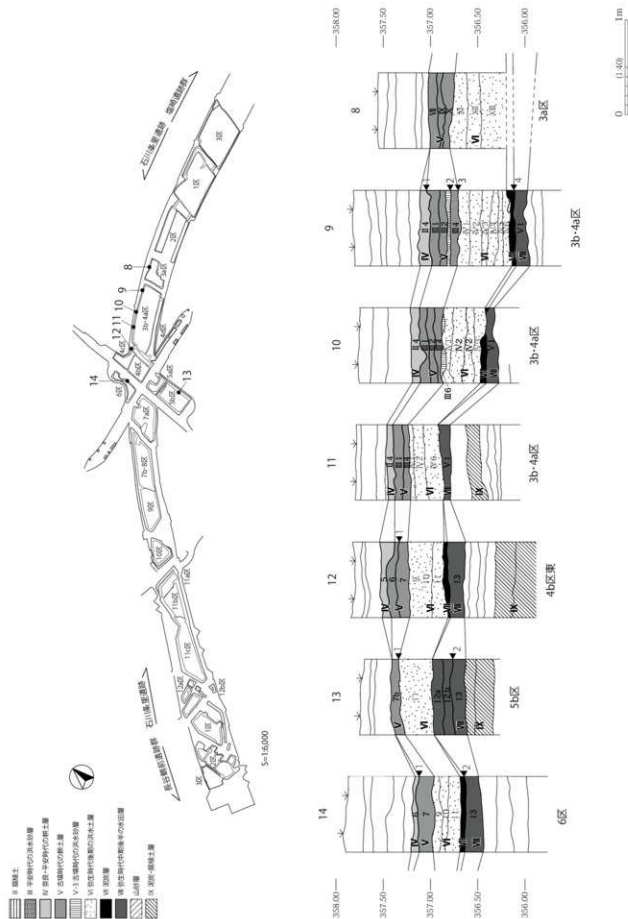
薄い泥炭と黄灰白色シルトから成るⅥ層に被覆された水田面で、2区～7a区では被覆する泥炭層下面で畦畔を検出した。調査段階では2区、3b・4a区の第4調査面、7a区以西の第2調査面にあたる。上層は褐灰色・黄灰褐色を呈する千曲川由来の堆積層で、その下部に位置する特徴的な泥炭層であるため、2区以西ではほぼ同一の面を確認したが、7b・8区以西では泥炭の被覆が薄く、10区まで遺構の検出がない。7b・8区以西では木質遺物の残存は良く、大畦畔等を耕作土の土質の違いや芯材により検出した。2区～7a区までは比較的細かい水田が捉えられたが、7b・8区以西では大畦畔のみの検出である。

この第4検出面より下層の基本土層Ⅳ層では、各調査区でトレンチによる土層と遺構・遺物の有無を確認したが、遺構、遺物の検出がなく第4検出面を最終調査面とした。

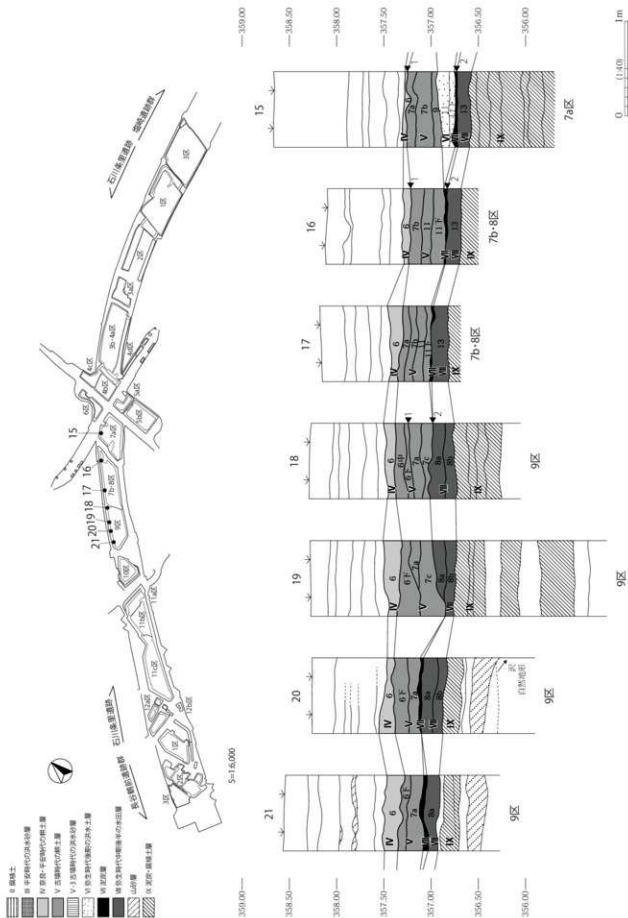




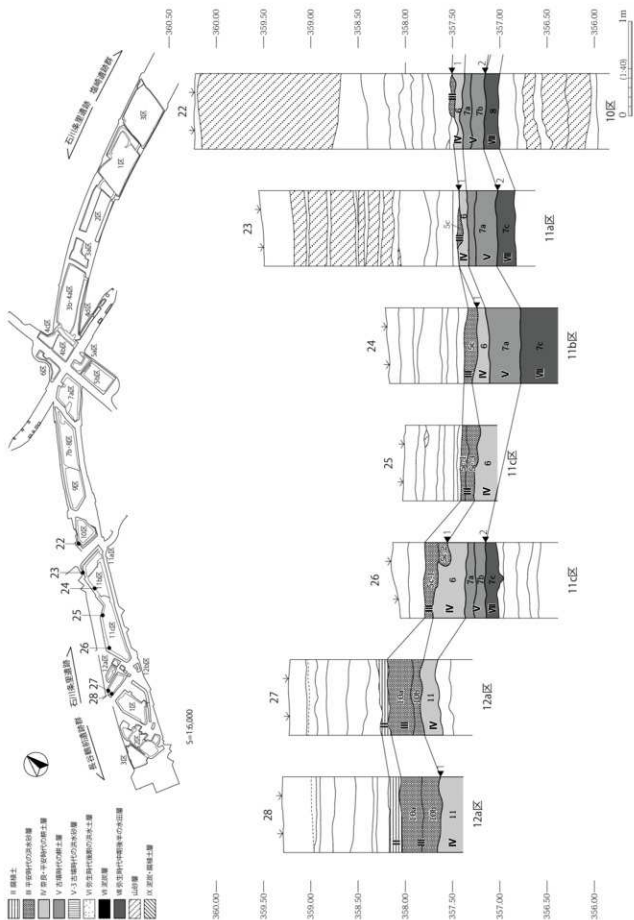
第9図 基本層序(詳細図1)



第10図 基本層序(詳細図2)



第11図 基本層序(詳細図3)



第 12 図 基本層序（詳細図 4）

## 塩崎遺跡群3区

- 1 褐灰色土(10YR5/1) 3㍎。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) 3㍎。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) 3㍎。
- 4 黒色土(10YR2/1) 3㍎。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質。

## 1区

## 北壁

- 4 黒褐色土(10YR3/1) 3㍎質堆積土。
- 5 黄灰色土(10YR6/1) 3㍎質堆積土。
- 6 黄褐色土(10YR5/4) 3㍎質堆積土。
- 7 褐灰色土(10YR5/1) 粘質堆積土。
- 8 暗黄褐色土(10YR5/2) 3㍎質堆積土。

## 南壁

- 4 灰白色土(10YR7/1) 3㍎。
- 5 明褐色土(7.5YR5/6) 3㍎質堆積土。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘質堆積土。細砂混。
- 7 褐灰色土(10YR5/1) 粘質堆積土。細砂少混。
- 8 褐灰色土(10YR4/1) 軽土。
- 9 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 砂質3㍎。粘土7㍎中混。
- 11 褐灰色土(10YR5/1) 3㍎質堆積土。砂混。
- a 褐灰色土(10YR6/1) 粘質堆積土。
- b にぶい黄褐色土(10YR6/4) 3㍎質堆積土。細砂混。
- c 褐灰色土(10YR5/1) 粘質堆積土。
- d にぶい黄褐色土(7.5YR4/3) 3㍎質堆積土。

## 2区

- 7 褐灰色土(10YR6/1) 3㍎質堆積土。
- 8 黄褐色土(10YR5/6) 3㍎質堆積土。細砂7㍎中混。
- 9 灰色土(N5/1) 粘質堆積土。
- 11 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 3㍎。
- 12 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 3㍎。
- 13 褐灰色土(10YR5/1) 3㍎。
- 14 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3㍎。
- 15 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質堆積土。
- 19 泥炭層。
- 20 粘土・黒色土(7.5Y3/1) 粘土。
- 22 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 粘土。

## 3a区

- VI 灰黄褐色土(10YR4/2) 細砂混。
- VII 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。細砂少混。
- IX にぶい黄褐色土(10YR5/3) 細砂・粘土7㍎中混。
- X 灰黄褐色土(10YR5/2) 細砂少混。
- XI 褐色土(10YR4/4) 細砂少混。
- XII 褐色土(10YR4/4) 粘質土。粘土7㍎中混。
- XIII にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘土7㍎中混。細砂中混。
- XIV 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。粘土7㍎中混。
- XV 暗褐色土(10YR2/3) 粘質土。粘土7㍎中混。
- XVI にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘質土。粘土7㍎中混。細砂少混。

## 3b・4a区

- II4 黒褐色土(10YR3/1) 軽土。
- III1 灰黄褐色土(10YR6/2) 3㍎。
- III2 褐灰色土(10YR5/1) 3㍎質堆積土。
- III4 褐灰色土(10YR4/1) 堆積土。
- III6 洪水砂。
- IV1 灰黄褐色土～にぶい黄褐色土(10YR6/2～6/4) 3㍎。細砂混。
- IV2 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 軽土。
- IV2' にぶい黄褐色土(10YR6/4) 粘土。
- IV3 にぶい黄褐色土～黄褐色土(10YR5/4～5/6) 3㍎。
- IV4 浅褐色土(7.5YR8/4) 粘土。
- IV5 明褐色土(7.5YR5/6) 軽土。
- IV6 泥炭なし。
- IV1 明黄褐色土(2.5Y6/6) 細砂。

## 4b区東

- 5 黒褐色土(10YR3/2) 3㍎。
- 6 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。
- 7 褐色土(10YR4/4) 細砂混。
- 9 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 灰色3㍎。
- 10 灰黄褐色土(10YR4/2) 3㍎粘土。
- 11 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂混。
- 12 黒色土(10YR2/1) 3㍎粘土。
- 13 褐灰色土(10YR4/1) 粘土。

## 5b区

## 東壁

- 7b 褐灰色土(10YR4/1) 砂質3㍎。
- 11 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3㍎。
- 12a 黒褐色土(10YR3/2) 3㍎7㍎中混。
- 12b 黒色土(10YR2/1) 3㍎。泥炭層基調。
- 13 暗褐色土(10YR2/3) 3㍎。泥炭粒混。

## 6区

- 6 黒褐色土(10YR3/2) 3㍎粘。
- 7 褐灰色土(10YR5/1) 3㍎粘。
- 9 褐灰色土(10YR4/1) 粘土7㍎粘。
- 10 褐灰色土(10YR5/1) 粘土7㍎粘。
- 11 褐灰色土(10YR4/1) 粘土7㍎粘。
- 12 黒色土(10YR1.7/1) 粘土質3㍎粘。
- 13 黒褐色土(10YR3/1) 粘土層。

## 7a区

- 6 暗褐色土(10YR3/2) 3㍎。
- 7a 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。
- 7b 灰黄褐色土(10YR5/2) 3㍎。
- 9 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。
- 11 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3㍎。
- 11下 褐灰色土(10YR5/1) 粘土に近い3㍎。
- 12 黒色土(10YR1.7/1) 泥炭土層化。
- 13 褐灰色土(10YR4/1) 粘土。

## 7b・8区

- 6 黒色土(10YR2/1) 3㍎。
- 7a 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。
- 7b 灰黄褐色土(10YR4/2) 3㍎。
- 11 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3㍎。
- 11下 褐灰色土(10YR5/1) 3㍎。泥炭7㍎中・細粒砂混。
- 12 黒色土(10YR1.7/1) 泥炭層。
- 13 黒褐色土(10YR3/1) 3㍎。

## 9区

- 6 黒色土(10YR2/1) 3㍎。
- 6中 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。
- 7a 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。細砂混。
- 7下 褐灰色土(10YR5/1) 3㍎。
- 7c 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。
- 8a 黒褐色土(10YR3/1) 3㍎。泥炭粒少混。
- 8b 黒褐色土(10YR3/1) 3㍎。泥炭多混。

## 10区

- 5c-1 灰黄褐色土(10YR4/2) 3㍎。
- 6 黒褐色土(10YR2/1) 3㍎。
- 7a 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。粗粒砂混。
- 7b 黒褐色土 3㍎。
- 8 黒色土(10YR1.7/1) 3㍎。

## 11a区

- 5c 褐灰色土(10YR4/1) 細粒砂。
- 6 黒色土(10YR2/1) 3㍎。
- 7a 黒褐色土(10YR3/2) 3㍎。
- 7c 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。

## 11b区

- 5c にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂混。3㍎7㍎中混。
- 6 黒色土(10YR2/1) 粘土。
- 7a 黒褐色土(10YR3/2) 3㍎。
- 7c 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。

## 11c区

- 5c-1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂混。細粒砂。
- 5c-2 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂混。中粒砂。3㍎粘。
- 5c-3 灰黄褐色土(10YR6/2) 砂混。中粒砂。3㍎7㍎中混。
- 6 黒色土(10YR1.7/1) 3㍎。
- 7a 黒褐色土(10YR3/2) 3㍎。
- 7b 黒褐色土(10YR3/1) 3㍎。
- 7c 褐灰色土(10YR4/1) 3㍎。

## 12a区

- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 3㍎。
- 10a 褐灰色土(10YR4/1) 砂混。
- 10b 黒褐色土(10YR3/1) 中粒砂。
- 11 黒色土(10YR2/1) 3㍎。

第13図 基本層序(詳細図5)

## 第3節 遺構

本節の土層名は、原則的に第2節にある基本土層を使用し、部分的に堆積する土層の記載の場合には、調査時の呼称である各地区の基本土層名を（ ）付きで表記した。

### 1 弥生時代の遺構

#### (1) 概要 [第10表・図版1]

弥生時代の遺構の検出面は、Ⅷ層上面【第4検出面】であり、2区～11区の範囲に分布する。その種類と検出数は、水田跡（水田2面・畦畔23条）・水田跡に伴う溝跡8条・土器集中1基であり、以下の第10表に地区別検出数を示した。

遺構の時期は、ほとんどが弥生時代中期後半と考えられるが、7b・8区の畦畔の一部と9区の溝跡は弥生時代後期の可能性が高い。Ⅷ層（弥生時代中期後半の水田層）は、調査区北壁の土層断面観察により、2区～11区の広い範囲で確認した。このうち7a区までの東側の調査区では、水田面をⅧ層（泥炭層）が薄く被覆し、7b・8区西側以西では被覆しない（図版1）。Ⅷ層の被覆する2区～7a区では、水田面が遺存する水田跡を検出した。3b・4a区第2水田、7a区第3水田等、小畦畔により区画された小区画水田であったと考えられる。これらの小区画水田は、3b・4a区北西側に位置する南北方向の帯状微高地を挟み、等高線に沿って区画されていた。また、この微高地の南西側縁辺部にあたる5b区では、等高線に沿う大畦畔を検出した。

一方、Ⅷ層が被覆しない西側調査区の7b・8区以西では、Ⅴ層（古墳時代の耕土層）下で、芯材を埋設する大畦畔基部のみを検出した。これらの大畦畔は50～70m間隔で、正方位に斜行した同方向を向いているため、大畦畔により区画される大区画水田であったと考えられる。連続耕作により、水田面が遺存していないことから、大区画内を区画する小畦畔の確認はできなかった。また、西側調査区では、東側調査区で確認できたⅥ層（弥生時代後期前半の洪水土層）の堆積がみられないため、7b・8区では、弥生時代中期後半の畦畔と弥生時代後期の畦畔をほぼ同一面で検出した。弥生時代後期の水田跡の確認は、局所的であり、その全容は不明である。

弥生時代中期後半の本遺跡の地形は、山側の12区から後背低地の最低点である2区へ向かって、概ね西から東へ傾斜する。千曲川の自然堤防上には集落域（塩崎遺跡群）が広がり、1区はその自然堤防端部に位置するため、水田域の東端は2区であったと考えられる。用水とみられる溝跡はほとんど確認されていないが、主水源は西側崖錐地形先端部の湧水か西側の沢等の小河川とみられ、畦越しに灌漑を行ったものと考えられる。

弥生時代後期の本遺跡の地形は、2区と3a区にⅥ層が比較的厚く堆積したため、3b・4a区が若干低くなる。水田域は3b・4a区～9区の範囲内であったと考えられるが、3b・4a区には南北方向の帯状微高地があるため、微高地以西の4b区～9区の比較的狭い範囲に限られた可能性がある。

第10表 弥生時代遺構の地区別検出数

遺構名	地区名												合計	
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11		12
水田跡	水田			1				1						2面
	畦畔(SQ)	3	4		3				9	1	1	2		23条
溝跡(SD)		5	2							1				8条
土器集中(SQ)						1								1基



## (2) 水田跡

水田跡は2区から11区の範囲で検出した。畦畔による区画の確認が可能なものには、第2水田(3b・4a区)、第3水田(7a区)のように、水田名を付した。以下、地区別に水田跡の概要を記す。水田跡に伴う畦畔については、大畦畔と芯材を伴う畦畔のみ個別に記載した。

なお、弥生時代中期後半の水田跡については、第6章第1節2に詳細を記した。

### 2区 [遺構：図版1・2・PL1、土器：図版84・PL27]

第4調査面は、Ⅶ層が被覆するが、その堆積は調査区東側に向かって薄くなり、東端には堆積しない。Ⅶ層下の洪水粘土層(20層)が水田面を被覆し、洪水粘土層を除去したⅦ層上面で、ほぼ平行する褐色粘土の帯状部分3条を検出した。高まりは僅かであった。他調査区との土層対比から畦畔と判断し、SC108・109・110とした。また検出した溝跡SD093・094・101・102・103の5条は、全て掘削された溝跡ではなく、湿地の窪地に滯水した自然の痕跡と判断した。遺物は、調査区北壁土層断面のⅦ層最下部から弥生時代後期前半の壺(22)が出土した。Ⅶ層のプラント・オパール分析(2016年度)はイネのプラント・オパールが7,200個/gと高い値で検出され、水田耕作土の可能性が高いと考える。Ⅶ層最下部の出土土器と検出層位から、時期は弥生中期後半と判断した。

### 3b・4a区 [土器：図版84]

第4調査面は、Ⅶ層に薄く被覆される。調査区北西側の微高地と、その裾部に広がる小畦畔で区画された水田跡を検出した。当初は検出した畦畔ごとに登録を行っていたが、調査区のほぼ全域で小畦畔が検出されたため、整理の段階でそれらを一括して「第2水田」として登録した。微高地上からは、壺(15)が出土した。

### 第2水田 [遺構：図版1・2・5・6・PL1]

位置：3b・4a区ⅦF14・15・19・20・23・24・25、ⅦG06・07・11・12・13・16・17・18・21・22・23、ⅦK03・04・05・08・09・10、ⅦL01グリッド。

水田被覆層と水田面の状況：Ⅶ層が薄く堆積し、水田面が遺存する。

検出：Ⅶ層上面。調査区北西側に位置する微高地の裾部で、等高線に沿う北東―南西方向に、Ⅶ-1層が帯状にのび、延長線上の北壁土層断面で畦畔状に高まることを確認した。Ⅶ-1層は水田土壌化しており、水田耕作土と判断した。帯状部分では、Ⅶ-1層上面に無数に確認できる足跡と考えられる窪みが希薄であり、畦畔と考えた。平面精査により、微高地裾部に平行、もしくは直交する畦畔を複数検出した。

水田域(広がり)と傾斜：水田域は前述の微高地裾部に広がる。微高地裾部は、本来は検出した範囲より更に東側に広がっていたと推測するが、西側は調査区外となり不明である。地形は微高地から水田域に向かって緩やかに傾斜し、水田層上面は3b・4a区西側から4d区東に向かって傾斜する。

構造：畦畔の構造 小畦畔のみの検出である。等高線に沿う微高地の裾部に平行か、直交方向に構築される。水田区画の方法 微高地裾部を水田区画の基準とし、微高地裾部と平行方向または直交方向に延びる畦畔により、水田区画が形成される。平行方向の畦畔を構築して区画を形成した後、直行方向に畦畔を構築して区画を仕切ったと考える。水田の枚数・面積 水田の枚数は合計46枚。規模と形状のわかる区画が10枚、畦畔が四周しないが規模と形状を推定できる区画が36枚である。水田一筆の面積は5～25m<sup>2</sup>である。水路形態 水路を確認していない。水田域内の高所に水路を設置し、畔越しに灌漑を行ったものと推察する。水田土壌 Ⅶ-1層はグライ化した粘土に近いシルト層で、酸化鉄が斑紋状に集積する。泥炭を含

み、やや暗い。Ⅷ-1層上面と下面には細かな起伏が見られる。Ⅷ-1層上面には足跡と思われる窪みが分布するが、下面に窪みは見られない。Ⅷ-1層の厚さは10~20cm、3b・4a区中央部から西側が厚い傾向がある。調査区北西側の微高地から水田域にかけての部分がやや厚い。

**遺物**：弥生時代中期後半から後期にかけての土器片が、水田検出面から少量出土。

**科学分析**：プラント・オパール分析（2017年度）によると、北壁の土層断面のⅧ-1層でイネのプラント・オパールが畦畔部分6,700個/g、田面部分4,300個/g検出され、水田耕作土の可能性が高いと考える。Ⅷ-1層の畦畔直下にⅧ-2層の畦畔状の高まりを確認し、Ⅷ-2層からも5,900個/g検出されていることから、Ⅷ-2層はⅧ-1層に先行した水田層と考える。

**水田の時期**：出土土器と検出層位から、弥生時代中期後半と判断した。

#### 5b区 〔遺構：図版1・3・PL1、土器：図版84・PL27〕

第2調査面では、調査区中央から西側にかけてⅦ層が薄く堆積していた。調査区西側ではかく乱が激しく、北壁付近で大畦畔SC059を検出したのみである。東側では西側にはない腐植土層（12b層）が堆積し、甕（18・19）が出土した。その直上の黒褐色土層（12a層）では、弥生時代中期後半の土器片がまとまって出土したSQ001を検出した。水田層を被覆するⅦ層が黒褐色土層上にも部分的に堆積することから、時期差はあまりないものと考えられる。調査時には東側部分を3b・4a区で検出した微高地西端部にあたると考えたが、東壁で大畦畔状の高まりが確認できたことから、この一帯まで水田域が広がっていたものと推察した。整理作業時に腐植土層・泥炭層の堆積のない帯状部分を大畦畔と判断し、SC113として登録を行った。また、SC059と並行する腐植土層・泥炭層の堆積のない帯状部分についても同様に、SC114として登録を行った。この5b区では下層Ⅷ-2層でも畦畔状の高まりが確認されており、SQ001を含む土層（12a層）まで、弥生中期後半の中で2~3期の改変の可能性が推察される。

#### SC059 〔遺構：図版1・3・PL1〕

**位置**：5b区ⅧT21グリッド。 **検出**：Ⅶ層上面。調査区北壁の土層断面観察で、Ⅶ層が堆積しないⅧ-1層の高まりを確認した。5b区西側はかく乱が著しく、調査区北側で、高まりがわずかに残る範囲を検出した。 **重複**：なし。 **規模**：方位N-20°-E。長さ2.0m、上端幅約3.0m、下端幅3.5m、調査区北壁で高さ20~25cm。 **構造**：連続耕作により、畦畔基部のみ遺存。規模から大畦畔と考える。 **科学分析**：プラント・オパール分析（2018年度）では、SC059上部・中部・下部でイネのプラント・オパールが10,300個・5,600個・8,800個/g、水田面で7,100・4,400個/gと非常に高い値で検出され、水田耕作が行われていたと考える。畦畔で特に値が高いことから、稲藁が構築時の補強材として使用されたか、維持管理用として畦畔上部に敷設された可能性が考えられる。 **遺物**：なし。 **時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

#### SC113 〔遺構：図版1・3〕

**位置**：5b区ⅧY12・13グリッド。 **検出**：Ⅶ層上面。腐植土（12b層）中で、高まりのないⅦ層の帯状部分を検出し、延長線上にあたる調査区東壁断面では高まりを確認した。整理作業の段階で調査記録の照合作業から判断し、SC登録を行った。 **重複**：なし。 **規模**：方位N-27°-W。長さ6.8m、幅3.8m、調査区東壁で高さ12cm。 **構造**：西端はSC114に接続。規模から大畦畔と考える。 **科学分析**：調査区東壁でのプラント・オパール分析（2018年度）では、イネのプラント・オパールが1,900個/gとやや低い。水田耕作は周辺で行われていただけであったか、行われていたとしても持続的ではなかった可能性があ

る。遺物：なし。時期：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

#### SC114 [遺構：図版1・3]

位置：5b区ⅦY02・03・07・12・16・17・21・22グリッド。検出：Ⅶ層上面。Ⅶ層、腐植土(12b層)で、高まりのほとんどないⅦ層の帯状部分を検出した。整理作業の段階で調査記録の照合作業から判断し、SC登録を行った。重複：なし。規模：方位N-16°-E。長さ37.4m、幅60m。構造：中央部の東側はSC113に接続。規模から大畦畔と考える。SC059と2条が並走していた可能性がある。遺物：なし。時期：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

### 7a区

第2調査面をⅦ層が被覆しており、全域から小畦畔で区画された水田跡を検出した。調査時にはSL015として遺物を取り上げたが、SLとは本来はSC等によって区画された面を示すものであり、既に平安時代の水田跡ではその定義通りにSLを登録していた。そのため、SL名は水田跡全体を示す遺構番号として相応しくないと判断し、整理作業時に「第3水田」へ登録変更を行った。この他の遺構は検出されていない。

#### 第3水田 [遺構：図版1・3・7・8・PL1、土器：図版84]

位置：7a区ⅦR14・15・18・19・20・23・24・25、ⅦS11・12・13・16・17・18・21・22・23、ⅦW03・04・05・09・10・14・15、ⅦX01・02・03・06・07グリッド。

水田被覆層と水田面の状況：Ⅶ層上面に厚さ5～10cmのⅦ層が堆積する。Ⅶ層は標高の低い調査区南東で最も泥炭化し、調査区西側ではシルト化してⅦ層との区別が困難であった。Ⅶ層上面には細かな起伏はあるが、足跡のような窪みは確認できなかった。

検出：Ⅶ層上面。Ⅶ層中に、調査区南東隅から西側に向かうⅦ層の帯状部分を確認した。Ⅶ層を掘り下げてⅦ層が高まる畦畔を検出したが、高まりはわずかなため、田面との境界が不明瞭な部分もあった。帯状部分の先行トレンチでの横断面確認により、Ⅶ層が明瞭に高まることを確認した。田面については、Ⅶ層の高まりをⅦ層が被覆し、畦畔が接続して一定範囲を囲み、水田一筆を形成することを確認した。

水田域(広がり・傾斜)：水田層分布範囲と畦畔の分布から、調査区全域が水田域と考える。調査区内の地形は北西から南東に向かって傾斜する。

構造：畦畔の構造 小畦畔のみの検出である。水田区画の方法 調査区内の地形は北西から南東に向かって傾斜し、南北畦畔は傾斜にほぼ平行に、東西畦畔は傾斜に直交方向に延びる。水田一筆の形状は基本的には長方形で、細長いものもある。これは区画途中である可能性もある。遺存状況が悪く、畦畔の構築順序は不明である。水田の枚数と面積 合計32枚確認。規模が確認できた区画が1枚、畦畔が四周しないが水田区画の存在が推定できた区画が31枚である。水田一筆の面積は、水田規模が確認できた区画が約28㎡、推定した区画が約21～31.5㎡である。水田形態 水路は確認していない。3b・4a区同様に畦越しに灌漑を行ったと想定すると、水田面の傾斜から、北西から南東に方向に行ったものとする。微高地東側縁辺部の3b・4a区とは異なる方向に、畦越し灌漑されていた可能性がある。水田土壌 暗灰色粘土でグライ化し、粘りと締りが強い。酸化鉄が斑状に集積する。厚さ6～15cm、調査区東側で厚く西側で薄い。

遺物：検出面から、弥生時代中期後半の甕(14)が出土。

科学分析：調査区北壁の土層断面Ⅶ層でのプラント・オパール分析(2018年度)では、イネのプラント・オパールが7,700個/gと高い値で検出され、水田土壌化していることから水田耕作土と考える。

水田の時期：出土土器と検出層位から、弥生時代中期後半と判断した。

### 7b・8区

第2調査面の調査区中央から東側部分では、厚さ5～10cmのⅥ層が部分的に水田層を被覆する。一方、西側では極めて薄く、確認できない地点もあった。また、Ⅵ層の土質は調査区東側では泥炭化し、西側ではシルト質が強い。調査区東側では高まりが遺存し芯材を埋設した畦畔基部8条、西側では芯材のみ確認できた1条を検出した。地形は北東から南東へ傾斜する。調査区北壁の土層断面でのプラント・オパール分析（2018年度）では、イネのプラント・オパールがⅥ層で5,100個/gと高い値で検出され、水田耕作土層の可能性が高い。

調査区東側の畦畔の時期は、調査時には全て同一時期と捉えたが、整理作業時における土層対比や出土土器の検討から、弥生時代中期後半と弥生時代後期とに分かれる可能性がでてきた。Ⅵ層の堆積があるSC063からは弥生時代中期前半の土器が芯材付近から出土したのに対し、Ⅶ層の堆積が無く畦畔盛土（灰色粘土）を確認したSC061からは弥生時代後期の土器が出土した。SC065からも弥生後期の土器が出土し、SC069でもⅦ層の堆積が無くSC061同様の畦畔盛土を確認したことから、SC061・065・069の3条の畦畔は弥生時代後期の可能性が高いと判断した。また、これらの3条の畦畔と接続するSC062も弥生時代後期の可能性が高いと考えた。

**SC061** 〔遺構：図版1・3・7・8・9・PL2、土器：図版85、木製品：図版103・PL40〕

位置：7b・8区ⅥV17・18・23・24グリッド。 検出：Ⅵ層上面。Ⅵ層中に、酸化鉄が集積する帯状の高まりを確認し、帯状部分中央部では主軸方向に延びる芯材が出土した。北壁土層断面でも高まりを確認したため、畦畔と判断した。 重複：なし。 規模：方位N-42°-W。長さ18.5m、幅1.1～2.4m、検出面で高さ0.10m、調査区北壁で高さ15cm。 構造：南側はSC062・069と接続し、北側は調査区外へ延びる。SC066、SC069の交差地点の幅が広い。断面にはⅥ層の被覆がみられず、Ⅶ層上に畦畔盛土と考えられる灰色粘土（図版9-1層）を確認した。等高線に沿う方向に構築され、規模と芯材の埋設から大畦畔と考える。 芯材出土状況：盛土から木材が横たわった状態（以下「横木」という。）で多数出土した。ほぼ自然木である。SC066脇では、杭（8・9ほか）を打設して横木が固定される。SC062・069接続部分にも横木が杭（6・7ほか）で固定される。 遺物：弥生時代後期の甕（25）・壺（24）が芯材とともに出土。 時期：検出層位と出土土器から、弥生時代後期と判断した。

**SC062** 〔遺構：図版1・3・7・8・9・PL2、木製品：図版103・104・PL40・41〕

位置：7b・8区ⅥV24・25グリッド。 検出：Ⅵ層上面。Ⅶ層中にⅥ層が帯状に高まり、帯状部分中央部で主軸方向に延びる木材を確認。SC061と接続し、芯材を埋設した畦畔と判断した。 重複：なし。 規模：方位N-35°-E。長さ7.3m、幅1.1～1.5m、検出面から高さ5cm。 構造：幅は北側がやや狭く、SC061・069との交差地点で幅が広がる。南西側はSC061・069、北東側はSC065と接続、SC061の直交方向に延びる。等高線の直交方向に構築され、規模から大畦畔と考える。 芯材出土状況：埋設頻度は比較的少ない。南西側のSC061・069との接続地点、中央部で芯材が埋設され、打設した杭（11～14ほか）で固定される。 遺物：芯材の他はなし。 時期：接続するSC061・065・069と同じく、弥生時代後期の可能性が高い。

**SC063** [遺構：図版1・3・7・8・10・PL2、土器：図版84・PL27、木製品：図版103・104・PL41]

位置：7b・8区ⅦV14・15・20グリッド。 検出：Ⅶ層上面。Ⅶ層中に酸化鉄集積がやや多いⅦ層が帯状に高まることを確認した。高まりの直上にはⅦ層が堆積せず、両裾に堆積する。帯状部分は、薄いⅦ層から露出したⅦ層上面の田面と同様の土質で、SC061と平行し、畦畔と考えた。重複：なし。規模：方位N-39°-W。長さ15m、幅1.0~1.5m、SC064との接続部分で高さ5cm、調査区東壁で高さ10cm。構造：北側がSC064、南側はSC068と接続、SC064との接続部分の幅が広い。等高線に沿う方向に構築され、規模と芯材の埋設から大畦畔と考える。芯材出土状況：全域にわたり埋設され、SC064との接続地点周辺は非常に密に埋設されている。2mを超える横木が重ねて設置され、杭(15・16ほか)で固定されている。遺物：弥生時代中期後半の土器の甕(6)、壺(4・5)が、芯材周辺から出土。芯材とともに埋設されたと考える。SC064との接続部付近から、甕(7~9)が出土。時期：出土土器から弥生時代中期後半と判断した。

**SC064** [遺構：図版1・3・7・8・10・PL2、土器：図版84]

位置：7b・8区ⅦV09・10グリッド。 検出：Ⅶ層上面。Ⅶ層中にⅦ層が帯状に高まり、酸化鉄の集積がやや多い状況を確認した。SC063と接続するため、畦畔と考えた。重複：なし。規模：方位N-35°-E。長さ5.8m、幅1.1~1.6m、検出面から高さ5cm。構造：南西側がSC063と接続、SC063との接続部分の幅が広い。等高線に直交する方向に構築され、規模から大畦畔と考える。芯材出土状況：SC063との接続部分で芯材が出土。埋設方向からSC063に伴うと考える。遺物：SC063・064交差点付近から、弥生時代中期後半の甕(7~9)・壺・高坏または鉢の破片が出土。時期：出土土器と検出層位から、弥生時代中期後半と判断した。

**SC065** [遺構：図版1・3・7・8・9・PL2、土器：図版85、木製品：図版104・PL41]

位置：7b・8区ⅦV20・25グリッド。 検出：Ⅶ層上面。Ⅶ層中にⅦ層が帯状に高まり、酸化鉄の集積がやや多い状況を確認した。重複：なし。規模：方位N-80°-W。長さ2.0m、幅1.9~2.5m、検出面から高さ5cm、調査区東壁で高さ10cm。構造：北西側がSC062と接続し、東側は調査区外へ延びる。等高線に沿う方向に構築され、規模から大畦畔と考える。芯材出土状況：SC062との接続部分付近で、横木が杭(14・17ほか)に固定される。遺物：弥生時代後期の甕(26)が出土。時期：出土土器から弥生時代後期と判断した。

**SC066** [遺構：図版1・3・7・8・PL2]

位置：7b・8区ⅦV13・14・18グリッド。 検出：Ⅶ層上面。部分的に白色シルトが堆積する中、Ⅶ層の高まりが帯状に延びるのを確認した。調査区北壁では高まり直上にⅦ層が堆積しており、帯状部分を畦畔と考えた。重複：(新)SC061。規模：方位はN-20°-E。長さ8.1m、幅0.5~0.7m、調査区北壁で高さ10cm。構造：やや蛇行し、北側がやや幅が広い。等高線に直交する方向に構築され、規模から大畦畔と考える。遺物：なし。時期：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

**SC067** [遺構：図版1・3・7・8、木製品：図版104・PL41]

位置：7b・8区ⅩⅢA20グリッド。 検出：Ⅶ層上面。Ⅶ層中に、北西-南東方向に延びる本杭と横木を確認した。南壁の土層断面ではⅦ層が高まり、高まりの両端にⅦ層の堆積を確認した。平面精査では畦畔の高まりやプランは確認できなかった。重複：なし。規模：芯材の方位N-48°-W。芯材の検出

範囲長さ3.0m、幅0.6m。調査区南壁で高さ10cm。構造：詳細は不明。南側は調査区外へ延びる。等高線に沿う方向に構築されたと推察する。芯材出土状況：自然木の横木と杭（18・19）が出土。遺物：芯材の他はなし。時期：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

**SC068** [遺構：図版1・3・7・8・10・PL2]

位置：7b・8区ⅦV20グリッド。検出：Ⅶ層上面。Ⅶ層中に、酸化鉄が集積するⅦ層の帯状の高まりを確認した。重複：なし。規模：方位N-20°-E。長さ4.6m、幅0.5~0.8m、検出面から高さ5cm。構造：やや蛇行する。北東側はSC063と接続。等高線に直交する方向に構築され、規模から大畦畔と考える。遺物：なし。時期：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

**SC069** [遺構：図版1・3・7・8・9・PL2、木製品：図版103・PLA1]

位置：7b・8区ⅦV24、XⅢB04グリッド。検出：Ⅶ層上面。酸化鉄が集積する帯状のわずかな高まりを確認した。SC061と接続し、芯材と考えられる木材が出土したことから畦畔と判断した。重複：なし。規模：方位N-10°-E。長さ4.1m、幅2.5~2.7m。構造：平面形はやや弓状。北東側はSC061と接続、南側は調査区外へ延びる。断面にはⅦ層のみならず、畦畔盛土と考えられる灰色粘土を確認した。等高線に直交する方向に構築され、規模から大畦畔と考える。芯材出土状況：SC061との接続地点で芯材が出土。横木が杭（10ほか）で固定される。遺物：芯材の他はなし。時期：Ⅶ層が被覆せず、接続するSC061同様の畦畔盛土が確認できたことから、SC061と同時期の弥生時代後期と判断した。

**9区**

北壁の土層断面ではⅦ層の堆積はなく、連続耕作により、水田面は遺存しないものと推察される。第2調査面での古墳時代の畦畔SC106の調査時に、下層から出土した芯材と土器について検討し、整理作業時に畦畔SC115として登録を行った。Ⅶ-2層に帰属する畦畔としては、調査を行った唯一の畦畔である。

**SC115** [遺構：図版1・3・11、土器：図版84・PL27]

位置：9区ⅧA21・22グリッド。検出：V層下層での古墳時代の畦畔SC106の出土芯材調査時に、下層Ⅶ-2層（8b層）から芯材と土器片が出土し、整理作業時にSC115として登録した。延長線上にあたる調査区北壁の土層断面では、連続耕作によりⅦ-2層の高まりが確認できないため、本跡の正確な範囲は不明である。重複：（新）SC106。規模：芯材が出土した方位N-50°-W。長軸5.7m、短軸1.6m。構造：古墳時代のSC106下のため掘下げが困難であり、詳細は不明。北壁・南壁では、SC115の帰属するⅦ-2層直上層であるⅦ-1層で、畦畔状の高まりを確認している。遺物：弥生時代中期後半の甕（13）が出土。科学分析：調査区北壁の土層断面のプラント・オパール分析（2019年度）では、イネのプラント・オパールがⅦ-1層（8a層）で9,800個/g、SC115の帰属するⅦ-2層（8b層）で6,900個/gと共に高い値で検出され、水田耕作土と考えられる。時期：出土土器と検出層位から、弥生時代中期後半と判断した。

**10区~11区**

Ⅶ層は被覆しない。連続耕作により水田面は遺存しておらず、芯材を埋設した畦畔基部を3条検出したのみである。Ⅳ層（奈良・平安時代の耕土層）上面での調査時に、下層のⅦ層から芯材が露出したが、Ⅳ層は粘土に近いシルトで掘下げが困難であり、畦畔の平面プランの正確な把握には至らなかった。畦畔の現

模や芯材の埋設状況から、10区 SC105・11a区 SC089・11c区 SC101の3条は大畦畔と考える。方位も同様に正方位から斜行しており、Ⅷ層には同方向を基準とした水田大区画が存在したものと推察する。

**SC089** [遺構：図版1・4・12・PL2、土器：図版84・PL27]

位置：11a区 XⅡR14・15・20、XⅡS16・17グリッド。 検出：11b区調査時に調査区北東隅を掘削した際、北壁でⅧ層から木材が露出し、隣接する11a区へ延びることを確認。11a区調査時に調査区南東隅で木材が南東―北西方向に出土した。調査区西壁の土層断面でⅧ層の高まりを確認した。規模：方位N-55°-W、上端幅0.4~0.8m、下端幅1.1~1.3m、検出面から高さ10cm。構造：わずかな高まりを確認したが、プランの詳細は不明である。規模と芯材の埋設から、大畦畔と考える。芯材出土状況：主軸方向の芯材を3か所で確認した。中央部では自然木、建築部材と考えられる横木が杭で固定される。東側では横木を埋設、南東隅では長い木材の周囲に細かい自然木を埋設し、横木の外側に杭が設置される。芯材の一部はⅧ層に入り込む。遺物：壺形鉢(10)、有孔鉢(11)が出土。科学分析：隣接する11b区北壁のプラント・オパール分析(2018年度)では、Ⅷ層はイネのプラント・オパールが6,600個/g検出され、水田耕作土層と考える。放射性炭素年代測定(2019年度)では、3点の芯材の<sup>14</sup>C年代は1,810±20年BP、1,780±20年BP、1,760±20年BPで、弥生時代後期〜古墳時代前期の年代を示した。時期：芯材の年代測定では弥生時代後期以降の年代を示したが、検出土層と出土土器から、SC101・105同様に弥生時代中期前半の可能性が高いと判断した。

**SC101** [遺構：図版1・4・11・PL2、土器：図版84、石器：図版95・PL35、木製品：図版103・PL40]

位置：11c区 XⅡV25、B05、V001グリッド。 検出：平安時代の水田跡の調査時に、Ⅳ層下層のⅧ層から木材が露出し、Ⅷ層のわずかな高まりを確認した。先行トレンチの土層断面観察により、大畦畔と考えられる規模の高まりを確認、出土木材は大畦畔に埋設した芯材と判断した。重複：なし。規模：方位N-45°-W。長さ9.0m、上端幅0.4~0.6m、下端幅0.9~1.2m、検出面から高さ10cm。構造：Ⅳ層からの掘り下げと精査が困難で、平面プランの確認ができなかったが、規模と芯材の埋設から、大畦畔と考える。芯材出土状況：主軸方向に長さ1~3mの横木を重ね、杭が打設される。横木には自然木の他、建築部材(5)がある。芯材の多くはⅧ層に入り込む。遺物：横木周辺から弥生時代中期後半の土器の甕(12)、南側から打製石斧(4)が出土。科学分析：11c区北壁西側のプラント・オパール分析(2019年度)では、イネのプラント・オパールがⅧ層で10,300個/gという非常に高い数値で検出され、水田耕作土層と考える。放射性炭素年代(2019年度)では、3点の芯材の<sup>14</sup>C年代は2,280±24年BP、2,210±20年BP、2,150±20年BPで、全て弥生時代中期の年代を示した。弥生時代中期に採擇された木材を芯材に用いたと考える。時期：検出土層と芯材の年代測定値から、弥生時代中期後半と判断した。

**SC105** [遺構：図版1・4・11・PL2、石器：図版97・98・PL36・37]

位置：10区 XⅡR15・20、S16・17グリッド。 検出：Ⅴ層下層から芯材が出土し、Ⅷ層のわずかな高まりを検出した。重複：なし。規模：方位N-40°-W。上端幅0.7m、下端幅1.2~1.7m、検出面から高さ10cm。構造：Ⅷ層直上のⅤ層シルトは粘土に近く掘り下げが困難で、平面プランの確認ができなかった。規模と芯材の埋設から、大畦畔と考える。芯材出土状況：自然木の横木等が主軸方向に散在的に埋設される。芯材の多くはⅧ層に入り込む。遺物：盛土内部から、時期不明の甕と壺の破片が出土。南東隅芯材近くから砥石(28)、西側から凹石(23)が出土。科学分析：放射性炭素年代測定(2019年度)では、3点の芯材の<sup>14</sup>C年代はそれぞれ2,470±20年BP、2,190±20年BP、2,150±20年BPで、全

て弥生時代中期の年代を示した。 **時期**：検出土層と芯材の年代測定値から、弥生時代中期後半と判断した。

### (3) 溝跡

#### SD112 [遺構：図版1・2・5]

**位置**：3b・4a区VIF24グリッド。 **検出**：Ⅴ層上面。第2水田北側で細長い帯状の落ち込みを検出し、先行トレンチにより断面の掘り込みを確認した。 **重複**：なし。 **埋土**：単層。褐灰色シルト質粘土。砂、炭化物が混入する。 **規模**：方位N-32°-W。長さ3.99m、幅0.31m、深さ0.20m。 **構造**：北端は調査区外へ延びる。断面は緩やかな楕円状。 **遺物**：なし。 **時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

#### SD113 [遺構：図版1・2・5]

**位置**：4d区ⅤK23グリッド。 **検出**：Ⅴ層上面。 **重複**：なし。 **埋土**：上層は灰黄褐シルト、中層は炭化物片が多量に混入する黒褐色シルト質粘土、下層は黒色泥炭層で未分解の植物片が水平に堆積する。こうした状態から溝跡の底面が湿地化する時期があったことが推察される。 **規模**：方位N-2°-W。長さ2.72m、幅1.97m、深さ0.18m。 **構造**：ほぼ直線で、南北両端が調査区外に延びる。立ち上がりは緩やかに傾斜し、底面はほぼ平坦で細かな凹凸がある。東側はテラス状の平坦地となり、幅が広くなる。SD113東側には足跡等の窪みが分布し、西側には分布しない。検出面は西から東に傾斜し、SD113は地形変換点に位置する。調査区西側の微高地と東側の水田域の境界に構築された溝跡と考えられる。 **遺物**：なし。 **時期**：検出層位から弥生時代中期後半と判断した。

#### SD187 [遺構：図版1・3・PL2、土器：図版85・PL27]

**位置**：9区ⅤE25、ⅤJ05・09・10・13・14、XⅢA21、XⅢF01グリッド。 **検出**：V層下面。 **重複**：(新)SK905。 **埋土**：単層。 **規模**：方位N-43°-E、南西から北東に傾斜。長さ25.62m、幅1.02m、深さ0.11m。 **構造**：緩く湾曲し、両端とも調査区外に延びる。断面は浅くならかな皿状。 **遺物**：弥生時代後期の甕(23)、その他土器片、木材小片がわずかに出土。 **時期**：出土土器から弥生時代後期と考える。

### (4) 遺物集中

#### SQ001 [遺構：図版1・3・PL2、土器：図版84・PL27]

**位置**：ⅤY13グリッド。 **検出**：V層下面調査時に、東西方向にトレンチを掘削した際に、土器がまともに出土した。トレンチを拡張して、黒褐色土(12a層)を精査して遺物を検出した。土器周辺には、焼土・炭化物・硬化面等は確認されなかった。 **重複**：なし。 **規模**：土器の出土範囲は南北1.7m、東西3.2m。 **構造**：掘り込み等は伴わない。Ⅴ層に堆積する高植土層直上層の黒褐色土層(12a層)に包含される土器と考える。Ⅴ層、黒褐色土層とも、Ⅴ層で被覆されていることから、埋没時期は同じ頃と考えられる。 **遺物**：弥生時代中期後半の甕(1・2・3)が黒褐色土(12a層)中から出土。南西側では正位でつぶれた状態で出土、南東側のものは摩滅が激しかった。 **時期**：出土土器から弥生時代中期後半と判断した。



## 2 古墳時代の遺構

### (1) 概要 [第11表・図版13]

古墳時代の遺構の検出面は、基本土層V層-2~4層【第3検出面】であり、遺構の分布は1区から4b区までの範囲と6区、9区である。遺構の種類と検出数は、水田跡（畦畔26条）・溝跡3条・土坑15基・遺物集中1基である。以下の第11表に、地区別検出数を示した。

遺構の時期は古墳時代前期と判断した。調査区北壁の土層断面観察からは、V層（古墳時代の耕土層）が1区~11区の広い範囲で確認できたが、連続耕作により遺構の遺存状態は悪く、水田跡に伴うと考えられる畦畔等を断片的に検出したのみである。東側の3b・4a区以東ではV層が3~4枚に分層でき、古墳時代の畦畔は主にV-4層上面で検出した。一方、西側の7b・8区~9区では連続耕作によりV-2層以下の分層できず、畦畔はV-2層上面で検出した。7b・8区で弥生時代後期の水田跡に伴う畦畔がⅧ層上層で検出されたことから、V層最下層は弥生時代後期の水田層も含むと考えられる。

図版13に示したように、1区から4b区までの範囲で、V-3層（古墳時代の洪水砂層）が部分的に堆積する。堆積が比較的厚かった3b・4a区で大畦畔や小畦畔の一部を検出し、畦畔脇からは土器がまとめて出土した。5b区では土器片が多量に出土したものの、遺構の確認はできなかった。9区で杭列と芯材を伴う並走する2条の大畦畔基部SC106・107を検出した。このSC106と重複する遺物集中SX002からは、小型丸底土器や高坏といった土師器、玉類等の祭祀に関わると考えられる遺物が出土した。

### (2) 水田跡

#### 3b・4a区

V-3層の堆積は東側では10cm程度で、西側では希薄で堆積がない部分もあった。連続耕作により水田面や畦畔の高まりは遺存しない。洪水砂を埋土とする窪みが面的に分布する中で、窪みの分布がなく酸化鉄の集積する大畦畔2条を検出した。その他に小畦畔9条を断片的に検出したが、これらの畦畔が全て同時期に存在したかは不明である。このうち大畦畔については、以下に個別に記述する。

#### SC038 [遺構：図版13・15・17・PL3、土器：図版85・PL28]

位置：3b・4a区ⅧG06・07、12・13・18・19・20グリッド。 検出：V-4層上面。V-3層で薄く被覆されていた。この砂層を埋土とする窪みが無数に分布する中、窪みが全く無いV-4層の帯状部分を確認し、調査区北壁の土層断面観察でもわずかな高まりを確認した。北東側中央部に酸化鉄が多く集積する。また、V-4層下面の調査面で本跡とほぼ同じ位置に酸化鉄集積が密集する帯状部分を確認したが、本跡の酸化鉄が下位まで浸透したものと考え、同一の遺構と判断した。畦畔中央部に伴う水路下部に集積した酸化鉄を検出した可能性を考えた。 重複：なし。 規模：方位N-61°-W。長さ35.6m、幅2.0~2.4m。 構造：南東隅でSC032とほぼ直交方向に接続し、水田区画を形成していた可能性がある。 遺物：南東側の畦畔脇から、土師器甕(39~41)がまとめて出土。 時期：出土土器から古墳時代前期と判断した。

第11表 古墳時代遺構の地区別検出数

遺構名	地区												合計	
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11		12
水田跡 畦畔 (SC)	4	1	7	11	1					2				26条
溝跡 (SD)	1	1			1									3条
土坑 (SK)				14			1							15基
遺物集中										1				1基

**SC043** [遺構：図版13・15・17・PL3]

位置：ⅧF18・19・22・23、K02・03・07・08・11・12グリッド。 検出：V-4層上面。酸化鉄集積が帯状に集積し、わずかなV-4層の高まりの両側にV-3層が薄く堆積する。 重複：(新)SD107・SK549・SK550。 規模：方位N-30°-W。長さ39.7m、幅2.5~2.8m。 構造：北側でSC042に接続する。SC038とはほぼ直交方向にのび、SC032・SC038とともに大区画が形成された可能性がある。 出土遺物：畦畔の検出時に瓦片が出土。 時期：検出層位と遺構配置から、古墳時代前期と判断した。

**9区**

第1調査面のV層上面で杭頭を数本検出し、第2調査面のV層中(7c層上面)では4条の杭列を検出した。杭の総数は120本を超える。発掘段階では、第2調査面出土の杭は、第1調査面検出の畦畔番号で取り上げている。整理段階で、杭列は上層の畦畔には伴わず、V層に存在した古墳時代の畦畔に伴うと判断した。そのため、遺物が出土した古墳時代の畦畔を調査時段階のSC106・107とし、遺物の出土のない上層の古代の畦畔の遺構番号をSC119・120へ変更した。

**SC106** [遺構：図版13・16・18・19・PL3、木製品：図版106~110・112~114・PL43~50]

位置：9区XⅢA17・21・22・23グリッド。 検出：V層上面の古代の畦畔SC119調査時に、V層上層で杭頭を数本検出した。掘り下げを行い、Ⅷ層上面で杭列を2条検出した。杭頭の多くは、V層下層・Ⅷ層中で検出した。高まりの確認はできなかったが、芯材が出土し、杭列を伴う畦畔と判断した。整理作業の段階で、上層で検出したSC119(調査時にはSC106)と分離した。 重複：(新)SX002。 杭列：2条の杭列の間隔は約2m。丸木材・割材が使用される。東側杭列は20本程度の疎かな杭列である(26・27・37・52・55・65・70ほか)。方位N-61°-W。長さ20.0m、杭の間隔は1m~4m。西側杭列は60本程度の非常に密な杭列である(29・36・45・53・64・68・163・166ほか)。方位N-58°-W。長さ19.8m、杭の間隔は0.5~1mで、SX002北側では4m内に20本以上の杭が密集する(31・42・47・54・58・67・71ほか)。杭列の間にも、SX002付近で10本程度検出した。 構造：SC107西側に約6mの間隔で並走する。規模から大畦畔基部と考える。大畦畔2条の間に水路が敷設されていた可能性を考えたが、溝跡は確認できなかった。 芯材出土状況：主にV層下層から出土し、一部はⅧ層中に入る。ほぼ自然木で、一部にエブリ(PL-159)・建築部材等が出土した。南側に多く埋設されていた。 遺物：芯材の他はなし。 時期：検出土層と遺構の重複関係から、古墳時代前期と判断した。

**SC107** [遺構：図版13・16・18・19・PL3、木製品：図版106~112・PL43~47・50]

位置：9区XⅢA17・18・23・24グリッド。 検出：V層土中の古代の畦畔SC120調査時に、V層下層で杭頭を数本検出、掘り下げを行い、Ⅷ層上面で杭列を2条検出した。杭頭の多くは、V層下層・Ⅷ-1層中で検出した。東側の1条は短く、杭の本数も少ない。盛土の確認はできなかったが、芯材が出土し、杭列を伴う畦畔と判断した。整理作業の段階で、上層で検出したSC120(調査時にはSC107)と分離した。 重複：なし。 杭列：2条の杭列の間隔は約2m。丸木材・割材が使用される。東側杭列は10本程度のやや疎な杭列である(57・60・62・63・164ほか)。方位N-65°-W、長さ7.0m。杭の間隔は1~2m。西側杭列は30本程度のやや疎な杭列である(28・30・32・34・35・38~41・43・44・46・48~51・61ほか)。方位N-65°-W、長さ19.4m。杭の間隔は1~2mで、数本まとまる部分もある。 構造：SC106東側に約6mの間隔で並走する。規模から大畦畔基部と考える。畦畔2条の間に水路が敷設されていた可能性を

考えたが、溝跡は確認できなかった。 芯材出土状況：木材の小片が少量出土。 遺物：芯材の他はなし。 時期：検出土層から古墳時代前期と判断した。

### (3) 土坑 [付表5・遺構：図版13・15・17]

古墳時代の可能性が考えられる土坑は、3b・4a区の第3・第4調査面で14基、6区第2調査面で1基検出した。3b・4a区の土坑の一部は第4調査面で検出したが、出土遺物から古墳時代の遺構と判断し、本来は第3調査面に帰属するものと判断した。第4節の掲載遺物を出土した土坑は、巻末の土坑一覧表に記した。

### (4) 溝跡 [付表6]

#### SD073 [遺構：図版13・14]

位置：2区ⅢD14。 検出：V層下面。帯状の褐灰色土を検出、先行トレンチにより落ち込みを確認した。 重複：なし。 埋土：単層。灰黄褐色粘土層、砂混じり。 規模：方位N-21°-E。長さ4.51m、幅0.64m、深さ0.06m。 構造：北側は調査区外まで延びる。断面形は皿状。 遺物：なし。 時期：出土層位から、古墳時代前期と判断した。

#### SD100 [遺構：図版13・14・PL3、土器：図版87図・PL29、玉類：図版94・PL34]

位置：1区ⅢV25・ⅢW21。 検出：V-3層下面。洪水砂の堆積の中、先行トレンチでの土層断面観察により砂質土の帯状の堆積を確認し、本跡を検出した。 重複：(新)SA004。 埋土：上層は洪水砂が堆積。中層は黒褐色粘質土、下層は灰黄褐色シルト、最下層は黒褐色粘質土。 規模：主軸方位N-45°-W。南東から北西へ傾斜。長さ7.80m、幅約3.18m、深さ約0.39cm。 構造：人為的な掘削ではなく、緩やかに傾斜した自然流路に洪水砂が堆積したものと推察する。出土土器が他地区と比べて年代的に新しい。本跡は微高地端部に位置し、V層の堆積が薄いため、本来の構築面は検出土層よりも上層であった可能性が高い。 遺物：土師器の坏とみられる土器(90)・土師器高坏(92)・同小型壺(93)・同壺(94)と、黒色土器坏(91)、須恵器甕(95)、管玉(1)、勾玉(2)が出土。 時期：出土土器から古墳時代前期末と判断した。

### (5) 遺物集中

#### SX002 [遺構：図版13・16・20・PL3、土器：図版86・PL28、土製品・玉類：図版94・PL34、石器：図版95・PL35、木製品：図版105・PL42]

位置：9区XⅢA22・23グリッド。 検出：Ⅲ層上面。SC106に伴う芯材・杭列の検出時に、灰色シルトの落ち込みを2か所確認し、北側をSX002a、南側をSX002bとした。 重複：(旧)SC106。 埋土：a 複層。上層はV層下層(7c層)基調のシルト、Ⅲ-1層ブロックと被覆泥炭層が混じる。中層はシルト層で砂が混じる。下層は黒褐色シルト層で砂が多く混じる。b 単層。a上層に同じ。 規模：a 主軸方位N-35°-E。長軸5.0m、短軸3.4m、深さ0.22m。b 残存長で長軸4.8m、短軸2.5m、深さ0.98m。 構造：a 細かく屈曲する不整なL字形。側面、底面には細かな凹凸がある。底部中央へ緩やかに傾斜、底部中央が窪む。b 細かく屈曲する方形状。下端から中央部へ緩やかに傾斜。a・bとも人為的な掘り込みの可能性が高く、埋土は共通性があり、本来は一連の遺構であったと考える。底面精査時に、SC106に伴う杭列(25・27・55・70ほか)を検出した。本跡構築時に杭の先端を削平したものと考える。 遺物：a 木製鉄(20・21)、棒状木製品(22)、建築部材(23)等の木材が出土。中央部南西側の木

材集中の周辺から、土師器高坏（56～58）、同小型丸底土器（59～64）、同小型壺（65～67）、同甕（68・69）、同壺（70・71）がまとまって出土。小型丸底土器は、逆位で底面中央部から出土した。埋土からミニチュア土器（12）と小玉（10）が、本跡周辺のV層下層（7c層）から管玉（6～8）と勾玉（2）が出土。祭祀で用いた土器や石製品、木材等を廃棄した可能性が考えられる。b 打製大型刃器（7）、木材が出土。時期：出土土器から古墳時代前期と判断した。

### 3 古代の遺構

#### （1）概要 [第12・13表・図版21]

古代の遺構の検出面は、Ⅲ層（平安時代の洪水砂層）が堆積しない1区から9区ではV層上面【第2検出面】であり、Ⅲ層が堆積する10区から12区ではⅣ層上面【第1検出面】である。遺構の分布は、5区、6区を除く調査区に広く分布する。その種類と数量は、水田跡（水田1面・畦畔53条）と土坑8基・溝跡29条である。第12表に、遺構の地区別検出数を示した。

また本項では、隣接する長谷鶴前遺跡群で検出された古代の水田跡についても、本遺跡で検出された水田跡の広がり的一部として捉え、合わせて掲載することとした。古代の遺構の検出面は、長谷鶴前遺跡群の第5調査面の平安時代の洪水砂層下であり、これは本遺跡の第1検出面であるⅣ層上面に対応する。検出した遺構の種類と数量は、水田跡（水田1面・畦畔16条）である。第13表に、遺構の地区別検出数を示した。

Ⅳ層は調査区全域で確認できた。遺構の時期は、条里型地割施工前と以後とに分かれる。条里型地割施工前の遺構は、1区～9区の範囲で溝跡や畦畔の痕跡等を断片的に検出したのみであり、その全容の把握には至らなかった。また、長谷鶴前遺跡群1区でも、平安時代の洪水砂層下の泥炭層に被覆された状態で、条里型地割とは方向が異なる畦畔を検出したが、詳細な時期については不明である。

条里型地割施工以後の遺構は、Ⅲ層が堆積する遺構と、Ⅲ層の堆積がない遺構とがある。Ⅲ層の堆積は図版21に示したように、10区西側～12区、更に隣接する長谷鶴前遺跡群1区、2区の範囲に渡る。これらの調査区ではⅢ層下から水田跡を検出し、特に11c区以西では洪水砂層が厚く堆積していたため、水田面が良好な状態で遺存していた。畦畔の方向は、10区と11区では条里型地割と同じであるが、12区から山側の長谷鶴前遺跡群にかけては、条里型地割と異なるものも混じる。水田跡の時期は、Ⅲ層の年代から平安時代の前期と考えられる。

一方、Ⅲ層の堆積がみられなかった石川条里遺跡東側の1区～9区の範囲では、連続耕作により水田面は遺存せず、条里型地割と同方向の畦畔基部の痕跡や畦畔に伴うと考えられる溝跡を、部分的に検出した

第12表 石川条里遺跡 古代遺構の地区別検出数

遺構名	地区												合計	
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11		12
水田跡	水田											1		1面
	畦畔(SC)	7	2		9			1	3	2	2	18	9	53条
溝跡(SD)	6	1	1	7	2			1	11					29条
土坑(SK)	1	3									2	2		8基

第13表 長谷鶴前遺跡群 古代遺構の地区別検出数

遺構名	地区				合計
	1	2	3		
水田跡	水田	1			1面
	畦畔(SC)	9	7		16条

のみである。遺構の配置から、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔として SC001（2区）、南北大畦畔に伴う溝跡として SD095（1区）、SD046（2区）、SD104（3b・4a区）、SD064（4b区）、坪境にあたる東西大畦畔として SC029・030（1区）、SC054（7a区）、SC058（11b区）が考えられる。水田跡の時期は、Ⅲ層が被覆しないために平安時代の前期に限定できない。1区～4区の範囲では、平安時代後期の土器が出土することから、平安時代後期まで耕作が続いたものと推察される。

条里型水田の範囲は、長谷鶴前遺跡群から SD95（1区）まで広がっていたと考えられる。なお、条里型水田跡については、第6章第1節3に詳細を記した。

## （2）水田跡

### 1区～9区

1区～9区の範囲では、Ⅲ層が堆積せず、水田面や畦畔の高まりは遺存していなかった。畦畔基部やその下部構造、もしくは畦畔に伴うと考えられる溝跡を検出したのみである。正方位に載る条里型地割と同方向の畦畔は、1区～4b区までの範囲と7a区に分布する。このうち、条里型地割の坪境にあたる大畦畔と考えられるものと、9区で検出した正方位に斜行する条里型地割施工前と考えられる大畦畔について、個別に記述する。

#### 1区

##### SC029 [遺構：図版21・22]

位置：1区ⅢV23・24・25、ⅢW21。 検出：V層土中。輪郭がやや不明瞭な灰色粘質土の帯状の高まりを確認した。下部から、畦畔に直交する方向に並列し、埋土が砂の短い溝跡数条を検出した。2区 SC001 下部で検出した波板状遺構と同様であることから、大畦畔下部と考えた。重複：(新) SK356、SD056。規模：方位 N-85°-E。長さ 23.2m（延長線上の SC030 まで含めると 62.9m）、幅 1.4～2.0m、検出面から高さ 6cm。構造：西側延長線上にある SC030 と本来は同一畦畔であり、東側延長線上には南北大畦畔に伴う SD095 に接続する溜池状遺構 SK356 があることから、ここまでは水田化されていたと考える。2区 SC001 と1区 SD095 はほぼ 109m 間隔で、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔の位置であり、SC029 は南北大畦畔へ接続する東西大畦畔と推察する。下部の波板状遺構は、大畦畔の基礎施設の可能性がある。遺物：なし。時期：検出土層と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

##### SC030（下部） [遺構：図版21・22]

位置：1区ⅢU25、V21～23。 検出：V層下層。2か所で、還元化した土層が落ち込む短い溝跡が数条並列するものを検出した。2区 SC001 下部や1区 SC029 下部で検出した波板状遺構と同様に、大畦畔下部の基礎施設と考えた。重複：なし。埋土：洪水性堆積物を基調とする。規模：溝跡の長さ 0.4～1.1m、幅 0.2～0.34m、深さ 0.04～0.1m。溝跡の検出範囲は、西側が長さ 4.5m、東側が長さ 4.3m。構造：溝跡の掘り込みは斜めで底面は平坦、断面形は逆台形。西側に7条、東側に5条並列する。東側延長線上の類似遺構を伴う SC029 と本来は同一の畦畔であり、配置から条里型地割の坪境にあたる東西大畦畔と考える。遺物：なし。時期：検出土層と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

#### 2区

##### SC001 [遺構：図版21・22]

位置：2区ⅢE04・09・14グリッド。 検出：V層下層（9層上面）。帯状の輪郭を確認し、規模と位置が

ら大畦畔と想定した。高まりは確認できなかった。また、V層下面で畦畔跡に直交する方向に並列する溝跡を検出、帯状範囲に一致することから、大畦畔下部の基礎施設と考えた。埋土：溝跡の上層は灰黄褐色シルト質植填土、下層は黒褐色土ブロックが混じる埋め戻し土。重複：(新)SD023・024・025・SD046。規模：方位N-5°-E。長さ10.6m、幅3.9m。構造：下部の溝跡の平面形は不整形、掘り込みは凹凸が顕著で、底面はほぼ平坦。13条並行する。北端は調査区外へ伸び、南端も未調査域に伸びる。道路遺構の基礎施設と考えられる波板状遺構に類似し、SC029・030でも同様の遺構を検出した。1区SD095とほぼ109m間隔で、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔と考える。遺物：なし。時期：検出土層と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

#### 7a区

##### SC054 [遺構：図版21・24]

位置：7a区WS12・13グリッド。検出：V層上面。酸化鉄の集積したV層上面で、色調が異なる灰色化した酸化鉄の集積が少ない帯状部分が、東西方向に延びるのを確認した。調査区東壁の土層断面でIV層のわずかな高まりを確認した。重複：なし。規模：主軸方位N-92°-E。長さ11.0m、幅0.60~0.80m。構造：遺構配置から、条里型地割の坪境にあたる東西大畦畔と考える。遺物：なし。時期：検出層位と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

#### 9区

##### SC119 [遺構：図版21・24]

位置：9区XⅢA17・21・22・23グリッド。検出：V層土中(7a層上面)で、IV層が遺存する帯状範囲を2条確認した。高まりは遺存していなかった。発掘調査時に本遺構をSC106とし、下層から出土した杭列も同一遺構として取り上げたが、整理作業時に杭列は下層の古墳時代の畦畔に伴うと判断した。そのため、SC106は下層の畦畔を指す遺構番号とし、遺物出土のない本遺構をSC119へ変更した。重複：なし。規模：方位はN-60°-W。長さ16.2m、幅1.1~1.8m。構造：SC120が西側に2.2~4.0mの間隔で並走する。IV層の範囲を捉えたのみで、詳細は不明である。規模から大畦畔基部と考える。古墳時代畦畔SC106とほぼ同じ位置であり、9区西側は谷地形になることから、地形的条件から同じ場所に構築された可能性がある。遺物：なし。時期：検出層位と遺構配置から、奈良時代の可能性が考えられる。

##### SC120 [遺構：図版21・24]

位置：9区XⅢA17・18・23・24グリッド。検出：V層土中(7a層上面)で、IV層が遺存する帯状範囲を2条確認した。高まりは遺存していなかった。発掘調査時に本遺構をSC107とし、下層から出土した杭列も同一遺構として取り上げたが、整理作業時に杭列は下層の古墳時代の畦畔に伴うと判断した。そのため、SC107は下層の畦畔を指す遺構番号とし、遺物出土のない本遺構をSC120へ変更した。重複：なし。規模：方位N-60°-W。長さ12.3m、幅1.1~4.1m。構造：中央部は幅が狭く、北西側で幅が広がる。SC119が東側に2.2~4.0mの間隔で並走する。IV層の範囲を捉えたのみで、詳細は不明である。規模から大畦畔の基部と考える。古墳時代SC107とほぼ同じ位置であり、9区西側は谷地形になることから、地形的条件から同じ場所に構築された可能性がある。遺物：なし。時期：検出層位と遺構配置から、奈良時代の可能性が考えられる。

## 10区～12区

Ⅲ層が堆積する10区～12区では、広範囲に渡って水田面の遺存する水田跡を検出し、整理作業時に第1水田として登録した。水田跡は隣接する長谷鶴前遺跡群まで広がる。芯材が出土した畦畔については、個別に記載する。

## 第1水田 [遺構：図版21・25・26・27・28、PL4・6]

位置：10区 XⅡN10・13～15・18～20・23～25 グリッド、11区 XⅡR15・20・25、XⅡS13・16・18・21・22、XⅡV25、XⅡW05・07～10・13・16・17・21・22 グリッド、XVA20・25、XVB03～05・07～24、XVC01・02・06、XVF04・05・09・10・14・15・19・20・24・25、XVG01～03・06・07・11・12・16、12区 XⅣJ19・20・24・25、XⅣO02～05・09・10、XⅣF12・13・16～18・21、XⅣK01・09・14 グリッド。

水田被覆層：Ⅲ層は12a区が厚く、東側に向かって次第に薄くなり、11b区以東ではわずかし確認できず、10区東側では確認できない。砂層上層は細粒砂でラミナが発達し、下層は中粒砂で灰色シルトブロックが混入する。11c区の畦畔脇には、部分的に灰色シルトブロックが多量に混入する。下層の洪水砂が堆積した当初は畦畔裾部や水田面を覆う程度であったが、その後上層の洪水砂が堆積したことにより、水田が完全に埋没した可能性がある。12a区南の東壁の土層断面観察では、下層の洪水砂の直上は薄い黒色シルト層、その上上層の洪水砂が堆積していることから、一回の洪水砂で水田が埋没したのではなく、時間差で少なくとも2回押し寄せた洪水砂により埋没したものと考えられる。

検出：Ⅳ層上面。Ⅲ層を掘り下げ、畦畔の高まりと水田面を検出した。Ⅲ層がわずかな10区と11a区では、足跡とみられるⅢ層を埋土とする窪みがない帯状部分を畦畔と判断した。

水田面の状況：畦畔に囲まれた水田面は、11c区で15面（SL21～35）、12a区で3面（SL16～18）を確認した。水田面は大きく3種類の様相を呈した。①ほぼ平坦。洪水砂下層を埋土とする足跡と考えられる窪みが多く分布する（12a区、11c区東側）。②凹凸が著しい。洪水砂下層と上層を埋土とする足跡と考えられる窪みがあるが、少ない（12a区、11c区西側）。③平坦。このうち③は水田耕作がされていなかった可能性がある。現在の水田耕作を参考にすると、①が田植え直後頃、②は耕起を示すと考えられる。

構造：畦畔の認定 以下の2つがある。①被覆砂層が厚く堆積する場所で、Ⅳ層が帯状に立体的に高まるもの。畦畔上には足跡が分布しない（11c区、12a区）。②被覆砂層の堆積がわずかで、足跡等の窪みが分布しないⅣ層が帯状に延びるもの。高まりはないか、わずかに遺存する程度。水田耕作時には高まりがあったため、帯状部分に足の踏み込みがなかったと考えた（10区、11a区）。①は水田が砂層で被覆される直前の畦畔、②の築造時期は限定できないが砂層の被覆まで存在した畦畔基部と考える。畦畔の構造 大畦畔と小畦畔は水田層を盛り上げて構築している。断面形は、12a区と11c区西側では台形・半円形で遺存状態が良く、11c区中央では凹凸のある崩れた形となり、11c区東側ではわずかな高まり、11a区と10区では高まりはない。11c区で、小畦畔の高まりが途切れる箇所（SC093・095間）を確認したが、そこからも芯材が出土した。小畦畔は毎年造り直されており、埋没段階では畦畔が築造されていなかったが、以前に畦畔が築造されていた時期があったことを示すものとする。水田区画の方法 Ⅲ層の堆積が厚い11c区～12a区では、明瞭な水田区画を確認した。11c区では、畦畔は正方位の方向に延びる。水田一筆は、正方形に近い区画、短冊型の区画等があり、畦畔は約20mを基準に配置され、約20m四方の水田区画を形成する。11c区SC094・095のように、20m四方の水田区画内部を更に東西方向に細分された場所もある。12a区では、正方位の方向に載る畦畔はSC081（南北大畦畔）のみで、他は正方位に斜行し、約20mの基準線に位置しない。畦畔は正方位を意識して構築されたが、山側では地形の制約から正方位に延

びない畦畔が構築されたと考え。水田区画の枚数と面積 形状と規模が推測できる水田区画として11c区SL027がある。SL027は東西長5～6m、南北長19～20m、面積約100㎡であり、半折区画を南北2等分、東西4等分したものに相当する。水利形態 水口は11c区ではSC095・098南端と、SC091南端・092北端の2か所が確認でき、水田面のレベルから北西から南東への水回しを想定する。12a区ではSC083・084交点付近とSC083南端の2か所で確認した。SL016・017からSL018へ、北東から南西への水回しを想定する。用水は確認できなかった。地形的に高い場所に水路を設け、畦越し灌漑で滞水させた可能性や、西側の山側から流水する水を使った可能性がある。水田上層 IV層は黒褐色シルト層である。西側の12a区は黒褐色化が著しく、東側の10区は黒褐色化が減じる傾向である。水田層には斑状に酸化鉄が集積していたが、12a区ではやや少ない傾向である。厚さは南側の12a区で15～20cm、東側に向かって薄くなり、10区西側では10cmに満たない。水田の型 3b・4a区等、県道東側の水田層は暗灰色で酸化鉄が集積し、乾田と考える。西側に向かって水田層は黒褐色化し、12a区では泥炭層を粒状に含む土壌となり、湿地であった場所を水田域としたか、湿地に近い環境下の水田であったと推測する。なお、プラント・オパール分析(2019年度)では、11c区と12a区のIV層はヨシ属が卓越し、水生植物が繁茂する湿地環境であったとの結果が出ている。

畦畔の復旧 [遺構：図版29・PL6]：11c区・12a区の畦畔に、畦畔直上に土坑または溝状の落ち込みを確認した。埋土は黒褐色シルトで洪水砂が混入しないため、埋没から掘削までには時間差があり、被覆砂層直上に水田層が形成される段階で掘削したと考える。

芯材出土状況：畦畔の接続地点を中心に、芯材が出土している。

遺物：SC079畦畔内から須恵器蓋(140)出土。IV層・畦畔内・被覆砂層から、土器が出土。

科学分析：IV層のプラント・オパール分析では、イネのプラント・オパールが11b区東壁(6層)で3,700個/g(2018年度)、11c区西壁(6層)で11,300個/g(2019年度)、12a区南の南壁(11層)で3,400個/g(2019年度)と高い値で検出されており、水田耕作土と考える。

水田の時期：水田層・畦畔の出土土器と検出土層から、平安時代前期と判断した。

## 11区

SC058 [遺構：図版21・25・27・30・PL4, 土器：図版88・PL29, 木製品：図版115・116・121・122・124・130・131・PL51・52・56・57・59・64・65]

位置：11b区XⅡW08・09・10グリッド。 検出：IV層上面。IV層水田面は調査区東側中央が窪み、窪みに向かって傾斜する。窪み部分の先行トレンチで、IV層がわずかに高まることを確認したが、不明瞭で凹凸が多かった。水田面では、砂を埋土とする足跡と考えられる窪みを無数に確認した。高まりの上面では足跡は確認できず、高まりの裾付近で歩行列を確認した。高まりに沿って、東西方向に多量の芯材を検出し、更に畦畔西側部分で高まりに直交する南北方向の芯材も検出した。 重複：(新)なし。 規模：方位N-85°-E。長さ12m、幅1.0～1.2m、検出面から高さ10cm。 構造：西側で南北方向の芯材と交差し、東西両端は調査区外へ延びる。上面には細かな凹凸があり、高まりは中央部付近しか遺存しない。畦畔が削平された後に、洪水砂層で埋没した可能性がある。芯材の埋設と規模、遺構配置から、条里型地割の坪境に位置する東西大畦畔と考える。 芯材出土状況：東西畦畔内部から多量の芯材が出土。横木は田下駄(72・74・76・77・80～84)、角材(112・113)、建築部材(121～123)等の木製品、自然木等である。杭は余り打設されていない(148など)。南北畦畔からも田下駄(75・78・79)、板材等が出土。 遺物：芯材層から須恵器環A(118)が出土したが、混入と考えられる。 時期：検出層位と遺構配置から、平安時代前期と判断した。



**SC091** [遺構：図版 21・25・27・31]

位置：11c区XVA20・25、XVB21、XVF05・10、XVG01・06グリッド。 検出：Ⅳ層上面。Ⅲ層の中で、畦畔状の高まりを検出、砂層を掘下げて畦畔を露出させた。 重複：なし。 規模：方位はN-4°-W。長さ21.8m、上端幅0.5m、下端幅0.8m、検出面から高さ17cm。 構造：東西方向のSC093と交差、北端は調査区外へ延び、南端はSC092と接続せず開口し、水口と考えられる。断面形は整った台形。遺構配置から、半折区画の南北畦畔と考える。 芯材出土状況：南側SC093との開口部付から木材が出土。 遺物：芯材の他はなし。 時期：検出層位から、平安時代前期と判断した。

**SC092** [遺構：図版 21・25・27・31、木製品：図版 117・118・123・125・PL53・54・58・59・60]

位置：11c区XVG06・11・16グリッド。 検出：Ⅳ層上面。Ⅲ層の中で、畦畔状のⅣ層の高まりを検出、砂層を掘下げて畦畔を露出させた。 重複：なし。 規模：方位はN-5°-W。長さ11.7m、上端幅0.7m、下端幅0.9m、検出面から高さ6cm。 構造：南端は調査区外へ延びる。畦畔上面に凹凸があり、崩れている。SC091南端とは接続せずに開口し、水口として機能したと考えられ、北西から南東方向への水回しを想定する。遺構配置から、半折区画の南北畦畔と考える。 芯材出土状況：芯材が多量に埋設される。南側には枝状の材が多く、中央から北側にかけては田下駄(89~93)や建築部材(126~128)等、板材が多く出土。 遺物：芯材の他はなし。 時期：検出層位から、平安時代前期と判断した。

**SC093** [遺構：図版 21・25・27・32 図・PL4・5、土器：図版 89、木製品：図版 126・PL60]

位置：11c区XVA25・XVB21・22グリッド。 検出：Ⅳ層上面。Ⅲ層の中で、畦畔状のⅣ層の高まりを検出、砂層を掘下げて畦畔を露出させた。 重複：なし。 規模：方位はN-86°-E。長さ14.7m、上端幅0.7m、下端幅0.9m、検出面から高さ10cm。 構造：西端は調査区外へ延びる。畦畔上面には凹凸が目立ち、崩れている。SC091・094に接続する。遺構配置から、半折区画の東西小畦畔と推察する。 芯材出土状況：Ⅳ層から芯材が出土した。一部に建築部材(129)があるが、多くは板材や木端等の薄く脆いものが埋設される。 遺物：「万(富)」の字が書かれた墨書土器須恵器A(143)が出土。 時期：出土土器と検出層位から、平安時代前期と判断した。

**SC095** [遺構：図版 21・25・27・32・PL5]

位置：11c区XVB12・17・22・23グリッド。 検出：Ⅳ層上面。Ⅲ層の中で、畦畔状のⅣ層の高まりを検出、砂層を掘下げて畦畔を露出させた。 重複：なし。 規模：方位はN-6°-W。長さ20.8m、上端幅0.6m、下端幅1.0m、検出面から高さ13cm。 構造：L字形に屈曲し、北端は調査区外へ延びる。畦畔上面には凹凸が認められ、断面形は崩れている。SC093東端(SL025南東隅)はSC095と接続せずに開口していることから、水口として機能したものと推察する。北西から南東方向への水回しが想定できる。遺構配置から、半折区画を東西に4等分する南北小畦畔と考える。 芯材出土状況：SC093側の開口部付近に芯材が多く出土。 遺物：芯材の他はなし。 時期：検出層位から、平安時代前期と判断した。

**12区**

**SC081** [遺構：図版 21・26・28・29・33・PL6、土器：図版 89、木製品：図版 117・121・123・125・130・PL53・56・58・59・64]

位置：12a区北XVF16グリッド。 検出：Ⅳ層上面。調査区北壁の土層断面で、Ⅳ層の高まりを確認し

た。Ⅲ層上面をやや掘り下げた段階で礫と木材が出土、砂層を掘り下げて、高まりを露出させた。盛土上部は削平され、部分的にⅢ層が堆積する状況であった。重複：なし。規模：方位N-4°-W。長さ5.5m、上端幅0.6~0.7m、下端幅1.0~1.4m、検出面から高さ5~30cm。構造：畦畔上面には円形の窪みが分布、細かな起伏がみられた。畦畔側面には凹凸が見られ、畦畔上端が蛇行する。北側は調査区外へ延び、南側でSC082と接続する。遺構配置、規模から、半折区画の南北大畦畔と考える。芯材出土状況：畦畔盛土内、Ⅳ層内から芯材が出土。SC082との接続地点付近に多く、畦畔主軸方向に建築部材(124・125)、田下駄(85~87)等の横木を重ねて埋設する。杭による固定はなかった。遺物：南壁に接続する部分から須恵器環B(141)が出土。時期：出土土器と検出層位から、平安時代前期と判断した。

#### SC086 [遺構：図版21・26・28・33・PL6、木製品：図版117・121・130・PL53・56・57・64]

位置：12a区南XIVO05・06・10、VK01グリッド。検出：Ⅳ層上面。調査区南壁でⅣ層の高まりを確認、断面が台形状を呈しておらず畦畔が不明であったが、南側から芯材が出土したため畦畔と判断した。S字に蛇行する部分を検出し、当初はS字全体を畦畔と考えたが、隣接する12c区の調査で中世の居館堀跡SD191を検出したことにより、S字部分の東側半分はSD191堀跡の埋土であったことが判明した。重複：(新)SD191。規模：方位N-60°-W。長さ6.2m、上端幅0.6~0.9m、下端幅2.0~2.5m、検出面から高さ21cm。構造：緩く湾曲し、南端は調査区外へ延びる。山側に位置し、正方位に斜行しており、条里型地割と非条里型地割とが混在する場所であると考えられる。芯材出土状況：南側から、田下駄(88)等少量の横木が出土。遺物：芯材の他はなし。時期：検出層位から、平安時代前期と判断した。

#### 長谷鶴前遺跡群

長谷鶴前遺跡群1区・2区では、平安時代の洪水砂層下から石川条里遺跡から広がる水田跡を検出し、整理作業時に第1水田として登録を行った。厚い洪水砂層に被覆された水田跡では、正方位に載る条里型地割と同方向の畦畔SC04・11・16を検出した。畦畔の芯材は、石川条里遺跡の第1水田と同様にいずれも条里型地割と同方向の畦畔の接続部付近から出土した。また、1区東側では洪水砂層下に泥炭層が堆積しており、洪水以前から耕作が放棄されていたことが判明した。泥炭層下からは、正方位に斜行する条里型地割とは方向が異なる畦畔SC013~15・17~19を検出し、いずれも畦畔の高まりが遺存していた。重複関係からは条里型地割方向の畦畔よりもSC13~15が古く、更にそれよりもSC17~19が古いと考えられるが、詳細な時期については不明である。

#### 第1水田 [遺構：図版21・26・28・PL7、土器：図版89・PL30]

位置：1区XIVS12・13・17・18・22~25、X02-04・07・08・12~14・16~20・22~25グリッド、2区XVO16・17・21・22、T01・02・06・07・11・16・21グリッド。

水田被覆層：1区、2区とも、石川条里遺跡の基本土層Ⅲ層が厚く堆積する。また、1区東側では、洪水砂層直下に堆積した泥炭層が畦畔を被覆していることから、洪水以前から耕作が放棄されていた可能性が高い。

検出：石川条里遺跡の基本土層Ⅳ層上面。Ⅲ層を掘り下げ、畦畔の高まりと水田面を検出した。1区東側では砂層直下の泥炭層下からも畦畔を検出した。

水田面の状況：水田面はほぼ平坦である。

構造：畦畔の認定 石川条里遺跡の第1水田の畦畔の認定①と同様である。畦畔の構造 石川条里遺跡の第1水田の11c区、12a区と同様である。断面形は台形・半円形で遺存状態は非常に良い。水田区画の方

**法** 洪水砂層直下の畦畔は正方位に延びる。1区では、正方位に延びる畦畔 SC11の下に正方位に斜行する畦畔 SC14・15が重複する。**水田区画の枚数と面積** 形状と規模が判明した区画はない。**水利形態** 1区の SC13と SC14の間、SC04と SC16の間が接続せずに開口しており、水口として機能していたと考える。用水は検出していない。**水田土壌** 水田層は黒褐色粘土層である。

**芯材出土状況**：条里型地割と同方向の畦畔である SC04、SC11の接続地点を中心に、芯材が出土している。**遺物**：SC11 畦畔内から須恵器環 (145)、須恵器壺 (146) が芯材とともに出土。水田面からは出土なし。**科学分析**：水田層のプラント・オパール分析は行っていない。放射性炭素年代測定 (2017年度) では、平安時代の水田層の測定は行っていないが、1区東側の平安時代の洪水砂層直下の泥炭層の泥炭の  $^{14}\text{C}$  年代は  $1,350 \pm 20$  年 BP、 $1,340 \pm 20$  年 BP、 $1,290 \pm 20$  年 BP を示した。

**水田の時期**：畦畔の出土土器と検出土層から、平安時代前期と判断した。

## 1区

**SC11** [遺構：図版 21・26・28・34・PL7、土器：図版 89・PL30、木製品：図版 130・127~129・131・132・PL55・56・61~63・65・66]

**地区**：1区 XIVO12・16・17・21・22、XIVT01・02・06・07・11・16・21 グリッド。 **検出**：長谷鶴前遺跡群の第5調査面で、石川条里遺跡IV層上面にあたる。Ⅲ層中に、畦畔状のIV層の高まりを検出した。洪水砂層を掘り下げ、畦畔を露出させた。 **重複**：(旧) SC14。 **規模**：方位  $N-3^{\circ}-E$ 。長さ 48.2m、上端幅 1.5m、下端幅 2.7m、検出面から高さ西側 23cm、東側は平坦。 **構造**：北端は調査区外へ延びる。南端は SC04 と接続する。規模から、条里型地割の南北大畦畔と考える。 **芯材出土状況**：SC14 との重複地点付近で、畦畔盛土から木材が露出している状況が確認された。田下駄 (101~104)、建築部材 (132~134)、曲物 (150・151)、杭等の木製品、細い枝状の自然木が多数出土。畦畔の主軸に沿って埋設されたものが多い。畦畔に直交する一部の木材は、SC15 に帰属する可能性もある。 **遺物**：須恵器環 (145)、須恵器壺 (146) が芯材と共に出土。 **時期**：検出層位と出土土器から、平安時代前期と判断した。

**SC14** [遺構：図版 21・26・28・34]

**位置**：1区 XIVT02・06・07・11・12 グリッド。 **検出**：長谷鶴前遺跡群の第5調査面で、石川条里遺跡でのIV層上面にあたる。Ⅲ層中に、畦畔状のIV層の高まりを検出した。Ⅲ層を除去して畦畔を露出させた。 **重複**：(新) SC11。 **規模**：方位  $N-20^{\circ}-E$ 。長さ 15.0m、上端幅 2.4m、下端幅 2.8m、検出面から高さ 15cm。 **構造**：南側で SC015 と接続、南端は調査区外へ延びる。北側延長線上にある SC13 とは接続せず、開口することから、水口として機能していたと想定する。遺構配置と規模から、非条里型地割の大畦畔と考える。 **遺物**：なし。 **時期**：検出層位から平安時代前期と判断した。

## 2区

**SC04** [遺構：図版 21・26・28・34・PL7、木製品：図版 118~119・126・127・130・131・PL54・55・60・61・64・65]

**位置**：1区 XIVT16・17・21・22 グリッド、2区 XNVS22・23・24・25 グリッド。 **検出**：長谷鶴前遺跡群の第5調査面で、石川条里遺跡IV層上面にあたる。Ⅲ層中に、畦畔状のIV層の高まりを検出した。Ⅲ層を除去して畦畔を露出させた。 **重複**：なし。 **規模**：方位  $N-85^{\circ}-E$ 。長さ 45.6m、上端幅 0.6m、下端幅 11.5m、検出面から高さ 15cm。 **構造**：1区で南北大畦畔 SC011 に接続、東西両端は調査区外へ延びる。遺構配置と規模から、条里型地割の東西大畦畔と考える。 **芯材出土状況**：田下駄 (95~100)、建築部材 (130・131)、丸木杭 (145・146) 等の木製品が出土。 **遺物**：芯材の他はなし。 **時期**：検出層

位から平安時代前期と判断した。

(3) 土坑 [遺構：付表5]

**SK356** [遺構：図版21・22・35・PL8、土器：図版89、土製品：図版94・PL34、石製品：図版99・PL37]

位置：1区ⅢW17・22。 検出：V層土中。不整形な砂質土の落ち込みを検出した。埋土：上層は黄灰色シルト、細砂混。中層は褐灰色細砂質シルト。下層は灰黄色細砂。 重複：(新)SD087。 規模：長軸3.20m、短軸1.75m、深さ0.06～0.13m。 構造：平面形は不整な半円形、底面には凹凸がある。南東部で、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔に伴う用水と考えられるSD095と重複する。同時期に存在した溜池状遺構の可能性がある。 遺物：土器の種類・量ともに多い。須恵器坏A(147・148)、同坏B、同甕(151、壺150)、同蓋が出土。黒色土器坏A(149)、同埴、同高坏、同鉢、土師器甕、同小型甕が出土。土錘(9～11)、石錘(37)が出土。 時期：出土土器と検出層位、遺構の配置から、平安時代前期と判断した。

(4) 溝跡 [遺構：付表6・図版35・PL8・9]

古代の溝跡は、巻末の溝跡一覧表に掲載した。そのうち、7b・8区の溝跡については、出土遺物と遺構の配置から時期を判断したものの、7a区と7b・8区境に位置する旧明暦用水跡と並行(または直交)方向であり、近世の可能性も残る。また一覧に掲載した溝跡の中で、条里型地割の坪境にあたる大畦畔に伴うと考えられる溝跡については、以下に個別に記述した。

**SD046** [遺構：図版21・23・35・PL8]

位置：2区ⅥE04・09・14。 検出：V層下層。褐灰色土の帯状の落ち込みを検出した。埋土：砂の単層。 重複：(旧)SC001。(新)SD023・024・025。 規模：方位N-3°-W。北北西から南南東へ傾斜。長さ9.71m、幅0.57m、深さ0.03～0.08m。 構造：平面形は直線、断面形は浅い皿状。条里型地割の坪境南北大畦畔にあたる2区SC001に伴う溝跡と考える。 遺物：須恵器坏Bまたは壺、黒色土器坏A、黒色土器と考えられる埴が出土。 時期：出土土器と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

**SD064** [遺構：図版21・23・35・PL8、図版89]

位置：4b区ⅦO07・08・12・13・18・23、ⅦT03。 検出：V層土中。やや褐色の濃い帯状の落ち込みを、南北方向に確認した。埋土：複層。最上層は砂が混じる。 重複：(旧)SD066。(新)SK510・535。 規模：方位N-5°-W。北北西から南南東へ傾斜。長さ42.57m、幅0.9～1.92m、深さ0.2～0.3m。 構造：平面形は直線、断面形は浅い皿状である。南北両端は調査区外に延びる。2区SC001から約109mの間隔で3b・4a区SD104、SD104からSD064までも約109mと、ほぼ1町分である。遺構配置から、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔に伴う溝跡と考える。 遺物：土師器または黒色土器坏A(158)、須恵器坏A(159～165)、同長頸壺(166)が出土。 時期：出土土器と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

**SD095** [遺構：図版21・23・35・PL8]

位置：1区ⅢW22・ⅠC02・07。 検出：V-3層下面。やや褐色の帯状の落ち込みを検出した。埋土：単層。褐色土に黄褐色土が混じる。 重複：(新)SD085・086・087・092。 規模：方位N-5°-W。南から北へ傾斜。長さ12.59m、幅0.35～0.55m、深さ0.03～0.10m。 構造：平面形はほぼ直線。断面は浅い皿状。2区SC001から東へ約109mで、ほぼ1町分である。条里型地割の坪境にあたる東西大畦畔

SC029に直交する。畦畔自体の高まりは遺存していなかったが、SD095は坪境の南北大畦畔に伴う用水で、溜池状遺構のSK356と同時期に存在したと考える。遺物：黒色土器環または埴が出土。時期：出土土器と検出層位、遺構配置から平安時代前期と判断した。

#### SD104 [遺構：図版21・23・35図・PL9、土器：図版89]

位置：3b・4a区ⅧH01・06・11・16グリッド。検出：V-3層下面。帯状の落ち込みを検出した。重複：(旧)SD105。(新)SD028・032。埋土：複層。中層に部分的に砂が入る。規模：方位N-4°-W。北から南へ傾斜。長さ25.94m、幅1.29m、深さ0.23m。構造：平面形はほぼ直線、断面形は逆台形。2区SC001から西へ約109mで、ほぼ1町分である。畦畔自体の高まりは遺存していなかったが、条里型地割の坪境にあたる南北大畦畔に伴う用水の可能性はある。遺物：須恵器環A(156)、黒色土器環(157)、土師器甕が出土。時期：出土土器と遺構配置から、平安時代前期と判断した。

## 4 中近世の遺構

### (1) 概要 [第14表・図版37]

中近世の遺構の検出面は、Ⅲ層の堆積のない9区以東では基本土層V層上面【第2検出面】、Ⅲ層の堆積がある10区以西では平安時代の水田跡検出したⅣ層上面【第1検出面】、12c区では近世盛土に伴うためにⅡ層中であつた。その分布は全調査区に渡り、種類と数量は掘立柱建物跡6棟・欄列5条・水田跡(水田面1面・畦畔1条)・天地返し跡4面・土坑454基(井戸跡69基含む)・墓跡5基・溝跡146条(居館堀跡1条含む)である。以下の第14表に地区別検出数を示した。

中世と考えられる遺構は1区に集中し、大型のST001を含む掘立柱建物跡、欄列、区画溝跡や井戸跡、柱穴跡や無数のピットがある。長谷鶴前遺跡群に隣接する12区では、中世の居館堀跡SD191を検出した。その他では、天水を溜めたと考えられる小規模な浅い井戸跡がある。これらは3b・4a区以西に点在し、特に4b区、4c区に集中する。中世の水田跡は検出してない。なお、1区の中世遺構については第6章第1節4に、12区の居館堀跡については第6章第2節1に詳細を記した。近世の遺構は用水跡が中心である。中世の区画溝や堀跡を除く溝跡は、ほぼ近世の用水跡に関連するものと考えられる。千曲川から引水した江戸時代中期の明厩用水系、後期の塩崎用水系以外にも、江戸時代に造成された西側山地の猪平溜池いのたらいや沢水から引水したとみられる。その他では、1区で欄列、3b・4a区で墓跡、12区のコンクリートで護岸される前の塩崎用水SD188脇で道路跡SC111と水田面SL036を検出した。近世末以降の遺構では、1区、2区で天地返し跡SL001等を検出した。

第14表 中近世遺構の地区別検出数

遺構名	地区												合計	
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11		12
掘立柱建物跡 (ST)	6													6棟
欄列 (SA)	5													5条
水田跡	水田面 (SL)												1	1面
	畦畔 (SC)												1	1条
天地返し (SL)	4													4面
土坑 (SK)	348	10	1	6	52		4	21		8		2		454基
墓跡 (SM)				5										5基
溝跡 (SD)	47	4	5	36	16	10		6		1	2	14	5	146条

## (2) 掘立柱建物跡 [付表1]

掘立柱建物跡は、1区区のみ6棟検出した。建物跡全体を検出できたものは、大型の掘立柱建物跡ST001(桁行7間×梁行3間)の他に、ST002(桁行3間×梁行2間)、ST005(桁行3間×梁行2間)である。ST003とST006は、それぞれ柱穴1列ずつの検出であり、ST004は調査年度が2年に渡り、調査用排水トレンチの掘削により柱穴の一部が失われている。

**ST001** [遺構：図版37・38・49・51・52・53・PL10・11、土器：図版91・PL31、金属製品：図版100・PL38]

位置：1区ⅢV22・23、KB02・03グリッド。 検出：V層上面。黄褐色土の多数の円形の落込みを確認し、その中から規模や配置により本遺構を抽出した。 重複：(新)SD019。 埋土：にぶい黄褐色土。焼土・炭化物が混じる。柱痕が方形ものもある。 規模：主軸方位N-82°-W。桁行13.51m、梁行5.53m。柱穴直径0.31~0.75m、深さ0.08~0.55m。 構造：桁行7間、梁行3間の総柱式建物。柱間寸法は桁行1.62m~2.01m、梁行1.73~1.96m。柱穴25基、柱穴が欠落する箇所がある。柱穴の平面形は円形・方形。柱穴の規模は、梁行の東側6列が大きい。礎板石は20基に設置され、東側6列では40~50cm大と大きく、特に東から2列目のP4・21では特に大きく60cmを超える。一方、西側のP13・14・25では、30cm程度とやや小さい。また、P1・2では小礫が出土したが、1点のみのため、根固めの礫かは不明である。P3・15からは礫が出土しなかった。 遺物：P2から青磁碗(207)、P4から釘(1)、P5・17から不明土師器片、P11から焼成粘土塊、P12からカワラケが出土。 時期：出土土器と検出層位、遺構配置から中世前期と判断した。区画溝SD009と同時期に存在した可能性が考えられる。

**ST002** [遺構：図版37・38・49・51・54・PL11]

位置：1区KB01・06グリッド。 検出：V層上面。SD009埋土中とSL002底面から、炭片や焼土粒の混じる円形の落ち込みを複数確認した。規模や配置から掘立柱建物跡の柱穴と考えた。 重複：(旧)SD009。(新)SL002。 埋土：黄褐色土に焼土・炭化物が混じる。P6・9には柱痕が遺る。 規模：主軸方位N-5°-E。長軸6.30m、短軸4.04m。柱穴直径0.35~0.41m、深さ0.19~0.36m。 構造：桁行3間、梁行2間の総柱式建物。柱間寸法は桁行1.55~2.52m、南北両端がやや広く、梁行1.81~2.03m。P2・5・11を除く柱穴には礎板石が据えられる。 遺物：なし。 時期：検出層位と遺構配置から、中世前期と判断した。

**ST003** [遺構：図版37・38・49・55]

位置：1区ⅢV23グリッド。 検出：V層上面。褐色の隅丸方形・方形の落ち込みを複数確認した。規模や配置から掘立柱建物跡と考えた。 重複：(新)SD019。 埋土：褐色土に黄褐色土ブロックが混じる埋め土。P2・3は柱抜取痕を確認し、P4で柱材と考えられる木材が21cmほど垂直に残存する。 規模：主軸方位N-76°-W。長さ4.41m。柱穴直径0.20~0.26m、深さ0.25~0.50m。 構造：柱穴一列のみ検出した。調査区内では東西3間分。柱間寸法1.40m。柱穴の平面形は隅丸方形・方形。断面は直立に立ち上がる。 遺物：なし。 時期：検出層位と遺構配置から、中世前期と判断した。

**ST004** [遺構：図版37・38・48・49・55・PL11]

位置：1区ⅢV16・17グリッド。 検出：V層上面。にぶい黄褐色土の円形の落ち込みを複数確認し、規模や配置から掘立柱建物跡と判断した。 重複：なし。 埋土：にぶい黄褐色シルト質植壊土を基調、

黒褐色土、灰白色シルトブロックが混じる。柱痕はP1・4・6で確認し、柱穴底面に柱が沈下した痕跡が認められた。規模：主軸方N-78°-W。長軸9.33m、短軸4.35m。柱穴の直径0.20m、深さは南側0.10m、北側0.21~0.32m。構造：調査用排水トレンチの掘削により柱穴の一部が失われている。北西部が調査区外で詳細は不明であるが、桁行4間、梁行1間の鋼柱式建物と推察する。梁行は中間に1間入る可能性があるが、柱穴は検出できていない。柱間寸法は2.24~2.50m、両端がやや広い。柱穴の平面形は円形・方形、断面形はU字形。遺物：なし。時期：検出層位と遺構配置から、中世前期と判断した。

#### ST005 [遺構：図版37・38・48・49・56・PL11、土器：図版91・PL31]

位置：1区ⅢW16・17グリッド。検出：V層上面。SD001北辺の南側に並行して、円形の鈍い黄褐色土の落ち込みが複数検出された。規模と配置から掘立柱建物跡と判断した。重複：(旧)SD001。埋土：灰黄褐色シルト質植壊土を基調、地山の灰白色シルト、明褐色シルトブロックが混じる。柱痕は灰黄褐色シルト質植壊土。柱痕はP5・8で確認。規模：主軸方位N-73°-W。桁行7.33m、梁行4.30m。柱穴の直径0.29m、深さ0.11~0.32m。構造：桁行3間、梁行2間の鋼柱式建物。柱間寸法は桁行2.30~2.52m、梁行2.11~2.20m。平面形は円形・方形、断面形はU字形。P4・6の底面で小礫を検出した。遺物：P5から須恵質播鉢(208)が出土。時期：出土土器と検出層位、遺構配置から、中世前期と判断した。SD080・088・074の区画溝と同時期の可能性が考えられる。

#### ST006 [遺構：図版37・38・49・56・PL11]

位置：1区ⅢV24・25グリッド。検出：V層上面。暗褐色の円形の落ち込みを確認し、規模と配置から掘立柱建物跡と考えた。重複：(不明)SD010。埋土：埋め土。P3は柱抜き取り痕であると推察する。規模：主軸N-70°-W。東西方向の長さ5.60m。柱穴の直径約30cm、深さ12~8cm。構造：東西方向3間分のみ検出。周囲と同様な土坑は確認できなかった。柱間寸法は1.71~2.00m、P2~4は礎板石が据えられていた。柱穴の平面形は円形、楕円形、断面形は底面がやや平坦な逆台形。遺物：なし。時期：検出層位、遺構配置から中世前期と判断した。

### (3) 欄列跡 [付表2]

欄列跡は1区で5条検出した。近世の溝を切るSA001・003の時期は近世以降、また近世の溝跡SD023を挟んで主軸が若干振れるSA002とその延長と考えられるSA005は近世と判断した。遺構の配置から、近世の用水跡に伴う杭列の可能性が考えられる。

#### SA001 [遺構：図版37・38・51・57・PL12]

位置：1区ⅨA09・10グリッド。検出：V層上面。直線状に並ぶ黄褐色土の円形の落ち込み5基を確認した。重複：(旧)SD020。埋土：単層。にぶい黄褐色土。規模：方位N-87°-W。長さ4.24m。ピット直径0.20~0.25m、深さ0.12cm~0.23m。構造：ピット5基が直線的に配列。芯々距離1.10~1.42m。ピット平面形は円形・方形、断面形はU字形。遺物：なし。時期：遺構の重複から近世以降と判断した。

#### SA002 [遺構：図版37・38・39・51・58・PL12]

位置：1区ⅨA09・14・18・19グリッド。検出：V層上面。重複：(旧)SD088。埋土：単層。規模：方位N-13°-E。長さ19.39m。ピットの直径0.15~0.27m、深さ0.07~0.23m。構造：ピット

19基が直線的に配列。芯々距離は0.51~2.80m。ピットの平面形は隅丸方形・方形、断面形は底面が平坦な逆台形が多い。遺物：なし。時期：遺構の重複と遺構配置から、近世と判断した。

**SA003** [遺構：図版37・38・48・57・PL12]

位置：1区ⅢW19・23・24グリッド。検出：V層上面。SD091近世溝跡中に、直線状に並ぶ砂質土の円形の落ち込みを複数確認した。重複：(旧)SD091。埋土：半層、灰黄褐色～黄褐色砂質土。規模：方位N-20°-E。長さ8.72m。ピットの直径0.12~0.18m、深さ0.10~0.18m。構造：ピット24基が直線的に配列。芯々距離は0.50~1.21mと不規則。ピットの平面形は円形、断面計はU字形。遺物：なし。時期：遺構の重複と埋土から、近世と判断した。

**SA004** [遺構：図版37・38・49・57・PL12]

位置：1区ⅢV25、ⅢW21グリッド。検出：V-3層下面。SD100調査中に、灰白色細砂の円形の落ち込みを複数検出した。礫が出土し、直線的に配置することから、欄列と判断した。重複：(旧)SD100。埋土：灰白色細砂層に褐灰粘質土がブロック状に混じる。規模：方位N-72°-W。長さ7.20m、ピットの直径0.20~0.60m、深さ0.05~0.15m。構造：ピット13基がやや蛇行。芯々距離0.63~0.66m。ピット平面形は楕円形・不整形、断面形はU字形。礫はP7・8・10で出土。ピットの配置から、他の欄列同様に本来は第1調査面に帰属すると考える。遺物：なし。時期：他の欄列同様に、近世以降の可能性があると推察する。

**SA005** [遺構：図版37・38・51・58]

位置：1区ⅣU20・24・25、IXA04・09グリッド。検出：SA002延長線上のSKを、整理時に抽出して登録した。重複：なし。規模：方位N-11°-E。長さ19.88m。ピットの直径0.16~0.34m、深さ0.09~0.50m。構造：ピット11基が直線的に配列。芯々距離は1.24~2.30m。ピット平面形は円形、断面形はU字～逆台形。SA002と同一の欄列と判断した。遺物：なし。時期：遺構配置から、SA002同様に近世以降と判断した。

(4) 井戸跡・土坑 [遺構：付表5・図版37~45・48~51・59~71・PL12~20]

井戸跡は、その可能性があるものを含め、69基検出した。1区の中世の居住区画内では特に集中し、素掘りで円形の井戸跡SK002~279と石組1基SK080を検出し、中世焼物や銭貨等が出土した。その他に、耕作用のものと想定される小規模な素掘りで浅い井戸跡SK507~908を3b・4a区以西、特に4b区、4c区で多く検出した。これらの平面形は、円形の他にSK552・558のように長方形に近いものもみられ、出土遺物はわずかであった。井戸跡の他には、溜池状遺構と考えられる大型長方形土坑SK001・012(1区)、柱穴跡と考えられるSK群(1区)の一部から、中世焼物が出土した。検出した多数の土坑や無数のピット群の中には、欄列や掘立柱建物跡の柱穴跡が含まれる可能性が高いと考えられるが、個々の遺構の判別には至らなかった。井戸跡やその他の土坑の時期については、出土遺物等から中世前期の可能性が高いと判断した。なお、巻末の土坑一覧表には、個別図を掲載した土坑と第4節の掲載遺物を出土した土坑を記載した。

(5) 墓跡 [付表3]

墓跡は3b・4a区で5基検出した。全ての墓跡から人骨が出土し、出土人骨の鑑定指導をうけた。鑑定



結果の詳細については第5章第2節1に記した。SM001・002・004は木棺墓と考えられ、北頭位で西向きの屈葬であった。SM002では木棺の痕跡が一部残存していた。SM003は小規模であり、出土した乳歯から、幼児が埋葬されたと考えられる。火葬墓SM005は、火葬骨を集めて近世の溝跡へ埋めた火葬墓と考えられ、時期は近世と考えられる。墓跡は全て3b・4a区に集中しているため、SM001～004の時期についても、SM005同様に近世の可能性が高いと判断した。

**SM001** [遺構：図版37・41・72・PL21、骨：第27・28表・第28図]

位置：3b・4a区ⅧF14・19グリッド。 検出：V層上層。灰色粘土上面に鉄分沈着範囲を確認し、その範囲中でふい黄褐色土の長方形の落ち込みを検出した。掘り下げにより人骨が出土、土坑墓と考えた。重複：なし。 埋土：上層はふい黄褐色土、褐色ブロック少量含む。下層はふい黄褐色土、褐色ブロック含む。 規模：主軸方位N-11°-E。長軸0.70m、短軸0.52m、深さ0.29m。 構造：平面形は長方形、掘り込みはほぼ垂直で底面は平坦である。木棺の痕跡は確認できなかったが、SM002と同様の木棺墓であったと推測する。 遺物：人骨1体分出土。北頭位、顔は西を向く。仰臥屈葬。両腕は土坑壁に沿い、右足が左足の上に重なっていた。 時期：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

**SM002** [遺構：図版37・41・72・PL21、骨：第27・29表・第28図]

位置：3b・4a区ⅧF22グリッド。 検出：V層上層。ふい黄褐色土の長方形の落ち込みを検出、掘り下げにより人骨が出土し、墓跡と考えた。人骨の周囲と直下で、木棺の痕跡を検出した。一部木質が残存する。 重複：なし。 埋土：上層はふい黄褐色土、灰白色粘土ブロックを含む。下層は灰黄褐色土の埋め戻し土。最下層は褐灰色土、木棺が腐食した部分に粘質土が入り込む。 規模：掘方の主軸方位N-7°-E。長軸1.18m、短軸0.84m、深さ0.40m。木棺の痕跡の範囲は長軸0.96m、短軸0.52m、深さ0.24m。 構造：掘方の平面形は長方形、西辺は直線的で東辺がやや膨らむ。木棺を埋める際に、部分的に拡張したものとする。ほぼ垂直に近い掘り込みで、底面は平坦である。木棺は側板に角材4本を渡し、底板を載せたものと推察する。 遺物：人骨1体分出土。北頭位、体は西を向く。横臥屈葬と推察する。右腕は体の前面に、左腕は体に沿うように検出した。副葬品なし。混入と考えられる中世カワラケ、内耳鍋がわずかに出土。 時期：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

**SM003** [遺構：図版37・41・73・PL21、骨：第27・30・31表・第28図]

位置：3b・4a区ⅧF22グリッド。 検出：V層上層。灰色粘土上面に、ふい黄褐色土の長方形の落ち込みを検出。菌、人骨片を確認し、土坑墓と考えた。 重複：なし。 埋土：上層は黄褐色土、炭化物・灰白色粘土ブロック微量含む。下層は灰黄褐色土、灰白色粘土ブロック含む。 規模：主軸方位N-2°-W。長軸0.58m、短軸0.46m、深さ0.13m。 構造：北側はやや広がるが、本来の平面形は長方形とみられる。断面形状は逆台形、底面にはやや起伏がある。木棺の痕跡はなし。 遺物：下層から菌、人骨片が少量出土。鑑定の結果、乳歯であることが判明し、2歳程度の幼児が埋葬されたと考えられる。副葬品なし。 時期：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

**SM004** [遺構：図版37・41・73・PL21、骨：第27・32表・第28図]

位置：3b・4a区ⅧG21グリッド。 検出：V層上層。褐灰色土の長方形の落ち込みを検出した。規模・形状ともにSM001・002と同様であり、土坑墓と考えた。掘り下げにより、人骨が出土した。 重複：なし。 埋土：上層は褐灰色シルト、炭化物をわずかに含む。中層はふい黄褐色シルト、炭化物を中央部

に含む。人骨の直上層。黄褐色土ブロック含む。下層は灰黄褐色シルト、灰白色粘土ブロック多量に含む。人骨出土層。規模：主軸方位N-8°-W。長軸2.10m、短軸1.30m、深さ0.70m。構造：平面形は長方形、ほぼ垂直な掘り込みで底面は平坦である。木棺の痕跡は確認できなかったが、人骨直上層は炭化物がやや多く混入し、木棺墓であったと考える。遺物：下層から人骨、歯が出土、遺存状態は悪い。北頭位。頭骨は西北隅、西向きで埋葬されたものと推察する。副葬品なし。時期：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

**SM005** [遺構：図版37・41・73・PL21、玉類：図版94・PL34、金属製品：図版102・PL39、骨：第27表]

位置：3b・4a区ⅡK14グリッド。検出：V層上層。SD043埋土中に焼骨片・焼土粒が散布するのを確認し、火葬墓と考えた。重複：(旧)SD043。埋土：上層にはぶい黄褐色植壤土、焼土粒少量含む。中層は褐灰色植壤土、焼土粒・炭粒混、焼骨片を含む。下層にはぶい黄褐色植壤土で焼土ブロック、焼土粒を含む。規模：主軸方位N-5°-W。焼土と骨の散布範囲の長軸0.95m、短軸0.55m、深さ0.08~0.10m。構造：斜めに掘り込みが入り、底面は凹凸がある。焼土ブロック・焼骨片の出土のみで、直接被熱を受けた箇所は確認できない。明確な掘り込みが確認できなかったことから、SD043を埋め戻す際に周辺の火葬の残骸を入れたものと考えられる。遺物：焼骨片少量。副葬品の数珠玉5点(11~15)、銭貨1点(40)が中層から下層上部にかけて出土。時期：遺構の重複関係と検出層位から、近世と判断した。

(6) 溝跡 [遺構：付表6・図版37~51・74~83・PL22~26]

溝跡のなかで、中世の溝跡と判断できるものは1区の区画溝と12区の居館跡関連の溝跡のみで、その他のほとんどの溝跡が近世の用水に関連すると考えられる。なお、SD171~179(7b・8区)は、出土遺物や周辺遺構との関係から奈良時代の溝跡と判断したが、7a区との境に位置する旧明暦用水と並行・直交であるため、近世の可能性も残される。またSD183・184(10区)は掘り込みから平安時代以後とみられ、近世に築造された猪平池から下る現在の用水に隣接あるいは直交することから、近世の用水と考えた。SD152・153・159・166(11区)については、平安時代の畦畔に重複あるいは隣接することから、平安時代まで遡る可能性も残される。巻末の溝跡一覧表には、弥生時代から古代までの時期と判断できないものについては、中近世として掲載した。

12c区の中世の居館跡SD191と、江戸時代の塩崎用水SD188については、以下に個別に記載した。なお、近世の用水については第6章第1節5、居館跡については第6章第2節1に詳細を記した。

**SD188**【塩崎用水】 [遺構：図版37・47・81・82・PL26、土器：図版93・PL33、木製品：図版132・PL66]

位置：12c区XIVO05・10、XVF13・18、XVK01・06グリッド。検出：12c区北の北壁断面にて、溝状の落ち込みを検出した。重複：(旧)SD189・190・191。埋土：複層。規模：主軸方位N-4°-W。長さ5.86m、深さ1.44m。構造：南北端は調査区外へ延びる。断面形は逆台形状。現在の塩崎用水直下に位置し、1826年に開削された「塩崎用水」であると考えられる。SD189・190は塩崎用水の改修前の用水跡。SD189西側は道路跡SCI111へ接続、本跡の掘削時に西側の水田跡SL036を埋め立てている(図版82-15層)。遺物：磁器碗(326)、陶器皿(327・328)が出土した。時期：検出層位と遺構配置から、近世と判断した。

**SD191**【居館跡】 [遺構：図版37・47・80・82・83・PL26、土器：図版92・PL31、金属製品：図版101・PL38]

位置：12c区XIVO05・10、XVF13・18、XVK01・06グリッド。検出：12c区北の調査区北壁断面に

て、SD188・189下部に溝状の落ち込みを検出した。12c区南1トレンチ西壁で北側の立ち上がりを、12c区南2トレンチ西壁で南側の立ち上がりを検出、規模から屈曲する堀跡の一部と考えた。また隣接する12a区南で検出したSC086東側部分についても、整理作業時にSD191埋土の一部に含まれると判断した。重複：(旧)SD192。(新)SD188・189・190。埋土：複層。最下層は薄い細砂層が堆積。溝底では流水があったものとする。規模：12c区北主軸方位N-4°-W。長さ5.86m。12c区南幅8.29m、深さ1.44m。12a区南を含めた復元南北長26.44m、復元東西長21.07m。構造：12c区内で逆L字形に屈曲、東側の立ち上がりは調査区外。断面形は逆台形状。方形居館を区画する堀跡であり、長谷鶴前遺跡群第3調査面検出のSD40とほぼ同規模と推察する。SD192は改修前の堀跡。堀の埋立て後に道路が造成された(図版83-15・18層が道路側溝、13・14・16・17層が道路盛土を示す)。遺物：埋土からカワラケ(253)、最下層から内耳鍋と「く」の字に折り曲げた鋳形卑前立(26)が出土した。時期：出土遺物から中世後期と判断した。

(7) 天地返し跡 [付表4・図版37～39・48～51]

天地返しは、深耕し、耕地の表土と下層土を入れ替えることであり、土地改良の一方法である。検出されたSL001～003(1区、2区)は比較的深い溝跡が平行に密に並ぶことから、天地返しの痕跡であると考えられる。SL014(1区東)はやや浅いが、規則正しく並び、同様の遺構と推察する。一部の天地返し跡から出土した陶磁器から、時期は近世末以降であり、検出した遺構では一番新しいと考えられる。天地返し跡については、巻末の遺構一覧表に記載した。

## 第4節 遺物

## 1 土器・陶器・磁器

掲載遺物については巻末の土器一覧表に、非掲載遺物については添付DVDに一覧表を収録した。なお、弥生時代から古代までの出土土器の編年の位置については、第6章第1節1に記した。

なお、本節の土層名は、原則的に第2節にある基本土層を使用し、部分的に堆積する土層の記載の場合には、調査時の呼称である各地区の基本土層名を（ ）付きで表記した。

## (1) 弥生時代の土器 [付表7]

## ① 弥生時代中期後半の土器 [第15表・図版84-1~21・PL27]

弥生時代中期後半と認定した土器は、調査区東端の自然堤防端部の1区で少量、3b・4a区、5b区、7b・8区、9区、11c区、また12区からも僅かに出土している。土器の出土分布状況は第15表に示したとおり比較的広範囲にわたり、西側地区に偏る傾向がある。水田跡が検出された東側の2区、3b・4a区ではほとんど出土していないが、調査範囲が狭いことと、弥生時代後期前半頃のVI層洪水土層に覆われて、上層に土器が混入しにくかったことによると考えられる。

弥生時代中期後半の可能性のあるものを含めた土器破片数は498片で、内訳は当該期の遺構出土441片・検出面出土43片、他時代の遺構出土6片・検出面出土8片であるが、櫛描波状文甕、赤彩された壺・鉢・高坏類については、弥生時代後期の土器を含む可能性がある。弥生時代中期後半と認定できた土器は、Ⅱ層水田面やその他遺構出土が中心である。確認できた最古の土器は、弥生時代中期後半の栗林式土器である。弥生時代中期後半以前とみられる土器は、9区北壁でⅡ層よりも下層から底部小片が出土したが、年代等の詳細は明らかにできなかった。他に詳細な時期不明の壺・甕体部片も多く出土したが、小片で摩滅したものが多くある。

比較的遺存良好な出土例は、大畦畔上面出土SQ001の甕(1~3)、SC115畦畔内出土の甕(13)がある。なお、出土土器は遺構出土土器を中心に図化し、弥生時代中期後半の可能性を含む土器を含め、接合前破片総数487片のうち414片(85.0%)、石膏を含めた総重量4,906gのうち4,538g(92.5%)を図示した。

出土土器の器種の内訳は以下のとおりである。甕は374片で、内訳は櫛描羽状文甕292片、櫛描波状文76片、文様不明6片で、コノ字重ね文の甕は出土していない。遺構出土の甕片数が多いものは、SQ001から178片、SC063から33片で、いずれも小片で個体数自体は少ない。他の遺構出土例は、1遺構あたり20片以下である。甕の器形が判明する個体は僅かだが、口縁が短く強く湾曲外反し、胴中位が膨らむ縦長の器形が確認できる。口縁部の文様は摩滅して詳細不明だが、キザミヤ押圧文を施すものは認められず、口唇部に縄文施文のみのものが確認できる。頸部の櫛描簾状文は有るものと無いものがある。体部文

第15表 弥生時代中期後半土器の地区別出土破片数

出土地点	地区												合計	
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11		12
遺構	0	0	0	0	0	232	0	0	181	8	0	20	0	441片
他時代遺構	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	6片
検出面他	6	0	0	10	0	14	0	12	0	3	0	5	1	51片
地区別小計	7	0	0	10	0	246	0	12	181	16	0	25	1	498片

様は櫛描羽状文が圧倒的に多く、縦羽状文（図版84）が主体であるが、その崩れた形態とみられる横走櫛描文を縦位に並列するもの（図版84）がある。縦位櫛描直線文で区画する波状文の甕は確認されなかった。

壺は106片で、そのうち文様が認められる土器や同個体とみられる破片は95片である。SC063出土が72片で、出土個体数は少ない。摩滅して文様が不明なものも多いが、頸部を平行する沈線で区画し、その間に縄文を施文するものが認められる。文様のある体部片自体が少ないが、文様が認められるものには、縄文地文に連続弧状沈線を施すものがある。文様がないものは、器形から弥生時代中期後半の壺と判断した。上記以外の器種は僅かで、内外面赤彩の鉢1片、壺形鉢1個体、有孔鉢1個体がある。赤彩の鉢、壺形鉢は弥生時代後期のものと類似器形である。このように水田域出土土器は甕が主体で、他の器種が少ない様相が窺える。出土した甕は煮沸のために持ち込んだとは考えにくく、祭祀等に用いられたものだろうか。

### 5b区

Ⅶ層水田層（13層）、その上層の腐植土層（12b層）、さらに上層のSQ001を含む土層（12a層）で弥生中期後半の土器が出土しているため、2～3時期の改変の可能性が考えられる。

SQ001 [図版84・PL27]：甕（1～3）が出土した。2・3は粗い櫛描の斜走・横走櫛描文が縦位に並列する甕で、縦羽状文が崩れた文様とみられる。3は頸部に櫛描簾状文を施す。いずれも全体的に摩滅して文様の遺存状態は悪い。

Ⅶ層上層 [図版84・PL27]：腐植土層（12b層）から櫛描波状文甕（18）と頸部櫛描文・体部縦羽状文とみられる櫛描文甕（19）が、その上層（12a層）とⅦ層との境界付近から頸部櫛描簾状文・体部縦羽状文甕（20）と壺体部（21）が出土した。

Ⅶ層水田層 [図版84]：赤彩鉢または高坏（16）が出土した。Ⅶ-2層から出土した壺（17）は、縄文施文が口唇部に認められないが、外反する口縁形態で口径がやや狭いことから弥生時代中期後半の壺と考えた。

### 7b・8区

SC063 [図版84・PL27]：畦畔内から弥生時代中期後半の櫛描羽状文甕、櫛描波状文甕、壺が出土した。摩滅した小片で個体数は少ない。櫛描羽状文甕はいずれも縦羽状文であり、頸部櫛描簾状文を有するものと無いものがある。櫛描波状文甕（6）は、口唇部の文様は不明である。体部の波状文は間隔をあけて平行するように描かれ、類似個体はSC063・064出土品にある。壺（4）は頸部に僅かに縄文が残存するが、口唇部の縄文の有無は不明である。壺（5）は摩滅して縄文地文の有無は不明である。

SC063・064 接続地点 [図版84・PL27]：SC063出土の土器と同一個体と思われる破片がある。赤彩の鉢・高坏と櫛描羽状文甕、櫛描波状文甕、壺が出土した。櫛描羽状文甕（7～9）はすべて縦羽状文であり、頸部に櫛描簾状文のあるものと、ないものがある。櫛描波状文甕は体部1/8遺存片が最大で、小片のみである。壺は口縁1/8遺存のものが1片あったが、その他の破片でも文様は確認できなかった。

### 7a区 [図版84]

第3水田：櫛描波状文甕（14）は、波状文が重なることなく施され弥生時代中期後半と考えた。

### 9区

SC115 [図版84・PL27]：甕（13）が出土した。13は体部上半に櫛描横羽状文を施す。

## 10区

SC105：時期不明の壺2片、甕2片のみ出土した。

## 11区

SC089 [図版84・PL27]：畦畔内の芯材調査時に周辺から出土した土器を含み、3個体にまとまる。赤彩壺形鉢(10)は体部下半4/8～底部8/8が遺存する。倒卵形の器形で、底面を除く外面全面と体部内面上部が赤彩され、内面はミガキ調整されている。口縁部～体部上半を欠損する。この器種は弥生時代後期に多いが、長野市松原遺跡では弥生時代中期後半の遺構出土例があり、本例も弥生時代中期後半～弥生時代後期のものとみられる。有孔鉢(11)は口縁3/8～底部8/8遺存する。緩やかに「く」字に折る口縁で、やや縦長の器体となる。底部に小孔が開けられたあまり類例をみない器形で、時期の詳細も不明である。壺体部1片は、やや湾曲する体部片で内面ハケ調整、外面ミガキ調整されて文様はない。

SC101 [図版84]：芯材の掘り出し作業時に出土した。櫛描羽状文甕、内外面をミガキ調整する壺体部下半片がある。甕(12)の甕体部下半～底部片のみ図示した。

水田面：Ⅷ層水田跡検出面では出土した251片のうち、弥生時代中期後半かその可能性があると思われる土器片は30片に過ぎない。3b・4a区、5b区、4d区、7a区、9区、11a区で出土した。

検出面 [図版84]：3b・4a区から出土した甕(15)は、受口口縁で体部は櫛描波状文を施すとみられる。

## ②弥生時代後期の土器 [第16表・図版84-22・85-23-35、PL27]

出土した弥生時代後期土器は、いわゆる吉田式と箱清水式に該当する。吉田式土器は、2区の基本土層Ⅷ層(洪水土層)出土の22、9区の古墳時代前期と考えられるSX002から出土した壺口縁(27)がある。それ以外は箱清水式土器で、ほとんどが他時代の遺構や土層に混入して出土し、水田遺構からの出土は僅かであった。このなかで、古墳時代前期水田層と弥生時代中期後半の水田面の中間に残存し、弥生時代後期土器のみが出土したSC061・065と、弥生時代後期と中期後半の土器のみが出土したSD187は、弥生時代後期の遺構と考えた。

弥生時代後期と認定した土器片は合計430片で、当該期の遺構出土16片、他時代の遺構混入品133片、検出面、調査区壁面、出土地点不明等が281片である。破片が多く、櫛描波状文甕や赤彩の壺・鉢・高坏片は弥生時代中期後半の土器との識別が不十分であるが、弥生時代後期と認定した土器片の地区別出土数を集計すると第16表のようになる。1区出土片が246片(31.7%)と最多で、続いて3b・4a区～5区の範囲で87片(18.9%)、7b・8区と9区で40片(8.7%)と続く。2区Ⅷ層出土54片はほぼ1個体にまとまり、3a区、6区、7区、10区以西は出土がないか僅かである。弥生時代後期土器の破片数は少なく、ほぼ9区以東の出土に限られる。

第16表 弥生時代後期土器の地区別出土破片数

出土地点	地区												合計	
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11	12	
遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	14	2	0	0	0	16片
他時代遺構	96	1	0	4	9	0	0	0	0	23	0	0	0	133片
検出面他	150	54	2	32	1	41	0	0	0	1	0	0	0	281片
地区別小計	246	55	2	36	10	41	0	0	14	26	0	0	0	430片

## 7b・8区

SC061・065 [図版85]：SC061から赤彩壺(24)、櫛描波状文甕(25)が出土した。24は体部下半の屈曲部片だが、体部上半の接合部で剥落して体部上半の形状は不明である。SC061と接続するSC065からは甕(26)のみ出土した。文様は摩滅するが、僅かに櫛描波状文が確認できる。口縁が短く屈曲しないとみられ、弥生時代後期の土器と捉えた。

## 9区

SD187 [図版85・PL27]：弥生時代後期甕(23)、弥生時代中期後半の壺が出土した。23は体部に櫛描波状文と頸部に櫛描簾状文が確認でき、波状文は密に重なるように施される。頸部の屈曲が弱く、口縁が延びると想定され、弥生時代後期の甕と捉えた。

VI層 [図版84・PL27]：壺(22)は2区調査区北壁VI層中からままとまって出土した。口縁と底部は欠損していたが、ほぼ1個体とみられる。土器片は摩滅して遺存状態が不良のため、体部上部のみ図示した。頸部に細い沈線の鋸歯文が描かれ、吉田式とみられる。この土器を洪水堆積土層のVI層年代の根拠とした。

他時代の遺構・検出面他 [図版85・PL27]：1区では弥生時代後期の土器が246片が出土し、器種内訳は壺154片(62.6%)、甕53片(21.6%)、高坏16片(6.5%)、鉢または高坏20片(8.1%)、鉢2片、蓋1片である。土器の組成は壺が多く、集落遺跡出土とあまり変わらないように思われる。高坏(30~33)を図示した。33は表面が剥落しているが、外側へ反る形態から高坏とみた。赤彩の有無は不明である。第1~3調査面から出土した弥生後期の土器は、全て混入品とみられる。第4調査面では弥生時代後期の赤彩壺1片と赤彩鉢高坏片4片、第5調査面では79片の弥生後期土器が出土したが、第4・5調査面では遺構は検出されていない。

2区では54片、3a区では古墳時代前期水田面から2片が出土した。3b・4a区で36片、5b区で41片、4b区と4c区は調査面積が狭く僅か10片である。3b・4a区~5区の弥生時代後期土器の器種は、壺27片(31.1%)、甕37片(42.5%)、高坏9片(10.3%)、鉢または高坏14片(16.1%)となる。1区の組成と比べると、鉢高坏の比率が少ない点は同様だが、壺が少なく甕が多い。他時代の検出面出土74片、遺構出土13片は、すべて混入と考えた。

6区~7a区では出土がなく、7b・8区、9区で40片出土した。古墳時代のSX002(9区)から出土した甕2片、壺21片のうち、壺(27)と櫛描波状文を施す甕(28、29)を図示した。27は口唇部が内湾するように屈曲し、弥生時代後期でも前半に近い所産とみられる。内面は摩滅し赤彩の有無は不明である。甕は摩滅するが波状文を口縁まで重ね、28は口唇部が僅かに内湾するが、29は外反する。この7b・8区~9区の全出土土器は壺23片、甕17片で、壺と甕がほぼ同率である。

## (2) 古墳時代の土器 [第17表・付表7]

概要：基本土層V層群内や、当核層の上面、中位面を検出面とする遺構を中心、古墳時代前期後半頃の土器が出土した。V層は本遺跡1区~長谷鶴前遺跡群まで分布し、当該期の土器片も1区~12区までの広域で出土する。破片ばかりで全体形が窺える資料は僅かであり、器種と時期の断定が難しいため、可能性のある破片も器種数に含めて分類集計した。甕の体部片は弥生時代中期後半・後期のものと時期の識別が困難であり、文様のないハケ調整・ナデ調整の球胴とみられる破片を古墳時代前期とし、判断できない場合は時期不明とした。壺の体部片も同様に、弥生時代中期後半のものとの識別が不十分であり、判断できない場合は時期不明とした。高坏の口縁片は小型丸底土器、器台、鉢との識別が不十分で、判断できない

第17表 古墳時代土器の地区別出土破片数

地区	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11	12	合計
出土地点														
遺構	55	0	0	262	0	0	1	0	0	228	0	0	0	546片
他時代遺構	49	0	0	41	26	23	0	1	5	0	0	22	2	169片
検出面他	147	75	13	299	43	810	4	7	62	269	0	1	3	1735片
地区別小計	253	75	13	602	69	833	5	8	67	497	0	23	5	2450片

い場合は小型丸底土器・鉢・高坏と併記した。識別作業の結果、器台は僅かで、器種の主体は柱状脚高坏、小型丸底土器、甕、壺、小型壺であり、黒色土器坏はV層中の1区SD100からの出土のみである。V層の古墳時代水田跡は、古墳時代前期後半～中期にかかる頃とみられるが、本遺跡内のV層の水田跡に係る1時期を古墳時代前期と呼称する。古墳時代前期～中期と考えられる地区別出土破片数は以下の第17表のとおりである。

調査区全域で土器が出土し、調査面積や調査状況の違いがあるものの、出土破片数の多い地区は1区、3b・4a区、5b区、9区等である。1区は自然堤防端部にあたり集落域に近く、そのうちSD100からは55片が出土し、1区出土土器の約2割に相当する。3b・4a区は水田域で、大畦畔SC038脇から甕数個体226片が出土し、3b・4a区出土土器の4割近くを占める。5b区は土器片が多量に出土したため、トレンチを人力で掘り下げたところ、出土土器の点数は多いが、遺構の確認はできず、破片も細片が多いため接合個体もなかった。9区ではSX002から228片が出土し、9区出土土器のほぼ半数に相当する。

このように、古墳時代前期の土器の出土分布は広域であり、人間の活動範囲の広さが窺え、その中で土器出土量の多い地区では土器を多出する遺構が存在し、土器を集中して用いた行為があったことを推察させる。SX002のように小型丸底土器を多用する例や、SC038脇の甕・小型壺が多い例等の状況から、使用器種が異なる行為が行われていたと推察されるが、具体的な内容は明らかにしえなかった。

以下、地区別に出土土器の様相について記す。

## 1区

**SD100** [図版87・PL29]：古墳時代前期末～中期とみられる土器は55片出土し、器種の内訳は甕8片、壺2片、小型壺8片、高坏5片、坏32片である。内湾口縁の土師器坏(90)、口縁端部を折るよう外反させた内面黒色坏(91)、裾が広がる柱状脚高坏の脚部(92)、小型壺の体部片(93)を図示した。91は体部片を欠損するが、同一片とみられる破片を合わせて図示した。柱状脚高坏の脚部裾がかなり開く形態であることや、黒色土器坏と土師器坏を含む点で、本跡は他地区の水田面出土土器よりも後出する時期とみられる。

**V層検出面他** [図版87]：第1調査面の中近世遺構から49片、第1～5調査面から145片、出土地点不明4片が出土した。これらの土器の器種別の出土量は甕147片、台付甕1片、壺16片、小型壺11片、小型丸底土器3片、高坏19片、坏1片で、圧倒的に甕が主体で、それ以外の器種は少ない。第5調査面出土の坏片はSD100出土の91と同一個体とみられる。79・80は柱状脚高坏とみられる。

## 2区 [図版87]

**V層検出面**：V-2・3層から合計75片が出土した。V-3層から高坏(83)、器台(84)が出土した。

## 3b・4a区

**SC038** [図版85・PL28]：畦畔脇から完形土器が複数出土し、合計226片を数える。甕(39～41)がほと



などを占める。何れも遺存状態が悪く調整の詳細は不明である。39・40は口縁部が「く」字状に屈曲し、39は胴部が球胴となる。41は小型壺の体部下半～底部片である。

**SC043**：畦畔の検出時に出土した土器はハケ調整の甕底部片3片のみである。

**SK549** [図版85・PL28]：柱状脚高坏の脚部(43)が出土した。

**V層検出面** [図版85・PL28]：第1調査面で61片出土され、その内訳は甕41片、壺5片、小型壺7片、小型丸底土器4片、高坏4片である。V-3層ではSC038 脇出土土器以外に甕40片、小型壺11片、高坏14片、鉢とみられる土器2片がある。なお、V-1層で検出した窪地地形ともみられるSK547から、小型壺(42)が出土した。1個体単独の特異な出土状況である。

#### 4b区、4c区

**SD071**：甕1片、小型壺1片が出土した。詳細な時期は不明である。

**検出面・他時代遺構混入品** [図版87]：V-1層上面で甕20片、壺1片、小型壺12片、器台とみられる土器1片、小型丸底土器2片が出土した。比較的遺存状態が良い小型壺(87)を図示した。V-2層から甕7片、高坏とみられる土器1片が出土した。

#### 5b区

出土量が多いが、破片のみで遺構に伴うと判断できた土器はない。

**他時代遺構混入品**：23片出土した。

**V層検出面他** [図版87・PL28]：合計810片出土した。第1調査面からは268片が出土し、器種の内訳は甕216片、小型壺7片、高坏33片、小型丸底土器12片である。V-2層からは434片出土し、甕305片、壺9片、小型壺18片、小型丸底土器34片、高坏67片、鉢とみられる土器1片がある。高坏(72～75)、内外面ミガキ調整の鉢とみられる底部片(76)、有段口縁壺(78)がある。76は甕の底部片の可能性もある。出土地点不明の土器は甕1片、高坏1片、小型丸底土器4片がある。

**SQ001 混入品**：甕91片、壺2片、小型壺1片、高坏2片、小型丸底土器5片がある。SQ001は弥生中期後半の土器集中であるが、V層底面と接触するため、境界付近の土器が混入した可能性がある。

#### 7b・8区

**V層検出面** [図版86]：合計は62片と破片数が多いが、個体数は多くはない。小型壺(49)、甕、器台とみられる土器が出土した。

#### 9区

**SX002** [図版86・PL28]：古墳時代前期とみられる土器が228片である。器種の内訳は、甕71片、壺15片、小型壺72片、小型丸底土器53片、高坏17片となる。小型丸底土器の破片数の多さは他調査区に比べて突出し、これは9区検出面出土の土器も同様であることから9区特有の様相とみられる。図示したのは高坏(56～58)、小型丸底土器(59～64)、小型壺(65・66・67)、甕(68・69)、壺(70・71)である。高坏(56)は低脚でミニチュア土器の可能性があり、57は柱状脚高坏の脚部、58は裾広がり的高坏または器台の脚部とみられる。高坏は9個体である。小型壺は口縁が直線的に延び、体部は66が球胴、65は胴下半の腰部が屈曲する器形である。小型壺は3個体のみで個体数は少ない。甕底部(68)と甕体部(69)は、甕破片数の半分以上にあたる。口縁片を欠く壺体部(70)と壺(71)は、壺破片数の大部分を占める。SX002は破片数が多く、水田面出土土器とは異なり大破片を含むが、完形になるものはない。

**V層検出面** [図版86・PL28]：古墳時代の水田耕作土となる第1調査面の検出時の出土土器で、古墳時代前

期頃とみられる土器は268片である。器種の内訳は、甕124片、壺19片、小型壺3片、小型丸底土器54片、高坏9片、器台とみられる土器3片である。SX002を含め、本調査区のみ土器組成比率では小型丸底土器が圧倒的に多い。小型丸底土器(50~52)、柱状脚高坏接合部(53)、折り返し口縁と思われる壺(54)、甕口縁部(55)が出土した。SX002と類似した組成であり、SX002で出土した土器を用いた行為が複数行われていたか、本来SX002に関係する土器が周辺に散在していた可能性がある。

### (3) 古代の土器 [第18表・付表7]

**概要:** 古代の土器は、洪水砂層の被覆がない1区~9区ではV層上面にあたる第1調査面や検出遺構から出土した。一方、Ⅲ層(平安時代の洪水砂層)が分布する石川条里遺跡10区~長谷鶴前遺跡群では、Ⅲ層、Ⅳ層(奈良・平安時代の耕土層)水田面及び畦畔内から出土した。この他に上層Ⅰ・Ⅱ層や中近世遺構からも出土している。なお、1区~4区の第1調査面ではⅣ層が若干残っていたため、そこから土器が出土したが、5区~9区はⅣ層を完全に除去したために出土した土器は少ない。この1区~9区の第1調査面にあたるV層は古墳時代前期末と捉えたが、その上面で奈良時代の溝跡がみつまっていることから、Ⅳ層は飛鳥時代~平安時代土器を包含する土層と考えられる。また、Ⅲ層の被覆がない1区~7a区では、Ⅳ層から平安時代後期の土器も出土している。

出土した古代の土器には、飛鳥時代~奈良時代、平安時代前期、平安時代後期の3時期が認められたが、摩滅して詳細な時期が不明の土器も多い。ある程度年代が判明する土器を、飛鳥時代~奈良時代、平安時代前期、平安時代後期の3時期に区分して記述する。また、7世紀代は飛鳥時代と呼称し、時期不明の場合には「奈良・平安時代」と表記した。

**焼物種・器種の分類:** 古代の土器の焼物種・器種の分類と呼称は、中央自動車道長野線関連の松本地域の調査総論編(小平1990)、上信越自動車道関連の屋代遺跡群・更埴条里遺跡の古代土器報告(鳥羽1999)に準ずる。ただし、松本市内総論編では、平安時代前期末にみられる焼成不良で黒斑がある灰白色の須恵器を軟質須恵器として1種の焼物種としたが、小片では通常の焼成不良な須恵器との識別ができないため、本項では須恵器に一括した。また、摩滅のために焼物種が黒色土器か土師器か不明の場合は、黒色に見えない場合もミガキ調整があるロクロ調整土器はその特徴から黒色土器と判断した。

**時期区分と表記:** 出土した土器は破片が多く、遺構毎の出土量も少ないため、個々の破片で年代を決めざるを得なかった。従来の編年を慣用しつつ選別・接合時に仮分類し、固化した土器の一部について口径・高さ等の法量等の型的検討から年代を絞り込んだ<sup>1)</sup>。土器の時期区分と時期表記は、松本平の古代土器編年(以下「松本平編年」とする。)を基本とし、それを基にした更埴条里遺跡・屋代遺跡群の古代土器編年(以下「更埴・屋代編年」とする。)も参照した。

古代の土器の年代決定の目安は、飛鳥時代~奈良時代は非ロクロ調整の黒色土器および土師器、底部ヘラ切・ナデ調整の須恵器坏、平安時代前期はロクロ調整の黒色土器や底部回転糸切の小径の底部の須恵器坏A・B、灰軸陶器、平安時代後期は土師器の小型坏等とした。

底部回転糸切の須恵器坏Aやロクロ調整黒色土器坏Aについては、奈良時代中葉でも前半には出現し、平安時代前期まで存続するとされるが、今回の分類・接合作業では破片での法量の計測までは行っていないため、量的に主体となる平安時代前期とした。そのため、時期や器種を誤認したものを含む可能性がある。また、型的な検討による年代は生産年代にあたり、実態の消費時間幅は考慮していないため、土器から推定した遺構年代も若干の時間幅を含む。

**地区別出土分布:** 古代の土器の地区別出土破片数を集計したのが第18表で、各時代の古代土器出土分布

第18表 古代土器の地区別出土破片数

地区	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11	12	合計
出土地点														
飛鳥～奈良時代	19	10	1	1	20	12	0	6	42	11	0	5	0	127片
平安時代前期	232	13	1	90	80	10	10	12	0	7	3	42	13	513片
平安時代後期	5	2	0	16	0	3	5	11	0	0	0	0	0	42片
時期不明	167	10	0	17	17	14	1	8	6	2	4	2	6	254片
地区別小計	423	35	2	124	117	39	16	37	48	20	7	49	19	936片

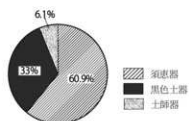
は地区ごとに若干異なる傾向がみられる。飛鳥時代～奈良時代前半は、1区と7区～11区の西側調査区での出土が多く、特に7b・8区は1区より奈良時代土器の出土破片数が多い。また、1区は7世紀代の土器も含み、他地区より若干長い時間幅の土器を含む可能性がある。平安時代前期は10区～12区から長谷鶴前遺跡群にかけてのⅣ層水田面やⅢ層の他、Ⅴ-1層以上の第1調査面や検出遺構から、少量ながらも広域にみられる。特に1区と3b・4a区～4d区の出土量が多いが、これは平安時代以後の遺構が多く混入土器も多いこと、調査面積の広さによると思われる。1区は微高地域端部の集落域に近く、集落域周辺の活動が土器量の多さに反映しているのかもしれない。平安時代後期は識別できたものは僅かだが、1区～7a区第1調査面のⅣ～Ⅴ層上面の検出面や遺構から採取された。この時期の土器が1区～7a区に偏るのは、Ⅲ層の被覆がなく、平安時代後期までⅣ層が連続して利用された可能性があることが、理由としてあげられる。また、西側調査区では重機を用いた掘削作業等でⅢ層上面以上、中でも7b・8区と9区ではⅣ層以上を完全に除去して調査しているため、土器の出土数が少なかったことも影響しているよう。

## ①飛鳥時代～奈良時代の土器 [第19表・第14・15図・図版88・PL29]

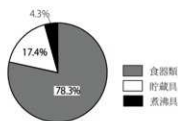
当該期の土器はⅣ層を中心に、Ⅳ層以上、Ⅴ-1層の第1調査面から出土した。2区、3a区、5区ではⅤ-2層上面から出土した土器が僅かにあるが、上層で見逃した遺構の埋土や微高地際堆積層が薄く重なる部分からの混入とみられる。この飛鳥時代～奈良時代や、その可能性がある破片は127片出土した。6区、10区、12区では出土せず、3区、4区は僅かで、1区と7b・8区以西の西側調査区でやや多い(第19表)。1区と7b・8区周辺では、条里型地割前とみられる条里と異方位の溝跡が検出されており、

第19表 飛鳥～奈良時代土器の地区別出土破片数

地区	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11	12	合計
出土地点														
遺構	3	0	0	0	15	0	0	5	37	0	0	0	0	60片
他時代遺構	11	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	19片
検出面他	5	4	1	1	5	12	0	1	5	11	0	3	0	46片
地区別小計	19	10	1	1	20	12	0	6	42	11	0	5	0	127片



第14図 飛鳥～奈良時代土器の焼物種類組成



第15図 飛鳥～奈良時代土器の器別組成

こうした遺構と関連する土器とみられる。

焼物種別の内訳は、黒色土器 38 片 (33.0%)、須恵器 70 片 (60.9%)、土師器 7 片 (6.1%) である (第 14 図)。黒色土器の内訳は、坏 35 片、非ロクロ調整の鉢類と考えられる 1 片、高坏 2 片である。黒色土器坏のうち、SD169 の 110 は平安時代前期とも考えたが、出土遺構の他土器の特徴から奈良時代に含めた。110 以外で奈良時代の可能性があるロクロ調整黒色土器は抽出できていない。須恵器は、坏 A 25 片、坏 B 15 片、蓋 6 片、高坏 1 片、盤 2 片、蓋坏蓋 2 片、甕 12 片、壺・長頸壺 5 片、甕 1 片、横瓶 1 片である。土師器は、坏類 1 片、甕 5 片、壺と考えられる 1 片である。年代幅のあるなかでの比較だが、圧倒的に須恵器が主体といえる。器種別組成の内訳は、食器類 90 片 (78.3%)、貯蔵具 20 片 (17.4%)、煮沸具 5 片 (4.3%) である (第 15 図)。食器類は、黒色土器の坏、高坏、鉢、土師器坏と、須恵器の坏 A、坏 B、蓋、高坏、盤・蓋坏蓋、鉢である。貯蔵具は、須恵器の壺類、甕、甕、横瓶と、土師器壺と考えられる破片である。煮沸具は土師器甕である。食器類の比率が高く、平安時代前期より多様な器種がみられる。また、9 区、11 区では須恵器坏が完形に近い状態で出土したが、出土背景は明らかにできなかった。以下に、地区別に出土土器の様相を記した。

## 1 区

SD127 [図版 88]：黒色土器坏 (98) が出土した。

検出面他 [図版 88・PL29]：検出面から須恵器坏 A (120)、須恵器壺 (119) が出土した。他時代遺構混入品では、SD025 から須恵器蓋 (96)、SD085 から須恵器細頸壺 (97)、SD009 から須恵器高坏 (100) が出土した。96 は蓋坏の蓋とみられ、頂部境に低い突帯が付き、その上脇が沈線状となる。100 は高坏の裾部で、裾が広がり端部を折るよう造作し、脚に透かしが入る。

## 2 区

他時代遺構混入品 [図版 88]：SC001 下部から須恵器坏 B と考えられる破片 (117) が出土した。

## 4b 区

SD066 [図版 88]・PL29：須恵器坏 A が 2 個体分出土した。101・102 のいずれも底部回転糸切である。101 は焼成不良で底径も小さいことから、平安時代前期の混入品の可能性もある。102 は盤状の坏である。外面には重ね焼きの明瞭な火柵が残る。回転糸切坏の時期別の内底径の検討 (烏羽 1999) を参照すると、奈良時代の 3 (または 4) 期頃に該当する。

検出面 [図版 88]：出土地点不明の黒色土器高坏 (99) が出土した。

## 5 区

検出面他 [図版 88]：V-2 層検出面から須恵器坏 A (121)、須恵器皿 (122) が出土した。

## 7a 区

SD142 [図版 88・PL29]：奈良・平安時代須恵器坏 (103)、平安時代後期の可能性もある土師器坏 (104) が出土した。104 は摩滅するが、明褐色のロクロ調整の土器で僅かに残存する底部に回転糸切とも思われる痕跡がある。

検出面他 [図版 88]：須恵器甕 E 1 片 (123) が出土した。

7b・8区

**SD169** [図版88・PL29]：須恵器蓋(105)、須恵器坏A(106・107)、須恵器坏B(108)、非ロクロ調整黒色土器坏(109)、ロクロ調整黒色土器坏(110)、須恵器盤(111)、奈良・平安時代須恵器甕(112)が出土した。110は底部外面を手持ちヘラ削りされ、やや丸みを帯びる。ロクロ調整黒色土器坏は更埴・屋代編年では8世紀前半の2期末～3期から存在するとされ、他の出土土器の年代からもここに掲載した。112は底部片で、窯床に固定する際に底部に置かれた須恵器蓋が融着する。

**SD170** [図版88・PL29]：須恵器坏A(113)、須恵器坏B(114)、飛鳥時代～奈良時代の非ロクロ調整黒色土器坏(115)、須恵器長頸壺口縁(116)が出土した。

**検出面他**：SD169を被覆する調査区壁断面の山砂層から須恵器蓋(124)、須恵器坏B(125)が出土した。

9区

**検出面** [図版88・PL29]：第1調査面から須恵器甕E(127)が出土した。127は体部下半が直線的で、口唇部は折り返しや幅広の面取りはない。甕Eはバリエーションも多く県内では型式検討があまり行われていないが、奈良時代～平安時代前期まで存在する。奈良時代前半では器高がやや低く体部下半が丸みを帯びる器形が多いが、平安時代前期では体部下半がやや直線的で器高が高くなる傾向がみられ、127も平安時代に下る可能性もある。底部ヘラ切りでナデ調整の坏A(126)の須恵器など、比較的奈良時代の出土品が多いことから、127もここに掲載することとした。

11区

**他時代遺構混入品他** [図版88・PL29]：SC058内から底部ナデ調整の須恵器坏A(118)と、IV層中から底部ナデ調整の須恵器坏A(128)が出土した。118は完形に近く、条里型水田の畦畔内から解体調査時に出土した。奈良時代の2期頃とみられ、条里型水田は平安時代前期と捉えられているため、畦畔には伴うものではないと考えられる。

長谷鶴前遺跡群

**水田面**：1区では、条里型水田内に耕作されずに古い水田面がそのまま残ったとみられる区画があるが、出土土器は小片で時期は明らかにできなかった。

**他時代遺構混入品他**：2区、3区の中近世土層や遺構から、須恵器甕7片、ロクロ調整壺3片、甕と思われる破片1片、坏口縁1片が出土した。甕は古墳時代の可能性もある。

②平安時代前期の土器 [第20表・第16・17図・図版89・90・PL30]

平安時代前期の土器は、基本土層IV層を中心にI～IV層やIV層前後の遺構から出土した。遺構内でまとめて出土した例は少なく、SK356(1区)、SD064(4b区)等の一部では比較的多かった。完形品は長谷鶴前遺跡群の洪水砂層被覆IV層水田面上で出土したもの等があるが、他はほぼ破片である。

土器は調査区全域で513片出土した。焼物種の内訳は、黒色土器が276片(53.0%)、須恵器が159片(30.5%)、土師器が35片(6.5%)、黒色土器または土師器は25片(4.8%)、灰軸陶器が27片、他に緑軸陶器碗と考えられる破片1片がある(第16図)。器種別の出土破片数は、黒色土器は坏A161片、碗9片、坏または碗105片、皿1片、須恵器は坏A138片、坏B3片、坏AまたはBが8片、蓋2片、長頸壺4片、四耳壺1片、甕3片、土師器は甕20片、小型甕14片である。煮沸具の甕は体部をケズリ調整する北信型の砲弾形甕で、小型甕はロクロ調整のものである。黒色土器または土師器の器種は坏A、碗、坏または碗

がある。灰軸陶器は碗 14 片、皿 5 片、瓶類 8 片が出土した。破片の識別が不十分なものは、須恵器と黒色土器環 A の奈良時代と平安時代前期との時期識別、底部以外の黒色土器碗・皿の器種識別があげられる。碗・皿は、灰軸陶器が黒色土器より多い集計結果であるが、これは灰軸陶器片が小片でも識別しやすいのに対し、黒色土器は底部以外での器種識別が難しいことから、実態を反映していない可能性がある。また、須恵器甕は内面に青海波文を残すもの以外は平安時代と括ったため、これも時期識別が不十分である。

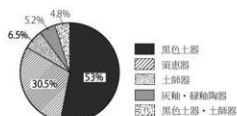
器種別組成は、食器類が合計 474 片 (90.8%) にあたり、なかでも環 A は食器類の 65.8% を占めて、少量の碗・環 B・蓋が加わる組成となる (第 17 図)。環 A 304 片 (須恵器、黒色土器、黒色土器または土師器)、須恵器環 B 3 片、碗 32 片 (黒色土器、土師器または黒色土器、灰軸陶器、緑軸陶器)、須恵器蓋 2 片、皿 6 片 (黒色土器、灰軸陶器) である。これ以外は黒色土器環または碗 119 片と須恵器環 A・B 8 片がある。貯蔵具は 13 片 (2.6%) で、須恵器の甕、長頸瓶、四耳壺と灰軸陶器瓶類である。煮沸具は 34 片 (6.6%) で、土師器甕、小型甕しかない。石川条里遺跡高速道地点でも、奈良や平安時代後期土器を含む可能性があるが、出土総数 1,187 片のうち食器類は 878 片 (74.0%)、なかでも環 A は 475 片で食器類の 54.1% を占めた。数値は異なるが、水田城出土土器は食器主体で、なかでも環 A が多い点は今回の調査地点と同様である。

完形や口縁～底部まで残る大きな破片は、長谷鶴前遺跡群の IV 層水田面上から須恵器環 A (139)、黒色土器片鉢 A (138)、9 区の水田層内から須恵器環 A (129) がある。類例は周辺では、市教委が調査した石川条里遺跡で環が 10 枚重なって畦畔脇で出土した例 (市教委 1984)、石川条里遺跡高速道地点での集中出土例 (理文センター 1997) があり、甕類や貯蔵具の単独例として、水口近くの畦畔脇から須恵器甕が出土した更埴条里遺跡例 (県教委 1968)、畦畔脇から灰軸陶器小碗 2 点、皿 8 点、碗 3 点、壺 1 点、長頸瓶 1 点が出土した例や、灰軸陶器皿 4 点、碗 3 点、短頸壺 1 点、小瓶 1 点、黒色土器環 3 点、碗 1 点と須恵器四耳壺が出土した例が知られる (千曲市教育委員会 2012)。いずれも洪水直前の水田面に残され、使用時の状態か畦畔脇に片付けたものかは不明だが、今回出土した土器同様の出土例であり、器種別組成は上記のような出土例が反映されたものとみられる。

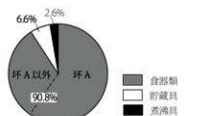
ちなみに、出土数の少ない須恵器・灰軸陶器貯蔵具や煮沸具の甕だが、中近世の用水等から出土したものは流水で移動した可能性があるものの、1 区で 35 片 (須恵器甕、同長頸壺、同四耳壺、灰軸陶器瓶類、土師器甕、同小型甕)、2 区で須恵器長頸壺 1 片、3b・4a 区で土師器甕 1 片、4b 区、4c 区で 4 片 (須恵器甕、同長頸壺、灰軸陶器瓶、土師器甕)、5 区で灰軸陶器瓶 1 片、7a 区で土師器甕 1 片、11 区で 3 片

第 20 表 平安時代前期土器の地区別出土破片数

地区	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11	12	合計
遺構	43	3	0	33	30	0	0	0	0	0	0	9	3	121 片
他時代遺構	68	8	0	17	6	3	0	0	0	3	0	19	5	129 片
検出面他	121	2	1	40	44	7	10	12	0	4	3	14	5	242 片
地区別小計	232	13	1	90	80	10	10	12	0	7	3	42	13	513 片



第 16 図 平安時代前期土器の焼物種別組成



第 17 図 平安時代前期土器の器種別組成

(須恵器甕、土師器甕)、12区で2片(灰軸陶器瓶、土師器小型甕)と各地区に散っている。そのなかで微高地域に近い1区、水田内の微高地周辺4b区、4c区、5区、7a区周辺に多い傾向はある。

平安時代前期土器の様相は、Ⅲ層被覆水田面を検出した地区(10区～12区・長谷鶴前遺跡群)、Ⅲ層が堆積しない地区(1～9区)に分けて、以下に記述する。

#### 10区～12区、長谷鶴前遺跡群(Ⅲ層が堆積する地区)

Ⅲ層 [図版89・PL30]: 11c区で須恵器坏A(130)が出土した。

Ⅳ層水田面 [図版89・PL30]: 10区で奈良・平安時代の須恵器坏B(133)、土師器または黒色土器碗(134)、11区で平安時代前期の黒色土器坏A(135・136)、12a区で黒色土器坏(137)が出土した。長谷鶴前遺跡群では、摩滅した黒色土器とみられる鉢(138)、完形に近い土器が水田面で出土し、やや軟質の焼成不良の須恵器坏(139)が出土した。139は外面に墨書が認められるが、文字は判読できなかった。

畦畔内 [図版89・PL30]: 畦畔検出時や畦畔内芯材解体時に出土した土器である。12a区で、SC079から須恵器蓋(140)、SC081から奈良・平安時代不明の須恵器坏B(141)が出土した。11c区で、SC090から奈良・平安時代の須恵器蓋(142)、SC093から体部外面に「万(富)」の墨書がある須恵器坏A(143)が出土し、SC099から平安時代前期の黒色土器坏(144)が出土した。長谷鶴前遺跡群のSC11から、須恵器坏B(145)、須恵器壺(146)が出土した。145は底部外面全体に回転ヘラ削りされる。松本平編年、更埴・屋代編年の7期より前とみられるが、詳細は不明である。146は肩部に把手が付く長頸壺とみられる。

他時代遺構他 [図版89]: SD152(11区)から黒色土器坏A(131・132)が出土した。出土地不明の須恵器坏A(199)が出土した。

#### 1区～9区(Ⅲ層が堆積しない地区)

##### 1区

SK356 [図版89]: 須恵器坏A(147・148)、黒色土器坏A(149)、奈良・平安時代の須恵器長頸壺(150)、同壺(151)が出土した。焼物種の組成は松本平、更埴・屋代編年の7期前後の様相とみられるが、破片ばかりで本遺構に伴う土器とは言い切れない。

他時代遺構混入品 [図版90]: 奈良・平安時代の土器は須恵器蓋(167)、須恵器坏B(169)がある。平安時代前期の土器は黒色土器坏A(168・173)、須恵器坏B(170)がある。SD130の黒色土器皿(171)、SD131の須恵器坏A(172)が出土した。

検出面他 [図版90・PL30]: 検出面や壁から、須恵器坏A(177・178)、須恵器蓋(179)、須恵器坏B(180・181)、須恵器甕(187)が出土した。黒色土器坏A(182・183)、土師器または黒色土器碗(184)、灰軸陶器碗(185)、灰軸陶器皿(186)が出土した。182・183は底部外面中央に直径2～3cmの回転糸切痕を残す。185・186の灰軸陶器はハケ塗りとみられる。

##### 2区

検出面他: V-2層上面から須恵器坏B(188)が出土した。底部外面全面を回転ヘラ削りされる。

SD023から須恵器坏B(174)が出土した。

##### 3b・4a区

SD104(・028・032) [図版89・90・PL30]: いずれも小片だが、平安時代前期以後の土器は含まない。SD028の黒色土器または土師器不明碗(152)、SD032の須恵器坏A(153・154・155)が出土した。153・

154には墨書があるが、文字は不明である。SD104から須恵器環(156)、黒色土器環(157)が出土した。須恵器は焼成不良品が多く、松本平編年8期にかかる可能性がある。

**検出面他：**調査面積が広く出土土器も多い。出土地点不明の黒色土器環(189)、須恵器環A(190)を図示した。190は口唇部に煤が付着、底部外面は回転糸切である。

#### 4b区、4c区

**SD064** [図版89・PL30]：土師器または黒色土器環A(158)、須恵器環A(159～165)、長頸壺口縁片(166)が出土した。158はミガキ調整された黒色土器の可能性ある。164・165の底部は回転糸切である。他に時期不明の壺・甕片等が出土した。平安時代前期土器は、須恵器環A主体で、松本平編年6期の土器が主体とみられるが、灰釉陶器碗片が出土していて、これに伴う場合、遺構の時期は同7・8期に下る可能性も考えられるが、近世陶器も混入していることから、灰釉陶器片も混入品と推察する。

**検出面他** [図版90・PL30]：第1調査面から、須恵器環A(191)、黒色土器が環A14片、碗1片、坏または碗7片、土師器または黒色土器が坏または碗6片、須恵器が環A6片・長頸壺1片、灰釉陶器が碗4片・長頸瓶1片、奈良平安時代須恵器は坏11片、蓋1片、長頸壺2片、甕3片が出土した。いずれも小片で、2片同一個体とみられる灰釉陶器碗(192)と須恵器長頸壺(193)を図示した。192は体部下半を回転ヘラ削りし、高台は三日月形である。V-2層上面検出面から黒色土器坏または碗3片、V-4層上面の古墳時代前期水田検出面から黒色土器環A1片が出土した。これらは上層で検出しえなかった遺構に関連する土器とみられる。

#### 5区～9区 [図版89・90・PL30]

**検出面他**：5区壁から灰釉陶器瓶(194)、6区第1調査面から黒色土器環A(195)、須恵器環A(196)が出土した。7a区第1調査面から須恵器環A(197・198)が出土した。198には「山」にみえる墨書があるが詳細不明である。7b・8区北壁の山砂層から奈良平安時代の須恵器環B125が出土した。9区のSD185から黒色土器坏または碗(176)が出土した。口径10cm前後とかなり小型で、高台を欠損する。小碗にみえるが、同法量の須恵器環Bが平安時代前期の6期にあることから、坏B模倣の黒色土器碗と考えられる。調査区壁IV層から、須恵器環A(129)が出土した。

#### ③平安時代後期の土器 [図版90・PL30]

調査区東側1～7a区IV層、中近世遺構から小型環類を中心に当該期の土器42片が散在する。小型環以外の器種の土器は識別できなかった。

#### 3b・4a区 [図版90・PL30]

**IV層：**SL009から出土した土師器小型環(200)、SL010から出土した土師器小型環(201)は、どちらもロクロ調整で底部は回転糸切である。SL011から土師器小型環が出土した。

**他時代遺構・検出面他** [図版88・90・PL29・30]：2区第1調査面から小型環(202)、3b・4a区第1調査面から土師器小型環(203)、5区壁から土師器小型環(204)、5区第1調査面から小型環(205)が出土した。6区第1調査面から小型環(206)が出土した。明褐色で粗い砂を少量混じる胎土で比較的器壁は薄い。摩滅するがロクロ調整でミガキ調整は認められない。底部外面は回転糸切とも思われるが残存部が僅かで詳細不明である。



## (4) 中世の土器・陶器・磁器 [付表8]

## ①中世の焼物 [第21・22表・第18図・図版91・92・PL31]

概要：調査区全体で出土した12～16世紀までの中世焼物には、長野県北部域で生産されたとみられる在地産焼物と、珠洲・常滑・山茶碗系・中津川等の国内陶器窯製品、青磁・白磁等の中国からもたらされた輸入磁器がある。在地産焼物には酸化炎焼成土器と、還元炎焼成須恵質の焼物があり、前者には砂粒の少ない胎土でロクロ調整のカワラケや香炉と、砂を多く含む胎土でハケ調整と回転台ナデ調整の内耳鍋・播鉢がある。なお、播鉢には酸化炎焼成土器と須恵質のものがあるので、前者を土器播鉢、後者を須恵質播鉢と呼称する。この両者は還元炎焼成から酸化炎焼成への変化が推定される同系統の焼物とみられ、製作方法は内耳鍋とも同じ系統とみられる。

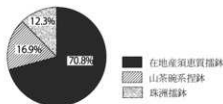
出土した中世焼物の破片数は388片である。焼物種別の内訳は以下の通りである。在地産の低温焼成土器はロクロカワラケ141片、手づくねカワラケ2片、内耳鍋103片、土器香炉2片、土器播鉢2片、火鉢類15片がある。また、在地産土器火鉢の実態については、その実態が明らかではないために時期は断定できないが、やや酸化炎焼成の厚手で雑な造りの破片を在地産の中世の所産、瓦質の内湾器形は近世と考えた。

陶器には瀬戸美濃、珠洲、常滑、中津川窯産のものがある。瀬戸美濃窯産（以下「瀬戸美濃」という。）は、古瀬戸が5片、大窯製品が3片出土した。古瀬戸の器種は鉦皿、四耳壺、鉢、平碗があり、大窯製品の器種は丸皿、丸碗がある。珠洲窯産（以下「珠洲」という。）は25片出土し、器種は播鉢、壺、甕とみられる破片がある。山茶碗系陶器は13片出土し、器種は捏鉢、碗がある。また、常滑窯産（以下「常滑」という。）の甕とみられる破片、中津川窯産（以下「中津川」という。）の壺、甕、産地不明瓷器系壺がある。

播鉢は焼物種が複数あり、その内訳は珠洲8片、山茶碗系捏鉢11片、在地産須恵質播鉢46片、土器播鉢2片である。出土播鉢の97%が土器以外の播鉢であり、中世前期の所産とみられる。産地別組成は珠洲播鉢12.3%、山茶碗系捏鉢16.9%、在地産須恵質播鉢70.8%となり、在地産須恵質播鉢を主体として、搬入品の珠洲と山茶碗系捏鉢が少量加わる構成とみられる（第18図）。在地産須恵質播鉢の口縁形態は珠洲播鉢に類似し、バリエーションがあることから年代幅があることを窺わせる。珠洲模倣品ともみられるが、他の出土焼物年代との比較から、珠洲製品の口縁形態の年代とは対応していない。中世後期の播鉢は在地産の土器播鉢のみで、古瀬戸・瀬戸美濃大窯製品、越前等の国産陶器播鉢は出土していない。

磁器は中国産磁器のみで、白磁Ⅳ類碗1片、同安窯系青磁碗1片、龍泉窯系無文青磁碗2片、龍泉窯系画花文青磁碗1片、龍泉窯系蓮弁文青磁碗14片、口ハゲ白磁皿1片である。圧倒的に中世前期のものが多く、中世後期のものは白磁皿1片、雷文青磁碗1片、細線蓮弁文青磁碗1片、青磁皿1片のみである。

地区別出土分布：調査区では遺構数や調査面積の違いがあり、中世焼物の出土破片数が調査区毎に異なる（第21表）。1区240片、2区5片、3a区4片、3b・4a（4d）区58片、4b区、4c区2片、5b区6片、6区2片、7a区2片、7b・8区、9区はなく、10区は近世の可能性もある火鉢片11片、11区2片、12区で56片採取された。また、遺構出土の293片のうち、掘立柱建物跡、区画溝等の居住遺構が検出された1区が最も多く61.7%を占め、近世溝跡への混入品が多い3b・4a区で15.0%、中世居館跡のある12区で14.5%と続く。それ以外の地区では10片以下がほとんどで、出土遺物か



第18図 中世前期播鉢の産地別組成

第21表 中世焼物の地区別出土破片数1

出土地点	地区												合計	
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11		12
遺構	162	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	17	181片
他時代遺構	53	4	4	44	0	3	0	1	0	0	0	0	3	112片
検出面他	25	1	0	14	1	3	2	1	0	0	11	1	36	95片
地区別小計	240	5	4	58	2	6	2	2	0	0	11	2	56	388片

第22表 中世焼物の地区別出土破片数2

出土地点	地区												合計	
	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11		12
須恵質播鉢(中世前期)	44	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	46片
内耳鍋(中世後期)	14	1	2	31	0	5	1	0	0	0	0	1	47	102片
その他	182	4	2	26	2	1	0	2	0	0	11	1	9	240片
地区別小計	240	5	4	58	2	6	2	2	0	0	11	2	56	388片

ら中世遺構と断定しうるものも僅かしかないという特性がある。

出土した在地産雑器のうち、須恵質播鉢は中世前期(13世紀後半~14世紀)を、内耳鍋は中世後期(15~16世紀)を、それぞれ代表する土器といえる。出土した須恵質播鉢と内耳鍋の破片数を地区別にした(第22表)。中世前期の須恵質播鉢は1区に集中し、3b・4a区~5区、6区周辺でも少量出土している。その分布は居住遺構のある1区と円形の浅い井戸跡が分布する3b・4a区、4b区、4c区周辺に重なるが、同様の遺構が確認された9区では中世焼物の出土がない。中世後期の内耳鍋は調査区全体に散在し、そのなかで居館跡がある12区からの出土がやや多い傾向がある。

以下に、地区別に出土土器の様相を記す。

## 1区

地区別出土数240片のうち、遺構出土は215片である。中世前期の土器が中心である。中世後期のものは少量で、近世遺構の混入か検出面のみの出土である。焼物種別の内訳は、中国産青磁碗(同安窯系青磁碗、龍泉窯系蓮弁文青磁碗、画花文青磁碗、無文青磁碗、中世後期の細線蓮弁文青磁碗)、中国産白磁皿(口ハゲ皿)、古瀬戸(卸皿、平碗、鉢、四耳壺とみられる破片)、珠洲(播鉢、壺・甕、壺)、常滑(甕)、中津川(壺、甕)、山茶碗系(山茶碗、捏鉢)、産地不明瓷器系陶器壺、ロクロカワラケ、手づくねカワラケ、須恵質播鉢、土器播鉢、土器火鉢、内耳鍋である。

土坑 [図版91・PL31]: SK001から、須恵質播鉢の断面が方形の口縁部(209)、底部(210)が出土した。SK012から須恵質播鉢で口縁内端部が尖る断面が三角形の口縁部(214)、山茶碗(215)、珠洲壺の体部(216)が出土した。SK041から出土した珠洲播鉢(220)は、内面が使用で摩耗し、底部外面に静止糸切痕を残す。

井戸跡 [図版91・PL31]: SK002から須恵質播鉢(211)が出土した。211は口唇部と口縁外面を面取する。焼成は良く、卸目は残存片には認められない。SK003から出土した須恵質播鉢(212)は、口縁方形の断面だが若干肥厚する。SK010からカワラケ口縁(213)、SK017から龍泉窯系蓮弁文青磁碗(217)、SK020から山茶碗系捏鉢(218)が出土した。SK062から同安窯系青磁(223)、須恵質播鉢(224・225)が出土した。SK094からロクロカワラケ(228)、須恵質播鉢(229)が出土した。SK196から須恵質播鉢(234)、SK270から須恵質播鉢(237)、SK276から須恵質播鉢(238)が出土した。SK080からロクロカワラケ(221)、中

津川壺 (222) が出土した。

中世の可能性のある柱穴跡 [図版91・PL31]: SA005 からロクロカワラケ (226)、SK091 からロクロカワラケ (227)、SK155 から須恵質播鉢 (230)、SK177 から須恵質播鉢 (231)、SK178 から須恵質播鉢 (232)、SK188 から龍泉窯系蓮弁文青磁碗 (233)、SK246 から画花文青磁碗 (235)、SK249 から龍泉窯系蓮弁文青磁碗 (236) が出土した。柱穴跡出土中世遺物の時期は、素掘井戸跡から出土した焼物と重なり、中世前期 (13世紀後半頃～14世紀前半) にあたる。

ST001 [図版91・PL31]: P2 から龍泉窯系青磁碗体部 (207) が出土した。

ST005 [図版91・PL31]: 須恵質播鉢体部 (208) が出土した。

溝跡 [図版91-240, 241, 243～245, 図版92-246～249, 251, 252・PL31]: SD001 から出土した手づくねカワラケ (240) は口唇部に面取りが認められる。ロクロカワラケ (241) は口縁が内湾する形態である。その他に、須恵質播鉢は断面方形の口縁部片 (243) と底部片 (244)、底部とみられる珠洲壺・甕 (245) が出土した。SD002 から龍泉窯系蓮弁文青磁碗 (246)、古瀬戸卸皿 (247) が出土した。247 は灰軸単味のハケ塗りの底部片で前期様式とみられる。時期はほぼ13世紀後半の中世前期所産とみられる。SD009 からは内面に煤が付着したロクロカワラケ底部 (248)、無文の龍泉窯系青磁碗 (249)、須恵質播鉢口縁部片 (251) と体部片、珠洲播鉢の底部 (252) が出土した。251 は若干口縁内端部が突出する。252 は静止糸切で卸目は細かく、珠洲Ⅱ・Ⅲ期の所産とみられる。

近世遺構混入品 [図版92・PL32]: SD020 から出土した須恵質播鉢 (256) は、内湾気味で内端部が三角気味に尖る口縁の小片で周囲を研磨している。SD023 からは古瀬戸鉢 (258)、内耳鍋 (259)、古瀬戸四耳壺 (261)、珠洲播鉢 (262)、須恵質播鉢 (263・264)、中津川甕 (265)、火鉢とみられる破片 (266) が出土した。258 は外底回転ヘラ削で、薄い灰軸単味を外面にハケ塗りする底部片で古瀬戸後期Ⅰ・Ⅱ様式と考えられる。内耳鍋は2片あり、259 は底部である。261 は灰軸単味施軸の口縁小片で古瀬戸前期様式である。263 は口縁端部を水平にする方形の断面口縁である。265 はL字型に屈曲する口縁で端部は欠損する。266 はやや底径が大きく、内外面回転台ナデ調整で外底に棒状圧痕がある。調理具とは考えにくく、火鉢の可能性はある。SD125 からは須恵質播鉢 (274)、山茶碗系捏鉢 (275) が出土した。274 は口縁端部が内側に突出して口唇部を水平とするが、本来は内端部が飛び出した三角形の断面口縁であった可能性がある。体部外面タテハケ調整の後、口縁回転台ヨコナデされる。焼成は良く、還元焼成である。275 は小片で、口縁は肥厚し口唇部に沈線1条が入る。SD126 からは須恵質播鉢 (276) が出土した。SD080 からロクロカワラケ (273) が出土した。

検出面他出土の焼物 [図版92・PL32]: 珠洲播鉢 (277) と龍泉窯系青磁碗 (278) が出土した。

## 2区

近世溝跡混入品・検出面他出土の焼物 [図版92・PL32]: SD023 から大窯製品の丸皿 (257)、内耳鍋 (260) が出土した。

## 3b・4a区、4d区

第1調査面の遺構から44片、その他検出面を含めて合計58片出土し、中世後期の所産が多い。焼物種・器種の内訳は須恵質播鉢、内耳鍋、ロクロカワラケ、土器香炉、珠洲甕、白磁皿、青磁皿で、溝跡出

土が大部分である。

**近世溝跡混入品** [図版92・PL31・32]：SD033から土器香炉(267)、SD056から口縁が内湾する青磁皿(268)が出土した。SD065からロクロカワラケの小型品(269・270)、大型品(271)、内耳鍋底部(272)等が出土した。

**検出面他出土の焼物** [図版92]：白磁Ⅳ類碗の口縁(279)が出土した。白磁碗と類似時期(12世紀前後)の搬入焼物は他になく、それ以外は中世後期の焼物が多い。

## 11区 [図版91・PL31]

SK1103からロクロカワラケ(239)が出土した。

## 12区

**中世居館堀跡** [図版92・PL31・32]：SD191からロクロカワラケ(253)、SD192から内耳鍋(254・255)が出土した。254は体部片、255は内湾気味に口縁上部がやや肥厚する形態である。

### ②近世の焼物 [第23表・第19・20図・図版93・PL32・33]

**概要**：近世焼物は調査区全域から、当該期の遺構出土233片、他時代の遺構混入品10片、検出面他138片の合計381片出土した。遺構出土のうち、溝跡出土が220片(遺構出土数の90.5%)、近代の天地返しとみられる遺構から7片、墓跡から1片、土坑から混入の可能性があるものを含め8片、平安時代水田の耕土混入品1片である。水田用水とみられる溝跡からの出土が、圧倒的に多い。近世焼物には土器、陶器、磁器があるが、近似する時期の焼物のみで構成される一括資料と捉えられたものではなく、幅のある時期の焼物が混在して出土している。このことは当該地点が居住域ではなく、出土した焼物は用水の水流等で運ばれた破片が多いことによるのかもしれない。

低温焼成の焼物で、当地域で生産されたと考えられるものを在地産土器と呼称した。在地産土器は19片で、七輪の目皿とみられる破片、火鉢類、ホウロクがある。なお、火鉢類は焼成で内湾する器体を近世の所産とした。当地域における近世火鉢の様相が明らかにされていないため、中世とした火鉢も近世の可能性は否定できない。この他に黒灰色の煙瓦の棧瓦が47片あり、近世焼物の12.3%を占めるが、選択的に採取したもので出土したもの全てではない。

陶器には、唐津、波佐見(・平戸)、京焼系、瀬戸美濃窯産の搬入品と、在地窯産の製品がある。

唐津窯産陶器(以下「唐津」という。)は44片出土し、器種はルリ軸輪ハゲ皿、砂目積の皿や溝緑皿、肥前陶磁(蛸峰雄2000)Ⅱ～Ⅳ・Ⅴ期の播鉢、同Ⅱ～Ⅲ期の碗、小碗、呉器手碗、鉢である。播鉢は瀬戸美濃製品より多く、Ⅱ期と思われる破片が1片あるが、Ⅲ期以後は安定的に一定量みられる。Ⅱ期とみられる白色破片は小片で断定できないが、無釉で太い卸目が密に施される。

波佐見(・平戸)窯産陶器は暗灰色胎土の妬器質の染付陶器で4片あり、碗、小碗、仏飯具がある。仏飯具は暗灰色ながらやや白色を呈し、焼成不良の伊万里にもみえる。京焼系陶器7片は碗、合子、徳利があるが、近世末以後のもののみみられる。

瀬戸美濃窯産陶器(以下「瀬戸美濃陶器」という。)は127片採取され、碗・皿類を主体として仏飯具、播鉢、香炉、僅かに鬺水入れ等の器種がある。皿は、志野丸皿とその可能性がある皿、志野織部丸皿、輪ハゲ皿、掛分皿、型打皿、呉須絵皿(透明釉他灰釉)がある。碗は該当製品の70.1%を占める。なかでも細かい貫入の入る淡青緑色の灰釉を施す碗が54片あり、最も多い。内湾ぎみの器形で底部の畳付以外を全面施釉する。他は志野碗、天目茶碗、外体部下半を露胎とする灰釉碗、陶器染付碗(透明釉を含む)、

上絵付碗、鉄軸に灰軸流し掛けする碗、体部が鉄軸で口縁灰軸を掛ける尾呂茶碗、妬器質の染付碗、洗紙手の碗、全面施軸される鉄軸碗、体部下半～底部を露胎とする鉄軸碗がある。小碗 11片は鉄軸と灰軸がある。上記以外は少数だが、鉢、鬘水入、徳利、香炉、仏飯具、挿鉢、蓋がある。全体的に調理具・貯蔵具類が少なく、食器が主体の組成である。

遺跡出土の瀬戸美濃陶器は、瀬戸製品とは若干様相が異なり、美濃製品が主体とも思われる。近世瀬戸・美濃窯製品編年表（藤沢 1987～1989）を参照すると、第 1 段階（17 世紀初頭～後半）は志野皿、輪ハゲ皿、灰軸流し掛け鉄軸碗、志野丸碗、天目茶碗、挿鉢の一部、第 2 段階（17 世紀末～18 世紀中頃）は尾呂茶碗や摺絵皿・型打皿、体部下半を露胎とする碗類等、第 3 段階（18 世紀後半～19 世紀中頃）は灰軸施軸の丸碗類や染付陶器の碗皿類等が多くある。本遺跡では第 3 段階の所産が主体とみられ、第 2 段階にあたる 18 世紀後半の所産も少量ながらある。これは明暦用水廃絶から塩崎用水開削までの期間にあたる。近世の用水については、第 6 章第 1 節 5 で詳細を記した。

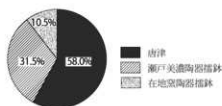
在地窯製品は 7 片出土し、遺跡周辺の松代焼系統の窯である長谷焼、元町焼等の製品とみられる。火入、挿鉢、徳利、壺、鉢がある。上記以外の産地不明窯製品 13 片は、近現代を含み器種・産地は不明なものが多い。植木鉢、近在窯製品の可能性がある厚い鉄軸を掛けた土瓶、近代とみられる急須蓋、合子、鉢とみられる破片、蓋、碗、小型壺、現代とみられる化粧瓶、焼締急須がある。これ以外に器種・焼物種不明の破片がある。

磁器には、伊万里、瀬戸美濃窯産がある。伊万里窯産磁器（以下「伊万里」という。）は 68 片出土し、肥前陶磁Ⅱ期（盛峰雄 2000）とみられる碗 2 片と皿 5 片、Ⅲ期とみられる破片 2 片があるが、大部分はⅣ・Ⅴ期の所産とみられる。器種は小型食器類が主体で、碗 43 片、筒形碗 1 片、小碗・小杯 7 片、蓋 2 片、皿 11 片、瓶類 3 片、紅皿 1 片である。瀬戸美濃窯産磁器（以下「瀬戸美濃磁器」という。）は 45 片出土し、近代・現代のものも含む。碗 29 片、皿 3 片、大皿とみられる 1 片、小碗 4 片、徳利 1 片、急須 1 片、瓶類 5 片、把手 1 片である。このなかには手描線描、近代に入る型紙摺、銅版転写がある。なお、徳利は鉄軸を掛けた白色磁器質の胎土・焼成のやや厚手のもので、瀬戸美濃製品ではない可能性がある。

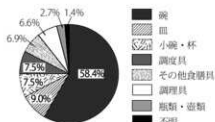
産地別組成：17 世紀前半の焼物の出土量は少ないが、瀬戸美濃陶器と少量の唐津碗・皿等がみられ、17 世紀後半以後に挿鉢等の調理具の主体は唐津挿鉢が主体となる。併せて唐津の御器手腕・ルリ輪軸ハゲ皿、伊万里や波佐見が加わり、さらに瀬戸美濃陶器が加わる組成とみられる。18 世紀末以後は唐津・伊万里等に加え、瀬戸美濃陶器の食器が増加して焼物総量がかなり増える。近世末～近代になると食器類は瀬戸美濃磁器が主流になり、併せて在地窯産陶器が加わるようだ。在地土器は年代の詳細を明らかにしえなかったが、一貫してホウロク・火鉢類を中心に一定量存在する可能性がある。

水田域なので挿鉢自体の出土数は多くはないが、上記の搬入品の様相を挿鉢でみると、出土した挿鉢は唐津 11 片（57.9%）、瀬戸美濃陶器 6 片（31.5%）、在地窯産陶器 2 片（10.5%）の 19 片で唐津が主体を占める（第 19 図）。そのうち瀬戸美濃陶器 2 片は 17 世紀前半の可能性もある。唐津は 17 世紀前半の肥前陶磁Ⅱ期とみられる 1 片、17 世紀後半頃の同Ⅲ期 6 片、18～19 世紀前半の同Ⅳ・Ⅴ期 4 片がある。残る瀬戸美濃陶器 4 片は時期の詳細がわからないが、在地窯産陶器は 19 世紀以後とみられる。このように挿鉢は中世後期には陶器がほとんどみられないなかで、近世に入るとまず瀬戸美濃陶器、追って唐津が 17 世紀前半頃に入りはじめて後半に増大していく様相が知られる。近世末には再び瀬戸美濃陶器も少量ながら加わるとみられ、近世末～近代になると在地窯産陶器の挿鉢が加わるといった変遷とみられる。

器種別組成：瓦を除く焼物 334 片の器種別組成を示す（第 20 図）。これによると碗が 195 片（58.4%）と圧倒的に多く、皿 30 片（9.0%）、小碗と杯 25 片（7.5%）で、これらの小型食膳具で全体の 74.9% を占める。



第19図 近世播鉢の産地別組成



第20図 近世焼物の器種別組成

第23表 近世焼物の地区別出土破片数

地区	1	2	3a	3b・4a, 4d	4b, 4c	5	6	7a	7b・8	9	10	11	12	合計
遺構	98	46	3	43	0	9	0	4	0	0	0	0	30	233片
他時代遺構	6	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	10片
検出面他	66	11	5	16	0	10	0	0	0	2	0	0	28	138片
地区別小計	170	57	8	60	1	19	0	4	0	2	0	0	60	381片

その他では、鉢、徳利、蓋、土瓶、急須、合子などが6.9%、瓶類・壺類は2.7%である。調理具は、播鉢、ホウロクで6.6%、調度具は火鉢、火入、七輪、仏具香炉と仏飯具、化粧関係の鬘水入、紅皿で7.5%、他は不明片である。食器が主体で、調理具他が非常に少ない器種構成である。

**地区別出土状況**：破片数は、遺構数の違いや調査面積の違いもあって一様に比較できないが、1区170片、2区57片、3a区8片、3b・4a区60片、4b区、4c区1片、5b区19片、7a区4片、9区2片、12区60片である。6区、7b・8区、10区、11区等の西側地区では出土していない。時期別の出土傾向は、調査区東西両端の1区と12区に17世紀前半のものがやや多く、3b・4a区も僅かにある。17世紀後半以後は1区～4b区まで散在し、特に18世紀末以後は焼物の破片数もかなり多い。これらの近世焼物は溝跡からの出土が多く、遺構出土の約90%、全体の58%を占める。その溝跡の多くは用水とみられ、上記の出土破片数が多い地区は溝跡の検出数も多い。

以下に、地区別に出土土器の様相を記す。

## 1区

遺構出土101片、検出面66片、合計167片が出土し、調査区全体で出土した近世焼物の43.8%を占める。

**近世溝跡** 〔図版93・PL32・33〕：SD023から、伊万里は皿(286)、唐津は呉器手腕底部(282)と砂目積の皿底部(287)と溝縁皿(288)が出土した。瀬戸美濃陶器は灰軸流し掛け鉄軸碗の底部(281)と口縁(283)、2区出土の灰軸丸碗底部(284・285)、やや紫がかった錯軸の播鉢(289)が出土した。瀬戸美濃磁器は小碗(280)、その他に燻瓦(290)が出土した。

SD085からは、伊万里の碗底部(317)が出土した。18世紀末以降のものとみられる。SD086からは、仏飯具の杯部～底部(319)が出土した。やや白味を帯びる暗灰色胎土で波佐見とみられるが、焼成不良の伊万里の可能性もある。瀬戸美濃陶器は、剥落しているが上絵付とみられる碗(318)が出土した。SD85・86の出土品は18世紀末以後のものとみられる。SD092からは、伊万里皿底部(320)が出土した。17世紀前半のものとみられる。SD125からは、在地土器の火鉢口縁(321)、唐津の呉器手腕底部(322)が出土した。SD129からは、外体部下半露胎の鉄軸碗(323)が出土した。

**天地返し跡** 〔図版93・PL33〕：SL001から、瀬戸美濃陶器の鬘水入(330)が出土した。

**検出面他出土の焼物** 〔図版93・PL33〕：土製円盤(333)は伊万里小碗の周囲を打ち欠いたもので、時期的

には肥前陶磁Ⅲ～Ⅴ期にあたる。

## 2区

**近世清跡** [図版93・PL32・33]：SD024から、伊万里は皿の高台に砂が付着する口縁～底部(293)と底部(291)、輪状に軸を割いだ皿底部(292)が出土した。唐津の挿鉢底部片(296)は露胎に細かい卸目を密に施す。瀬戸美濃磁器は手描染付碗(294)と型紙摺碗底部(295)、その他に在産土器火鉢(297)が出土した。

**他時代遺構混入品・検出面他出土の焼物**：第1調査面から瀬戸美濃陶器の鉄軸・灰軸掛け分け皿(334)が出土した。

## 3a区

**近世清跡** [図版93・PL32]：SD034から、瀬戸美濃陶器は畳付以外全面施軸する灰軸丸碗底部(299)、蛇目高台で全面鉄軸を施し、畳付の軸を拭き取る鉄軸碗底部(300)と体部が出土した。18世紀末以後の所産である。

## 3b・4a区、4d区

**近世清跡** [図版93・PL32・33]：SD033から無軸で細い卸目が密に入る唐津挿鉢(298)が出土した。SD037から唐津の鉄軸碗底部(301)、呉器手碗底部(302)が出土した。18世紀末以後～近代の所産である。SD043から瀬戸美濃陶器の筒形の香炉(303)が出土した。17世紀後半～18世紀の所産と推察する。SD056から唐津碗口縁部～底部(304)が出土した。胎土は明褐色で、軸は白濁する。口縁端部は外反し、体部上部にヘラで面取りするようなケズリがところどころにある。SD057出土の伊万里蓋(305)は高台状摘まみから体部で、外面は無文、内面は松竹梅文を描く。他に、瀬戸美濃陶器灰軸丸碗の高台内無軸底部(306)、唐津呉器手碗底部(307)が出土した。SD058のうちSD058aから出土した瀬戸美濃陶器の灰軸小碗(308)は、口縁～体部下半が露胎となる底部である。鉄軸碗の底部(309)は、高台内まで施軸された畳付の軸を拭き取る。灰軸丸碗の底部(311)は、高台畳付を除き全面施軸される。他に下部を露胎とする体部片もある。伊万里は碗底部(310)、唐津はルリ軸輪ハゲ皿底部(312)、京焼上絵付の合子口縁～底部(313)が出土した。312が18世紀前半頃とやや古い、18世紀末以後の焼物を含む。SD063西側残存部分のSD063aから、瀬戸美濃陶器の呉須による摺絵皿口縁～底部(316)、唐津の呉器手碗が出土した。また、埋土一括では唐津の呉器手碗底部(315)、検出時に出土した瀬戸美濃陶器の底部外面無軸の小碗底部(314)が出土した。

**他時代遺構混入品** [図版92・PL33]：平安時代水田跡検出時に伊万里の小碗底部(331)が出土した。

**検出面他出土の焼物** [図版92]：第1調査面は平安時代耕作土層Ⅳ層下部から古墳時代前期水田耕作土・洪水土層Ⅴ層上面にあたり、出土した近世焼物は本来該当期の遺構に属するものであったと考える。また、壁断面のⅡ層から14片が出土し、唐津小碗の口縁(335)がある。

## 5b区

**近世清跡** [図版93・PL33]：SD148から伊万里碗2片が出土した。体部下半～底部(324)は、高台外面から高台内面は無軸で体部上半にダミ筆を押し当てたような文様がある。時期の詳細は不明だが、17世紀中頃の肥前Ⅱ期の所産と考えられる。SD167から銅緑釉流し掛け唐津呉器手碗(325)が出土した。

**検出面他出土の焼物** [図版93]：古墳時代前期水田層上面の検出時に10片出土したが、本来は近世遺構に

属すると考える。瀬戸美濃陶器灰釉丸碗は(336)が出土した。

## 12区

12c区で塩崎用水と現市道下の旧道跡、近世の水田跡を調査し、比較的多くの近世焼物が採取された。  
**近世溝跡** [図版93・PL33]：現コンクリート擁壁構造以前の塩崎用水と推定されるSD188の上層埋め戻し土は重機で掘削し、下層は層位別に取り上げた。埋土から近世末～近代を中心とした焼物が24片出土した。23層から瀬戸美濃磁器の染付小碗口縁～底部(326)、瀬戸美濃陶器の染付皿口縁～底部(328)が出土した。いずれもほぼ18世紀末～近代の所産で、塩崎用水のつくられた年代と重なる。26層から瀬戸美濃陶器の鉄軸で文様を描く志野織部丸皿(327)が出土した。

12c区北水田耕土下層(図版82-22・23層)[図版92・PL33]：近世水田耕土下層から、唐津とみられる透明釉をかけた精製胎の碗(337)が出土した。この碗1片のみでは断定が難しいが、居跡跡は近世以後に水田化された可能性がある。

中世溝跡混入品 [図版93・PL33]：SD193屈曲部に入れたトレンチ壁精査時に陶器1片が出土した。確実にSD193帰属と断定できないが、精製胎土の唐津陶器碗(332)で、口縁は玉縁状で外面に松と思われる絵柄を粗いハケで描く。釉は透明釉で薄い。

12c区水田上層埋め土(図版82-15層)[図版93・PL33]：塩崎用水(SD188)開削時に、近世の水田面SL036を埋め立てたと考えられる土である。15片出土し、伊万里碗の口縁部(338)と唐津の挿鉢(339)を図化した。339は玉縁で焼き締めのみ鉄軸を掛け、肥前Ⅲ期である。下層の耕作土より古い陶磁器が比較的多く含まれる。

12c区水田耕作土層(図版82-20層)：埋め立て土下位の水田耕土層から5片出土した。燻瓦が出土したことから、近世末頃の水田跡と考える。

## 2 土製品 [付表9・図版94・土製品1～14・PL34]

### (1) 弥生時代中期後半の土製品

ミニチュア土器の小片がSC105(10区)から1点出土した。図示していないが、外反する口縁の端部を欠損し、緩やかなS字を描く器形で甕を模したとみられる。外体部上半に斜方向と体部中央に横方向の沈線1条が施される。外面はハケ調整の後ナデ調整で、内面は輪積痕を残す。

### (2) 古墳時代前期の土製品 [図版94・PL34]

ミニチュア土器2点のうち1点(12)を図示した。12は小型丸底土器を多出したSX002出土で、本品も小型丸底土器を模したものとみられる。他1点は5b区V層中(7b層)から採取された底部片1片で、底部径2cm前後で体部は欠損する。

### (3) 平安時代の土製品 [図版94・PL34]

SK356(1区)から土鍾3点が出土した(9～11)。いずれも直径2.7～3.1cm、長さ5.8～6.8cmの筒形土鍾で、直径0.8～1.0cmの棒に粘土を巻き付けナデ調整している。色調は明褐色～にぶい黄褐色と多様だが形状は類似する。重量は9が45g、10が63g、11が50g以上で後述する中世の土鍾(1～8)より重い。



## (4) 中世の土製品 [図版94・PL34]

土鍾、焼成粘土塊がある。土鍾(1~8)は1区の近世溝跡や中世SK062・177等から散在的に出土した。直径1.2~2.6cm、長さ4.6~5.9cmの細身の紡錘形土鍾で、直径4~5mmの細い棒に粘土板を巻き付けてナデ整形している。重量は完形品で11~27gと平安時代の土鍾(9~11)の半分以下の重量である。平安時代の土鍾と形態が異なることと出土遺構から中世に属すると考えた。

焼成粘土塊は、1区の中世遺構では、SD1009(8片49g)、SK001(3片11g)・012(16片95g)・014(4片36g)・021(4片18g)・094(5片40g)・119(1片13g)・188(1片11g)、近世遺構では、SD001(1片3g)、SD007(2片14g)、SL001(5片36g)、SL002(4片22g)、1面検出面(4片16g)、調査区壁(2片11g)から出土した。3b・4a区でもSD061(1片8g)から出土した。粘土塊は焼成温度が低く軟質で、部分的に平坦面が残るものも僅かにあるが、全体的に摩滅した不定形な塊である。酸化鉄の風化粒子等の砂粒や直径5mm前後の粘土粒を少量含むが、粒子は細かく内部に切が混じり込む。土壁等の構造物の一部とみられる。

## (5) 近世の土製品 [図版94・PL34]

土製円盤と近世遺構出土の輪羽口がある。土製円盤(13)はSD086(近世)から出土したもので弥生土器片周囲を研磨して楕円形に整えている。14は燻瓦の周囲を打ち欠き円形に整えた円盤である。輪羽口はSD037と3b・4a区出土地点の2点である。いずれも小片で図示していないが、本体が溶けて発泡した先端部の破片とみられる。近世遺構出土だが、中世の可能性もある。

## 3 石器・石製品 [付表10・11・図版94-玉類1~15・図版95~99・PL34~37]

## (1) 縄文時代の石器 [図版96・PL35]

3b・4a区の近世溝跡から、縄文時代とみられる蛇紋岩製の定角式磨製石斧(14)が出土した。刃部は欠損し、全体的に酸化鉄が付着する。重量は127.3gを計る。

## (2) 弥生時代中期後半の石器・石製品 [図版95~97・99・PL35~37]

基本土層Ⅶ・Ⅷ層や遺構、他時代混入品ながら剥片石器や定形的な形態から弥生時代中期後半とみられる石器をまとめて記述する。なお、1区から比較的多くの石器が出土しているが、当該期では自然堤防端部にあたるため、水田域の出土ではない。なお、巻末の石器・石製品一覧表には、図版非掲載のものも含め、出土した全ての石器・石製品を掲載した。

**小型打製剥片石器類** 打製石鏃、削器、RF、UFがある。打製石鏃(1)は1区Ⅶ層最下部で1点のみ出土した。黒曜石製凸基鏃で、基部先端が欠損する。削器(12)は同検出面から黒曜石製1点が出土した。縦長剥片の1側面に剥離調整を施し、もう片側側縁は未調整で微細な剥離痕が残る。RFは2点、UFは2点した。

**大型打製剥片石器類** 打製石斧、打製大型刃器がある。打製石斧は3点出土し、すべて図示した(3~5)。いずれも基部片で大きさからいわゆる石鏃とみられる。3は1区近世溝跡の出土。安山岩製で板状角礫か亜角礫の側縁を粗く剥離調整したもので、側縁は摩耗する。4は11c区Ⅷ層水田畦跡の出土。角礫か亜角礫とみられる安山岩製で、上下面に自然面が残る。側縁に剥離調整を施し、その片側縁の一部は細かい敲打で剥離が潰されている。5は古墳時代前期の水田畦内土坑の出土。結晶が少ない安山岩製で、剥離表面に僅かな黒味を帯びる沈着物があるが、それが剥がれた灰白色の新鮮な面が多いことから、かなり

表面は剥落していると思われる。粗い剥離調整が認められる。

打製大型刃器は7点出土し、すべて図示した(6~12)。長三角断面形の大型剥片を素材とし、鋭角の側縁に不規則な微細剥離痕が認められるものが多い。8のみ刃部を剥離調整するが、多くは剥片の側縁そのまま刃部とし6・9は巾広の背側を剥離調整する。完形に近い7と11以外は破片だが、刃器の形状は直線に近い楕円か木葉形が6・7・9、先端がとがる三角形が8・10で、12もその可能性があり、11は柄が作り出されている。使用痕跡は微細な剥離痕以外に、11に口状光沢痕が認められた。なお、6の擦痕は新鮮で調査時のガジリ痕と思われる。石材は8・11が頁岩、7・10・12が珪質泥岩、6が緑色凝灰岩、9がやや硬質の砂岩である。出土地点と層位は、7が古墳時代前期畦畔内SX002、10・11が弥生時代中期後半Ⅱ層水田(3b・4a区)、他は1区、3b・4a区、7b・8区、9区と広範囲で点在し、古墳時代前期Ⅴ層上面の検出面、近世遺構の混入である。

**磨製石器** 石包丁と磨製石斧がある。石包丁は2点小片が出土した。磨製石斧は太型蛤刃石斧が1区で1点出土した(13)。緑色岩製で刃部は斜めにすり減り、刃部側6cmほどは丁寧な研磨痕を残すが、基部側の表面が荒れ、特に中央付近の側縁は帯状にすり減る。重量は520.5gを計る。

**礫石器** 敲石、置砥石、磨石がある。敲打痕のある礫石器9点を全て礫敲石としてまとめ、6点を図示した(19~24)。21・23は扁平円礫の広面に敲打痕を残すタイプで、他に2区Ⅲ層水田面出土品がある。21は側縁部、2区Ⅲ層水田面出土品には端部にも敲打痕がある。19・22・24は細長い棒状円礫や楕円円礫の先端部に敲打痕を残すタイプである。20は21と同様に扁平円礫側縁に敲打痕がある。これらは形態による時期の特定はできないが、23・24と2区Ⅲ層水田出土品がⅢ層弥生時代中期後半水田土層から出土している。他はすべて1面の近世溝跡から出土している。20・21は近世溝跡SD061の出土であり、一部は近世の可能性も残る。本遺跡は地山に礫を含まない地域に立地するため、敲石として水田内で使用されたものではなく、礫として持ち込まれた可能性がある。なお、19と24は、敲打痕は大きく粗い痕跡のため、力を入れて敲いたとみられる。なかでも24は敲打痕周辺が剥落している。また、広面を用いる23と2区Ⅲ層出土品も敲打面がかなり深く抉れており、強い力で敲かれた痕跡といえる。一方、20・22は敲打痕が細かく、敲打面も比較的平坦であるため、弱い力で細かく敲いた痕跡と考える。敲打面は20で1.5×4cm、22で1.5×1cmと狭く極めて部分的である。石材は22が淡緑色の硬砂岩で、23は安山岩を用いる。

**石皿** Ⅲ層水田のSC105(10区)から1点出土した(28)。隣接する集落遺跡の塩崎遺跡群で類例があり、石皿として水田内で使用されたものではなく、礫として持ち込まれた可能性がある。粒子が粗い砂岩製で板状垂直角礫の広面上下を研磨面とし、中央へ傾斜する。両面中央に半球状の窪みと周囲に敲打痕がある。窪みは径3mm前後で内面は比較的平滑であり、破損後に敲打作業の台石に転用したとみられる。

**磨石** Ⅲ層水田SC063(7b・8区)から1点出土した。形態の似る円礫は1区1面遺構から多数出土しているが、明確に当該期の磨石と断定できるものはなく、中世の石製品で触れている。SC063出土品は白色流紋岩円礫の上下広面に5×6cm程度の平滑な研磨面が認められる。

**剥片類** 黒曜石剥片12点と珪質頁岩剥片2点、チャートの方角気味の円礫片角部の剥片1点が出土した。小片の鉄石英片2点出土した。

**その他** 石器未成品と思われるものがある(15・16)。15はやや緑がかった玄武岩質頁岩で扁平円礫片の側縁を剥離調整して鋭角とし、その後細かい敲打整形を加える。中央部に敲打による浅い窪みが上下面にあり、形状と調整方法から環状石斧未成品と考えた。SD100(1区)出土で混入とみられる。また、16は珪質泥岩の円礫端部を打ち欠いた破片で、破断面の長側縁に僅かな剥離調整、片側短側縁を斜めに鋭角に整える剥離調整を加えている。扁平片刃石斧と類似した形状で、その未成品と考えた。

## (3) 古墳時代前期の石製品 [図版94・玉類1～10・98・PL34・36]

当該期と考えられる石製品に玉類がある。また、当該期と断定はできないが、当該期の遺構から台石、砥石の可能性のある堆積岩片、加工痕を残す軽石製品が出土した。

玉類 SD100 (1区) からメノウ製勾玉(1)と緑色凝灰岩製管玉(3)、1区V-2層検出面から緑色凝灰岩製管玉(4)、4b区V層から緑色凝灰岩製管玉(5)、9区1面古墳水田層から緑色凝灰岩製管玉3点(6～8)、青灰色の滑石に近い不明石材の勾玉(2)、類似した滑石製の小玉(10)が出土した。9区では比較的近接して出土したが、それ以外は単体や数点が散在的に出土し、緑色凝灰岩製管玉(3)には酸化鉄が付着し摩耗が著しい。これ以外に5b区から紺色のガラス小玉(9)が出土した。

台石 SC044 (4b区) から台石と思われる安山岩製の扁平な大型円礫片が出土した(25)。上面は平滑で僅かな浅い溝状の窪みが数条認められ、裏面は平滑ながら小さな剥落が著しい。板状の河原礫を素材として周囲は打ち欠き整形している。表面の平滑面は河川の流水や砂粒で研磨された可能性もある。

## (4) 奈良・平安時代の石製品 [図版99・PL37]

当該期と断定できた石製品はなく、当該期の遺構から石錘、砥石と思われる石片が出土した。

石錘 SK356 (1区) から出土した(37)。楕円の扁平円礫側縁の相対する短軸側縁に打撃によるV字形の抉れと相対する剥離面があり、それと直交する長軸頂部の相対する位置に敲打と思われる弱く浅い窪みがある。上下の広面は比較的平滑で研磨されており、形状から石錘と考えたが、平安時代のものとも言い切らず、運び込まれた円礫内に混入していた可能性もある。

## (5) 中世の石製品 [図版97～99・PL36・37]

中世と考えられる石製品は石播鉢等の製品、中世後期に多用される多孔質安山岩製品と、中世と断定できないが中世遺構出土の凹石、加工跡のある軽石製品、円礫、研磨礫、台石とみられる礫にも触れる。

石播鉢 SD023・065・129 (近世) と1区1面検出面出土の4点で、いずれも多孔質安山岩製である。図示をした35は内面が比較的平滑で、外面に整形時の<sup>ひづり</sup>痕が認められる。SD065出土品は口縁部近くの外面破片であり、SD023出土品は内面にノミによる整形痕を残す未成品の可能性もある。1区1面採取品は口唇部を水平に整形した口縁部の小片である。

砥石 中世遺構のSK001 (1区) から凝灰岩製(29)、SK002から砂岩製砥石(30)、SD009から泥岩製で研磨面の裏面が剥落した破片1片が出土した。29は凝灰岩製の板状砥石、30は粗い砂岩製板状の砥石で、上面は研磨で幅広く浅いU字形に窪み、裏面と側面も研磨されるが、研磨が弱く<sup>ひづり</sup>痕が残る。類似した砥石に近世溝跡出土の31があり、片側面は研磨され、もう片側面は自然面を残す。板状の砥石で、広面研磨面は浅いU字形に窪む。33は1区1面検出面採取で、やや砂岩質の泥岩製で先端が三角の板状砥石で、側面も面取状に研磨されて断面形は多角形となる。ねじれた曲面を描く研磨面もあり、手持砥石とみられる。これらと類似する泥岩製砥石や幅広い板状砂岩製砥石は中世の可能性もある。泥岩製砥石は薄い板状か板状剥落片で、32と他3点がある。

磨石 1点出土した(27)。27は多孔質安山岩製で横断面は三角形を呈し、広面と側縁すべてが研磨された錠形である。磨石というより手持ち砥石に類するものかもしれない。

凹石 1区の中世遺構から2点出土した(17・18)。17は多孔質安山岩製で円礫中央に深く研磨された凹みがあり、凹みの反対面中央に敲打痕を残す。18も安山岩製円礫の上面が浅く研磨された凹面となり、凹みのある反対面中央に僅かな敲打痕がある。

加工痕のある軽石 中世に限定しえないが、金属による削痕や研磨痕を残す軽石製品が3b・4a区、4b区、

5b区等の調査区中央の微高地や隣接地から採取された。

その他 時期は中世以前の可能性も考えられるが、1区中世遺構を中心に拳大前後の円礫や台石とみられる礫が多く出土した。一部に研磨によるともみられる平滑面がある。石川条里遺跡は地山に礫がなく、出土する礫は遺跡外から運び込まれたと考えられる。円礫は長軸5～10cm、短軸5～7cm前後、厚さは3cm前後の扁平円礫と5～7cm前後の卵型円礫が25点採取された。石材は安山岩19点、黒色多孔質安山岩が4点、硬砂岩が2点である。台石とみられる平滑面を残す板状の大型礫にはSK001(26)がある。26はやや光沢のある平滑面があるが板状円礫で、流水等で摩滅した自然面の可能性もある。側面は僅かに自然面を残すが、それ以外は割られており、図示した裏面から側面の破断面に炭化物が付着する。

#### (6) 近世の石製品 [図版94・玉類11～15・99・PL34・37]

近世遺構出土の石製品は数珠玉、石臼、砥石、火打石があり、他に近世と断定できないが基石1点がある。

数珠玉 SM005から5点出土した(11～15)。直径は5.8～7.8mmと幅があり、水晶製で扁平なソロバン玉形に近い断面形で中央の稜は丸味があって不明瞭で、上下面は平坦である。中央に直径1mmの穿孔がある。5点と出土数が少なく、調査時の見逃しや後代耕作で喪失した可能性もあり、少数のみで綴られたものか、数珠の一部を入れたものかは不明である。

石臼 1点のみ出土した(36)。安山岩製上臼で上面と外面の一部に炭化物が付着する。

砥石 34の他に、SD024・058・061・167(近世)から各1点の合計5点出土した。34は青味がかった砂岩製の方形柱状砥石で、側面に鋸の切断面と思われる痕跡があり近世と判断した。

火打ち石と思われる石 石英3点、玉髓1点が出土した。

基石(38) 白色の直径2cm前後の扁平な円形のもので、貝製品の可能性もある。検出面出土で詳細な時期は不明である。

## 4 金属製品 [付表12・図版100～102・PL38・39]

金属製品は中世・近世遺構出土を中心に1区、3a区、3b・4a区、4b区、12c区から出土した。図示した鉄製品のなかで中世遺構出土が1・7・14・16・21・24、近世遺構出土が8～11・17～19・25、遺構外出土が12・13・20である。1区は中世・近世遺構が重なり近世遺構出土品にも中世の混入品が含まれると思われるが、その識別はできなかった。ただし、1区以外は近世遺構出土の金属製品は僅かなので1区の近世遺構出土品には中世の混入品がかなり含まれる可能性がある。

鉄製品 [図版100・PL38]: 釘は断面方形で頂部を扁平にたたき延ばして折り返す形態で、1区を中心にSD034(3a区)、4b区検出面から各1点の合計13点出土した(1～13)。SK012から3点出土した以外は1遺構1点ずつの出土である。使用後に廃棄されたためか、湾曲や欠損するものが多い。全体形が窺える3が長さ5.4cm、10が7.4cm以上を測り、少なくとも2種の規格が確認できる。

締め金具とみられる鉄製品は2点ある(14・15)。14は板状で、15は上端の厚さが4mmで下端では厚さ2mmと先端が細くなる棒状材で釘を転用した可能性がある。これらは卵型に湾曲し、いずれも内面長軸1.8cm前後、短軸1.2cm前後を測る類似した形状のため、刀子の鞘等の締め金具と考えた。鉄鍔は可能性のあるものを含め5点出土した(16～20)。16は鍔被関がなく両端が尖る形状ながら整根鍔とみられ、17は鍔被関から基部周辺の破片で頭部以上を欠損する。19は雁又鍔で、18、20は細く尖る形状から鉄鍔の茎

部の破片とみられる。鉄鍋は12c区北SD190と1区SK156(21)から各1点ずつの2点出土し、21は口唇部が三角に肥厚し、口縁は外反きみでクランク状に折れる。12c区北出土品は湾曲する板状鉄製品で鍋の底部小片とみられる。刀子とみられる細長い板状鉄製品は7点出土し、4点図示した(22~25)。22は腐蝕でかなり薄くなっており、23は断面形が若干片側に湾曲する形状で刀子ではない可能性もある。また、24は幅が広い刃部片で、25は刀子柄とみられる。図示しなかった細長い板状鉄片はSK012・SD001・SL001から各1点ずつ出土し、いずれも幅2.3~2.8cmで遺存長は3cm前後、厚さ1~2mmの大きさで遺存状態が悪く刀子と断定できない。

**銅製品** [図版102・PL38]：銅製品は8点あり、キセル3点を除いた5点を図示した(26~29)。このうち鉄形兜前立は別に後述する。28(中世SD017)は幅5mm、長さ2.9mmの直線的な板状銅製品である。断面は薄い若干かまぼこ形で器種は不明である。27(7a区近世SD138)は銅製飾り金具である。二つに折り曲げられた状態で出土したが、掲載した復元模式図のように折れを延ばすと薄く緩やかに湾曲した板状器物を覆う飾り金具とみられる。短辺端部は雲形に切り込まれ、少し内側に入った中央に孔が1つある。孔は折り曲げられた部分にかかって変形し、猪目か不明である。反対側の短辺は欠損する。銅製長辺は対象器物を覆うように短く折り曲げられる。表面には腐蝕や剥落、酸化鉄の付着で不鮮明だが、細線で緑取りされた内側に魚子文が細かく打たれる。29は近世道路跡SC111(12c区北)出土で、刀子か小柄の鞘とみられ、銅板2枚をあわせて断面形は長三角を呈し、途中で折られて上部は欠損する。

#### 鉄形兜前立 [図版101・PL38]

**出土状況** 26(外)・26(内)は12c区北中世堀跡SD191出土の鉄形兜前立である。図上段の26(外)を外側とし、下段の26(内)を内側に入れて基部を描いて同形のまま重ねて折り曲げられた状態で出土した。**形状** 鉄形の左右の一对とみられ、いずれも広い弧を描く側が外側とみられるが表裏は不明である。この鉄形は厚さ1~1.2mmの銅板を用い、緩やかに弧を描く細長い板状の基部から幅広く両端を尖らせたM字形に広がる先端に続く。先端中央の切り込み近くに猪目の透かしを施す。基部は関をつくり、細くなった基部に3孔が縦に並んで開けられている。2点ともに孔の下端からの位置は上・下端孔はほぼ一致するが、2番目の孔は26(外)と26(内)で若干ずれ、26(内)のほうが下端に寄る。また、直線的に3孔が並ぶが基部銅縁と平行せず、下端孔は弧を描く外側の幅が狭く、弧の内側がやや広がっている。例えば、26(外)の左図では下端孔縁まで左端から1.1cm、右端から0.9cmを測り、26(内)の左図では下端孔縁まで左端から0.8cm、右端から1.3cmを測る。

**材質** 元素マッピング分析(2022年)の結果、金・水銀が全面に確認され、基部を含めた表裏全面に金アマルガムによる鍍金がされていたことが判明した。

**装着状況と廃棄状況** 折り曲げられた鉄形を復元すると長さは22.2cm前後と推測される。上述の孔は鉄形台への装着のためのものとみられ、そこから表裏が判明する可能性があるとみられる。また、具体的な装着方法は明らかにできなかったが、2番目の孔は26(外)と26(内)で位置がずれるのは、当初のものではなかった可能性がある。仮に鉄形台下側孔の広い側が上にくるように装着したとすれば、弧を描く側が外側なので26(表)の左図のみえている鉄形先端部が、向かって右側鉄形の裏面側にあたり、同様に26(内)の左図のみえている基部が向かって左側鉄形の表面となる。つまり、出土時は向かって右側鉄形の表面と向かって左側鉄形のそれぞれ表面をあわせて(裏面を上にして)折り曲げた状態と推測される。

**銭貨** [図版102・PL39]：中世の北宋銭は1区を中心に12点出土し、SK001から祥符通寶(30)、SK004・

269から元豊通寶各1点(31・36)、SK005から元祐通寶(32)、SK041から元祐通寶(33・34)、SK055から咸平元寶(35)、SK273から皇宋通寶(37)が出土した。また、中世溝跡SD009から天禧通寶(38)が出土し、近世遺構の混入品では1区SD080から祥符通寶(39)、SM005(3b・4a区)から天聖元寶の破片(40)が出土している。これ以外に中世渡来銭の可能性のある銭貨がSK011、SL013から出土したが腐蝕と摩滅で文字は判読できない(48・49)。1区からは出土地点不明で聖宋元寶(41)が出土している。中世後期の洪武通寶、永樂通寶は出土していない。

近世銭貨は寛永通寶5点と、天保通寶(42)が出土した。SD087(1区)、4b区出土地点不明以外は12c区で出土した。寛永通寶は裏面に青海波文を刻む真鍮四文銭(45)、裏面が無文のもの(43・44・46・47)がある。45は直径2.8cmと最大を計るが、他は43が直径2.1cmで最も小さく、44・46・47が直径2.2~2.4cmを測る。

鉄滓：合計13点出土した。集中出土はみられないが、1区と3b・4a、5b区中心に出土し、4b区では輪羽口も出土しており、周辺で鍛冶業が行われた可能性がある。時期は中世以後としかわからない。

## 5 木製品 [付表13・図版103~132・PL40~66]

地下水位が高い石川条里遺跡7b・8区~12区や長谷鶴前遺跡群等の扇状地先端付近にあたる西側調査区では水田の畦畔内芯材の木製品が遺存し、弥生時代中期後半~後期、古墳時代前期末、平安時代前期の杭や建築部材・農具類が出土した。また、石川条里遺跡1区や12c区の中世・近世遺構からも曲物等の木製品が出土した。以下には、石川条里遺跡出土木製品と水田域が連続する長谷鶴前遺跡群の平安時代木製品を時期別に報告する。なお、長谷鶴前遺跡群の中近世の遺構出土木製品は第4章第4節に掲載した。

### (1) 弥生時代中期後半~弥生時代後期の木製品 [図版103・104・PL40~41]

SC061~063・065・067・089・101の畦畔内芯材として木製品が出土した。これらの畦畔のなかで、7b・8区のⅡ-1層上面検出のSC061・062・065は、上層の弥生時代後期の畦畔基部の残存とみられるため、7b・8区の第2調査面検出遺構の木製品には、弥生時代中期後半と弥生時代後期の所産が混在する可能性がある。

**農具** 農具と思われるものは1・2がある。1は周囲の側縁を欠損する板状破片で、広面に部分的な削り痕が認められる。残存形状から曲柄鎌の破片と考えたが断定できない。2は図左の側縁上端と下端を欠損し、中央部と右側縁が残存する板状製品である。斜めに削られた右側縁上部が柄装着部とみられ、形状から曲柄又鎌と思われる。樹種は1がクリ、2がコナラ属クスギ節である。

**建築部材** 3~5があり、3が板材、4は先端がやや斜めのほぞ状に削り出される材である。5は先端が半円状に抉られ、その周囲も削って整えた角材状の木製品で、丸い材と組み合わせる部材とみられる。広面は削り面で右側の右縁際に若干盛り上がる部位があるが、断面の凹凸とみられる。樹種は3がモミ属、4がコナラ属コナラ節、5がサワラである。

**杭** 6~19を図示した。10・18・19は芯持丸木材の杭である。18は側縁周囲も削られ、農具柄か建築部材の転用品とみられる。他は削材の杭だが、7・8・17は杭先端以外の側縁にも削り加工が認められるため、建築部材等の転用品と思われる。SC061・062・065・067出土杭の加工痕は、摩滅し詳細不明のも

のも多いが、7・13・17・18の先端の加工痕は刃先痕が隠れる刃先痕A（宮原1988）とみられ、杭先端加工は金属器による可能性がある。それ以外の出土木製品は加工痕が不明瞭か、僅かな残存で加工工具（石器・金属器）の識別はできなかったが、先端部を欠損する16以外の大部分は先端部が鋭角で、削りの単位も長いものも多く、金属器による可能性は高い。樹種はモミ属が僅かに含まれるが、広葉樹主体で古墳時代前期末と同様である。樹種は6がヤマグワ、7・12・15～19がコナラ属クスギ節、8がモミ属、9～11・13・14がクリである。

## （2）古墳時代前期末の木製品 〔図版105～114・PL42～50〕

9区を中心に調査第1面のSC106・107、SX002等から出土した。畦畔内の芯材は横材の遺存が悪く少ないため、杭を中心に掲載した。

農具 20・21・159の3点出土した。20は直柄横楯で泥除けを装着する紐孔をもつ。類例は板田遺跡にあり、形態・規格、出土遺構の時期も類似する。21は曲柄二又鉞の片側刃部先端片とみられる。上部外側縁側に圧痕と思われる窪みが認められる。159は出土時に刃部に2か所逆V字形の削り込みをもつエブリと捉えられた板状製品で、遺存不良で取り上げ時に破片に割れたため写真のみ掲載した。残存部に柄の装着孔は認められない（PL42）。エブリは石川条里遺跡高速道地点では古墳時代前期以後には出土していないが、板田遺跡に類例がある。樹種は20・21がコナラ属クスギ節、159がエノキ属である。

建築部材 22～24を図示した。22は孔のある板材で両端は腐食し欠損する。23は周囲を削り整形された円柱状木製品で一端は水平、反対端部は斜めに削られる。柱材の転用品の可能性もある。24は端部が斜めに削られる細い板材で、広面の長側縁に沿って小円孔が認められた。孔は側縁に沿って並ぶようにみえるが、斜めで貫通せず、方向もばらばらで端部のケズリ面にも認められる。埋設時のアシ・ヨシ等の地下茎や昆虫の活動による痕跡の疑いがある。樹種は22がモミ属、23がカヤ、24がカエデ属である。

杭 多数出土したが、調査時に加工痕が明瞭で遺存良好なものを選択し、さらに整理作業で選択し25～71を図示した。杭には芯持丸木材と割材が用いられる。割材は表皮が残存せず、元材の断面形が正円とは限らないが、割材の外周が弧を描くものが多いことから丸木に近い材を用いたと推定される。そこで割材外周から元材の推定直径を出し、芯持丸木材直径との比較をした。芯持丸木材の直径は3.5～11cmであるのに対し、割材の推定直径は9.0～23.6cmの範囲である。割材の推定直径は9～14cmが多く、14cm以上では16cm前後と19～23cm前後にやや集中する傾向があるが、散在的な分布である。このうち直径9～11cmが芯持丸木材の直径と割材の推定直径とが重なる領域であり、元材の推定直径がおよそ10cm前後より大きなものは割材、それ以下は芯持丸木材のまま用いられる傾向が窺える。

また、杭先端以外の側面等に加工痕を残すものがあることから、建築部材の杭への転用が考えられる。53は先端部がほぞ状で、70も同じく先端がほぞ状で側面も削られる。67・68・71は杭先端から側面に及ぶ削りが認められ、大きさを勘案すると柱材の可能性もある。59は炭化し、側面に段状の窪みがあることから横架材と考える。47も燃えた際の窪みの疑いもあるが、形状は類似し横架材の可能性もある。側面が削られる29や外面が深く削られる49、周囲が丁寧に削られる64は建築部材の転用と推測する。なお、47・53・59・65は一部炭化し、杭に転用される以前に火を受けていることから、杭用に切り出した材ではなく建築部材等を杭に転用している状況が窺える。

本遺跡出土の芯持丸木杭・割材の杭に転用された建築部材について、同じ長野市内の調査遺構で、芯持丸木材建築材の直径が報告されている石川条里遺跡高速道地点、川田条里遺跡、板田遺跡の出土例を参考

に推察する。3遺跡の報告で、芯持丸木材建築材とされる部材は垂木と柱材、僅かに梁材・小屋組材・横架材がある。出土例が多い垂木には直径4～9cm、柱材には直径9～22cmの丸木材がある。本遺跡出土品と比較すると、垂木材の直径値には本遺跡の芯持丸木材がほぼ一致し、柱材の直径値には割材の推定直径が重なることから、本遺跡出土の直径3.5～11cmの芯持丸木材は垂木を、推定直径9.0～23.6cmの割材は柱材を転用した可能性が考えられる。なお、樹種は33がサワラ、42がカツラ、52がケンボナシ属、26・29がヤマガワ、25・32・40・41・46・47・49・58・65・71がコナラ属コナラ節、31・35・36・45がコナラ属クスギ節、30・34・38・56・57・60・62・63・66・69・70がクリ、27・28・37・39・43・48・50・55・61・64がモミ属、44・51・53・54・59・67・68がカヤである。モミ属・カヤは建築部材の樹種と共通する。このうち芯持丸木材はカツラ・モミ属全てと、25・29・31・35・45・57・65・71である。

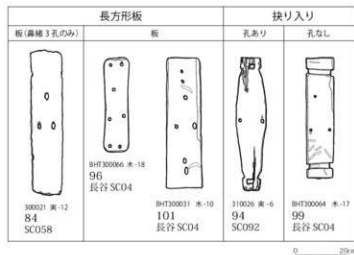
(3) 平安時代の木製品 [図版115～132・PL51～66]

水田面が良好に遺存した石川条里遺跡11区、12区と長谷鶴前遺跡群1区で木製品が数多く出土した。大部分は畦畔内の芯材に用いられたもので、水田面では長谷鶴前遺跡群1区東部の耕作放棄地とみられる泥炭堆積地点から田下駄が若干出土している。芯材は畦畔の一部に集中的に入れられ、その年代は条里型地割内であることから、条里型地割施行以後～9世紀末の洪水被覆までのおよそ9世紀代が主体である。ただし、長谷鶴前遺跡群SC11芯材の一部が非耕作域の古い畦畔SC15に向かって延びていて、平安時代以前のSC15に伴う芯材も含む可能性がある。

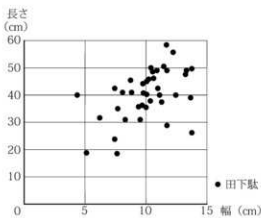
木製品の樹種はサワラやモミ属等の針葉樹が中心で、異なる畦畔の内芯材でも同樹種が多い傾向が認められる。多く針葉樹が選択的に用いられているとみられる。芯材に転用されたさまざまな器種の木製品に同樹種が認められ、このことは樹種による製品の器種認定が難しいことも示している。また、杭やみかん割の放射状割材が少なく、板材が多い点は古墳時代以前の木製品と異なる特徴とみられる。

農具 田下駄(72～107)がある。破片であるが、108～111も後述する抉り込みや孔が認められるので田下駄の可能性もある。田下駄は平安時代前期水田跡の畦畔内から出土したものが大部分で、106・107は耕作放棄地となっていた長谷鶴前遺跡群東部の水田面から出土した。

形状は縦長の長方形板の中央に鼻緒孔3孔を配し、両短辺端に枠材を固定した、あるいは紐を掛けたとみられる孔や抉りの加工をもつ。平面形は長方形のもの、長方形の長側縁両端に抉り加工をもつ細身



第21図 石川条里遺跡出土の田下駄の分類



第22図 田下駄の法量



のものに大別され、長方形は角のある形状が多いが、隅を斜めや丸く整える形状（80・95・96・99・102・105・107）もある。こうした全体形の長方形と長側面端部に挟り加工をもつ平面形の違いに加え、両短辺の中央縦もしくは四隅に配される孔の有無や配置から、第21図に示した4タイプに分類できる。

大きさは第22図にあるように、長さ約35～59cm、幅約9～14cm前後で、なかでも長さ約35～50cm、幅9～12cmが中心である。このなかで長辺両端に孔や側面の挟りを持たない鼻緒孔のみのタイプ（83・84）は約55・58cmと長い傾向がある。また、幅13～14cmの幅広の田下駄（102）には曲物底板転用品が含まれる。鼻緒孔は中央より若干先端側に寄って3孔配置されるが、その位置は足を置いた際に踵周辺が板の中央に位置するように設定されている。鼻緒孔は、直径1cm前後の円形孔から長軸6cm前後の楕円形のものまでであるが、後者は腐食や使用時の摩耗で拡大した可能性がある。穿孔工具痕等は摩滅し不明である。

平面形が長方形で鼻緒孔3孔のみのタイプは3点がある（83・84・90）。このタイプは比較的長辺が長い傾向があり、部分的に遺存する76・79も鼻緒孔の位置から長さ60cm前後と推定され、このタイプとみられる。84の側縁には相対位置に若干窪みがあり、紐等を掛けた圧痕の可能性はある。

平面形が長方形で短辺両端に孔をもつタイプは12点がある（75・80・82・91・95・96・99・100・102・104・105）。106・107・111もその可能性がある。このタイプは隣近くに各1孔ずつ計4孔配置するものが多く、各隅に近接して2孔ずつ並列するタイプ（82・95）や短辺両端中央に縦に孔が並列するタイプもある（100）。また、102は孔間を繋ぐような窪みがあり、いずれも短辺端2孔を繋ぐように紐が掛けられていた痕跡とみられる。105も孔を横断するように同様の窪みがある。107は短辺の片端両脇に2孔と1孔が相対する位置し、反対端部に孔はみられない。長辺側縁端部に挟りをもち、隅孔がないタイプは6点がある（86・87・89・94・97・98）。109・110もその可能性があるが、110は挟りの反対側が削られており、田下駄を別器種に転用したか、田下駄以外の器種の可能性も残る。97・98は端部に横断するように溝を彫り込み、反対面に未貫通のほぞ穴があることから、側板をはめ込む溝をもつ樹形木製品等を転用した痕跡と考えられる。ただし、樹形木製品としてもほぞ穴は外面に位置するので内側の把手をはめ込むほぞ穴とはみられない。

長辺側端部に挟りをもち、四隅に孔をもつタイプは3点ある（85・92・93）。85は孔2孔がややずれて並び、輪かんじき型の枠材が横材を固定する紐孔かもしれない。92・93は端部中央に孔1孔のみあり、92は片側のみ、93は両端にある。形状の類似から左右のセットとみられるかもしれない。

上記のタイプのなかで長方形の鼻緒孔のみの田下駄は、組み合わせる他部材の有無は不明だが、両端に孔や挟りのある田下駄は環状の枝材等を組み合わせた輪かんじき形田下駄とみられる。今回の調査では確認できなかったが、高速道地点では輪かんじき形田下駄の枠材の可能性のある木製品として、横材ともみられる両端側縁に挟りをもつ細い板状の有頭状木製品と、弓状木製品の直径2cm以下の湾曲した枝材が報告されている。長さ40～60cm有頭状木製品、長さ120cm前後弓状木製品は、本遺跡の田下駄サイズで想定される円形枠材とすれば数値はほぼ一致する。

破片で出土したために形状が不明なものは、10点ある。（72～74・77～79・81・88・103・108）。74は鼻緒孔近くに紐を括る孔か挟りか不明な遺作がある。

また、転用品の田下駄は上述の97・98以外に、端部に側板付設の段差のある101、線条痕のある102、桶状の104がある。101は曲物底板から組板の転用、102は端部が若干丸味があるので曲物類の底板等の転用と考えられる。転用の痕跡のない田下駄も、木芯部を含まない直径40cm以上の木材から切り出した板材を素材としていること、建築部材と共通する樹種（サワラ・モミ）が含まれること、93・83のように表面が削られていること等から建築部材転用の可能性が高い。

**建築部材** 他材と組み合わせるほぞ穴やほぞ、側面に抉り込みの欠込等の部材を組むための加工がある比較的大きめの材を建築部材と捉えた(116・118~120・127・130・132~134)。完形に近いのは133・134の2点のみで、多くは部分的破片だが、部材を組むための加工のある材のなかで遺存長が最も短い116がおおよそ長さ60cmであり、目安として60cm以上の破片は建築部材の可能性を考えた。

以下に個別の所見を記述する。116はほぞを削り出し、狭い側縁に欠込とみられる浅い抉り加工がある角材で、118・119は端部に1孔ほぞ穴が開く板材である。120は2孔並列する柄穴が約40cm間隔であけられている。両端が遺存せず全長は不明で、ほぞ穴は大きくその間隔が狭いが、横架材とみられる132と同様に、横架材の可能性もある。横架材とすれば、屋根の小屋根内の二重梁等の上下の異なる材を繋ぐ中間材か、直径(幅)40cmの材で先端のほぞ2本もつ材と接続する材と考えられる。127は側縁に欠込がある横架材と考える。130は図左の左側面に浅いほぞ穴4孔と右側面に3孔もつ角材である。図の左側面に40~50cm間隔、右側面に78cm間隔のほぞ穴を穿ち、図の正面上方にほぞ穴1孔がある。ほぞ穴は何れも未貫通で、長さ5~6cm、厚さ3~5cmの大ききで細材を差し込む造作とみられる。ほぞ穴の配置からT字形に3方向へ延びる材を組み合わせる材とみられるが、横架材か縦材かは不明である。132は側面に若干丸みのある欠込、広面に54cm間隔の方形ほぞ穴が2孔あり、横架材とみられる。他に直径1.5cmほどの斜めに入る小円孔が認められるが、孔は斜め方向に未貫通で配置も不規則で廃棄後の昆虫やアシ・ヨシ等の地下茎による痕跡の可能性もある。上記の建築部材で複数のほぞ穴が認められる材のほぞ穴間隔は、120が40cm、130が40~50cmと78cm、132が54cm、間隔といずれも狭い。133・134は両端が尖った長い板材で、同じSC11内で近接して出土し、形状も規模も類似する。いずれも片側端部を欠損するが、残存端部は三角に尖らせ長さは2.2~2.5mほどである。なお、133は先端が欠損する周囲に孔状の窪みがみられるが孔とは断定できない。2枚セットとも断定できないが、規模から建築部材とみられる。類似は榎田遺跡で矢板等に加工した壁板と報告された木製品3点がある。本遺跡の133・134と長さ幅も類似し、類似が複数あることから本来からこの形状の製品である可能性がある。

**建築部材の可能性のある不明材** 上記以外に板状、角材状の加工痕は判然としにくい木製品が多く出土した。端部を欠損するため本来の長さは不明で、60cmを下回るものもあるが、建築部材と類似する長さのものもあり、樹種はサワラ・モミ属等の建築部材と同種を用いる。建築部材を分割、もしくは転用した材の可能性もある。用材は芯持丸木半截材が1点と、割面からなる板状・角材がある。芯持丸木の半截材123は直径5.5~6cm前後の丸木材を半截し、表皮側に節が抜けたとみられる孔がある。樹種は広葉樹のコナラ属で割面からなる板状・角材と異なる。次に割面からなる板状・角材だが、サワラ・モミ等の針葉樹を多用し、割面は比較的凹凸がないものの加工痕が少ない。

建築部材の厚さについて榎田遺跡では建築部材板材の厚さは建物内の加重の掛かり方に関連すると推測されている(伊藤1999)。本遺跡出土材でも用途を考察するために、建築部材やその可能性がある部材の断面形状の厚さを中心に幅一厚さ、幅一長さの比較を試みた(第23図-2)。幅一厚さの比較(第23図-1)では、厚さは1.0~1.9cm、2.4cm、2.7~4.1cm、5.6~6.1cm前後に集中域が認められる。

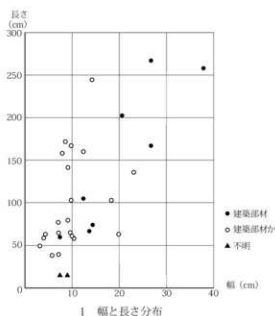
厚さ1.0~1.9cmの不明材は7点が該当する(117・112・135・136・138~140)。このグループは遺存幅3.3(112)~10.3cm(139)で幅平均値は幅7.8cmである。遺存長は36.7(138)~78.5cm(135)で、平均遺存長は54.7cmを測る。形状は112が角材、他は板状である。厚さ2.4cmの材は1点(114)で、幅4.4cm、遺存長は62.0cmの角材状材である。これらの材には部材同士を組むための加工はない。厚さ3~4.1cm前後の材は、14点が該当する(113・115・116・118~122・124・126・128・131・134・137)。建築部材(116・118・124)が

含まれるグループである。幅は削り等の加工痕がないため本来の規模が不明なものばかりだが、遺存幅3.9(115)～26.5cm(134)まであり平均幅は15.1cmである。遺存長は57.1(115)～266.0cm(134)まであり、平均遺存長は114.2cmと長い。その遺存幅・長さ平均値は厚さ1.0～1.9cm・2.4cmの材平均値の約2倍にあたる。なお、113は断面三角だが、本来の形状か不明である。また、121は端部と中央付近に列状小孔があり、糸の総を巻き取る総かけと報告されるものに類似するが、石川糸里遺跡高速道地点出土例と比較すると、孔間隔や配置が異なることに加え、中央に軸孔がないので本例の全長は遺存長の2倍以上の130cm以上と推測され、大きすぎると思われる。従って、小孔は植物地下茎による浸食によるもので、この木製品は総かけではないと判断した。

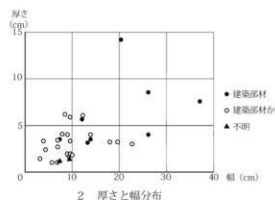
厚さ5.6～6.1cmの材は6点が該当する(125・127・129・130・132・133)。このうち127・130・132・133を建築部材と捉えた。これらの建築部材を含めた幅は12.2(127)～37.5cm(133)まであり、平均は19.2cmである。遺存長は103.5(127)～258.5cm(133)で平均177.9cmである。全体的に幅広で長いものが多く、断面形状は長方形の角材状、板状がある。上述した丸木半截の123もこのサイズには含まれる。125は端部に僅かに低く削り込まれたような削りがあり、柄穴が欠込の可能性もある。また、129は芯が空洞にみえるが腐植によるとみられる。

上記の建築部材やその可能性がある木製品の厚さ比較では、厚さに比例して幅が広く長い大型材となる傾向が認められ、厚いものほど残りやすい傾向を現すともみられる。また、一定の厚さに集中域が認められ同じ材を分割した可能性もあるが、榎田遺跡の古墳時代建築材では加重のかかる部位の材は厚い傾向と捉えられている(伊藤1999)。これに従えば建築部材の厚さは、用いられる部位の違いを現すと考えられる。榎田遺跡の分類では壁板材は厚さ平均1.7cm、床板・台輪は厚さ平均4.3cmとされ、本遺跡例を対比すると上記の幅1～2cm前後が壁板材、幅3～4cm前後が床板とみられる。厚さ5.6～6.1cmは該当するものがないが、床材や軸組に係る部材となるだろうか。

これらの建築部材やその可能性のある材は集落の建物廃材を利用したと思われるが、これまで県内の平安時代集落遺跡では柱穴がないものや礎石のある堅穴建物跡、多様な掘立柱建物跡が知られ、東北では平地建物跡(上台建物跡)も確認されている。多様な構造の建物跡が想定されているが、建築部材の出土例が少なく比較検討しにくく、本遺跡の出土建築部材も具体的な建物種や部位を明らかにできなかった。ただ、出土した建築部材やその可能性がある木製品は板状材が多く、その樹種は針葉樹に偏る傾向がある。これは板状材を多く必要としたため、板材が取りやすい針葉樹を多用した結果で、このことから柱を用いず、板壁で屋根を支えるような板材を多用する建築の廃材を用いた可能性も考えられる。



1 幅と長さ分布



2 厚さと幅分布

第23図 建築部材・不明木製品の法量

杭 143~148を图示した。先端を尖らせた棒状材を杭としたが、今回の調査でみつかった平安時代の畦畔では杭の打設は少なく、出土時に打設されていたのは148のみである。他は畦畔内の横材に混在して出土した。直径は3.0~6.5cmで、本来の長さは不明ながら遺存長は約23~163cm。木取は144・147が割材、他は枝材・芯持丸木である。147は放射状のみかん割で、144は更にその両端を割った柵目材である。146・147は遺存長が長く建物の壁塀等の木舞かもしれない。

容器類 曲物底板とみられる149~152がある。平面形は楕円形(149・150)、円形(151・152)の2種がある。149は端部にカキゾコとみられる段差があり、線条痕もあることから組板に転用されたとみられる。150は縁に沿って段差をつくるカキゾコの曲物底板1/4ほどの破片で、周囲に紐綴の孔が並び、使用された樹皮が僅かに残存する。破損した端部内側にも孔があるが、カキゾコを伴わず側板を綴るものではなく転用時か修復時の孔と思われる。線条痕があることから最終的に組板に転用されている。151は段差のないクレゾコとみられるが、樹皮紐孔や目釘がみられず、蓋かもしれない。152は側板を固定する段差を作り出すカキゾコで、側板固定の目釘は認められず、中央を通る中軸線と直交方向の4カ所の縁に側板固定のためとみられる小孔がある。また、線条痕と中央に蓋のつまみを設置する孔とも思われる孔があることから曲物底板から組板・蓋へ転用したものと考える。このように転用品が多く、田下駄101も曲物底板の転用とみられる。

#### (4) 中世・近世の木製品 [図版132-153~156・PL66]

中世・近世の木製品は1区の井戸跡および12c区の溝跡から出土した。容器類(153・154・156)のうち、153は曲物側板で、若干重ねを含む側板を2枚重ね、相対する位置にそれぞれ樹皮で綴る。内面には曲げのための浅い切り込みが無数ある。154・156はクレゾコの曲物底板とみられる。いずれも目釘はないが、156は側面わきに小孔が認められる。155は156と共に、近世末の塩崎用水より下部の溝跡SD189から出土した漆器椀で、内面に赤漆が塗られ、外面の漆膜は剥落するが、僅かな残片から黒漆に赤漆で文様を描いていたとみられる。

## 第4章 長谷鶴前遺跡群

### 第1節 遺跡の概要

長谷鶴前遺跡群は篠山山麓に形成された崖錐地形や扇状地に立地する遺跡で、東側は石川条里遺跡と接する。かつては鶴前遺跡、立町遺跡、戸部間遺跡、会下平遺跡、観音下遺跡等の小規模な遺跡が点在していたが、現在は市教委により長谷鶴前遺跡群としてそれらを大きく括られている。遺跡の時期は地点別に異なるが、縄文時代～中世の遺跡があり、これまでに鶴前遺跡、鶴萩七尋岩陰遺跡等のほか、本遺跡群と一部重なる地点が石川条里遺跡宮前地点として調査されている。

鶴前遺跡では弥生時代後期、奈良時代、平安時代の集落跡が確認され、石川条里遺跡の宮前地点でも弥生時代後期の竪穴建物跡が確認されている。これにより本遺跡群北部は水田遺跡の石川条里遺跡を臨む山際に立地する集落遺跡であることが明らかにされている。また、本遺跡南部には八幡宮古墳、東谷古墳等の後期古墳が含まれるとともに、隣接する山麓の上方にはいくつかの古墳群が存在する。また、鶴萩七尋岩陰遺跡では古墳時代に葬送の地として利用されていることが発掘調査で確認されている。

今回調査対象地は本遺跡群南部に位置し、調査歴がなく、遺跡の様相は不明な点があった。今回の調査によって遺跡群南端部については、平安時代までは低地が山際まで続き、中世後期には開発が進み居住が始まると共に、山手からの堆積土が増加し、さらに人為的造成が加わって低地より若干高い地形に変化していたことが判明した。

また、今回の調査では幕末から明治時代に存在したといわれていた長谷焼の工房跡も確認することができた。検出した遺構の種類と数量は、以下の第24表に示した。このうち、第5調査面については、石川条里遺跡の水田跡の広がり的一部と捉え、第3章で本遺跡群についても記している。

第24表 長谷鶴前遺跡群の時期別遺構検出数

時 期	遺構名 掘立柱建物跡 工房跡 (ST)	水田跡		道路跡 (SC)	居館堀跡 (SD)	溝 跡 (SD)	土 坑 (SK)	集石 遺構 (SH)	畝状 遺構 (SL)
		水 田	畦 畔 (SC)						
平安時代 (第5調査面)		1	16						
中世 (第4調査面)			2	1	1	3		1	
中世～近世 (第3調査面)	1			1	1	37	282	1	1
近世末～近代(第1・2調査面)	1					11	107		
合 計	2棟	1面	18条	2条	2条	51条	389基	2基	1面

## 第2節 調査の概要

### 1 調査の方法

#### (1) 発掘調査の方法

##### ア. 調査区とグリッドの設定

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、埋文センターが統一的に調査を行うために作成した「発掘調査の方針と手順」に則して実施した。

##### 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、長谷鶴前遺跡群（HASE T SURUSAKI）「BHT」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名を大文字アルファベット3文字で表したもので、1文字目の「B」は長野県内を10分割した長野市・千曲市・上水内郡・埴科郡の地区を示し、2文字目、3文字目は遺跡名のローマ字表記の2文字を選択したものである。

##### 調査区・グリッドの設定と略称 [第5図]

グリッドの設定については、第3章第2節1に記した。調査区は市道を境に、東から西へ1区から3区までの3地区を設定した。2018（平成30）年度に調査を実施した2区の市道下については、2区（市道下）とした。なお、長野市の遺跡範囲では1区、2区が石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群の境界にあたるが、2016（平成28）年度の長野国道との協議により、長谷鶴前遺跡群として調査を実施することとした。また2区南東部は長野市の遺跡範囲からは外れるが、遺構を検出したため、2017（平成29）年度の協議により、遺跡範囲外についても調査区を拡張して調査を行うこととした。

##### イ. 表土の掘削と遺構の検出 [第24図]

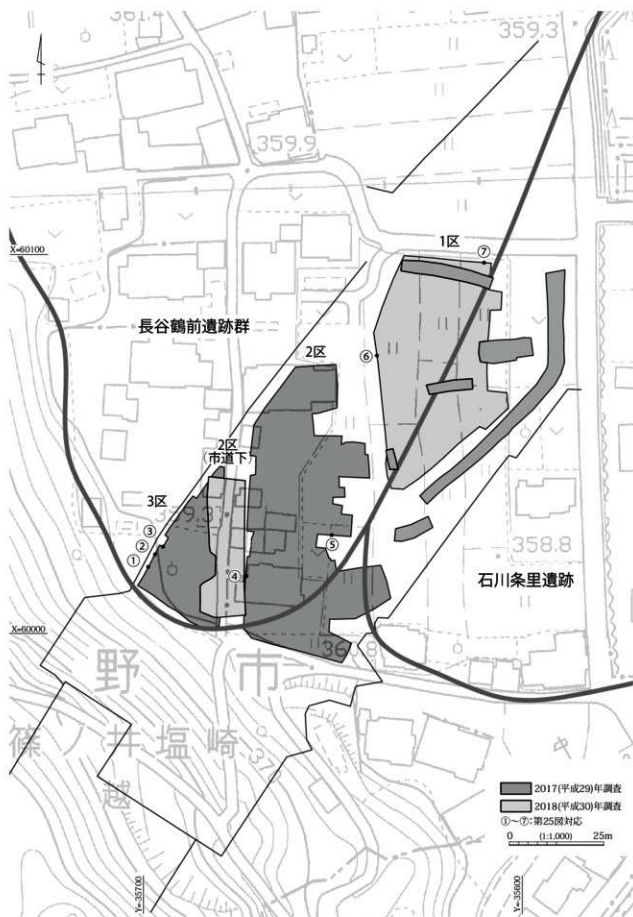
はじめに重機によりトレンチを掘削し、土層堆積状況、遺構検出面の確認を行った。次に重機で表土を掘削し、前述のようにグリッドを設定して、人力で遺構検出を行った。本遺跡では、遺構調査面を5面確認したので、上位の調査面の調査が終了した後、下位の調査面までの間層を重機により掘削する、という手順で調査を行った。遺構検出の際、出土した遺物は包含された層位名、またはグリッド名、あるいは帰属遺構名を付して取り上げた。

本遺跡の遺構調査面は5面を数える。各面で検出した遺構の時期としては、第1調査面は近代遺構（3区陶器製作工房跡）、第2調査面は近世末から近代の遺構（2区）、第3調査面は中世の整地上面（2区道路跡・側溝跡）、第4調査面は整地層下面（2区中世の水田跡）、第5調査面は平安時代の水田跡である。

なお、3区の陶器製作工房跡は、幕末から明治時代にかけて長谷地区で営まれた「長谷焼」（『塩崎村史』1971）を生産した窯跡に伴うと考えられるため、本書では長谷窯工房跡という呼称を用いた（柴田2020）。年度別の調査の概略は以下のとおりである。

##### 2017（平成29）年度

山側の3区で、幕末から明治時代にかけて操業していた長谷窯の工房跡を検出した（第1調査面）。並行して、2区の近世末から近代の遺構（第2調査面）と道路跡とその側溝（第3調査面）、中世の水田跡（第4調査面）、平安時代の水田跡（第5調査面）の調査を行った。また、1区は地元で「蓮田」と呼ばれる低湿地で、出水が激しかったため、トレンチ掘削による確認調査のみを実施し、第5調査面で平安時代の水田跡が遺存することを確認した。



長野市都市計画図(1:2500)「91-3」/「01-1」を使用

第24図 長谷鶴前遺跡群 年度別調査範囲図

## 2018（平成30）年度

1区の第5調査面の調査で、平安時代の洪水砂層の下から、泥炭層に被覆された水田跡を検出した。2区（市道下）の調査では、2区の第3調査面～第5調査面に対応する調査面を設定し、遺構検出を行った。検出した遺構のうち、第5調査面の平安時代の水田跡については、石川条里遺跡で検出した水田跡の広がり的一部として捉え、本遺跡に関する遺構等の所見は第3章第2節に記した。

### ウ. 遺構調査

遺構名については、第3章第2節1に記したものを以外に本遺跡で用いた記号を記す。

SH：石が面的に出土するもの。

集石遺構（SH）は、検出面で平面形状を確認後にサブトレンチで断面の形状や集石の厚さを確認し、土層断面の記録後に、全体を記録した。

遺物は遺構ごとに層位を分けて取り上げ、出土地点の必要なものには遺構ごとの遺物番号を付して取り上げた。終了した調査面は、下層の遺構・遺物の有無を確認するため、重機による深掘りを行った。なお、調査区土層断面からは、科学分析を行うことを目的に土壌サンプルを採取し、プラント・オパール分析、花粉分析、放射性炭素年代測定（AMS）、土壌分析などを実施等した。溝跡等からの出土骨については、専門家による鑑定指導を受けた。

### エ. 記録作成

第3章第2節1と同様である。

## （2）整理作業等の方法

### ア. 整理作業

#### 遺物の整理

ブラシを用いた水洗作業後、取り上げ袋ごとに台帳登録をした。土器・陶器・磁器・土製品は微細な資料を除き、全て注記した。石器・石製品・木製品は管理カード（またはラベル）を添付した。遺跡名は遺跡記号BHT、出土地点は以下の表記を用いた。

検出面：検 第2検出面：2面 表土：表 表採・排土：Z トレンチ：T かく乱：カク 壁：カベ 埋土：フ

土器・陶器・磁器は、遺構別、グリッド別に分類し、遺構の時期決定など資料化が必要なものを抽出し、管理台帳を作成した。土製品・石器・石製品・木製品は、器種分類し報告書掲載遺物を抽出し、管理台帳を作成した。金属製品は、発掘調査後はシリカゲルを入れた密閉容器に保管し、その後報告書掲載資料を抽出し管理台帳を作成した上で、応急的保存処理を実施した。遺物の実測は手実測により行った。

出土骨は、土砂取りや水洗・乾燥後、鑑定指導を受け、必要な資料については写真撮影を行った。

#### 遺構図・写真の整理

第3章第2節1と同様である。

### イ. 報告書の作成と資料収納

第3章第2節1に記した。



## 2 基本層序

### (1) 土層の概要

今回の調査では遺跡周辺の土層や遺構の既存情報がないため、調査区内の土層と遺構面を把握するトレンチ掘削から着手した。トレンチ調査の過程で複数の遺構面が確認され、その都度トレンチを追加掘削しながら土層を把握し、全体の様相が把握できたのは調査の終盤となった。また、下部土層は石川条里遺跡から続くことが判明したこともあり、整理作業で改めて基本土層をまとめなおした。

長谷鶴前遺跡群の土層概要は、最下部に低湿地性の泥炭・灰白色粘土層互層のXV層(XIV層)があり、その上に石川条里遺跡から続く弥生時代中期後半～平安時代の水田土壌・洪水砂層(ⅩⅢ～ⅩⅧ層)、中世水田層Ⅸ層が重なる。山際を中心にⅨ層上部には、山側から供給された堆積土Ⅵ層、居館跡関連の造成土層Ⅴ層、さらに近世以後の山から供給された堆積土層や造成土層、腐植土層のⅠ～Ⅳ層が続く。Ⅸ層以下の土層は石川条里遺跡から続く湿地性の低地に堆積した土層群だが、Ⅵ層以後は千曲川系堆積物がみられなくなると共に、山からの供給された土層が増え、併せて人為的な整地層も加わっている。

上記の土層の様相から長谷鶴前遺跡群の現地形は山際の崖錐地形と認められるが、元々は崖錐地形に伴う堆積土層は山際の狭い範囲にとどまり、大部分が千曲川から供給された堆積土層と湿地性の泥炭層が山際まで連続していたと捉えられる。その後、山からの供給された暗褐色・黒褐色の腐植土層基調の土層群や崩落土の堆積、整地土層が加わることで山際が広く高くなり、現在みるような地形に変化し、併せて居住に関わる人間の活動に伴う造成土層や遺構が認められるようになる変遷と推測される。この土層の様相が大きく変わる境界が、第4調査面被覆土層のⅥ層、続く整地土層のⅤ層で室町時代後半頃にあたる。

なお、本遺跡1区、2区と3区下層低地内の土層は隣接する石川条里遺跡と共通するが、2区と3区の土層は本遺跡群独自の土層となるため、石川条里遺跡と異なる土層番号を付した。また、Ⅰ～Ⅵ層では複数地区にわたる整地層Ⅴ層や山からの崩落土とみられるⅢ・Ⅵ層は基本土層として捉えたが、これ以外にごく狭い範囲に分布する局所的な山から供給された堆積土層がある。これらの土層は溝跡埋土やその周辺にのみ分布する土層で基本土層に含めていない。さらにⅢ・Ⅵ層は調査区全体に均一に堆積しておらず、山際に厚く低地側は薄く、薄いところでは腐植化や上下の黒褐色層土粒が混じって黒味を帯びて上下層との識別が難しい地点もあった。特にⅢ層の黄褐色土は3区山際では明瞭だが、3区中央および2区側や市道下の調査区では黒味を帯びてⅡ・Ⅳ層との識別が難しく、中間の様相の土層も枝番号を付けて分層している。また、第3調査面上面に厚い集積層がみられたが、大部分は還元傾向の土層が多く、掘削直後は灰色にみえても、しばらく空気に触れると表面が酸化して当初の色調と異なる状況もあり、同一層でも色調の表記に地点毎にばらつきを生じている。

以下に各層の詳細記す。

### (2) 基本土層

#### I層

表土層を一括した。調査前では1区が蓮田、2区が宅地、3区が畑に利用され、場所毎に土質が異なる。1区は低地で水田の褐灰色のグライ化した軽埴土で、調査区東側の南北市道脇には現代の盛土がある。2区、3区は黒～暗褐色の粗砂を混在する埴土を基調とし、2区には更に宅地に係る造成土が載る。

#### II層 黒褐色～暗褐色土層 腐植土層(第1調査面)

遺跡背後の山から供給された流紋岩・凝灰岩由来の粗粒砂(山砂)を混じる腐植土層を基調とし、2区では層厚を減じながら一定の層厚で連続し、2区端部付近で途切れる。3区のみ長谷窯工房廃絶以後の

陶器・素焼・窯道具類を混在する盛土層（Ⅱ-1層）、その下に窯業関連の工房跡とその整地土層群（Ⅱ-2層）に大別され、Ⅱ-2層はさらに庭部分と建物基礎部分では細かく細分されたが、長谷窯工房に伴うⅡ-2層については後述する。

### Ⅲ層 ぶい黄褐色～褐色土層 山からの崩落土層（第2調査面）

山砂の多く混じる黄褐色土層で、3区北側のⅣ層上面で検出した畑跡を埋めている。層厚は3区北西側が厚く3区中央へ向かって層厚を減していることから北西山側からの堆積土とみられる。2区も一定の層厚で認められ、本土層上面が第2調査面にあたる。2区ではⅢ層が畝状のSL01を埋めているように捉えられたものの、東端ほど層が厚い傾向を示し、2区はⅢ層を2次的に整地した土層の可能性がある。

### Ⅳ層 黒褐色～褐灰色層 腐植土層

Ⅳ層は腐植土基調で、2区、3区のⅢ層とⅤ層中世後期整地層の間に堆積し、北側ほど厚い。3区中央付近や2区南部では、上層のⅢ層が薄く黒味を帯びることに加え、Ⅱ層とⅣ層が近接してⅡ～Ⅳ層が識別しにくかった。また、本層は単一層ではなく3区北等では上部が近世とみられる畑耕作土、2区では中世以後の道路整地土層やその側溝とみられる遺構、山からの崩落土や流水で運ばれた部分的な堆積土層を挟む。本層は2区、3区の第3調査面の中世後期の居館跡の廃絶以後から近世の耕地利用までの長い時間幅を含み、本土層中には局所的な山から供給された自然堆積層や人為的整地層が含まれる。

自然堆積層では、山側から供給されたとみられる灰白色シルト層、粗い山砂層（ぶい黄色等）、細砂とシルト（灰オリーブ色）の互層堆積等がある。いずれも狭い範囲に堆積し、雨水等によって運搬された土層とみられる。灰白色シルト層は背後の山地を構成する凝灰岩等を中心とする岩石由来の細粒堆積物とみられ、流速の遅い雨水等の水流で運ばれた土層とみられる。居館跡SD40埋土内に4枚認められ、そのSD40西端付近やその南辺際のⅤ層上面、2区中央の南北方向のSD49・50等溝跡埋土等の調査区北西側にも分布する。2区や3区南部の山際には認められない。このうち、SD40最下層の灰白色シルト層はSD40南壁側にも続いており、SD40南縁外側に分布する土層と関連するとみられる。また、SD40を切るSD63等の埋土中の灰白色シルト質粘土層はSD40埋土の灰白色シルトに由来する2次的な堆積土層かもしれない。山砂層は、背後の山を構成する流紋岩等の岩石由来の粗粒砂を中心とし、やや激しい降雨等で山地表面が直接削られて溝跡等の低い場所に流入した土層とみられる。調査区南西部山際のSD038やSD29周辺、SD40埋土上層に認められた。また、細砂とシルトの互層堆積は3区南東部の2区（市道下）部分で認められたが、この土層は南西山側から北東方向へ押し出した堆積土とみられ、3区南壁付近の山砂層の堆積地点に近いので、類似時期に堆積した可能性がある。これ以外に2区では整地土層中にも山砂層を挟んで数枚のシルトや細砂層が認められた。

人為的整地層は道路跡SC01周辺（2区第3調査面上）や2区中央東寄りの低地境に局所的に認められた。道路跡SC01はSD40埋没以後に北側に延長されたとみられるが、2区南壁の土層観察では西側に整地土を伴って造り替えられていると捉えられた。また、調査初年の平成29年度調査では2区北側でSC01の造り替えに伴う側溝とみられるSD11・14・21・24・27・28等をⅢ層上面の第2調査面で検出したが、SC01がⅣ層の整地層を伴う盛り上がる遺構であることから、第2調査面ではⅢ層遺構と誤認した可能性があり、整理時にⅣ層中の遺構と捉えなおした。

### Ⅴ層 ぶい黄褐色～灰褐色粘質土層 中世の整地層（第3調査面）

2区南部から2区中央、3区北側に分布する風化凝灰岩片の混じる堅く締まった土層である。淘汰の

悪さと堅緻さから人為的に盛られた整地土層とみられる。2区では上層からの浸透した酸化鉄が本土層上面付近に集積し、2区の低地寄りではグライ化し灰色傾向となる。本整地層は道路跡 SC01 に伴う側溝 SD25・32 は整地層を伴って造り変えられており、複数回の整地面が含まれる。

#### VI層 灰色シルト・黒オリーブ色シルト質粘土・灰オリーブ色灰色山砂層 山からの崩落土層

第4調査面を被覆する山側から供給された自然堆積層で、山際の3区南側は山砂主体で厚く堆積し、低地側2区ではシルト質粘土層が数cmほどの層厚で広がり、2区途中で薄く途切れる。山際は上部ほど粒径の粗い山砂が主体で、低地側ほど微細粒になる傾向がある。南西側の山からの崩落土や降雨で山地が削平されて流入した土とみられ、本土層の上面はV層の整地で埋められている。

#### VII層 オリーブ黒色～灰色粘土層 中世の耕土層・腐植土層（第4調査面）

第4調査面の2区水田跡耕土、2区（市道下）の道路跡や3区北部の屋敷地造成土等の第4調査面遺構の基調となる土層である。水田耕作土層は粘りの強い締まった粘土層で、灰黄褐色を帯びる土層と分層してきた箇所がある。水田以外では、山際の道路跡 SC20 や SD39 に伴う屋敷地付近の地形的に高い箇所では僅かに山砂の混じる、粘りがあまり強くない腐植土系の黒味を帯びた土層となる。なお、水田耕作土層は石川条里遺跡の基本土層Ⅱ層に該当する。

#### VIII層 褐灰色黄灰色細砂層 平安時代の洪水砂層

第5調査面の水田跡を被覆する細砂～シルトの洪水堆積層で、1区南部では下部に粘土ブロックの擾攪が混在する。石川条里遺跡Ⅳ層にあたり、石川条里遺跡10区まで連続して分布する。水田面上では完形の須恵器坏みや黒色土器鉢が出土し、平安時代前期末の洪水砂層と捉えられた。

#### IX層 黒色～黒褐色泥炭層

第5調査面の水田面直上を被覆する泥炭層。平安時代の条里型水田上面に堆積した薄い黒色泥炭層と、条里区画内に耕作されずに古い耕地のまま残存した非条里型水田上面に堆積した厚い黒褐色泥炭層を一括した。両者は、被覆する水田面の区画方法の違いから土層の形成開始時期と形成時間幅が異なるとみられるが、土質が類似して識別できないところもある。また、最終的にⅧ層に被覆され埋没時期は同じと捉えられることから同一層として括った。

#### X層 黒～黒濁色粘土層 平安時代の耕土層（第5調査面）

平安時代の洪水砂層に被覆された水田跡の耕作土層にあたる。色調から腐植土や泥炭層由来の土層とみられ、1区の非条里型区画内では平安時代以前の旧耕土の残存とみられる黒色粘土層や灰色粘土層に分層された。石川条里遺跡のV層に該当し、長谷鶴前遺跡群1区の非条里型区画の畦畔は条里型地割施工以前の平安時代以前とみられることから、石川条里遺跡と同様に古墳時代末～平安時代の耕土層と捉えられる。

#### XI層 灰白～灰黄褐色粘土層

上記のX層の下に位置し、色調や土質から石川条里遺跡V層の古墳時代前期末の水田跡耕作土層に連続すると捉えられる土層。検出遺構はないが、本層上面の層理面には上層X層の凹凸があり、本土層の下部層理面もやや凹凸が目立つことから水田耕作による踏み込み痕の可能性がある。水田耕作土層とみられる。

**XII層 灰色粘土・黒色泥炭質土層**

本遺跡における層順と、石川条里遺跡の弥生時代中期後半水田跡を被覆する泥炭層・灰白色シルト層（VII層）に特徴が類似することから、対応する土層とみられる。

**XIII層 灰色粘土層**

層順と上部をXII層泥炭質土層に覆われることから石川条里遺跡の弥生時代中期後半の水田耕作土層（VIII層）に対応する土層とみられる。遺構及び遺物出土はなく詳細な土層年代は不明で、調査時には石川条里遺跡から連続した土層と捉えておらず、自然堆積層と想定していた。よってプラント・オパール分析等の分析や面的調査は実施していないので厳格には、本地点での水田耕作の存在には可能性にとどまる。

**XIV層 黒色粘土層**

XV層の泥炭層・泥炭質土層・灰白色シルト層の互層群の最上部に位置し、やや層厚のある腐植土基調の粘土層。層下層の層理面は平坦で、踏み込みは認められない。水田土壌と確定できていないが、下層のXV層より厚い層厚の違いから別層として捉えた。3区の山際や1区では比較的厚いが、場所によっては層厚が薄くなってXV層との識別がしにくいところがある。上層XIII層との層境は比較的細かい凹凸がみられるものの、XV層との下層境は平坦で自然堆積層の可能性が大きい。土層および堆積状況の類似から石川条里遺跡のIX層の一部とみられる。

**XV層 泥炭・灰白色粘土・黒色粘土等の湿地性自然堆積層**

XIV層以下の泥炭、泥炭質粘土、灰白色粘土が縞状に堆積する土層群。1枚の土層層厚は10cm前後と薄く、3区では最下部に樹木片を混じる比較的厚い泥炭層が認められた。遺構及び遺物出土は、なく、湿地性の自然堆積層とみられる。土層および堆積状況の類似から石川条里遺跡のIX層にあたとみられ、放射性炭素年代測定では縄文時代後期～晩期の年代が得られている。

**(3) 整地層**

前述の基本土層のうち、整地層と確認できたII層（長谷窯工房跡ST01関連）とV層（中世の居館跡他、問題）について遺構等の関係性等について記す。

**長谷窯工房跡に係る第1調査面整地層 灰黄褐色～褐色土層**

3区で確認された。範囲が限定的であることに加え、多様な土層が含まれ単一土層としてまとめにくいことから、基本土層番号を付けせず、基本土層II層内の土層として括った。整地層は大きく長谷窯工房廃絶以後の畑地に転用した段階（II-1層）と、長谷窯工房操業段階（II-2層）に分けられる。II-2層は、ST01を横断するAトレンチ断面の観察から、①前庭部整地、②ST01整地、③北側石列（石積）の順序が捉えられ、石列下部付近で前庭部整地土層が一旦止まっており、ST01付近を掘り込んでいると捉えられた。当初からST01の位置が設定されており、ST01と前庭部を含めて同一時期に造成されたと捉えられる。

**工房廃絶以後の整地土層（II-1層）**

3区は調査前では畑地で、工房跡はこの畑地I層直下のII-1層（暗褐色土層）を除去して検出した。調査当初に入れたトレンチ断面ではII-1層直下の西側山際には若干還元化した褐灰色土層が一段高く分布するように認められたが、工房廃絶以後の整地土層の一部が、操業時の施設の基礎の土層が断定できな

かった。この褐灰色土層を含むⅡ-1層は背後の山を構成する凝灰岩や流紋岩由来の石英粒や、長谷焼の陶器小片が混在する。Ⅱ-1層下にあるⅡ-2層褐灰色土層との層理面がほぼ水平であり、少なくともこの土層以下は前庭部の整地土層と捉えた。

#### 工房跡関連整地土層（Ⅱ-2層）

**前庭部整地土層：**ST01周辺は細かく分層されたが、前庭部の大部分については詳細を捉え切れなかった。前庭部は3区中央で西側山側を削り、中央東寄りの低い場所にて褐灰色土層と黄灰色土層を用いて盛り土して平坦としている。3区西側は褐灰色土層を台状に盛り土したように認められる部分があるが、Ⅱ-1層中の工房廃絶以後の盛り土作業過程での整地土層か、工房時の施設の基礎の土層かは明らかにしえなかった。また、ST01脇付近は黄褐色土で整地されている。

**ST01整地層：**ST01を中心に建物裏手山際までを平坦にすると共に工房の基礎をかたちづくる整地層で、ST01北側石列（石積）を境として、検出時の高さで北側の前庭部から40cm前後高く平坦に造成されている。ST01北側の前庭部の石積、ロクロ台石はST01整地後に設置している。ST01整地範囲内に入れたトレンチの土層の断面観察から、ST01周辺は工房構築以前に存在したⅡ層や山際斜面を掘り込み、山際から順次前庭部へ盛り土する、一連の作業で造成されたことが捉えられた。

その整地は、山側斜面を削平した上にST01裏手山側から黒褐色を基調とするⅡ層を盛り込んで裏手部分を造成したのち、ST01にあたる範囲を礫層や山砂層、その次にぶい黄褐色土～黄橙色ブロック土の混じる土層を山手の南側から前庭部側へ順次盛った後、その整地上面を灰黄褐色～褐灰色の山砂混じりのやや還元化した締まった土で整えている。また、ST01の南の山側にはST01前庭部側の石列と平行する拳礫が集中する土層が帯状に認められ、暗渠排水と類似した方法による雨水や山からの流水を遮断する造作とも考えられたが、詳細は明らかにしえなかった。ST01整地層上面検出面では締まった土間状と認められ、焼物材料の灰白色粘土や灰、素焼き焼物片が混じることからも生活面に近い部分が残存したとみられる。

#### 中世の第3調査面整地層（V層）

2区第3調査面では堀跡SD40で区画された居館跡や道路跡SC01に伴うとみられる整地土層が確認された。このV層は、北端はSD40、東端はSC01を境に大幅に層厚を減じながら一定の層厚で2区東端付近まで認められ、SD40南側にあたる2区南部から3区の山手を中心に分布する。層厚は2区南側や3区山手側が薄く、2区西側から中央は厚く盛られている。この整地土層の分布範囲からSD40で区画された居館跡に関連する整地とみられ、特にSC01周辺との関係から、居館入口付近の造成に伴うものとみられる。V層中を縦断するトレンチを入れておらず、造成方法は捉えていないが、一部2区（市道下）では数層に分層され、その分層の様相から南西側から順次北側へ盛り土されたと捉えられる。また、SC01に伴う側溝の断面観察から、SD25・30・32ではV層上面から掘りこまれるSD25a・30a・32aと中位から掘りこまれるSD25b・30b・32bが認められ、最低2回は側溝の掘り直しを伴う整地が行われているとみられる。調査区南壁の土層観察から道路跡とみられる高まりが重なっていると確認され、SC01は居館跡廃絶以後のⅣ層中でも西側に場所を移して維持されていたとみられる。



## 第3節 遺構

### 1 中世（第4調査面）の遺構

#### (1) 概要

2区では、中世後期（15世紀後半）に山からの崩落土を盛土整地して（V層）、このV層下にあたる中世の水田跡検出面（Ⅶ層上面）を第4調査面とした。第4調査面で検出した遺構、もしくは第4調査面に帰属すると考えられる遺構は、水田跡（畦畔2条）、道路跡1条、居館堀跡1条、溝跡3条、集石遺構1基である。検出した遺構の一部は、崩落土の堆積により埋没していた。2区（市道下）で検出した居館堀跡SD59は、第3調査面で検出したSD40の改修前のものと考えられる。このSD59に沿い、調査区を南北に縦断する道路跡SC20、堀跡に接続する集石遺構SH06を検出した。SC20は2区南側で北西方向へ分岐するが、3区ではその延長を検出することができず、延長線上の西壁で確認したのみである。

#### (2) 水田跡

2区全体で水田面が遺存する水田跡に伴う小畦畔を2条検出したが、水田区画が不明のため、水田名は付していない。畦畔の西側では、山からの崩落土が水田面に堆積していた。畦畔の遺存状態は南側が良く、北側に向かって悪くなる。水田面は平坦で起伏は少なく、畦畔の周囲には畦畔と平行する足跡を確認した。プラント・オパール分析（2018年度）では、イネのプラント・オパールが水田面で3,600個/gの高い値で検出され、水田耕作土層の可能性が高いと考えられる。なお、この時期の水田跡は、隣接する石川条里遺跡では検出されていない。

#### SC02 [遺構：図版133・135・PL67]

位置：2区X IVS22・23、X02・03・07・08グリッド。 検出：Ⅶ層上面。SC03北側の延長上で検出したが、高まりは僅かである。 重複：(新)SD40。 規模：方位N-1°-W。長さ14.2m、幅0.5~0.6m。 構造：北側は調査区外へ延びる。 遺物：なし。 時期：検出層位から中世後期と判断した。

#### SC03 [遺構：図版133・135・136・PL67]

位置：2区X07・08・12・13・17・18・22・23、D02グリッド。 検出：Ⅶ層上面。南北方向に伸びた黒色の畦畔状の高まりを面的に検出した。4トレンチ北壁断面では、Ⅵ層に薄く被覆された畦畔状の高まりを確認した。 重複：なし。 規模：方位N-0°-E。長さ31.6m、南端から北に2.5m地点で分岐、西方向へ2.2m。幅0.4~0.6m、4トレンチ北壁で高さ20cm。 構造：断面形は南側では逆台形状。北側に向かって遺存状態が悪くなる。 遺物：なし。 時期：検出層位から中世後期と判断した。

#### (3) 居館堀跡

居館堀跡は、第4調査面のSD59、第3調査面のSD40、更に隣接する石川条里遺跡SD191（12c区）がある。第4調査面ではSD59により、屋敷地と付設された道路跡SC20とが区画されていたと考えられる。山からの崩落土によりSD59が埋没した後は、盛土整地が行われ、SD40へ改修したとみられる。また、石川条里遺跡のSD191は更にその後のものと推察する。居館の変遷については、第6章第2節1に詳細を記した。

**SD59** [遺構：図版133・134・137・PL67、土器：図版164・PL74、木製品：図版168・169・PL76・77]

位置：2区（市道下）XIVW05・06・10・11グリッド。 検出：Ⅶ層上面。南北方向に延びる、山砂の混じる帯状の落ち込みを検出した。 重複：（新）SD40。 埋土：上層は崩落土が混じる。中層は灰色粘質土、下層は黒褐色粘質土。下層下部は泥炭で常時滞水状態であったと推察する。 規模：方位N-3°-E。南から北へ傾斜。長さ9.52m、幅2.55m、深さ1.15m。 構造：南端では土橋と、西南端ではSH06と接続、北端は調査区外へ延びる。平面形はほぼ直線で、道路跡SC20と並走する。断面形はV字状。屋敷地の東側を区画する堀跡で、第3調査面のSD40改修前の堀跡と考える。 遺物：埋土からカワラケ（2）、内耳鍋、種実が出土。埋土下層からシカ骨一体分が出土。最下層から田下駄（2）、蓋（7）、板材（8）、曲物の破片と考えられる木製品（9～15）が出土。 時期：検出層位と出土土器から、中世後期と判断した。

#### （4）道路跡

**SC20** [遺構：図版133・134・137・138・PL67]

位置：2区（市道下）XIVW20、X01・06・11・16・21グリッド。 検出：先行トレンチで黒色土を確認し、平面精査により、Ⅶ層上面で調査区を縦断する黒色土が土手状に高まるのを検出した。分岐の延長線上にあたる3区では高まりは確認できなかったが、黒色土の範囲（図版134点線部分）を確認した。 重複：（新）SK247・250。 規模：方位N-3°-E。長さ27.2m、最大幅2.8m、高さ0.5m。 構造：SD59南端付近で西方向へ分岐、SH06へ接続する。調査区南端で北西方向へ分岐。道路北側に向かって低くなる。北端は調査区外へ延びる。水田土壌での沈みこみ防止のため、土手状に土を盛っているものと推察する。規模が大きいこと、土手中央部に轍状の窪みが存在することから、道路跡と判断した。 科学分析：プラント・オパール分析（2018年度）では、イネのプラント・オパールが土手上面から4,800個/gの高い値で検出され、構築時に水田土壌が稲藁が使用された可能性が考えられる。 遺物：南端から須恵器甕が出土。 時期：検出層位から中世後期と判断した。

#### （5）溝跡

**SD42** [遺構：図版133・134・139・PL67]

位置：3区XIVW13・14・19グリッド。 検出：Ⅶ層上面。黒褐色砂質土の蛇行する帯状の落ち込みを検出した。 重複：なし。 埋土：複層。シルトの混じる砂。 規模：方位N-39°-W、N-23°-E、南東から北西に傾斜。長さ11.79m、最大幅1.68m、深さ0.12m。 構造：西端・南端は調査区外へ延びる。平面形はやや蛇行し、湾曲する。断面形は逆台形状。SC20から北西に分岐する道路の側溝と推察する。 遺物：なし。 時期：検出層位から中世後期と判断した。

**SD47** [遺構：図版133・135・139・PL67]

位置：2区XIVS-25グリッド。 検出：X層上面。平安時代の水田に伴う畦畔SC04を切る落ち込みを検出した。調査区北壁断面の土層観察から、Ⅶ層からの掘り込みを確認し、本来はⅦ層上面に帰属する遺構と考える。 重複：なし。 埋土：複層。底面には細砂が堆積する。流水によると推察される。 規模：方位N-8°-W、南から北へ傾斜。長さ4.41m、最大幅0.87m、深さ0.39m。 構造：南北両端は調査区外へ延びる。平面形は直線、断面形はU字状。水田に伴う用水と考える。 遺物：埋土から内耳鍋が出土。 時期：検出層位と出土土器から、中世後期と判断した。



## SD55 [遺構：図版133・135・139・PL67]

位置：2区XIVX-04・09グリッド。 検出：Ⅳ層上面。湾曲する帯状の落ち込みを検出した。重複：なし。 埋土：粘土の単層。検出面の水田土壌に似る。 規模：方位N-66°-W、方位N-16°-W、北西から南東方向へ傾斜。長さ5.82m、最大幅1.13m、深さ0.16m。 構造：北端・東端は調査区外へ延びる。平面形は湾曲し、断面形は浅い皿状。水田に伴う用水と推察する。 遺物：なし。 時期：検出層位から中世後期と判断した。

## (6) 集石遺構

## SH06 [遺構：図版133・134・139・PL67]

位置：2区(市道下)XIVW10グリッド。 検出：Ⅳ層上面。道路跡SC20から西側へ続く土橋を確認し、土橋の西側延長部に帯状に延びる集石を検出した。重複：(新)SK254。 埋土：黄褐色重粘土の上に礫、その上に山砂の混じる粘土。上層に盛土は確認できなかった。 規模：方位N-85°-E。礫を確認した範囲長軸方向4.4m、短軸方向は1.8m、水田面から礫頂部まで高さ0.4m。 構造：集石の東側はSC20に接続、北東部分はSD59西南端に接続する。内部は15~20cm程度の小礫が充填され、粘土で裏詰めされる。南側では人頭大の礫2列の面を揃えて2段に積むが、北側では面は揃っていない。屋敷地南端を区画する施設で、盛土造成時に構築された基礎部分と考える。 遺物：なし。 時期：検出層位から中世後期と判断した。

## 2 中世～近世(第3調査面)の遺構

## (1) 概要

2区では中世後期(15世紀後半)に山からの崩落土を盛土整地して、その整地層(V層)上面が第3調査面である。第3調査面で検出した遺構、もしくは第3調査面に帰属すると考えられる遺構は、居館堀跡1条、道路跡1条、溝跡37条、集石遺構1基、掘立柱建物跡1棟、井戸跡8基、その他の土坑274基、畝状遺構1面である。

2区北側では、L字形に屈曲する居館堀跡SD40を検出した。これは、第4調査面で検出したSD059の改修後の堀跡と考えられる。堀跡南側では、SD25・30・32等を伴う道路跡SC01を検出した。溝跡は道路の側溝であり、居館入口付近の整地に伴って、SC01も造成されたものと考えられる。側溝跡の掘り込みからは、少なくとも2回の整地が行われ、それに伴って溝跡の改修が行われたことが分かる。北側のSD24・33・36等の側溝跡は、掘の埋め立て後に北側へ延長されたSC01に伴うものである。

また、V層上面で底部付近のみを検出したSD11・27・28等は、V層よりも上のⅢ層・Ⅳ層から掘り込まれていることから、SC01廃絶後の道路に伴う側溝と考えられる。SC01西側の調査区南壁では、複数の整地面をV層よりも上層で検出した。SC01廃絶後に利用された道路跡であり、SD27・28等に対応する可能性がある。このように側溝の改修が繰り返されながら道路は西側へと移行し、近世まで継続して使用されていたことが推察される。現在の市道は、その更に西側にあたる。

なお、掘立柱建物跡、井戸跡、その他の土坑については、遺構の重複から、SC01よりも新しい遺構と考えられる。

## (2) 居館堀跡

**SD40** [遺構：図版140～142・144～146・PL68、土器：図版164・PL74、石製品：図版165・PL74、木製品：図版166～168・PL75・76]

位置：2区XIVS12・13・17・22、X02、2区（市道下）W05、X01グリッド。検出：第4調査面掘削時に、東西方向に伸び、北へ折れるL字形の溝状の落ち込みを確認した。調査区北壁土層断面の観察から、本来の掘り込み面は第3調査面と確認した。重複：(旧)SD59、SC02。(新)SD24・36・63・64。埋土：上層は黄褐色山砂層、中層は灰白色粘土層、下層は黒色～黒褐色粘土層で常時滞水状態であり、中・下層は自然堆積土と考える。規模：南北方向N-1°-Eで南から北へ傾斜、東西方向N-0°-W。長さ37.59m。南北長23m、東西長16m。幅は東辺北端で4.0m、南辺西部で4.40m、深さ0.80～0.98m。隣接する現在の宅地区画から推測した規模は、一辺約50m。構造：L字形に屈曲し、北端と西端は調査区外へ延びる。断面形状は外側に緩やかに広がる逆台形、底面はほぼ平坦。屋敷地を方形に巡る堀跡の南辺と東辺の一部で、居館堀跡と考える。遺物：埋土からカワラケ（4）、古瀬戸天目茶碗（9）、内耳鍋（13・22）、凹石（5）、五輪塔未成品（6）、加工石（9）、木製品の三方（1）、曲物（4・6）、連歯下駄（3）、ウマ骨が出土。時期：出土土器と検出層位から、中世後期と考える。

## (3) 道路跡・溝跡 [遺構：付表12・第25表・図版140～143・147～151・PL69・70]

道路跡は、第3調査面の平面精査で確認したSC01と、SC01西側の2区南壁の土層断面で確認した道路跡（2区南壁道路跡）がある。SC01はV層が整地された時期の側溝を伴う道路跡であり、SD40に区画された方形居館に伴って、中世後期に造成されたと考えられる。一方、2区南壁道路跡は、更に新しい道路跡と考えられ、時期は中世末～近世と推察される。

検出された多数の溝跡は、全て道路跡に伴うと判断した。溝跡の時期は、SC01に伴うものと、その後の道路に伴うと考えられるものがある。図版147には、道路跡SC01に伴う溝跡、もしくは同様の時期と考えられる溝跡を掲載した。東西両端に掘削された溝跡SD25・30・32等は道路側溝跡と考えられ、直交方向に浅く広がるSD029・041はSC01の排水溝と推察される。北側のSD24・33・36等は、堀の埋め立て後に、SC01が北側へ延長された際の側溝跡と考えられる。これらの溝跡がV層を掘り込むのに対し、上層のⅢ層・Ⅳ層を掘り込む新しい溝跡も確認されている。図版151のSD11・27・28等は、SC01廃絶後の道路に伴うと推察される。これらの側溝跡は、時期を問わず、ほぼ全てが南から北、西から東へ向かって傾斜している。

第25表 道路跡（SC01等）に関連する溝跡の地区別変遷

溝跡の性格 時期	3区 2区（市道下）		2区 北側部分		2区 中央部分		2区 南側			
	側溝跡		側溝跡		側溝跡		側溝跡		排水溝跡	
	北側	南側	西側	東側	西側	東側	西側	東側	西側	東側
SC01 延長前	SD40（居館堀跡）				SD25b ↓	SD32b=SD51 ↓	SD30b ↓ SD30a	SD34 ↓ SD32b ↓ SD32a	SD38ab ↓ SD29	SD41b ↓ SD41a
SC01 延長後 （SD40の埋立後）	SD57 ↓	SD65 ↓ SD45	SD64 ↓ SD33 ↓ SD36	SD63 ↓ SD24	SD25a=SD49	SD32a=SD50				
SC01 廃絶後 （2区南壁道路跡）	SD39				SD11・13・14	SD12・21	SD27・46	SD28		

道路跡は、以下に個別に記載する。溝跡は巻末の溝跡一覧表に掲載し、地区別の変遷の概略は第25表に示した。また、道路跡と溝跡の変遷の詳細については、第6章第2節1に記した。

#### SC01 [遺構：図版140・142・143・147～149・PL68・69、土器：図版164]

位置：2区XIVX02・03・07・08・09・12・13・17・18・19・22・23グリッド。 検出：V層上面。4トレンチ南側で、重機での掘削が困難なほど硬化した面を検出した。この硬化面両側に南北方向に並走する帯状の落ち込み(SD30・32)を検出したため、道路跡とその側溝跡と考えた。4トレンチ以北では、道路面はそれほど硬化しておらず、やや不明瞭であった。本跡側溝と考えられる溝跡は、南側のSD30・32・34、中央部のSD25・49～51、北側のSD24・33・36がある。重複：(新)ST03、SD11、SK120。規模：方位N-7°-W。全長49.5m。調査区南壁から北へ長さ17.5m、やや東寄りに緩く屈曲して18.2m、更に西よりに緩く屈曲して20.0mを計る。側溝の芯々距離は南側SD30—SD32間で3.4m、中央部SD25—SD32間で3.6m、北側SD24—SD36間で3.0m。路面幅は南側2.4m、中央部2.3m、北側幅1.6mである。構造：調査区の南側と4トレンチの土層断面で、少なくとも2面の硬化面を確認した。2区中央から3区東側にかけて、山からの崩落土を盛土整地しており、この整地土上にある改修前の路面は、砂礫・シルト・粘土の混じる灰黄褐色土である。並走する溝跡にも改修の痕跡があることから、路面と側溝の改修が行われたと考えられる。また、堀跡SD40の埋め立て後にSD24・33・36が掘削されていることから、道路が北側へ少なくとも17m延長されたと考えられる。遺物：内耳鍋(10)、カワラケ、剥片が出土。時期：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

#### 2区南壁道路跡 [遺構：図版151・PL69]

位置：2区XIVD02・03グリッド。 検出：SC01西側の調査区南壁の土層断面で、V層上面の上に更に盛土整地面を4面確認した。平面では確認できていない。重複：なし。規模：調査区南壁での路面幅は2m程度。構造：盛土整地面はやや硬化し、同じ場所で継続的に道路が造成されたと考えられる。南壁部分では側溝を伴わないが、SD27・28等の道路側溝跡の延長線上に位置し、検出層位もほぼ一致することから、同一の道路跡であった可能性が高い。その場合、側溝は居住域のみに部分的に掘削されたものと想定できる。遺物：なし。時期：検出層位から中世末～近世と判断した。

#### (4) 掘立柱建物跡 [付表16]

柱穴1列のみのST03を検出した。道路跡SC01と重複し、SC01よりも新しいと考えられる。同様にSC01と重複する井戸跡や柱穴と考えられる2区中央の土坑の分布から、SC01廃絶後に居住域となった時期があると推察される。

#### ST03 [遺構：図版140・143・153・PL70]

位置：2区XIVX12グリッド。 検出：V層上面。東西方向に配置する灰黄褐色土の方形の落ち込み4基を検出した。その他のピットは確認できなかったが、4トレンチの掘削時に失われた可能性もあり、規模から竪穴建物跡の柱穴と考えた。重複：(旧)SD25ab、SC01。埋土：複層。P1・2は斜方に堆積。P3・4は自然堆積。規模：方位N-90°-E。長さ6.97m。ピット直径は0.52～0.75m、深さは0.47～0.71m。柱間寸法は、2.01～2.27mで中央がやや狭い。構造：東西3間のみを検出で、詳細は不明。遺物：P2埋土から礫がまとまって出土。時期：重複関係、検出層位から、中世後期と判断した。

(5) 井戸跡・土坑 [遺構：付表14・図版152・153]

井戸跡は8基検出した。SK170が道路跡SC01と重複していることから、これらの井戸跡はSC01よりも新しいと考える。2区調査区中央に集中するその他の土坑の中には、欄列や掘立柱建物跡の柱穴が含まれる可能性があるが、個々の遺構の判別には至らなかった。井戸跡や土坑の分布から、この一帯がSC01廃絶後に居住域となった時期があると推察される。なお、井戸跡と第4節に掲載した遺物が出土した土坑については、巻末の土坑一覧表に記載した。

**SK170** [遺構：図版140・143・152・PL70]

位置：2区XIVX18グリッド。 検出：V層上面。不整形の落ち込みを確認した。 重複：(旧)SC01、SD32ab。 埋土：上層より砂層、粘土層、砂質粘土層、砂層、シルト質砂層。 規模：直径1.50m。深さ0.80mまで掘削したが、湧水が著しく掘削を断念した。 構造：平面形は不整形、断面は逆台形。上部は漏斗状に開く。 遺物：なし。 時期：検出層位と遺構の重複から、中世後期と判断した。

**SK171** [遺構：図版140・141・152・PL70]

位置：3区XIVW14グリッド。 検出：VI層中。円形の落ち込みを検出した。 重複：なし。 埋土：複層。下部は粘土層。 規模：直径1.52m、深さ0.88m。 構造：平面形は円形、断面は逆台形。上部が漏斗状に開く。 遺物：上層から木片、カワラケ、下層から礫が少量出土。 時期：検出層位と遺構の重複から、中世後期と判断した。

**SK214** [遺構：図版140・142・152・PL71]

位置：2区XIVX23グリッド。 検出：VII層上面。不整形の落ち込みを検出した。本来の遺構掘り込み面は、他の井戸跡と同様にV層上面と推察する。 重複：(旧)SD34。 埋土：上層は褐灰色粘質土、下層は砂質粘土層。50cm以上の礫が複数混じる。 規模：直径1.44m、深さ0.62m。 構造：平面形は不整形、断面形状は逆台形。 遺物：なし。 時期：他の井戸跡と同様に、中世後期と判断した。

**SK215** [遺構：図版140・142・152・PL71、木製品：図版168・169・PL76]

位置：2区XIVS24グリッド。 検出：VIII層中。円形の落ち込みを検出した。本来の遺構掘り込み面は、他の井戸跡と同様にV層上面と考える。 重複：なし。 埋土：粘土。最下層は拳大から50cm大の礫が混じる。上層は埋め戻されたと推察する。 規模：直径1.25m、深さ0.50m。 構造：平面形は円形。東側にテラス状の段差がある。断面形は逆台形。 遺物：埋土から内耳鍋、カワラケ、曲物(5)、最下層から籠状製品(17)が出土。 時期：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

**SK244** [遺構：図版140・141・152・PL71]

位置：2区(市道下)XIVX10・11グリッド。 検出：V層上面。不整形円形の落ち込みを確認。 重複関係：なし。 埋土：複層。下層は砂礫、最下層はシルト。形状：直径1.43m、深さ1.03m。 構造：平面形は上部が不整形で、下部は方形。壁面には凹凸がある。南東側壁面が外側へ張り出す。 遺物：埋土から内耳鍋、カワラケが出土。 時期：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

**SK247** [遺構：図版140・141・152・PL71、土器：図版164]

位置：2区(市道下)XIVX11グリッド。 検出：V層上面。円形の落ち込みと礫の集中を確認。 重

複：(旧) SC20。埋土：上部は砂の混じる粘質土、下層は砂礫。規模：直径1.03m。深さ1mまで掘削、湧水が著しく掘削を停止した。構造：平面形は円形、壁面は検出面から垂直に落ち込み、底面は平坦。石組の井戸跡。礫の一部が崩落し、埋土に混入していた。遺物：埋土下層から、カワラケ(7)、内耳鍋が出土。時期：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

#### SK254 [遺構：図版140・141・153・PL71]

位置：2区(市道下)XIVX10グリッド。検出：IV層中。灰色粘土の円形の落ち込みを確認。重複：(旧) SH06。埋土：複層。中層～下層は山砂とシルトブロックが混じった埋め戻し土。形状：直径0.96m、深さ0.34m。構造：断面形は逆台形、底面にはやや起伏がある。遺物：なし。時期：検出層位から中世後期と判断した。

#### SH05 [遺構：図版140・141・153・PL71、土器：図版164・PL74]

位置：3区XIVW14グリッド。検出：VI層中。礫が集中する方形の落ち込みを確認。重複：なし。埋土：複層。主に砂、根太木付近は粘土。規模：直径1.27m、深さは0.60m。構造：平面形は隅丸方形、断面形は逆台形。崩落した礫がまとまって出土しており、石組の井戸跡の可能性がある。底面付近では井桁状に組まれた角材に杭が打設される。角材は石組の根太木と考えられる。遺物：埋土から内耳鍋(14)が出土。時期：出土土器と検出層位から、中世後期と判断した。

### (6) 集石遺構

#### SH04 [遺構：図版140・142・144、土器：図版164・PL74]

位置：2区XIVS22・23グリッド。検出：V層上面。SD24の調査時に、SD24に隣接する礫集中を確認した。重複：(新) SD24。埋土：礫上外面前後は山砂が多く混じる黄灰色粘土。SH04に伴う盛土。上層の暗黄灰色～暗褐色粘土は、SH04以後の盛土。規模：方位N-0°-W。長さ約5.6m、幅0.8～1.0m。構造：北端は重機掘削により不明。集石範囲の平面形はほぼ長方形で、直径10～20cmの礫が1段に並ぶ。堀脇の道路(未検出)の基礎部分の可能性も考えられる。遺物：香炉(11)が出土。時期：検出層位と遺構の重複から、中世後期と判断した。

### (7) 畝状遺構 [付表17・図版140・142・143]

検出されたSLO1(2区)は、比較的浅く蛇行した溝跡が並行することから、畑跡の可能性が考えられる。出土土器と検出層位から、中世後期～近世と判断した。畝状遺構については、巻末の遺構一覧表に記載した。

### 3 近世末～近代（第1調査面・第2調査面）の遺構

#### （1）概要

近世末～近代の遺構は、2区第2調査面で暗渠2条、溝跡5条、土坑91基を検出し、3区第1調査面で工房跡1棟、土坑16基、溝2条、第2調査面で溝跡2条を検出した。検出面は、2区がⅢ層（崩落土）上面、3区がⅡ層（腐植土）上面の工房整地面である。工房跡ST01は、1867（慶応3）年から1896（明治29）年にかけて操業した長谷焼を生産した窯（以下「長谷窯」という。）の陶器製作工房跡と考えられる。工房跡周辺からは、未製品（素焼き）や焼き損じ品等も含めた陶器製品が多量に出土し、その他に小物等の素焼き製品とその型、窯道具等の関連遺物が出土している。なお、陶器の窯跡は3区西側の山の斜面に位置していたと推定されるが、今回の調査範囲外に当たり、その正式な位置は不明である。

#### （2）長谷窯工房跡

3区南側は長谷窯推定地の東側であり、窯の工房跡があったという記録が残る。『塩崎村史』〔塩崎村史編集員編1971〕の「第五編 長谷焼 三. 窯と職人」によれば、『明治26年6月建坪取調簿』には窯に南面した場所に「間口九間（約16.3m）・奥行二間三尺（約4.5m）の職場」があったという。今回の調査ではロクロ台石を検出し、記録にある窯の工房跡であることを確認した。なお、長谷窯については第6章第2節に詳細を記した。

**ST01** 〔遺構：図版154・155・158～162・PL72・73、陶器：図版170～181・PL78～82、素焼き製品：図版182～184・PL83・84、窯道具：図版185～190図・PL85・86〕

位置：3区XIVW18・19・20グリッド。

検出：Ⅱ層上面（整地面）。東西方向に並列する方で中央にはほぞ穴がある巨石を設置したピット2基を検出した。巨石は類例から、陶器製作工房に伴うロクロ台石と判断した。ロクロ台石の周辺を面的に掘り下げたところ、長方形にはほぼ一周する石列を検出した。検出した石列は、前述の『塩崎村史』に記載された職場の位置、規模ともにほぼ一致することから、長谷窯の陶器製作工房跡と判断した。窯の廃業後、農地転用のために造成が行われたためか、土置き場・職人小屋等の関連施設は確認できなかった。

重複：（新）かく乱。

規模：方位N-87°-W。東西方向（間口）16.66m、南北方向（奥行）4.78m。

構造：3区の第1調査面は工房整地面にあたる。整地面は工房部分（ST01）と前庭部分（ST01北側）に分けられる。Aトレンチの土層断面観察によると、造成順はまず前庭部を整地し、次に建物基礎部分を掘り込んでから盛土整地した後、石列を設置している。建物跡の間口は東西方向に長く、出入口は北西隅と考えられ、ロクロ台石2基は南壁（山側）に沿って東西方向1.9mの間隔で配置されていたと考えられる。ロクロ台石の設置された作業場東側の空間は、倉庫等として活用されていた可能性があるが、利用状況のわかる痕跡は確認できなかった。北側が前庭部にあたる。東側整地面では粘土が多く分布し、土置き場か釉薬の調合等が行われていた可能性が考えられる。

**ロクロ台石** 2基が1.9m間隔で元位置を保って検出された。西側のP1台石は南北長48cm、東西長49cm、厚さ17cm、重さ92.6kg。P1の掘方は東西長0.65m、南北長0.65m、深さ0.3m。東側のP2台石は南北長40cm・東西長66cm・厚さ25cm、重さ69.9kg。P2掘方は東西長1.03m、南北長0.73m、深さ0.35m。P1・P2共に掘方底部に栗石を敷き、白色粘土の上に台石が設置され、固定される。P2は台石周囲にも粘土を充填する。使用方法としては、台石のほぞ穴にロクロ軸を差し込み、軸周囲に木材小片を詰めて固定し、軸上に回転台を置いて使用していたと考えられるが、ロクロ軸・回転台も出土していないため、詳細は

不明である。ピット間の芯々距離は2.5mで、2名で作業するために適した間隔と考える。P1の白石の方が大きい点は、製作した陶器の大きさを反映したものと推察する。

**石列** 南西から北東に向かう傾斜地に立地。北辺は標高が低く、30～50cmほどのやや大きな礫を石垣状に積む。外側にあたる北面は礫の平坦面が並べられ、内側は10～20cmの小礫が裏込めされる。南辺は幅0.62～0.86mで小礫が帯状に集中し、西端付近の一部がかく乱に切られる。西辺は石積幅0.37m。山側の傾斜地に設置された数条の石列と接続する。東辺はかく乱の影響から、残存状況が悪い。

**出入口施設** SK115 (図版162・PL73) が工房跡の北辺の西側隅に位置し、工房跡の北壁と想定される北側を除き、三方を礫に囲まれた形状から、出入口施設と推察する。長径1.24m、短径0.94m、深さ0.22m。平面形は不整楕円形、断面形は浅い皿状である。

**遺物**：工房跡周辺からは、窯関連の遺物が大量に出土した。主には陶器の素焼き313kg、施釉本焼き製品43kg、窯道具85kg等がある。図版161に示したように、窯跡推定地(調査区外)とされる斜面直下のXIVW18グリッドでは特に遺物が集中していた。陶器製品(25～185)では、甕・鉢・壺・鍋・釜・植木鉢・灯明皿・乗燭等が出土した。素焼き製品(1～49)には、人形、玩具等の小物やその型、またコンロ、火鉢、土管等がある。窯道具(1～129)には、窯詰めの際に製品を載せた輪トチ、焼台、棚板や匣鉢、円錐ピン、団子トチ等が出土した。

**時期**：長谷窯の操業期間(1867～1896年)と判断した。

### (3) 土坑 [付表14、図版154～157]

3区の土坑のうち、長谷窯工房跡と関連する土坑と考えられるものを個別記載する。巻末の土坑一覧表には、個別図を掲載した土坑と第4節に掲載した遺物を出土した土坑を記した。2区南側に集中する土坑は、近世末以降のものと考えられるが、土坑の性格は不明である。また、2区中央部の土坑は、第3調査面の土坑と位置が重なるため、本来は第3調査面に帰属する可能性がある。

#### SK111 [遺構：図版154・155・162・PL73、陶器：図版175・PL80]

**位置**：3区XIVW25グリッド。 **検出**：Ⅱ層上面。黄褐色土の円形の落ち込みを検出した。 **重複**：(新)かく乱。 **埋土**：土坑、甕内部とも黄褐色砂層。 **規模**：直径0.99m、深さ0.87m。 **構造**：平面形は不整形、断面形はU字形。 **遺物**：素焼の特大甕(77)が正位で出土。工房跡に伴うと考えられるが、用途は不明である。 **時期**：長谷窯の操業期間内(1867～1896年)と考えられる。

#### SK112 [遺構：図版154・155・162・PL73、陶器：図版175、瓦：図版195・PL87]

**位置**：3区XIVW25グリッド。 **検出**：Ⅱ層上面。黄褐色土の円形の落ち込みを検出した。 **埋土**：甕の設置面には粘土が混じる砂層、甕内部は黄褐色砂層。 **重複**：(新)かく乱。 **規模**：直径0.74m、深さ0.60m。 **構造**：平面形は円形であったと推察する。断面形は逆台形。 **遺物**：素焼の特大甕(76)が正位で出土。瓦(11)、ガラス片が埋土から出土。工房跡に伴うと考えられるが、用途は不明である。 **時期**：長谷窯の操業期間内(1867～1896年)と考えられる。

#### SK114 [遺構：図版154・155・162・PL73、陶器：図版174・179・PL79・81]

**位置**：3区XIVW18グリッド。 **検出**：Ⅱ層上面。1トレンチ掘削中に、焼物片の集中箇所を確認し、円形の落ち込みを検出した。 **埋土**：土坑は黄褐色砂質土、甕内部は黄褐色砂層。 **重複**：なし。 **規模**：直径0.59m、深さは0.33m。 **構造**：平面形は円形。断面形は逆台形。 **遺物**：素焼の大型の甕

(71) が正位で出土。埋土から急須蓋(147)が出土。工房跡に伴うと考えられるが、用途は不明である。

時期：長谷窯の操業期間内(1867～1896年)と考えられる。

(4) 暗渠・溝跡 [付表15]

暗渠2条と、3区第2調査面で検出した溝跡2条を個別記載する。長谷窯の操業期間よりも著しく新しい時期のものは、かく乱とし、その他の溝跡は巻末の溝跡一覧表に掲載した。

SD01 [遺構：図版154・157・163・PL73]

位置：2区XIVX17・18・23グリッド。 検出：Ⅲ層上面。東西方向に並ぶ帯状の礫を検出した。板状の蓋石が整然と並べられ、下部には角礫が面を揃えられていた。 重複：なし。 埋土：3層。中層の粘質土層と下層のシルト層は、滞水による影響と推察する。 規模：方位N-80°-W、西北西から東南東へ傾斜。長さ14.14m。根固めを含めた石の幅0.45m、溝の幅0.6m、深さ0.19m。 構造：側壁の石は平坦面をそろえて並べられ、外側の根固めに破砕した礫を詰める。形態から暗渠と考える。 遺物：なし。構築材は長谷窯で使用された煉瓦を再利用している。 時期：長谷窯の操業期間(1867～1896年)に近い時期と推察する。

SD26 [遺構：図版154・157・163・PL73]

位置：2区XIVX22・23グリッド。 検出：Ⅳ層下層。東西方向に並ぶ帯状の礫を検出した。SD25・32の埋没後に構築されている。 重複：なし。 埋土：上層は粘土、中・下層は砂を含む暗オリーブ褐色土。 規模：方位N-78°-E、西から東へ傾斜。礫範囲は東西9.70m、南北0.92m。水路の深さ0.09m。調査区西側壁面に礫を確認、本来は調査区外まで延びる。 構造：平面形は直線。蓋石には30～60cmの比較的平らな礫を使用。側壁には10～15cmの小礫を使用して面を揃えてある。形態から暗渠と考える。 遺物：内耳鍋・カワラケを出土。 時期：構造から近世以降と判断した。

SD43 [遺構：図版154・163・PL73]

位置：3区XIVW14・19・20グリッド。 検出：Ⅵ層中。並行する2条の帯状の落ち込みを検出した。 重複：なし。 埋土：複層。上下層ともシルト。 規模：方位N-30°-W、南東から北西へ傾斜。長さ14.70m幅0.65m、深さ0.24m。 構造：西北端は調査区外まで延びる。平面形はほぼ直線、断面形はU字状。 遺物：埋土から、器種不明の素焼き陶器片が出土した。 時期：出土遺物から近代と判断した。

SD44 [遺構：図版154・163・PL73]

位置：3区XIVW9・14・15・20グリッド。 検出：Ⅵ層中。並行する2条の帯状の落ち込みを検出した。 重複：なし。 埋土：不明。 規模：方位N-23°-W、南南東から北北西へ傾斜。長さ15.07m幅0.76m、深さ0.19m。 構造：西北端は調査区外まで延びる。平面形はほぼ直線、断面形は逆台形状。 遺物：埋土から器種不明の素焼き陶器片が出土した。 時期：出土遺物から近代と判断した。



## 第4節 遺物

### 1 中世の遺物

#### (1) 土器・陶器 [付表18・図版164・PL74]

**概要：**中世焼物は総数979片採取され、在地産の内耳鍋(717片)と同カワラケ(248片)が全体量の98.6%を占める。在地産の土器では、他に土器香炉(11)、内耳鍋と同胎土で火鉢と考えられるもの(10)、瓦質挿鉢と考えられる破片がある。陶磁器は、珠洲(壺・甕)、古瀬戸(天目茶碗(9)、古瀬戸中後期様式の瓶子と考えられる破片、大窯丸碗と考えられる破片、大窯皿と考えられる破片)、中国産磁器(内湾小型白磁皿、雷文青磁碗、青磁瓶類と考えられる破片)がある。

各調査面の出土数は、3区第1調査面(近代の遺構検出面)14片、第2調査面(近世末～近代の遺構検出面)313片、第3調査面(中世後期～近世の遺構検出面)504片、第4調査面(中世後期の遺構検出面)8片、第5調査面(平安時代の水田跡検出面)2片、出土層位不明のもの138片である。このうち、第3調査面の内訳は中世の遺構出土434片、検出面出土59片であり、第4調査面の内訳は中世の遺構出土4片、検出面出土4片である。第4調査面で出土した内耳鍋は4片と数が少なく小片のため、第4調査面の時期に伴うとは断定はできない。第3調査面からの出土量が最も多く、第4調査面での出土が少ない点は、主体となる内耳鍋の出現時期が、両調査面の境の時期に重なっていることを示していると考えられる。在地産の土器について若干触れる。

**カワラケ：**出土破片数が多いが、軟質で摩滅しやすいためか全体形を窺えるものは少ない。口径は8～9cmと10cm前後の2種があり、1片のみ口径不明ながら12cmを越えるもの(8)がある。内面に煤等が付着し、灯明皿の使用を窺わせるもの(4)もある。調整はロクロを用い、底部外面には回転糸切を残す。胎土は灰白色～灰褐色を呈する比較的精良な胎土で、口縁形態は僅かに端部が外反するもの(5)と内湾気味のもの(6)がある。明褐色を呈するものも僅かにあるが、破片のために器形は不明である。

**内耳鍋：**出土破片数が多いが、全体形を窺える資料は少ない。器形は平底で体部が直線的に立ち上がる、いわゆる桶形でその上部に複数種類の形態の口縁がつく。調整は底部外面が平坦で、離れ砂と考えられる川砂が付着する。体部は粘土紐輪積の後、ハケ等の板状工具で調整し、口縁部と底部脇が回転台によるナデ調整される。内面の耳は2か所とみられる。焼成は黒灰色の瓦質焼成(12)を除き、すべて明褐色の酸化炭焼成である。口縁形態は、頸部が屈曲して直線的に斜めに延びる外反形態(13・17・24)、頸部で湾曲して口縁が内湾する形態(15・16・21・23)、やや内湾しながら内面の凹凸が顕著に認められ、口縁部が長いもの(14)がある。このなかで、外反形態は居館堀跡SD40から、内湾形態は2区南部の道路跡SC01に伴う側溝跡から、内面に凹凸が顕著に残る形態は井戸跡SH05、北部の道路側溝跡SD24、SK137等から出土した。なお、23は近世遺構の混入品の可能性がある。

**その他** 胎土から、近在で製作されたと考えられる土器が少量ある。SD59から瓦質焼成挿鉢と考えられる破片、SC01から火鉢類と考えられる土器(10)、SH04から土器香炉(11)が出土した。

遺構の種類別に焼物の様相を記す。

**居館堀跡** [図版164・PL74]：第4調査面のSD59から、カワラケ、内耳鍋、瓦質の挿鉢と思われる破片が出土している。カワラケは灰白色の精良な胎土のものである。第3調査面のSD40から、カワラケ(4)、

内耳鍋 (13・22)、古瀬戸天目茶碗 (9) が出土した。4 は底部内面を横ナデし、煤が付着する。22 の口縁は若干崩れた外反形態である。9 は古瀬戸後期様式 I・II 期 (藤沢良祐 1991) とみられる。

**中世道路跡** [図版 164] : SC01 から火鉢と考えられる大型の皿型土器 (10)、カワラケ、内耳鍋が出土した。10 は余り類例をみないが、内湾する厚手の皿形の器形である。内耳鍋と同じ胎土で、回転台を使ったナデ調整が施され、口唇部端部は内傾して面取りされる。煤の付着はなく、火鉢とは断定はできない。カワラケは明灰褐色の比較的精良な胎土である。

**中世～近世の道路側溝跡等** [図版 164・PL74] : SD11 から内耳鍋、SD12 からカワラケ、内耳鍋が、SD14 から内耳鍋、カワラケが出土した。SD24 から内耳鍋、カワラケ、古瀬戸大窯皿と考えられる破片が出土した。内耳鍋の口縁形態は、外反形態と考えられる破片、直立気味で内面に凹凸を残す形態、短く外反する形態がある。カワラケは明灰褐色・灰白色の比較的精良な胎土が多い。大窯製品はごく小片で、器形等の詳細は不明である。SD29 からカワラケ、内耳鍋が出土した。内耳鍋は 158 片出土し、一遺構からの出土数としては最多で、複数個体分がある。口縁は内湾形態のものと、不明のものがある。SD32a から内湾形態の口縁片 (16)、SD34 から外反形態の口縁の内耳鍋口縁片 (17) が出土した。SD36 から内耳鍋の口縁片が出土し、口縁はいずれも内湾形態である (15・21)。SD39 からカワラケ、内耳鍋が出土した。カワラケは灰褐色・灰白色の精良胎土のものである。SD41 から内耳鍋が出土した。SD45 からカワラケ、外反形態の内耳鍋口縁片 (24) が出土した。SD47 から外反形態の内耳鍋口縁片、SD48 から外反形態の可能性のある内耳鍋口縁片が出土した。SD49 から内耳鍋 8 片が出土し、口縁は外反形態のものがある。SD50 から瓦質内耳鍋 (12) が出土し、他に口縁部を欠損する酸化炎焼成の内耳鍋が出土した。SD60 から、内耳鍋が出土した。

集石遺構 SH04 から、土器香炉 (11) と内耳鍋とが出土した。11 はカワラケと同じ精良胎土を用い、口調整される。

**柱穴跡と考えられる土坑** [図版 164] : SK136 から内耳鍋、SK137 から内面に凹凸を顕著に残す内耳鍋口縁片、SK139 から内耳鍋が出土した。2 区中央の土坑では、SK120 から内湾ぎみの口縁のカワラケ (6)、内耳鍋が出土した。SK157 から内耳鍋、SK164 から外反口縁の内耳鍋口縁片、2 区 (市道下) SK245 からカワラケが出土した。

**井戸跡** [図版 164・PL74] : 2 区 SK215 からカワラケ、内耳鍋が出土した。3 区 SK171 の上部からカワラケが出土した。3 区 SH05 から内耳鍋口縁 (14) が出土した。14 は口縁内面に凹凸を顕著に残す形態である。SK244 からカワラケ、内耳鍋が出土した。内耳鍋の口縁は内湾形態で、上部は板状工具でナデ調整されて平坦となる。SK250 からカワラケ、内耳鍋が出土した。内耳鍋は外反形態のものがある。SK247 からカワラケ、内耳鍋が出土した。カワラケ 1 片は灰白色の精良な胎土である。

**第 3・4 調査面 (中世～近世)** : 第 3 調査面では、カワラケ 20 片、内耳鍋 39 片と比較的多くの焼物が出土した。カワラケには、口縁に煤が付着する破片がある。内耳鍋の口縁形態は、外反形態 13 片、内湾形態 1 片、内面に凹凸を顕著に残す直立気味のもの 1 片に分かれる。灰白色と灰褐色の比較的精良な胎土のものがある。第 4 調査面ではカワラケ 2 片、内耳鍋 3 片のみの出土である。カワラケは、第 3 調査面以上で出土した明褐色の胎土のものと異なる胎土であり、小片で形態は不明である。内耳鍋はいずれも酸化炎焼成の体・底部小片で、底部は平底である。第 4 調査面の土器片は僅かな小片のみしかなく、本調査面に伴うと断定はできない。

他時代の遺構・調査面 [図版164]: 第2調査面からは、2区南部のSK020・022・042から内耳鍋、SK046・047・051からカワラケと内耳鍋、SK065・075から内耳鍋、SK073からカワラケが出土した。SK064からは、内耳鍋内湾形態の口縁(23)が出土した。第5調査面からは、2区(市道下)で混入とみられる内耳鍋が出土した。SL01(2区)からカワラケ、内耳鍋が出土した。SX45(2区)からカワラケ、内耳鍋が出土した。カワラケは1遺構の出土量としては多い。

## (2) 土製品 [付表18・図版165・PL74]

SK202から鋳型と思われる土製品(25)が出土した。遺存厚4cm強を測る推定径16cm弱の円錐形で、全体の1/3ほどが遺存する。全体的に摩耗し下部を欠損する。内面側には外反気味に広がる推定径4cm弱の円錐形面、その上端に幅1.8cmほどの環状水平面が形づくられる。さらにその端部は1~2mmほどの段差から幅1cmほどの縁に続く。内面中央の円錐形部分と上端の水平面は平滑で黒色に変色している。断面には厚さ3cmの粗砂混じりの空隙も多い粘土で鉢形の芯を作り、砂を多く混じる土を上面に塗って鋳型面がつくられている。表面色調は橙色で、鋳型面の下部は暗青灰色を呈する。被熱している点から何らかの金属製品の鋳型とみられるが、詳細は不明である。

## (3) 石製品 [付表19・図版165・PL74]

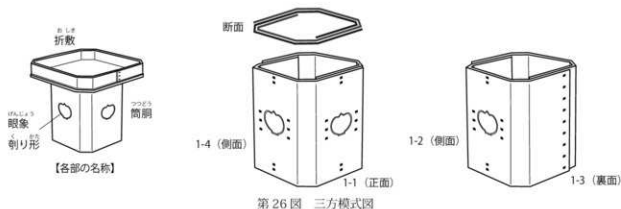
中世の遺構出土品や中世と考えられる石製品について記述する。使用石材別には、遺跡背後の山に産出する粗い結晶を含む流紋岩の加工品と、黒色多孔質安山岩を用いる凹石、軽石を用いる凹石がある。これ以外に図示していないが、遺構外出土の金属器で削った軽石加工品がある。また、道路側溝SD34出土の凝灰岩製砥石は端面が鋸で切断されていて、近世の可能性があるため近世近代の項に掲載している。

凹石: 1は安山岩製、2・3は軽石製である。4は黒色多孔質安山岩製でやや大型であり、凹みの部分はタガネ状工具で点状に敲打し、側面等はノミ状工具で成形する。凹みの深さは10.2cmである。5は安山岩製で、側面等はノミ状工具で成形する。凹みの深さは3.9cmで、凹みを形成する途中の未成品と思われる。五輪塔未成品: 6は黒色の多孔質安山岩製の五輪塔の未成品と考えられるものである。ノミ状工具で側面等を成形する。五輪塔の水輪もしくは風輪部分に相当すると思われる。7~9は流紋岩製の加工石で、7は上下面を比較的平坦とし、側面は敲打により円形を意識して成形したと考えられる。側面は火を受けて炭化物が付着する。8・9はSD40から出土した。8は1端面を平坦とし、それ以外の側面は球状を意識したと考えられる粗い敲打を加える。形は整っておらず、製品を目的としたものかどうか不明である。9は同じく球状を意識した破片と考えられる。

## (4) 木製品・漆製品 [付表21・図版166~169図・PL75~77]

木製品は、中世堀跡SD40から5点(1・3・4・6・16)、SD59から10点(2・7~15)、SK215から2点(5・17)が出土した。いずれも調度具類や容器類と思われる小型品である。

三方 [図版166、167・PL75、76]: 1は折敷部を欠損し、出土時は筒胴部の側板が長方形に組まれた状態で出土した。出土状態を維持したまま周囲の土ごと取り上げ、整理時に室内で掘り出したところ側板はそれぞれ腐食し分離していた。側板は横幅が長いものと短いものがあるが、長いものは両端の少し離れたところに縦位の切り込みがあり、本来は角に狭い面取り状とする平面八角形の可能性がある(第26図)。短い側板(1-3)は透かし彫りの削り形がないため裏面とみられ、反対側(1-1)が正面と考えられる。出土状態のような平面長方形とすれば短辺側が正面となるが長辺の側板が角の面取り状の部分を含む八角形ならば、ほぼ1辺が均等幅となる。裏面(1-3)のみは縦位に連続して樹皮で綴られ、他の1-1・2・4は斜



り形の上下と左右2～3か所のみ綴られる。折敷を固定するための綴り孔の有無は不明だが、裏面の1-3上端に綴り孔があり、これが該当する可能性がある。1-1・2上端の綴り孔も折敷を固定する機能を併せ持つものだろうか。1-4は上端の綴り孔が不明である。角は浅い切れ込みを入れて折り曲げられているとみられるが、各側板で1-1・3の短い側板が3枚重ね、長辺の1-2・4が2枚重ねに樹皮で綴られ、切り形は透かし彫とせず木地の上に見える形となっている。短辺が3枚綴り、長辺が2枚綴りで、板の端部が内面のいずれも向かって左前にみえるので、おそらく2枚の1周と1/4弱の板を渦巻状に重ねて樹皮で綴ると考えられる。

**その他** [図版168・169・PL76・77]：4・5は柄杓か小型曲物の底板と思われる。4は底板に綴り孔が底板の相対する位置に2孔ずつあるが、側板と直交する位置になるため側板を固定するものとみられる。3は綴り孔や側板を固定する目釘はない。6は曲物底板と考えられるが、平面には孔が規則的に直線上に穿孔されており、甌とも思われるが詳細不明である。側面には側板を固定したと考えられる目釘が一部残存する。7は中央に孔1孔があり、蓋と考えられる。半分欠損するが、破断面に目釘が残り、もう1枚接合していた可能性がある。上面に刃物痕があり組板に転用されたとみられる。9～11・13は椗目の薄板で、曲げ物側板か折敷片か台と考えられる。12は板目の板材で表面に刃物の線条痕が多く残る組板の破片と考えられる。15は半円形の断面形で栓か、材固定のための楔片と考えられる。14は小角材で用途は不明、8も板材だが、用途は不明である。3は連歯下駄で1本の材から削りだされている。後左側の破片で鼻緒孔が1孔残る。16は板目板材で、図の下側が兩個側縁を削り込み、把手状となる。器種は不明ながら刃物の線条痕が無数にあり、組板に使われている。2は不明板材で、図の左側側縁部は欠損する。図の上端は比較的直線的ながら、下端は緩やかな弧を描いて鋭角に削られる。孔が側縁端部に欠損側縁にあり、遺存する側縁の上下2か所に切り込みがある。孔が鼻緒孔で、側縁の切り込みが縄をかけるものとすれば、田下駄とも思われるが、断定はできない。17は放射状のタテ方向の材に横材を編み込んだ籠状のもので、近接して棒状の材が出土した。両者が繋がった状態で出土していないが、関連する部材ならば箕のような製品になる可能性がある。

**漆製品** [PL77]：1点のみ出土した(18)。内外面と供に赤漆を塗布し、文様はない。同様の漆器は近景の新潟県、石川県では16世紀以後に現れるとされており、本遺跡出土の漆器も年代的な矛盾はない。

## 2 近世・近代の遺物

### (1) 長谷窯関連遺物

**概要：**3区第1調査面で見出したST01では陶器製作のロクロ台石（ロクロ心石）2点が設置された状態で発見され、工房跡として注目された。その周囲からは、窯道具のほか、陶器とその焼き損じ品等が多数出土し、中には陶器素焼きの破片に部分的な施釉を行い、焼き上がりの色調を確認したテストピースも含まれる。また、人形などの小物やその型などの素焼き製品も出土した。そのような遺構と遺物の構成から、一帯は1867（慶応3）年から1896（明治29）年頃まで宮崎清右衛門の敷地内で開業・操業された「長谷焼」に関連する工房跡と考えられる（塩崎村史編集委員編1971）。出土陶器は素焼きと施釉本焼きで構成され、出土点数は素焼きが著しく多く、施釉本焼きが少数である。このことは施釉本焼きが出荷されたことを示しているのであろう。窯跡は未発見であるが、ST01の至近に窯が存在したと考えられ、ここでは長谷窯の製品として取り扱うことにする。なお、掲載した遺物の一覧表と非掲載の遺物も含めたグリッド別出土量の集計表は、添付DVDに収録した。

### 陶器製品（長谷焼）〔図版170～181・PL78～82〕

素焼きの陶器製品には、碗類・鉢類・水注類・壺類・甕類・鍋類・釜類・筒形容器類・皿類（蓋を含む）<sup>ひょうろ</sup>・乗燭類等がある。中でもサイズ別に規格化された製品が一定量ある鉢類と甕類は「長谷焼」の主要製品と考えられる。そのほか、釜類（小型の羽釜）、筒形容器類の一部（火入れ）、蓋の一部、灯明皿およびその蓋、乗燭類に関しても素焼きの出土が目立つ。

### 陶器の分類と観察

陶器の分類は、本遺跡とほぼ同じ時代に操業された埼玉県飯能市の飯能焼原窯跡出土品の分類（富元1999）を参照し、①焼物種（素焼き・施釉本焼き）、②器類（碗類・鉢類・甕類等）、③器種（鉢・搦鉢等）④器形（特大・大・中・小等）に注目して行い、外面・内面の成形方法を観察した。また、本焼きでは釉薬種・絵付け手法の観察も行った。その観察結果の詳細は、添付DVDの遺物観察表に収録している。

以下に、器類・器種・器形ごとに概要を記す。

### 碗類（25）

出土量は非常に少ない。25は素焼きで底部から体部にかけて緩く内湾し、口縁部へはほぼ直立して立ち上がる。口縁は平口縁で反りはない。

### 鉢類—鉢

底部から口縁部にかけて緩く内湾し、口唇が若干外反する。小型・中型・大型・特大型のほか、丸形がある。器形も多様で、主力な生産品の一つと考えられる。

**丸形（26～28・126）：**26～28は素焼き、126は本焼きである。口径が6cm前後、器高3cm前後、底径3～4cmのもので、底部に回転糸切り痕を残す浅い器形である。外面底部を除き、鉄釉施釉する。本器形は傾<sup>ちよこ</sup>猪口の可能性もある。

**小型（29・127～130）：**29は素焼き、127～130は本焼きである。口径が11～13cm、底径が6cm前後、器高が6～7cmのものが該当する。底部は付け高台で、畳付きの幅は0.5cm程度である。体部に片口が付くのが一般的で、口縁は外折り返しの玉縁である。ロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形される。127は鉄釉施釉、128・129は透明釉もしくは薬灰釉に加え口縁部に銅緑釉を施釉したもの、130は透明釉と薬灰釉を施釉したものである。なお、薬灰釉には銅が混ざり、銅緑釉気味の色調を帯びることもある。

中型 (30~32・131) : 30~32は素焼き、131は本焼きである。口径が17~18cm、底径が7cm前後、器高が12cm前後のものが中型に該当する。底部は付け高台で、口縁部は外折り返しの玉縁。ロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形。本焼きは、外面・内面とも藁灰釉と銅緑釉の混合釉で、高台に施釉は及ばない。畳付きの幅は5mm前後である。

大型 (33・132・133) : 33は素焼き、132・133は本焼きである。口径が24cm前後、底径が9cm前後、器高が13cm前後のものが該当する。底部は付け高台で、畳付きの幅は約1cmである。口縁は外折り返しの玉縁となる。ロクロ成形で、表面・内面ともナデにより整形される。132は藁灰釉を体部に、銅緑釉を口縁部付近に施釉したものの、133は藁灰釉と銅緑釉の混合釉を施釉したものである。なお、133の内面の底には重ね焼きの際に円錐ピン（ハリ）を使用した目跡が残る

特大型 (34・35・134~136) : 34・35は素焼き、134~136は本焼きである。口径が29~35cm、底径が19~20cm、器高が16cm程度のもものが該当する。「こね鉢」とも呼ばれる。135は復元底径が13.8cmで、大型と特大型の中間的サイズである。底部が付け高台で、畳付きの幅は3cm前後と幅広い。口縁は外折り返しの玉縁である。ロクロ成形で、表面・内面ともナデにより整形される。施釉は、外面・内面とも藁灰釉を施釉しているもの (135)、さらに口縁部に銅緑釉を施釉しているもの (134)、鉄釉施釉 (136) がある。135と136の内面の底には重ね焼きの際に円錐ピン（ハリ）を使用した目跡が残る。

#### 鉢類一掃鉢

底部から口縁部にかけてハの字状に広がり、内面に櫛目をもつ器類である。小型・大型の別があり、長谷窯では一定量の生産が行われたと考えられる。

小型 (36・137~140) : 36は素焼き、137~140は本焼きである。口径が26cm前後、底径が12~15cm前後、器高13cm前後のものが該当する。底部は付け高台で畳付きの幅が1.5cm前後である。36・138の口縁部は段をもち帯状に肥厚する。ただし、138は畳付きの幅が3.2cmと幅広い。いずれも鉄釉施釉で、畳付きの幅にかかわらず鉄釉の発色は一致する。137の底部内面と外面、畳付きの部分に重ね焼きを示す砂ドチ（擦りドチ）が認められる。140は小型の摺鉢の見込み部分に砂ドチ痕跡が明瞭に残る。重ね焼きの融着品である。

大型 (37~42) : 全て素焼きである。口径が33~35cm、底径が18cm前後、器高が16~19cmのものが該当する。底部は付け高台で、畳付きの幅が2cm前後である。小型とは異なり、口縁部は外へ折り返す。見込みの範囲となる内面櫛目が非常に幅広く、また深い器形である。37は口縁形状及び器壁の厚さから大型に該当すると推定される。ただし、内面の櫛目が、通常の縦方向に加え、横方向一条が確認でき、特異な例である。38は外面胴部に墨書がある。本焼きの良好な例は確認できない。

#### 徳利類 (141・142)

液体容器で、把手・注口を持たない器類が該当する。出土点数はわずかである。141は鶴首形の徳利類で、器高は15cm前後、口縁は外側に折り返し玉縁となる。ロクロ成形で外面と内面口縁部付近に銅緑釉を施釉する。142も鶴首形と思われ、器高は7cm前後の小型で、平底である。ロクロ成形で、外面は鉄釉の施釉後に頸部から胴部上半にかけて銅緑釉の掛け流しが認められる。徳利類の素焼きで良好例は確認できない。

#### 水注類

液体容器で、把手・注口を持つ器類が該当する。土瓶・急須とその蓋、水注に分類する。

土瓶 (43・44・143)：底部は<sup>こげ底</sup>碁笥底で、削り調整をしている。また底部脇に土を丸めた三つ足が付く。素焼きの43が該当するが、三つ足の位置は若干上方よりであるため、機能的な三つ足ではなく、形骸化している。体部はロクロ成形である。44は土瓶の注口部と推定した焼締め製品で、注口の内部はロクロ線が明瞭で、注口の先端は平滑である。本焼きは、急須の可能性もあるが、大きさから143を土瓶の注口部破片と考えた。体部と注口部の間の穿孔は14か所あり、注口の先端を平滑に切り、鉄軸が施軸される。土瓶蓋 (145・146)：つまみと脚 (返り) がある。口径 (脚径) 6cm前後、最大径 (笠径) が8cm前後、器高が3cm前後である。笠部が山なり形のもの (145) は、脚部は内に傾き、つまみは球形である。笠部が山形のもの (146) は、脚部は直立し、つまみは宝珠形である。笠・つまみ・脚部いずれもロクロ成形で、外面は藁灰釉と銅緑釉、もしくはその混合釉を施軸する。

急須 (144)：注口部の破片である。体部の注口部の間の穿孔は3か所ある。外面に銅緑釉、内面に透明釉を施軸する。良好な素焼きの例は確認できない。

急須蓋 (46～49・147～150)：46～49は素焼き、147～150は本焼きである。つまみと笠をもち、46～48は山形笠、49は平笠でかぶせ蓋、147は鍵状笠で落とし蓋である。46～48は最大径6～8cm、底径3～4cm、器高2cm前後で、器高の差で細分が可能になるかもしれない。ロクロによりナデ出されたつまみをもつ。なお、46・47の底部には回転糸切り痕が残るが、48の底部はヘラケズリ調整である。47は湯気通しの穴を1か所通す。49は灰白色の胎土で前出の蓋とは明らかに異なる。つまみが欠け、笠の外縁に沈線が1条巡る。

山形笠の本焼きは148～150が該当し、148・149は外面に鉄軸、150は銅緑軸である。147は鍵状笠で、口縁を外に折り曲げることでかえりを作り出す。149・150は湯気通しの穴を1か所通す。器体はロクロ成形で、底部裏面は回転糸切、148・149はさらにナデ整形される。内面は露胎のままだが、外面は鉄軸が施軸される。急須本体の本焼きの良好例が認められないものの、素焼きの山形笠の急須蓋が一定量認められることから、急須生産の存在が考えられる。

小水注 (45)：頸部がすばまる狭い口縁部に加え、胴長の器形の肩部に注ぎ口をもつ。口縁は外側に折り返し肥厚させる。ロクロ成形で、底部中心部が成形により若干上げ底となる。器高は12cm程度である。本焼きの良好例は確認できない。

## 壺類

壺の本体とその蓋に分類する。

壺 (50～53)：一般的な壺は、胴が丸く、頸がすばまり、口が広がる容器だが、本遺跡出土の壺は頸が短い短頸壺である。50～53は素焼きで、52は口径6cm前後の狭口、50・51は口径13cm前後の広口の2者がある。器高は推定15cm程度である。胴部はロクロ成形で、底部は付け高台でロクロナデ整形する。本焼きの良好例は確認できない。

壺蓋 (54)：火消し壺の蓋で、焼成が瓦質である。落とし蓋の形で、つまみと笠をもつ。底部に回転糸切り痕が残り、つまみは粘土塊を貼り付け、ロクロ成形で宝珠形となる。内面はロクロ成形だが、外面はロクロ成形の後にハケで整形する。

## 甕類

口径と器高が概ね同じか、もしくは器高が大きく、口縁部を折り返す器類である。小型から特大型の4種に器形分類でき、主要生産品の一つである。

小型 (55～61・151～154)：55～61は素焼き、151～154は本焼きである。本焼きは口径が5～6cm、底径

が4cm前後、器高が7cm前後である。底部は平底のほか、上げ底の57・60・154も存在する。底部からわずかに直立して胴部中央にかけて膨らみ、折り返し口縁をもつ。151～154はロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形する。鉄軸が施軸される。

**中型** (62・66・155・156)：62・66は素焼き、155・156は本焼きである。素焼製品は口径が23～25cm、底径が15～16cm前後、器高が30cm前後である。素焼き・本焼きとも完形品がないため全体形は不明だが、155は鉄軸が施軸される。底部は付け高台で、折り返し口縁をもつ。ロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形する。

**大型** (67～72・157)：67～72は素焼き、157は本焼きである。素焼製品は口径が31～35cm、底径が18～23cm、器高が35～40cmである。底部は付け高台で、高台幅は3～5cm程度である。折り返し口縁をもつ。ロクロ成形で、表面・内面ともナデ整形する。157は鉄軸と灰桶掛け流しの施軸である。SK114では71の素焼き大型甕が埋められていた。

**特大型** (73～79・158・159)：73～79は素焼き、158・159は本焼きである。素焼製品は口径が65～75cm、底径が25～32cm、器高が70cm前後である。底部は平底もしくは底部中央がやや上げ底となる。口縁を肥厚させ鐔状に作り出す。ロクロ成形だが、大型のため底部・胴部・口縁部と別々に粘土帯を作り、それぞれを接ぎ合わせている。その接合痕が胴部内面に残る。ロクロ成形後の表面はナデ整形だが、内面は板状工具で整形した痕がある。78・79には鐔状口縁もしくは胴部上半に「○」印の押印がある。「○」印の数は容量(○印1個=1斗=10升)を示す。158・159は鉄軸を施軸する。SK111では77、SK112では76の素焼き特大型甕が埋められていた。

## 鍋類

鍋の本体とその蓋に分類されるが、本遺跡では鍋蓋のみ出土した。

**鍋蓋** (80・160)：80は素焼きで、山なり形の笠と輪高台のつまみをもち、つまみの底は回転糸切り痕をナデ消している。端部のおさえ部分はロクロ引きで水平方向に引き出す。返しは剥落するが、粘土を貼り付け、ロクロナデにより成形したと思われる。160は本焼きで、山なり形の笠部の表面に幅4cm前後の幅で飛び鉋技法(製品をロクロで回転させながら、工具の刃先を使い、連続した削り目をつける技法)が認められる。つまみは扁平で、端部は水平方向に引き出される。表面は笠部につまみに近い部分と端部に鉄軸を施軸し、内面は端部以外に鉄軸を施軸する。

## 釜類一羽釜

底部から口縁部へ内湾しながら直立し、体部中央に鐔をもつ器種である。小型と大型の2種がある。

**小型** (83～87)：素焼きである。器高が5cm程度で、体部中央に幅2cm程度の鐔をもつ。「豆羽釜」とも呼ばれる。同型の素焼きが一定量確認できる。底部は回転糸切り離しで、鐔は体部へ後付けされ、ロクロナデ整形される。羽釜の破片である86・87の外側・内面には各種軸葉が部分的に施軸されており、施軸試験に使用されたものと思われる(柴田2020)。

**大型** (161)：本焼きである。器高24cm前後で、体部中央の鐔を含めた最大径は32cm前後と大型である。ロクロナデ整形される。鉛を用いた透明軸で、焼成温度がさほど高くはない状態で本焼きする。素焼きは確認できない。

## 筒形容器類

**植木鉢** (88～91・162～166)：88～91は素焼き、162～166は本焼きである。底部から口縁に向かってほぼ



直線的に立ち上がるものが多いが166のように曲線を描く器形もある。本焼きは口径が17～19cm、素焼き90の底径は8cm前後である。口縁はヨコナデにより外反する。162～164の外面と内面には口端から縦幅2.5cmから5cmの範囲に鉄軸を掛け流す。165は底部破片で、銅緑軸を施軸する。91は素焼きの底部分であろう。

火入れ(81・82・167～169)：81・82は素焼き、167～169は本焼きである。底部は碁笥底で、底部の屈曲部から口縁まで直立する。素焼きの器壁は4mmと薄い。81は体部内面のロクロ目が顕著である。82の体部下半はロクロケズリで斜めに面取りする。本焼きは口径が9～10cm、底径が8cm前後、器高が9cm前後で、口縁部は内へ折り返す玉縁である。施軸は、外面は口縁から体部下半の屈曲部まで透明軸で外面・内面の口縁部に薬灰軸と銅緑軸の混合軸を掛けるもの167、体部に薬灰軸、口縁部に銅緑軸を施軸するもの168がある。体部の内面は基本的に施軸しない。169は内外面の調整や施軸は167・168と共通するが、高台が付け高台である点、底径が12.4cmと大きい点が異なる。対応する素焼きが確認できないが、ここでは火入れと推定しておく。

火鉢(170)：火鉢の脚部破片である。上部には燃焼部となる体部が存在する。幅広の高台があり、表面は銅緑軸を施軸する。

#### その他の蓋

組み合う容器が判然としない蓋を一括する。

緑が素緑のもの(171・172)：171は表面に銅緑軸を施軸する。172は粘土紐によるつまみと丸みのある笠部をもつ。外面には銅緑軸、内面には透明軸を施軸する。

緑が合わせ口の返し・鐙をもつもの(98～104・173)：一般的に器高の高い山なりの笠の頂点に扁平のつまみが付く器形(山なり笠)で、98～104は素焼き、173は本焼きである。素焼きの口径は11cm前後に集中する傾向があるもの(98～102)、若干小型のもの(103)、やや大きめのもの(104)がある。笠が高い山なりとなるため、つまみを含めた器高が5cm前後と高い。173はロクロ成形で、つまみの周囲に銅緑軸を、笠から鐙にかけては薬灰軸を施軸する。恐らく壺・甕類の蓋であろう。

#### 皿類

本遺跡では、灯明皿とその蓋の2種が出土した。

灯明皿(114～118・181)：114～118は素焼き、181は本焼きである。口径8cm前後・底径4cm前後で底部外面に回転系切り痕を残す下皿部と、口径8cm前後で受けがある坏部を、粘土塊のロクロ成形で接合する。坏部は1か所を幅広くU字状に切り取り、油通しとする。181は坏部の外面・内面と、脚部に鉄軸の施軸が認められる。器形に大・小が存在する可能性がある。

灯明皿蓋(105～113・174～180)：105～113は素焼き、174～180は本焼きである。規格化された製品であることが明瞭で、素焼きの口径は6cm前後、鐙を含む最大径が8cm前後、器高が3cm前後で、本焼きは口径が5～6cm、鐙を含む最大径が7～8cm、器高が3cm前後である。焼成による収縮の程度は9割から9割5分にほぼ収まるものと推察する。笠の端部1か所をU字形にカットし、粘土粒による貼り付けつまみをもつ。ロクロ成形で、鉄軸を施軸する。灯明皿とその蓋は素焼き・本焼きとも多数出土し、主たる生産品の一つであったと考えられる。

#### ひょうろく 乗燭類

大きく内側に内湾する坏部と坏部内面底に芯立部、そして坏部を支える台部からなる。底部中央には乗

燭を台に固定する穿孔があり、外面に回転糸切り痕を残す。芯立部は板状粘土を切り出し、内面底に貼り付ける。大きさや形状等から3種に分かれる。

大型(119)：素焼きである。台部底径が8cm前後、器高が推定12cm前後である。

坏部の深い小型(120・182・183)：120は素焼き、182・183は本焼きである。台部底径が4cm前後、器高が5～6cm、芯立部が3cm前後である。

坏部の浅い小型(121・122・184)：121・122は素焼き、184は本焼きである。台部底径が4cm前後、器高が4cm前後、芯立部が2cm前後である。なお、123～125は坏部が欠損するため、器形が不明である。

#### その他の器類(90・92～97・185)

90は内挟りの削り出し輪高台である。本遺跡で数多く出土した素焼きの鉢類・壺類には認められない底部成形の手法である。92～94・96・97は、鉢類・壺類のいずれかの底部で、付け高台でロクロナデ整形する。95はヘラケズリにより台部を作り出し、185は直径3cm弱の内部空洞の棒状脚に、外反する坏部をもつ。坏部の底部外面には回転糸切り痕が残る。透明釉を施釉する。

#### ②素焼き製品(小物・型・その他) [図版182～184・PL83, 84]

陶器の素焼きと同様に焼かれ、そのまま製品とされたとみられる土器を素焼き製品と呼称する。

型(1～14)：1・2は小型もしくは中型の円錐ピンの型、3は中型、4は大型の型と考えられる。5は特大型円錐ピン(図版185-38)のように先端が丸みを帯びるものの型であろう。6は七福神の恵比寿で、7は不明瞭である。8は亀形の型である。11は急須・注口の型である。9・10の型のモチーフは不明で、13・14は容器の型であろうか。12は直方体の粘土の型と思われる。

小物(15～35)：人形は15のほか、16が七福神の大黒天、17が鬼面、18が福助、19が弁財天をモチーフとする。21は動物(招き猫か)、22は亀、23は梅花、25は家屋、24は器物をモチーフとしたものであろう。24は低温度で溶ける銅線軸の試し焼きと思われる軸葉が付着する。26の人形は墨で顔が描かれる。27～29はヘラケズリもしくはナデで直方体に整形した製品であるが、用途は不明である。30は表面に鉄軸が付着する製品だが、用途は不明である。ロクロの軸受であろうか。31は把手付の碗を象る玩具、32は陽刻による螺旋状意匠のある製品と思われる。33～35のさまざまな形状の製品の詳細は不明である。

その他(36～49)：36～39の詳細は不明である。40は土器の火鉢の口縁部で、釣矢のスタンプが押される。41は土器の火鉢で、火消し壺の脚と思われる。42は灰落とし、43～45・47はコンロで、44の内面にはスガが付着する。46はコンロ台である。48・49は土管で、布巻の後ヘラケズリで仕上げられる。48には「一寸」という刻印がある。これらの胎土は長谷焼と似ているために長谷窯関連遺物としたが、自家用か、あるいは他の窯業産地で生産された可能性も考えられる。

#### ③窯道具 [図版185～190・PL85, 86]

窯詰めの道具である匣鉢・円錐ピン・トチ・焼台・台脚・棚板・煉瓦が出土した。

匣鉢(1～6)：262片出土した。窯内で灰や火炎から製品を防ぐ容器で、重ねて使用する。匣鉢の口径は20～23cm前後、底径は18～22cm、器高は17cm前後である。1の内面底には薬灰軸と円錐ピンの目跡が残り、2の内面底には本焼きの高台跡が残る。6は体部に3か所の穿孔がある。

円錐ピン(7～38)：540点出土した。焼き物を重ね焼きする際に、焼き物と焼き物の接着防止のため挟み使用する道具で、大きさ別に次の4種類に分けられる。直径1.2cm以上1.5cm未満の小型(7～19)、直径1.5cm以上2cm未満の中型(20・21)、直径2cm以上3cm未満の大型(22～36)、直径3.5cm以上の特大型

(37・38)である。小型が178点(33.0%)、中型が32点(5.9%)、大型が327点(60.6%)、特大型が3点(0.5%)出土し、大型の割合が大きい。ビン先に薬灰釉や鉄釉など釉薬の付着が認められるものがある。

団子トチ(39-43):焼き物を重ね焼きする際に焼き物と焼き物の接着防止のため、口縁部に挟み使用する道具である。

輪トチ(44-79):輪トチには2種類あり、手握ねで環状に成形したもの(44-50)、円形で両面を回転糸切りで切断し、側面をナデ整形したもの(51-79)がある。大きさは直径5-7cm未満の小型、7cm以上-10cm未満の中型、直径10cm以上の大型がある。また、実測図に破線で示したように、多数の輪トチに輪高台の製品を焼成した痕跡が残り、66には片面もしくは両面にある。また、67は釉薬の跡が残る。こうした痕跡から、小型は灯明皿・乗燭、中型は小型の鉢、大型は中-大型の鉢・壺などの製作の際に使用したと考えられる。数量は、小型76片、中型148片、大型27片であった。

方形トチ(80-81):方形トチは2片出土した。いずれも周囲をナデ整形したものである。

焼台(82-115):焼台は307片出土した。脚の長さは、2cm未満の短脚のもの(82)、2cm以上5cm未満の中脚のもの(83-85・88-105)、5cm以上の長脚のもの(106-111)があり、短脚と中脚はさらに台座の大きさと数種類に分かれる。台座面は回転糸切りで形成され、縁はヘラケズリで成形される。台は付け高台でナデ整形される。台座には、輪高台跡や陶器の底部破片や釉薬の付着のほか、焼成による変色が認められる。102は比較的大型の焼台で、中型の甕類などを載せたと考えられる。115は手握ねの焼台と思われる。大型の甕類の焼成には、台座の直径が25cm前後ある特大の(112-114)が使用されたと考えられる。脚部は輪積みにより成形し、脚の周囲に孔を設ける。114の台座には輪高台跡が認められる。

その他窯道具(116-119):116と117は焼台と同じ機能を持ち、118は窯道具の蓋、119は匣鉢と同様の機能をもつものと思われる。

棚板(120-122):長方形で焼き物の焼成台として使用されたものである。121には焼き物の設置痕跡があり、122には輪高台跡が認められる。

煉瓦(123-129):窯の構築材の他、棚板のように使用されていたと考えられる。ほとんどが火を受け、一部には焼き物を置いたとみられる高台の輪郭が残る。

## (2) その他遺物

### ①陶器・磁器 [図版191、192・PL88]

本遺跡では、瀬戸・美濃産、伊万里産のほか、益子焼もしくは笠間焼と思われる他の窯業産地で生産された陶磁器が出土した。

磁器では、186-202は瀬戸・美濃産である。器種は茶碗・皿・鉢・湯呑・盃・徳利・蓋・仏飯具・栓がある。呉須絵は手書き・型紙摺り・銅版転写・ゴム印の手法があり、そのほかに色絵上絵付けがある。191は色絵上絵付けの皿で、蛇ノ目凹形高台をもち、口縁形が輪花である。192は色絵上絵付けの皿で、高台は輪高台で、裏底銘に「塩崎学校前赤沢商店」とある。197はクロム青磁の湯呑である。203は伊万里産の磁器である。口縁形が輪花で、呉須絵は手書き、高台は蛇ノ目凹形高台である。口縁に錆釉(口サビ)を塗布し、蛇ノ目凹形高台の透明釉はがしが認められる。幕末の肥前陶磁V期に相当する(大橋1989)。204は色絵上絵付けの湯呑で、裏底銘に「九谷」がある。産地は不明である。

陶器では、205が笠間焼と推定される片口鉢、206が笠間焼もしくは益子焼と推定される鉢である。206の口縁部には菊文様を貼り付ける。207は常滑と思われる急須で体部に海草を掛けて焼成した「藻掛け」が確認できる。208は土瓶蓋で、笠部は山形、脚は直立、つまみは扁平形である。白色釉に鉄釉による文様を加えている。209は蓋で口端が水平になり、つまみの先端部に印花を押圧され、灰釉が施される。

207～209の産地は不明である。なお、一覧表は添付DVDに収録した。

②瓦 [図版193～195・PL87]

1・2は棧瓦である。左上部と右下部に切り込みがあり、切込棧とも呼ばれる。1には刻印「ヤマキ」がある。3～7は平瓦で、四角形の板を凹方向に曲げた形状を成す。並平とも呼ばれる。6には刻印「三」がある。7は丸瓦の可能性もある。8～11は軒平瓦の瓦当で、8・9には刻印「三」があり、11には刻印「ヤマキ」がある。9・10には唐草文、10には流水と紅葉文を陽刻する。12は軒丸瓦の瓦当で、連珠三巴文を陽刻する。13は丸瓦で、並丸とも呼ばれる。14は破風の上に葺かれる袖瓦で、蠟羽とも呼ばれる。15の詳細は不明である。なお、一覧表は添付DVDに収録した。

③石製品・石器 [図版196・PL87, 88]

10は硯、11～15は凝灰岩製の砥石である。12・13には端部に鋸による切断痕が認められる。16は安山岩製の砥石である。いずれも断面が方形で、2面から4面を砥面として使用する。17・18はロクロ台石だが、規格と石材がやや異なる。17はST01のP1で出土したロクロ台石で、長さ48cm・幅49cm・厚さ17cmの平面方形で、中央に16×15.4cmの方形の穿孔がある。重量は約69.9kgを測る。上面と孔内を丁寧にタガネ状工具で整形するが、側面と裏面は粗い敲打により打欠く。石材は石英を少し含む安山岩製である。18はST01のP2で出土したロクロ台石で、長さ63.2cm・幅40.4cm・厚さ23.2cmで、重量は約92.6kgを測る。平面形はやや不整形の長方形で、中央に10×12cmの方形の孔を穿孔する。孔の壁はタガネ状工具で整形されるが若干斜めで、上面では11.5×10cmの方形だが、下端で9×7cmを測る。加工方法は17と同様で、表面と中央の孔内のみ細かいタガネ状工具で整形し、側面と裏面は粗い敲打による整形とする。石材は石英結晶を多く含む流紋岩製である。

上記以外に図示していないが、近世～近代と思われる石製品には頁岩製石板9点、滑石製石墨1点、石板片の周囲を研磨した「おはじき」とみられる円形石板がある。他に火打ち石とみられる打撃で割れた石核もしくは砕片とみられる石英4点、チャート16点、鉄石英1点、玉髄3点、黒曜石1点がある。また、当該期のものか不明ながら凝灰岩製砥石破片が図示以外に4点、泥岩製砥石片が1点遺構外から出土した。縄文時代の石器と思われる打製石鏃(PL88-19～24)、二次加工剥片(PL88-25)、敲石(PL88-26)も出土している。

④金属製品 [付表20・図版197・PL88]

1・2は煙管の吸口、3は煙管の雁首である。4は鉄製の楔、5～7は鉄釘である。銭貨としては、寛永通寶(8・9・11)、文久永寶(10)、皇宋通寶(12)、洪武通寶(13)、明治21年の一銭銅貨(14)、明治19年の半銭銅貨(15)、明治41年の十銭銀貨(16)、明治16年の一厘銅貨(17)がある。

⑤ガラス製品 [図版197]

18は茶色のワイン瓶である。19は白色の化粧瓶で、エンボスによる銘「SANKO」がある。20は無色のインク瓶で、エンボスによる銘「トンボ印」がある。21は無色の薬品瓶である。なお、一覧表は添付DVDに収録した。

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 分析の目的

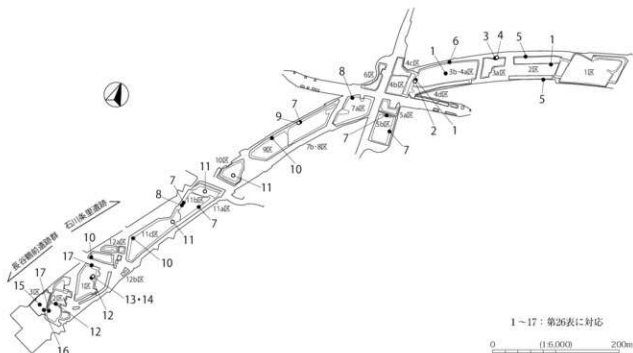
今回の発掘調査では、千曲川下流域の長野盆地南端に広がる後背湿地に広がる石川条里遺跡とその西側に接する山麓の崖錐地形上に立地する長谷鶴前遺跡群を対象とした。石川条里遺跡は弥生時代～平安時代の水田跡を重層的に検出し、長谷鶴前遺跡群では石川条里遺跡から続く水田跡のほか、中世居館跡、近代窯業工房跡等の多様な遺構を確認した。

こうした考古学的な成果を自然科学的な見地から検証かつ補完し、遺跡の総合的理解に寄与する目的として、自然科学分析を行った。

なお埋文センターでは自然科学分析を実施できないため、専門的な研究者に研究委託をした他、分析業者等に業務を委託した。

第2節1には五十嵐由里子氏（日本大学松戸歯学部准教授）ほか3氏による石川条里遺跡の近世墓跡等から出土した人骨の分析結果、同節2には本郷一美氏（総合研究大学院大学先端科学研究科准教授）ほか3氏による同遺跡出土動物骨の分析結果、第3節には保柳康一氏（信州大学理学部特任教授）による同遺跡の古環境分析結果を報告いただいた。それ以外の分析項目については第26表に概要をまとめている。また考古学的所見との比較検討については、各遺跡の遺構や遺物の所見（第3章・第4章）で触れるとともに、第6章の考察に反映させている。

なお、それぞれの分析結果や方法の詳細は、添付DVDに分析報告書の原本を収録したので、参照していただきたい。



第27図 分析試料採取位置図

第26表 その他自然科学分析一覧

番号	遺跡名	年度	分析対象	地区	分析目的	分析点数	分析項目				分析機関
							花粉	珪藻	フント・オパール	年代測定	
1	石川糸里遺跡	2015	調査区壁断面から採取した土壌	2T (2区)、4・5T (3b・4a区)	水田としての利用など土地利用の古環境を推定する。	18点			○		株式会社古環境研究所
2	石川糸里遺跡	2015	調査区壁断面から採取した植物片	5T (3b・4a区)	水田層下層泥炭層から、水田層の年代を考察する。	3点				○	株式会社バレオ・ラボ
3	石川糸里遺跡	2016	調査区壁断面から採取した土壌	3a区	水田など土地利用の古環境を推定する。	3点			○		株式会社古環境研究所
4	石川糸里遺跡	2016	調査区壁断面から採取した炭化材	3a区	水田跡で確認されたシルト層の年代を明らかにする。	3点				○	株式会社古環境研究所
5	石川糸里遺跡	2016	調査区壁断面から採取した土壌	2区	水田など土地利用の古環境を推定する。	10点			○		株式会社古環境研究所
6	石川糸里遺跡	2017	調査区壁断面、遺構から採取した土壌	3b・4a区	弥生時代における水田稲作を推定する。	5点			○		株式会社古環境研究所
7	石川糸里遺跡	2018	調査区壁断面から採取した土壌	5b区、7b・8区、11b区	弥生時代からの遺跡の古環境を捉える。	52点	○	○	○		株式会社古環境研究所
8	石川糸里遺跡	2018	調査区壁断面から採取した土壌	7a区、11区	水田跡と推測される土層を確認し、調査面を確定する。	17点			○		株式会社古環境研究所
9	石川糸里遺跡	2018	調査区壁断面泥炭層(遺構)から採取した炭化物	7b・8区	水田跡の時期を裏付ける資料を得る。	3点				○	株式会社古環境研究所
10	石川糸里遺跡	2019	調査区壁断面から採取した土壌	9区、11c区、12a区	弥生時代から現在にいたる遺跡の古環境を捉える。	66点	○	○	○		株式会社古環境研究所
11	石川糸里遺跡	2019	遺構から採取した木材	10区 SC105、11a区 SC089、11c区 SC101 湧土芯材	畦野の時期を裏付ける資料を得る。	9点				○	株式会社古環境研究所
12	長谷館前遺跡群	2017	調査区壁断面から採取した土壌	4・6T (1区)	低湿地の形成過程など、遺跡の古環境を捉える。	28点	○				株式会社古環境研究所
13	長谷館前遺跡群	2017	調査区壁断面から採取した土壌と木片	6T (1区)	湿地における堆積土壌の年代を明らかにする。	7点				○	株式会社加速器分析研究所
14	長谷館前遺跡群	2017	調査区壁断面から採取した土壌と植物片	6T (1区)	低湿地の形成過程など、遺跡の古環境を捉える。	9点				○	株式会社加速器分析研究所
15	長谷館前遺跡群	2018	調査区壁断面から採取した土壌	1区、2区、3区	土壌や植物の構成の変化を明らかにする。	40点	○				株式会社古環境研究所
16	長谷館前遺跡群	2018	遺構から採取された土壌	2区(市道下) SC20他	水田土壌や畦野と推測される遺構が水田跡か確認する。	9点			○		株式会社古環境研究所
17	長谷館前遺跡群	2018	調査区壁断面から採取した植物片	1区、2区、3区	泥炭層の堆積状況の確認と土壌変化の時期を明らかにする。	15点				○	株式会社古環境研究所
18	石川糸里遺跡 長谷館前遺跡群	2020	遺構から出土した木製品		出土木製品の利用財や周辺環境等を推定する。	265点 28点					株式会社古環境研究所
19	石川糸里遺跡 長谷館前遺跡群	2022	遺構から出土した木製品		出土木製品の利用財や周辺環境等を推定する。	2点 7点					株式会社バレオ・ラボ
20	石川糸里遺跡	2022	遺構から出土した金銅製品	12c区 SD191 出土	鍍金などの加飾が行われていたか確認する。	2点					株式会社バレオ・ラボ
21	石川糸里遺跡	2023	遺構から出土した土器	7b・8区出土	須臾器の内面付着物を確認する。	1点					株式会社バレオ・ラボ

## 第2節 出土骨

## 1 石川条里遺跡出土人骨

日本大学松戸歯学部准教授 五十嵐由里子

京都大学名誉教授 茂原信生

獨協医科大学医学部解剖学講座献体事務室事務長 櫻井秀雄

総合研究大学院大学先端科学研究科准教授 本郷一美

## (1) はじめに

石川条里遺跡は長野市にある遺跡で、一般国道18号坂城更埴バイパス改築事業に伴い、2016～2021年度にかけて、長野県埋蔵文化財センターによって調査された遺跡である。本報告は、その際に出土した人骨についての報告である。

石川条里遺跡から出土した人骨15点は、全て近世の遺構から出土した(第27表)。このうち、埋葬施設からの出土は11点で、土坑墓SM001～005から出土している。その他の4点は、溝跡SD061・065から出土しているが、他遺構から混入したものと考えられる。骨の保存状態は全体的に悪く、形は確認できるものの形態は観察できない。歯の残りはよく、主に歯冠がかたまって出土している。これは埋葬された頭骨に歯が植立した状況で遺存していたことを示している。歯の形態に関しては、基本的な形態以外に認められた特徴を記載する。

第27表 石川条里遺跡の出土人骨一覧

管理番号	写真番号	出土地点			取上番号	記載	性別	年齢
		地区	遺構・地点	遺構の時期				
1	第28図-1	3b・4a区	SM001	近世		歯25本	不明	20歳以上
2	—	3b・4a区	SM001	近世		四肢骨片	不明	不明
3	—	3b・4a区	SM001	近世		四肢骨片	不明	不明
4	第28図-2	3b・4a区	SM002	近世		歯27本	不明	13歳以上
5	—	3b・4a区	SM002	近世		四肢骨 頭蓋骨	不明	不明
59	第28図-3	3b・4a区	SM003	近世		歯14本	不明	2歳程度
8	第28図-4	3b・4a区	SM004	近世	No 1	歯24本	不明	13歳以上
9	—	3b・4a区	SM004	近世	No 2	四肢骨片	不明	不明
10	—	3b・4a区	SM004	近世	No 3		不明	不明
6	—	3b・4a区	SM005	近世		焼骨片 ヒト	不明	不明
7	—	3b・4a区	SM005	近世		焼骨片 ヒト	不明	不明
39	—	3b・4a区	SD061	近世		頭蓋骨片10点	不明	不明
40-1	—	3b・4a区	SD061	近世		頭蓋冠破片2点	不明	不明
40-2	—	3b・4a区	SD061	近世		頭蓋冠破片2点	不明	不明
42	—	3b・4a区	SD065	近世		四肢骨片	不明	不明

## (2) 出土した人骨の記録

## ① 近世の土坑墓から出土した人骨

## SM001

## 1 [第28表・第28図-1]

頭蓋骨の位置に歯が残る。他は観察不能。歯は25本が残る。歯根部(象牙質)がわずかに残っているがおもに歯冠(エナメル質)が残る。上顎第3大臼歯が萌出しているため、20歳以上と推定できる。性別は不明である。

残存歯は以下の通りである。

M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	II	II	I2	C	P1	P2	M1	M2
		M1	P2	P1		I2	II	II	I2		P1	P2	M1	

歯の計測値は以下の通りである。

第28表 SM001 歯の計測値

右	M3		M2		M1		P2		P1		C		I2		II	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	9.12	9.97	9.4	11.45	10.09	11.69	6.5	8.88	7.53	9.86	7.29	-	6.58	5.78	8.48	7.32
下顎					10.77	10.91	6.66	7.42	7.37	7.88			6.07	6.24	5.57	5.71

左	II		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	8.7	7.62	6.98	8.28	7.61	8.09	7.22	9.19	6.49	8.64	10.2	11.7	9.35	11.5		
下顎	5.48	5.99	-	6.42			7.68	7.97	6.93	7.64	11.4	10.64				

歯の特徴は以下の通りである。残存歯全てにエナメル質減形成が認められる。

上顎右側 中切歯：シャベル型切歯である。軽度の副シャベル型切歯である。基底結節部に斜切痕がある。

上顎右側 側切歯：咬耗が進んでいるので判断は難しいが、シャベル型切歯であると思われる。弱い副シャベル型切歯である。基底結節の近心に斜切痕がある。

上顎右側 第三大臼歯：咬合面の輪郭は円形に近いが、咬頭は4つある。

上顎左側 中切歯：シャベル型切歯である。軽度の副シャベル型切歯である。

上顎左側 側切歯：シャベル型切歯である。遠心辺縁隆線の発達が良い。弱い副シャベル型切歯である。

下顎右側 第一小臼歯：遠心面にも摩耗が見られる。

下顎右側 第二小臼歯：舌側副咬頭が発達していて咬合面の溝はブラックの分類によるY型である。近心面と遠心面にも摩耗が見られる。

下顎右側 第一大臼歯：近心面と遠心面にも摩耗が見られる。

下顎左側 第二小臼歯：舌側副咬頭が発達していて咬合面の溝はブラックの分類によるY型である。遠心面にも摩耗が見られる。

下顎左側 第一大臼歯：近心面と遠心面にも摩耗が見られる。

## 2

20cmほどの四肢骨骨幹。断面の輪郭から考えて橈骨か。

## 3

太い四肢骨骨幹。大腿骨であろう。右大腿骨遠位部か。かなり太い。



## SM002

## 4 [第29表・第28図-2]

頭蓋骨である。保存は悪く骨自体は確認できないが、頭蓋骨があることは分かる。片隅に歯が多数まわって出土している。これと反対側が後頭骨の部分である。右を下にしているか。上下顎第2大臼歯が萌出しているので、13歳以上と推定できる。性別は不明である。

残存歯は以下の通りである。

M2	M1		P1		I2	II	II	I2	C	P1	P2	M1	M2	
M2	M1	P2	P1	C	I2	II	II	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3

歯の計測値は以下の通りである。

第29表 SM002歯の計測値

右	M3		M2		M1		P2		P1		C		I2		II	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎			9.28	11.27	11.04	11.59			7.03	9.4			7.04	6.59	8.38	7.29
下顎			10.44	10.15	-	10.93	6.99	8.01	7.02	7.63	6.61	7.09	5.89	6.29	5.43	5.8

左	II		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	8.62	7.19	5.73	5.76	7.21	8.27	7.16	9.48	6.59	9.34	11.4	12	9.48	11.1		
下顎	5.57	5.99	5.96	6.15	6.85	7.66	7.12	7.95	7.2	7.92	11	10.88	10.9	10.3	9.53	8.94

歯の特徴は以下の通りである。

上顎右側 中切歯：歯冠長が長い。シャベル型切歯である。基底結節はあまり発達していないがその近心に斜切痕がある。切歯結節（マメロン）が残っている。

上顎右側 側切歯：歯冠長が長い。シャベル型切歯である。基底結節の発達が弱い。切歯結節（マメロン）が残っている。

上顎右側 第一大臼歯：比較的咬耗が進んでいる。近心舌側咬頭の舌側面にごく弱い（溝が見える程度）カラベリー結節が見られる。近心面にも遠心面にも咬耗がある。

上顎右側 第二大臼歯：近心面にも咬耗がある。

上顎左側 中切歯：歯冠長が長い。シャベル型切歯である。基底結節はあまり発達していない。切歯結節（マメロン）が残っている。

上顎左側 側切歯：歯冠長が長い。シャベル型切歯である。基底結節の発達が弱い。切歯結節（マメロン）は残っていない。

上顎残存歯全てに比較的強いエナメル質減形成が見られる。

下顎右側 第二小臼歯：咬合面の溝はブラックの分類のU型である。近心面にも遠心面にも咬耗がある。

下顎右側 第一大臼歯：遠心頬側咬頭の遠心部と遠心咬頭がう蝕により欠損している。近心面にも咬耗がある。

下顎右側 第二大臼歯：4咬頭である。咬合面の溝は+型である。咬合面中心部にう蝕による円形の欠損がある。

下顎左側 第二小臼歯：咬合面の溝はブラックの分類のU型である。

下顎左側 第一大臼歯：5咬頭である。咬合面の溝は+型である。咬合面中心部にう蝕による円形の欠損がある。

下顎左側 第二大臼歯：4咬頭である。咬合面の溝は+型である。咬合面中心部にう蝕による円形の欠損がある。

下顎左側 第三大臼歯：5咬頭である。

下顎左側第三大臼歯以外の下顎残存歯全てにエナメル質減形成が見られる。

5

20cmほどの四肢骨が2本やや交叉している。細い骨ではないので大腿骨か脛骨付近と思う。詳細不明。ヒトだろうと思うが確定できない。

SM003

59 [第30・31表・第28図-3]

歯が14点と破片が残っている。歯根は残っていない。乳歯列である。M1は他の乳歯と色が異なり石灰化が不十分で未萌出と思われる。上顎の永久歯I1があるが、左右とも歯冠の先端1/3ほどが形成されているに過ぎない。これも乳歯とは色が異なる。歯冠の形成状態から考えて約2歳と推定できる。性別は不明である。

残存歯は以下の通りである。

dp2	dp1				dc	dp1	dp2	
dp2	dp1	dc			dc		dp2	
				(II)				
(M1)					(M1)			

歯の計測値は以下の通りである。

第30表 SM003歯の計測値(乳歯)

右	dp2		dp1		dc		d2		d1	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	9.35	10.33	7.57	8.91						
下顎	10.2	9.3	-	-	5.9	5.4				

左	d1		d2		dc		dp1		dp2	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎					7.02	6.12	7.27	8.88	9.3	10.4
下顎					5.8	-			10.2	9.0

第31表 SM003歯の計測値(永久歯)

右	M3		M2		M1		P2		P1		C		I2		I1	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎															8.85	-
下顎					10.51	10.20										

左	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	8.91	-														
下顎											10.4	10.03		10.6		

乳歯の特徴は以下の通りである。

上顎右側 第一乳臼歯：2咬頭タイプである。

上顎右側 第二乳臼歯：近心舌側咬頭の遠心副隆線と遠心頬側咬頭の中心咬合面隆線が連続して斜走隆線を形成している。遠心頬側咬頭の中心隆線と中心溝の間に発達した弱いメタコニユールが認められる。近心辺縁隆線上にプロトコニユールが認められる。

上顎左側 第一乳臼歯：2咬頭タイプである。遠心辺縁隆線上の中心溝より舌側寄りに結節が認められる。

上顎左側 第二乳臼歯：近心舌側咬頭の遠心副隆線と遠心頬側咬頭の中心咬合面隆線が連続して斜走隆線を形成しているようにも見えるが、遠心頬側咬頭の中心隆線と中心溝の間に明瞭なメタコニユールが認められる。近心辺縁隆線上に明瞭なプロトコニユールが認められる。

下顎右側 第二乳臼歯：第6咬頭が認められる。屈曲隆線が認められる。

下顎左側 第二乳臼歯：第6咬頭が認められる。屈曲隆線が認められる。

永久歯は形成途中であるが以下のような特徴が認められる。

上顎右側 中切歯：シャベル型切歯である。副シャベル型切歯ではない。

上顎左側 中切歯：シャベル型切歯である。副シャベル型切歯ではない。

下顎右側 第一大臼歯：咬合面の溝は+型である。近心舌側咬頭の近心副隆線が遠心方向に屈曲している。近心舌側咬頭の中心咬合面隆線が中心溝まで伸びず、中心咬合面隆線と中心溝の間に隆線状の隆起が一つ認められる。

下顎左側 第一大臼歯：咬合面の溝は+型である。近心舌側咬頭の中心咬合面隆線が中心溝まで伸びず、中心咬合面隆線と中心溝の間に隆線状の隆起が二つ認められる。

## SM004

### 8 [第32表・第28図-4]

歯がまとまって出土している。上下顎第2大臼歯が萌出しているので、13歳以上と推定できる。性別は不明である。

残存歯は以下の通りである。

	M1	P1	C	I2	II	II	I2	C	P1	P2	M2	
M2	M1	P2	P1	C	I2	II	II	I2	C	P1	P2	M2

歯の計測値は以下の通りである。

第32表 SM004歯の計測値

右	M3		M2		M1		P2		P1		C		I2		II	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎					9.77	12.2			7.44	10.43	8.24	9.42	6.91	6.59	9.12	7.73
下顎			11.22	10.58	11.44	10.99	6.89	8.78	7.24	8.33	6.62	8.66	6.54	6.68	5.84	6.07

左	II		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l
上顎	9.54	8.03	6.77	6.13	7.7	9.19	7.37	10.01	6.3	9.49			9.5	12		
下顎	5.82	6.03	6.52	6.97	6.89	8.59	7.15	8.87	7.19	8.54			11.6	10.6		

歯の特徴は以下の通りである。

- 上顎右側 中切歯：シャベル型切歯、軽度の副シャベル型切歯である。基底結節の発達が弱い。
- 上顎右側 側切歯：シャベル型切歯、軽度の副シャベル型切歯である。基底結節部とその近心に斜切痕が2本認められる。
- 上顎右側 第一小臼歯：遠心面にも咬耗がある。
- 上顎右側 第一大臼歯：近心咬頭近心面がう蝕により一部欠損している。
- 上顎左側 中切歯：シャベル型切歯である。軽度の副シャベル型切歯である。基底結節の遠心に斜切痕がある。
- 上顎左側 側切歯：シャベル型切歯である。軽度の副シャベル型切歯である。基底結節の遠心に斜切痕がある。
- 上顎左側 第一小臼歯：遠心面にも咬耗がある。
- 上顎左側 第一小臼歯：近心面にも遠心面にも咬耗がある。
- 上顎左側 第二大臼歯：近心面にも咬耗がある。上顎の残存歯では、上顎左側第二大臼歯以外 エナメル質減形成が見られる。
- 下顎右側 犬歯：近心面にも遠心面にも咬耗がある。
- 下顎右側 第一小臼歯：近心面にも遠心面にも咬耗がある。
- 下顎右側 第二小臼歯：中心結節が見られる。そのため咬合面の溝は不明瞭であるが、舌側副咬頭が発達しているためブラックの分類によるY型であると思われる。近心面にも遠心面にも咬耗がある。
- 下顎右側 第一大臼歯：遠心咬頭が発達している。そのため、咬合面の溝はY型であるが+型に近い。近心面にも遠心面にも咬耗がある。
- 下顎右側 第二大臼歯：5咬頭である。咬合面の溝は+型である。近心面にも咬耗がある。
- 下顎左側 第一小臼歯：上顎第一小臼歯に似ている形態。頬舌径が比較的大きいことが影響していると考えられる。近心面にも遠心面にも咬耗がある。
- 下顎左側 第二小臼歯：咬合面の溝はブラックの分類のU型である。近心面にも遠心面にも咬耗がある。
- 下顎左側 第二大臼歯：4咬頭である。咬合面の溝は+型である。近心面にも咬耗がある。
- 下顎右側の中切歯、側切歯、犬歯、下顎左側の中切歯、側切歯、犬歯 エナメル質減形成が見られる。

## 9

四肢骨片。不明。

## 10

細片で不明。

## SM005

### 6

焼骨片。人骨だと考えられる。右距骨踵距面部を含む小片。

### 7

焼骨片。四肢骨片に鱗状の亀裂がある。生で火葬されたもの。上腕骨の遠位骨幹部か。(脛骨か橈骨か。)

## ② 混入と考えられる人骨

## SD061

39

頭蓋骨片が10点ほどである。前頭骨の左グラベラ部（眉間部）が残る。眉弓はわずかに影らんでいる。骨はやや薄い。子供ではないと考えられる。性別は不明である。成人とすれば女性的な骨である。

40-1

頭蓋骨片である。頭蓋冠の破片が2点残っている。部位の詳細は不明である。骨の厚さはやや薄めである。

40-2

頭蓋冠の破片が2点ある。骨の厚さは普通である。

## SD065

42

数cmほどの四肢骨片があるがどの部分かは不明である。

## (3) 石川糸里遺跡出土人骨の特徴

頭蓋骨や長管骨は計測可能な個体がなく、歯だけが計測可能であった。歯の計測値を現代人と比較すると、上下顎中切歯のサイズが現代人よりも大きい傾向にあった。中でもSM004個体は、上下顎中切歯のサイズが他のどの時代の平均値よりも大きかった。他の歯種の計測値はおおむね現代人よりも小さかった。非計測項目に関しては、全ての個体で上顎中切歯がシャベル型切歯であった。

SM003個体の乳歯には、メタコニユール、プロトコニユール、屈曲隆線といった特殊な形質が認められた。

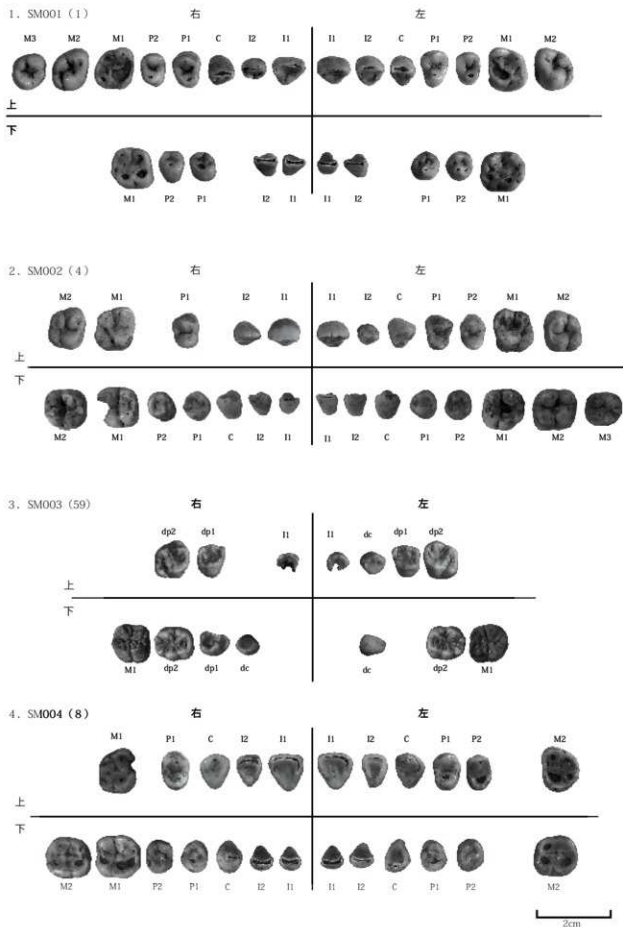
SM001・SM002・SM004の歯にはエナメル質減形成が認められた。咬耗量が少ないことから比較的幼年とされるSM002個体に、特に強いエナメル質減形成が認められた。エナメル質減形成が認められる個体は、その歯の形成時期に何らかの栄養障害に見舞われたことが推定される。

## 参考文献

藤田恒太郎 1949「歯の計測規準について」『人類学雑誌』61巻1号1-6. 一般社団法人日本人類学会

藤田恒太郎 1995「歯の解剖学 第22版」金原出版

杉山兼也・黒須一夫 1964「乳歯の計測基準について」『小児歯科学雑誌』2巻1号 p.1-8 日本小児歯科学会



第28図 石川桑里遺跡出土の歯(歯)

## 2 石川条里遺跡出土動物骨

総合研究大学院大学先端科学研究科准教授	本郷一美
獨協医科大学医学部解剖学講座献体事務室事務長	櫻井秀雄
京都大学名誉教授	茂原信生
日本大学松戸歯学部准教授	五十嵐由里子

## (1) はじめに

石川条里遺跡は長野市南部、篠ノ井塩崎の千曲川左岸の後背湿地に位置する。一般国道18号坂城更埴バイパス改築事業に伴い、2016～2021年度に長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われた。石川条里遺跡は、塩崎遺跡群の生活を支えた水田跡と考えられ、千曲川の洪水土砂で埋もれた遺跡である。

調査で出土した動物遺存体は、1点の種・部位不明の大型動物の骨(67)が古代の層から出土している以外は、全てが中世、近世の溝跡または土坑から出土したものである。動物骨の同定に際しては、獨協医科大学所蔵および総合研究大学院大学所蔵の現生標本と比較した。動物骨は54点出土し、うち36点が同定された。骨の保存状態が比較的よいものと、脆く破損したものが混在する。

哺乳類は以下の4種が同定された。

- 哺乳綱 Mammalia  
 食肉目 Carnivora  
 イヌ科 Canidae  
 イヌ *Canis familiaris*

- 奇蹄目 Perissodactyla  
 ウマ科 Equidae  
 ウマ *Equus caballus*

- 偶蹄目 Artiodactyla  
 ウシ科 Bovidae  
 ウシ *Bos taurus*  
 イノシシ科 Suidae  
 イノシシ *Sus scrofa*

## (2) 同定と計測の結果

同定された部位を種ごとに表に示した(第33～36表)。動物種と部位が不明の破片は第37表に示した。種が同定された骨のうち計測ができるものは、デジタルノギスを用いて計測した。ウマの計測はEisenmannの方法(Eisenmann 1986)に、馬以外の種の計測はDriechの方法(Driech 1978)に準拠して行った。

① イヌ [第33・38表・第29図-1・2]

イヌの骨は3点出土しており、中世の溝跡SD009aの埋土から出土した上顎骨破片(左右)は、同一個体のものである。犬歯(歯槽のみ)から第2大白歯まで永久歯が生えそろっており、第3大白歯は欠損している。第2前臼歯に軽度の磨耗がみられ、成犬と思われる。右上顎歯の計測値を第38表に示した。

② ウマ [第34・39表・第30~32図]

ウマは出土点数でもっとも多数を占めた種である。27点の骨がウマと同定された。さらに種不明の大型動物骨の破片のうち、ウマの骨と同じ地点から出土し、同一骨に由来するとみられるものを含めると35点になる。このうち17点は東西に長く走る中世の溝跡SD009aから出土し、骨11~16、骨19~22は溝の東部でそれぞれ比較的まとまって検出された。このうち近接して出土した骨11・12・13・16は右前肢の中手骨、基節骨、中節骨で、一頭のウマの前肢とみられる。

ウマの骨のうち、四肢骨11点、上顎歯2点が計測可能だった(第39表)。このうちほぼ完形の脛骨(51)の最大長は約330mmで、林田・山内の推定式(林田・山内1957)を用いると、体高は125cm弱である。近位端に癒合線が残ることから、成長が完了すればおそらく体高が125cmを少し超える大きさになる個体だったと推定される。長野県内の西近津遺跡群、北裏遺跡群等などから出土したウマは、御崎馬等小型の現生在来馬と似た体格で体高110~120cmと推定されるが、それより若干大きなウマがいたようである。そのほか中手骨、橈骨などの計測値から体高推定を行うと(西中川他1991・2020)、(松井2008)、110cm前後の小型のものもあり、ウマの大きさには幅があったとみられる。

骨端が残存している四肢骨は8点出土しており、全て癒合していた。この中には3歳半ごろに癒合が完了する大腿骨遠位端と上腕骨近位端が含まれており、成獣の骨といえる。約3歳半で癒合する脛骨の近位端にまだ癒合線が残る、つまり癒合が終了する直前の年齢のものが2点出土しているため、比較的若い成獣も含まれていたことがわかる。なお骨端癒合時期による年齢推定はHabermehlの方法(Habermehl 1961)に基づく。未癒合の四肢骨骨端は確認されず、出土した歯の中には乳歯がなかったことから、石川糸里遺跡で出土したウマの中には幼獣・若獣が含まれていなかったとみられる。ただし、未癒合の骨端部は損傷されやすいので、保存が悪く確認できなかった可能性もある。2点の上顎歯の歯冠高にもとづく年齢(西中川1991)は、SD023出土の大白歯が6~7歳の成獣、10区5b層出土の第4前臼歯または第1大白歯が3~4歳のやや若い成獣のものと推定され、四肢骨による年齢推定結果と整合する。距骨1点の後面(踵骨の間節部)に病変(骨増殖)がみられた。

③ ウシ [第35表・第29図-4~6]

ウシと同定された骨は5点で、大腿骨、寛骨、中節骨、歯の破片である。ウシの骨と同一地点から出土した種不明の大型動物骨の上腕骨破片が1点、上記寛骨の一部と思われる種不明の大型動物の四肢骨破片が1点出土しており、これらを含めると計7点である。計測が可能な部位は中節骨1点だった。この骨は縦に切断されており、Dp(近位端前後径)概測値を表未萌出の臼歯の破片が見つかっており、比較的若い個体が含まれていたようである。

④ イノシシ [第36表・第29図-3]

中世の井戸跡SK094の埋土から脛骨の近位骨幹1点のみが出土した。この井戸跡からはイノシシのほか、ウマ、ウシの頭部、寛骨、下肢の骨の破片が出土したが、まとまった部位ではなく、バラバラの骨が井戸内に投げ込まれて廃棄されたものとみられる。



## (3) まとめ

石川糸里遺跡から出土した動物遺存体は家畜の骨が大部分を占め、野生動物はイノシシ1点のみだった。水田の遺構を中心とする発掘区から出土した動物骨ということもあるが、中世・近世に積極的に狩猟を行っていた様子はみられない。最も多く出土したウマは現生の在来種に近い体格の小型のウマである。ウマ、ウシとも成獣の骨が多いが、ウシは未萌出の臼歯の破片が見つかっており、ウマも3~4歳の比較的若い個体も含まれていたようである。

## 参考文献

- Driesch, A. von den 1976, A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum, Harvard University, Cambridge.
- Eisenmann, V. 1986, Comparative osteology of modern and fossil horses, half-asses, and asses. In Meadow R. H. & Uerpmann, H.-P. (eds.) *Equids in the Ancient World*, pp.67-116. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Habermehl, K.-H. 1961, *Die Alterbestimmung bei Haustieren, Pelztieren und beim jagdbaren Wild*. Berlin-Hamburg: Paul Parey.
- 林田重幸, 山内忠平 1957 「ウマにおける骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部術報告』6号 p.146-156 鹿児島大学農学部
- 松井 章 2008 『動物考古学』京都大学学術出版会
- 西中川駿, 松元光春 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究. 西中川駿(編)『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』(平成2年度文部科学省科学研究費補助金 一般B 成果報告書) p.164-188 鹿児島大学
- 西中川駿・立松弘・塗本千穂子・真木康之・廣田桂一・松元光春 2020 「ウマの骨計測値から骨長の推定法—体高推定への応用」『動物考古学』37: 21-30 日本動物考古学会
- Silver, I.A. 1969, The ageing of domestic animals. In *Science in Archaeology*, 2nd edition, edited by D. Brothwell and E.S. Higgs, pp. 283-302. Thames and Hudson, London.

第33表 石川条里遺跡から出土したイヌ

写真 図版	管理 番号	地区	出土地点	時期	層位	取上 番号	部位	破片の状態	左右	歯の磨耗	備 考
29-1	30	30	SD009a	中世		No.2	上顎骨	P1-M2	右	P2 軽い磨耗	M3 なし
29-2	31	31	SD009a	中世			上顎骨	犬歯歯槽、P1-2	左	P2 軽い磨耗	30と同一
—	62	62	SL002・SD009a	中近世			下顎骨		左		切歯部分破片あり

第34表 石川条里遺跡から出土したウマ

写真 図版	管理 番号	地区	出土地点	時期	層位	取上 番号	種	部位	破片の状態	左右	癒 合 近位 遠位	備 考
31-4	11	1	SD009a	中世		No.4	ウマ	基節骨	ほぼ完形	右	癒合	前肢
31-3	12	1	SD009a	中世		No.5	ウマ	中手骨	遠位 半分	右		中足?
31-5	13	1	SD009a	中世		No.6	ウマ	中節骨	完形	右?	癒合	前肢
32-4	14	1	SD009a	中世		No.7	ウマ	距骨	完形	右		
—	15	1	SD009a	中世		No.8	不明	不明	関節部 小破片			中手/足近位端の可能性
—	16	1	SD009a	中世		No.9	ウマ	中手骨 II	近位	右		
—	19	1	SD009a	中世		No.12	中-大型	不明	破片			No.11と近接して出土し、 11の破片の一部の可能性 がある。
—	20	1	SD009a	中世		No.13	ウマ	大腿骨	遠位端	右	癒合	軸椎 近位の可能性も。
31-6	21	1	SD009a	中世		No.14	ウマ	未節骨	関節部を含む破片	右		
31-1	22	1	SD009a	中世		No.15	ウマ	橈骨・尺骨	ほぼ完形	右		上腕骨遠位端も一部あり
32-3	23	1	SD009a	中世		No.17	ウマ	中足骨	骨幹 前面			前後につぶれている。両 骨端破損。与那国標本よ りやや大型。
—	24	1	SD009a	中世		No.19	ウマ?	肩甲骨	関節窩破片、後 縁部	右		
30-5	25	1	SD009a	中世			ウマ	下顎骨	癒合部			
—	26	1	SD009a	中世			ウマ	歯	エナメル破片			
30-8	27	1	SD009a	中世		No.18	ウマ	上顎骨	近位端、骨幹	左	癒合	
—	28	1	SD009a	中世			大型	種子骨				ウマ?
31-2	29	1	SD009a	中世		No.1	ウマ	橈骨	骨幹	左	癒合	
—	32	1	SD019	近世		No.1	大型	不明	破片			肩甲骨?
32-1	33	1	SD019	近世		No.2	ウマ	寛骨	寛骨臼含む坐骨	左		
30-3	34	1	SD023	近世		No.1	ウマ	上顎歯	M1/2	右		
—	35	1	SD023	近世		No.2	ウマ	基節骨	遠位端	右		前肢?
—	37	3b-4a	SD061	近世		No.1	中型	上顎骨?	破片			
30-4	38	3b-4a	SD061	近世		No.2	ウマ	上顎歯	M3 破片	左		
30-1	45	1	SD080	中世			ウマ	上顎歯	I3	右		
30-7	46	1	SD081	中世		No.1	ウマ	上顎骨	骨幹	右		
—	47	1	SD081	中世	埋土		大型	四肢骨	骨幹			橈骨?
—	48	1	SD081	中世		No.2	大型	不明				土と一体で保存状態が悪い。 四肢骨骨幹部または 肩甲骨の可能性
—	49	1	SD089	近世		No.1	ウマ	脛骨	近位骨幹	左	癒合線	51と同一
—	50	1	SD089	近世		No.2	不明	不明	破片			スポンジ質部分
32-2	51	1	SD081	中世	埋土		ウマ	脛骨	ほぼ完形	左	癒合線	癒合
—	52	1	SK003	中世		No.1	ウマ?	手根骨				第3手根骨?
30-6	53	1	SK004	中世	検出面	No.1	ウマ	頸頭骨	頰骨弓	左		
32-5	58-1	1	SK094	中世			ウマ	距骨	完形	左		後面(脛骨関節部)骨増 殖あり
—	60	1	SK200	中世			ウマ	上顎歯	I2 破片	右		
30-2	66	10	—	—	5b層		ウマ	上顎歯	P4 または M1	右		焼けている。エナメル質 のみ。

第35表 石川糸里遺跡から出土したウシ

写真図版	管理番号	地区	出土地点	時期	層位	取上番号	種	部位	破片の状態	左右	癒合		備考
											近位	遠位	
—	17	1	SD009a	中世		No 10	ウシ	中節骨					縦に切断、Dp (近位端前後径) 概測: 35.1mm
29-5	18	1	SD009a	中世		No 11	ウシ	大腿骨	骨頭破片、骨幹	左	癒合		18は17の破片
—	36	3b・4a	SD060	近世			ウシ	歯	破片				未萌出の臼歯
29-6	43	1	SD080	中世		No 1	ウシ	大腿骨	骨幹	左		癒合?	
—	44	1	SD080	中世		No 3	中-大型	四肢骨	破片				上腕骨遠位骨幹
29-4	56	1	SK074	中世	1層		ウシ	寛骨	寛骨臼を含む腸骨骨幹	右			大きい
—	57	1	SK094	中世	1層		大型	寛骨	寛骨臼破片				

第36表 石川糸里遺跡から出土したイノシシ

写真図版	管理番号	地区	出土地点	時期	層位	取上番号	部位	破片の状態	左右
29-3	58-2	1	SK094	中世			脛骨	近位骨幹	左

第37表 石川糸里遺跡から出土した不明破片

写真図版	管理番号	地区	出土地点	時期	層位	取上番号	種	部位	破片の状態	備考
—	41	3b・4a	SD041	近世		No 1	大型	四肢骨	骨幹	脛骨? はは完形
—	42	3b・4a	SD065	近世	2層埋土		大型	肩甲骨?	破片	
—	54	1	SK004	中世		No 2	不明	不明		
—	55	1	SK004	中世	北埋土	No 3	不明	不明	破片	2点。1点は肩甲骨破片。
—	61	1	SK341	中世			ウシ科またはシカ科	歯	エナメル破片	
—	63	3b・4a	SD039	近世			不明	不明	破片	焼骨 白
—	64	1	SK012	中世		No 1	不明	不明	破片	朱色の土がついた破片あり
—	67	1	SK356	古代			大型	不明		

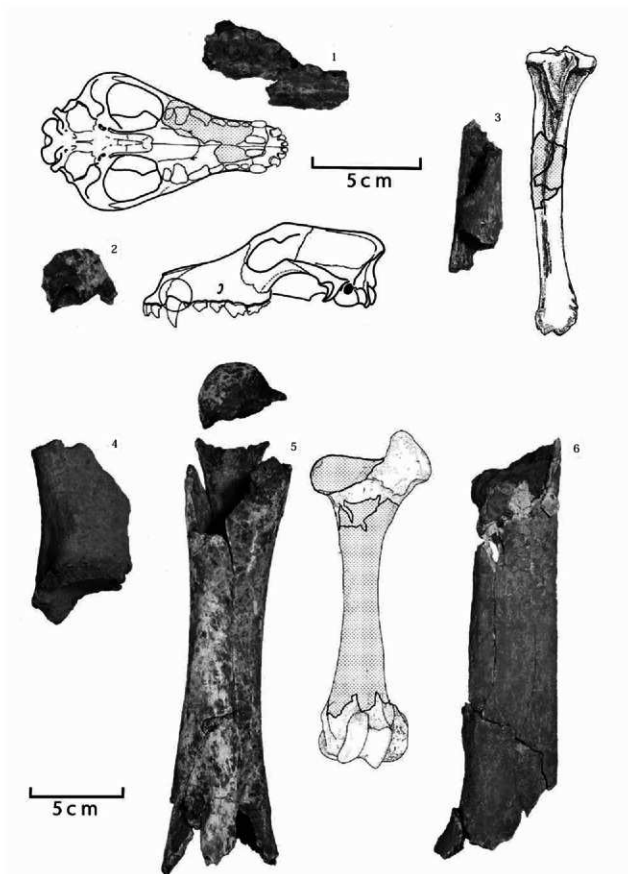
第38表 石川糸里遺跡から出土したイヌの計測値

		shutudo	計測値 (mm)	出土遺構	取上番号	管理番号
上顎歯	歯列最大長		60.8	SD009a	No 2	30
	前臼歯列最大長		28.4			
	第4前臼歯幅 (頬舌径)		8.2			
	第4前臼歯最大長		16.9			
	第1大臼歯幅 (頬舌径)		13.7			
	第1大臼歯最大長		11.8			
	第2大臼歯幅 (頬舌径)		9			
	第2大臼歯最大長		6.4			
下顎歯	第4前臼歯幅 (頬舌径)		6.6	SL002・SD009a		62
	第4前臼歯最大長		15.8			

第39表 石川糸里遺跡から出土したウマの計測値

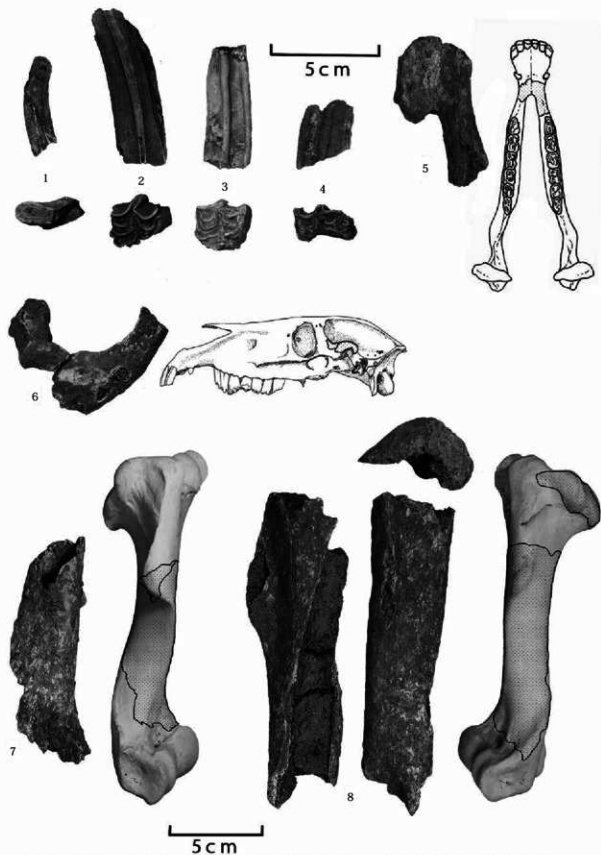
計測点の定義 数字は Eisenmann (1986) による計測番号。アルファベットは Driesch (1978) による略称。( ) の数字は概測

部 位		計測値 (mm)	備 考	出土遺構	管理番号
上顎前 M1/2 右	エナメル高	50.3		SD023	34
	エナメル最大長	21.1			
	エナメル幅 (頬舌径)	20.8			
上顎前 P4/M1 右	エナメル高	(73.1)		10区5b層	66
	エナメル最大長	(23.4)			
	エナメル幅 (頬舌径)	(21.5)			
上腕骨 左	骨頭 前後径	(57.5)		SD009a	27
桡骨 右	骨幹長 (関節部は近位・遠位とも欠損、概測)	(290.0)		SD009a	22
	3 (骨幹最小幅) SD	31.4			
桡骨 左	4 (近位端幅) Bp	62.5		SD009a	29
	3 (骨幹最小幅) SD	41.3			
中手骨 右	3 (骨幹最小幅) SD	28.9	11、13と同一個体	SD009a	12
	10 (遠位端骨管 幅)	43			
	11 (遠位端関節面 幅) Bd	44			
	13' (遠位端 滑車外側最小前後径)	26			
	14 (14遠位端最大前後径) Dd	28.3			
基節骨 (前肢) 右	3 (最小幅) SD	(29.0)	12、13と同一個体	SD009a	11
	4 (近位端幅) Bp	(46.5)			
	5 (近位端前後径) Dp	34.6			
中節骨 (前肢) 右	2 (前面 長)	38.5	11、12と同一個体	SD009a	13
	3 (最小幅) SD	(37.2)			
	4 (近位端幅) Dp	(39.7)			
	5 (近位端前後径) Dp	(22.3)			
基節骨 (前肢?) 右	6 (遠位端骨管幅)	37.5	SD023		35
	8 (基節骨背面筋付着部 最小長)	19.6			
	12 (内側遠位端~粗面)	16.4			
	14 (遠位端関節面幅)	39.2			
末節骨 右	6 (高さ) HP	30.0	SD009a		21
	7 (遠位端 幅) Bd	58.8			
跗骨 左	8 (遠位端前後径) Dd	38.4	SD081		51
	3 (骨幹最小幅) SD	35.3			
	1 (最大長) GL	(330.0)			
距骨 右	1 (最大長) GH	54.3	SD009a		14
	2 (滑車 内側長) LmT	51.5			
	3 (最大幅) GB	26.0			
	3' 関節面最大幅	40.6			
	4 (滑車 中央の幅)	59.7			
	5 (遠位関節面 幅) BFd	48.8			
	6 (遠位関節面 前後径)	31.8			
7 (内側 前後径)	36.3				
距骨 左	1 (最大長) GH	60.6	病変あり (骨増殖)	SK094	58-1
	2 (滑車 内側長) LmT	58.2			
	3 (最大幅) GB	29.5			
	3' 関節面最大幅	43.5			
	4 (滑車 中央の幅)	60.3			
	5 (遠位関節面 幅) BFd	50.2			
	6 (遠位関節面 前後径)	33.3			
7 (内側 前後径)	45.7				



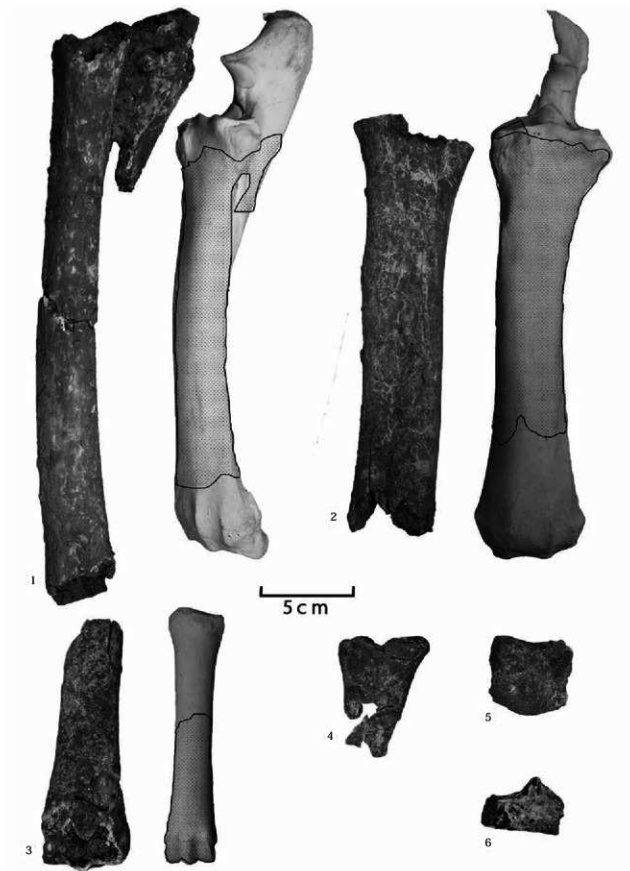
1. イヌ右上顎骨 (30) 2. イヌ左上顎骨 (31) 3. イノシシ左脛骨骨幹 (58-2) 4. ウシ右寛骨臼 (56)  
5. ウシ左大腿骨骨頭と骨幹 (18) 6. ウシ左大腿骨骨幹 (43)

第29図 石川糸里遺跡出土の動物骨1



1. ウマ右上顎歯 I3 (45) 2. ウマ右上顎歯 P4またはM1 (66) 3. ウマ右上顎歯 M1またはM2 (34)  
 4. ウマ左上顎歯 M3 (38) 5. ウマ下顎融合部 (25) 6. ウマ左頬骨弓 (53) 7. ウマ右上腕骨骨幹 (46)  
 8. ウマ左上腕骨骨頭と骨幹 (27)

第30図 石川条里遺跡出土の動物骨2



1. ウマ右橈骨および尺骨近位骨幹 (22) 2. ウマ左橈骨 (29) 3. ウマ右中手骨 (12) 4. ウマ基節骨 (11)  
5. ウマ中節骨 (13) 6. ウマ末節骨 (21)

第31図 石川糸里遺跡出土の動物骨3



1. ウマ左坐骨 (33) 2. ウマ左脛骨 (51) 3. ウマ中足骨 (左右不明) (23)  
4. ウマ右距骨 (14) 5. ウマ左距骨 (関節面に病辺) (58-1)

第32図 石川条里遺跡出土の動物骨4



### 第3節 石川条里遺跡の古環境解析

信州大学理学部特任教授 保柳康一

#### 1 はじめに

長野盆地は千曲川とそれに流入する支流からもたらされた堆積物で埋積されている。長野、山梨、埼玉3県にまたがる甲武信ヶ岳に源流をもつ千曲川は長野県内を縦断した後に新潟県に入り信濃川と名称を変え日本海に注ぐ流路延長367km、流域面積11,900km<sup>2</sup>を持つ河川である。2019年10月関東地方西部を通過した台風による豪雨によって、長野盆地でも複数の堤防が決壊し大きな被害をもたらした。このような千曲川の洪水は歴史記録に数多く残されているが、文書としての最も古い記録は平安時代の西暦888年の仁和洪水である(河内1983)。一方、長野盆地は縄文時代以降の遺跡が数多く見出されており古くから人間活動が活発で、それらの遺跡の発掘によって文書が残される前の生活や被った災害について知ることが出来る。千曲川流域では弥生時代以降の水田遺跡が多く見つかり、このことから早くから稲作地域として土地利用されていたことが分かる。一方、この水田遺跡を覆う泥炭層や洪水を起源とすると思われる砂層も発見されている。これら自然の堆積物と人類の手が入った水田土壌等を科学的に分析することで、人類の活動の基盤となった当時の古環境を知ることが可能になる。特に、千曲川流域では歴史記録にも残されている西暦888年の洪水によると考えられる砂層が広く条里的水田遺跡を覆って見出される。この小論では石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群の堆積物の記載と試料の粒度分析、有機化学分析、珪藻化石分析から過去約3,000年間の環境変遷と地層中に記録された巨大洪水災害について考察した。

#### 2 研究手法

長野盆地南部の石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群において、発掘現場内の壁面や深掘りトレンチの土層断面から、次の要領で分析用の試料を採取した。まず、地層の積み重なりや深掘りのトレンチの土層の累重とその特徴を記録し、分析用の試料を各土層もしくは等間隔(1cmから10cm間隔)で20ccプラスチックシリンダー(泥質層)、もしくは5ccバイアル(砂層)を壁面に打ち込むことで採取した(第33図)。また、2mのハンディージョイスライサーを用いて、発掘現場外の土層が攪乱されていない場所において柱状試料を採取して、ここから同様の採取間隔で分析用試料を分取した。なお、時代の決定には、泥



第33図 試料採取 (左) 20ccシリンダーによる泥質試料採取 (右) 5ccバイアルによる砂質試料採取

炭層や砂層中の木片などの放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代を参考にした。採取した試料について、砂層についてはレーザー回折粒度分析器によって粒度のみを測定、泥質層については粒度分析に加えて、全有機炭素量 (TOC)、全イオウ量 (TS)、全窒素量 (TN) および安定炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}_{org}$ ) などの化学分析を行った。さらに一部の試料について、含まれる珪藻遺骸を抽出し、珪藻種の鑑定によって生息環境を考察した。

### (1) 粒度分析

**試料の下処理:** 試料 1~2 g を 5 cc ビーカーに入れ純水と少量の 10% の  $\text{H}_2\text{O}_2$  を加えよく攪拌する。 $\text{H}_2\text{O}_2$  は有機物の分解・除去のために用いる。測定直前にこのビーカーを 1 分間程度超音波洗浄器に入れ試料を分散させる。

**測定** [第34図-左]: 測定にはレーザー解析散乱型粒度分析装置 (ベックマン・コールター社、LS13 320) を用いる。ビーカー中の水に分散させた試料を全て試料投入口から装置に入れる。装置の循環水により試料は測定用セルに送られ、レーザー光とタンクステン光を透過させ、レーザー解析散乱とフワンホフナー解析理論に基づいて粒径を測定する。測定範囲は、 $0.04\mu\text{m}$  から  $2000\mu\text{m}$  (2 mm) である。

### (2) 全イオウ量 (TS) 分析

**試料の下処理:** 十分に乾燥させた泥質試料をメノウ乳鉢で粉末化する。粉末試料を約 4.0~5.0 g 分取し、アルミリングに入れ手動油圧ポンプで 30~40MPa の圧力を加え、測定用のペレットを形成する。

**測定** [第34図-右]: 測定には (株) リガクの卓上型エネルギー分散蛍光 X 線分析装置 EDXL300 を使用する。この装置は試料に X 線を照射し、試料の含有成分から発生するそれぞれの元素特有の蛍光 X 線の強度を検出器で測定することにより、試料中に含まれる各元素量を測定するものである。

EDXL300 を起動し、X 線を ON にしてエージングをおこない、MCA 校正を行なった後にファンダメンタル・パラメーター (FP) アプリケーションを作成する。FP アプリケーション作成の後、装置内の試料交換機に作成したペレットをセットし、FP 法による測定を行なう。測定結果は wt% で出力される。



第34図 分析装置1 (左) レーザー解析散乱型粒度分析装置 (ベックマン・コールター社 LS13 320)  
(右) 卓上型エネルギー分散蛍光 X 線分析装置 (リガク社 EDXL300)

### (3) 全有機炭素 (TOC)・全窒素量 (TN) 分析

**試料の下処理:** 十分に乾燥させた泥質試料をメノウ乳鉢で粉末化する。粉末試料 600mg 程度をスクリュエ管に入れ、濃度 6 N に希釈した HCl を試料が浸るまで加える。100°C 以下に設定したホットプレート上で蒸発乾燥させて無機炭素 (炭酸塩) を除去する。乾燥したら試料が浸るまで蒸留水を加え、再び乾燥させるという作業を 1 日 3 回、2 週間繰り返し十分に HCl を取り除く。

**測定** [第35図-左]: 測定にはサーモフィッシャーサイエンティフィック社の元素分析装置 Flash 2000 を使用する。この装置は試料を完全燃焼分解することにより、 $\text{CO}_2$ ・ $\text{N}_2$  ガスを発生させ、試料中の C・N の含有量を定量的に測定するものである。測定前に、標準試料 5 試料を燃焼させ検量線をひき、その検

量線をもとにC・Nのwt%をもとめる。標準試料はAntipirine (C:70.19%, N:14.88%)を使用した。

20.00~60.00mg程度の試料をスズ箔に包み、900℃で6分間燃焼させC・Nのwt%を測定する。14試料ごとに標準試料を測定し、標準誤差の変動とバックグラウンドの確認をおこなう。

#### (4) 安定炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ )・窒素同位体比 ( $\delta^{15}\text{N}$ ) 分析

試料の下処理：充分に乾燥させた泥試料をメノウ乳鉢で粉末化する。その際、試料中に含まれる材などは取り除く。

測定 [第35図-右]：測定にはサーモフィッシャーサイエンティフィック社の元素分析計 (Flash EA 1112) と安定同位体比質量分析計 (Delta V. Advantage) を使用した。元素分析計で完全に燃焼させることにより発生した  $\text{CO}_2 \cdot \text{N}_2$  のガスを He ガスで安定同位体比質量分析計に送り、試料中の C・N それぞれの同位体比を測定する。安定炭素同位体比の測定値は、サウスカロライナ州 Pee Dee 層から産出するベレムナイト化石の  $\text{CaCO}_3$  の値を基準として算出される (% vs.PDB, ここでは% vs.VPDB)。測定の際の標準試料は Atropine ( $\delta^{13}\text{C} = -20.8\%$ ,  $\delta^{15}\text{N} = -3.0\%$ ) もしくは Glycine ( $\delta^{13}\text{C} = -32.3\%$ ,  $\delta^{15}\text{N} = -1.12\%$ )、L-Alanine ( $\delta^{13}\text{C} = -19.6\%$ ,  $\delta^{15}\text{N} = 4.99\%$ )、L-Alanine ( $\delta^{13}\text{C} = -19.6\%$ ,  $\delta^{15}\text{N} = 9.97\%$ )、L-Histidine ( $\delta^{13}\text{C} = -11.4\%$ ,  $\delta^{15}\text{N} = -7.58\%$ ) を使用した。試料中に含まれる全有機炭素 (TOC) 量に応じて 1.00~7.00 mg 程度を秤量しスズ箔に包み  $\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$  と  $\delta^{15}\text{N}$  の同位体比を測定する。8~12試料ごとに標準試料を測定し、測定誤差の変動とバックグラウンドの確認をおこなった。



第35図 分析装置2 (左) CHN 元素分析装置 (サーモフィッシャーサイエンティフィック社 Flash2000)  
(右) 元素分析装置 (サーモフィッシャーサイエンティフィック社 Flash EA 1112) と質量分析装置 (Delta V. Advantage) の組合せによる安定炭素同位体測定装置

#### (5) 珪藻分析

懸濁液作成：泥質試料を乾燥機で60~70℃で12時間乾燥させ、乾燥した試料を約0.5g計量する。試料を200mlビーカーに入れ、イオン交換水を少量注ぎ泥化させる。さらにイオン交換水を100mlになるまで注ぎ懸濁し、15秒放置した後に、ビーカーの底から懸濁液を吸い上げる。

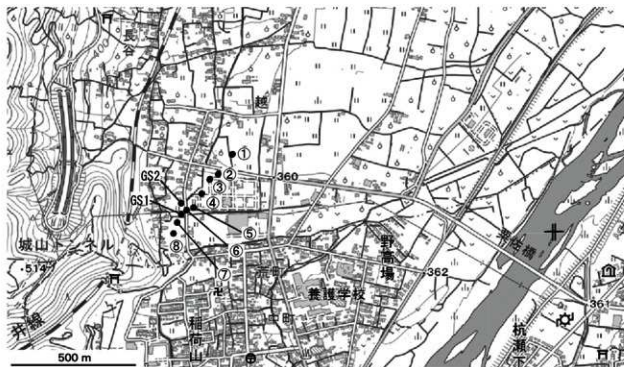
プレバート作成：50~60℃に熱したホットプレート上に並べられたカバーガラス上に懸濁液を滴下し乾燥させる。乾燥後120℃に温度をあげ、マウントメディアを1滴加えて発泡がおさまるまで待つ。発泡がおさまったら、スライドガラス上に気泡が入らないようにカバーガラスをかけ封入する。

鏡下観察：観察にはオリンパス社の生物顕微鏡BX50Fを使用する。種の同定は1,000倍でおこない、解像度を上げるためにイマージョンオイルを点着する。

### 3 石川糸里遺跡の地形学的・地質学的立地

石川糸里遺跡及びその南に隣接する長谷鶴前遺跡群は、長野市南端の千曲川左岸に位置している (第36

園)。千曲川の河道の左岸に形成された自然堤防の西側の氾濫原低地上に形成された水田遺跡で、東側の塩崎遺跡群が自然堤防上の住居跡等から構成されるのに対して、氾濫原低地を水田として利用していたことが示されている。氾濫原は西側の山地に接するところまで広がっている（第36図）。この山地は新第三紀後期中新世（600万年前）の海底火山噴出物である裾花凝灰岩層からなり（第37図）、石川条里遺跡の存在する氾濫原低地とは長野盆地西縁断層によって接している。断層は西の山地側が上昇する逆断層で、断層上および東側に隣接する氾濫原は沈降傾向で現在では湿地もしくは水田が広がっている。なお、この断層は1847年に善光寺地震を起した活断層であり、この活断層系は800～2500年の周期で地震を起していると考えられている。



第36図 石川条里遺跡、長谷崎前遺跡群における試料採取地点①～⑧、GS1～2（地理院地図を利用）



千曲川沿いの自然堤防堆積物 (n)  
 氾濫原堆積物 (b)  
 裾花凝灰岩 (SI)

第37図 石川条里遺跡、長谷崎前遺跡群周辺の地質図（加藤・赤羽 1986）

## 4 分析結果

### (1) 長谷鶴前遺跡群における深掘りトレンチ

石川条里遺跡の南に隣接する長谷鶴前遺跡群の地点⑦(第36図)において、地表下約4mの深掘りトレンチの壁面土層を記録するとともに分析用の試料を採取した。一方、最上部は地表下50cmに位置する砂層の頂部まではそれまでの発掘調査の掘削で失われているので、砂層頂部を基準(0cm)として土層の積み重なりを底部(386cm)まで記録し、試料の分析をおこなった(第38図)。

上部砂層0~100cm(X層):中粒砂から極細粒砂からなる厚さ約1mの砂層。基底部が中粒砂、最上部が極細粒砂であるが、砂層底面から20~50cm付近に未固結泥のブロック状の塊(以下、「偽礫」という)が並ぶ層準があり、この部分で平均粒径が減少している(第38図)。珪藻分析では深度83cm(第38図N5)から30個体程度が観察された。*Cymbella*属(②・③)、*Achnanthes lanceolata f. rhombica*(④・⑤)、*Gomphonema*属(⑥~⑩)、*Stauroneis*属(⑫)、*Pinnularia*属(⑬~⑰)、*Gomphonema*属(⑱~⑳)、*Neidium*属(㉑)など多様な珪藻が同程度の割合で産出した。この砂層に含まれていた木片の<sup>14</sup>C暦年較正年代1σのうち最大確率を示す年代は862calAD~896calADを示す。

上部100~120cm(XII, XIII層):根痕を含む黒色の泥炭層。TOC値は10%前後と高く、窒素の含有量も相対的に高い。泥炭層の<sup>14</sup>C暦年較正年代は、下部で西暦550~600年、上部で650年~700年である。上部120~200cm(XIV~XVIII層):ほぼ均質の明灰色の泥層であるが、最上部のみ漸移的にやや暗灰色調の灰色、暗灰色となる。また、白色層が残されている部分もあるが、攪拌され側方に連続せず、明灰色の泥層と区別がつかなくなる。粒度は全体的にシルトで上部では細粒ないし中粒の砂が挟在する。この区間ではTS、TOC、TNはいずれも低い値で安定している。 $\delta^{13}C_{org}$ は-26~-27%の間で安定した値を示す。ただ、1か所のみ-35%より低い値を示している。一方、 $\delta^{15}N$ は0~-2%の間で変動しており、下部の方がやや低い値を示している。この部分からは<sup>14</sup>C年代は得られていない。また、珪藻殻の産出もなかった。

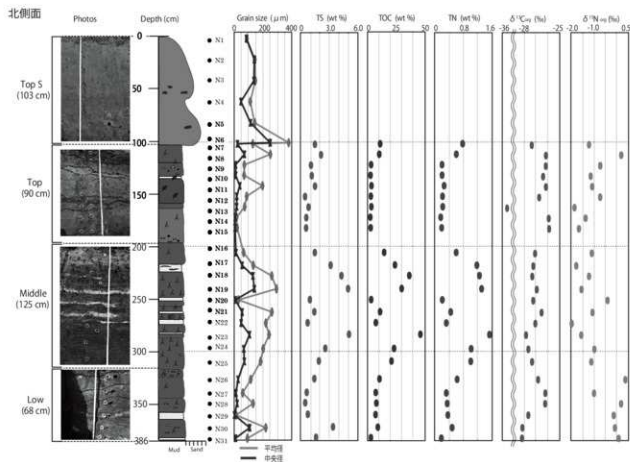
中部200~325cm(XIX~XXI層):凝灰質のシルトからなる薄層(1~3cm)の白色層を挟む黒色泥炭層である。泥炭層から得られた<sup>14</sup>C暦年較正年代は紀元前1000年前後に集中する。TS、TOC、TNいずれも高い値を示すことが多い。 $\delta^{13}C_{org}$ は-27%前後を示す。珪藻殻は2つの試料からは産出せず、6試料から10~20個体ほど産出、深度300cm前後の2試料からはそれぞれ80個体以上と50個体程度の産出を観察した。主要な産出種は*Cymbella aspera*(②・③)と*Pinnularia gentilis*(⑭)の2種で、*Achnanthes lanceolata f. rhombica*(④・⑤)、*Cyclotella bodanica*(①)、*Stauroneis phoenicentron*(⑫)、*Gomphonema parvulum*(⑧・⑨)、*Neidium iridis*(㉑)などが伴う。

下部325~386cm:不連続な白色薄層を挟む灰色泥層。TOC、TNは上位の泥炭層より低い値で安定している。 $\delta^{13}C_{org}$ は-26~-27%、 $\delta^{15}N$ は0%前後で相対的に他より高い値を示す。珪藻殻の産出はこの区間では他の区間より多く、その種類も多い。*Achnanthes lanceolata f. rhombica*(④・⑤)、*Pinnularia gentilis*(⑭)、*Stauroneis phoenicentron*(⑫)、*Eunotia implicata*(㉔)などが産出する。なお、深度350cm(N28)からは今回の分析で最も多い100個体以上が観察され、*Meridion circulare*(㉚)の産出が特徴的である。また、多様な*Eunotia*属(㉒~㉖)の産出によっても特徴づけられる。

### (2) 砂層の分布

地点⑦における泥炭層を覆う砂層は、石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群において広く平安時代の水田跡を覆って分布し、連続した砂層であることが分かる(第40図)。

分布:平安期の水田跡を覆う砂層は、第36図の北東部の①および②の2地点以外の③~⑥地点と⑦、⑧地点、それにハンディージェオスライサーで約1.5m試料を採取したGS1とGS2で確認された。③~⑥地

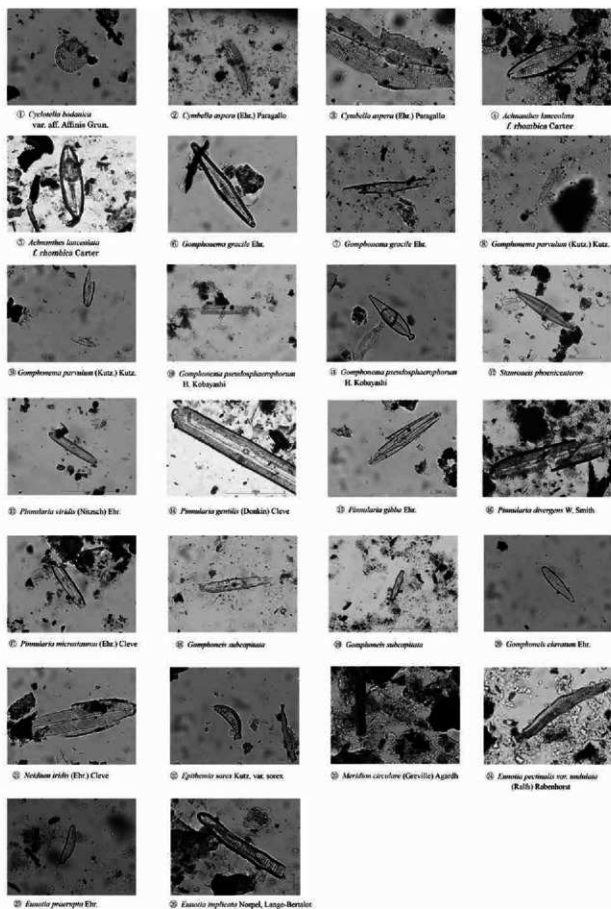


第 38 図 長谷鶴前遺跡群地点⑦の深掘りトレンチにおける土層累重と分析結果

第 40 表 地点⑦深掘りトレンチの試料から産出した珪藻遺骸

属名	属名+種名	カタカナ表記	環境指標	番号
<i>Cyclotella</i> (キクロテラ) 属	<i>Cyclotella bodanica</i>	キクロテラ ボダニカ	湖沼 <sup>*1</sup>	①
<i>Cymbella</i> (キンベラ) 属	<i>Cymbella aspera</i>	キンベラ アスベラ	沼沢湿地 <sup>*2</sup>	②, ③
<i>Achnanthes</i> (アクナンテス) 属	<i>Achnanthes lanceolata f. rhombica</i>	アクナンテス ランセオラータ エフ ロンビカ		④, ⑤
<i>Gomphonema</i> (ゴンフォネマ) 属	<i>Gomphonema gracile</i>	ゴンフォネマ グラシル	沼沢湿地 <sup>*2</sup>	⑥, ⑦
	<i>Gomphonema parvulum</i>	ゴンフォネマ パービュルム	広域 <sup>*3</sup>	⑧, ⑨
	<i>Gomphonema pseudosphaerophorum</i>	ゴンフォネマ プシユードスファエロフォーラム		⑩, ⑪
<i>Stauroneis</i> (スタウロネイス) 属	<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	スタウロネイス フォエニセンチロン	沼沢湿地 <sup>*2</sup>	⑫
<i>Pinnularia</i> (ピンスラリア) 属	<i>Pinnularia viridis</i>	ピンスラリア ビリディス	泥炭地 <sup>*4</sup>	⑬
	<i>Pinnularia gentilis</i>	ピンスラリア ジェンティリス	沼沢湿地 <sup>*2</sup>	⑭
	<i>Pinnularia gibba</i>	ピンスラリア ギバ	沼沢湿地 <sup>*2</sup>	⑮
	<i>Pinnularia divergens</i>	ピンスラリア ダイヴァージェンス		⑯
	<i>Pinnularia microstauron</i>	ピンスラリア ミクロスタウロン		⑰
<i>Gomphonopsis</i> (ゴンフォネイス) 属	<i>Gomphonopsis subcapitata</i>	ゴンフォネイス サブカピタータ		⑱, ⑲
	<i>Gomphonopsis clavatum</i>	ゴンフォネイス クラヴァタム		⑳
<i>Neidium</i> (ネイデイウム) 属	<i>Neidium iridis</i>	ネイデイウム イリディス	沼沢湿地 <sup>*2</sup>	㉑
<i>Epithemia</i> (エビテミア) 属	<i>Epithemia sorax</i>	エビテミア ソレックス		㉒
<i>Meridion</i> (メリディオオン) 属	<i>Meridion circulare</i>	メリディオオン サーキキュラレ	河川 <sup>*2</sup>	㉓
	<i>Meridion pectinatis</i>	ユーノチア ベクティネリス	泥炭地 <sup>*4</sup>	㉔
<i>Eunotia</i> (ユーノチア) 属	<i>Eunotia praeurpata</i>	ユーノチア プラエルパタ	泥炭地 <sup>*4</sup>	㉕
	<i>Eunotia implicata Norpel</i>	ユーノチア インプリカータ		㉖

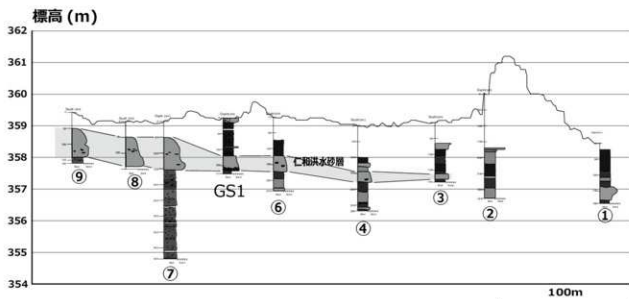
\*1原口, 2001; \*2安藤, 1990; \*3西村ほか, 2012; \*4鹿島, 1986



第39図 地点⑦深掘りトレンチの試料から産出した珪藻遺骸(番号①~㉕は第40表参照)  
各写真の横幅は②④⑦⑱⑲⑳㉑㉒は200 $\mu$ m、他は100 $\mu$ m。

点とGS1、GS2は石川条里遺跡内になり、⑦、⑧地点は長谷鶴前遺跡群内である。砂層の厚さは、南部の長谷鶴前遺跡群内の⑦、⑧では最大約1mあるが、北に向かって薄くなり地点⑥では約30cmとなる。それより北ではこの連続する砂層の分布はない。また、砂層が存在する標高は南側がやや高く長谷鶴前遺跡群内では砂層の上面が358.5m、石川条里遺跡南部では358m、分布の北限では357.5mと徐々に標高を下げている。

特徴：この砂層の特徴は層の下部から上部に向かって、砂粒の大きさが減少する正級化構造を示すことである。砂層の粒径は下部で中粒砂（径0.5～0.25mm）、上部では細粒砂（径0.25～0.125mm）もしくは極細粒砂（径0.125～0.064mm）まで連続的に砂層上位に向かって粒径が小さくなる。粒度分析結果からは、南部の砂層の中部で細かくなるが、下部もしくは中部に泥の偽礫を含んでいるため、分析試料採取時に泥質部も採取されるため平均粒径が小さくなっているためである。偽礫は、下位や側面の自然堤防の泥等を流れが削って、流れの中に取り込むもので、河道底面の流れ、洪水流、海底を流れる混濁流などの強い流れによって運搬され堆積した砂層にしばしば観察される。この偽礫による砂層中部での粒径の減少を考慮すると、いずれの地点の砂層も1回の正級化構造を示す砂層であるとみなされる。



第40図 西暦888年仁和洪水砂層の分布

## 5 考察

### (1) 砂層の起源

一般的に砂粒を主体とする堆積物は、有機炭素など有機物起源の元素や珪藻化石（珪藻殻）を含むこともほとんどない。しかし、今回の分析では長谷鶴前遺跡群（地点⑦）の砂層下部（砂層底面から約20cm）の試料から、保存の良い多種の珪藻遺骸が産出した。これは砂層の下部から中部に含まれている泥の偽礫中に含まれていた珪藻遺骸が検出されたことによる。砂の運搬にはある程度の速さ（一般には20cm/秒以上）の水流が必要で、河川氾濫原には洪水流で運搬されてくる。砂層に含まれていた珪藻遺骸は湿地、沼沢地、水田に生息する種であり（第40表）、洪水流がこれらの環境の泥層を巻き込みながら流下してきたことを示している。また、平安時代の条里遺跡を埋積することと木片の<sup>14</sup>C年代とから、仁和洪水により堆積したものである結論づけられる。仁和洪水は、西暦888年（仁和4年）に千曲川上流のハヶ岳山麓に形成された天然ダムが決壊して洪水が発生し長野盆地まで達したもので、千曲川上流に分布する大月川岩屑流堆積物の地質学的考察と古文書記録（類聚三代格、日本紀略、扶桑略記）に基づき明らかにされた



(河内 1983)。このことから、上田盆地、長野盆地の平安期の遺跡や水田跡を覆う砂層は、その際の洪水によりもたらされたものであると解釈されている(川崎 2000)。

一般的に洪水砂層は層の下位から上位に向かって粒径が粗くなる逆級化構造をもつ。それは洪水初期に先ず細粒な粒子が河道から氾濫原に溢れだし、続いて洪水最盛期により粗粒な粒子が氾濫原にもたらされ逆級化構造を形成し、氾濫最盛期を過ぎると水位の下がった河道に戻っていくので流速が遅くなる際に形成される粒度の減少、すなわち正級化構造は形成されない(Iseya 1989)。しかし、今回見出された平安期の水田を覆う砂層は正級化構造のみが観察される。正級化構造は、流速の減少や静水での砂粒の沈降によって形成されるため、正級化構造を持つ理由は洪水が河道へ戻ることなく、そのまま氾濫原に水が滞留し砂を堆積させたことを示している。石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群の洪水砂層は、細粒物質が氾濫原にもたらされる洪水の初期ステージを欠いて、最盛期の強い流れの洪水流がいきなりこの地を襲い水塊が形成され、そこで砂層が堆積したためと考えることができる。南部に分布する砂層のみが礫層を含むことは、南部で洪水流の勢いが極めて強かったことを示す。水流は北に向かって減衰したことを示しており、このことから、砂は南側からこの地域に流れ込んだ洪水流によりもたらされたと考えられる。その流れは地点③と②の間の西の山地側から張り出した小さな尾根状の高まりによって止められ、その北の地点①②には到達しなかった可能性が高い。なお、長谷鶴前遺跡群の南側には山地の尾根が張り出していることを考慮すると、この流れは千曲川方向の北東へ向かう洪水流から分岐して、南東側からこの地に流入したと考えられる。

一方、千曲川右岸の千曲市屋代の地之日遺跡の水田跡を覆う厚さ約2mの仁和洪水砂層は、最下部付近で逆級化構造、その上位に2サイクルの正級化構造を示す。これは溢れだし初期から氾濫最盛期に向かう粒径の増大と2度の洪水流の到達を示していると考えられる(保柳・亀谷 2022)。このように千曲川の右岸と左岸では、仁和洪水の到達回数が違うと思われる。地之日遺跡等にみられる千曲川左岸側の1回目の洪水は右岸側には到達しておらず、2回目の洪水のみ右岸の石川条里遺跡、長谷鶴前遺跡群を襲ったと考えることができる。また、その流れは1回目が河川水位の上昇により自然堤防から溢れ出し、洪水水位が上昇し、その後全面決壊によって強い洪水流が到達したのに対して、2回目は上流から津波のような洪水流が氾濫原全体を流れ下ったと考えられる。これは仁和洪水が天然ダム決壊による洪水であり、1回目の洪水は千曲川上流の天然ダムの一部が壊れることにより、千曲川水位が上昇し、自然堤防の一部から洪水が発生したのに対して、2回目の洪水は上流の天然ダムの全面崩壊によって、佐久、上田、長野盆地全体を覆うように上流から洪水流が流下したのではないだろうか。この洪水が豪雨などによる河川増水ではなく、天然ダム決壊という特殊な原因を持つものかもしれない。

## (2) 環境変遷

縄文後期から縄文晩期：長谷鶴前遺跡群地点⑦の深掘りトレンチ下部の灰色泥層からは年代を示す遺物および $^{14}\text{C}$ 年代が求められていないので正確な年代を知ることはできない。しかし、その上位の中部の泥炭層の $^{14}\text{C}$ 年代が紀元前1000年前後の縄文晩期を示すので、この泥層はそれより以前である。縄文時代の気候は1000~2000年の周期で温暖期と寒冷期を繰り返したとされ(Kawahata et al. 2009)、したがってこの下部の泥層は温暖な気候であった縄文後期の紀元前2000年頃に千曲川と西側山地からの小河川の氾濫によって形成された氾濫原上の水域で堆積したと考えられる。この層からは、沼沢湿地、河川などの環境を示す珪藻遺骸が多数見出されることからこのような環境を推定することができる。

その上位中部の泥炭層は、人為的な攪拌がなされていない。白色の薄層は凝灰岩起源の細粒な碎屑物から構成されており、湿地には西側の裾花凝灰岩からなる山地から洪水などにより水が供給されており、運ばれた細粒の凝灰岩碎屑物が白色薄層として残されたと考えられる。また、一般には淡水には硫黄は含

まれないが、この層準で検出される硫黄も凝灰岩起源であると思われる。紀元前1000年の縄文時代晩期は寒冷な気候が続いたとされ (Kawahata et al. 2009)、そのことによって泥炭層が形成されたと考えられる。珪藻遺骸も泥炭地、沼沢湿地、湖沼を示す種が出ており、湿原が広がり寒冷な気候によって泥炭が堆積していったと考えられる。

弥生時代から平安時代：泥炭層を覆う均質な明灰色泥層は、人為的に攪乱されている。すなわち耕作されることで、TOC、TN、TSの値は低く保たれている。水田遺跡をつくる層準で、その時期はこの地で稲作が始まった紀元前500年 (Crema et al. 2022) の弥生時代から平安時代におよぶと考えられる。ただ、深掘りトレンチでは、上部で泥炭層が形成されており、泥炭層の示す西暦600年前後には、水田は縮小して湿地となっており、稲作に使われていなかったと思われる。その理由としては西暦500~700年は寒冷な時代であるとして (吉野 2009; Kawahata et al. 2017)、寒冷化によって人口の減少や水田維持の困難さによって、長野盆地では多くの水田の耕作放棄によって湿原化し、有機物保存に適した寒冷気候が泥炭層を形成したと考えられる。

仁和洪水後：今回データとして示していないが、仁和洪水砂層直上の泥層には湖沼等といった止水域の珪藻化石が含まれ、洪水後に一時的に水域が出来たことを示す。しかし、珪藻遺骸が含まれるのは砂層直上から採取した試料のみで、その上位の泥層は珪藻遺骸を含まない TOC、TN、TSの低い安定した値を示す人的攪乱によって均質化された水田耕作土である。このように、西暦888年の後、この地域は比較的古く水田として再び利用されるようになったと思われる。

## 6 まとめ

寒冷期の縄文晩期が終わり紀元前700年以降の温暖化によって弥生時代以降稲作地域は拡大した。しかし、今回の検討から長野盆地南部では西暦500年から700年の寒冷化によって一時水田の多くは放棄され、広く泥炭層が形成された。その後、西暦700年以降の温暖期になると急速に水田が広がるが、888年の洪水により大きな被害を受ける。しかし、多くの遺跡からは復旧の跡が認められ、中世温暖期とされるこの時期は水田や住居の復興が比較的速やかにおこなわれたと思われる。歴史文書にはこの後も千曲川による洪水記録があるが、この地域の遺跡では、塩崎遺跡群の水路跡に残された戊の溝水 (1742年) の砂層のみで、多くの場所で人間活動による洪水災害後の復興が砂層の存在を失わせている。

## 参考文献

- 安藤一男 1990 「洪水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42巻2号 p.73-88 東北地理学会
- Crema, E. R., et al. 2022. Bayesian analyses of direct radiocarbon dates reveal geographic variations in the rate of rice farming dispersal in prehistoric Japan. *Science advances*, 8, ead9171.
- 原口和夫 2001 「余呉湖の珪藻」『Diatom』17巻 p.141-148 日本珪藻学会
- 保柳康一・亀谷兼人 2022 「仁和洪水 (西暦888年) 砂層の堆積学的研究からみた千曲川洪水と土地利用の関係」日本地質学会第129年学術大会 [T13, O-6]
- Iseya, F. 1989. Mechanism of Inverse grading of suspended load deposits. *Sedimentary facies in active plate margin*, 113-129. Terra Pub., Tokyo
- 鹿島 薫 1986 「沖積層中の珪藻遺骸群集の推移と更新世の古環境変遷」『地質学評論』59巻7号 p.383-403 公益社団法人日本地質学会
- 河内晋平 1983 「八ヶ岳大月川岩屑流」『地質学雑誌』89巻3号 p.173-182 日本地質学会
- Kawahata, H., et al. 2009. Changes of environments and human activity at the Sannai-Maruyama ruins on Japan during the mid-Holocene Hypsithermal climatic interval. *Quaternary Science Reviews*, 28, 964-974.
- Kawahata, H., et al. 2017. Climatic change and its influence on human society in western Japan during the Holocene. *Quaternary International*, 440, 102-117.
- 川崎 保 2000 「仁和の洪水砂層と大月川岩屑なだれ」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8号 p.39-49
- 西村公助, 渡邊晴香 2012 「中川遺跡発掘調査報告」p.27-39 財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所
- 吉野正敏 2009 「4~10世紀における気候変動と人間活動」『地学雑誌』vol.118 p.1221-1236 公益社団法人東京地学協会

## 第6章 総括

### 第1節 石川条里遺跡

#### 1 弥生時代～平安時代の水田面・遺構出土土器の年代

##### (1) 弥生時代中期後半の土器の年代 [図版84]

今回の調査で確認された最も古いⅧ層水田面や畦跡、土器集中等から栗林式土器が出土した。栗林式土器は長野県北半に分布する弥生時代中期後半の土器で、畿内Ⅲ様式後半～Ⅳ様式に併行する長い期間を含む。ここではこれまでの栗林式土器編年に照らして本遺跡出土土器の時期を絞り込みたい。

栗林式土器は笹澤浩による大別以後(笹澤浩1976)、長野盆地での高速道等の大規模開発に伴う資料増加に伴い、細分編年案がいくつか示されるようになった。栗林式土器の編年案は、古段階・中段階(古・新)・新段階の4段階とする寺島孝典案(寺島1993)から、それを継承し新たに壺の文様帯の検討から栗林式1式・2式(古・新)・3式の4段階とする費田明案(費田2000)と石川日出志案(石川2002)、さらに1式を細分し1式(古・新)・2式(古・新)・3式の5段階とした寺島による再案(寺島1999)、1式(古・新)・2式(古・中・新)・3式の6段階の馬場伸一郎案(馬場2008)がある。これ以外に笹澤正史は上越市吹上遺跡出土の栗林式土器を小松式土器との共伴関係を捉え、吹上遺跡Ⅰ期古段階(古相・新相)・中・新段階の3(4)段階を栗林1式、吹上遺跡Ⅱ期古段階を栗林2式古段階、Ⅱ期中・新段階を栗林2式新段階に対応させている(笹澤正史2013)。笹澤正史は栗林式土器自体を細分したのではないが、従来の栗林1式がより細分しうる可能性を示している。また、鈴木正博は松原遺跡出土土器を10段階に変遷を捉えらるゝとしている(鈴木2014)。このように周辺地域の研究はより細分化する傾向にあるが、県内では十分な検証を行っておらず、今回出土した土器も破片が多いため、あまり細かい編年・変遷案との対比は難しいと予想される。ここでは現時点での県内で最も細分している栗林5、6段階案と比較する。また、今回出土した土器は壺が多いため、費田・石川の示した壺の文様帯によって土器年代を捉えることは難しく、各編年で示された壺の様相を比較する。

今回、Ⅷ層Ⅰ層水田面の検出面や関連遺構から出土した壺は、2・3のように胴部中位が膨らむ器形で、なかには6のように口縁より胴部径のほうが大きいものもある。口唇部はキザミや押圧文は認められず、20のような縄文が施文されるものがある。また、体部に櫛描文が施され、文様は7～9の縦羽状文と6のような波状文が主体である。櫛描文は胴部下半まで施文され、なかには縦羽状文の崩れた文様とみられる横走・斜走櫛描文を縦位に並列させる2・3がある。頸部に15・18・20のように縷状文を有するものがあり、19は摩滅するが頸部は波状文で、体部はタテ羽状文とみられる。波状文では縦位の櫛描直線文を加えるものや、胴部下半に刺突文を加える例はみられなかった。

これらの特徴から、今回石川条里遺跡で出土したⅧⅠ層の土器年代は、寺島・費田・石川編年の栗林2式の新段階以後で、馬場編年では栗林2式新段階以後に当てられると思われる。栗林3式まで含むかどうかは壺のみでは判断が難しく、3式の壺頸部に特徴的にみられるとされる縷状文風の沈線文は壺の破片自体が少なく確認できなかった。少ない土器からの判断ながら、ⅧⅠ層の時期は栗林2式の新段階を中心とするとみられるが、3式を含む可能性も考えておきたい。

下層のⅧ-2層の出土土器は僅かで、図示したのは甕(13)と壺(17)のみである。13は今回出土した土器で数少ない櫛描横羽状文甕で、文様は胴部最大径部分の上半にとどまる。しかも櫛描横羽状文の下端には横位の櫛描横線文があり、類似文様は塩崎遺跡群の栗林1式とみられる胴部中位の刺突文に重ねて引かれる例がある。この二つの特徴から13は、栗林1式と思われる。17は折り返し口縁にも見える口縁片だが、口唇部に縄文施文はない。形態は古墳時代前期の土師器壺口縁にも類するが、出土層位はⅧ-2層なので混入品ではないとみられるが、詳細は不明である。

以上から、Ⅷ層水田年代はⅧ-2層が栗林1式、Ⅷ-1層が栗林2式新段階(～3式)にかかる頃とみられる。また、本遺跡Ⅷ1層の年代より若干古いと近似時期と思われる中野市川久保遺跡では、水田面の脇及びその隣接する微高地上で壺・甕を中心に完形土器が集中的に数か所に分かれて出土した。そのあり方は本遺跡のSQ001と類似すると思われる。

なお、SC089から赤彩された壺形の鉢(10)と甕形の有孔鉢(11)が出土した。SC089の芯材の放射性炭素年代測定は弥生時代後期～古墳時代の年代だが、10は弥生時代後期以前の松原遺跡等の栗林式土器にもみられ、11は類例が少ないが屈曲口縁と倒卵形の胴部形から栗林式の可能性を考えた。SC089は土器と放射性炭素年代測定値が一致していないが、出土土器から弥生時代中期後半の可能性もある。

## (2) 弥生時代後期土器の年代 [図版84・85]

今回の調査で出土した弥生時代後期土器は、長野県北部に分布する吉田式土器(笹澤浩1970)、箱清水式土器(桐原1957)に該当する。これらの土器は畿内V様式に併行するとされていたが、近年、箱清水式後半期には北陸、東海地方の土器が共伴することが明らかになり、その対比から箱清水式土器後半期は庄内期にかかることされる。弥生時代後期は比較的長い時間幅だが、編年の細分検討も進んできている。

吉田式土器は標識遺跡の吉田グランド遺跡の調査により資料が増え、頸部に特徴的な鋸歯文も栗林式に系譜が求められる可能性が指摘される(千野2001)。また、箱清水式土器は変化が乏しいなかで高坏の形態変化を捉えた青木和明の検討(青木和1984)を端緒に、千野浩や青木一男が細分案(千野1989、青木一1999)を提示している。千野・青木一男は吉田式土器と箱清水式土器に様式的画期を捉えず、青木一男は栗林式土器から長野県東北部域で展開する同じ系統の連続する土器群としてまとめて段階区分した。今回は青木一男編年の6段階区分と比較する。

なお、馬場伸一郎は青木一男1・2段階を吉田式土器、3・4期を箱清水式土器前半、5・6段階を箱清水式土器後半に対比し、これまでの調査で分析された放射性炭素年代測定値を暦年校正曲線IntCal20の校正年代で整理しなおした(馬場2020)。そこで、青木一男の2段階が1世紀を中心とする前後の時期、箱清水式土器開始の3段階が1世紀中頃～2世紀初め頃、4段階がおおよそ2世紀、5・6段階が2世紀中頃から3世紀前半との年代観を示した。現時点では1段階と栗林との境がやや不鮮明と思われるが、2段階までの吉田式土器がやや短く、箱清水式土器の成立が1世紀中頃まで遡るという従来よりもやや遡った年代観で、終末も3世紀前半までを含む長い時間幅となっている。

今回出土した土器のなかで層位的にも古い土器はⅥ層出土の壺(22)で、ヘラ描沈線の鋸歯文を施す吉田式に該当する。受け口口縁の壺(27)も類似時期の所産で、青木一男編年の1・2段階とみられる。Ⅵ層が分布しない西部地区SC061・065出土の甕(25・26)は摩滅して文様は不鮮明で口縁を欠損するが、頸部屈曲が弱く、胴部が球胴化していないことから3・4段階だろうか。SC061出土の壺24は体部下半片で腰部が、折れて後縁を形成するので3段階以後とみられるが、破片のため上部の形状が不明で絞り込めない。SD187出土の甕(23)は頸部の屈曲が弱く、3・4段階頃とみられる。SC061・065に位置的に近い9区の古墳時代前期遺構であるSX002出土土器(27～29)のうち、壺27は受口口縁で赤彩の有無

は判然としないが1・2段階頃とみられる。また、甕28・29は口縁まで残存する数少ない例で、口縁まで波状文が施される。このうち28は口縁端部が若干内湾する。端部が内湾する口縁は1～3段階と6段階にみられるが、口縁まで波状文を充填するので3段階以後ではある。9区のⅢ層水田検出面出土の甕(35)は頸部周辺の破片とみられる。頸部の屈曲が弱い点は3・4期頃だろうか。高坏・鉢類は1区出土の30～33を図示した。1区は塩崎遺跡群に近い地点でもあり、集落域に対応した弥生時代後期の幅広い時期を含む可能性がある。高坏30～33、赤彩鉢34は時期の詳細は不明である。

以上、僅かな破片を材料に年代を検討したが、Ⅵ層やそれ以上の土層に僅かに1・2段階の土器が含まれるが、調査区西側の水田関連遺構出土土器は3・4段階頃で、箱清水式土器の前半期とみられる。馬場の示した年代観に照らすと1世紀中頃から2世紀となる。

### (3) 古墳時代土器の年代 [図版85～87]

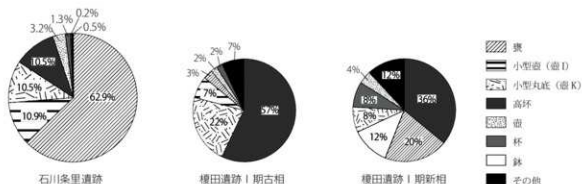
今回の調査ではⅤ層を中心に古墳時代の水田遺構が確認された。1区～4b区にかけてはⅤ層が分層されたが、土器の形態差から見て、出土土器に年代幅はあまりないとみられる。これまでの周辺域での土器研究に照らして、今回の調査で出土した土器の年代を考える。

今回の調査では検出遺構は少ないながら、土器は広範囲で出土し、当該期にあたる土器の器種は甕、壺、高坏、小型壺、小型丸底土器、高坏、器台、坏(または鉢)がある。その器種構成は、第41表のとおりである。

器種別破片数は個体数ではないため、厳密な器種組成とは言い難いが、おおよその傾向を知る材料となる。その比率は甕62.9%、台付甕0.1%、壺3.2%、小型壺10.9%、小型丸底10.5%、高坏10.5%、器台0.3%、坏1.3%、鉢と考えられる土器0.2%、器種不明の破片0.1%である。集落遺跡の堅穴建物跡出土土器の器種構成のデータはあまりないが、榎田遺跡では一部の堅穴建物跡出土土器の器種比率が紹介されている。集計方法が異なる上に本遺跡では水田跡全体の年代幅があって、直接比較しにくいですが、参考に類似時期の古墳時代中期～後期1期の例と比較すると(第41図)、榎田遺跡のI期古相で大坏57%、壺I(小

第41表 古墳時代土器の器種別破片数

	甕	台付甕	壺	小型壺	小型丸底	高坏	器台	坏	鉢か	その他
遺構	387	0	23	138	78	53	2	32	0	2
検出面他	1154	1	55	130	179	205	5	1	5	0
合計(2450片)	1541	1	78	268	257	258	7	33	5	2



第41図 古墳時代土器の器種別組成(石川条里遺跡・榎田遺跡)

型壺) 7%、壺K(小型丸底) 22%、甕3%で他の壺類や他器種の比率は記述されていない。新相で環8%、鉢12%、高環36%、壺K(小型丸底) 8%、甕20%で他器種の比率は不明である。高環・小型丸底の占める比率が時期を追って減少する傾向ながら、1期では比率が50%以上を占めている。本遺跡では高環等の供繕具が少なく、逆に甕が多い器種構成なので、やはり集落遺跡の組成とは異なる。この様相を土器出土状況に照らすと、甕の破片数の多さは、大畦畔SC038 脇で甕や小型壺が出土したような用例が該当するとみられる。その一方で9区のみ小型丸底土器が多い特異な状況があるが、ここでは祭祀に関連するとみられるSX002が検出された。

次に年代を遺跡出土土器の特徴から整理する。甕は破片ばかりで器形全体が窺えるのは39のみだが、球胴で口縁が「く」字形に屈曲する形態とみられる。口縁端部が外側に屈曲する40・45・55・82、やや直立気味の39等のように若干口縁形態差がみられる。壺は小片ばかりで、年代を知る手がかりは有段口縁(78)と折り返し口縁片(54)のみである。78は破片からの推定ながらやや口径が大きい、明瞭に屈曲してあまり崩れていない。やや古い様相にみえる。高環は全体形が窺えたものは1点もないが、口縁は坏部途中で折れる72・79・80のような形態で、脚は柱状ながら57・74・75のようにやや影りみながら比較的長いものや、脚中位が影りみ短い47の例がある。また、73のような脚中位に円孔穿孔するものがあり、脚下端は折れて広がる43・83のような形態が知られる。これ以外に器台が高環脚部かが判然としないが、直線的に開く58がある。小型丸底土器は52・61・64のような球胴形や、46・60・62・89のような断面が算盤玉形の扁平胴部に「く」字形に折れる口縁が付くものがあるが、口縁が長く胴部より大きく開く形態のものはない。小型壺も球胴形の42・66等のほか、腰部がやや屈曲する扁平胴の65もある。

これ以外の器種は僅かな出土である。器台は84があり、58も器台脚の可能性もある。自然堤防寄りの1・2区と微高地を含む4a区周辺から出土した。また、坏は水田域から出土したものはなく1区SD100出土の黒色処理される91のみである。水田域からの出土はないのは坏類が出現する以前の時期が水田時期の中心とみられる。

以上のように甕は「く」字口縁で球胴、壺は有段と折り返し口縁、高環は柱状脚高環か裾広がり、坏類が僅かながら認められる点、小型丸底土器は扁平なものがある等の特徴は年代を考える上で注目される。坏類が僅かで器台もあまり含まれない点、小型丸底土器は扁平なものと同球胴がみられる点、高環は柱状脚の屈折高環である特徴を当地域周辺で類似した土器編年に対比させると、本村東沖遺跡の2・3段階(千野1993)、更埴糸里遺跡・屋代遺跡群の屋代古墳4期(鳥羽1998)、榎田遺跡の1期(廣田1999)に対比しうと思われる。屋代遺跡群の古墳4期と榎田遺跡1期は坏類が出現する新相と、坏を伴わない古相に分けられているが、坏類の出土が僅かである点は古相中心の時期と思われる。ただし、器台や台付甕、明瞭に折れる有段口縁壺など古い様相の土器も僅かにあり、若干遡る時期を含む可能性がある。

当該期の年代だが、屋代遺跡群では屋代・古墳5期に須恵器TK208型式、TK23型式が伴うとされ(鳥羽1998)、近年の須恵器編年の年代から5世紀前半の時期(白石2006)とされている。従って、それに先立つ本遺跡のV層を中心とする水田跡は5世紀前半頃が中心で、若干遡る時期を含むとみられる。

#### (4) 古代土器の年代

本遺跡ではIV層を中心として古墳時代末～奈良時代、平安時代前期、平安時代後期の3時期の土器が出土した。これまでに示されている古代土器編年と対比しながら3時期の土器年代を検討したい。

その前に、今回の水田遺跡出土土器を従来の編年案に照らす上で少し注意点があるので触れておく。これまでの古代土器編年は集落遺跡の堅穴建物跡等に同時か近似時期に廃棄されたとみられる土器の器種・焼物種等の組み合わせの特徴を捉えて段階設定されている。そこでは個別の土器型式はあまり触れられて

いないが、それは生産時期が異なる土器が混在することを前提としていることがある。例えば、須恵器環底部の切り離し技法はヘラ切から回転糸切への変化が知られるが、生産地の窯跡では僅かな混在はあっても、基本的に窯毎に両者は併存しないと捉えられている（中島1997）。しかし、消費地である集落遺跡では両者が混在し、その比率の違いが時間差と捉えられている。また、灰軸陶器も生産地で設定されている複数型式のものが消費地で混在することも知られる。消費地では生産年代の異なる複数型式の土器が混在した状態のまま、使用の様式と仮定して「組み合わせ」の在り様を時期差と捉えていると思われる。本遺跡のような破片で散在的に出土した状況では、従来の編年のように組み合わせからの検討は難しく、1片ずつ形式的に生産年代を検討せざるをえない。従って、破片から捉えられた年代は使用・廃棄までの時間幅を考慮しない生産年代に寄った年代といえる。また、従来の編年では一部に須恵器・土器環類の法量や部位の計測値から型的に捉える試み（原1989・小平1990・澤谷1998・鳥羽1999）もあるが、すべての土器で型式検討は行われておらず、しかも破片では型式が特定できない等、実際には年代比定で苦慮するものも多い。ここでは幅のある年代でしか捉えられなかったことを断っておく。

なお、これまで公表されている古代土器編年案として中央自動車道長野線に伴う吉田川西遺跡での検討（原1989）、続く松本市内遺跡での小平編年（小平1990）、遺跡周辺では長野市篠ノ井遺跡群（西山1997）（以下「篠ノ井編年」という）、更埴糸里遺跡・屋代遺跡群（鳥羽1999）を参照した。長野市周辺の古代土器検討も松本平の古代土器編年を基にしており、年代観は研究状況の違いから若干違うが、各編年の時期区分はほぼ対応している。ただし、松本平と善光寺平では地域差もあり、須恵器環Bの出土量や法量分化の状況、非ロクロ調整環類の消滅時期、ロクロ調整黒色土器や黒色土器碗・皿の出現時期、灰軸陶器碗・皿等の出土量と焼物種内の比率等に若干差異もある。

#### ① 古墳時代末～奈良時代の土器の年代 [図版88～90]

古墳時代末の土器は1区近世遺構混入の須恵器環蓋(96)、同細頸壺(97)、同高坏(100)があり、図示していないが2区出土の同口径縁もここに含まれる可能性がある。他に土師器または黒色土器があるが、詳細な時期が捉えきれないため、年代が捉えやすい須恵器を中心に時期を検討する。なお、長野県下では須恵器生産は中野市茶臼峯窯跡9号窯址等で、7世紀前半に始まる可能性が指摘されている（笹澤・原田1977）が、資料が限られるため東海地方の猿投須恵器編年（城ヶ谷2015）を参考にした。96は口径が10.5cm強と推測され、天井部と口縁境に稜を残し、口縁は若干広がり、猿投窯Ⅲ-1期頃とみられる。100の高坏は透かしをもち、猿投Ⅲ-3期では透かしがないとされ、それ以前のものと思われる。ただし、中野市牛出古窯遺跡SW03（中島1997）では8世紀の透かしのある高坏脚がみられ、100は8世紀の可能性も残る。細頸壺は前段階の猿投Ⅱ-4期に出現するとされ、97は猿投Ⅱ-4期以後と考えられる。上記に取り上げた1区古墳時代末の土器は猿投窯Ⅲ-1・2期頃と併行し、年代は7世紀第2四半期～中葉が中心とみられる。この時期と断定しえた遺構はない。

奈良時代の土器は、非ロクロ調整黒色土器環・高坏、ロクロ調整黒色土器環A、須恵器は環A・環B、皿、長頸壺、甕A・E、蓋等がある。4b区、7b・8区溝跡、10区～12区等の西側調査区で多く出土し、SD169から複数片の土器が出土したが他は散在的な出土であり、比較的限定された時期の土器の組み合わせが捉えられた出土例はない。また、遺構では7b・8区のSD172とSD175・176、SD172とSD173が重複しているが、各遺構方位はほぼ類似して溝跡端部の位置も重なる等から関連した遺構と思われる。ある程度の活動時間幅があったと推測される。

まず、非ロクロ調整の黒色土器環・高坏だが、混入を除く遺構出土品では1区SD127の98、7b・8区SD169の109、SD170の115を図示し、他にも7a区SD142等から出土している。非ロクロ調整土器は篠

ノ井編年、松本平編年では4期（8世紀後半）頃に消滅、更埴・屋代編年では3・4期（8世紀中葉～後半）頃にも稀に存在すると捉えられている。これらの土器は3・4期を下限とするが、比較的破片数はあるので2期（7世紀末～8世紀初頭）前後を含む可能性がある。また、ロクロ調整黒色土器環Aは松本平編年では4期以後に出現するとされるが、更埴・屋代編年ではロクロ調整黒色土器環が2期末～3期の屋代遺跡群SK4622、3期の新幹線更埴条里遺跡SB5054から出土し、出現は3期に遡る可能性が指摘されている。今回、SD169からロクロ調整黒色土器（110）が出土したが、松本平編年に照らせば4期だが、更埴・屋代編年に照らせば3期に遡る可能性もあることとなる。なお、7a区SD142からロクロ調整とみられる土器環（104）が出土した。かなり表面は摩耗していて、平安時代後期の土器とも考えたが、奈良時代のロクロ調整土器の可能性も残る。

次に須恵器環だが、調査区西側出土の底部はヘラ切りでナデ調整の坏で図示したのはSD170の113、SC058（平安時代畦畔下部）の118、9区の126、11b区の128がある。口縁部がわずかに外反するやや深い器形である。須恵器環の器形変遷は丸底口縁外反器形→底径が広く平底の箱型形態（盤状）→底径が小さい逆台形へとされるが、上記の4点は盤状とは言い切れず更埴・屋代編年2・3期頃のものと同様。一方、SD066出土の102は盤状器形で底部は回転糸切で、更埴・屋代編年の須恵器環A内底径の変遷に照らせば、本例が8.6cmなので3・4期に該当する。更埴・屋代編年では2期末～5期（8世紀初頭～9世紀初頭）までは須恵器環に火樺が明瞭に認められる傾向が指摘されており、この点は出土品にもみられるので矛盾ない。この102は条里型地割の溝跡SD064と重複するSD066からの出土で条里型水田の施工上限年代を示すとみられる。

須恵器環Bでは高台の内端が接地する例はなく、外端接地高台または方形高台であるため、更埴・屋代3期以後とみられる。環Bは多種の法量のものが見られるが、松本平編年では環Bの法量分化は3期頃から始まり、4・5期に最分化し6期（9世紀前半）に法量種が減り、7期（9世紀中葉～後半）に環B自体が消滅するとされる。なかでも口径15～16cm・器高6cm強とみられる125や180のような須恵器環Bは、4期以後に明確になるとされる。更埴・屋代編年では、この法量の環Bは古代1期に既に出現するとしているが、中野市高丘古窯址群では須恵器環Aの底部ヘラ切段階ではこの法量よりも大型のものがあるものの、該当する法量はやや不明瞭に思われる。松本平編年と更埴・屋代編年では若干齟齬があるが、更埴・屋代編年では環B自体の出土量が少ないことや、上述した本遺跡の高台形態からすれば、3・4期のものと捉えられる可能性がある。

須恵器の無台皿（107）や、外反口縁の長頸壺（116）は、中野市の高丘丘陵古窯群では須恵器環A底部ヘラ切のみ出土する窯跡（中島1997）にみられ、須恵器無台皿は8世紀中頃まで口径がかなり縮小しながらも残存する。107は底径からすると8世紀前半の可能性もある。ただし、これらの土器も松本平編年の集落遺跡出土資料では、いずれも4期まで出土例がある。また、盤（111）は、中野市高丘丘陵では8世紀前半頃に生産量が多いようだが、集落遺跡では皿部が「く」字形に明瞭に折れる形態は、やや遅れてやはり4期頃まで残存する可能性は残る。

以上のように、わずかな土器からの検討で詳細な年代は詰め切れなかったが、本遺跡出土の奈良時代土器は松本平編年、更埴・屋代編年での2～4期の枠のなかに収まるとみられる。時期幅も広いが、消費地では古い土器も新しい時期に残ることを考慮すれば、ロクロ調整黒色土器の坏や回転糸切須恵器環A、深身の須恵器環Bがあることから、調査区西側は3・4期頃（8世紀中葉頃～後半）に耕作されたともみられる。ただし、非ロクロ黒色土器環が多いことや、須恵器環Aの形態から2・3期頃（8世紀初頭～前半）の特徴のある土器が一定量存在する。特に非ロクロ黒色土器環は脆弱で長期に残存しないと思われ、2期前後の時期にも耕作等があったとみられる。7b・8区の奈良時代遺構はSD174を切るSD176・175、



SD172とSD173の重複があり、少なくとも2時期の変遷が想定しうる。この変遷と対応すると考えられる8世紀前半の非ロクロ調整の黒色土器や底部ナデ調整須恵器環AはSD083、127、105、142(174)、170で出土し、後出するロクロ調整黒色土器環AはSD169から、底部回転糸切の須恵器環はSD066から出土している。上記以外のSD173・175・176・177も関連するとみられるが出土遺物がなく時期の詳細は不明である。長谷鶴前遺跡群1区では条里区画内に未耕作地として残された古い水田内に異方位の大畦畔2条が重なっており、ここでも2時期の水田改変が推定されるが、7b・8区の溝跡の変遷と対応するかは土器が小片のみで不明である。

実年代は更埴・屋代編年では2-3期境がA.D.735年頃、4期の年代は資料に恵まれず不明ながら8世紀後半、4-5期の境はA.D.794年頃とする。これに従えば本遺跡土器は8世紀前半から8世紀後半にかかるとなる。これまでの長野盆地の水田遺構調査では、川田条里遺跡の7世紀後半～8世紀前半とされる水田以後は水田様相が不明であるが、本遺跡例は8世紀中頃から平安時代の条里出現までの間の水田遺構の可能性が有ることとなる。

## ② 平安時代前期の土器の年代 [図版89]

平安時代前期と捉えられた土器は基本土層Ⅲ～Ⅳ層およびⅣ層関連遺構、Ⅰ・Ⅱ層から破片で出土したものがほとんどで良好な一括資料はない。焼物種はロクロ調整黒色土器・須恵器・灰軸陶器・緑軸陶器があり、食器では黒色土器・須恵器の環が中心で、黒色土器・灰軸陶器・緑軸陶器の碗(椀)・皿が少量ある。須恵器・黒色土器環Aの底部切り離し技法は回転糸切がほとんどで、黒色土器環では一部に手持ち・回転ヘラ削りがある。灰軸陶器は灰軸ハケ塗りで、体部下半をヘラ削りして高台は三日月形もしくは斜めに面取りするもので、美濃の灰軸陶器編年の光ヶ丘1号窯式(田口1982)に該当する。上記のようなロクロ調整の黒色土器を主体とし、須恵器も準じる量があり、わずかに灰軸陶器が少量ある焼物種組成の特徴や、須恵器環は逆台形の器形が主体で焼成不良のものも多いことや、灰軸陶器の型式から、出土した土器は松本平編年、更埴・屋代編年6・7期(9世紀前半～後半)が中心とみられる。松本平編年、更埴・屋代編年9～12期(10世紀)にあたる土器はみられなかった。

検出遺構は条里型地割の水田や、それに係る遺構が検出され、平安時代の特徴的な洪水砂層Ⅲ層の堆積もある時期であり、以下には層別・遺構別に出土土器の年代を検討する。

### Ⅲ層・Ⅲ層被覆Ⅳ層上面出土土器の年代

10区～12区、長谷鶴前遺跡群では洪水砂層Ⅲ層に被覆された水田面が遺存していた。Ⅲ層からは須恵器環A、黒色土器環A、黒色土器環・碗、土器器片が採取され、Ⅲ層が被覆する水田面の検出では黒色土器環A、黒色土器環・碗、黒色土器碗、奈良平安時代須恵器環B片、同壺、同羹片が採取された。破片がほとんどだが、食器の焼物種別比率は黒色土器環Aが64.3%、環・碗不明11.9%、碗2.4%、鉢2.4%、須恵器は環A 9.5%、環Bが9.5%である。黒色土器が食器の81%、須恵器が同19%で、比率から見ると更埴・屋代編年7期末頃の様相にあたる。灰軸陶器や8期(9世紀後半～末)に少量伴うとされる土器は確認できなかったが、採取破片数が少ないので全く存在しないとは言いつれない。水田面に伴う可能性が高い完形土器は長谷鶴前遺跡群水田面出土の焼成不良な灰白色須恵器環(139)と体部が比較的張った形の黒色土器鉢(138)がある。139はいわゆる軟質須恵器とみられ、黒色土器鉢は年代の詳細は不明だが、体部がやや影らむ点は後出する型式の特徴と思われる、8期にかかると考えられる。

以上から、Ⅲ層洪水砂層や水田面出土土器は7期(9世紀中頃～後半)の様相が強く表れているが、138・139から洪水砂層Ⅲ層は更埴・屋代編年の8期頃(9世紀末頃)を含む。

### 条里型地割に係る遺構出土土器の年代

条里型地割に則る遺構は、Ⅲ層被覆水田面の畦畔跡、Ⅲ層被覆がない地区での条里坪境にあたる位置で検出された溝跡がある。

まず、洪水砂層Ⅲ層に被覆された条里型地割が認められた石川条里遺跡10～12区・長谷鶴前遺跡群の畦畔内出土土器は、わずか17片のみである。須恵器杯Aが17.6%、同杯Bが11.8%、同杯A・B不明が5.9%、同蓋11.8%で、黒色土器杯Aが41.1%、杯・壺不明11.8%である。黒色土器が主体となる焼物種組成から松本平編年7期頃の様相とみられる。当該期では須恵器杯Bや蓋は激減するとされるが、若干存在するので遡る時期の土器を含むとみられる。そのなかで須恵器杯A(118)2片は底部ナデ調整の奈良時代の所産で、隣接する長谷鶴前遺跡群では条里型地割施工前の水田が存在したとみられるので、118は先行水田に伴う土器と思われる。また、大型の破片である長谷鶴前遺跡群SC11出土の須恵器杯B(145)は外底を全面回転ヘラ削りし、高台は外端接地で高台端面がくぼむ。類似形態は更埴・屋代編年の3～6期(8世紀中葉頃～9世紀前半)頃にあり、やや古い所産とみられるが詳細な時期は不明である。

次に、Ⅲ層被覆がない石川条里遺跡1区～9区の条里型地割の坪境想定位置で検出された溝跡出土土器である。このうち、埋土にⅢ層由来か砂層が確認された溝跡として1区SD095と2区SD046がある。

SD095は先端にSK356が位置し、両者は関連遺構とみられる。SD095からは黒色土器杯または壺1片、SK356からは黒色土器杯A17片、同壺1片、須恵器杯A18片、土師器小型甕1片、同壺2片、灰軸陶器瓶3片が出土した。他に、奈良時代との識別ができなかった須恵器甕6片、同壺8片、同杯B1片、同蓋1片、奈良時代以前の非口クロ黒色土器類がある。SK356出土の食器焼物種組成比率は黒色土器と須恵器がほぼ半数の松本平編年7期前後の特徴で、灰軸陶器瓶類、黒色土器壺が含まれる点も整合的である。土師器杯類は確認できていない。

SC001に係るSD046とその下部から黒色土器杯A2片、壺1片、奈良時代杯B3片、杯Bか壺類の体部1片が出土した。黒色土器杯が主体で、壺もあり、松本平編年7～8期とみられる。なお、大畦畔SC001下部出土の須恵器杯B(117)は、外反口縁で奈良時代と捉えた。

砂層被覆がない坪境に一致する溝跡では、3b区SD104から須恵器杯と黒色土器杯が出土し、須恵器杯はかなり焼成が悪く松本平編年8期に下る可能性がある。4b区SD064では須恵器杯A(159～165)と黒色土器とみられる杯Aの(158)、長頸壺(166)を図示した。須恵器杯Aが主体で黒色土器杯類が少量ある組成で、須恵器は確認できるところですべて回転糸切である。須恵器の比率が高く、須恵器杯A底部はすべて回転糸切であること、SD064須恵器杯内底径は6cm前後なので鳥羽氏の編年検討(鳥羽1999)に従えば更埴・屋代編年6～8期にあたる。数値にばらつきが少ない点から6・7期に絞られ、須恵器の比率の高さから更に6期に絞られる可能性がある。ただし、出土土器からは5・6期の差異を識別できず5期に遡るのかもしれない。

以上、条里型地割に一致する遺構の出土土器では、やや古い様相を示すSD064が松本平編年6期に遡る可能性があるが、おおむね7期を前後する時期の土器が中心とみられる。Ⅲ層被覆がない坪境で検出された溝跡の出土土器はSD064の他は古い様相がなく、条里型地割施工時のままではなく耕作中は開口していたか、耕作と類似時期に構築されたとみられる。

出土土器は7期前後が主体ながら、条里型水田の下限時期は水田を被覆する洪水砂層Ⅲ層が8期頃と推定されるので下限は8期にかかるとみられる。上限年代は6期まで含まれる可能性があるが、5期に遡るかは明確にしえなかった。

なお、条里型地割にのる遺構出土土器にはSC058の118、SC001の117等の奈良時代土器も混在するが、奈良時代土器のみで占められることはなく、7a区では条里型地割坪境のSC054と奈良時代SD142が検出

されたように耕作が重なったためとみられる。

以上から、今回の調査では厳密な年代を詰め切れていないが、条里型地割に係る遺構出土土器は松本平編年6期に遡り、耕作は7期が中心で、洪水は8期とみられる。洪水以後の土器は平安時代後期まで抽出できたものがなく、継続する耕作はなかった可能性がある。

### ③ 平安時代後期の土器の年代 [図版90]

平安時代後期の土器は土師器小型坏(200~206)と他に時期判断に迷った土師器坏(104)がある。小型坏は口径10cm前後だが、201・203のやや深身のもと200・202・204~206の浅い皿形がある。これまでの古代土器編年検討では土師器坏類は時代が下ると共に小型化し、松本平編年12期(10世紀後半)頃に大小2法量に分化し、以後は小型坏が器高を減じていく型式変化とされる。本遺跡出土の浅い皿形の小型坏類は器高2cm前後で松本平編年14・15期(11世紀前半~後半)頃に該当するとみられる。また、深身の小型坏(201・203)は器高3.2cm前後でそれより遡る13期(10世紀末~11世紀初頭)頃とみられる。

これらの土器の実年代だが、松本平編年15期(小平1990)は吉田西遺跡SB31段階に対比されているが、吉田川西遺跡SB31段階(原1989)には柱状高台坏が伴う等の松本平編年15期とは内容に違いがある。吉田川西遺跡SB31段階に伴った山茶碗の谷迫間2号窯式の年代は12世紀前半~中頃とされ、松本平編年15期は柱状高台坏を含まないので、吉田川西遺跡SB31段階より古いそれ以前とみられる。さらに、松本平編年では11~13期に虎渓山1号窯式・丸石2号窯式、14期に美濃灰釉陶器の丸石2号窯式・明和27号窯式、15期に明和27号窯式・西坂1号窯式が伴うとされ、近年の灰釉陶器編年年代(齋藤1994)に照らすと松本平編年11~13期(10世紀後半~11世紀初頭)が1000年を前後する時期、14期が11世紀中頃、15期が11世紀後半~12世紀初頭とみられる。従って、本遺跡の平安時代後期土器の年代は11世紀前後の時期と、11世紀後半~12世紀初頭にあたる。石川条里遺跡高速道地点でも類似時期の土器を伴う溝跡が検出されており、類似時期に当地域で再開発が行われたものと考えられる。

## 2 弥生時代中期後半水田跡

本遺跡の水田跡と類似時期の長野県内例では、長野市川田条里遺跡のD区第6水田面がある。水田跡の年代は若干下の弥生時代後期前半と報告されるが、弥生時代中期後半の土器もかなり出土している。今回の調査で捉えられた水田面は放棄された状態なので、検出遺構がすべて同時に存在していた確証はないが、非常に広域に水田遺構が分布する。川田条里遺跡(D区第6水田面)自体も時期が異なる水田面を含む可能性が指摘されているが、広域にわたる水田跡である点の本遺跡と類似する(埋文センター2000)。こうした当該期の水田跡の特徴や変遷を踏まえ、本遺跡の水田跡について、検討したい。

### (1) 長野県における弥生時代中期後半の稲作研究

弥生時代は稲作の開始された時代というイメージから、長野県でも稲作の定着・展開についてはさまざまな観点から検討されている。長野県の弥生時代は植物採取・狩猟など多角的な生業もありつつ、稲作・畑作を含めた植物栽培が地域差を持って受容され、段階的に発展したという点は大方異論ないと思われる。レプリカ法による検討：近年、土器に残る種実圧痕を対象としたレプリカ法による研究は、縄文時代晩期終末~弥生時代中期の農耕の様相を明らかにしている。それによると長野県内では縄文晩期終末頃の種実圧痕ではアワ・キビの畑作物を中心として粉が僅かに確認できるという(藤巻2012、中沢2014)。日本へは稲作と畑作がセットで伝播しながらも、長野県では縄文晩期終末期には畑を選択的に採用したとされる。

それが弥生時代中期中葉の松本市境窪遺跡で初圧痕数が、それ以前より増えることが明らかにされたことから、弥生時代中期中葉段階が稲作普及定着時期の目安といえそうである（設楽・守屋・佐々木・百原・那須 2019、設楽・守屋・佐々木 2019）。

**石器研究による検討：**弥生時代中期の稲作の発展については、水田造成にかかわる木材加工や収穫具である大陸系磨製石器群の普及時期に関する検討でも示されている。大陸系磨製石器のなかで伐採用石斧は早くから存在が知られるが、セットで一定量揃うのが粟林2式期（町田 1992）、あるいは出現期に注目すると中期中葉松本市境窪遺跡段階とされる（杉山 2010）。また、弥生時代の石器組成は県内で地域差があり、打製石器耕起具・収穫具を残す畑作中心の長野県南部、大陸系磨製石器を受容し稲作中心の長野県北部という地域差も捉えられ、その後北部は鉄器流通をめぐって大きく変動していくとされている。さらに長野県の稲作は古くから東海系系痕文土器の出土から、東海からの普及を前提に考えられてきたが、本格化する北部の稲作技術は地理的に遠い東海ではなく、北陸からという指摘もある（町田 1994）。ただし、長野県北部でも土器種実圧痕検討から、弥生時代中期後半の粟林期以後でも畑作と稲作が併存していることも明らかにされており、北部＝稲作のみという単純な図式にはならないようである（馬場・遠藤 2017）。

**水田跡の検出：**稲作の証拠となる水田跡は、現時点で長野県北部域に弥生時代中期後半の粟林期頃のものがある。洪水砂層や、泥炭層に被覆された水田跡がなく、溝跡のみの断片的な確認例が多いが、中野市柳沢遺跡（埋文センター 2012）、同川久保遺跡（埋文センター 2013）、長野市川田条里遺跡（埋文センター 2000）、同石川条里遺跡高速道地点（埋文センター 1997）、千曲市屋代遺跡群（埋文センター 1998）等がある。この他に溝跡のみの長野市北之脇遺跡（埋文センター 1999）、自然流路利用の中野市七瀬遺跡（埋文センター 1994）等も加えられる。このなかで最古例が屋代遺跡群の粟林1式期とされる。川田条里遺跡B区第8調査面も弥生時代後前半の土器に混在して粟林1式の土器が出土し、当該期からの水田耕作の可能性を示唆する。それ以外の遺跡は粟林2式か、2式後半か3式にかかわる頃とみられる。

弥生時代中期後半以前では、千曲市更埴条里遺跡で水田跡の確認はないが、流路内から弥生時代中期中葉の土器と石包丁が出土し、プラント・オパール分析から稲作の可能性が捉えられている。また、石川条里遺跡高速道地点、川田条里遺跡ともに縄文晩期の遺物出土がみられ、土器の種実圧痕の検討でも弥生時代前期後半で初圧痕が僅かに認められている（中沢 2014）。長野市塩崎遺跡群では東海系の弥生時代前期末頃の土器出土等もあり、稲作の継続性はないにしろ稲作開始年代は遡る可能性も残るが、詳細を明らかにできる段階ではない。

長野県の稲作定着時期は、初圧痕土器の増加や大陸系磨製石器普及、水田跡の存在から想定される弥生時代中期後半の粟林期が確実で、それが中期中葉段階に遡る可能性があるということが現段階の理解といえるだろう。

上記の弥生時代中期後半水田跡は狭い範囲の検出にとどまる例が多いが、土の畦畔のみならず、芯材を入れた畦畔の構築、用水の敷設や畦越配水、堰を用いる水利システム等の後代の水田遺跡にみられる基本的技術は揃っていると見える。中期後半の水田跡検出例が狭い理由は、広域に堆積する洪水砂層がなく水田遺構がみつかりにくいこともあるが、基本的に小規模範囲の水田と捉えられている（白居 2002・河西 2000）。また、多くの遺跡で検出される用水跡は、用水からオーバーフローした堆積物で用水周囲が遺存したためでもあるが、石川条里遺跡や川田条里遺跡では後代の弥生時代後期水田跡は水田域の広さに比して用水が少なく、中期後半の水田跡は溝跡の検出例が多く、このことが中期後半水田の特徴とみられる。例えば川久保遺跡は、狭いながらも長い溝跡で斑尾川方面から千曲川縁の低地まで引水し、その先端の千曲川沿いの低地を水田とする。また、川田条里遺跡（D3区 SD10-13）は、堰付近から数本の用水が分岐し、各用水がそれぞれ水田群や水田を灌水していたとみられる。これらの例から、当該期の水田は水田

耕作の適所まで用水で引水し、その用水で灌水できる狭い範囲を水田域としていたことがわかる。その用水単独例が川久保遺跡や柳沢遺跡、分岐して複数の水田群が分散して存在するのが石川条里遺跡や川田条里遺跡である。

弥生時代中期後半に用水を多用する水田が営まれた背景は、洪水等による堆積土が少なく微妙な高低差が残る当該期の地形環境にあるとみられる。

## (2) 石川条里遺跡における弥生中期後半の水田跡について

**層序と検出状況** 水田跡はⅧ-1層を耕作土層とし、上面は耕作放棄後に堆積した泥炭層Ⅷ層に覆われていた。2区、3b・4a区、7a区では、薄い泥炭層上面で検出作業を行い、盛り上がる下層の耕作土層が帯状に検出できた部分を畦畔と認定した。泥炭被覆が僅かな7b・8区～11区北部は古墳時代水田耕作土層Ⅴ層下～Ⅷ層上面で大畦畔基部のみ検出した。

**最下層の水田層** 3b・4a区、5b区のⅧ-1層下層にあるⅧ-2層でプラント・オパールが確認され、9区ではⅧ-1層下層で木芯畦畔と土器が出土した。水田面は遺存しないが、Ⅷ-1層下のⅧ-2層を耕作土層とする水田跡が存在したとみられる。Ⅷ-2層より下の土層では水田遺構の検出はない。

**水田の年代** Ⅷ-1層水田年代だが、2区では上部にあるⅥ層から弥生時代後期前半の土器22(図版84・PL27)が出土したことからⅧ層は弥生時代後期前半以前で、上限は9区のⅧ-2層出土の土器(13)から弥生時代中期後半を遡らないとみられる。また、Ⅷ-1層水田に係る出土土器では3b・4a区の微高地付近出土土器(15)(図版84・PL27)やⅧ-1層上面のSQ001出土土器(1～3)、7b・8区のⅧ-1層上面付近検出のSC063・064出土土器(4～6)があり、これらの土器は弥生時代中期後半の栗林式土器に該当する。10区以西の西側調査区で検出された大畦畔では、SCI101から弥生時代中期後半の土器、SC089から弥生時代中期後半～後期と思われる土器が僅かに出土した。SC089は出土木製品の放射性炭素年代測定では弥生時代後期～古墳時代とされたが、弥生時代後期土器と断定できる土器がなく、弥生時代中期後半の土器の可能性もあることから弥生時代中期後半の可能性を考えた。上記のⅧ層に係る出土土器の時期は、第6章1節1にまとめたので参照されたいが、これらの土器からⅧ-1層水田の時期は弥生時代中期後半でも後半～末頃で、Ⅷ-2層は9区Ⅷ-2層出土の土器(13)から、弥生時代中期後半でも前半期とみられる。

**水田の範囲** Ⅷ-1層水田跡に係る水田遺構は、2区～11区までの東西約520m以上×南北400m以上の範囲に分布し、この範囲が水田域とみられる。水田遺構分布域の西外側の石川条里遺跡12区～長谷鶴前遺跡群3区まではⅧ層上面の泥炭層が再び認められるが、プラント・オパール分析は実施せず、水田遺構の有無も確認していないため水田域が広がるかは不明である。県内の弥生時代中期後半の水田域は比較的狭いとされ、今回みつかったⅧ-1層水田はかなり広く弥生時代後期の水田規模に近いと思われる。近似時期の可能性のある川田条里遺跡のD区第6水田面も比較的水田域が広く、弥生時代中期後半の後半～末頃に水田が広域化している可能性がある。なお、下層のⅧ-2層の水田範囲は、プラント・オパール分析を実施した3b・4a区～9区は水田域と認められるが、それ以上の広がりは不明である。

**水田への主水源** 水田遺構は後背低地の最低部より西側に分布し、その遺構分布と地形から、この水田の主水源は西側の崖錐地形先端部湧水か、西からの沢等の小河川とみられる。

**水田の形態** Ⅷ-1層水田では、2区、3b・4a区、7a区で泥炭層に被覆された小畦畔による小区画水田が検出され、泥炭層被覆が僅かな西側調査区を中心に5区SCI113・114、7b・8区SC063・064(066・068)、10区SCI105、11区SC089・101等の大畦畔が検出された。7b・8区～11区の大畦畔は50～70m間隔に位置する。西側調査区では小区画水田が確認されていないが、小区画水田畦畔の検出は泥炭層の残存状態に左右され、泥炭層が薄く検出できなかったもので、大畦畔区画内でも小区画水田としていたと推測される。

2区、3b・4a区、7a区の小区画水田は、一筆が8m(2×4m)～28m(4×7m)前後で、畦畔は等高線方向に長く連続し、その畦畔間を直交方向の短い畦畔で区切って等高線方向を長辺とするものが多い。また、大畦畔の区画が西側地区に偏るのは東側調査区では木質遺物が遺存せず、大畦畔が検出しにくいこともあるが、Ⅷ-1層水田の構造に関わる可能性がある。

**水田の構造** 上記からⅧ-1層水田は7b・8区～11区の西側調査区では大畦畔の区画内に小区画水田を配し、2区～7a区の調査区東側は小区画を中心に配置される様相とみられる。県内では小区画水田を大畦畔の区画で括る例は弥生時代後期水田にあり、広域に及ぶ水田では大畦畔区画の設置が不可分とみられるが弥生時代中期後半水田では溝に伴う畦畔を杭等で補強した例はあるが大畦畔の区画は判然としない。そのなかで、Ⅷ-1層水田は西側調査区に大畦畔の区画が偏り、全体に大畦畔区画があるわけではないのでⅧ-1層水田の大畦畔区画の意味が問題である。そこで、大畦畔の区画規模に何等かの区画の役割が表現されていると予想し、石川条里遺跡高速道地点、川田条里遺跡の弥生時代後期水田例と比較してみたい。

**大畦畔区画の比較** 芯材のみの検出で同時存在といえないものや、方形でない区画もあるが、石川条里遺跡高速道地点の弥生時代後期大畦畔区画は12-2・3区で凡20～30m間隔×48m以上、14区で32×28m以上と8m×36m以上、15区・16区で16m×16m以上がある。川田条里遺跡の弥生時代中期後半～後期初頭のA3・4区第6水田は、すべて同時存在ではない可能性も指摘されるが、44×30m以上、中間は未調査で不明ながら94?×40m以上、杭列間で80m×40m以上、B2区第7水田で鋤手に折れる溝跡と直線的な溝跡間34・60×30m以上、同第8水田面で35×40m以上、D区第7面水田で57・60×13m以上である。D区8面第6水田は複数面を含む可能性が指摘されるが、大畦畔位置が継承されたとすれば、その大畦畔との距離50×30m以上、50m×37m以上、80m以上×33m以上とみられる。大畦畔の区画全体が判明した事例は僅かで、傾斜方向の区画間隔しかわからない例が多いが、弥生時代後期水田の大畦畔区画は一辺8mや16mの狭いものから、1辺80mを超えるものまでである。そのなかで石川条里遺跡高速道地点では一辺20～50m前後が多く、川田条里遺跡は30～60m前後が多い。これらの大畦畔の区画内を小区画水田としているが、内部の小区画水田畦は直線的に通り、同一規格によるとみられることから、ひとつの耕作単位とみられよう。

上記数値を今回の調査区西側の大畦畔間隔と比較すると、本遺跡例は石川条里遺跡、川田条里遺跡の大畦畔区画規模に重なるが比較的大きい部類となる。大畦畔区画が耕作単位を表すとすれば、東側調査区に大畦畔区画がない理由が問題となるが、推測ながらⅧ-1層水田の大畦畔の区画規模が大ききことを考え合わせると、当水田跡は小さな耕作単位の集合ではなく、水田域全体をまとめて集団で耕作されたため耕作単位の括りが必要とされていなかったのかもしれない。つまり、本遺跡の大畦畔は耕作単位というより耕作条件により設置されたとも考えられる。すなわち、水源に近い西側調査区では内部の小区画水田の畦越配水の都合から地形変換点のような場所に大畦畔区画が必要だったか、湿地内の作業道が必要とされた等の理由である。また、調査区東側に大畦畔区画がないのは、水源から遠い末端で灌水限界に近く、単一水源では水量が不安定で耕作が継続できない場合もあったためかもしれない。

### (3) 長野県における弥生時代水田跡の様相

上記の様相を踏まえ、長野県の水田変遷のなかで今回のⅧ-1層水田の位置付けを考えてみたい。

弥生時代水田跡が小区画水田であることはすでに指摘されているが、井上智博は小区画水田の集合体を水田ブロック、用水や井堰を共通する水田ブロック群を灌漑ユニット、複数灌漑ユニットの集合を水田ゾーンという単位で捉えて水田構造を読み解き、その変遷を捉える視点を示している(井上2002)。これを元に近畿地方の水田形態の変遷を、大庭重信(大庭2013)の論考を元に井上(井上2020)が整理して

いる。それによると弥生時代前期中期頃は単線水路による個別灌漑で独立性の高い水田ブロックが分散するⅠa類、弥生時代前期後葉では、連続した複数水田ブロックを配水する灌漑ユニットのⅠb類、弥生時代前期後半～中期では幹線水路を中心に複数水田ブロックからなる独立性の強い灌漑ユニットが構成されるⅡa類、弥生時代中期後葉には、その灌漑ブロック末端のユニット間で余水のやり取りが交差するⅡb類へ変化し、この段階でユニット内を傾斜直交方向の大畦畔で区切る形態がみられるという。さらに、弥生時代後期には分岐型幹線水路により一定範囲に整然と均等な水田ブロック・灌漑ユニットが計画的に配置されて広域水田ゾーンが形成されるⅢ類への変遷と捉えられている。このなかで弥生時代後期水田を弥生水田の到達点として画期と捉え、それが古墳時代前期水田に引き継がれるとする（井上2002、大庭2013）。また、Ⅲ類水田の出現は、従来からの技術による技術的飛躍を伴わないもので、水田経営の在り方の変化（井上2002）、あるいは労働力編成や水利を統括調整する指導力をもった首長の出現によると想定されている（大庭2013）。

近畿での水田変遷を単純に当てはめられないが、先に挙げた長野県内の弥生時代中期後半の水田調査例をこの分類と対比すると、小規模用水で引水する狭い水田の柳沢遺跡や川久保遺跡がⅠb類、堰で分水する川田条里遺跡D3区画がⅡa類で、長野県では両者が併存するとみられる。一方、石川条里遺跡や川田条里遺跡の弥生時代後期水田は、大畦畔区画を整然と並べて複数水源からの灌漑で広域水田としている点や、石川条里遺跡のSD3004のような幹線用水がみとめられる点からⅢ類に該当しよう。

今回の調査のⅧ-1層水田跡は、大規模用水の引水によらず、限られた水源に頼るもので、検出遺構が断片的で灌漑ユニットは不明瞭だが、大畦畔の区画がそれに該当するかもしれない。また、水田末端には大畦畔区画がないので、配水が交差するⅡb類とみえる。大畦畔区画を耕作単位と考えれば広域水田化を志向したⅢ類に準じる形態ともみられるが、用水はあまり検出されておらず水田域全体の耕作条件を均等化する志向があまり感じられず、Ⅲ類までは達していないと思われる。

このようにみると、長野県に伝播した当初の水田形態はⅠ類かⅡa類で、弥生時代中期後半に各地の水田立地地形や当時の社会状況に応じ、このⅠ・Ⅱa類がさまざまなバリエーションをもちつつ併存したようである。そのなかで今回の調査したⅧ-1層水田のような単一水源ながら比較的広域を水田とする志向のⅡb類水田が、弥生時代中期後半末頃に展開したとみられる。ただ、広域に及ぶ水田化志向が地域内で独自に展開したものか、新たな情報や技術導入によるものかは明らかにしえない。

今回のⅧ-1層水田の大畦畔区画は耕作単位とせず、水田環境による側面が強いと推測しているが、弥生・古墳水田の水田区画・水利単位に社会関係や単位とする説がいくつかある。広瀬和夫は水利関係から水源の河川共有集団、堰共有集団、水口共有集団の3つ単位で捉える視点を示し（広瀬1988）、滝沢誠も広瀬の説を支持し小区画畦畔は耕作都合によるもの、大畦畔区画が耕作単位、水利を共有する大畦畔区画群が経営単位とし、祭祀は大畦畔毎に行われる例が多いとも指摘する（滝沢1999）。

#### （4）今後の課題

今回検出された水田跡調査では明らかにしえなかったことも多いが、本遺跡の弥生時代中期後半Ⅷ-1層水田跡は、弥生時代中期後半でも後半末頃のもので、広域を水田域としながら用水が少なく大畦畔区画で分節したなかを畦配水する水田と捉えた。その姿は個別用水を多用した狭い独立性の強い弥生時代中期後半の水田とは異なり、大畦畔区画が並列して広域を水田域とするもので、弥生時代後期水田に展開する稲作の増大化傾向の過程の1つの様相と考える。

ただし、本遺跡の場合は複数水源を利用せず、水源が限られるなかでの水田経営とみられ、水田域拡大にも限界があったとみられる。さらに、Ⅷ-1層水田の大畦畔区画は、耕作単位というより水田環境によ

る可能性を考え、耕作は家族等の小集団の集合というよりムラ全体のような広い集団によるものとも推測した。その場合、水田形態が類似する弥生時代後期のⅢ類水田に展開する水田としても、大畦畔区画の意味の変化を伴う可能性はある。この点も詳細は明らかにしえず、今後の課題である。また、本遺跡では先立つⅣ-2層水田跡は断片的で、本遺跡でのⅣ-1層水田への展開の様相は具体的に捉えられなかった。

なお、この水田跡は泥炭被覆がみられるように耕作放棄されていたとみられる。弥生時代水田は固定的なものだけでなく、地形環境変化に合わせて耕地を放棄、耕地を移動する場合があると捉えられており（井上2020）、本遺跡の場合も条件が合わなければ放棄され、別の場所に水田を造成したことは十分考えられる。本遺跡では放棄前の厚い洪水土被覆が認められないので水田放棄の直接的原因は洪水とはいえず、放棄された原因として考えられるのは水源の問題がある。水源は西側の山の沢水が湧水と想定したが、その水源の水量減少等で広域に灌水ができなくなったのかもしれない。

### 3 平安時代条里型水田跡

今回の調査では平安時代前期の水田跡・遺構が広域で確認された。その概要は以下の通り。

- ・洪水砂層に被覆された石川条里遺跡10区～12区・長谷鶴前遺跡群にかけては平安時代前期の水田面、洪水砂層の被覆がない地区では溝跡・畦畔等の遺構が断片的に確認された。遺構は方位を合わせたものが多く、溝・畦畔は約一町（109m）間隔で、11区では内部に半折区画が認められたことから基本的に広域にわたる条里型水田とみられる。
- ・洪水砂層に被覆された水田面と同時期とみられる石川条里遺跡12a区や長谷鶴前遺跡群1区の水田面では、条里型地割と共に、条里型地割と同方位の畦畔区画ながら半折区画がない異質な区画や異方位の畦畔区画（以下「非条里型区画」という。）が部分的に混在することが捉えられた。
- ・水田を被覆する洪水砂層の時期は砂層中や砂層被覆水田面出土土器から平安時代前期末の9世紀とみられ、888（仁和4）年のいわゆる「仁和の洪水」に該当すると思われる。

上記の水田区画について、詳細な様相を洪水砂層で被覆された石川条里遺跡10区～12区・長谷鶴前遺跡群の水田面で検討し、次に広域の施工規格の様相について周辺域を含めて検討する。

#### （1）石川条里遺跡10区～12区・長谷鶴前遺跡群の様相 [第42図]

当該地区の水田面は平安時代前期洪水砂層に被覆されていたために良好に遺存し、高速道地点で確認された条里型水田跡と同方位の畦畔で区画される「条里型区画」と、それと異なる方位の畦畔で区画される「非条里型区画」が混在して認められた。

「条里型区画」はさらに石川条里遺跡10区、11区の半折区画がある区画（条里型区画A）と、長谷鶴前遺跡群1区西・南にかけての半折区画がない区画（条里型区画B）に分けられる。「非条里型区画」は、泥炭層に覆われた古い耕地のまま放棄されていたとみられる長谷鶴前遺跡群1区東側地点（非条里型区画A）と、条里と異なる方位の細い小畦畔で区画された12a区西側（非条里型区画B）に分けられる。

#### 条里型区画A

**範囲：**石川条里遺跡10区・11区を中心とし、西境は12a区SC081となる。南境は12b区SC085まで含むと思われ、北境は遺構残存範囲までしかわからない。東境は調査区外に延びて不明である。

**畦畔配置：**方位を合わせた畦畔で構成され、長期に維持されたとみられる木芯の畦畔—SC058とその南北部、（SC081・093・095、092、100）と、SC097南延長上部分を含む。SC058とその南北部分（SC095・093）は、それぞれ南北・東西畦畔の交点付近に木芯が埋設され、東西・南北畦畔が同時に存在したと捉





えられる。SC081以外の南北方向の本芯畦畔を含む畦畔（SC055-058）南北部（SC099-098-091・092）は、東西方向の間隔が畦畔中央値で約20m間隔、SC091-112間で約25mを測る。また、南北方向は東西畦畔のSC058とSC093が距離57mを測る。これらの畦畔間隔は条里の半折区画の東西5区画（長辺約21.8m）×南北2区画（長辺約54.5m）の数値と厳密に一致しないが近似し、上記SC055～SC112まで5枚分の距離も約105mで一町（約109m）に近い。これらの半折区画は石川条里遺跡高速道地点と同様に坪内を南北2分割×東西5分割とする。

**特徴：**上記数値と水田配置から、条里型区画Aは高速道地点と同じ半折区画とみられる。ただし、非条里型区画との境になるSC081とSC097・100は、長期に維持されたとみられる本芯畦畔ながら推定坪境内の半折区画の位置にないが、SC081-097の間隔が約64mで半折区画短辺約3枚分、SC097-100間が約20mで半折区画1枚の短辺に近い。本芯畦畔SC100と058南北部間が約12m前後を測るが、SC055-058の南北部-099-098-091・092の半折区画に、東へ12mずれたSC081-097-100の半折区画が二重に重なるようにみえる。これらの東側に12mずれた畦畔はSC100～SC081間の狭い範囲に認められ、東端部まで続かない。何らかの理由である時期に12m東にずらした半折区画が一部に設定された可能性がある。一旦耕作中断後の再耕作でずれたか、環境に由来する耕作の都合によるものだろうか。また、条里型区画A内にはL字形の畦畔で囲ったSC096・097の変則的区画がある。出現背景は不明だが、半折区画が意味を喪失し、耕作の都合で改変されたものかもしれない。なお、半折区画を括る坪の大畦畔の区画は後述する。

#### 条里型区画B

**範囲：**長谷鶴前遺跡群1区～3区の非条里型区画A・B西側の山際に分布する。北側は現東西市道下に想定される大畦畔（後述）で非条里型区画Bと画されるとみられ、東側は南北方向の長谷鶴前遺跡群SC11と東西方向のSC04で非条里型区画Aと画すが、その南東側の延長先は調査域から外れ不明である。

**畦畔配置：**条里と類似方向の畦畔で構成され、SC04と11・16が十字に交差し長く続いて大きな区画を形づくる。内部の小畦畔は南部にSC05・06・08～10による小水田区画が東西に並ぶ以外はない。この東西の小区間は東西に長い半折区画を思わせるが、南北に長い半折区画を基本とする石川条里遺跡内では異質である。また、SC11・04には小畦畔の接続がなく、一筆45m以上×想定60mの区画で、SC04とSC05の短辺間隔も幅約29mで半折区画短辺より広い。

**特徴：**条里型区画Bは条里型区画A類似方位の畦畔で構成されるが半折区画は認められない。長谷鶴前遺跡群SC04は北側の石川条里遺跡SC093との距離約115mで、一町強の距離ではあるが近似値で条里の坪区画の整合性は保持しているとみられる。このことから半折区画がない条里型水田と考えられる。

#### 非条里型区画A

**範囲：**長谷鶴前遺跡群1区東側に分布し、北境は現市道下に想定される条里の東西大畦畔と推測され、東境は石川条里遺跡条里型区画畦畔SC058までと思われるが、未調査域にかかって不明である。西境は条里型区画Bの長谷鶴前遺跡群SC11、南限はSC04に画され、周囲は条里型区画畦畔に囲まれる。

**畦畔配置：**厚い泥炭層に被覆されたSC12～15とSC17・18の条里区画と方位の異なる大畦畔が近接して検出された。

**特徴：**SC12～14は条里型区画BのSC11に切れ、このみ厚い泥炭層に覆われることから条里区画施行時以後も耕作せずに古い耕作放棄地のまま残された場所とみられる。

#### 非条里型区画B

**範囲：**石川条里遺跡12a区にみられる。南限は現市道下に想定される東西大畦畔で非条里型区画Aに接するとみられ、東境は条里型区画AのSC081に画される。北と西側は調査区外へ延びる。

**畦畔配置：**非条里型区画Aの長谷鶴前遺跡群SC12・13と類似が直交方向の畦畔から構成される。

**特徴：**畦畔は方位に合わせた条里型区画とは異なり、非条里型区画Aに似るが、畦畔は細く水田面は厚い泥炭層被覆がない。また、SC083は重なって洪水砂層上面から掘りこまれる溝跡が確認され、類例は条里型区画Aの石川条里遺跡11区にある。洪水以前の畦畔の上面に洪水以後の溝跡が重なるのは、洪水以後も畦畔位置が意識されていたものと思われ、この非条里型区画Bは洪水直前まで耕作されていたと推測される。条里型水田施工以後に局所的に半折区画でない区画の地形に合わせた耕作地があった可能性がある。

こうした条里型区画内に異なる区画が併存する背景は、調査地が湧水の多い耕作条件が悪い場所、放棄地（非条里型区画A）が残存し、狭い範囲の断続的な耕作が個別に行われたため、条里型区画Aの12mのずれや、条里型区画Bのような半折区画のない広い区画、地形に合わせた非条里型区画Bの区画を生じたと思われる。ただし、非条里型区画も条里型区画の畦畔で周囲を画され、基本的には坪境等条里型区画内において、坪区画は内部の耕作の有無にかかわらず全域に施工された可能性がある。

## （2）石川条里遺跡の坪区画の大畦畔設定

今回の調査地点である石川条里遺跡南部域では、高速道地点等の発掘調査で明らかになった北部域同様に平安時代前期の条里型地割が捉えられた。そこで、調査区内の坪境の大畦畔位置を比定し、石川条里遺跡北部との条里設定規格の関係を検討する。

### 石川条里遺跡12区、長谷鶴前遺跡群の大畦畔

北部域（石川条里遺跡高速道地点）では、半折区画10枚を括る坪境大畦畔が広域に同一軸で設定されていると捉えられている。南部域では畦畔の規模や構造の違いは見出しにくい、半折区画の存在はそれを括る「坪」の大畦の存在が想定できる。

まず、南北大畦畔が東西方向に長く貫く条里型地割に一致する畦畔とすると、坪境の東西大畦畔は石川条里遺跡SC058・093、長谷鶴前遺跡群SC04の3本が候補に挙げられる。石川条里遺跡SC058・093間の距離約57m、SC093—長谷鶴前遺跡群SC04間の距離約115mで、SC058-093間の距離の約2倍となる。これは一町（約109m）より長い、近似値で規則的配置といえる。また、SC093—長谷鶴前遺跡群SC04中間に東西方向の現代の市道があるが、その下は未調査ながら非条里型区画A・Bの境界にあたり、両者を画する東西畦畔の存在が想定できる。上記の畦畔は規則的に配置され、いずれかが坪内を南北に二分する半折区画か坪境に該当しよう。

南北大畦畔だが、東西畦畔以上に畦畔の規模・構造に差がない上に条数も多く、その認定が難しい。しかも条里型区画Aでは半折区画が約12mずれて二重に重なるともみられ、特定を困難にしている。そのなかで非条里型区画との境界をなす畦畔、あるいは木芯等をもつ長期維持を目的とした構造の畦畔、水田内を長く貫く畦畔等の特徴的な畦畔が、その一町に近い距離の組み合わせの候補は次のものがある。

- ①非条里型区画Bとの条里型区画A西境の石川条里遺跡SC081。東側一町先に対応する畦畔はない。
- ②SC112と東側一町先のSC057。
- ③畦畔内で完形須恵器杯が出土した木芯東西大畦畔SC058の南北部。調査区内に一町間隔の対応する畦畔はないが、本畦畔より西側に半折短辺12m東へずれる畦畔が分布する。
- ④長谷鶴前遺跡群SC11・16と東117m先の石川条里遺跡SC099か104m先のSC097。
- ⑤SC091と087。

石川条里遺跡①・②・③・⑤は条里型区画A内だが、①のSC081と④のSC097は12mずれた半折区画畦畔ともみられ、部分的な存在で広域を貫く坪境畦畔とはみられない。また、③のSC058南北部に対応する西側一町の場合は、非条里型区画B内のSC087があるが、SC087は短く北側へ延びないので大畦畔とは認めがたい。さらに、SC058のみで須恵器の完形杯が出土し、特別な畦畔にも見えるが、須恵器は奈

良時代の所産で想定条里施工時期より古いもので伴うとは断定できない。④の長谷鶴前遺跡群 SC11 は唯一条里型区画 B にあるが、方位がやや斜めで厳密には条里区画に載らず、現市道下に想定した東西大畦畔との想定交点と SC099 の間隔も 117m と長い。先に東西大畦畔では条里型区画 A と条里型区画 B 内の異なる区画場所を貫くとみられ、南北大畦畔も同様ならば④長谷鶴前遺跡群 SC11 と間隔は長いが石川条里遺跡 SC099 は候補の一つではある。これに加えて②石川条里遺跡 SC112・SC057、⑤石川条里遺跡 SC091・087 が残る。以上の候補については、後に遺跡全体の坪区画のなかで検証したい。

#### 1 区～7a 区の坪境の遺構と石川条里遺跡全体の条里型区画

上記の 10 区～12 区以外では洪水砂層の被覆がなく、出土遺物から平安時代前期とみられる条里型区画と同方位の溝跡として石川条里遺跡 SD095 (1 区)、SD046 (2 区)、SD104 (3b・4a 区)、SD064 (4b 区、4c 区) 等が検出された。平安時代洪水直前に存在したとは断定できないが、これらは約一町前後の間隔で東西に並列し、このうち、SD095 と SD046 は埋土が砂層であった。一方、東西大畦畔は SD095 (1 区) 北端が SK356 で止まる周辺の直交方向に検出された SC029、その約一町南側に位置する畦畔基部 7a 区 SC054 があるが、これが東西大畦畔に該当する可能性がある。これらの遺構と高速道地点の報告書(埋文センター 1997「石川条里遺跡」)に記載された検出大畦畔と周辺地域の大畦畔想定位置を地図上で重ねてみた(第 43 図)。

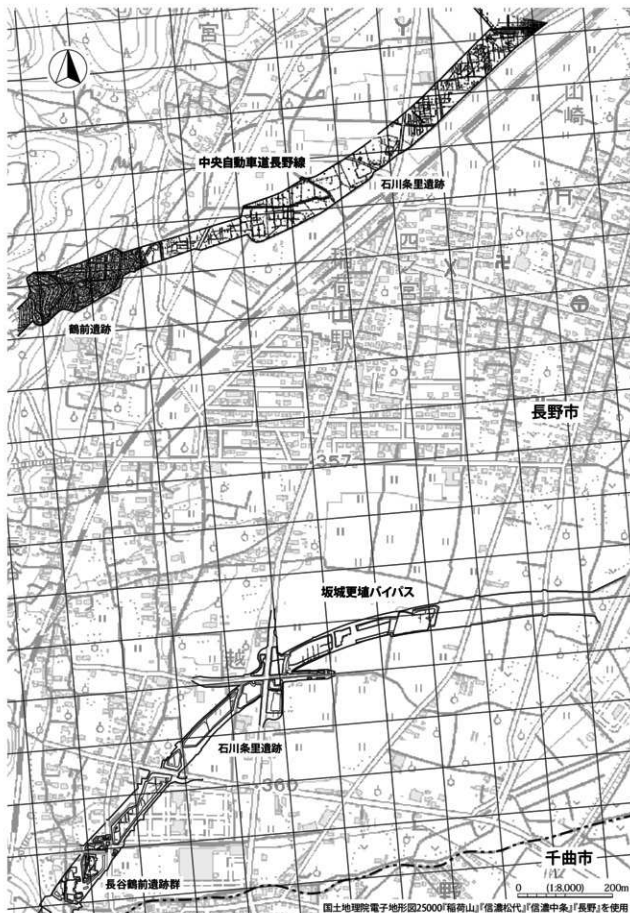
高速道地点の報告書では周辺を含めた条里坪区画想定ラインが掲載されているが、それを 1°前後さらに西へ傾けると今回の調査区の大畦畔と高速道地点の南北大畦畔位置はほぼ同じライン上に載る(第 43 図)。例えば、今回の調査地点 SD104 (3b・4a 区)の北延長先 880m に高速道地点 4 区 SC025、今回の調査地点の SD064 (4b 区、4c 区)の北延長先約 860m に高速道地点 2 区 SC011 が位置する。このことから石川条里遺跡北部から南部まで同一基軸の区画が設定されている可能性が窺える。この大畦畔位置の想定から、石川条里遺跡 10 区～12 区・長谷鶴前遺跡群の南北大畦畔が SC099 と、ややずれるが長谷鶴前遺跡群 SC11・16 に該当し、石川条里遺跡 11 区の SC112・SC057、SC091・087 は半折区画畦畔とできよう。東西大畦畔は、先にみた 1°前後振った方位の高速道地点東西大畦畔から約一町間隔で想定すると、石川条里遺跡 SC029 (1 区)、SC054 (7a 区)、SC058 (11 区)、長谷鶴前遺跡群と石川条里遺跡境の現市道位置に重なる。

以上から、高速道調査で想定された大畦畔方位から約 1°前後西側に振った方位が、今回の調査地点を含む広範囲に及ぶも同じ条里型区画の基軸に相当すると推定したい。北信地域の平安時代前期の条里型地割は区画を方位にあわせる共通点があるが、1km を越える広域を同一規格で均等に区画するには、共通して測量できる方位にあわせることが有効だったのだろう。また、坪区画 6 × 6 個を括る条・里区画の畦畔が含まれている可能性があるが、特に目立つ違いはなく不明である。なお、今回の調査地点の SD095 (1 区)北延長先は高速道地点では微高地にあたるため対応遺構がなく、高速道地点 1 区 SC003 の南延長先は今回の 7b・8 区東端付近にあたるが該当位置に遺構の検出はない。

ちなみに、この条里区画東西坪境の想定ラインでは現行政境界と一致するものがある。石川条里 12a 区南の現市道下に想定される大畦畔の一町南が現千曲市稲荷山・長野市塩崎境界で、北部も長野市内の石川・塩崎地区境界が条里型区画の東西ラインと若干ずれるが近い場所である。現代の行政区画がどこまで遡るかは不明ながら、条里型区画の坪の位置が平安時代以後も地境として意識されていた可能性はある。

#### (3) 条里型水田以前の水田跡

律令「田令」には「田は長さ 30 歩、広さ 12 歩で 1 段、10 段で町とし、段の祖稲は 2 束 2 把とする」とある。これが条里水田だが、金田章弘氏は条里に伴う条里呼称法が墾田永代私税法(743 年)以後に認



第43図 遺跡周辺の条里地割図

められるため、条里地割・条里呼称法のみを「条里プラン」と呼んで、班田取授法に伴わないものとした(金田1985)。今回の調査を含め、石川条里遺跡では律令「田令」に一致する条里型水田が確認されているが、今回の調査における条里型水田出現時期とそれ以前の水田様相を整理する。

長野県北部域での条里型水田跡は、長野市石川条里遺跡(更級郡)、川田条里遺跡(高井郡)、更埴条里・屋代遺跡群(埴科郡)で確認されている。何れも洪水砂層に被覆されたもので、これらの遺跡では条里型地割出現時期と、それ以前の水田についての知見が得られている。

各遺跡の条里型水田より下層の古い水田検出例として川田条里遺跡では7世紀後半～8世紀前半の15～85m間隔の大畦畔区画内を1辺2～4mの小区画水田を並べる古墳時代後期水田に類似した水田跡が捉えられた。屋代遺跡群では更埴・屋代編年1～2期(7世紀後半～8世紀初頭)の3～5面水田跡で狭い水田区画がみつき、8世紀前半までは条里型水田がないとみられる。一方、石川条里遺跡高速道地点では、平安時代前期条里型水田内に異方位の畦畔があり、その一つSC3005の下層で畦畔基部SC3005B、さらに平安時代前期水田畦畔下で溝跡(SD3002)が検出され、SC3005とSD3002は約220m間隔で、ほぼ2町分の間隔で平行する。その時期は条里型水田以前のものともみられ、SD3002出土須恵器が小片で時期の詳細は不明だが、付近のSC3001・3002から奈良時代(8世紀)の須恵器杯Bが出土している。SC3005・SD3002が平安条里型水田内に取り込まれているので、条里施工直前に近い頃の可能性がある。

一方、正方位の条里型水田施工時期は、石川条里遺跡高速道地点では畦畔SC3001内の出土土器や祭祀遺物から9世紀前半～中頃、更埴条里・屋代遺跡群では条里区画に一致する集落内の遺構や、集落遺構と水田遺構の重複から8世紀末～9世紀初頭に施工開始され、9世紀前半に完成と捉えている。後者は、年代根拠とした遺構が集落に近い水田域が集落内で、水田域中央部の所見ではないが、少なくとも9世紀前半頃に条里型水田が存在したとする点は一致する。また、川田条里遺跡ではB区3面の奈良時代水田跡上層にあたる2面水田跡で、一部に半折区画がある水田跡が捉えられている。この2面に伴うSD103出土土器は、須恵器杯中心で黒色土器が少なく、皿・壺や灰軸陶器が含まれないことから平安時代前期の松本平編年5・6期(8世紀末～9世紀前半)頃とみられる。川田条里遺跡B区2面水田跡は石川条里遺跡と同様に、条里型半折区画と異方位の畦畔が重なり、SD103自体も条里ラインに一致しない。こうした条里区画と異方位の畦畔が重なる状況は平安時代前期に認められた可能性がある。この異方位の畦畔は地形に合わせたものとされるが、条里区画と異方位の畦畔・溝跡の時間差や年代の違いは捉えられていない。

上記から、少なくとも8世紀前半に条里型水田はなく、8世紀末～9世紀初頭から9世紀前半の間に広域条里型水田が出現したというのが現時点の理解だろう。その中間の8世紀後半の様相は不明で、石川条里遺跡高速道地点のような地形に合わせた部分的な条里型水田が若干先行して存在した可能性が残ると考えておきたい。

#### 今回の調査で捉えられた条里型水田の施工時期

条里型地割の施工年代は、条里型地割に一致する遺構出土土器の時期、条里型地割と異なる方位の遺構重複での出土土器の比較が材料となる。ここでは松本平編年に基づき考察する。まず、条里型地割に係る遺構出土土器だが、本節1に掲載したようにSD064が6期(9世紀前半)に遡る可能性が捉えられたが、他の遺構出土土器は7期(9世紀中葉～後半)を中心とするとみられた。このことから6・7期が条里型地割の水田耕作の中心時期と捉えられる。

条里型地割と異なる方位の遺構重複の出土土器の比較だが、7a区で条里型地割に一致するSC054と異方位のSD142が近接して検出され、SD142の北延長先とみられるSD066は4b区、4c区で条里型地割坪境にあたるSD064とも重複する。SC054は出土遺物がないが、SD064からは須恵器杯Aが複数出土し、6期(9世紀前半)に遡る可能性が捉えられた。一方、SD142の北側延長先とみられるSD066から3・

4期（8世紀中葉～8世紀後半）に比定される須恵器環A（102）が出土している。また、隣接地区7b・8区の糸里型地割と異なる方位となるSD169からロクロ調整黒色土器（102）が出土し、これも3・4期の可能性がある。これらの重複関係と、糸里型地割の水田関係遺構出土土器から、糸里型地割施工時期は3・4期以後で、6期以前の間と推測される。つまり年代は8世紀後半～9世紀前半の間となる。

糸里型地割施工時期については屋代遺跡群・更殖糸里遺跡では5期（8世紀末～9世紀初頭）に遡る可能性が指摘されているが、今回の調査では明確に捉えられなかった。それは今回の調査で得られた土器が少なく、しかも破片中心で検討材料が僅かしかない限界による。しかも、年代を比較しうる従来の古代土器編年は廃絶時の組み合わせを重視したもので、破片や個別土器では比定しにくいところもある。そのため、糸里型水田の上限年代となる奈良時代水田もその下限時期は3・4期というやや曖昧な年代幅でしか捉えられず、糸里型地割の遺構出土土器に5期のものが含まれていても、5期と6期の土器の差異が僅かで識別することも困難であり、5期に遡る可能性も否定はできていない。

### 石川糸里遺跡の奈良時代水田跡

今回の調査では平安時代の糸里型地割出現以前とみられる奈良時代頃の遺構として1区、4b区、4c区、7a区、7b・8区、9区でV層上面検出の溝跡や、長谷鶴前遺跡群1区の非糸里型区画Aの耕作放棄地に残存した古い水田跡がある。長谷鶴前遺跡群1区の非糸里型区画Aの水田跡では軸方向がN-38°-EのSC17、N-18°-EのSC13・14、17の大畦畔が検出され、異なる方位の大畦畔が近接することから大畦畔西側を水田とするSC17→13・14への2段階の変遷が推測できる。その出土土器は小片のみで古墳時代前期～平安時代前期の間の時期としかわかっていない。

3a区～4b区、7a区、7b・8区、9区の奈良時代の溝跡だが、SD105（3b・4a区）、SD066（4b区）、SD142（7a区）、SD174（7b・8区）等は緩やかに湾曲し、地形に合わせたものとみられる。その曲線的なSD174を切って直線的な溝跡SD175・176、それに平行するSD171、173・177、174、179が検出された。SD171・173・174・179のすべてが同時存在する確証はないが、位置関係から関連する溝跡とみられる。これらの溝の走行方位は平安時代前期の糸里と異なり、畦畔ともみられる酸化鉄集積SC117・118がSD173-177と直交して方形の水田区画を形づくると見受けられる。平行する溝跡の間隔はSD171と173・177間が24m前後、SD173・177からSD175・176中央までが40m前後、175・176中央からSD179間が約18mで、厳密には均等ではないが、これらの平行溝跡から計画的な水田区画が設定されたと思受けられる。また、SD142延長先とみられるSD066は3b・4a区、4b区でSD071、106、107と共に28×58mの長方形の区画を形づく。これもSD171、173・177、174、179等と平行・直交しており、関連する可能性がある。

類似した奈良時代の区画例としては、川田糸里遺跡の7世紀後半～8世紀前半のA区3面、B区3面水田跡では大畦畔区画15～80m前後のなかに小区画水田を配置する作業過程で15～35m間隔の中区画と呼称される畦畔の設定が想定されている。本遺跡のSD171・173・174・179の間隔はこの中区画の間隔にも近いとも見えるが、川田糸里遺跡では中区画は小区画水田を配置する作業過程の畦以上の意味付けは捉えられていない。類似した小区画の古墳時代後期水田でも中区画の存在は指摘されており、奈良時代に特有の区画とも言い切れない。本遺跡の上記の平行する溝跡の区画は計画的に設定されているとは捉えられるが、間隔の数値は平安時代の糸里型地割の半折区画に近いが、規格が同じとは断定できない。

本遺跡の奈良時代遺構の年代だが、調査区西側では2期（7世紀末～8世紀初頭）頃の土器も含まれ、この時期から耕作されていたとみられるが、溝跡ではSD066から須恵器環（102）、SD169からロクロ調整黒色土器環（110）が出土し、3・4期（8世紀中葉～後半）と捉えられる。

以上の検討から、今回の調査では7b・8区の西側調査区を中心に3・4期頃の水田遺構が認められた。その水田域は長谷鶴前遺跡群1区の条里型地割内の非耕作地に残された畦畔を含めると、長谷鶴前遺跡群から水路とみられるSD169・170に接続するSD172・142(066)周辺の3b・4a区周辺までは水田域とみられる。東端の1区の溝跡は用水とも断定できず、東端の1区、2区まで水田域となるかは不明である。これらの溝跡は石川条里遺跡高速道地点の条里型区画内に取り込まれている条里型地割以前の畦畔・溝跡のN-45°-Wとも方位が異なり、高速道地点とは離れた別の水田とみられる。奈良時代では条里のような広域水田はなく、沢水等の水源に頼る狭い水田域が分散していたと思われる。また、長谷鶴前遺跡群のSC13・14、17(1区)の重複の在り方は畦畔西側(山手側)を水田域とし、畦畔東側は耕作しなかったため古い大畦畔が残ったともみられ、奈良時代でも灌水範囲全面を耕作していなかった可能性もある。

今回の調査では詳細を明らかにしえなかったが、8世紀後半の水田関連遺構が確認できたと思われ、当該期の水田遺構は長野盆地内ではあまり見つかっていないため、貴重な資料を加えられたと思われる。

#### 4 1区の中世前期居住遺構の変遷

1区で検出された中世前期の居住遺構は自然堤防側の塩崎遺跡群3区までの広がりは不明であるが、2区まで分布せず1区内に限定される。掘立柱建物跡の認定が不十分で居住遺構の詳細は捉えきれていないが、井戸跡や溝跡の重複関係から数段階の変遷が推測された。ここでは溝跡の重複関係を整理し、居住遺構の変遷を探ってみたい。なお、中世後期の12区居館跡は長谷鶴前遺跡群の居館跡と共に変遷に触れたのでそちらを参照された。

1区の中世溝跡はいずれも区画溝とみられ、東西に調査区を縦断するSD009に関連する溝跡群と、SD009南側に10m離れて並行するSD080・088とその東延長先SD074の溝跡群に分けられる。SD009関連溝跡には、それに接続するコ字形の溝跡SD001(・002)とSD010がある。SD088は調査時に近世のSD023を切る近世以後の溝跡とされたが、SD023の位置は現代の畦に継承され、SD080・088・074の位置は継承されていないため、SD023が現代に続く後出する溝跡と考えられる。また、SD080はST002の東辺に一致しST002に関連する遺構とみられることから、SD088とSD023の重複関係は見誤りで、SD088は中世と考えた。SD088・074を中世とすれば、ST002がSD009を切る関係からSD009・001・010の区画段階からSD088・080・074区画への段階へと変遷すると推測できる。ここではSD009を中心とする区画段階をⅠ段階、SD008・080・074区画をⅡ段階と仮定して、その様相を概観したい。

**Ⅰ段階** [第44回]: この段階はSD009関連溝跡群の時期である。SD010をSD001が切ることから、Ⅰa段階(SD009bとSD010区画)とⅠb段階(SD009aとSD001区画)の新旧2時期に細分しよう。

SD001に付属する枝溝SD002は、SD001以前の可能性があり、Ⅰb段階内での改変も想定しよう。

SD010はSD001北辺と重なる付近で鎌手に折れ、SD001北辺と同じ土地境を意識しているとみられる。このことから、Ⅰ段階ではSD001北辺周辺の土地境を北辺、SD009を南辺とする南北24m×東西80mほどの東西に長い区画が中央にあり、その北と南側を別の区画とする北・中央・南の3区画が捉えられる。さらにⅠa段階ではSD010により北・中央区画が東西に分割されていたとみられる。

Ⅰa段階の溝跡以外の遺構は、SK001・004の北側に分布する柱穴跡の一部にはⅠb期のSD001に切られるものがあるので、中央東側に掘立柱建物跡が存在した可能性がある。また、SD010により分割される北区画東側にはST004、中央区画東側にはST005が位置し、南区画東側にも柱穴跡が分布する。この段階にこれらの掘立柱建物跡が伴う明確な根拠はないが、北・中央・南区画東側の各区画に類似規模の掘立



柱建物跡が位置するようにみえる。また、SD001 が切る SK001・004 は I 段階ではあるが、SD002 と併存する Ib 段階でもありうるので Ia 段階に限定できない。

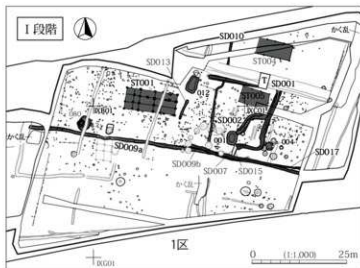
Ib 段階は、中央区画東側に SD001 と SD009a により 1 辺 8 × 10m の区画が出現し、類似形態の SK001 と SK012 が区画南東端と北西端にある。これらは関連遺構とみられる。その区画西側にある唯一の大型掘立柱建物跡 ST001 はその区画に重ならず隣接し、唯一の石組井戸跡 SK080 と共に、この段階の遺構の可能性がある。ST004・005 等の掘立柱建物跡が Ia 段階とすれば、Ia 段階は東側に類似規模の掘立柱建物跡が並列していたが、Ib 段階に中央区画西側裏手に SD001 (・002)・009a が囲む空間と大型掘立柱建物跡 ST001 等からなる特殊な空間が出現していると考えられる。

**II 段階** [第45図]: SD080・088・074 の段階で、SD009 区画が南側に移設されたものと捉えられる。本段階に伴う遺構は SD080 北側延長先にある ST002、後述する須恵質挿鉢の C 形態から SK155、177 を含む柱穴跡、カワラケの形態から SK094 が該当する可能性がある。また、SD009 を切る SK002 を含む SK023・

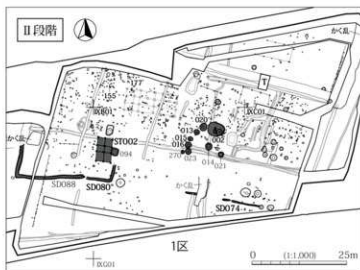
016・015・013・014・020・270・021 の井戸跡が該当する可能性がある。これらの井戸跡は I 段階の SD001 区画内にあって同時存在しないとみられ、Ib 段階以後の遺構とできる。II 段階は遺構の分布が西側に寄ると共に、Ia 段階の中央区画が南側へ拡大し、北・中央・南区画の 3 区画が崩れたとみられる。遺構は Ib 段階と捉えた ST001 を中心とする中央西側の空間が、拡大したとみられる。

#### 各段階の年代

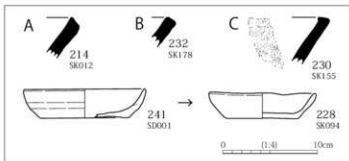
I 区の居住遺構からはロクロカワラケと在産須恵質挿鉢が多く出土していることから、これをもとに年代を考えてみたい。在産須恵質挿鉢の口縁形態には第 46 図の種類が認められた。各形態の前後関係が捉えられた出土状況はないが、卸目を施し須恵質の還元炎焼成である点から珠洲焼がモデルと考えられ、類似時期の珠洲Ⅳ期挿鉢の変遷から、B から C への変遷が推測される。形態的特徴から C から A への変遷は想定しにくいので、A: 内端部をつまみ上げる口縁形態→B: 方形の口縁形態→C: 口唇部を水平とする形態変化と推測する。石川条里遺跡高速道地点では C 形態に瓦質のものがあるので、焼成不良品が多くなる傾向もみられる。A 形態は SK012・062、SD009、B 形態は SK001・003・178、SD001・009、C 形態



第44図 1区居住遺構の変遷（I段階）



第45図 1区居住遺構の変遷（II段階）



第46図 須恵質描鉢とカワラケの形態

ワラケが内湾形態から内湾が崩れる段階への型式変化とするならばⅠ段階とⅡ段階にある程度の時間差が考えられる。

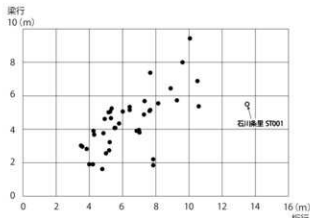
実年代を考えると、僅かな手がかりながら在地産須恵質描鉢が模倣した可能性がある珠洲焼と同じ変化とすれば、吉岡康暢の編年(吉岡1994)では各段階の口縁形態のバリエーションが含まれるものの、B形態は方形口縁中心のⅣ<sub>1</sub>(~Ⅳ<sub>2</sub>)期(1280~1310(~1350)年)、C形態は水平口縁中心のⅣ<sub>2</sub>(~Ⅳ<sub>3</sub>)期(1320~1350(~1370)年)に当てられよう。つまり、Ⅰ段階は13世紀末~14世紀前半、Ⅱ期が14世紀中葉を前後する時期と推測される。描鉢の先行A形態はさらに遡る時期と推測され、Ⅰa段階は13世紀後半を含むかもしれない。ただし、Ⅰb期SK012から出土した古瀬戸平碗は後期様式Ⅰ段階(1360~)の所産の可能性があり、これを重視すればⅠb期が14世紀後半に下る可能性がある。その場合、Ⅰa期が13世紀後半~14世紀前半、Ⅰb期が14世紀中頃~後半、Ⅱ期が14世紀後半以後から内耳土器の出現以前までの間となる。しかしながら古瀬戸平碗は破片1点のみで混入の可能性も否定できず、小片ゆえに中期様式に遡る可能性もあって型式比定に課題も残る。そのため現段階では出土破片数が多い須恵質描鉢の推定年代を基準としておく。

### 石組井戸について

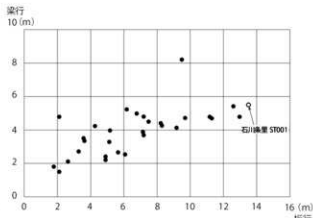
1区では石組井戸跡SK080が1基確認された。県内の石組井戸跡は近世や中世後期に、井戸上部に僅かに石組を伴う例が知られており、本遺跡例のような石組井戸跡が中世前期にあまりないことから当初は近世とも考えた。しかし、出土遺物には近世陶磁器が認められず、周辺では隣接地区の千曲市東條遺跡で事例があることから中世とした。東條遺跡では中世前期(13世紀後半~14世紀)と、(15~16世紀の中世後期)と2時期がある。中世前期とされる井戸跡はSK844、1123で、検出面からの深さが約90、160cmと浅くSK1123の平面は方形である。これ以外の多くは内耳鍋や石鉢、石臼等を出土し中世後期と報告される。中世後期例の平面形は1m強の円形を呈し、深さは検出面から220~280cmを測り、中世前期より明らかに深い。これらのなかには出土木質遺物の放射性炭素年代測定で近世年代を示すものがあり、すべてが中世に帰属するわけではない可能性もあるが、中世に石組井戸跡が存在しないとは言いきれない。今回の石組井戸跡は下部を板で囲み、上部1m前後のみ石積とするもので、その形態から中世の可能性は高いとみられる。また、東條遺跡では石組井戸が掘立建物跡に付随して1基ずつ存在すると捉えられており、今回の石組井戸跡もST001に付随するものと考えた。石組井戸を考える場合、関連する石積技術の問題として長野県における中世石積の出現時期に関する問題がある。松本市殿村遺跡では中世石積の出現は14世紀頃とみられ、本遺跡例も同じく14世紀と考える。

はSK002・155から出土し、SK177出土品も該当する可能性がある。須恵質描鉢を総合的にみると、新しいC形態はⅡ段階遺構から出土しⅡ段階の時期のもので、A・B形態はⅡ段階遺構への混入もあるが、Ⅰ段階遺構から出土しⅠ段階の時期といえよう。

また、カワラケはSD001から内湾形態(241)が出土し、Ⅱ段階のSK094から内湾しない形態(228)が出土している。カ



第47図 中世前期の掘立柱建物跡規模（松本市内）



第48図 中世後期の掘立柱建物跡規模（松本市内）

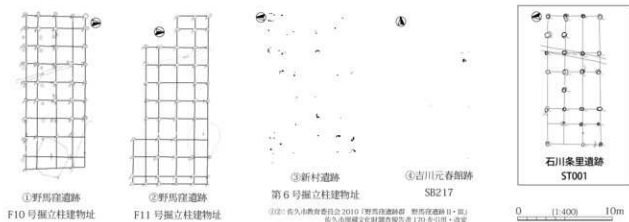
### 大型掘立柱建物跡について

今回の調査区内で大型掘立柱建物跡 ST001 が検出された。ST001 は長方形で梁行3間（約5.6m）×桁行7間（約13.4m）桁行17.5m、梁行5.5m。面積約75㎡と大規模で、内部は所々柱穴跡が欠落する。服部による南関東の掘立柱建物跡の建物規模（服部2001）と比較すると、中世前期・後期を通してかなり規模が大きくなるクラスに入る。一方、近世農家とすれば規模的に大きな部類ではあるが、特別突出した大型建物ではない（箱崎2001）。規模から近世農家屋の可能性も考えたが、近世遺物の出土がないこと、上面が近世 SD023 と関連する区画溝 SD019 に切られることから帰属する時代を中世と考えた。

1区では他に ST005 梁行2間（4.3m）×桁行3間（7.3m）、ST004 梁行1間（4.4m）×桁行4間（約9.3m）があるが、ST001 は本遺跡内でも突出した大きさで内部に柱を持ち、他とは明らかに異なる性格の建物構造と想定しよう。

県内では、松本平の総論編で中央自動車道長野線にかかる掘立柱建物跡の規模の一覧を作成しており（野村1990）、それをグラフ化して比較すると、中世前期では突出して大型であるが、中世後期では大型ながら類似規模の建物跡は認められる（第47図・第48図）。

また、野村の報告以後の県内で見つかった中世前期の大型掘立柱建物跡例では、中世前期の居館跡とされる佐久市野馬窪Ⅱ・Ⅲ遺跡の大型掘立柱建物跡 F10（第49図-①）は梁行4間（7.6m）×桁行9間（約18.8m）、同 F11（第49図-②）は梁行4間（約7.7m）×桁行10間（約20.6m）である。両端の柱間距離が短く庇が付く可能性があり、内部には所々柱穴がない空間を含む。また、13世紀後半～14世紀の松本市新村遺跡第6号掘立柱建物跡（第49図-③）は、総柱で梁行2間×桁行5間の建物跡に四面庇—北側



第49図 中世の大型掘立柱建物跡

孫庇をつけ、それらを含めると梁行5間(11.2m)×桁行7間(14.5m)の規模である。野馬窪Ⅱ・Ⅲ遺跡例と新村遺跡例では建物形態が違い、野馬窪遺跡例は建替えがあり、新村遺跡は建替えがない。

これらの例と比較すると、本遺跡例は規模的には他例より小型で、形態は異なるが規模は新村遺跡に近く、建替えがみられない点も類似する。建物規模は居住者の性格を表すとすれば、野馬窪遺跡よりも下位だが、新村遺跡例に近い居住者像を想定できよう、庇の有無や内部に柱穴跡がない空間を含む建物形態の違いをどのように捉えられるかは明らかにしえなかった。

県外例として類似した柱配置の建物跡として16世紀の広島県吉川元春館跡建物跡SB217(第49図-④)の存在を知った。年代も地域も全く異なり、単純に比較できるものではないが、SB217は梁行3間(5.78m)×桁行8間(15.22m)で内部柱が規則的にない空間がある。柱配置は本遺跡ST001に似ている。注目されるのは溝で囲まれた9.4×7.8mの斜面地を削って平場とする遺構SX211がSB217に近接して位置する点で、SX211は鉄滓等が出土し鍛冶を行った可能性が指摘されている。SB217とSX211の関係は同時か、SB217より先行するとされる。SB217とSX211が同時存在するなら、関連する施設とも考えられ、本遺跡のST01もSD01で囲まれた空間とセットで、通常の居住の家屋ではなく生産と関連した施設の可能性も出てくる。現時点では検証する材料が不足しており、あくまでも推測にとどまる。

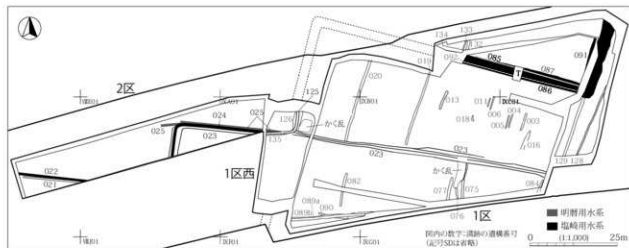
## 5 近世遺構の変遷

近世遺構は1区～7a区で用水跡とみられる多数の溝跡、3b・4a区で墓跡、7b・8区～11区で点在する土坑や溝跡が検出された。これらの遺構から調査区内が基本的に水田域として利用され、一時的に墓が造られる乾燥期があったと推測される。

遺跡の所在する長野市篠ノ井塩崎地区は、近世に干害が頻発したため水源確保が課題とされ、千曲川取水用水として1656(明暦2)年に明暦用水、1826(文政9)年に塩崎用水が開鑿されている。また、1680(延宝8)年には、遺跡背後の篠山山中の猪平に溜池(猪平池)が構築されている。これ以外に小規模な用水開鑿もあったようだが、現代まで塩崎用水と猪平池は主要水源として利用されている。明暦用水は1654(承応3)年の大干害により構築されたが、取水口は1723(享保8)年の洪水で壊され放棄されたとされる。近世末に取水口を上流に移動して灌水範囲を広げて新たに開鑿されたのが塩崎用水である(塩崎村史刊行会1071『塩崎村史』)。各用水の灌水範囲だが、明暦用水は7a区と7b・8区間の用水の場所にあったと伝えられるが、その東側の低い個が灌水範囲とみられ、塩崎用水は地形から12c区以東の1区～11区が灌水範囲と推測される。12c区のSD188・189は塩崎用水に合致するものと考えられる。また、この塩崎用水から分岐して明暦用水を経由して1区西辺から北辺をめぐる幹線枝用水となる溝跡が、SD085・086にあたるだろう。各用水の灌水推定範囲から長谷鶴前遺跡群～12c区以西または11区が猪平池系の用水、7b・8区～11区が猪平池または塩崎用水、1区～7b・8区が明暦用水または塩崎用水を主要水源と推測され、1区～7a区で数多く検出された溝跡は明暦用水と塩崎用水の2時期に分けられる可能性がある。

明暦水系の灌水範囲では、明暦用水取水口が破壊された1723(享保8)年から塩崎用水の開鑿される1826(文政9)年までは、用水機能が低下した状態にあったとみられる。塩崎村誌によると、塩崎では宝暦年間(1751～1764)に水田経営不能で捨て地願い提出等もあり、最も取米高が減っている。そのなかで人口は増加の一途をたどり、困窮して騒動も起こったとされる。

以下には文献に残る用水の様相を踏まえ、調査区内で検出された溝跡の変遷を整理する。



第50図 近世用水模式図（1区、2区）

### 1区、2区の溝跡の変遷 [第50図]

1区、2区の近世溝跡は中世SD009と同方位か直交方位で、土地区画は平安時代前期の条里型区画を継承せずに、中世段階の区画を継承している。1区、2区の溝跡は1区北西部の重複関係から次のような変遷が想定される。

1区西辺から1区北西部で東へ折れる現用水に重なる検出されたSD085・086は現用水に継承される用水跡とみられ、その溝跡が1区北西部で西側2区から流れて北に折れるSD125（→024）を切っている。SD125は、同じく北へ折れ1区を縦断する溝跡SD023を切る。

上記からSD025・1区SD023→125（→024）→085・086→現用水の変遷が考えられるが、なおSD025はSD125に切られるが、SD023との前後関係は不明である。概要をまとめると1区を縦断するSD023が古段階、2区から東流したSD023が1区北西部で鍵手に北へ折れるSD125（→024）が中段階、2区を経由せず1区西辺に沿って北流する現用水に重なるSD085・086が新段階の、大きく3段階の変遷が追える。

2区ではSD021・022とSD125（2区023）・024が2本ずつ対応し、SD021-SD125（2区SD023）、SD022-024がそれぞれ同一溝跡とみられる。それぞれ1区の中段階以後とみられる。

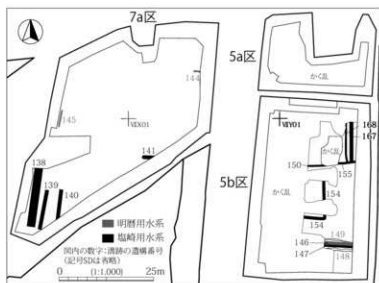
出土焼物様相としては、SD023は埋土下層から17世紀の瀬戸美濃陶器挿鉢（289）、唐津砂目積皿（287）等が出土している。また、SD024は伊万里V期の紅皿、瀬戸美濃磁器碗（294・295）、産地不明の土瓶や植木鉢等の近代製品まで出土し、SD024以後の溝跡は塩崎用水に関連するとみられる。SD025は古代の焼物のみで時期は不明である。SD023は用水跡と断定できないため、1区、2区で用水跡が確認できるのは塩崎用水開鑿以後といえる。2区から流れるSD025は、SD125より古いものの、SD023の接続部分がSD125に切られていてSD023との関係が不明で、出土遺物もなく年代的な位置づけがわからなかった。

### 3a区～4b区の溝跡の変遷 [第51図]

3a区以西では近世溝跡も平安時代の条里型地割と同方位で分布する。3a区では隣接して重複せず南北方位に並走するSD034～036・042が検出され、SD034から近世末の高台置付のみ露胎の全面御深井軸丸碗（299）が出土し、SD034は近世末の塩崎用水以後のものとみられる。SD036は中世大窯丸碗、内耳鍋片等のみで近世焼物は出土せず、隣接3b・4a区のSD061も内耳鍋片等しか出土していないため、隣接するSD034より古い明暦用水系用水の可能性があり、少なくとも2段階の変遷が捉えられる。その両脇の浅く細いSD042、047は個別水田に伴う溝跡とみられるが、近世遺物出土がなく時期は不明である。



から派生する南北方向の溝跡が接続する。重複関係はSD146 → 147で、147が最も新しく、149は重複関係が不明である。SD155がSD167・168を切るとされたが、接続関係からみると関連する溝跡とみられる。遺物はSD167から図示したもの以外に全面施釉御深井釉の丸碗、SD147から肥前V期とみられる伊万里碗、SD148から伊万里碗(324)、SD146から唐津碗、兵器手筒が出土し、SD146は明暦用水の可能性が高い。SD150・167・168、SD147は近世末に比定され塩崎用水系の用水跡とみられる。



第52図 近世用水模式図(5区、7a区)

5b区では、明暦用水系用水の可能性が高いのはSD146のみで、塩崎用水閉鑿以後に用水が多く造られ、それぞれ改修や掘り直しされた可能性がある。

7a区は7b・8区との間に旧明暦用水跡とされる用水があり、これと並行してSD138～140、145が検出された。直交する東西のSD141は断片的な残存ながら、5b区SD150(・155)の延長線上に位置し、同一溝跡とみられる。遺物はSD138から中世カワラケが出土したのみで、時期は詳細不明であるが、SD141は塩崎用水系用水の可能性があり、SD138～140がその延長線上に位置する可能性があるため、SD138～140にも塩崎用水系用水が含まれるとみられる。

#### 7b・8区以西の溝跡

旧明暦用水跡の位置とされる7a区、7b・8区以西で近世溝跡と断定できるものは12c区の塩崎用水跡のSD188～190、SC111西脇の溝状落ち込みしかない。11区1面で南北方向のSD156～158、162～165とやや離れた同方位のSD151が検出されたが、平安時代以前の出土遺物もなく近世と断定できなかった。11区のSD162～165は隣接して並走し北から南へ傾斜する。断面形から耕作痕とされ、平安時代の条里方向とは異なる方位で平安時代以後のものではある。SD151も同方位で類似時期の可能性が高い。これ以外のSD152・153と161・166は平安時代の条里型区画と同方位で、あまり時間が経過していない時期のものともみられる。SD159は部分的に条里と同方位の部分を含み、これと同じながら複数溝跡が重複した可能性がある。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、SD151は南側が低く、北から南へ水が流れた可能性がある。塩崎用水とは逆なので用水跡とすれば猪平池、あるいは西側の沢水を引水した用水から分岐したものとみられる。

12c区ではSD188・189・190はコンクリート護岸の現塩崎用水に変わる前の溝跡とみられる。これ以外に近世道路跡SC111脇の水田端部に溝状の落ち込みが検出されたが、これは北から南側へ低く傾斜し、塩崎用水と逆方向なので猪平池の用水を利用したものとみられる。

以上から、近世では7a区以東に近世用水が数多く検出されたが、その範囲は明暦用水の故地より東側の低地帯にあたるので、千曲川系用水と関連する溝跡と捉えられる。それぞれ明暦用水系と塩崎用水系に分けられる可能性があり、3b・4a区では各段階の溝跡が若干ずれて位置するので、明暦用水が途絶し、

塩崎用水開鑿に併せて再掘削されたものと考えられる。

明暦用水系用水は3a区のSD036までが比較的明瞭であるが、2区以東については詳細を明らかにできず、2区のSD025がその可能性を残すものの、1区では明確なものがない。一方SD023等の区画溝跡が検出されていることから、明暦用水は1区まで灌水せず塩崎用水系用水跡によって、1区まで灌水されたものと理解している。塩崎用水通水以後も数度の用水跡改変が認められる。

3b・4a区の中段階とした溝跡群の位置づけであるが、出土陶磁器からすると塩崎用水以前で、明暦系用水かそれ以後とみられる。方向や形態は明暦用水系と思われる古段階のSD056・058b・059・061・065(026)とは異なり、より北側へ延長していると共に、幅が狭く浅い特徴がある。このことから明暦用水系の古段階の用水跡を直接継承せず、明暦用水廃絶以後に新たに猪平池等の水源か、別の沢水を引水した用水跡としたい。なお結果的にはこの用水もSM005等が溝跡内に構築される等の状況をみる。継続維持できずに最終的に放棄されたとみられる。また、墓跡がこの中段階の区画に沿って位置するとみられることから、この時期には一帯が乾燥していたともみられる。



## 第2節 長谷鶴前遺跡群

### 1 居館跡の変遷

#### (1) 遺構の変遷

長谷鶴前遺跡群1区、2区では、全く予想しなかった中世の居館跡や道路跡が発見された。また、隣接する石川条里遺跡12c区でも居館堀跡が検出された。いずれも居館跡内部の様相は把握できなかったが、周囲を含めて造成を伴いながら造り替えられていることが判明した。そこで、中世居館跡の変遷をまとめる。

#### 長谷鶴前遺跡群の変遷

長谷鶴前遺跡群では平安時代前期には山からの崩落土も僅かであったようで、山際の崖錐地形際まで平坦な地形に水田が広がっている。それは中世前期まで継続したとみられるが、中世後期になると山からの供給土が増加してくるなかで、盛土整地を行って屋敷地や居館、道路が造成されていく。その過程をⅠ～Ⅲの3つの段階に整理してみる。最終段階のⅢ段階はさらにA・Bの2期に細分できる。

**I段階** [第53図上段左]：中世後期遺構は整地土層を挟んだ第4調査面と第3調査面に分かれるが、盛土整地以前の第4調査面遺構をI段階と捉える。第4調査面は大部分が水田で、山際に調査区内を横断する道路跡SC20、その脇に屋敷地とみられる平坦地一か所が構築されている。平坦地では建物遺構は確認されなかったが、東側道側はSD59で画し、南は水田域から一段高くSH06を配して溝による区画はない。この4面は南西山側からの粗粒山砂を主体とする土砂堆積により、南西部山際付近の道路跡・水田域が埋没していく。

**II段階** [第53図上段右]：第4調査面が土砂で堆積以後に1区・2区の山手側は水田を埋めて盛土整地され、その上面が第3調査面にあたる。この調査面では居館堀跡SD40が検出されている。また、その埋土上層では道路跡に伴う側溝とみられる溝跡が重なって検出された。このことから第3調査面検出遺構はSD40の段階と、廃絶以後の2時期に区分でき、前者をII段階、廃絶以後をIII段階とする。この第3調査面盛土整地は調査2区南部からSD40南岸まで分布し、2区南部で検出されたSC01は整地土層上面が盛り上がり、SD40同様に盛土整地時に2区南部の道路跡SC01も構築されたと捉えられる。

II段階にあたるSD40は幅約8mのL字形の堀跡で、北端は調査区外に延びて規模は不明ながら、その南辺が隣接する現個人宅敷南地境に一致することから、その宅地範囲を居館跡範囲とすると、1辺約50mの方形居館を囲む堀跡と推測される。SC01はこの居館へ入る道路跡とみられるが、SD40南辺に堀が途切れる土橋には直接繋がらずにSD40南東隅へ続いていて、居館跡へ入るにはSC01から堀沿いに折れて入ったと推測される。SC01には2区南部では西側側溝SD25a・25b・30a・30b、東側側溝SD32a(50)・32b(51)・34が伴い、さらにSD25・30中間で、SD34北端等の途切れたところに直交する、傾斜方向の排水用とみられる溝跡SD29・38a・38b、41a・41bが位置する。

SD25・30・32・38・41は掘り直しが確認され、新段階をa、旧段階をbと捉えた。また、分割調査したため同一溝跡に別番号を付したものが、SD50はSD32a、SD51はSD32bの同一溝跡とみられる。この側溝は次のIII段階のものも含む可能性があるため、少し検討しておきたい。溝跡は途切れる地点と直

第42表 2区南部溝跡の重複関係

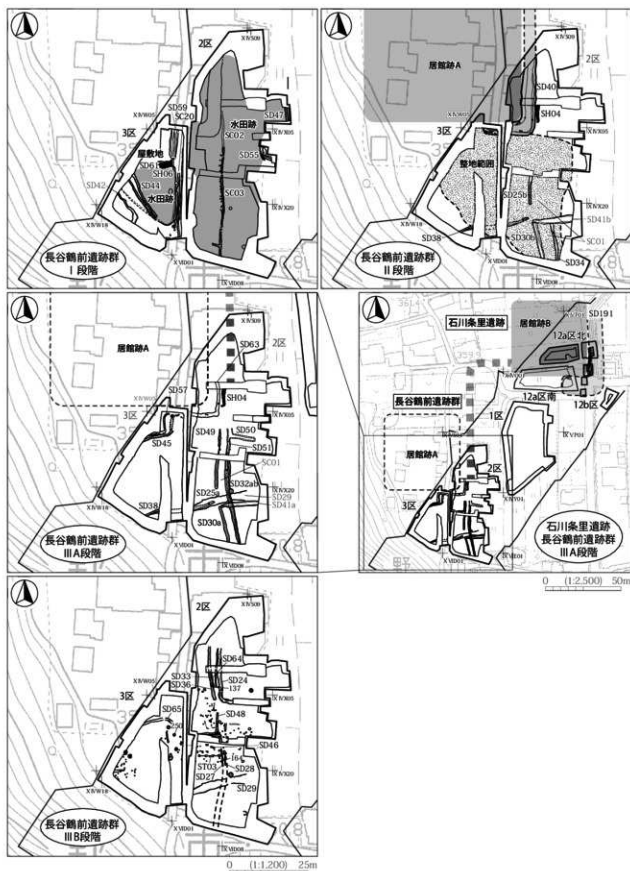
遺跡の位置 段階		道路跡 SC01 西側			道路跡 SC01 東側		
		排水溝	側溝 (南)	側溝 (北)	側溝 (西)	側溝 (東)	排水溝
Ⅱ	ア	SD38	SD30b	SD25b		(SD34)	SD41b
Ⅲ A	イ	↓	SD30a	SD25a	SD32b = SD51		
	ウ	↓	↓	↓	SD32a = SD50		
	エ	(SD29)	↓	↓	?		SD41a

交溝跡が重なる地点が合致したり、先端が接する場合は、同時存在と想定し、重複関係の調査所見から2区南部の溝跡の切り合い関係を整理すると第42表の通りとなる。

第42表の変遷では西側側溝は長期に継続維持され、東側側溝が造り替えられていく様相がみえてくる。このなかでSD41に係る重複関係は、調査所見でSD41b→SD32b→SD32a→SD41aとされた。溝跡が一旦廃絶して、また同所に掘り直されることがあるのか認定に躊躇されるが、調査所見のままだとア～エの4段階に細分できる。ただし、SD41aとSD32aの重複関係が見誤りで逆であった場合は、エの段階はなくなる。また、SD30a・30bの間にSC01上面に再度盛土する改修が行われ、SD34も上面に整地土が盛られているので、この時に廃絶した可能性がある。そうであるならば、アとイ～エ段階の間には、道路を盛り直しながらSD34を廃絶してSD32を東側側溝として北側へ延長した大きな画期があるとみられる。ウ段階は側溝の掘り直しで推移し、最後にエ段階でSD41が再度掘り直されたことになる。このなかで古いア段階は居館跡時代のⅡ段階にあたるが、イ～エ段階は、後述する出土内耳鍋の形態比較からはⅢ段階に含まれる可能性がある。なお、SH04はSD40東岸にあり、当期に存在した可能性がある。

**Ⅲ段階** 調査3面検出遺構のなかで居館跡跡SD40廃絶以後の段階と捉える。この段階は更に遺構重複から数段階に分けられるが、遺跡全体の改築なのか、個別遺構の改修なのか判然としないところもある。また、2区北部は道路の改修が頻繁に行われている。2区北部の遺構を中心に検討すると、SD40埋土上面では、SC01側溝の延長先とみられるSD24・33・36・63・64等の溝跡が検出された。SD40廃絶以後に、道路が北側へ延長されたと捉えられる。側溝は類似場所に何条も重複し、絶えず改修を繰り返し、それが顕著に行われた2区北部では、Ⅱ段階のSC01を継承し、そのまま北へ直線的に延長された段階のAと、道路が当初のSC01の位置からずれて西側のSD40埋土中央側へ移るB段階に分けられる。

**Ⅲ A段階** [第53國中段左]: SD40埋土上層検出のSD63は、SD24・33・36等のすべての溝跡に切られ、SD40廃絶以後の溝跡で最も古い遺構と捉えられる。SD63の西延長先付近にあるSD45・57とは接続しないが、位置関係から関連する可能性は高い。ただ、溝跡幅はSD63が広く掘り直された可能性もある。このSD63東岸にある帯状集石遺構SH04はSD24に切られ、ⅢB段階以前ではあるが、SD40に伴うものか、SD63に伴う道路跡の基礎部分の残存かは判断できなかった。当該期の2区南部の様相は、後述するようにSD32から内湾形内耳鍋が出土し、Ⅱ段階SD40からはその先行型式の外反形態の内耳鍋のみ出土したことから、2区南部のイ～エ段階は当該期の可能性がある。SC01の直線的な北側延長先にSD63・SH04が位置する関係からもSC01が当該期まで維持されたとみられる。ただし、2区北部と南部の対応関係は把握しきれていない。この段階はSD40廃絶以後に2区南部ではSC01が同じ場所で維持さ



第53図 居館跡の変遷図

れ、2区北部ではSC01がそのまま直線的に延長された段階と捉える。

**Ⅲ B段階** [第53図下段]：上記SD45・57を切るSD65は、南東延長先にあるSD48との位置関係から連続した溝跡とみられ、SD45・57-63同様に西側山地から低地側へ延びることから、造り替えの関係とみられる。ただし、SD65-48は大きく南へ屈折しており、道路跡がSD40埋土中央の西側への移動に伴って、SD48による新しい区画が造られた可能性がある。なお、SD49は第3調査面の下層でSD48と共に追加調査したものの、SD25aの延長先にあたり、Ⅲ A段階の可能性はある。ただ、SD48・29の前後関係は捉え切れていない。2区北側ではその道路側溝とみられるSD24・33・36が類似場所に重なり、道路は改修を繰り返しながら維持されたとみられるが、いずれも浅く小規模である。この時期の2区南部の様相は不明だが、調査区南壁断面では側溝を伴わない道路跡が3面SC01西側にIV層上面まで継続して重なって認められ、道路跡が全体的に西側へ移転したことが知られる。この道路跡はやがて現市道下部分へさらに移転したとみられる。2区中央では浅い溝跡SD27・28が検出されているが、これも当該期の側溝の残骸とみられる。なお、SD63と64は直接重複しないが、SD63の上層にあるSD33・36とSD64がほぼ重複位置にあってSD64→SD36→SD33への変遷が想定される。SD36がSD63を切る位置関係にあることからすれば、SD64はSD63より後出すると推測される。

また、3面の2区中央西寄りの地点でST03を含む柱穴跡が集中的に検出された。その一部は類似場所の4面でも検出されたが、4面では浅い僅かな残存で、本来は3面以上の遺構と思われる。このなかで、ST03はSC01を切り、少なくともSC01廃絶以後のⅢ B段階以後とみられる。これらの居住遺構の時期だが、柱穴跡分布西限は現市道下部分付近で、道路が現市道部分へ移転した時期とも思われるが、2区中央北部ではSD48の区画範囲内に柱穴跡分布が収まるように見え、その南のST03を含む柱穴跡の分布も溝跡SD46・27・28を東限とする範囲で一旦収まるようにも見える。このSD46・27・28が屋敷地と道路を画する溝跡とみられるならば、道路SC01に後続する道路跡が存在した段階とみられる。そして、この時に居住地周辺のみ東側へ道が膨らんで、SD48東側へ続く可能性がある。この時の居住遺構に係る遺構とみられるSH05、SK137からは後述する内耳鍋Cが出土し、SD24でも類似内耳鍋が出土しているのてSD24と類似時期の本段階に含まれる可能性がある。

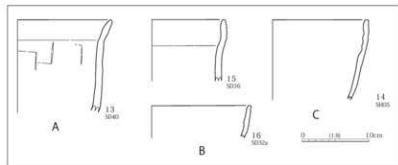
## ② 石川条里遺跡の居館跡変遷 [第53図中段右]

石川条里遺跡12a区を取り巻くように12c区で堀跡SD191が検出された。SD191は12c区の南北方向の現市道直下に塩崎用水と重なって位置し、その南端は現南北市道が長谷鶴前遺跡群との境となる東西現市道と交差する場所で西側へ折れている。12a区は近世に水田化されていたこともあり、調査時には居館跡の存在は認識されなかったが、南東隅の平安時代水田面で一段高い長楕円形の一角が検出されたが、これが堀跡先端とみられる。幅は南辺の屈曲部付近で8m強を測り、断面形は逆台形で、長谷鶴前遺跡群のSD40とほぼ同規模、同形状である。堀跡南辺が重なる現東西市道は調査区外西側で不自然にクランク状に屈曲し、これが居館跡南西隅とみられる。ここまで凡そ50mほどを測り、長谷鶴前遺跡群の居館跡と同規模と推測される。居館跡内部の様相は不明だが、SD191下部で細いSD192を検出している。少なくともSD192→191へ造り替えられている。ただし、SD192は屈曲した南辺の下部のトレンチでは確認できず、SD192が居館跡堀に先行する溝跡かどうかはわからない。

### (2) 長谷鶴前遺跡群と石川条里遺跡の居館跡変遷と年代

長谷鶴前遺跡群では中世後期から居住が本格化し、I段階に水田内に道路SC20を付設し、道側を

SD59で区画する屋敷を造成したが山からの崩落土で埋没し、Ⅱ段階で周辺を含めた盛土整地を行い、道路跡 SC01 を設けて堀 SD40 で区画された居館跡が出現している。それがⅢ段階で堀跡が廃絶し、変わって道路が北側へ延長されるが、2区南部の道路跡の延長にあって当初の道路位置を維持したⅢA段階



第54図 内耳鍋の口縁形態

と、そこから外れて道路位置が変わるⅢB段階があり、このⅢB期に一時的に居住域の利用があると捉えた。一方、石川条里遺跡は最初にSD192があり、後に幅8mのSD191に造り替えられる居館跡が現れているとみられる。最後にこの両遺跡の関係と年代を出土遺物から検討したい。

今回の調査で得られた中世土器は内耳鍋とカワラケがほとんどで、陶磁器の出土は僅かである。この様相は長野県内北部では通有の様相だが、年代を決める資料としては出土量も多く形態変化が追いやす内耳鍋が有効である。

これまでの検討(小林秀夫1982、野村一寿1990)で、内耳鍋の口縁形態は外反(A)から内湾(B)、直立へ形態変化し、直立傾向のなかで口縁部の伸長と、内面に凹凸を顕著に残す傾向と認められる。長谷鶴前遺跡群では内湾と直立の中間の形態内面に凹凸を顕著に残すものがあり、これを(C)としておく。また、外反形態に少量瓦質のものが存在するが、酸化焼成に先行するもので存続時期は短いとみられる。

長谷鶴前遺跡群から出土した内耳鍋の口縁形態を並べると第54図ようになる。このなかで長谷鶴前遺跡群Ⅰ段階の遺構からは水田域内で内耳鍋片が出土したものの、SD59や屋敷地、SC20内では内耳鍋の出土がなく、Ⅱ段階以後に内耳鍋が出土したとみられる。瓦質内耳鍋とA(外反形態)の可能性ある破片を出土したのがSD50、A(外反形態)を出土した遺構はSD34・40・45・48・49、SK164・250で、SD40からは外反形態のみ出土した。B(内湾形態)を出土したのがSD29・32・36、SK244、C(直立形態)に近く若干内湾し、内面に凹凸が顕著を出土したのがSD24、SH05、SK137である。SD50は2区南部の道路を改修したⅢA段階とみだが、同時期と捉えられるSD32は内湾内耳鍋を出土しているので混入の可能性はある。同様に、SD49は居館跡SD40廃絶以後のⅢ段階の可能性があるので、混入の可能性はある。

各遺構出土内耳鍋の数は少量で確実に伴うと断言できる例はなく、近世・近代遺構へも1~2片の混入は認められ、新しい遺構に古い土器が混入する場合もありうる。従って、1~2片の出土で各遺構時期を捉えるのは限界もあるが、概ね上記変遷と内耳鍋の形態別出土傾向をまとめると、Ⅰ段階の遺構は内耳鍋がなく、Ⅱ段階に外反形態の内耳鍋、ⅢA段階以後に内湾内耳鍋、ⅢB段階以後に直立気味の内耳鍋が出土する傾向とみられる。一方、石川条里遺跡では出土遺物が僅かで、上層の幅広いSD191からは、カワラケ3片、内耳鍋体部3片、SD192から内湾形態の内耳鍋1片、底部片7片、カワラケ1片、志野丸皿1片がある。出土量が僅かで、確認できるのは内湾形態の内耳鍋のみである。1片から断定するのは躊躇されるが、石川条里遺跡の居館跡は、長谷鶴前遺跡群2区南部の道路跡が改修された形態がみられるⅢA段階以後とみられる。そうであるならば、長谷鶴前遺跡群の居館跡廃絶以後に居館跡が石川条里遺跡へ移転し、道路が改修を伴って北側へ延長されたとも考えられる。また、石川条里遺跡のSD191では志野丸皿小片が出土し、近世初期まで堀跡は開口していた可能性があるが、居館跡としての存続時期はわからな

い。

先にみた長谷鶴前遺跡群の内耳鍋の年代は、周辺遺跡である程度年代がわかる陶磁器との共伴が認められた事例でみている。内耳鍋の古い形態とみられる瓦質内耳鍋と少量の外反内耳鍋が出土しているのが長野市栗田城跡で、出土陶磁器は古瀬戸Ⅰ～Ⅳ（古）までのものが知られている（市教委2014）。次に堀内は外反形態の内耳鍋で占められる石川条里遺跡高速道地点の居館跡堀跡では古瀬戸後Ⅳ（新）までのものがあり、大窯製品は出土していない（理文センター1997）。内湾形態のものは一部直立傾向のものを含むが、松原遺跡ⅢのSD1・2出土土器が該当し大窯1式の皿が伴う（市教委1993）。このことから、Ⅰ段階は15世紀中頃以前としかわからないが、Ⅱ段階は15世紀後半、ⅢA段階は16世紀前半、ⅢB段階はあまり時間を隔ない16世紀前半でも中葉に近い頃とみられる。

### （3）長谷鶴前遺跡群の居館跡の位置

今回の調査結果を踏まえ、長谷鶴前遺跡群の居館跡について当地域内の位置づけを探ってみる。今回の調査で注目されたのは4面の水田内の屋敷地から3面の整地と堀を伴う方形居館への変化が捉えられたことである。本遺跡では4面から3面への転換が山からの土砂堆積が契機ともみられ、必ずしも社会背景と無関係な変化かもしれない。今回の居館跡出現時期は外反形態の内耳鍋が出現・普及する時期に重なりと捉えたが、周辺地域の石川条里遺跡高速道地点の居館跡や千曲市屋代遺跡群内のいくつかの居館跡等も、同様外反形態の内耳鍋を伴う時期のものである。従って、本遺跡を含む周辺の50m四方規模前後の方形居館跡が15世紀後半の類似時期に各地に出現したとみられ、やはり何等かの共通する社会背景があった可能性がある。その具体的な背景の様相はわからないが、内耳鍋の出現と普及、さらにこの時期に石鉢や石臼の出現等（栗田（4）2014）、広域流通品ではない狭い流通圏の地域内生産物が増加する時期に重なる点は注意される。石製品は石材確保から生産地が限られるとみられるが、重量があつて広域に大量に持ち運ぶには適していない。従って、各地に複数生産地が存在するとみられる。また、内耳鍋は胎土分析から、一つの地域内に複数生産地が存在することも知られている（野村1990）。一方で、長野県北半では広域流通焼物が鎌倉時代に比べて極端に少なくなる状況も知られており、旧国範囲を超えるような広域物流交流減少と地域内生産物の増加は関係があるとみられる。つまり、生産や流通が狭い地域経済圏のようなまとまりが顕著になってくる状況があり、そのなかに狭い地域支配の拠点としての居館跡の出現があるかもしれない。また、長野市域で古い1辺100mクラスの居館跡として栗田城跡があるが、栗田城跡では瓦質内耳鍋と外反形態の内耳鍋が少量出土し、外反形態の内耳鍋はあまり出土していないので、50m四方の居館跡が増加してくる時期に途絶えている可能性がある。この栗田城跡は陶磁器の出土量の多く、あまり出土例が多くない口径14～16cmの特大大ワラケを使用していることから、守護所の可能性もある。現況では守護所と断定しきれないが、守護所の消滅と、地域内の中小土豪や国人領主等の支配ブロックが顕在化する様相とも符合する。

長野市や千曲市周辺では、こうした50m四方の居館跡の多くで大窯製品や内湾形態の内耳鍋を出土せず、16世紀以前に廃絶するものが多いとみられる。しかし、長谷鶴前遺跡群では移転して存続した可能性が知られた。居館跡背後の山頂には山城である赤澤城跡があるが、それと関連するのだろうか。この点は石川条里遺跡の居館跡の存続時期を明確にしえず、詳細はわからない。

## 2 長谷窯

### （1）記録に残る長谷窯と松代焼について

長谷窯は塩崎村（現長野市篠ノ井塩崎）の宮崎清右衛門（1826（文政9）～1893（明治26）年）が、共

同出資者である更級郡赤田村（現長野市信更町赤田）の小林彦八郎とともに、1867（慶応3）年8月、宮崎清右衛門の敷地内に開業したものである。清右衛門は職人を多治見（岐阜県多治見市）から呼んで製品を作らせ、自らは作ることはなかったとされる。1875（明治8）年には清右衛門一人の所有となり、長男である七重（1848（嘉永元）～1924（大正13）年）が跡を継ぐが、七重が目が悪くし、妻のふさが死去した1896（明治29）年頃に窯を閉じている。窯の廃業後は、土地を宅地や農地へと転用していることが、長野県地方務局に残された旧土地台帳から判明している。

窯と工場は宮崎家の南側の敷地に築かれ、窯は山の斜面を利用した東西方向に延びる五連房の登窯であったとされる。間口は二間五尺五寸（約5.3m）との記録がある。閉窯後も窯は壊されず、明治の末頃までは残っていたという。一方、作業場は窯に隣接して建てられていたようで、間口9間（約16.3m）、奥行2間3尺（約4.5m）を測り、職人とその家族が住めるようになっていた。窯焚きは年に2回で、製造していた品物は大小の甕を主体として、播鉢・紅鉢・片口鉢・徳利・土瓶などの日用雑器であったとの記載があり、役場の文書には製造数と売上代金の記録も残っており、生産数が増加している状況が読み取れる。

焼物の原料となる土については、布施五明村（現長野市篠ノ井柳沢周辺）と桑原村（現千曲市稲荷山桑原周辺）の白土を用いていたようだが、岡田（長野市篠ノ井岡田）や小市（長野市安茂里小市）の土を使ったとの言い伝えもある。土の成分などについての詳細は不明であるが、轆轤による成形後は天日で乾燥させ、1日かけて素焼きを行い、施釉後に約2日間の本焼きをしていたとされる。燃料には松薪が使用されていたようだが、仕入先などの詳細は分かっていない。

なお、塩崎村史の補記には、長谷窯へ岡田窯（長野市篠ノ井）の米山通太郎が手伝いに行っていたとの聞き取り記録が収められている。岡田大門窯は、もともと松代横町窯（長野市松代町）から岡田の地に移り住んだ米山直治が、1873（明治6）年頃に操業を開始した窯であり、長谷窯の閉窯後の1926（大正15）年頃まで続いていたとされる。岡田大門窯の職人、および直治の長男である通太郎が長谷に手伝いに行っていた時期は、長谷窯の晩年頃であるとみられ、岡田焼を通じて長谷焼も松代焼との接点があったと考えられる。

長谷窯では白濁した薬灰釉に銅緑釉流し掛けや鉄釉を掛けた壺・甕・鉢・徳利等の日常雑器を生産していたが、その焼成器種や釉薬は松代焼に類似する。松代焼自体の定義は明確ではないが、一般的には長野市松代地区で近世末～近代にかけて焼かれた焼物を指す。それと類似した松代周辺の諸窯製品は松代焼系、松代焼手と括られる場合があり、長谷焼もここに含まれる。松代焼は当初から様式的に完成したのではなく、また窯ごとに製品に若干差異があるとされる。唐木田は初期の松代焼の天王山窯は薄い鉄釉を多用した焼き締めに近い製品ながら、名雲窯を継承した松代荒神町窯の製品は名雲窯にない化粧土の使用、薬灰釉の多用、銅緑釉、暗灰色灰釉の使用等がみられ、荒神町窯で松代焼の釉薬等の技術が確立したとする（唐木田1993）。また、小松は銅緑釉の流し掛けは松代代官町窯に多いとしている（小松2002）。ちなみに、これらの北信地域の松代焼や松代焼系各窯の経営者たちが雇った職人たちは、京都、信楽、常滑、瀬戸、美濃、これ以外に渡りの職人として瀬戸、京都、越後の窯や益子等出身者もいたとされ、多様な生産地の職人が関わっている。その一方で北信地域の諸窯では松代焼と全く区別できない製品もあるとされている。さまざまな産地出身の職人が関わりながらも松代焼系の窯間の職人の移動や手伝い、売れ筋の製品模倣等を通して製品が類似する傾向になったのだろうか。

なお、松代地区の近世窯業は、古くは唐津で修行した嘉平治が寛政の頃開いた窯があったとされ、1816（文化13）年に松代藩が殖産興業の一環として嘉平治の窯を買取った名雲窯と新設した天王山窯から本

格的にはじまる。名雲窯が移転して荒神町窯となり、それが民営化されると共に、天保以後から幕末にかけては松代の楽焼として始まり瀬戸出身の職人が引き継いだ代官町窯、長野市周辺の豪農や商人、職人等により千曲市森窯・桑原窯、長野市寺尾山根窯・岡田南町窯・岡田新田窯・岡田大門窯・石川窯、飯綱町赤塩窯、須坂市須坂窯等の数多くの窯が開かれた。長谷焼もこの時期に始まり、明治以後でも長野市岡田弘沢窯・五明窯・吉窯、千曲市雨宮窯が開かれている。明治期では鉄道で運ばれる小物が多い瀬戸物と競争しないように、これらの窯では大型雑器を中心に生産していたが、瀬戸製品に価格で太刀打ちできずに廃窯したと考えられる。

## (2) 工房跡について

今回の発掘調査では、ロクロの台石が据えられた状態で確認できたことから、調査区内に長谷焼の陶器製作工房跡（工場）が存在していたことが考古学的調査によって明らかとなった。工房跡に関しては、前述のように文献では規模が間口9間（約16.3m）、奥行2間3尺（約4.5m）とあるが、間口を東西、南北のどちらにとっていたかは記載がない。長谷焼と同様に、ロクロの台石が据えられた状態で見ついている松山窯跡（石川県加賀市）は、東西方向に並ぶロクロ台石と同じ方向に建物の間口がとられており、ロクロ台石は壁に沿っている。松山窯跡の例と本遺跡のロクロ台石の出土状況から、本遺跡も工房跡の間口はロクロ台石と同じ東西方向にとられていたと考えられる。また、ロクロ台石が北壁に沿っていると工房全体が山際に近い位置になり、窮屈な印象を受ける。一方、ロクロ台石が南壁に沿っていたとすると山際まで余裕があり、ちょうど石で囲まれた範囲に収まるため、この辺りに工房跡があったとみて問題ないと考えられる（柴田2020）。

ちなみに、松代焼系の窯について研究された唐木田の著書には、昭和まで継続していた窯業関係者の聞き取りによる作業場の見取図が掲載されている。それによると以下の施設があったようである。

**登り窯：**7～10室の連房で、覆屋が伴う。昭和ではトタン屋根だが、江戸時代末期の荒神町窯では礎石立の瓦葺で、唐木田は出費記録から窯と上屋小屋の築造費用はほぼ同額と推測している。

**素焼窯：**本焼前の素焼を行う窯で、登り窯とは別に存在する2～3室の窯である。唐木田の岡田新田窯での聞き取りでは2室の素焼窯で10回焼成すると本焼1回分が揃ったという。

**細工場：**ロクロを設置する製陶施設で、代官町窯で3間×6間、岡田新田窯は住居兼用で4間半×9間半、岡田大門窯は4.5間×8間、桑原窯の土練り場を兼ねた6間×14間等の長大なものが多く、2間×3間と2間2尺×4間2階建ての2棟に分かれていた赤塩焼例もある。細工場が長大な理由は、職人の住居を兼用するものもあるが、焼物素地を乾燥させる倉庫機能も兼ねたのだろうか。ロクロは蹴ロクロ・手ロクロの2～3基土間に置かれる例があるが、代官町窯では蹴ロクロはなく大物を作る回転台と小物を作る手ロクロだったという。

**土置場・土小屋・水籠場：**粘土塊を唐臼で砕く唐臼小屋、粘土を置いて寝かせる土置場が1間半×3間の2棟に分かれる岡田新田窯例、3間×4間の土小屋としてまとめられる代官町窯例がある。また、粘土細砕に水車を利用する場合もあったようだ。水籠場は明治時代に一時磁器焼成が試みられた代官町窯にみられ、2坪ほどの規模とされるが、他の多くの窯では水籠場の文献記載がない。唐木田の岡田新田窯関係者の聞き取りでは、乾燥した粘土を粉砕した後、斜めに設置した篩（万石）の上端から流して粒子をふるい分けたという。

**置場・組場：**岡田新田窯では軸掛け後の本焼前に窯詰用に窯道具で組んで仮置きする小屋があり、細工場・土置場・唐臼小屋・素焼窯から少し離れた登り窯近くに4間×8間の置場・組場が設けられている。



他窯では見取図に同施設の記載はなく、細工場と兼用されていたか、仮設、あるいは窯の屋根下で行ったであろうか。また、そこには素焼製品や出荷前の本焼製品を置く場合もあったであろうか。

庭：唐木田の「松代焼」に掲載されている昭和10年信濃教育会撮影の岡田新田窯の写真では、庭に素焼の甕を並べ、まとめて軸掛け作業を行っている。大型品の軸掛け作業には広い場所が必要とみられる。これ以外に瀬戸では、製陶に大量の水を使用するため小溜池を備えていたとされる。これについては松代焼系の各窯で池と記載されている例があるが、詳細は不明である。

上記が製陶に必要な施設とすれば、今回調査で明確に捉えられたのは細工場と庭のみである。長谷焼では素焼き窯の記録はないが、同じ窯で素焼きと本焼きを行ったとも読める。出土遺物の土人形や低温で溶ける軟質施釉陶も焼成しているとすれば、別に小規模な窯があった可能性も否定できない。また、窯焼きの際に職人が寝泊まりできる小屋は調査区外に存在したとみられる。他窯の例から想定される施設は今回の調査では捉えられなかった。なお、粘土が多く分布していたST01東側の地点は工房の一角に設置された土置き場か、陶土を使う釉薬の調合作業が行われていたのかもしれない。

### (3) 窯について

窯については調査内で確認することはできず、周辺の踏査をしても状況が不明であったため、その位置や構造に関しては推定となるが、まずは文献にある記録からその場所について考えてみたい。記録として確認できるのは、山の斜面を利用した東西方向の登窯であり、作業場に隣接していたという2点である。東西方向の斜面に造られた登窯ということは、山の裾は南北方向に伸びている場所であると解釈できる。3区に隣接する湯ノ崎山は、調査区を囲むように千曲川に向かって突き出ているため、裾が南北方向に伸びているのは3区の南側となる。ここで問題となるのは、工房跡と窯の位置関係である。塩崎村史には「窯と工場は宮崎家の南側に築かれ、(中略)、作業場は窯の北側に建てられていたようで」と記載がある。裏を返せば「作業場の南側に窯があった」とことになるが、先に想定した工房跡の南側は、山の裾が東西方向に伸びているため、山の斜面を利用した東西方向の窯を築くことは難しい。村史の記載が誤りなのかは定かでないが、発掘調査の成果と周辺地形から見ると、東西棟の工房が山際に建てられ、それと直列するように東西方向の窯が西側の斜面に築かれ、その北側に創業家である宮崎家があったと考えられるほうが自然であると思われる。

次に築造された窯の構造についてであるが、「五連房の登窯」であり、間口が二間五尺五寸(約5.3m)という記録から、いわゆる「連房式登窯」とよばれるものであったと理解できる。長谷に呼ばれた工人が多治見の人であったという記録から、窯の構造も瀬戸・美濃地域で稼働していた窯と同じであった可能性が高いものと推定した。そこで、瀬戸・美濃地域で現存する連房式登窯がないか調査したところ、愛知県瀬戸市で昭和前半に稼働していた「一里塚本業窯」が瀬戸市有形文化財として登録されていることが分かった。この一里塚本業窯は陶器専用の窯で、焚口が3つ、「間」と呼ばれる焼成室が4つある。一番手前の燃焼室は幅約7m前後で長谷焼の記録よりかなり大きい。

瀬戸・美濃の本業焼連房窯は、江戸初期に唐津から持ち込まれ、伝統的な大窯の技術を融合させて成立したという(瀬戸市史1993・金子2006)。瀬戸・美濃の本業焼連房の房間の燃焼ガスの通路を縦狭間とし、近世末では新たに磁器生産のために肥前から伝えられた横狭間の丸窯が加わる。

長野県内で調査された窯跡をみると、須坂窯(須坂市)・相道寺窯(須坂市)が横狭間の復元図のみで詳細不明とされ、常滑の影響を受けた下郷焼(上田市)が無段半地下式で、福島窯(木曾福島町)、赤羽窯(辰野町)・大久保尻窯(辰野町)、洗馬和兵衛窯(塩尻市)・東馬窯(上田市)、藤沢窯(高山村)は有段縦狭

間である。県内では基本的に瀬戸・美濃の窯がモデルとされる（小松 2006）。松代焼の天王山窯は当初信楽の職人を入れているので、異なる形態の可能性がある。金子によると瀬戸では時代が下ると連房上方の房が広がる扇形となり、各焼成室は方形に近い肥前窯と異なって横幅を広げる傾向で変化し、奥行きも 19 世紀前葉には最上段の部屋奥の奥行きが最も長いという。長谷焼の年代に近い 19 世紀前半の湧右衛門窯（愛知県瀬戸市）で燃焼室幅は不明ながら、10～14 室で奥行 1.60～2.28m×幅 7.82～8.06m、19 世紀後葉の赤重窯（4 次）（愛知県瀬戸市）で燃焼室は奥行 0.9m×幅 5.0m で 1～4 房は奥行 0.8～1.70m×幅 4.70～6.60m という。長谷焼の明治の調書にある「間口」がどこを指すか不明だが、燃焼室とすれば 19 世紀後葉の赤重窯（4 次）に近い数値ではあり、当時の窯の構造・規模で造られた可能性がある。ただし、唐木田の聞き取りでは松代系初窯では蹴ロクロ・手ロクロが併存し、代官町窯は蹴ロクロの記述がない。瀬戸・美濃は手ロクロ中心で、大型品は紐を掛けて手繰る方法という（瀬戸市史編纂委員会編 1993）。瀬戸市史では蹴ロクロは西日本と北陸に多いとしており、これからすると窯以外の製陶技術は多様な技術が複合していた可能性もある。

#### （4）長谷焼の製品について

**焼物種：**今回の調査では長谷焼で生産されたとみられる焼物には、素焼後に施釉焼成される陶器の長谷焼、人形等の素焼製品やその型、低温度で溶ける釉を施した土釜の軟質施釉陶器の 3 種の焼物が確認できた。すべて同じ窯で焼成されたものか、焼成された時期が異なるかは明らかにならなかったが、焼成温度が低い人形等の素焼き製品や軟質施釉陶器は出土量自体が少なく、普遍的な生産品ではないようだ。

#### 長谷焼：

**器種：**松代焼系の窯では窯ごとに生産器種が異なる傾向も指摘されているが、今回出土した長谷焼製品には概ね播鉢・徳利・鉢類等の松代焼系窯と共通する器種を含む。ただし、他の窯にみられる冬場に飯をこたつて保温するかぶと鉢や碗・皿・大皿・畑徳利・香炉等はみられない。長谷焼では甕と播鉢、植木鉢、火入、蓋付の灯明具が特徴的に認められ、近年調査された長野市松代城下町跡にある代官町窯（市教委 2022）の製品と比較すると、片口・鉢・播鉢等は長谷焼と共通し、椀・皿・畑徳利・油壺・鍋等の長谷焼にあまりない器種も生産している。一方、長谷焼は植木鉢・甕・火入・蓋付灯明具等多く認められる。特に蓋付灯明具は長谷焼で一定量生産された特徴的な器種とみられる。別にモデルが存在するのか、長谷焼独自のものなのかは判明していない。このように発掘調査例の比較から、松代焼系窯は釜ごとに生産器種が若干異なる傾向がみられる。生産器種の差異は、上田藩に陶器を納めた岡田南町窯等のような理由もあるが、時代ごとの変化も追え、古い窯では碗・皿等の多様な器種があり、時代が下ると台所で使う大型雑器が多くなる傾向が指摘されている（唐木田 1993）。長谷焼の器種は台所で使う大型製品を中心に生産した時にあたるとみられる。また、明治では赤塩焼（飯綱町）のように鉄道建設で使うレンガ製作や、代官町窯のように製糸用糸取り鍋等を焼成した窯もあるようだが、長谷焼では確認できない。長谷焼を含む松代焼系窯では、時代変化に加え、地域ごとの需要や、需要が多い器種以外では競合を避ける選択があったと思われる。窯の経営者が生産器種や焼成量を独自に判断して製品を商店に卸すのではなく、販売する問屋や商店等の介在によって生産器種を選択したものだと推測される。

**素焼き製品：**素焼き製品には土人形やその型があり、少量ながら土管、火鉢がある。人形類の亀（22）は陶器だが、その土型が 8 で、土型（6）は七福神の恵比寿で、製品（16）は大黒である。七福神のセットとすると、人形は長谷窯産と考えられる。26 は軟質施釉陶器で、24 も低温度で溶ける銅緑釉の試し焼き

と思われる釉薬が付着する。素焼きの人形も出土しているが、軟質施釉陶器や長谷焼同様に陶器として焼成されたものかもしれない。なお、21のみは胎土が灰白色の粉っぽい土で、長谷焼製か不明である。素焼きで他にコンロ・涼炬等の火鉢類も出土し、胎土や焼成は長谷焼の素焼と同じながら、コンロ類は内面に使用痕の煤が付着しているため職人らの自家用かもしれない。土管も出土量が少なく自家用の可能性がある。

**軟質施釉陶器**：羽釜と蓋がある。融点が低い鉛釉ともみられる薄い釉薬を掛けているが、長谷焼の陶器と同様の焼成温度では釉は流れるので、低温の別窯か陶器とは別に焼成された可能性がある。色見（焼成中に釉薬の溶け具合を確認する品）とみられる小型の羽釜も出土し、長谷焼で焼成していたことは間違いのないといえる。

**釉薬**：長谷焼は他の松代焼同様に薬灰釉に銅緑釉を流し掛けするものと、茶褐色の釉を多用する点を特徴とする。出土陶器の釉には、黄緑色透明の灰釉、白濁した薬灰釉、黒・茶褐色の鉄釉、緑色の銅緑釉、錆釉があり、他に軟質施釉陶器の薄い透明釉や一部に化粧掛けとみられる薄い白色の釉がある。松代焼に顕著なのが白濁した薬灰釉に銅緑釉流し掛けするもので、県内では高遠焼にもみられる。松代焼の釉については代官町窯の浦野駒吉が明治12年に県に提出した「陶器焼製法調」に赤薬・白薬・青薬が挙げられ、唐木田の岡田新田窯での聞き取りでは、以下の5種類の釉薬が記載されている（唐木田1993）。

赤ぐすり：信更ゴンド山の赤土+わかみ（中尾山の白土の流砂礫一唐木田註）+木灰+大麦灰

白ぐすり：小市の白土+薬灰+木灰

立石のしらい：白ぐすりの下掛けで松代立石の石を粉砕したもの

黒ぐすり：赤ぐすりにベンガラを混ぜたもの

青かけぐすり：白ぐすりに銅粉を混ぜたもの

これを今回の出土品の釉に対比すると、「赤ぐすり」は色の名称から茶褐色の鉄釉、「白ぐすり」は薬灰釉、「立石のしらい」が化粧掛け釉、「黒ぐすり」が流し掛けされる黒い鉄釉、青かけぐすり（青薬）が「銅緑釉」に対応するとみられる。灰釉をベースとした「赤ぐすり」と「白ぐすり」が基調で、それにベンガラ、銅粉を混ぜてバリエーションをつくっている。釉は薬品で合成されるものではなく自然にあるものを利用しているが、磁器生産が試みられた代官町窯では明治の記録に「コバル」（コバルトか）の記載があり、薬品による釉薬の調査もあったようだ。

#### （5）窯道具について

窯道具の名称は産地ごとに異なるところがあるが、基本的に長野県内の諸窯に影響を与えたとみられる瀬戸・美濃の名称に従えば、窯内に焼物を設置する製品を入れる匣鉢や棚組の棚板、重ね焼きで融着と変形を防ぐトチン・ビン・焼台（ヘダテ含む）等が確認された。製品の具体的な窯詰方法は詳細を検討できなかったが、出土品に残る痕跡から摺鉢は団子トチを用いた重ね焼き、鉢は円錐ピンを用いた重ね焼きであることが確認された。また、焼台とした円筒形の窯道具は、深身の鉢類を直接重ねると口縁が接してしまうため、トチン・ビンと共に製品間に差し込んだヘダテ、筒トチかもしれない。

これらの窯道具について、瀬戸・美濃の生産をまとめた金子の論考や瀬戸市史を参照すれば、長谷焼で出土した窯道具は瀬戸・美濃でみられるものと同様で、窯の構造を含めて瀬戸・美濃の焼成技術が基調とみられる。そのなかで注目されるのは匣鉢と棚板である。匣鉢は瀬戸では外側に飛び出た丸底のものが主体、美濃は平底主体とされる（金子2006）ので、長谷焼は美濃系の窯道具を用いたといえる。また、円筒

形の筒トチの使用が美濃では多いとされる点も同じだろう。ちなみに、代官町窯では平底以外に丸底の匣鉢が出土し、瀬戸系の窯道具が用いられている（市教委2022）。先の唐木田による聞き取り調査では代官町窯では蹴ロクロがなかったというが、これは瀬戸・美濃の傾向と同じで、窯道具にみられる瀬戸系、美濃系に加え、製陶技術ではそれ以外の技術も松代焼系窯で複雑に混合している様相が推測される。

次に、陶板だが、支柱となる長い筒状のツクと断定できるものはないが、棚板は出土していて、棚組で窯詰していたことが推測される。金子によると棚板は3種前後規格があるようで、ツクは中空・柱実に加え、手づくね・ロクロ等多様な種類があり、明治期の瀬戸赤重窯ではロクロ整形による11cm前後と21.6cmのものがあって前者は全長の1/2が中空、後者は中空という（金子2006）。この棚組について金子や瀬戸市史の『日本近代窯業史』の紹介によると、瀬戸・美濃では製品を入れた匣鉢を重ねて窯詰する方法が伝統であったが、天保2（1831）年加藤重吉が陶器の本業焼で行われていた匣鉢蓋を用いたエブタ組から棚組を考案し、最初に磁器焼成の丸窯で採用されていたものを本業焼でも用いたという。

本業焼での採用年代は不明だが、長野県内では文化4年・天保9年の墨書が確認されている佐久の川越石焼では多量の匣鉢が出土し、木曾の福島窯では匣鉢出土が少ないながら棚板・ツクが出土している。飯田市の伊賀良焼で棚板の可能性のある無軸の長方形・正方形の陶板が出土している。小松は福島窯の匣鉢出土が少ない点について棚組主体の窯詰と推定し、伊賀良焼は棚板とすれば出土陶器年代のずれがあることを指摘している。長谷焼でも採用されている棚組がいつから採用されたかは不明だが、小松も注目しているように、匣鉢主体の川越石焼と、後出の棚組主体の福島窯の差異をみると県内窯の成立年代を知る手がかりになる可能性がある。また、長谷焼では匣鉢と棚組が併用されており、匣鉢にも孔ありとなしがあるが、その窯詰の選択が何によるかは捉え切れなかった。また、参考に唐木田の著作に掲載されている岡田新田窯の昭和10年の窯詰写真では、上下端が幅広い断面「I」形の陶板を縦壁とし、その上に平坦な棚板を横に置いて類似した棚を並べて組み、そこに鉢類を重ねて取め、棚板の上には重ねた挿鉢を置いて焼成していて、匣鉢の使用は不明である。

今回、長谷焼の製作工房跡を発見した。窯道具や製品の詳細な調査までには至らなかったが、長野県内の窯や製品についての希少な検討資料を供しえたと考ええる。

### 第3節 石川条里遺跡・長谷鶴前遺跡群の変遷

長野市篠ノ井塩崎地区での坂城更埴バイパス改築工事に伴う発掘調査は、長野盆地南部に位置し千曲川左岸の自然堤防に立地する塩崎遺跡群、後背低地の石川条里遺跡、篠山山麓扇状地・崖錐地形の長谷鶴前遺跡群の連続して分布する3遺跡を貫くように実施した。このうち長谷鶴前遺跡群は平安時代以前に石川条里遺跡と地形的にも連続した水田遺跡と判明し、今回石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群を併せて報告することとした。ここでその石川条里遺跡と長谷鶴前遺跡群の変遷をまとめ、併せて隣接する集落遺跡である塩崎遺跡群との関連についても触れたい。

塩崎地区は、現在広大な水田地帯となるが、近世には洪水と干害に悩まされた地域と知られる。干害は水源となる中小河川に恵まれず、千曲川の攻撃面に位置して千曲川取水もままならない環境によるもので、現在の水田景観は近世末の塩崎用水開鑿で実現したとされる（塩崎村史編集委員1971）。

今回の調査では、平安時代前期の条里型水田に関連する遺構が広範囲で検出された。またそれ以前にも弥生時代中期後半の水田跡は最も低い2区より西側に広がり、弥生時代後期・古墳前期末・奈良時代等の水田遺構は調査区西側中心に検出されている。近世より前の水田は調査区西側の扇状地端部側に偏る傾向が見受けられる。これは調査区西側は篠山山麓の沢水や扇状地端部の湧水等の水源が確保しやすく、調査区東側は千曲川の粒径の粗い洪水堆積物が多い土質で保水性が悪い乾燥傾向の場所であることが関連しよう。特に中世には塩崎遺跡群に接する1区で居住遺構が検出されたことから、時代を追って千曲川の洪水土埋積で地表面が上昇して乾燥傾向は強まったものと推測される。石川条里遺跡南部域では塩崎用水開鑿以前から水源の問題が重要だったと思われる。

調査区西側の水源とみられる沢部分には現在、近世に造成された篠山山中の猪平池から流れる用水があり、石川条里遺跡10区南側に調査区を横断する。さらに用水に近接する石川条里遺跡9区では、弥生時代中期後半水田層の下層で沢跡とみられる窪地が確認されている。9区、11区で流水を要因とする山砂堆積もみられ、用水に先行して類似場所にかつて沢が流れていたものと捉えられる。

以下に時代順の概要をまとめる。

#### 弥生時代水田以前の環境

確認された最古の水田跡はⅧ層弥生時代中期後半に帰属し、その下部は自然堆積層（Ⅸ層）となる。水田化以前にあたるⅨ層は長谷鶴前遺跡群や石川条里遺跡4b区周辺までは薄い粘土・泥炭層互層に堆積し、調査区西側は水田以前から湿地環境であったことが捉えられた。一方、調査区東側は泥炭層が発達せず腐植土層となる傾向で、地形的に低い場所ながら地下水水位が低い乾燥傾向の環境であったと推測される。

Ⅸ層の出土遺物は9区の沢跡の窪地上面でも時期不明の土器小片が数片出土したのみである。Ⅷ層以上で3b・4a区で縄文時代と思われる定角式石斧が1点、1区で弥生時代中期前半以前と思われる環状石斧未成品と思われる石器が1点採取された。環状石斧未成品は隣接する塩崎遺跡群との関連が考えられるが、定角式石斧は単独出土であり、出土背景は明らかにできなかった。また、隣接する塩崎遺跡群では弥生時代前期末の土器が出土しているが、調査区内で弥生時代前期末～中期前半の土器や水田遺構は確認されなかった。

### 弥生時代中期後半

本章第1節2に記述したので詳細は省くが、最も古い水田層である弥生時代中期後半Ⅷ層は、上下2層に細分できる。上層(Ⅷ-1層)は泥炭層に被覆されていて、栗林2式新～3式の時期と思われる水田跡が検出された。下層(Ⅷ-2層)は栗林1式の時期に遡る可能性があり、Ⅷ-2層は3b・4a区～9区周辺にみられ、プラント・オパール分析から水田の可能性が捉えられたが、水田面を被覆する砂層や泥炭層はなく水田範囲や水田構造は明らかにしえなかった。Ⅷ-1層水田は泥炭層に被覆された水田面が2区以西で確認され、3b・4a区、7区で小区西水田、5区～11区で大畦畔のみ検出されていて、大畦畔区画内を小区西に分割する構造とみられる。長谷鶴前遺跡群でも同様の泥炭層に被覆される粘土層が分布することから、水田域は広がる可能性があるが、長谷鶴前遺跡群ではプラント・オパール分析を実施していないため、科学分析による裏付けはできていない。これまで県内でみつけた弥生時代中期後半の水田跡例に比較して、水田域が広域に及ぶ点がⅧ-1層水田跡の特徴で、これは同様に広域水田となる、石川条里遺跡高速道地点の弥生時代後期水田跡に継承されると推測される。なお、弥生時代中期後半の水田跡が放棄されて泥炭層に覆われていく背景は明らかにできなかった。

### 弥生時代後期

弥生時代後期初頭頃、地形的に低い東側の調査区1区～3b・4a区を中心に洪水土Ⅵ層が堆積して平坦化する。Ⅵ層堆積以後、弥生時代後期の水田遺構は1区～7a区では確認されず、Ⅵ層がみられない7b・8区のⅤ層最下部で畦畔基部が確認された。他に出土土器から弥生時代中期後半とした11区のSC089は畦畔芯材の放射性炭素年代測定値や曲柄二又鎌出土から当該期の水田に伴う遺構の可能性がある。水田遺構は調査区西側で断片的に捉えられている。当該期の土器は9区等の西側調査区の他、1区で少量出土したが、1区は微高地端部の塩崎遺跡群に接する集落周辺に関連する可能性がある。水田遺構と出土土器の分布から、水田域は弥生時代中期後半期より狭まる。隣接する塩崎遺跡群では当該期の居住遺構が多く確認されたが、調査区内の水田域はその集落規模と見合った面積がないとも思われる。集落域周辺に水田域が分散して存在したか、もしくは未確認の集落に伴う水田の可能性も考えられる。

### 古墳時代前期末

石川条里遺跡の調査区内で、弥生時代後期の次に確認された水田跡は古墳時代前期末のⅤ層水田である。遺構は3b・4a区と9区で大畦畔、3b・4a区で断片的ながら大畦畔区画内を細分する畦畔等、わずかな水田遺構が調査区中央～西側に散在して認められたのみだが、当該期の土器は全域で出土している。西端に続く長谷鶴前遺跡群でもⅤ層と同じ土層があり、水田域は石川条里遺跡3区以西から長谷鶴前遺跡群まで広がる可能性がある。一方、調査区東端の1・2区が水田化されていたかは不明で、1区の砂層埋土とするSD100は微高地側から低地側へ続くが、隣接する塩崎遺跡群3区自然堤防際では当該期の用水跡は確認されていない。そのため微高地側からも、西側扇状地側からの用水と思われる溝跡もないため、1・2区まで水田域とは断定できなかった。

大畦畔のなかで、9区のSC106・107は狭い間隔で2条平行し、大畦畔の区画としてはやや異質である。両者が同時存在したとは断定できないが、西側から湧水等を引き込んだ流路脇に設定された畦畔ともみられる。なお、SC106に重なって、複数個体の小型丸底土器と管玉を出土した落ち込みSX002は祭祀関連遺構と考えられる。

古墳時代前～中期頃の水田に関連する祭祀遺構には、川田条里遺跡(埋文センター2000)で畦畔や周辺内から完形土器、ミニチュア土器、管玉や勾玉、珠文鏡が出土した例がある。また、石川条里遺跡高速道

地点（埋文センター1997）では水田面から鳥形木製品、大畦畔脇や畦畔内から壺・甕を中心とした完形品出土例がある。鳥形木製品以外の大畦畔自体を祭祀対象とした大畦畔周辺で行われた祭祀の痕跡とみられる。それには、土器や宝器類を畦畔内に埋める場合と、耕作期間中に畦畔上面や脇で土器を用いた祭祀があったと思われる。

前者は畦畔の維持等の長期的な呪術的效果を期待した祭祀ともみられるが、土器は1個体が散在して出土した例もあり、埋納ではなく畦畔脇や水田で行われた祭祀後の片付けの可能性もある。SC038 脇から完形に近い土器が出土した例は大畦畔脇の完形土器出土例に含まれよう。後者は耕作期間中での短期的な呪術的效果を期待したものかもしれない。これらと比較するとSX002は前者に近いが畦畔芯材より下部に位置し、畦畔構築以前、つまり水田化以前の先行祭祀とみられる可能性もある。

他に水田関連で考えられる祭祀として水源祭祀がある。水源祭祀は水源に近い立地場所での大量土器出土や祭祀遺物の出土からの推定による。県内の事例には長野市駒沢新町遺跡（笹澤1982）、塩尻市竜神平遺跡（埋文センター1988）、中野市新井大ロフ遺跡（金井1982）、飯田市開町天伯B遺跡（今村他1975）がある。駒沢新町遺跡と新井大ロフ遺跡は本遺跡と類似した扇状地端部の湧水地近くにある。また、古墳時代中期とやや時代は下るが千曲市屋代遺跡群では導水に係る祭祀跡と捉えられた例がある（埋文センター1997）。屋代遺跡群や竜神平遺跡を除くと大量の土器出土があり、駒沢新町遺跡や竜神平遺跡では土坑内に炭化物を混じる礫を充填した土坑が検出されている。本遺跡SX002では礫や炭化物の出土は認められていないが、土坑を伴う点は似ている。本遺跡以外では出土土器の種類は高坏、甕、壺、坏類と多岐にわたるが、SX002では小型丸底土器が専ら用いられた点は異なる。祭祀は何等かの祈願に際し、神等へ大事なものを供し、その見返りとしての呪術的效果を期待する行為であるが、用いる器材や祭式が決まっていたとも言い切れず、上記の差異点をもって水田祭祀や水源祭祀と特定できない。詳細は後考を待ちたい。

なお、隣接する塩崎遺跡群ではV層水田と同時期の集落跡は不明瞭であるが、その直前にあたる古墳時代前期後半の堅穴建物跡や、更にその前段階の弥生時代後期後半～古墳時代前期の堅穴建物跡は数多くみつかっていて、塩崎遺跡群の集落跡と水田跡には年代的ずれがある。この理由として、今回の調査地点と異なる場所に弥生時代後期後半～古墳時代前期の水田が存在したか、水田は塩崎遺跡群とは別の集落跡に伴うものか、未発見の古墳時代前期末の集落跡が塩崎遺跡群内に存在するかが考えられる。いずれにしても現時点では不明で、これも課題として残される。

なお、断片的な残存ながらV-3層に残存する砂ブロック、断定できないがV-1層は洪水土の可能性があり、千曲川沿岸の洪水の歴史を知る上で新たな知見を加えられたと考える。類似時期の洪水砂層は周辺遺跡では捉えられておらず、現時点では本遺跡のみである。

### 古墳時代末～奈良時代

古墳時代のV層上層にあるIV層は腐植土基調の土質で、古墳時代末～平安時代の土器が出土した。古墳時代後期の土器は認められず、古墳時代後期頃に草が繁茂してIV層が形成され、古墳時代末頃からIV層での人間の活動が始まると推測される。平安時代洪水砂層Ⅲ層の被覆がない地区ではV層上面を第2検出面としてIV層起源埋土の遺構を検出し、そこでは条里型地割と同方位の遺構と、異方位の遺構を検出した。異方位の遺構は出土土器から条里型地割施工前の奈良時代頃と捉えられた。

奈良時代頃とみられる遺構は1区、3a区～9区の溝跡があり、他に長谷鶴前遺跡群1区では平安時代条里型地割施工地内に非耕作地として条里型地割施工前とみられる大畦が残された区画が確認された。これらの遺構は断片的な遺存だが、石川条里遺跡3a区～9区の溝跡は用水とみられ、長谷鶴前遺跡群の畦畔を含めて調査区西側中心に水田域となっていたと推測される。これらの遺構は遺構間の重複もみられ、

水田には数度の改変が推測される。出土土器では7世紀代の土器が自然堤防端部の1区周辺でみられたが、その一帯での水田耕作の様相は不明である。続く8世紀代の土器は1区、2区周辺や調査区西側の溝跡から出土し、なかでもSD066、SD170・169は8世紀後半頃と思われる土器が含まれていた。また、7b・8区で検出された複数の平行する溝跡は条里の規格には合わないが、ある程度の規格性による可能性はある。出土土器がわずかなので遺構時期の詳細は捉えられていないが、8世紀後半とみられる水田遺構とすれば長野盆地内では少ない条里型地割施工前の様相を知る事例の一つとみられる。

なお、隣接する塩崎遺跡群では7～8世紀前半頃の集落跡がみつかったが、8世紀中頃には遺構が減少している。一方で高速道地点の篠山山麓にある鶴前遺跡では松本平編年3期（8世紀中頃）の短期集落がみつかった（理文センター1994）。本遺跡の水田域が狭い可能性は8世紀中頃～後半にかけての単発小集落による小規模な水田経営だったとも推察される。

### 平安時代前期

平安時代前期には長谷鶴前遺跡群から石川条里遺跡10区にかけて9世紀末頃の洪水砂層で被覆された条里型水田、それ以外の洪水被覆がない場所では条里型水田坪境に一致する溝跡や大畦畔跡が捉えられた。水田を被覆する洪水砂層は出土土器から同様の条里型水田が確認された石川条里遺跡高速道地点、千曲市屋代遺跡群・更埴条里遺跡の水田被覆砂層と同一と捉えられた。今回の調査で特筆される点は、石川条里遺跡南部域も高速道地点と同一規格の条里坪区画が施工されていたことと、坪区画内は非耕作地や条里区画と少しずれた水田・条里型地割と異なる水田等の水田が混在することが捉えられた点にある。多様な形態の水田が混在する背景には、坪区画は広域に施工されたが、その内部の耕作状況がさまざまで、調査地点では耕作に適さない湿地傾向なので局地的、断続的に耕作され、恒常的な耕作はないためと考えた。また、隣接する塩崎遺跡群では微高地端部に用水と思われる溝跡が検出され、石川条里遺跡1区、2区でも用水とみられる砂層埋土の溝跡があり、複数水源による灌漑施設が整備されたと推測された。

この条里型水田の施工時期は、条里坪境にあたるSD064と重複する条里と異なる方位のSD066出土土器から、8世紀後半～9世紀前半頃の間に捉えられるが、屋代遺跡群・更埴条里遺跡で指摘される松本平編年（更埴・屋代編年）5期（8世紀末～9世紀初頭）頃に遡るかは明確にしえなかった。

### 平安時代後期

1区～4b区のIV層から平安時代後期の土師器が少量採取され、平安時代後期にも耕作等に利用されていた可能性が窺えた。石川条里遺跡高速道地点でも条里坪境ではない場所に平安時代後期に用水が出現し、再開発が捉えられている。調査で採取された土器もこれと類似時期とみられる。また、屋代遺跡群・更埴条里遺跡では更埴・屋代編年11・12期（10世紀後半頃）に現用水と類似場所に用水が出現し、それが13期（10世紀末～11世紀初頭）には途絶し、以後の集落は水田域から離れて自然堤防の高い場所への移動が認められ、畑作への転換の可能性が捉えられている。

石川条里遺跡高速道地点や屋代遺跡群・更埴条里遺跡例と同様に、今回の調査で採取された土器も、平安時代後期の再開発に関連すると思われる。ただし、本遺跡や石川条里遺跡高速道地点では松本平編年（更埴・屋代編年）の13期～15期（10世紀末～11世紀後半）頃と推定され、屋代遺跡群・更埴条里遺跡の再開発開始時期と異なる。近似年代ながら場所により再開発・耕作時期に年代的ずれがあったか、調査地点では屋代遺跡群と同様の畑作の可能性も考えられる。



### 中世前期

中世前期の12世紀～13世紀前半までは検出遺構もなく遺跡の様相は明らかでない。13世紀後半以後では、石川条里遺跡1区で居住遺構、4b区、4c区周辺で浅い素掘の井戸跡がみつかり、中世後期は石川条里遺跡12区・長谷鶴前遺跡群で居館跡、長谷鶴前遺跡群周辺のみで水田遺構が検出された。出土焼物は12世紀から僅かにあるが、この1区の居住遺構にあたる中世前期（13世紀後半～14世紀）と、長谷鶴前遺跡群で遺構が確認された中世後期（15世紀後半～16世紀）の2時期の焼物が広範囲に認められた。

中世前期には、用水とみられる溝跡の検出はなく、調査域の大部分が水田域ではなかったと思われるが、長谷鶴前遺跡群では中世後期の水田が捉えられ、中世前期でも西側の山際や扇状地端部には水田が存在した可能性は残されている。一方、石川条里遺跡高速道地点を含む聖川沿いの石川条里遺跡北部では、中世前期の水田跡が部分的に捉えられており、条里坪境を現地表面まで比較的継承されている点からみても平安時代以後も水田耕作が継続していたとみられる。中世期に水田域が減少した理由として、洪水土の埋積で低地部の地表面が上昇し、地下水水位が低下して乾燥傾向となった環境の変化と、平安時代のような複数水源を効率的に広域で回せられる社会状況ではなくなったためと思われる。

中世前期の1区居住域では、複数の類似した掘立柱建物跡の存在から居住者が複数いたこと、大型掘立柱建物跡ST001の具体的な居住者像は明らかにしえなかったが、当初から存在せず、この建物跡居住者を中核とした居住構成ではないと捉えられる。この1区の居住遺構は自然堤防端部の比較的低い場所に立地するが、自然堤防上では明確な居住遺構は検出されていない。これは自然堤防上が畑地で、その耕作者の居住場所であったか、調査区外に存在した水田と畑地に立脚した中間域の居住、あるいは鉄屑の出土からも農業以外の生業も行っていたとも推察される。

なお、調査区内の土地区画は、調査区西側（7a区、11区、12区）で条里坪境に重なって現道路が位置しており、西側では条里坪境が中近世にも踏襲されたことと推測される。東側（3a区～5区）の近世溝跡は条里大畦畔区画を踏襲しないもの方位はほぼ一致し、方位のみ踏襲していたようだ。東端（1区、2区）の中世区画溝跡SD009の走行方位は条里区画と異なった自然堤防上の現道路に近い方位とみられる。近世のSD023が中世のSD009に平行することから、東端では中世以後は自然堤防上と同じ区画が継承されているとみられる。こうした東側ほど条里地割が継承されずに自然堤防上の区画に近い方位に変化する状況は、この一帯で水田耕作が継続していないことと関連するのかもしれない。

### 中世後期

中世後期土器は少量ながら調査域広域で出土したが、遺構は長谷鶴前遺跡群周辺に限られる。その遺構変遷は本章第2節1に記述したので省略するが、当該期の水田跡と居館跡が捉えられたことが特筆される。水田跡は水源に近い山手に限られるとみられ、近接する居館跡の出現は先述した社会背景に加え、水田耕作に関わるものと思われる。石川条里遺跡高速道地点では水田内の微高地に長谷鶴前遺跡群と同時期の居館跡が単独で検出されたが、立地場所は聖川からの用水が灌水しうる範囲の端にあたる（宮脇1996・埋文センター1997）。このことから、当時、限られた水源に頼る水田耕作地が分散し、それを管理するための居館域が存在したと考える。また、これは在地領主の地域一帯支配ではなく、耕作地毎に所有者が異なる錯綜した支配関係下で生じた現象と考えられ、石川条里遺跡高速道地点の居館跡が廃絶するのは、耕作地支配から地域社会のまとまりが強くなる変化のなかで淘汰されたためと思われる。長谷鶴前遺跡群の遺構立地も石川条里遺跡高速道地点と同じ背景によると考えられるが、居館跡が移転しながらも継続していた、地域社会との関係性を維持していたのかもしれない。

なお、長谷鶴前遺跡群の居館跡背後の山頂には、山城の赤沢城跡（塩崎新城）があるが、居館跡と山城

の関係は明確にしえなかった。長谷鶴前遺跡群調査第4面から、山からの土砂供給が増加していることは、居館跡以前の溝区画の屋敷地出現時期であり、山城の構築というよりは周辺開発に関係があると思われる。

### 近世

近世の遺構は11区と1区～7a区の溝跡と3b・4a区の墓跡がある。溝跡はほぼ用水とみられ、1区～7a区を中心とした溝跡変遷は本章第1節5に記述したので詳細は省略するが、遺構の時期は明暦用水（1656（明暦2）年開鑿）と塩崎用水（1826（文政9）年開通）の2時期に関連する可能性が捉えられた。11区の溝跡は遺跡背後の篠山山中に1680（延宝8）年に構築された猪半池関連用水とみられる。用水構築以前の17世紀初頭のため池や用水開鑿以前の様相は遺構がなく不明ながら、近世前期以後は千曲川取水用水により、水田の拡大が図られたことが捉えられた。また、塩崎村史で記述されているように明暦用水は18世紀に一旦途絶しており、今回の調査ではこの途絶時期と思われる時期前後に水源不明ながら、小規模な用水跡数条と墓跡が構築された可能性が捉えられた。そして、塩崎用水の開鑿により1区まで枝用水が及び、再度水田耕作が拡大していると捉えられた。

### まとめ

今回の発掘調査を通して、石川条里遺跡一帯は水田適地にみえるが、遺跡南部では水源が限られ、西側を中心に狭い範囲で水田が断続的に営まれたと捉えられた。こうした山手の小規模河川を水源とする水田が崖錐地形や扇状地端部に散在する様相は、高速道地点の後背低地に広がる水田とは様相がかなり異なる。しかも、遺跡南部では耕作が断続的であることは、水源の水量が不安定であったことを示しているのだろうか。また、堆積土の埋積と地下水位の下降により時代の経過と共に乾燥傾向となるが、平安時代前期には複数水源を効率的に用いて水田域が広がったものの、中世には水田域がかなり狭まる。近世には千曲川取水用水の開鑿で再び水田域が広がった歴史が垣間見えた。

水田耕作に関わる人間の居住地は、弥生～平安時代までは隣接する塩崎遺跡群が最も有力な候補であるが、現時点で判明している塩崎遺跡群の居住遺構時期や遺構数と水田跡の時期が必ずしも対応していないところもある。井上智博氏は弥生時代の水田についての研究で、集落を中心に数キロ離れた場所でも水田を営み、拠点集落を移動せず耕作条件が悪くなれば耕作地を少し離れた場所でも移転している状況を想定している（井上2020）。当該調査地の水田耕作が断続的で、隣接集落域と年代が一致しないことも環境変化に合わせ、水源の確保できる場所で水田耕作していた場合や、居住地を移転する場合もあったのではないと思われる。ただ、この見解は今後の周辺調査で訂正されるものでもあり、現時点の推測として提示しておきたい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重なご教示をいただいた多くの皆さま、この場を借りて感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 青木和明 1984「箱清水式土器の編年の予察—千曲川流域弥生土器における高環形土器を中心として」[長野県考古学会誌] 48号
- 青木一男 1999「長野盆地南部の後期土器編年」[99 シンポジウム 長野県の弥生土器編年] 長野県考古学会
- 石川日出志 2002「粟林式土器の形成過程」[長野県考古学会誌] 99・100号 長野県考古学会
- 伊藤友久 1999「第V章 第4節建築部材」[榎田遺跡] 第2分冊 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37
- 井上智博 2002「第IV章 1 弥生時代における水田開発・経営の動態」[池島・福万寺遺跡] 2 (財)大阪府文化財センター
- 井上智博 2020「第九章弥生時代の水田経営と降水量変動」[気候変動から読みなおす日本史3 先史・古代の気候と社会変化] 臨川書店
- 今村善興他 1975「長野県中央埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡期町その2」
- 白居直之 1997「第2章木製品の解説」[石川桑里遺跡] 第3分冊 (財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26
- 白居直之 2002「弥生・古墳時代における善光寺平の水田開発」[国立歴史民俗博物館研究報告] 第96集
- 遠藤英子 2012「縄文晩期末の土器棺に残された雑穀」[長野県考古学会誌] 140号 長野県考古学会
- 大庭重信 2013「近畿地方における弥生時代の水利関係と水田構成の変遷」[待兼山論叢] 47号史学篇 大阪大学大学院文学研究科・文学部
- 大橋康二 1989「肥前陶磁」考古学ライブラリー ニューサイエンス社
- 河西克造 2000「第2章 第2節水田路の変遷」[川田桑里遺跡] 長野県埋蔵文化財センター
- 金井淑次 1982「新井大ロフ遺跡」[長野県史 考古資料編主要遺跡(北・東信)] 長野県史刊行会
- 金子健一 2006「生産①瀬戸・美濃 江戸時代瀬戸・美濃の生産技術」[江戸時代のやきもの—生産と流通—] シンポジウム資料集 (財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 金田彰裕 1985「序章3 桑里プランの研究史と問題点」[桑里と村落の歴史地理学研究] 大明堂
- 唐木田又三 1993「松代焼」信毎書籍
- 桐原 健 1957「弥生文化」[信濃史料] 一卷下
- 小平和夫 1990「第3章 第5節古代の土器」[中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1 総論編]
- 小林秀夫 1982「第V章 御社宮司遺跡の諸問題 第4節中世の遺物」[長野県中央埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—] 長野県教育委員会
- 小松隆史 2002「近世信濃の窯業史研究」[金沢大学紀要] 26
- 斎藤孝正 1994「3軸輪陶器」[律令的土器様式の東西3] 古代の土器研究会
- 佐久市教育委員会 2010「野馬塚遺跡群 野馬塚遺跡Ⅱ・Ⅲ」佐久市埋蔵文化財調査報告書170
- 笹澤 浩 1970「箱清水式土器発生に関する一試論」[信濃] 22-11
- 笹澤 浩 1976「第1編 第3章弥生時代」[上水内郡誌 歴史編]
- 笹澤 浩・原田勝美 1977「長野県下の須恵器(上)・(下)」[信濃] 26-9、26-11
- 笹澤 浩 1982「駒沢新町遺跡」[長野県史 考古資料編 主要遺跡(北・東信)] 長野県史刊行会
- 笹澤 浩 1988「Ⅱ時代と編年 4 古代の土器」[長野県史 考古資料編(4) 遺構・遺物] 長野県史刊行会
- 笹澤正史 2013「新潟県吹上遺跡における土器様相の推移に関する一考察」[弥生土器研究の可能性を探る] 弥生土器研究フォーラム
- 澤谷昌英 1998「第3章 第5節 4 更埴桑里遺跡・屋代遺跡群の土器—古代の食器具を中心に—」[更埴市内 更埴桑里遺跡・屋代遺跡群3] 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書32
- 塩崎村史編集委員会 1971「塩崎村史」塩崎村史刊行会
- 設楽博己・守屋亮・佐々木由香・百原新・那須浩郎 2019「第4章日本列島における栽培植物の起源を求めて—レプリカ法による土器匠痕調査報告」[農耕文化複合(上)] 雄山閣出版
- 設楽博己・守屋亮・佐々木由香 2019「総論 縄文時代後期—弥生時代の植物利用と土器組成」[農耕文化複合(下)] 雄山閣出版

- 柴田洋孝 2020 「長谷のかめやき—長谷焼調査の覚書—」『長野県埋蔵文化財センター年報』36
- 城ヶ谷和広 2015 「第4章 第5節編年論 須恵器」『愛知県史 別編 窯業 1 古代 鍛冶系』
- 白石太一郎 2006 「須恵器の暦年代」『年代のものさし—陶器の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 杉山浩平 2010 「第1章東日本における大陸系磨製石器の展開」『東日本弥生社会の石器研究』六一書房
- 鈴木正博 2014 「奥東京湾方面の「栗林式緑辺文化」に学ぶ」『古代』133 早稲田大学考古学会
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 「瀬戸市史 陶磁史編 五瀬戸の本業焼」愛知県瀬戸市
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 2003 「江戸時代美濃窯の変遷」『江戸時代の美濃窯』
- 滝沢 誠 1999 「日本型農耕社会の形成—古墳時代における水田開発」『現代の考古学3』朝倉書房
- 田口昭二 1982 「美濃窯の灰軸陶器と緑軸陶器」『考古学ジャーナル』211
- 千曲市教育委員会 2012 「屋代遺跡群地之日道跡2・古道道跡2」
- 千野 浩 1989 「千曲川水系における後期弥生土器の変遷」『信濃』41-4
- 千野 浩 1993 「第5章 3本村東沖道跡における古墳時代中期以降の土器編年について」『本村東沖道跡』長野市教育委員会
- 千野 浩 2001 「第4章考察」『長野吉田高校グランド道跡Ⅱ』長野市教育委員会
- 鶴木航介 2023 「第1部 第1章木材加工の基礎研究」『木材がつなぐ弥生社会』京都大学学術出版会
- 寺島孝典 1993 「第Ⅳ章 第3節弥生時代中期後半の土器様相」『松原道跡Ⅲ』長野市教育委員会
- 寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」『99 シンポジウム 長野県の弥生土器編年』長野県考古学会
- 鳥羽英継 1998 「第5章 第3節古墳時代の土器編年」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 弥生・古墳時代編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 29
- 鳥羽英継 1999 「第5章 第1節土器」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代その1』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42
- 鳥羽英継 1999 「第8章 第1節屋代遺跡群における古代の土器」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代その1』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42
- 富元久美子 1999 「飯能の遺跡 (27) 飯能焼原窯跡 第1・2次調査」飯能市教育委員会
- 中澤 武 2020 「先史・古代における気候変動の概観」『気候変動から読みなおす日本史 (3)』臨川書房
- 中沢彦彦 2014 「栽培植物利用の多様性と展開」『季刊 考古学 別冊 21 藤山園出版』
- 中島英子 1997 「第9章調査の成果と課題 第3節高丘丘陵古窯址群の須恵器生産について」『小布施町内・中野市内その1・その2』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 24
- 長野県埋蔵文化財センター 1988 「塩尻市内その1」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 2
- 長野県埋蔵文化財センター 1990 「松本市内その1 総集編」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 4
- 長野県埋蔵文化財センター 1994 「更埴市内・長野市内その1：烏林道跡・小坂西道跡・鶴巻七尋岩除道跡・赤沢城跡・塩崎城見山 磐道跡・地之日道跡・一丁目道跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 16
- 長野県埋蔵文化財センター 1994 「鶴前道跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 17
- 長野県埋蔵文化財センター 1994 「栗林道跡・七瀬道跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 19
- 長野県埋蔵文化財センター 1997 「篠ノ井道跡群」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22
- 長野県埋蔵文化財センター 1997 「石川条里遺跡」第1分冊 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 26
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 「屋代遺跡群 更埴条里遺跡 弥生・古墳編」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 29
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 「篠ノ井道跡群・石川条里遺跡・築地道跡・於下道跡・今里道跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 33
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「小滝道跡・北之脇道跡・前山田道跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 43
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「松原道跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「川田条里遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 47

- 長野県埋蔵文化財センター 2000 「更埴系遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）古代2・中世・近世編」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 50
- 長野県埋蔵文化財センター 2013 「川久保・宮沖遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 99
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 「勝沢遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100
- 中野市歴史民俗資料館 2003 「新井大石 高岡丘陵古窯址群」
- 長野市教育委員会 1983 「浅川扇状地遺跡群廻田遺跡 川田系里的遺構・石川系里的遺構」長野市の埋蔵文化財 13
- 長野市教育委員会 1984 「石川系里的遺構 上駒沢遺跡」長野市の埋蔵文化財 14
- 長野市教育委員会 1993 「松原遺跡Ⅲ」長野市の埋蔵文化財 58
- 長野市教育委員会 2014 「栗田城跡（4）」長野市の埋蔵文化財 133
- 長野市教育委員会 2022 「松代城下町跡（4）・代官町窯跡」長野市の埋蔵文化財 165
- 賛田 明 1999 「第V章 第3節木製品」『榎田遺跡』第2分冊 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 37
- 賛田 明 2000 「第1章壺形土器の文様帯構造と変遷」『松原遺跡 弥生総論7 弥生時代・考察 検索』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
- 西山克己 1997 「第3章 第1節藤ノ井遺跡群での土器分類と時期区分 4 古代の土器と時期区分」『藤ノ井遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22
- 野上建紀 2000 「磁器の編年（色絵以外）1. 碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』
- 野村一寿 1990 「第3章 第4節中・近世の掘立柱建物址」『松本市内その1 総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 4
- 野村一寿 1990 「第3章 第6節中世土器・陶磁器」『松本市内その1 総論編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 4
- 箱崎和久 2001 「第一章 第三節文献にみる近世信濃の民家」『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 埋もれた中近世の住まい』同成社
- 服部実喜 2001 「第一章 第一節南関東地域における中近世建物遺構の変遷」『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 埋もれた中近世の住まい』同成社
- 馬場伸一郎 2008 「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集 国立歴史民俗博物館
- 馬場伸一郎・遠藤英子 2017 「弥生時代中期の栗林式土器分布圏における栽培植物」『明治大学黒曜石研究センター紀要』No.7 明治大学黒曜石研究センター
- 馬場伸一郎 2020 「弥生時代後期の較正年代」『長野県埋蔵文化財センター年報』37
- 原 明秀 1989 「第7章 第2節吉田川西遺跡における食器の変容」『吉田川西遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3
- 廣田和穂 1999 「V章 第1節 3 古墳時代中～後期」『榎田遺跡』第2分冊 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 37
- 広島県教育委員会 1995 「吉川元春館跡」
- 広瀬和夫 1988 「堰と水路」『弥生時代の研究』2 雄山閣出版
- 藤沢良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁第8号』東洋陶磁学会
- 藤沢良祐 1986 「瀬戸大釜発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1987 「本業焼の研究（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1988 「本業焼の研究（2）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1989 「本業焼の研究（3）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VIII』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1993 「第4章瀬戸・美濃大釜の編年」『瀬戸市史 陶磁史編四』瀬戸市史編纂委員会
- 町田勝則 1992 「信濃における弥生時代石器文化の終焉」『第31回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の石器—その始まりと終わり』理

蔵文化財研究会・関西世話人会

- 町田勝則 1993「信濃に於ける米作りと採取」『長野県考古学会誌』68号 長野県考古学会
- 町田勝則 1994「信濃に於ける米作りと栽培」『長野県考古学会誌』73号 長野県考古学会
- 松本市教育委員会 2002「新村遺跡」松本市文化財調査報告書 156
- 宮原晋一 1988「2石斧・鉄斧のどちらで加工したか」『弥生文化の研究』10 雄山閣出版
- 宮脇正美 1996「四宮荘北条における居館と用水」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
- 盛 峰雄 2000「陶器の編年1. 碗・皿」『九州陶磁の編年』
- 森嶋 稔・米山一致 1978「古代・中世」『更級埴科地方誌』第2巻
- 吉岡康暢 1994「珠洲陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』吉川弘文館

付表1 石川条里遺跡 竪立柱建物跡一覧

ST 番号	位置 =B/C	位置 グリッド	北 西 面	土和方位	柱間数	幅尺(m)		柱間材 種類	柱立、並 (m)		建物	重石関係		時期	調査番号
						幅尺	深さ		幅行	並行		△計	▽計		
001	1	KV22・ 25・R R32・G5	1	K.82° W	7間×2間	13.51	5.53	薪杭	2.02~2.01	1.73~1.96	上部、礎石、敷 石地、溝成母上 層	△S0019	中	38・40・51・52・53	
002	1	KR01・05	1	K.6° E	3間×2間	6.30	4.04	薪杭	1.55~2.52	1.81~2.03	—	△S0029 △S1002	中	38・39・51・54	
003	1	KV23	1	K.70° W	3間×	4.41	—	不明	1.38~1.40	—	—	△S0019	中	38・49・55	
004	1	KW15・ 17	1	K.78° W	4間×1間	9.33	4.35	薪杭	2.24~2.50	4.30~4.33	—	—	中	38・38・09・55	
005	1	KW15・ 17	1	K.72° W	3間×2間	7.33	4.30	薪杭	2.30~2.52	2.11~2.20	L層	—	中	38・38・09・55	
006	1	KW24・25	1	K.70° W	3間×	5.60	—	不明	1.71~2.00	—	—	△S0010	中	38・49・55	

付表2 石川条里遺跡 櫓列一覧

SA 番号	位置 =B/C	位置 グリッド	北西面	土和方位	幅尺(m)		バット数	バット間距離 (m)	建物	重石関係		時期	調査番号
					長さ	深さ				△計	▽計		
001	1	KAO9・10	1	K.87° W	4.24	5	1.10~1.42	—	△S0029	近世	38・51・57		
002	1	KAO9・14・18・19	1	K.13° E	19.39	19	0.51~2.80	—	△S0088	近世	38・39・51・58		
003	1	KW・9・23・24	1	K.20° E	8.72	24	0.50~1.21	—	△S0091	近世	38・48・57		
004	1	KV25・W21	3	K.72° W	7.20	13	0.63~0.65	—	△S0109	近世	38・49・57		
005	1	KU20・24・25、KAO4・09	1	K.11° E	19.88	11	1.24~2.50	—	—	近世	38・51・58		

付表3 石川条里遺跡 墓跡一覧

SM 番号	位置 =B/C	位置 グリッド	北西面	土和方位	平面形	幅尺(m)			建物	重石関係		時期	調査番号
						長	幅	深さ		△計	▽計		
001	3b・4a	WR14・19	1	K.11° E	長方形	0.70	0.52	0.29	人骨	—	近世	41・72	
002	3b・4a	WR22	1	K.7° E	長方形	1.18	0.84	0.40	土器、人骨	—	近世	41・72	
003	3b・4a	WR22	1	K.2° W	長方形	0.58	0.46	0.13	人骨	—	近世	41・73	
004	3b・4a	WR21	1	K.8° W	長方形	2.10	1.30	0.70	人骨	—	近世	41・73	
005	3b・4a	WR14	1	K.1° W	不整形	0.95	0.55	0.10	人骨	△S0043	近世	41・73	

付表4 石川条里遺跡 天地返し跡一覧

SL 番号	位置 =B/C	位置 グリッド	北西面	土和方位	幅尺(m)			溝幅	建物	重石関係		時期	調査番号
					長	幅	深さ			△計	▽計		
001	1	KR05・10・15・C06・11・12	1	7.11	16.22	0.22	28cm	—	△S0030b	近	古	38・48・50	
002	1	KR01・02・06・07	1	9.90	12.82	0.07	32cm	—	△S006a、 S3062・674・694	近	古	38・49・50・51	
003	2	KR03・07・08・09・12・13・14	1	11.75	16.31	0.11	32cm	—	—	近	古	39	
014	1d	KW・9・20・24、KX04・08・09・13	1	1.91	11.34	0.08	52cm	—	△S0125・131 ▽S0128	近	古	38・48	

付表5 石川条里遺跡 土坑一覧

SK 番号	位置		調査面	形状			規模 (m)			遺物	垂直関係 △旧 ▼新 (付不附)	備考	時期	図面番号
	地区	グリッド		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ						
001	1	KB05・10	1	楕円形	C	3.64	2.71	0.90	土器・陶器・石器・瓦質	△SK027 ▼SD002	大塚長方 形土坑	中世	38・49・50・70	
002	1	KB04・05	1	上部楕円形 下部円形	B	(4.4)	3.67	1.32	土器・陶器・磁器・石器	▼SD014・018	井戸跡	中世	38・49・50・59	
003	1	KC06・07	1	円形	C	1.34	1.29	1.89	土器・陶器・磁器・灰質	—	井戸跡	中世	38・48・50・59	
004	1	KC06	1	円形	G	2.36	2.21	不明	土器・瓦質・灰質	△SD003 ▼SK011	井戸跡	中世	38・48・50・59	
005	1	KC06	1	不整形円形	B	1.20	1.19	0.82	土器・瓦質	△SD008	井戸跡	中世	38・48・50・59	
006	1	KC07	1	円形	D	0.92	0.90	0.78	土器・石器	—	井戸跡	中世	38・48・50・60	
007	1	KC07	1	円形	C	0.98	0.92	1.61	土器	—	井戸跡	中世	38・48・50・60	
009	1	ⅡV25	1	円形	B	1.52	1.29	1.39	土器・瓦質	△SD010	井戸跡	中世	38・49・60	
010	1	KB05・C01	1	円形	D	1.05	0.99	1.43	土器	△SD002	井戸跡	中世	38・49・60	
011	1	KC06	1	円形	G	1.43	1.14	不明	土器・磁器・瓦質	△SK004 ▼SD001	井戸跡	中世	38・48・50・59	
012	1	ⅡV19・24	1	不整形長方形	B	4.52	2.88	0.63	土器・陶器・石器・瓦製品	△SK337・SC029	大塚長方 形土坑	中世	38・49・70	
013	1	KB04	1	円形	C	1.90	1.31	1.70	土器	—	井戸跡	中世	38・49・50・60	
014	1	KB09	1	円形	B	1.81	1.74	1.10	土器	△SD010	井戸跡	中世	38・50・60	
015	1	KB04・09	1	円形	B	1.28	1.15	1.73	—	—	井戸跡	中世	38・49・50・61	
016	1	KB09	1	円形	B	1.73	1.56	1.30	土器	△SD009b	井戸跡	中世	38・50・61	
017	1	KC06・07	1	円形	B	1.76	1.68	1.03	土器・陶器・石器・瓦製品	△SD016	井戸跡	中世	38・48・50・61	
020	1	KB04	1	円形	C	2.01	1.90	1.52	土器・陶器	—	井戸跡	中世	38・49・50・61	
021	1	KB10	1	楕円形	D	1.33	1.32	0.70	土器	△SD009a	井戸跡	中世	38・50・61	
023	1	KB09	1	円形	B	1.59	1.52	1.36	—	△SD009a	井戸跡	中世	38・50・61	
026	1	KB03	1	円形	B	0.17	0.14	0.21	土器	—	—	中世	49・50	
041	1	ⅡV16	1	楕円形	D	1.05	0.78	0.36	土器・陶器・石器・瓦質	—	—	中世	49・51・71	
042	1	ⅡV21	1	楕円形	B	0.27	0.20	0.45	瓦製品	—	—	中世	49・51	
055	1	KB10	1	円形	B	0.23	0.18	0.39	瓦質	—	—	中世	50	
062	1	KB01	1	楕円形	A	2.69	1.78	0.14	土器・陶器・磁器・土製品	△SK074 ▼SL002	井戸跡	中世	38・49・51・62	
074	1	KB01	1	円形	B	1.89	1.58	1.27	灰質	▼SK062・SL002	井戸跡	中世	38・49・51・62	
079	1	ⅡU25	1	楕円形	A	0.34	0.25	0.06	土器	—	—	中世	51	
080	1	KA05	1	下部円形	G	3.85	3.29	不明	土器・陶器	▼SD020	井戸跡	中世	38・49・51・62	
091	1	KA10	1	円形	B	0.27	0.25	0.10	土器	▼SD023	柱穴か	中世	51	
093	1	KB01	1	楕円形	E	0.54	0.42	0.34	土器	—	—	中世	49	
094	1	KB06	1	楕円形	C	2.10	1.99	0.47	土器・陶器・磁器・石器・ 灰質	▼SL002	井戸跡	中世	38・51	
107	1	ⅡV23	1	楕円形	A	0.34	0.22	0.12	土器	—	—	柱穴か	中世	49
119	1	KB02	1	円形	B	0.28	0.26	0.18	土器	—	—	柱穴か	中世	49
155	1	ⅡV21	1	楕円形	E	0.49	0.34	0.40	土器・陶器	—	—	柱穴か	中世	49・51
156	1	ⅡV21	1	円形	B	0.16	0.13	0.09	瓦製品	—	—	—	中世	49・51
163	1	ⅡV22	1	円形	B	0.19	0.18	0.14	土器	—	—	柱穴か	中世	49
175	1	ⅡV22	1	円形	B	0.30	0.24	0.16	土器	—	—	柱穴か	中世	49
176	1	ⅡV21	1	楕円形	B	0.48	0.22	0.32	陶器	—	—	柱穴か	中世	49
177	1	ⅡV22	1	不整形円形	B	0.41	0.28	0.27	土器・陶器	△SK178	柱穴か	中世	49・51	
178	1	ⅡV22	1	円形	B	(0.21)	0.35	0.11	土器・陶器	▼SK177	—	中世	49・51	
179	1	ⅡV23	1	不整形円形	B	(0.33)	0.30	0.43	石器	—	—	—	中世	49
187	1	ⅡV23	1	円形	B	0.26	0.24	0.30	土器	—	—	柱穴か	中世	49
188	1	ⅡV16	1	円形	B	0.19	0.18	0.20	土器・磁器	—	—	柱穴か	中世	49・51
191	1	KA10	1	円形	B	1.46	1.39	1.59	—	▼SD020・SD023	井戸跡	中世	38・51	
196	1	KC11	1	円形	C	1.79	1.75	1.84	土器・陶器・磁器・瓦質	—	—	井戸跡	中世	38・50
197	1	KB15・C11	1	円形	B	2.58	2.27	1.11	—	—	井戸跡	中世	38・50	
198	1	KC16	1	円形	C	1.10	1.07	0.88	—	△SD074	井戸跡	中世	38・50・64	
200	1	KB11・12	1	円形	G	2.30	2.27	1.93	灰質	△SD083	井戸跡	中世	38・50・51・64	
242	1	KC16・17	1	楕円形	B	0.40	0.26	0.46	土器	—	—	柱穴か	中世	50
243	1	KC16	1	円形	B	0.42	0.36	0.26	土器	—	—	柱穴か	中世	50
246	1	KC11	1	不整形円形	E	0.51	0.43	0.40	土器・陶器・磁器	—	—	柱穴か	中世	38・50
249	1	KB20	1	円形	B	0.20	0.19	0.21	土器・磁器	—	—	柱穴か	中世	50
256	1	KC11	1	円形	A	0.91	0.76	0.31	石器	▼SD023・SL001	—	中世	50	
257	1	KC16	1	不整形円形	B	1.74	1.45	0.55	土器	—	—	井戸跡	中世	38・50・64
269	1	ⅡV22	1	円形	B	0.29	0.27	0.17	瓦質	—	—	—	中世	48
270	1	KB08	1	円形	D	0.94	0.84	1.24	土器・陶器	△SD009	井戸跡	中世	38・50・64	



SK 番号	地区	位置 グリッド	調査面	形状			規模 (m)			遺物	重複関係 △△記 ▼△記 (付不附)	備考	時期	図取番号
				平面形	断面形	長輪	短輪	深さ						
273	1	ⅡW22	1	円形	B	0.18	0.16	0.20	土器・陶器・瓦葺	—	柱穴か	中世	48	
276	1	ⅡW22・ⅡC02	1	円形	B	1.20	1.13	0.68	土器・陶器	△SK331	井戸跡	中世	38・48・65	
277	1	ⅡW23	1	円形	B	0.78	1.03	1.40	—	▼SD087	井戸跡	中世	38・48・65	
278	1	ⅡW16	1	円形	D	1.17	1.11	2.40	土器	—	井戸跡	中世	38・49・65	
279	1	ⅡW23	1	円形	B	1.20	0.91	1.67	土器・木製品	▼SD085・SD086	井戸跡	中世	38・48・65	
296	1	ⅡW16	1	楕円形	B	0.32	0.24	0.44	土器	—	柱穴か	中世	48	
324	1	ⅡC03	1	円形	B	0.23	0.23	0.14	土器	—	柱穴か	中世	48	
331	1	ⅡC02	1	円形	B	0.37	0.34	0.20	土器	▼SK276	柱穴か	中世	48	
337	1	ⅡV19・24	1	楕円形	C	1.65	(1.16)	0.41	土器・陶器	▼SK012・SK343	—	中世	49・71	
343	1	ⅡV19	1	円形	F	1.40	1.33	0.24	土器	△SK337	—	中世	49・71	
356	1	ⅡW17・22	1	不整形	E	3.20	(2.18)	0.10	土器・土製品・石製品・ 散件	▼SD087・SC029	—	平安	22・35	
369	1	ⅡA13	1	楕丸長方形	D	0.77	0.57	0.27	—	—	—	中世	39・51・71	
370	1	ⅡA04	1	楕丸長方形	D	0.66	0.73	0.10	—	△SD009a	—	中世	39・51・71	
507	4b	ⅡO07	1	円形	B	0.78	0.64	0.51	—	—	井戸跡	中世	41・66	
508	4b	ⅡO12	1	楕円形	C	1.34	0.99	0.79	土器・種子	—	井戸跡	中世	41・66	
509	4b	ⅡO12	1	楕円形	D	1.14	1.01	0.64	土器	—	井戸跡	中世	41・66	
510	4b	ⅡO18	1	楕丸長方形	F	1.62	1.25	0.72	土器	△SD064	井戸跡	中世	41・66	
515	4b	ⅡO22	1	円形	A	0.39	0.37	0.07	石器	—	—	中世	41	
518	4b	ⅡO11	1	円形	D	0.81	0.57	0.28	—	△SK521	井戸跡	中世	41・66	
519	4b	ⅡO16	1	円形	D	0.87	0.75	0.30	—	—	井戸跡	中世	41・66	
520	4b	ⅡO17	1	楕円形	D	1.29	1.01	0.36	—	△SK533	井戸跡	中世	41・66	
521	4b	ⅡO11	1	円形	C	0.80	0.52	0.37	—	▼SK518	井戸跡	中世	41・66	
522	4b	ⅡO16	1	楕円形	C	0.86	0.84	0.41	—	—	井戸跡	中世	41・66	
523	4b	ⅡO16・21	1	円形	C	0.79	0.71	0.44	—	—	井戸跡	中世	41・66	
525	4b	ⅡO21	1	円形	F	0.96	0.95	0.51	—	—	井戸跡	中世	41・67	
533	4b	ⅡO17	1	楕丸長方形	B	1.80	1.20	0.62	土器	▼SK520	井戸跡	中世	41・66	
535	4b	ⅡO07・08	1	円形	C	0.92	0.71	0.55	—	△SD064 ▼SK536	—	中世	41・67	
536	4b-4c	ⅡO08	1	楕丸長方形	C	1.22	1.21	0.48	—	△SK535・SK542	井戸跡	中世	41・67	
538	4b	ⅡO13	1	楕丸長方形	D	1.01	0.91	0.79	—	—	井戸跡	中世	41・67	
540	3b-4a	ⅡO09・14	1	円形	B	0.75	0.67	0.44	—	△SD012	井戸跡	中世	42・67	
541	3b-4a	ⅡK14	1	楕円形	C	1.47	1.06	0.69	—	△SD012	井戸跡	中世	42・67	
542	4b-4c	ⅡO08	1	楕丸長方形	C	1.65	1.23	0.66	石器・種子	▼SK536	井戸跡	中世	41・67	
547	3b-4a	ⅡF18・23	1	—	—	—	—	—	土器	—	古墳	15・17		
548	4b	ⅡO17	1	円形	D	0.95	0.81	0.41	—	—	井戸跡	中世	41・67	
549	3b-4a	ⅡO02	1	楕円形	B	0.71	0.56	0.77	土器	—	—	中世	15・17	
552	4c	ⅡO03	1	円形	A	0.99	0.90	0.23	—	—	井戸跡	中世	41・68	
553	4c	ⅡJ22・23・O02・03	1	円形	C	1.28	(0.87)	0.38	—	—	井戸跡	中世	41・68	
554	4c	ⅡO02	1	円形	C	0.79	0.68	0.37	—	—	井戸跡	中世	41・68	
556	4c	ⅡJ22	1	円形	C	0.70	0.70	0.43	—	—	井戸跡	中世	41・68	
557	4c	ⅡJ21・ⅡO01	1	円形	C	0.63	0.60	0.34	—	—	井戸跡	中世	41・68	
558	4c	ⅡJ16	1	方形	C	2.11	2.11	0.37	—	—	井戸跡	中世	41・68	
560	4c	ⅡO01	1	楕円形	D	0.86	0.67	0.19	—	—	井戸跡	中世	41・68	
561	4c	ⅡJ16	1	円形	A	0.51	0.50	0.16	—	—	井戸跡	中世	41・68	
565	3b-4a	ⅡF23	1	円形	B	0.54	0.46	0.20	土器	—	古墳	15・17		
604	6	ⅡN23	1	楕丸長方形	C	1.51	0.86	0.46	—	—	井戸跡	中世	44・71	
701	7a	ⅡVW10	1	円形	C	0.52	0.51	0.20	土器・磁器	—	—	近世	44	
702	7a	ⅡVW10	1	円形	C	0.52	0.49	0.16	土器	—	—	近世	44	
721	7a	ⅡR24・25	1	円形	D	1.33	1.20	0.57	—	—	井戸跡	中世	44・69	
901	9	ⅡJ19	1	楕円形	A	1.04	0.79	0.21	—	—	井戸跡	中世	45・69	
902	9	ⅡJ19	1	楕丸長方形	B	1.89	1.44	0.45	土器	—	—	中世	45・69	
903	9	ⅡJ13・14	1	楕円形	A	1.31	0.91	0.20	—	—	井戸跡	中世	45・69	
904	9	ⅡJ14・15	1	円形	B	2.70	1.22	0.31	—	—	井戸跡	中世	45・69	
905	9	ⅡJ09	1	楕丸長方形	C	1.54	1.26	0.35	—	△SD187	井戸跡	中世	45・69	
906	9	ⅡJ09	1	円形	C	0.80	0.64	0.15	—	—	井戸跡	中世	45・69	
907	9	ⅡJ09	1	円形	A	1.18	1.01	0.16	—	—	井戸跡	中世	45・69	
908	9	ⅡR02	1	円形	D	0.74	0.70	0.42	—	—	井戸跡	中世	45・69	
1103	11C	ⅡVB04	1	円形	B	0.88	0.70	0.65	土器	—	—	中世	46	

付表6 石川条里遺跡 溝跡一覧

SD 番号	地区	位置 グリッド	調査 位置	傾斜方向	形状 平面形 断面形	規模 (m)			遺物	重複関係		備考	時期	図番番号
						長さ	最大幅	深さ		△ (0)	▽ (0)			
001	1		ⅡV19・20・24・ 25・W21・22、Ⅹ B10・C01・02・ 06	南東→ 北西 北東→ 南西	中心 く 細曲	B	(42.16)	1.49	0.48	土器・陶器・磁 器・土製品・石 器・鉄製品	△SC029、SD010、SK011 ▼SD015・086、ST005 (不)SD002・008	区画溝跡	中世	38・49・ 50・74
002	1		ⅡXB5・C01	北東→ 南西	湾曲	B	10.12	1.68	0.17	土器・陶器・磁 器・土製品・鉄 製品・鉄片	△SK001 ▼SK010 (不)SD001	区画溝跡	中世	38・49・ 50・74
003	1		ⅡXC01・06	北東→ 南西	直線	A	5.35	0.55	0.07	土器	▼SK004		中世	38・48・ 50・74
004	1		ⅡXC01・06	北東→ 南西	直線	A	3.95	0.31	0.04	鉄製品	—		近世	38・49・ 50・74
005	1		ⅡXC01・06	北東→ 南西	直線	A	3.91	0.33	0.04	—	—		近世	38・49・ 50・74
006	1		ⅡV25・ⅡXB5	北東→ 南西	直線	E	3.82	0.29	0.03	—	△SC027		近世	38・49・74
007	1		ⅡXB10	北東→ 南西	直線	E	3.09	0.29	0.18	土器	△SC027、SK001 (不)SD009a		中世	38・50・74
008	1		ⅡXC06	北西→ 南東	直線	B	1.47	0.22	0.11	—	▼SK005 (不)SD001		中世	38・50・74
009a	1		ⅡA03・04・05・ 10・B01・06・ 07・08・09・10・ C06・07・11・12	北西→ 南東	直線	C	(72.51)	1.19	0.30	土器・陶器・磁 器・石器・鉄製 品・銅製品・鉄 片	△SD016、SK116・270 ▼SD009b・017・126・ 019・020、SK021・023・ 370、SL001・002、SA005、 ST002 (不)SD007・015	区画溝跡	中世	38・39・ 48・49・ 50・51・74
009b	1		ⅡXB09・10	北西→ 南東	直線	C	9.21	0.89	0.52	鉄片	△SD009a・010 ▼SD017、SK016 △SC029	区画溝跡	中世	38・50
010	1・ 北		ⅡV15・20	北北東→ 南南西	ほぼ 直線	A	(5.8)	0.53	0.13	—	▼SD001・009・085・086・ 087・092、SK009・014 (不)ST006	区画溝跡	中世	38・49・74
011	1		ⅡXB5	北東→ 南西	直線	E	2.50	0.33	0.04	—	△SC027・028		近世	38・49・74
012	1		ⅡV24、ⅡB04・ B09	北西→ 南東	ほぼ 直線	A	(9.01)	0.69	0.06	—	▼SD013		奈良	22・35
013	1		ⅡV23・24、 ⅡXB03・B04	北東→ 南西	ほぼ 直線	A	5.54	0.73	0.08	—	△SD012		近世	38・49・74
014	1		ⅡXB04	北西→ 南東	やや 湾曲	A	(5.27)	0.39	0.07	土器	(不)SK002		奈良	22・35
015	1		ⅡXB10	北東→ 南西	直線	B	2.73	0.31	0.27	—	△SD001 (不)SD009a		中世	38・50・74
016	1		ⅡXC06・07	北東→ 南西	直線	E	(5.82)	0.90	0.11	土器	▼SD009a、SK017		近世	38・48・ 50・74
017	1・ 西		ⅡXB10・C06・07・ 12	北東→ 南西 北東→ 南西 北西→ 南東	直線	B	(22.41)	0.54	0.32	不明銅製品	△SD009a・009b・016 ▼SL001	区画溝跡	中世	38・48・ 50・74
018	1		ⅡXB04	北西→ 南東	湾曲	A	1.84	0.61	0.31	—	△SK002		近世	38・49・74
019	1		ⅡV23・ⅡXB02・ 03・07	北東→ 南西	直線	C	(21.08)	0.69	0.31	土器・陶器・石 器・銅片	△SD009a、ST001・ST003		近世	38・49・ 50・74
020	1		ⅡU25・ⅡV16・ 21、ⅡA05・10	北東→ 南西	直線	A	(23.91)	0.76	0.10	土器・陶器	△SK080・191、SD009a ▼SA001、SD023		近世	38・49・ 51・74
021	2		ⅡD13・14・15・ 19・20・E11・16	西北西→ 東南東	ほぼ 直線	C	(16.1)	0.45	0.24	土器	▼SD22	用水跡	近世	39・74
022	2		ⅡD13・14・15・ 19・20・E16	西北西→ 東南東	直線	C	(19.2)	0.65	0.40	土器・陶器	△SD21	用水跡	近世	39・74
023	1・ 西-2		ⅡB09・10、Ⅱ A06・07・09・ 10・B06・07・ 08・09・12・13・ 14・15・C11・12	北東→ 南西 北西→ 南東	1字に 細曲	B	(113.7)	1.70	0.34	土器・陶器・磁 器・石器・石製 品・瓦・鉄片	△SC001、SD020・046・ 127、SK091・191・256、 SL001・002・003、ST002 ▼SD024・025・088・126、 SK091	用水跡	近世	38・39・ 50・51・74
024	2		ⅡB04・05・09・ 10・14、ⅡA06・ 07	西北西→ 東南東 南西→ 北東	1字に 細曲	B	(47.64)	0.81	0.21	土器・陶器・磁 器・石器	△SC001、SD023・025・ 046・125 (不)SD046	用水跡	近世	39・74
025	1西- 2		ⅡB04・05・08・ 09・10・A06・ 07・08	西北西→ 東南東	直線	A	(33.63)	0.55	0.14	土器	△SC001、SD046 ▼SD023・024	用水跡	近世	39・74
026	3西- 4a		ⅡH11・12	西南西→ 東北東	直線	A	(8.17)	0.92	0.12	土器	△SD032	用水跡	近世	40・74

SD 番号	位置		調査 年度	掘削方向	形状		規模 (m)			遺物	重複関係	備考	時期	採取番号
	地区	グリッド			平面 形状	断面 形状	長さ	最大幅	深さ					
027	30-4a	WG03・04・05・08・09・10・H01・02	1	西南西→東北東	L字に掘削	A	(27.65)	0.87	0.10	—	△SD028 ▼SD033・037・038・039		近世	40・74
028	30-4a	VH01・06・11	1	北北西→南南東	直線	A	(16.79)	0.70	0.11	土器	△SD104 ▼SD027・029・030・031		平安	23・35
029	30-4a	VH01・06・11	1	北北西→南南東	直線	A	(7.16)	0.28	0.04	—	△SD028	用水跡	近世	40・74
030	30-4a	WG04・05・H01	1	北北西→南南東	直線	C	(16.93)	0.57	0.19	—	△SD028	用水跡	近世	40・74
031	30-4a	WG05・H01	1	西→東	直線	C	(9.44)	0.78	0.22	—	△SD028	用水跡	近世	40・74
032	30-4a	VH11・16	1	北北西→南南東	直線	A	(9.8)	1.45	0.20	土器	△SD104 ▼SD026	用水跡	平安	23・35
033	30-4a	WG03・04・08・09・13・14・19	1	北北東→西南西	ほぼ直線	B	(23.55)	0.36	0.20	土器・陶器・磁器・鉄製品	△SD027・037・065	用水跡	近世	40・75
034	30-4a	WG19・24・H04・09・14	1	北北西→南南東	直線	C	(29.21)	1.26	0.53	—	△SD048		近世	40・75
035	30-4a	WG18・19・23・24・H04・09・14	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(29.29)	0.98	0.24	—	△SD048		近世	40・75
036	30-4a	WG18・23・H03・04・09・14	1	北北西→南南東	ほぼ直線	B	(29.43)	0.87	0.20	土器・陶器	△SD048		近世	40・75
037	30-4a	WG03・04・08・09・13・14・19	1	北北東→西南西	ほぼ直線	B	(24.5)	0.71	0.16	土器・陶器・鉄器	△SD027・065・105 ▼SD033	用水跡	近世	40・75
038	30-4a	WG03・08・13	1	北北東→西南西	ほぼ直線	B	(16.38)	0.33	0.11	土器	△SD027	用水跡	近世	40・75
039	30-4a	WG03・08・13・19・23	1	北北東→西南西	ほぼ直線	C	(28.17)	0.71	0.14	鉄・骨	△SD027・065	用水跡	近世	40・75
040	30-4a	WG06・11・16	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(15.42)	0.57	0.15	土器・木製品	△SC009・041	用水跡	近世	40・41・75
041	30-4a	WG06・11・16	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(18.74)	0.99	0.37	土器・陶器・木製品	▼SD040	用水跡	近世	40・41・75
042	30-4a	WG19・24・H04・09・14	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(13.62)	0.34	0.16	—	△SD048		近世	40・75
043	30-4a	WG19・24・K04・09・14	1	北北東→西南西	ほぼ直線	C	(36.85)	0.69	0.24	土器・陶器・半セトル・鉄器・石器	▼SM005	用水跡	近世	41・42・75
044	30-4a	VH18・19	1	北北東→西南西	ほぼ直線	A	(6.03)	0.42	0.10	—	—	用水跡	近世	41・75
046	30-4a	VH04・09・14	2	北北西→南南東	直線	B	(9.71)	0.57	0.03	—	△SC001 ▼SD023・024・025	大柱脚に伴う用水跡か	平安	22・35
047	2	WG23・H03・08	1	北北東→西南西	ほぼ直線	B	(15.16)	0.43	0.08	—	▼SD048		近世	40・75
048	3a	VH03・04	1	北東→南西	やや湾曲	C	(14.26)	0.76	0.18	—	△SC002・SD047 ▼SD034・035・036・042		奈良	23・35
049	3	WG11・12・13	1	西→東	ほぼ直線	A	(12.8)	1.62	0.04	—	△SC011		近世	41・42・75
050	30-4a	WG11・12・13	1	北北西→南南東	直線	D	(11.57)	0.87	0.45	—	△SC011・SD055		近世	41・42・75
051	30-4a	WG01・02	1	西南西→東北東	ほぼ直線	E	(19.0)	1.12	0.14	—	△SC011 ▼SD052・060		近世	41・42・75
052	30-4a	WG01・02	1	北北西→南南東	ほぼ直線	A	9.61	2.06	0.06	—	△SC011・SD051・055		近世	41・42・75
053	30-4a	WG23・K03	1	北北東→西南西	ほぼ直線	C	(7.44)	0.42	0.09	—	△SD061		近世	41・75
055	30-4a	WG23・K03・08・13	1	北北東→西南西	ほぼ直線	A	(28.02)	2.06	0.40	土器	▼SD050・052		近世	41・42・75
056a	30-4a	VH19・24・25	1	北北西→南南東	ほぼ直線	C	(17.01)	0.99	0.16	土器・陶器・磁器	△SC010	用水跡	近世	41・42・75
056b	30-4a	VH19・24・25	1	—	直線	C	—	—	—	—	用水跡	近世	40・41	
057	30-4a	VH24・25・G21	1	西→東	直線	B	16.16	1.06	0.27	土器・陶器・磁器	△SC010 ▼SD063ab	用水跡	近世	41・42・75
058a	30-4a	WG16・17・21・22・23・24・104	1	北北西→南南東 北北西→南南東	L字に掘削	C	(29.8)	1.12	0.43	土器・陶器・磁器・石器	△SC008・015・SD058bc・063・065・098	用水跡	近世	40・75
058b	30-4a	WG21・22・23・24	1	北北西→南南東	直線	B	(17.75)	不明	0.38	土器・石器	▼SD058a	用水跡	近世	40・75
058c	30-4a	WG21・22・23・24	1	—	直線	—	—	—	—	▼SD058a	用水跡	近世	40	
059	30-4a	WG21・101・06	1	北北東→西南西	直線	A	(16.48)	0.64	0.12	木製品	—	用水跡	近世	40・41・42・75
060	30-4a	VH05・10・WG01	1	北北東→西南西	ほぼ直線	C	(3.55)	0.60	0.21	鉄器	△SD051		近世	41・76

付表6

SD 番号	位置		調査 年度	傾斜方向	平面 形状	断面 形状	規模 (m)			遺物	重複関係		備考	時期	図番番号
	地区	グリッド					長さ	最大幅	深さ		△ (旧)	▽ (新) (不) (不明)			
061	3b・ 4a	WJ23・K03・08・ 13・23・24	1	北北東→ 南南西	L字に 屈曲	D	(31.94)	1.67	0.62	土器・石器・人 骨・獣骨	▼SD053	用水跡	近世	41・42・76	
063a	3b・ 4a	WG21・L01	1	北→南	直線	B	(18.6)	1.32	0.36	土器・陶器・石 器・瓦葺	△SD057・063b ▼SK534 △SD057 ▼SD063a	用水跡	近世	40・41・ 42・76	
063b	3b・ 4a	WG21・L01・06	1	北→南	直線	C	8.2	1.32	0.32	土器・陶器	▼SD063a	用水跡	近世	40・41・76	
064	3b・ 4a	WJ22・002・07・ 08・12・13・18・ 23・T03	1	北北西→ 南南東	直線	C	(42.57)	1.29	0.30	土器	△SD066、SC044 ▼SK510・535	大船峠に 伴う用水 跡か	平安	23・24・ 35・35	
065	4b・ 4c	WG18・19・20・ 23・L03	1	北北西→ 南南東	L字に 屈曲	C	(37.91)	1.47	0.56	土器・鉄製品・ 石器・瓦葺	▼SD033・037・039・058a・ 098	用水跡	近世	40・42・76	
066	3b・ 4a	W003・08・13・ 17・22・T01・02	1	北東→ 南西	直線	A	(40.86)	1.92	0.20	土器・石器	△SC044 ▼SD064・068		奈良	23・24・ 35・35	
067	4b・ 4c	W009	1	北東→ 南西	直線	E	(1.81)	0.46	0.12	—	—		近世	41・76	
068	4b	W003・08・13	1	北北西→ 南南東	直線	A	(15.64)	0.84	0.06	—	△SD066		近世	41・76	
069	4b・ 4c	W018・19	1	西北西→ 東南東	不明	A	(3.0)	不明	0.06	—	—		近世	41・76	
070	4b	W016・17・18	1	西北西→ 東南東	直線	E	(11.08)	1.29	0.04	—	△SC011		近世	41・42・76	
071	3b・ 4a	W022・023・T03	2	北西→ 南東	不整 形	A	(9.83)	1.96	0.09	—	—		奈良	23・24・ 35・35	
072	4b	W013	3	南南西→ 北北東	直線	E	(3.54)	0.48	0.07	—	—		近世	41・42・76	
073	2	W014	3	北東→ 南西	直線	A	(4.51)	0.64	0.06	—	—		古墳	14	
074	1	KB14・20・C16	1	北西→ 南東	直線	C	(19.89)	0.43	0.07	—	▼SD077、SK198	区画清掃	中世	38・50・76	
075	1	KB14・19	1	北北東→ 南南西	直線	B	(9.98)	0.82	0.16	—	—		中世	38・50・76	
076	1	KB19	1	北北西→ 南南東	直線	C	(3.14)	0.52	0.18	—	—		近世	38・50・76	
077	1	KB14・19	1	北東→ 南西	直線	A	(6.63)	0.85	0.04	—	△SD074		近世	38・50・76	
078	1	KB20	1	西北西→ 東南東	直線	C	1.52	0.38	0.08	—	—		中世	38・50・76	
080	1	KA15・B06・11	1	南南東 北東→ 南西	直線	B	(10.13)	0.80	0.31	土器・瓦・鉄 器・獣骨	△SD081・083 ▼SD023、SL002	区画清掃	中世	38・51・76	
081	1	KA20・B06・11・ 16	1	北北東→ 南南西	直線	C	(17.37)	0.49	0.10	獣骨	▼SD080		中世	38・51・76	
082	1	KA15・20	1	北東→ 南西	直線	A	(9.61)	0.69	0.09	—	—		近世	38・51・76	
083	1	KB11・12・17	1	北西→ 南東	直線	E	(18.75)	1.05	0.12	—	▼SK200、SD080、SL002		奈良	22・35	
084	1	KB12・17	1	北東→ 南西	直線	A	(3.53)	0.50	0.09	釘	▼SL001・(SD023)		近世	38・50・76	
085	1	WV20・W16・ 21・22・23	1	北西→ 南東	直線	B	(33.47)	2.50	0.40	土器・磁器 陶 器	△SC021、SD010・086・ 087・092、SK279	塩崎用水 支線用水 跡	近代	38・48・ 49・76	
086	1	WV20・W16・ 21・22・23	1	北西→ 南東	不明	D	(33.83)	不明	0.72	土器・陶器・磁 器・土製品・銭 貨	△SC021・029、SD001・ 010・092、SK279 ▼SD085	塩崎用水 支線用水 跡	近世 ～近代	38・48・ 49・76	
087	1	WV20・W16・ 17・21・22・23	1	北西→ 南東	直線	B	(27.58)	不明	0.40	銭貨	△SC022・026、SD010・ 096、SK277・356 ▼SD085		近世 ～近代	38・48・ 49・76	
088	1	KA14・15	1	北北東→ 南南西	L字に 屈曲	C	(25.76)	1.08	0.24	鉄製品・土製品	△SD023・127 ▼SD125、SA002	区画清掃	中世	38・39・ 51・77	
089a	1・1 西	KA23・24・25・ B21	1	東北東→ 西南西	直線	A	(22.22)	1.19	0.20	獣骨	△SD089b・090		近世	38・39・ 51・77	
089b	1	KA23・24・25・ B21	1	東北東→ 西南西	直線	A	(22.44)	不明	0.08	獣骨	△SD090 ▼SD089a、SL013		近世	38・39・ 51・77	
090	1	KA24・25	1	北北西→ 南南東	直線	E	(8.49)	0.43	0.02	—	▼SD089ab		近世	38・39・ 51・77	
091	1	WV14・19・24	1	北東→ 南西	直線	A	(8.21)	不明	0.10	—	△SC021 ▼SA003		近世	38・48・77	
092	1	WV19・20・25・ W21・22・23	1	北西→ 南東	直線	—	(33.54)	0.67	0.40	土器・磁器	△SC021 ▼SD085・086		近世 ～近代	38・49	

SD 番号	位置		調査 年度	掘削方向	形状	規模 (m)			遺物	遺構関係	備考	時期	民族番号
	地区	グリッド				平面 形状	断面 形状	長さ					
093	1	ⅤE05・10	5	南東→ 北西	ほぼ 直線	—	8.28	1.05	0.11	—	—	弥生	2
094	2	ⅤD15・D20・E11	4	北東→ 南西	ほぼ 直線	—	8.01	1.16	0.05	—	—	弥生	2
095	2	ⅢW22, ⅨC02・07	2	南南東→ 北北西	ほぼ 直線	A	(12.59)	0.46	0.06	—	▼SD085・086・087・092	大塚群に 伴う用水 跡か	平安 22・35
096	1	ⅢV20・W16	2	北東→ 南西	不整 形	—	(5.40)	3.58	0.14	—	▼SD087	奈良	22
097	1	ⅤG25	1	東南東→ 西北西	直線	C	(7.12)	0.49	0.13	—	—	近世	40・77
098	3b- 4a	ⅤI03・04	1	西南西→ 東北東	ほぼ 直線	B	7.92	0.54	0.30	土器	△SC015、SD065・058a	用水跡	近世 40・42・77
100	3b- 4a	ⅢV25・W21	3	南東→ 北西	不整 形	A	(7.8)	3.18	0.39	土器・費玉・矽 玉・石器	▼SA004		古墳 14
101	1	ⅤE08・09	4	南東→ 北西	不整 形	—	(4.04)	1.06	0.04	—	—	弥生	2
102	2	ⅤE08・09	4	南東→ 北西	ほぼ 直線	—	(4.17)	0.66	0.05	—	—	弥生	2
103	2	ⅤE11・E12	4	北北西→ 南南東	不整 形	—	(5.88)	2.83	0.06	—	—	弥生	2
104	2	ⅤH01・06・11・ 16	2	北北西→ 南南東	ほぼ 直線	B	(25.94)	1.29	0.23	土器	△SD105 ▼SD028・032	大塚群に 伴う用水 跡か	平安 23・35
105	3b- 4a	ⅤG14・15・H06・ 11	2	南西→ 北東	やや 蛇行	A	(24.48)	1.09	0.12	—	▼SD028・037・104		奈良 23・36
106	3b- 4a	ⅤF17・18	3	北北西→ 南南東	ほぼ 直線	A	(7.36)	0.81	0.11	—	—	奈良	23・36
107	3b- 4a	ⅤF23・K02・O3・ 07・12	3	北東→ 南西	ほぼ 直線	E	(28.14)	0.86	0.10	—	△SC043	奈良	23・36
108	3b- 4a	ⅤF19	3	北北西→ 南南東	ほぼ 直線	A	5.77	0.30	0.05	—	—	奈良	23・36
109	3b- 4a	ⅤO04・09	1	北北西→ 南南東	ほぼ 直線	A	(5.45)	0.82	0.05	—	—	近世	41・77
110	4c	ⅤO04・09	1	北北西→ 南南東	ほぼ 直線	A	(7.25)	0.78	0.16	—	—	近世	41・77
111	4c	ⅤO04	1	北北西→ 南南東	ほぼ 直線	E	(19.1)	0.49	0.10	—	—	近世	41・77
112	4c	ⅤF14・15	4	北北西→ 南南東	ほぼ 直線	E	(9.99)	0.31	0.14	—	—	弥生	2・5
113	3b- 4a	ⅤK23	4	南南東→ 北北西	ほぼ 直線	A	(2.72)	1.97	0.18	—	—	弥生	2・5
114	4d	ⅤO05・10	1	北東→ 南西	やや 湾曲	E	5.1	0.27	0.05	—	△SD120・121	近世	41・77
115	4d	ⅤO09・10	1	北東→ 南西	やや 蛇行	A	4.8	0.40	0.08	—	△SD119	近世	41・77
117	4d	ⅤO19・24	1	北北西→ 南南東	ほぼ 直線	A	(12.64)	1.06	0.10	—	—	近世	41・43・77
118	4d	ⅤO19・20	1	西→東	ほぼ 直線	E	(4.18)	0.93	0.12	—	▼SD124	近世	41・77
119	4d	ⅤO09・10	1	西北西→ 東南東 北北西→ 南南東	湾曲	C	(5.48)	0.38	0.08	—	▼SD115	近世	41・77
120	4d	ⅤO10	1	西南西→ 東北東	直線	C	2.73	0.20	0.10	—	▼SD114	近世	41・77
121	4d	ⅤO04・05	1	西北西→ 東南東	直線	A	(8.37)	1.19	0.04	—	▼SD114	近世	41・77
122	4d	ⅤO05	1	北北西→ 南南東	直線	A	(3.23)	1.16	0.05	—	—	近世	41・77
123	4d	ⅤO19・24	1	北→南	ほぼ 直線	A	(8.72)	0.40	0.05	—	△SD124	近世	41・77
124	4d	ⅤO14・19・24	1	北→南	やや 蛇行	A	(20.76)	0.78	0.07	—	△SD118 ▼SD123	近世	41・77
125	4d	ⅨA03・07・08	1	西南西→ 東北東 北北東→ 南南西	L字に 蛇曲	C	(13.73)	0.50	0.33	土器・陶器・組 器・鉄製品	△SD088・126・135 ▼SD024	近世	38・39・ 51・77
126	1西	ⅨA03・08	1	北北東→ 南南西	直線	C	(5.3)	2.20	0.56	土器・半セロ 石器	△SD009a・088 ▼SD125	中世	39・51・77
127	1西	ⅨA04・08・13・ 12・17	2	北東→ 南西	ほぼ 直線	B	(26.70)	0.99	0.40	土器	▼SD023・088	奈良	22・36

付表6

SD 番号	位置		調査 年度	傾斜方向	形状 平面 断面 形	規模 (m)			遺物	重複関係		備考	時期	図説番号
	地区	グリッド				長さ	最大幅	深さ		△ (B) ▼ (E) (不) 不明				
128	西	ⅡW24・RC04・08・09・13	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	A	(20.31)	0.41	0.08	—	△SL014		近世 以降	38・48・77
129	1東	ⅡW24・RC03・04・08・13	1	北東→ 南西	直線	B	(18.75)	0.87	0.40	土器・陶器・ 石製品	—		近世	38・48・78
130	1東	RC04・08・09・13・14	1	北東→ 南西	直線	A	(14.75)	0.82	0.08	土器	△SD131 ▼SL014		中世	38・48・78
131	1東	RC04・09・13・14	1	北東→ 南西	直線	E	(11.39)	不明	0.20	土器	▼SD130、SL014		中世	38・48・78
132	1東	ⅡV14・19	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	B	(2.72)	0.70	0.15	—	—		近世	38・49・78
133	1北	ⅡV19	1	北東→ 南西	直線	A	(2.79)	0.30	0.04	—	▼SD134		近世	38・49・78
134	1北	ⅡV19	1	北西→ 南東	直線	D	(4.64)	1.11	0.44	—	△SD133		近世	38・49・78
135	1北	ⅡA07・08	1	北北東→ 南南西	直線	C	(5.60)	不明	0.50	—	▼SD125		近世	39・77
136	1西	ⅡE24	1	東→西	ほぼ 直線	A	5.85	0.62	0.10	—	—		近世	42・78
137	4中東	ⅡQ09	1	北北西→ 南南東	直線	B	(2.12)	0.75	0.20	—	—		近世	42・78
138	5東	ⅡW07・08・12・13・17	1	北北東→ 南南西	直線	B	(14.76)	2.19	0.60	土器	—	用水跡	近世	44・138
139	7a	ⅡW13・17・18	1	北北東→ 南南西	直線	C	(10.16)	1.07	0.15	—	—	用水跡	近世	44・138
140	7a	ⅡW13・18	1	北北東→ 南南西	直線	A	(6.69)	1.59	0.16	—	—	用水跡	近世	44・138
141	7a	ⅡX06	1	北北西→ 南南東	直線	A	(2.6)	0.46	0.12	土器	—	用水跡	近世	43・44・78
142	7a	ⅡS17・18・21・22・23・R25・W03・04・05	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	E	(39.15)	1.77	0.11	土器	—		奈良	24・36
144	7a	ⅡS18	1	西北西→ 東南東	ほぼ 直線	A	(1.62)	0.34	0.05	—	—		近世	43・44・78
145	7a	ⅡR23・W03	1	南西→ 北東	ほぼ 直線	A	4.46	0.28	0.07	—	—		近世	44・78
146	7a	ⅡY22・23	1	西北西→ 東南東	直線	A	(7.34)	不明	0.08	土器・陶器・鉄 滓	▼SD147 (不)SD149	用水跡	近世	43・78
147	5b	ⅡY22・23	1	西北西→ 東南東	直線	B	(7.43)	1.01	0.40	土器・陶器・磁 器・石器・炭化 物	△SD146・148	用水跡	近世	43・78
148	5b	ⅡY22・23	1	西南西→ 東北東	直線	B	(5.01)	不明	0.60	土器・磁器	▼SD147	用水跡	近世	43・78
149	5b	ⅡY17・22・23	1	西南西→ 東北東	直線	A	(7.17)	0.43	0.05	—	(不)SD146	用水跡	近世	43・78
150	5b	ⅡY06・07	1	北東→ 南西	直線	B	(4.35)	0.48	0.14	—	—		近世	43・78
151	5b	ⅡS11・16・21・XD1	1	南西→ 北東	ほぼ 直線	E	(25.79)	1.10	0.24	土器	△SC056		近世	46・78
152	11a	ⅡW08・09・10	1	南西→ 北東	直線	E	(17.13)	1.42	0.18	土器	—		近世	46・78
153	11b	ⅡW12・13・18・23	1	北北西→ 南南東	直線	C	(14.8)	1.39	0.21	—	△SD163・0166		近世	46・78
154	11b	ⅡW11・12・13	1	北北西→ 南南東	L字に 屈曲	B	(15.21)	1.02	0.10	土器・石器	—		近世	46・78
155	5b	ⅡY07・08	1	東北東→ 西南西	直線	C	(4.51)	0.60	0.25	土器	△SD167・168	用水跡	近世	46・78
156	5b	ⅡR18・23・W03・08	1	北北東→ 南南西	直線	A	(19.11)	0.93	0.05	—	—		近世	46・78
157	11b	ⅡR18・23・W03・08	1	北東→ 南西	直線	A	(19.57)	0.51	0.03	—	—		近世	46・79
158	11b	ⅡR18・23・W03・08	1	北東→ 南西	直線	A	(20.57)	0.47	0.03	—	—		近世	46・79
159	11b	ⅡR23・W02・03	1	北北東→ 西南西	ほぼ 直線	A	(10.77)	1.35	0.05	—	—		近世	46・79
160	11b	ⅡW07・08・12・13	1	西→東 北北西→ 南南東	ほぼ 直線	E	(11.10)	1.23	0.06	—	—		近世	46・79
161	11b	ⅡW03・07・08	1	北北東→ 南南西 北西→ 南東	ほぼ 直線	E	8.5	0.74	0.07	—	—		近世	46・79

SD 番号	位置		調査 年度	掘削方向	形状		規模 (m)			遺物	重要関係		備考	時期	国版番号
	地区	グリッド			平面 形状	断面 形状	長さ	最大幅	深さ		△ (E) ▼ (R) (F) 不明				
162	11b	MW13	1	北北東→ 南南西	直線	A	(5.19)	0.65	0.02	—	—			近世	46・79
163	11b	MW12・13	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	E	(5.00)	0.45	0.08	—	▼SD153			近世	46・79
164	11b	MW12・17	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	A	(6.81)	0.44	0.04	—	—			近世	46・79
165	11b	MW12・17	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	E	(6.05)	不明	0.10	—	—			近世	46・79
166	11b	MW18・23	1	北北西→ 南南東	直線	E	(6.90)	0.60	0.12	—	▼SD153			近世	46・79
167	11b	MY03・08	1	北→南	直線	C	(10.38)	1.10	0.30	土器・陶器・石 器	▼SD155		用水跡	近世	43・79
168	5b	MY03・08	1	北北西→ 南南東	直線	C	(10.24)	0.42	0.10	—	▼SD155		用水跡	近世	43・79
169	5b	MV13・14・18・ 22・23、XⅡ A15・20・24・ 25・B01・02・ 03・06・07・11・ 16	1	北東→ 南西	直線	E	(7.42)	3.25	0.24	土器・種子	(付SD170・171)			奈良	24・36
170	7b・ 8・ 9	MV09・14・18・ 19・22・23、XⅡ A20・25・B01・ 02・03・06・07・ 11・16	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	A	(7.47)	1.83	0.12	土器	(付SD169・171・172・173)			奈良	24・36
171	7b・8	MA25	1	北西→ 南東	直線	B	(2.48)	0.71	0.20	—	(付SD169・170)			奈良	24・36
172	7b・8	MV24・B04・07・ 08・11・12・16	1	北東→ 南西	今今 湾曲	A	(20.28)	0.72	0.03	—	▼SD173			奈良	24・36
173	7b・8	MR06・07・12	1	北西→ 南東	直線	A	(6.84)	0.32	0.92	—	△SD172			奈良	24・36
174	7b・8	MV15・19・20	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	A	(21.06)	1.13	0.04	—	▼SD175・176			奈良	24・36
175	7b・8	MV14・15・20	1	北西→ 南東	直線	B	(10.28)	0.95	0.15	土器	△SD174			奈良	24・36
176	7b・8	MV14・15	1	北西→ 南東	直線	C	(10.04)	1.47	0.15	土器	△SD174			奈良	24・36
177	7b・8	MA09・10	1	北西→ 南東	ほぼ 直線	A	9.31	0.51	0.02	—	—			奈良	24・36
178	7b・8	MV17・22	1	北北東→ 南南西	直線	A	(5.31)	0.66	0.05	—	—			平安	24・36
179	7b・8	MV05・W01	1	北西→ 南東	直線	A	(5.65)	1.27	0.09	—	—			奈良	24・36
183	7b・8	MR25・O21	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	E	(7.11)	1.70	0.21	—	—			近世	45・79
184	10	MR15・O06・11	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	A	13.66	0.72	0.04	—	—			近世	45・79
185	10	XⅡF07・08	1	北東→ 南西	ほぼ 直線	C	(12.85)	0.69	0.12	土器	—			近世	45・79
187	9	ME25・J05・06・ 10・13・14、XⅡ A21・F01	2	南西→ 北東	湾曲	A	(25.62)	1.02	0.11	土器・種子	▼SK005			養生	3
188	9	XVF13・18	1	北北西→ 南南東	直線	C	(5.0)	(3.88)	1.32	土器・陶器・磁 器・瓦・土製 品・石器・銅貨	△SD189・190・191		壱崎用水 跡	近世	82
189	12c 北	XVF13・18	1	北北西→ 南南東	直線	C	(5.0)	1.90	0.40	土器	△SD190・191 ▼SD188		壱崎用水 跡	近世	46・81・82
190	12c 北	XVF13・18	1	北北西→ 南南東	直線	C	(5.0)	不明	0.32	土器・陶器類・ 瓦・鉄製品・石 製品・石器	△SD191 ▼SD188・189		壱崎用水 跡	近世	46・81・82
191	12c 北	XVF13・18	1	北北西→ 南南東	直線	B	(5.65)	不明	0.80	土器・陶器・ 石・発見物	△SD192 ▼SD188・189・190		壱崎用水 跡	中世	80・82・83
192	12c 北	XVF13・18	1	北北西→ 南南東	直線	B	(5.73)	1.16	0.24	土器	▼SD191		壱崎用水 跡	中世	80・82

[図版84-90]

付表7 石山桑田遺跡 弥生時代～古土器一覽(報告書掲載分)

編年 番号	写真 撮影	埋藏位置 遺構名・ 通称	出土位置		層上 位置	層下 位置	時期	地層	種類	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	正置		重量 (g)	外周色調	内周色調	胎土	底径	形状	外周面状・ 底面・底脚・ 取付方法	内周面状・ 底面・底脚・ 取付方法	備考	
			長さ (cm)	幅 (cm)																					
1	—	50001.2 5b 50001	壇上	壇上	IT No.3	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	体一部	80%	—	<6.3>	—	138	10YR6/4 に濃い	10YR6/2 灰褐色	1mmほど白く赤 色胎土多量,石突少 量	中 小	中 小	丸 形	ミガキ ミガキ	外周面状は 付着土質の付着 層		
2	PL27	50001.1 5b 50001	壇上	壇上	IT No.1,2	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	体一部	80%	—	7.2	<18.2>	<21.2>	539	7.5YR6/6 黄	5.5YR6/2 灰白	1-2mm赤白・赤 色胎土多量,石突少 量	中 小	中 小	丸 形	ハケの瓦割 交互に 交互にハケの 交互にハケの 交互にハケの 交互にハケの	全体の厚薄 不均	
3	PL27	50001.3 5b 50001	壇上	壇上	—	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	胴一部	80%	—	8.0	<22.4>	<19.2>	1497	10YR6/2 灰白	10YR7/2 黄褐色	1-2mm赤白・赤 色胎土多量,石突少 量	長	長	直 筒	底面・底脚は付 着土質の付着 層の付着 層	全体の厚薄 不均	
4	—	SC063.2 7b+8 SC063	壇上	壇上	21, SC063 064	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	口縁・ 胴部	—	—	—	—	64	10YR7/3 に濃い	10YR7/3 に濃い	白・赤・石炭層 胎土多量,胎 土多量,胎土 多量,胎土	長	長	直 筒	ヨコナデ・ハケ のハケナデ・ ハケのハケナ デ	内外面厚薄 不均しい		
5	PL27	SC063.3 7b+8 SC063	壇上	壇上	21, 213, 214	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	口縁・ 体部	—	—	—	—	1034	5YR8/3 黄褐色	5YR8/3 黄褐色	白・赤・石炭層 胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	ナデ・底面・底脚 ナデ	内外面厚薄 不均しい		
6	PL27	SC063.1 7b+8 SC063	壇上	壇上	21, SC063 064	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	口縁・ 体部	—	—	—	—	490(G) 黄(L5.6)	10YR5/3 黄褐色	10YR4/1 灰褐色	石炭層・胎土 胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	ナデ・胎土多量 胎土多量,胎土 胎土多量,胎土 胎土多量,胎土	内外面厚薄 不均しい		
7	—	SC063.1 7b+8 064	壇上	壇上	—	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	体部	—	—	—	—	81	10YR5/2 黄褐色	10YR7/2 黄褐色	石炭層・胎土 胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	直紋文 直紋文	内外面厚薄 不均しい		
8	—	SC063.1 7b+8 064	壇上	壇上	—	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	体部	—	—	—	—	18	10YR5/2 黄褐色	10YR4/2 灰褐色	白色・石炭層胎 土多量,胎土 多量,胎土	長	長	直 筒	直紋文 直紋文	内外面厚薄 不均しい		
9	—	SC063.1 7b+8 064	壇上	壇上	—	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	胴部	—	—	—	—	69	7.5YR6/3 に濃い	7.5YR7/4 に濃い	石炭層・胎土 胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	ナデ・直紋文 ナデ	内外面厚薄 不均しい		
10	PL27	SC089.2 11a SC089	壇上	壇上	1	—	弥生 後半	弥生 土器	甕	体一部	80%	—	3.4	<10.2>	55	2.5YR5/6 明少黄	2.5YR5/6 明少黄	白色・胎土 胎土多量,石炭 層胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	ミガキ(胎土) ナデ(胎土)	外周面状		
11	PL27	SC089.1 11a SC089	壇上	壇上	2-5	—	弥生 後半	弥生 土器	有孔鉢	口縁・ 胴部	80%	—	4.0	<10.1>	175	10YR6/3 に濃い	10YR6/3 に濃い	胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	ハケ・ミガキ ハケ・ミガキ ハケ・ミガキ	内外面厚薄 不均しい		
12	—	SC101.1 11c SC101	壇上	壇上	18, 19	—	弥生 後半	弥生 土器	甕	体一部	80%	—	<5.4>	—	31	10YR6.4 黄褐色	10YR7/4 黄褐色	白色・胎土 胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	ミガキ ミガキ	内外面厚薄 不均しい		
13	PL27	652鉢 IT 80No.1	壇上	壇上	1-6	—	弥生 後半	弥生 土器	甕	体一部	80%	—	<7.2>	—	171	10YR7/3 に濃い	10YR7/2 に濃い	石炭層・胎土 胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	ヨコナデ・ハケ ナデ・ハケ ナデ・ハケ	内外面厚薄 不均しい		
14	—	7.652鉢 7a 7b3a	壇上	壇上	1-14	—	弥生 前期	弥生 土器	甕	体部	—	—	—	—	39	10YR4/2 灰褐色	10YR4/1 灰褐色	白・赤・石炭層 胎土多量,胎 土多量,胎土	長	長	直 筒	ナデ・胎土多量 胎土多量,胎土 胎土多量,胎土	内外面厚薄 不均しい		
15	—	4.654鉢 1 4a	壇上	壇上	1	—	弥生 後半	弥生 土器	甕	口縁・ 胴部	100%	<17.8>	—	—	11	7.5YR6/4 に濃い	7.5YR6/3 に濃い	赤・石炭層胎 土多量,胎土 多量,胎土	長	長	直 筒	ナデ・胎土多量 胎土多量,胎土 胎土多量,胎土	内外面厚薄 不均しい		



施設番号	写真位置	管理番号	市区名	町区名	高さ・位置	方位・位置	取上・構造	時期	地物種	詳細	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (kg)	外面色調	内面色調	素材	形成	外面装飾・成形・施刻・彫り手法	内面装飾・成形・施刻・彫り手法	備考
16	—	5065E 5130E	0b	—	13層	—	—	後生 後生	赤土 赤土	鉢口縁部 鉢口縁部	口1/8 未測	<15.5> —	—	7	2.5384/6	2.5385/6	白色・石炭質細粒多量・赤褐色	白色・石炭質細粒多量・赤褐色	赤土	貝	ミガキ(赤胎) ミガキ	ミガキ(赤胎) ミガキ	内外面装飾 内外面装飾	
17	P127	5065E 5120E	0b	—	14層	—	—	後生 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	<13.8> —	—	18	7.5387/3	7.5386/3	白色・石炭質細粒多量・赤褐色	白色・石炭質細粒多量・赤褐色	赤土	貝	口縁部反し の溝・ミガキ	口縁部反し の溝・ミガキ	内外面装飾 内外面装飾	
18	P127	5065E 5120E	0b	—	12層	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	<12.0> —	—	8	10.935/2	10.935/2	白色・石炭質細粒多量・赤褐色	白色・石炭質細粒多量・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
19	P127	5065E 5120E	0b	—	12層	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	<10.0> —	—	40	7.5388/2	7.5388/3	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
20	P127	5065E 5111E	0b	—	11層	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	<15.4> —	—	39	10.937/4	10.937/3	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
21	—	4770E 4771E	0b	—	7層	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	—	—	29	7.5387/4	7.5386/6	白色・石炭質細粒多量・赤褐色	白色・石炭質細粒多量・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
22	P127	2554E 207.208	2	—	4層北壁	—	—	後生 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	—	(12.1)	545	7.5385/6	7.5386/2	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
23	P127	S0187.1	9	SD187	南上	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	—	(5.0)	14	10.932/1	10.937/2	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
24	—	SC01.2 70+8	SC061	南上	210	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	—	—	9	7.5387/4	7.5386/4	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
25	—	SC01.1 70+8	SC061	南上	203.205, 207.208	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	—	(7.3)	170	10.937/3	10.937/2	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
26	—	SC065.1 70+8	SC065	南上	—	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	—	—	23	10.935/2	10.935/2	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
27	P127	SC002 底壁-2	9	SC002	南上	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	<23.6> —	—	94	5.937/4	5.938/3	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
28	P127	SC002 底壁-1	9	SC002	南上	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	<31.7> —	—	68	10.936/2	10.935/2	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
29	—	SC002.1	9	SC002	南上	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	—	—	51	10.937/2	10.937/2	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
30	P127	SC006.1	1	SC006	南上	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	<0.8> (0.9)	—	134	10.948/6	7.5387/6	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	
31	P127	1652E 1	1	—	3層	—	—	赤土 赤土	赤土	口縁部 口縁部	口1/8 未測	—	(2.2)	71	2.5385/6	2.5384/6	赤褐色・赤褐色	赤褐色・赤褐色	赤土	貝	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	ナギ彫刻 文・ナギ彫刻	内外面装飾 内外面装飾	

掲載 番号	写式 図取	出土位置		取上 層号	時期	器物種	部材	保存率	口径 cm	高さ cm	直径 cm	重量 g	外面色調	内面色調	土質	痕象	外面装飾・ 施付け手法	内面装飾・ 施付け手法	備考	
		管理番号	地区 名																	
32	PI27	1652棟 1	—	2層	—	弥生 後期	弥生 土器	—	—	—	—	133	2.5X8/6 赤褐色	2.5X8/6 赤褐色	1mm以下2-5mm 程の白色灰・白色 粒・赤褐色多量。	貝	ミガキ(赤刷) ミガキ(黒色) 化	ミガキ(赤刷) ミガキ(黒色) 化	内外面磨減 内外面磨減	
33	—	1552棟 1	—	5層	—	弥生 後期	弥生 土器	—	<18.6>	—	—	50	7.5X8/1 黒灰	7.5X8/1 黒灰	1mm以下白色多 量。赤褐色・石炭粒中 に赤・黒	貝	ナデ	ナデ	内外面磨減	
34	PI27	1652棟・1 西	Z	—	—	弥生 後期	弥生 土器	—	<15.7>	(4.8)	<16.0>	20	5YR7/8 赤褐色	5YR7/8 赤褐色	1mm以下白色・赤 褐色多量。赤褐色 非常に多量。赤褐色	貝	ミガキ	ミガキ(赤刷)	内外面磨減	
35	—	1652棟 2 トレンチ 北東1	2	2層	—	弥生 後期	弥生 土器	—	—	—	—	5	10Y8/5/2 灰青褐色	10Y8/5/2 灰青褐色	石炭層・磁器層	貝	新田式文 明装文文	ミガキ	内外面磨減	
36	—	1654棟 1	—	4層	—	弥生 〜 古墳前	弥生 土器	—	<8.0>	(2.6)	—	110	10Y8/7/2 に赤い 灰褐色	10Y8/7/2 に赤い 灰褐色	1mm以下白色・赤 褐色多量。黒 褐色多量。赤褐色	貝	ナデ	ナデ	内外面磨減	
37	—	265 1-2T 70層-1	—	70層	—	弥生 〜 古墳前	弥生 土器	—	<10.0>	(2.9)	—	125	7.5Y8/8/3 浅黄褐色	7.5Y8/8/3 浅黄褐色	赤褐色・石炭層・磁 器層・赤褐色に多 量。3-5mm左右石炭 少量。非常に黒	貝	ナデ	ハケナデ (刷)	内外面磨減・赤生 後期平介	
38	PI28	1655棟 1	—	5層	—	弥生 〜 古墳前	弥生 土器	—	—	—	—	73	5Y8/6/0 青	5Y8/6/0 青	1mm以下白色・赤 褐色多量。赤褐色 少量	貝	ミガキ	ミガキ (刷)	内外面磨減	
39	—	3652棟・30- 3 4a	SC038	3層	4-9,11, 13	古墳 前期	上層部 鏡	—	<13.0 >	5.6	22.0	<22.4>	895	7.5Y8/2 に赤い 灰褐色	7.5Y8/2 に赤い 灰褐色	白・赤・褐色・石炭の 層間・赤褐色・磁器層 に赤褐色・磁器層 に赤褐色・赤褐色	貝	ナデ ミガキ ナデ	ナデ ミガキ ナデ	内外面磨減
40	—	3652棟・30- 1 4a	SC038	3層	1	古墳 前期	上層部 鏡	—	<17.6>	—	—	343	7.5Y8/7/3 に赤い 灰褐色	7.5Y8/7/3 に赤い 灰褐色	白・赤・褐色・石炭層 非常に多量。黒 非常に多量。黒	貝	ミガキ	ミガキ (刷)	内外面磨減	
41	PI28	3652棟・30- 2 4a	SC038	3層	2,3,12, 15	古墳 前期	上層部 鏡	—	—	2.8	(7.1)	138	7.5Y8/4/2 灰褐色	7.5Y8/4/2 灰褐色	白・赤・褐色・石炭の 層間・赤褐色・磁器層 に赤褐色・赤褐色	貝	ミガキ	ミガキ (刷)	内外面磨減	
42	PI28	SK547・1 30- 3a	SK547	層上	1	古墳 前期	小型鏡 小型鏡	—	<9.1>	—	(12.4)	<12.8>	151	10Y8/5/3 に赤い 灰褐色	10Y8/5/3 に赤い 灰褐色	1mm以下白色多 量。赤褐色・石炭層 非常に多量。赤褐色	貝	ハケナデ ナデ	ハケナデ ナデ	内外面磨減
43	PI28	SK549・1 30- 4a	SK549	層上	—	古墳 前期	上層部 鏡	—	—	—	(7.2)	112	7.5Y8/7/4 に赤い 灰褐色	7.5Y8/7/4 に赤い 灰褐色	1mm以下白色多 量。赤褐色・石炭層 非常に多量。赤褐色	貝	ナデ	ナデ	内外面磨減	
44	—	SK565・2 4a	SK565	層上	—	古墳 前期	上層部 鏡	—	<13.0>	—	(2.7)	12	7.5Y8/7/4 に赤い 灰褐色	7.5Y8/7/4 に赤い 灰褐色	1mm以下白色多 量。赤褐色・石炭層 非常に多量。赤褐色	貝	ナデ	ナデ	内外面磨減	
45	—	36-140C 1棟・1 4a	—	1層	—	古墳 前期	上層部 鏡	—	<14.6>	—	(5.1)	146	7.5Y8/5/6 明褐色	7.5Y8/5/6 明褐色	1mm以下白色・赤 褐色多量。赤褐色 非常に多量。赤褐色	貝	同鏡ナデ	同鏡ナデ	内外面磨減	
46	PI28	4652棟・30- 1 4a	—	2層	1	古墳 前期	小型 瓦	—	—	—	(6.9)	9.0	7.5Y8/7/4 に赤い 灰褐色	7.5Y8/7/4 に赤い 灰褐色	白・赤・褐色・石炭層 非常に多量。赤褐色 非常に多量。赤褐色	貝	ミガキ	ナデ ナデ	内外面磨減	
47	—	4652棟・30- 2 4a	—	3層	NA	古墳 前期	上層部 鏡	—	<12.0>	—	—	85	2.5Y8/6/8 青	2.5Y8/6/8 青	白・赤・褐色・石炭層 非常に多量。赤褐色	貝	—	ナデ ナデ	内外面磨減 内面成否不明 内外面磨減	
48	—	4652棟・30- 1 4a	—	3層	—	古墳 前期	小型 瓦	—	<12.0>	—	(4.4)	18	7.5Y8/6/4 に赤い 灰褐色	7.5Y8/6/4 に赤い 灰褐色	1mm以下白色・赤 褐色多量。赤褐色 非常に多量。赤褐色	貝	—	ミガキ	内外面磨減	

内蔵番号	写真 図説	管理番号 地区 名	地上高 管理 位置	取上 番号	高層	階層	階層	構造	部位	残存率 %	口径 cm	直径 mm	高さ mm	重量 g	外面色調	内面色調	素材	組成	外面装飾・ 成形・施作・ 取付け手法	内面装飾・ 成形・施作・ 取付け手法	備考
49	—	95区1棟 1	79>8	—	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 土階層	口縁部	口77/8	—	—	288	7.5387/4 におい・青	7.5387/4 におい・青	貝	貝	ミガキ	輪切面 ミガキ ナデ	内外面装飾なし 95区1棟2と同一	
49	—	95区1棟 2	79>8	—	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 土階層	体部	—	—	—	125	7.5387/4 におい・青	7.5387/4 におい・青	貝	貝	ミガキ	輪切面 ミガキ ナデ	内外面装飾なし 95区1棟1と同一	
50	PL28	95区1棟 3	—	1.8	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	体・底部	底8/8	—	(5.2)	115/G1 縦分列	5YR6/1 明赤	5YR6/1	貝	貝	ミガキ	ナデ輪切面 輪切面	内外面装飾なし	
51	—	95区1棟 7A>1	—	1.87A層 北東	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	口縁・ 体部	口2/8 -8.9>	—	(5.0)	10YR6/2 灰黄緑	10YR6/2	貝	貝	ミガキ	ナデ	内外面装飾なし		
52	—	95区1棟 7A>3	—	1.87A層 北東	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	口縁・ 体部	—	—	(7.4)	7.5386/4 におい・青	7.5386/4 におい・青	貝	貝	ミガキ	ナデ	内外面装飾なし		
53	—	95区1棟 7A>2	—	1.87A層 北東	古墳 前部	古墳 前部	土階層	扁平 土階層	横合 体部	—	—	(4.1)	60.0	7.5386/4 におい・青	7.5386/4 におい・青	貝	貝	ミガキ	ナデ	内外面装飾なし	
54	—	95区1棟 1	—	1.8	古墳 前部	古墳 前部	土階層	土階層	口縁部	口2/8 -15.7>	—	(4.2)	223	7.5386/4 におい・青	7.5386/4 におい・青	貝	貝	ミガキ 口縁部 及び石の跡	—	内外面装飾なし	
55	—	95区1棟 7A>1	—	1.87A層 北東	古墳 前部	古墳 前部	土階層	廣 土階層	口縁・ 体部	口1/8 -16.6>	—	(5.8)	24	10YR6/3 におい・黄	10YR6/3	貝	貝	ナデ ミガキ	ナデ	内外面装飾なし	
56	PL28	SX002 16	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	扁平 土階層	体部	—	—	(4.3)	48	5YR8/3 黄	5YR8/3	貝	貝	輪切面 しぼり 面	輪切面 しぼり 面	内外面装飾なし	
57	PL28	SX002 17	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	扁平 土階層	体部	—	—	(8.5)	151	10YR7/3 におい・黄	10YR7/3	貝	貝	ミガキ	しぼり直ナデ	外面装飾なし	
58	—	SX002-7	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	扁平 土階層	体部	底1/8	<14.0>	(6.3)	31	7.5386/4 におい・青	7.5386/4 におい・青	貝	貝	ミガキ	しぼり直ミガ キ	内外面装飾なし	
59	PL28	SX002-2	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	体・底部	底8/8	—	(3.5)	<8.2> 50	2.5Y2/1 黒	7.5Y3/1 黒	貝	貝	ミガキ	ナデ	内外面装飾なし	
60	PL28	SX002 14	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	体・底部	底8/8	—	(6.3)	(9.2)	7.5387/4 におい・青	7.5387/4 におい・青	貝	貝	ミガキ	ナデ	内外面装飾なし	
61	—	SX002-3	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	体・底部	底8/8	—	(6.8)	9.0	10YR7/4 におい・黄	10YR7/4 におい・黄	貝	貝	ハツノ下至少 式ノカ	ナデ	内外面装飾なし	
62	PL28	SX002 15	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	体・底部	底8/8	—	(7.2)	(9.8)	7.5387/4 におい・青	7.5387/4 におい・青	貝	貝	ミガキ ハツノ ナデ	ナデ	外面装飾なし	
63	—	SX002-4	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	口縁・ 体部	口1/8 -8.2>	—	(5.8)	73	7.5386/3 におい・青	7.5386/3 におい・青	貝	貝	ミガキ	ナデ	内外面装飾なし	
64	—	SX002-5	SX002	地上	古墳 前部	古墳 前部	土階層	小型 丸底	口縁・ 体部	口2/8 -7.8>	—	(9.0)	<8.8> 83	7.5386/4 におい・青	7.5386/4 におい・青	貝	貝	ナデ ハツノ	ナデ	内外面装飾なし	

付表7

種名 番号	写式 図説	出上地点		取上 番号	時期	植物種	部位	残存率	口径 mm	直径 mm	法量 縦径×最大径 mm mm	外面色調	内面色調	断面	組成	外面組織・ 皮肉・胎動・ 胎付け方法	備考	
		管理番号	地区名															
65	PL28	SX002-9	9	SX002	柳上 204,207,212,213,215,220,225,206,	古墳 前期	小型遺 体部	—	—	—	縦径×最大径 (11.1)×(10.2)	10YR6/3 にぶい・黄 褐色	10YR6/3 にぶい・黄 褐色	黒・ 白・赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	子ナミガキ ナメミガキ ナメミガキ ナメミガキ ナメミガキ	内外面磨著しい
66	—	SX002-8	9	SX002	柳上 211-213,232,233,234,235	古墳 前期	口縁・ 体+腹部 部部	口縁部 12.7	—	—	(15.4)×(14.4)	10YR7/3 にぶい・ 黄褐色	10YR7/3 にぶい・ 黄褐色	白・赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	子ナミガキ ナメミガキ ナメミガキ ナメミガキ	内外面磨著しい
67	PL28	SX002-6	9	SX002	柳上 208,243,245,250	古墳 前期	口縁・ 腹部 部部	口縁部 12.8	—	—	(5.3)	5YR7/4 にぶい・暗 褐色	5YR7/4 にぶい・暗 褐色	白・赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	ミガキ	内外面むか磨
68	PL28	SX002-10	9	SX002	柳上 206,210,230,236面	古墳 前期	体+腹部 部部	腹部 5.4	—	—	(4.5)	7.5YR6/4 にぶい・暗 褐色	7.5YR6/4 にぶい・暗 褐色	白・赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	ハゲナズ	内外面磨著しい
69	PL28	SX002-11	9	SX002	柳上 213-219,221,222,241,251,252面	古墳 前期	腹部 部部	—	—	—	(17.1)×(25.6)	7.5YR6/3 にぶい・暗 褐色	7.5YR6/3 にぶい・暗 褐色	超硬質粘土質に多 量・赤褐色・石灰質 細砂	貝	貝	ナメハゲ 下 ハゲのちナズ ナメミガキ ハゲナズ	内外面磨 外面2 次程度 很多く付 着
70	—	SX002-13	9	SX002	柳上 208	古墳 前期	腹+腹部 部部	—	—	—	(8.3)	7.5YR7/4 にぶい・暗 褐色	7.5YR7/4 にぶい・暗 褐色	白・赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	ナメミガキ ナメミガキ ナメミガキ	内外面磨 外面 2次程度
71	—	SX002-12	9	SX002	柳上 203	古墳 前期	腹部 部部	—	—	—	(9.8)	10YR2/1 黒	10YR4/1 黒	白・赤褐色・石灰質 細砂・赤褐色・石灰質 細砂	貝	貝	ナズハゲ	外面2次程度
72	—	SX002-14	5b	7b面	トレンチ 70b-2	古墳 前期	体+ 縁部 部部	—	—	—	(3.2)	5YR6/6 暗褐色	5YR6/6 暗褐色	超硬質粘土質に多 量・赤褐色・石灰質 細砂・赤褐色・石灰質 細砂	貝	—	ミガキ	内外面磨著しい
73	PL28	SX052-1	5b	2面	—	古墳 前期	腹部 部部	—	—	—	(6.1)	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	ナメミガキ ナメミガキ ナメミガキ	内外面磨著しい
74	—	SX002-14	5b	7b面	トレンチ 70b-1	古墳 前期	高坪 部部	—	—	—	(7.3)	5YR7/6 暗褐色	5YR7/6 暗褐色	赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	しほり飯ナズ 輪縁部	内外面磨 外面 2次程度
75	—	SX002-12	5b	7b面	トレンチ 70b-4	古墳 前期	高坪 部部	—	—	—	(9.0)	7.5YR8/4 灰褐色	7.5YR7/3 にぶい・暗 褐色	赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	ミガキ	内外面磨
76	—	SX002-14	5b	7b面	トレンチ 70b-3	古墳 前期	縁部 部部	—	—	—	(2.4)	7.5YR7/4 にぶい・暗 褐色	7.5YR7/4 にぶい・暗 褐色	白・赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	しほり飯ナズ ナズ	内外面磨著しい
77	—	SX002-12	5b	7b面	トレンチ 70b-3	古墳 前期	口縁部 部部	口縁部 11.9	—	—	(2.4)	7.5YR7/4 にぶい・暗 褐色	7.5YR8/4 にぶい・暗 褐色	赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	ナズ ミガキ ナズ	内外面磨著しい
78	—	SX002-12	5b	7b面	トレンチ 70b-2	古墳 前期	口縁・ 腹部 部部	口縁部 12.7	—	—	(6.0)	5YR2/1 黒	5YR2/1 黒	赤褐色・石灰質 細砂・超硬質粘土質	貝	貝	ミガキ	内外面磨著しい



付表7

施設番号	管理番号	地区名	出土地点		出土時期	地層	層位・高さ	形状・素材	用途	形状	現存率	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)	外面色調	内面色調	胎土	胎成	外面装飾・ 底面・内面・ 胎土の手法・ 施す方法	内面装飾・ 底面・内面・ 胎土の手法	備考
			遺構名	位置																			
98	—	SD127-1	Ⅷ	SD127	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5786/6	7.5782/1	1mm以下白包多量・ 少量	黒	ナデ	ミガケ(黒色包)	内面装飾・ 底面・内面・ 胎土の手法	—
99	—	4区東2 1	40	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.977/6	5.972/1	白帯・石高濃縮多 量	黒	ミガケ	比呂子(黒色包) 見取(黒ナデ) 王冠(ミガケ)	内面装飾	—
100	PI29	SD0095 D017-1	1	SD017	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.974/1	5.975/1	1mm以下少量・白 包多量・黒 包多量・黒 包多量	黒	ロクロナデ 中(黒包) 内(黒包)	ロクロナデ	内面装飾	—
101	—	SD0062	4c	SD066	壇上北	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N.8 N.8	N.8	1mm以下胎土中 少量	黒	ロクロナデ 同 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
102	PI29	SD0061	4c	SD066	壇上	1.1-1.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N.7 N.7	N.7	1mm以下胎土中 少量	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面に黒包多量の 胎土・赤包・黒包 胎土の火葬痕	—
103	—	SD142-1	7a	SD142	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N.6 N.6	N.6	1mm以下胎土中	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	内面装飾・黒胎 で成り	—
104	PI29	SD142-2	7a	SD142	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.5786/8	2.5786/8	1mm以下胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾・黒胎 で成り	—
105	PI29	SD169-4	7b・ 8,9	SD169	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N.5 N.5	N.5	1mm以下胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾・黒胎 で成り	—
106	—	SD169-2	7b・ 8,9	SD169	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.5786/6	2.5786/6	2mm以下胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾・黒胎 で成り	—
107	—	SD169-1	7b・ 8,9	SD169	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5787/4	7.5787/4	1mm以下胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾・黒胎 で成り	—
108	—	SD169-3	7b・ 8,9	SD169	壇上土層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N.7 N.7	N.7	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
109	—	SD169-5	7b・ 8,9	SD169	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5787/4	7.5782/1	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
110	PI29	SD169-6	7b・ 8,9	SD169	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5786/4	7.5782/1	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
111	PI29	SD169-8	7b・ 8,9	SD169	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.977/4	10.977/4	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
112	PI29	SD169-8	7b・ 8,9	SD169	壇上土層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N.5 N.5	N.5	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
113	PI29	SD170-4	7b・8	SD170	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.5786/6	2.5786/8	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
114	—	SD170-2	7b・8	SD170	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5785/1	7.5786/3	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
115	—	SD170-1	7b・8	SD170	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5787/4	7.5782/1	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—
116	—	SD170-3	7b・8	SD170	壇上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	N.6 N.6	N.6	胎土包胎土中 胎土包	黒	胎土切 胎土切	ロクロナデ	内面装飾	—

内蔵番号	写真 取付位置	取上地点		取上 層号	岩種	地質	地層	傾斜	方位	開口 形状	法量			内径色調	断面	備考
		管理番号	地区名								管理番号	高さ (cm)	直径 (cm)			
117	—	SD045-1	2	SC001	礫土	—	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部
118	PL29	SC058-2	11b	SC058	礫土	102	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
119	—	1区北 線-1	—	1層	—	—	赤長・ 平安	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
120	—	1区北 線-1	1	Z	—	—	赤長・ 平安	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
121	—	5区 7階-5	1-4	70層	—	—	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
122	—	5区 1-4T	5b	70層	—	—	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
123	—	7区 7階-4	7a	—	1階西	—	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
124	PL29	7b-8区 2階-1	7b-8	—	2階	1	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
125	—	7b-8区 2階-2	7b-8	—	2階	2	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
126	PL29	5区1棟 2	9	—	1層 北東-北	—	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部
127	PL29	9区1棟 第-1	9	—	1階6階	5.7	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
128	—	11区1 線第1	11b	—	1層 線第1	—	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
129	PL30	9区9階 1	9	—	9階	1	平安	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
130	—	11区平 線第1	11c	—	5~2階	—	平安	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
131	—	SD152-1	11b	SD152	礫土	—	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
132	—	SD152-2	11b	SD152	礫土	—	赤長	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質
133	—	10区1棟 6階-1	10	—	1階6階	—	赤長・ 平安	傾斜部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	開口部 体部	内外径厚質

掲載 番号	写真 図説	島上地点		取上 層序	時期	地物類	層種	部位	法量			外色色調	内色色調	断面	備考						
		管理番号	地区名						位置	口径 cm	底径 cm					高さ cm	重量 g				
134	—	10C1棟 6層-2	10	—	平安 前期	土層・ 黒色 土層	硬	底部	—	<6.0>	(1.9)	—	18	5YR7/6弱 5Y5/7(6弱)	10YR5/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	外色黒褐色・ 底径1寸半 ロクロナデ	内色黒褐色・ 底径1寸半 ロクロナデ	内外黒褐色	
135	—	11K1 11K6-2	11b	—	平安 前期	土層 黒色 土層	硬	口縁・ 体部	口1/8 —	<11.9>	(3.0)	<12.0>	14	10YR2/1 黒	10YR5/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ(新 層)	ロクロナデ	内外黒褐色 黒土(石炭層) 黒土(石炭層)	
136	—	11K1 11K6-1	11b	—	平安 前期	土層 黒色 土層	硬	体-底部	底3/8	<6.2>	(2.9)	—	33	10YR6/1 黒	10YR2/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	同転赤切 割層(黒)	同転赤切 割層(黒)	内外黒褐色	
137	—	12a5a 1棟 水田	12a	—	平安 前期	土層 黒色 土層	硬	口縁・ 体部	口1/8 —	<13.4>	(2.7)	—	12	10YR3/3 灰黒	10YR2/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ミガク(黒色)	内外黒褐色	
138	PL30	長谷 古中-1	1	—	平安 前期	土層 黒色 土層	軟	口縁・ 底部	口3/8 底3/8	<23.2>	8.0	16.0	—	1260.0 10YR3/1 黒	10YR3/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	同転赤切 下部(石炭層) 同転赤切 下部(石炭層)	同転赤切 下部(石炭層) 同転赤切 下部(石炭層)	内外黒褐色	
139	PL30	長谷 古中-2	2	—	平安 前期	土層 黒色 土層	軟	口縁・ 底部	口3/8 底3/8	5.4	4.6	—	134.8	10YR7/1 黒	10YR7/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	同転赤切 下部(石炭層) 同転赤切 下部(石炭層)	同転赤切 下部(石炭層) 同転赤切 下部(石炭層)	内外黒褐色	
140	—	SC079-1	SC079	理上北	平安 前期	土層 黒色 土層	硬	口縁部	口1/8 —	<13.5>	(1.4)	<14.0>	7	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色	
141	—	SC081-1	SC081	理上北	奈良・ 平安	土層 黒色 土層	軟	体-底部	底1/8	<10.0>	(1.9)	—	21	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色	
142	—	SC099-2	11c	SC099	理上	土層 黒色 土層	硬	口縁部	口2/8 底3/8	つまみ 底9	3.0	—	13	5YR6/1 灰	5YR6/1 灰	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色	
143	—	SC093-1	11c	SC093	理上	土層 黒色 土層	軟	口縁・ 底部	口2/8 底1/8	<13.4>	<6.0>	3.9	<13.8>	39	N4 灰	N5 灰	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色
144	—	SC099-1	11c	SC099	理上	土層 黒色 土層	軟	口縁・ 底部	口2/8 底3/8	<13.3>	<6.0>	3.5	<15.4>	62	10YR8/2 灰白	10YR2/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色
145	PL30	長谷 古中-3	1	—	平安 前期	土層 黒色 土層	軟	底部	底4/8	—	11.4	(2.4)	—	145.61 石炭土 (2)	N5 灰	N5 灰	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	同転赤切 下部(石炭層) 同転赤切 下部(石炭層)	同転赤切 下部(石炭層) 同転赤切 下部(石炭層)	内外黒褐色
146	PL30	長谷 古中-4	1	—	平安 前期	土層 黒色 土層	硬	体部	—	—	(12.0)	—	274.4	N4 灰	N4 灰	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色	
147	—	SK356-4	SK356	理上	平安 前期	土層 黒色 土層	硬	口縁・ 体部	口2/8 底3/8	<13.4>	—	(3.3)	<13.6>	26	N7 灰白	N7 灰白	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色
148	—	SK356-3	SK356	理上	平安 前期	土層 黒色 土層	硬	体-底部	底3/8	<5.6>	(2.1)	—	19	N8 灰白	N7 灰白	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色	
149	—	SK356-5	SK356	理上	平安 前期	土層 黒色 土層	硬	体-底部	底4/8	—	6.8	(1.5)	—	7.5YR8/3 灰	7.5YR2/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色	
150	—	SK356-2	SK356	理上	奈良・ 平安	土層 黒色 土層	硬	体-底部	底3/8	<0.0>	(3.1)	—	78	10YR3/1 黒	10YR7/1 黒	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色	
151	—	SK356-1	SK356	理上	奈良・ 平安	土層 黒色 土層	硬	体-底部	—	—	—	—	106	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似 白・赤・石炭層類似	黒土	ロクロナデ	ロクロナデ	内外黒褐色	



掲載 番号	掲載 区分	地上部分		取上 層号	病棟	焼却炉	燃料種	部材	既存骨 口径 (cm)	法量		外面色調	内面色調	素材	組成	外面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	備考	
		管理番号	区分							名称	位置								高さ (cm)
152	—	SD028	3b・ 4a	SD028	地上	—	—	—	5.8	(1.7)	—	7.5YR7/4 に赤・黄	7.5YR8/3 灰褐色	1mm厚化粧・石 張り白磁土	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装 外装外装 塗装
153	PL30	SD032	3b・ 4a	SD032	地上	—	—	—	—	7	—	N.8 灰白	N.8 灰白	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
154	PL30	SD032	3b・ 4a	SD032	地上	—	—	—	(3.6)	<12.8>	9	N.8 灰白	N.8 灰白	1mm以下白磁土 多量	全劣	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
155	—	SD032	3b・ 4a	SD032	地上	—	—	—	(4.4)	<15.2>	10	N.5 灰白	N.5 灰白	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
156	—	SD104	3b・ 4a	SD104	地上	—	—	—	5.6	(1.2)	—	10YR52/2 に赤・黄	10YR52/2 に赤・黄	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
157	—	SD104	3b・ 4a	SD104	地上	—	—	—	(4.5)	<13.2>	6.5	5YR/1 灰白	5YR/1 灰白	1mm以下白磁土 多量	全劣	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
158	—	SD064	4c	SD064	地上	1	—	—	(1.9)	—	23	7.5YR7/6 に赤・黄	7.5YR6/6 に赤・黄	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
159	—	SD064	4b・ 4c	SD064	地上	—	—	—	(3.2)	<12.2>	16	N.7 灰白	N.7 灰白	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
160	—	SD064	3b・ 4c	SD064	地上	—	—	—	(2.9)	<12.2>	13	7.5YR7/4 に赤・黄	7.5YR6/3 に赤・黄	1mm以下白磁土 多量	全劣	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
161	—	SD064	4b・ 4c	SD064	地上	—	—	—	(2.4)	<14.4>	10	5YR/1 灰白	5YR/1 灰白	1mm以下白磁土 多量	全劣	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
162	—	SD064	4b・ 4c	SD064	地上	—	—	—	(2.9)	<13.6>	8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	1mm以下白磁土 多量	全劣	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
163	—	SD064	4b・ 4c	SD064	地上	—	—	—	5.8	(1.8)	—	N.7 灰白	N.7 灰白	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
164	—	SD064	4b・ 4c	SD064	地上	—	—	—	3.8	<13.6>	20	10YR8/2 に赤・黄	10YR7/3 に赤・黄	1mm以下白磁土 多量	全劣	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
165	PL30	SD064	4b・ 4c	SD064	地上	—	—	—	3.7	<13.4>	37	N.7 灰白	N.6 灰白	2mm厚化粧・ 石張り白磁土	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
166	—	SD064	4b・ 4c	SD064	地上	—	—	—	(1.2)	—	11	N.6 灰白	N.6 灰白	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
167	—	SD009	1	SD009	地上	—	—	—	2.8	(1.7)	—	N.7 灰白	N.6 灰白	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
168	—	SD095 D017	1	SD017	地上	—	—	—	(1.5)	—	13	5YR7/6 に赤・黄	5YR2/1 黒	1mm厚化粧・石 張り白磁土	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
169	—	SD085	1	SD085	地上	—	—	—	(1.4)	—	68	N.7 灰白	N.7 灰白	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装
170	—	SK079	1	SK079	地上	—	—	—	(1.3)	—	81	N.5 灰	N.6 灰	1mm以下白磁土 多量	良	ロクロナデ	ロクロナデ	内面塗装・ 成膜・防水・ 配付手法	内面塗装 塗装

施設番号	所有者 団地	管理番号	地区 名	市上地区		取上 量 <sup>1)</sup>	時期	植物種	調査種	部位	残存率	口径 (cm)	直径 (cm)	深さ (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)	内皮色調	内皮色調	断面	形状	外皮調度・ 成形手法	外皮調度・ 成形手法	備考	
				位置	高さ																			
171	—	SD130	1棟	SD130	地上	—	平安 前期	黒色 土層	皿	口縁・ 体部	口1/8 未満	<12.6>	—	(2.1)	<13.0>	8	10YR2/1 黒	10YR2/1 黒	1mm以下白多量, 黒	ロクロナデ ミガシ(黒色)	ロクロナデ ミガシ(黒色)	内外皮調度・ 成形手法 ロクロナデ ミガシ(黒色)	内外皮調度・ 成形手法 ロクロナデ ミガシ(黒色)	内外皮調度 内面 底部平滑
172	—	SD131	1棟	SD131	地上	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底7/8	—	5.8	(1.1)	—	42	5YR/1 灰白	5YR/1 灰白	1mm以下白多量, 黒	ロクロナデ 底7/8	ロクロナデ 底7/8	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑	
173	—	SD141	1棟	SD141	地上	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底1/8	<7.0>	(3.1)	—	26	10YR8/2 灰白	10YR2/1 黒	1mm以下白色中 量	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
174	—	2区 SD023	2	SD023	地上	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底2/8	<0.3>	(1.4)	—	52	N7 灰白	N7 灰白	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
175	—	SD109	4	SD109	地上	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底4/8	<5.8>	(1.5)	—	31	N7 灰白	N7 灰白	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
176	—	SD185	9	SD185	地上	—	平安 前期	黒色 土層	皿	口縁・ 体部	口1/8	<10.2>	(2.3)	<10.4>	8	7.5YR2/1 黒	7.5YR2/1 黒	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
177	—	1区東 1棟	1	—	1階	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底3/8	<5.6>	(1.2)	—	24	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
178	—	1区東1 棟	1	—	1階	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底8/8	5.6	(2.0)	—	80	5YR/1 灰	5YR/1 灰	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
179	—	1区東1 棟	2	—	1階	—	平安 前期	黒色 土層	皿	口縁部	口2/8	—	(2.6)	<15.0>	38	N7 灰白	N7 灰白	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
180	—	1区東 1棟	—	—	2階	—	平安 前期	黒色 土層	皿	口縁部 体部	口1/8 未満	<15.7>	(5.0)	<15.0>	15	N5 灰	N5 灰	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
181	—	1区東 3	1	Z	—	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底1/8	<0.0>	(1.4)	—	18	7.5Y7/1 灰白	7.5Y6/1 灰	1mm以下2mm程度 白多量	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
182	—	1区東 3	1	—	2階	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底8/8	5.6	(2.0)	—	74	2.5YR/3 灰	2.5YR/3 灰	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
183	—	1区東 5	1	—	3階	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底8/8	—	6.0	(1.3)	—	72	7.5YR/4 灰	7.5YR/4 灰	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑	
184	—	1区東 上	1	—	1階	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底2/8	<7.4>	(2.1)	—	69	7.5YR/6 灰	7.5YR5/6 灰	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
185	PI30	1区東 2	1	—	1階11層	—	平安 前期	黒色 土層	皿	口縁部 体部	口1/8 未満	<13.8>	—	(3.0)	<14.0>	12	5YR/1 灰白	5YR/1 灰白	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑	
186	PI30	1区東 3	1	—	1階11層	6.7	平安 前期	黒色 土層	皿	口縁部 体部	口1/8 未満	<13.8>	<7.6>	2.6	<14.6>	58	5YR/1 灰白	5YR/1 灰白	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑	
187	—	1区東 2	1	Z	—	—	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底1/8 未満	<18.0>	(6.9)	—	255	N6 灰	N6 灰	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		
188	PI30	2区東 1	2	—	2階	2	平安 前期	黒色 土層	皿	体部	底4/8	<0.2>	(2.1)	—	70	N7 灰白	N7 灰白	1mm以下白色配 少	ロクロナデ 少	ロクロナデ 少	内外皮調度 内面 底部平滑	内外皮調度 内面 底部平滑		

編號 番号	写真 位置	管理番号	地区 名	川上地点 名称・ 座標・ 位置	取上 層序	時期	地層 部	器種	部位	保存者	口径 cm	底径 cm	高さ cm	最大径 cm	重量 g	外周色調	内周色調	土質	焼成	外形特徴・ 成形・施釉・ 貼付手法	内周特徴・ 成形・施釉・ 貼付手法	備考
189	—	30-02区 棟1-4a	—	2層	—	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵3/8	<6.0>	(2.5)	—	48	10Y8/2	10Y82/1	白~赤色陶質少量・ 石色陶質微量・黒 色	貝	同様文字彫刻 ミガシ黒色色 刷	ロクロナデ	内外土質滑らかしい	
190	—	30-44区 2棟1-4a	—	2層	—	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8 水漏	<13.2>	<6.0>	3.8	<13.4>	27	N7 灰白	N7 灰白	白色陶質・赤褐色に多 量	貝	ロクロナデ 転写切	ロクロナデ	口縁部滑らか
191	—	40区1棟 芝草1-4b	—	1層	—	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8 水漏	<13.8>	<2.8>	<14.0>	9	N5 灰	N7 灰白	白色陶質少量・黒 色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	内外土質滑らかしい	
192	—	40区2棟 土上1	—	表土	—	平安 前期	黒色 土器	碗	口縁部 底面	蔵1/8 水漏	<18.2>	<8.0>	(8.5)	<18.8>	51	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	白色陶質少量・黒 色	貝	ロクロナデ 入り(底部下平 面)・ロクロナ デ	ロクロナデ	内外土質滑らかしい
193	—	40区2棟1 4b	—	1層	—	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8	<8.8>	—	(2.0)	7	N7 灰白	N6 灰	白色陶質・赤褐色に多 量	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	内外土質滑らかしい	
194	—	50区1棟 5a	—	高層	—	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8	<18.8>	(3.2)	—	65	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	赤褐色に濃密	貝	同様文字彫刻 リ	ロクロナデ 転写	内外土質滑らかしい	
195	—	65区1棟 2	—	1層	1	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵3/8	<4.4>	(1.1)	—	12	10Y87/6 附焼	10Y88/2	赤色陶質・2mm× 赤色灰少量・赤 色	貝	子字か・同様系 灰量	同様文字彫刻 転写	内外土質滑らかしい	
196	—	65区1棟 1	—	1層	1	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8 水漏	<12.8>	—	(2.5)	<13.0>	6	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	白色陶質・炭褐色 少量に多量・赤 色	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	内外土質滑らかしい
197	—	75区1棟 南西2	—	1層南西	—	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8	<12.8>	—	(2.5)	<13.0>	6	N6 灰	N6 灰	白色陶質・炭褐色 少量・赤	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	内外土質滑らかしい
198	—	75区1棟 北西1	—	1層北西	—	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8	<12.0>	—	(3.0)	<12.2>	9	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	白色陶質・炭褐色 少量・赤	貝	ロクロナデ	ロクロナデ	内外土質滑らかしい
199	—	2-1	—	2	—	平安 前期	黒色 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8	<6.0>	(1.9)	—	24	2.5Y7/2 灰	2.5Y87/2 灰	白色陶質・炭褐色 少量・赤	貝	ロクロナデ 同 転写切	ロクロナデ	内外土質滑らかしい	
200	—	SLO09-1 30- 4a	—	SLO09 南上	—	平安 後期	上層部 土器	杯A	口縁部 底面	蔵1/8 水漏	<10.3>	<5.0>	2.0	<10.4>	18	7.5Y87/6 灰	7.5Y86/6 灰	1mm以下赤褐色 少量・黒色・石 色陶質多量・赤 色	貝	ロクロナデ 同 転写切	ロクロナデ 同 転写切	内外土質滑 らかしい
201	—	30- SLO10-1 4a	—	SLO10 南上	1	平安 後期	上層部 土器	杯A	口縁部 底面	蔵2/8 水漏	<10.7>	4.1	3.7	<10.9>	55	7.5Y87/6 赤	7.5Y86/4 赤	1mm以下赤褐色 少量・黒色・石 色陶質多量・赤 色	貝	ロクロナデ 同 転写切	ロクロナデ 同 転写切	内外土質滑らかしい
202	—	25区7 1棟1	2	7 トレンチ	—	平安 後期	上層部 土器	小型杯	口縁部 底面	蔵1/8 水漏	<9.0>	<5.0>	1.8	<9.2>	17	7.5Y88/3 灰	7.5Y87/6 灰	1mm以下赤褐色 少量・黒色・石 色陶質多量・赤 色	貝	ロクロナデ 同 転写切	ロクロナデ 同 転写切	内外土質滑 らかしい
203	—	44区1棟 30- 1	4a	1層	—	平安 後期	上層部 土器	杯A	口縁部 底面	蔵2/8 水漏	<11.1>	—	(2.8)	<11.4>	22	7.5Y87/6 赤	7.5Y88/3 赤	白色・石色陶質 少量・赤	赤・青 不良	ロクロナデ 同 転写切	ロクロナデ 同 転写切	内外土質滑らかしい
204	—	50区5棟 西2-5a	—	高層	—	平安 後期	上層部 土器	小型杯	口縁部 底面	蔵2/8 水漏	<10.0>	<5.2>	2.1	<10.2>	25	5Y86/6 赤	5Y86/6 赤	黒色・石色陶質 少量・赤	貝	ロクロナデ 同 転写切	ロクロナデ 同 転写切	内外土質滑 らかしい
205	—	50区5棟 西2-1	—	1層	—	平安 後期	上層部 土器	小型杯	口縁部 底面	蔵1/8	<9.8>	—	(1.5)	<10.0>	2	5Y87/6 赤	5Y88/3 赤	赤褐色・黒色・2mm× 赤褐色少量・赤 色	貝	ロクロナデ 同 転写切	ロクロナデ 同 転写切	内外土質滑らかしい
206	—	65区1棟 3	—	1層	1	平安 後期	上層部 土器	小型杯	口縁部 底面	蔵1/8	<9.4>	—	(1.8)	<9.6>	8	7.5Y86/6 赤	7.5Y87/4 赤	白色・石色陶質 少量に多量・赤 色	貝	—	—	内外土質滑らかしい

付表 8 石川桑里遺跡 中世～近世土器・陶器・磁器一覽(報告書掲載分)

編號 番号	管理番号	地区 名	山上地区		取上 層号	時期	種類	産地	部位	口径 cm	底径 cm	法量		重量 g	外周色調	内周色調	胎土	焼成	外周調色・ 底面調色・ 取付方法	内周調色・ 底面調色・ 取付方法	備考
			位置 方位	面積 ㎡								長さ cm	直径 cm								
207	PL31	ST001-1	1	ST001	Pt2	—	中世	磁器	鉢	—	—	—	—	15	7.5YR6/2 灰赤	7.5YR6/2 灰赤	Imml後黄赤 胎土	良	ロクロナ字 付文ズシ 七色磁器	ロクロナ字 付文ズシ 七色磁器	
208	PL31	ST005-1	1	ST005	Pt5	—	中世	陶器	鉢	—	—	—	—	47	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	Imml下黄赤 胎土	良・ 硬質	同様ナ字 目	同様ナ字 目	
209	PL31	SK001-2	1	SK001	層上	—	中世	陶器	口縁 体部	口径 未測	—	—	—	23	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	Imml下 胎土	中々 不良	ナ字 (漆黒)	同様ナ字	
210	PL31	SK001-1	1	SK001	層上北西	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	—	—	—	7.5	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	Imml後 胎土	良・ 硬質	ハナナ字 元色	同様ナ字 (前高)	西面摩耗
211	—	SK002-1	1	SK002	層上北端	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	—	—	—	18	2.5Y6/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	Imml後黄赤 胎土	良	同様ナ字	同様ナ字	
212	PL31	SK003-1	1	SK003	層上	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	—	—	—	16	2.5Y6/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	Imml下白 胎土	中々 不良	ナ字	ナ字	
213	—	SK010-1	1	SK010	層上	—	中世	土器	カワラ ケ	口径 未測	<8.7>	—	(2.1)	<0.0>	5YR7/6 黄	5YR7/6 黄	Imml下白 胎土	良	ロクロナ字	ロクロナ字	
214	PL31	SK012-2	1	SK012	層上	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	—	—	—	51	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	Imml下白 胎土	良	ナ字	同様ナ字	
215	PL31	SK012-3	1	SK012	層上	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	<14.3>	—	(1.9)	<14.6>	2.5Y7/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	胎土	良	同様ナ字	同様ナ字	
216	PL31	SK012-1	1	SK012	層上	3	中世	陶器	壺	口径 未測	—	—	—	192	N-5 灰	N-6 灰	Imml後白 胎土	良	平ナタキ	石による目 調	
217	PL31	SK017-1	1	SK017	層上北端	—	中世	磁器	鉢	口径 未測	—	—	(3.7)	23	5Y6/1 灰赤	5Y6/1 灰赤	Imml下黄赤 胎土	良	ロクロナ字 付文ズシ 七色磁器	ロクロナ字 付文ズシ 七色磁器	
218	PL31	SK020-1	1	SK020	層上	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	—	—	—	19	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	胎土	良	ロクロナ字	ロクロナ字	
219	—	SK026-1	1	SK026	層上	—	中世	土器	カワラ ケ	口径 未測	<6.0>	(0.7)	—	4	7.5YR8/6 灰黄	7.5YR8/6 灰黄	胎土	良	ロクロナ字 同 胎土	ロクロナ字	
220	PL31	SK041-1	1	SK041	層上	3	中世	陶器	鉢	口径 未測	<14.0>	(0.3)	—	200	N-4 灰	N-7 灰	胎土	良	ロクロナ字 同 胎土	同様ナ字 目	深淵上・N層 前内面摩耗
221	—	SK056-2	1	SK080	層上	—	中世	土器	カワラ ケ	口径 未測	<7.2>	(1.3)	<7.4>	3	10YR5/3 黄	10YR5/3 黄	胎土	良	ロクロナ字	ロクロナ字	
222	PL31	SK056-1	1	SK080	層上	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	—	—	—	86	7.5YR6/4 黄	7.5YR6/4 黄	胎土	良	ナ字(白磁器)	ナ字(白磁器)	
223	PL31	SK062-3	1	SK062	層上	—	中世	磁器	鉢	口径 未測	<16.0>	(2.8)	<10.2>	11	5Y6/3 灰赤	5Y6/3 灰赤	胎土	良	ロクロナ字 同 胎土	ロクロナ字 同 胎土	
224	PL31	SK062-2	1	SK062	層上	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	—	—	—	27	N-6 灰	N-6 灰	胎土	良	同様ナ字 目	同様ナ字 目	
225	PL31	SK062-1	1	SK062	層上	—	中世	陶器	鉢	口径 未測	—	—	—	95	N-7 灰	N-7 灰	胎土	良	同様ナ字 目	同様ナ字 目	

掲載 番号	写真 位置	山上地区		最上 番号	時期	地質	産地	産種	産位	残存率	法量			外色色調	内色色調	土質	地質	外山産物・ 産石方法	内山産物・ 産石方法	備考	
		管理番号	地区 名								幅長 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)								
226	—	SK075.1	1	SA005	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	<R1>	<R1>	1.5	<R4>	5	7.5YR6/4	7.5YR8/4	1mm以下白色 灰褐色, 密	1mm以下白色 粘土質	ロクロ子子 底コゴ子子 底コゴ子子	—
227	PL31	SK091.1	1	SK091	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	7.5	5.7	1.7	7.7	34	7.5YR8/3	7.5YR8/4	1mm以下白色 赤褐色, 少量	1mm以下白色 赤褐色, 少量	ロクロ子子 底コゴ子子 底コゴ子子	—
228	PL31	SK094.2	1	SK094	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	11.0	7.4	2.8	11.4	114	10YR7/3	10YR8/3	5mm程度少量 褐色, 密	5mm程度少量 褐色, 密	ロクロ子子 底コゴ子子 底コゴ子子	—
229	PL31	SK094.1	1	SK094	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	—	—	—	—	120	N7 灰白	N7 灰白	1mm以下白色 多量・白色粘土 質, 粗	1mm以下白色 多量・白色粘土 質, 粗	ナ子	—
230	PL31	SK155.1	1	SK155	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	—	—	—	27	2.5Y7/2	2.5Y6/1	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—	
231	PL31	SK177.1	1	SK177	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	—	—	—	37	2.5Y8/1	2.5Y8/1	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—	
232	—	SK178.1	1	SK178	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	—	—	—	16	2.5Y7/2	2.5Y8/2	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—	
233	PL31	SK188.1	1	SK188	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	<R1>	<R1>	4.2	<R1>	14	10YR8/1	10YR8/1	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—
234	PL31	SK196.1	1	SK196	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	—	—	—	71	2.5Y4/1	2.5Y3/1	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—	
235	PL31	SK246.1	1	SK246	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	<R1>	<R1>	1.8	<R1>	53	7.5Y5/2	7.5Y6/2	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—
236	PL31	SK249.1	1	SK249	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	—	—	—	7	2.5Y7/1	2.5Y7/1	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—	
237	PL31	SK270.1	1	SK270	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	<R1>	<R1>	1.9	<R1>	93	5Y6/1	5Y5/1	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—
238	—	SK276.1	1	SK276	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	<R1>	<R1>	0.4	<R1>	124	2.5Y9/2	2.5Y7/1	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—
239	PL31	SK1103.1	1	SK1103	産石	—	—	カワラ ヶ	口縁- 底面	口1/8 木溝	<R1>	<R1>	0.6	<R1>	9	10YR7/2	10YR7/2	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	1mm以下白色 灰褐色, 褐色	口縁部ナ子 子体部ナ子	—

付表8

路線番号	管区	支店名	山上市区		取上番号	時期	地質	構造	断面	法量				断面積	内巻面積	巻上	積戻	外巻積戻・取付方法	備考		
			管理番号	地区名						幅員(m)	位置	口径(km)	縦長(km)							距離(km)	最大径(km)
240	PL31	S0001-6	1	S0001	理上東	—	中世	土層	在池	カワナケ	口径- 0.0-	縦長- 0.2(1)	距離- 0.3-	最大径- 0.3-	重量- 6	7.5387/4 断面積	2.5387/4 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 ナギ 割取ナギ ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
241	PL31	S0001-4	1	S0001	理上東	—	中世	土層	在池	カワナケ	口径- 0.27-	縦長- 0.27-	距離- 0.27-	最大径- 0.27-	重量- 38	10398/4 断面積	10398/2 比尺積戻	100%以下 粒径0.075以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 底コナナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
242	—	S0001-5	1	S0001	理上	—	中世	土層	在池	カワナケ	口径- 0.3-	縦長- 0.2-	距離- 0.2-	最大径- 0.2-	重量- 28	2.538/2 断面積	2.538/1 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 カワナケナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
243	PL31	S0001-3	1	S0001	理上東	—	中世	陶器	在池	陶器	口径- 未測	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 42	N.6 断面積	N.6 比尺積戻	1-2mm白色 片状多量	中世 ハツのチナ子 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
244	PL31	S0001-2	1	S0001	理上	—	中世	陶器	在池	陶器	口径- 0.27-	縦長- 0.4-	距離- 0.4-	最大径- 0.4-	重量- 131	N.7 断面積	N.7 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 ハツのチナ子 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
245	PL31	S0001-1	1	S0001	理上東	—	中世	陶器	在池	陶器	口径- 未測	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 90	N.5 断面積	N.5 比尺積戻	1-2mm白色砂 多量	中世 半日タタキ 底コナナギ ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
246	PL31	S0002-2	1	S0002	理上西	—	中世	磁器	在池	磁器	口径- 未測	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 4	516/3 断面積	516/3 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 陶器ナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
247	PL31	S0002-1	1	S0002	理上西	—	中世	陶器	在池	カワナケ	口径- 0.1-	縦長- 0.1-	距離- 0.1-	最大径- 0.1-	重量- 33	2.537/1 断面積	2.537/1 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
248	—	S0009-4	1	S0009	理上西	—	中世	土層	在池	カワナケ	口径- 0.27-	縦長- 0.1-	距離- 0.1-	最大径- 0.1-	重量- 36	10398/3 断面積	10398/3 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
249	PL31	S0009S D017-3	1	S0009	理上	—	中世	磁器	在池	磁器	口径- 未測	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 20	2.537/2 断面積	2.537/2 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
250	PL31	S0009-1	1	S0009	理上	—	中世	陶器	在池	陶器	口径- 0.17-	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 57	537/1 断面積	537/1 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 ハツのチナ子 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
251	PL31	S0009-2	1	S0009	理上	—	中世	陶器	在池	陶器	口径- 0.17-	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 35	2.538/2 断面積	2.538/2 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
252	PL31	S0009-3	1	S0009	理上	—	中世	陶器	在池	陶器	口径- 0.17-	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 91	N.7 断面積	N.7 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
253	PL31	S0101-1 北	126	S0101 北	理上	—	中世	土層	在池	カワナケ	口径- 0.7-	縦長- 5.0-	距離- 2.2	最大径- 2.7-	重量- 6	7.5387/4 断面積	7.5387/4 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
254	PL31	S0102-1 北	126	S0102 北	理上北	1	中世	土層	在池	内江	口径- 未測	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 45	7.5383/2 断面積	7.5383/2 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 ナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
255	PL32	S0102-2 北	126	S0102 北	理上北	3	中世	土層	在池	内江	口径- 未測	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 146	10382/1 断面積	10382/2 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 ナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
256	PL32	S0203-1 2区	1	S0203	理上	—	中世	陶器	在池	陶器	口径- 未測	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 52	N.7 断面積	N.7 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 ナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考
257	PL32	S0023-2	2	S0023	理上	—	中世	陶器	在池	陶器	口径- 未測	縦長- 未測	距離- 未測	最大径- 未測	重量- 12	537/3 断面積	537/3 比尺積戻	1mm以下粒径 100%以下	中世 カワナケナギ 内巻積戻 陶器ナギ	内巻積戻・ 取付方法 ナギ	備考

機関番号	写尺 図取	出土位置		取上 層号	東緯	緯緯	遺物種	原産地	器種	部位	保存率	法量			外面色調	内面色調	断面	構成	外面装飾・ 底面・縁部・ 取付方法	備考		
		管理番号	地区									町内・ 位置	口径 cm	直径 cm							高さ cm	重量 g
258	PL32 S0023-7	1. 西	S0023	層上	中世	陶器	在池	内口蓋	鉢	底・底部	底口/8 未測	-	24.0>	2.1	-	15	510/3 砂・土質	510/3 砂・土質	510/3 砂・土質	510/3 砂・土質	510/3 砂・土質	古銅戸覆1・ 目取付
259	PL32 S0023-3	1. 西	S0023	層上	中世	陶器	在池	内口蓋	鉢	底・底部	底口/8 未測	-	26.0>	2.0	-	106	7.5106/4 化灰多量・ 灰多量	7.5106/3 化灰多量・ 灰多量	1mm以下砂・ 白灰多量・ 灰多量	7.5106/4 化灰多量・ 灰多量	7.5106/3 化灰多量・ 灰多量	内面装飾付 目取付
260	PL32 S0023-1	1. 西	S0023	層上	中世	土器	在池	内口蓋	口蓋部	口/8	口/8	-	-	-	-	124	10106/6/4 黄肌	10106/7/3 黄肌	10106/6/4 黄肌	10106/7/3 黄肌	内面装飾付 目取付	
261	PL32 S0023-3	1. 西	S0023	層上	中世	陶器	在池	内口蓋	口蓋部	口/8	口/8	-	11.6>	-	10	2.5107/7 黄肌	2.5106/2 黄肌	2.5106/2 黄肌	2.5106/2 黄肌	2.5106/2 黄肌	古銅戸前附様 式	
262	PL32 S0023-13	1. 西	S0023	層上	中世	陶器	在池	内口蓋	口蓋部	口/8	口/8	-	-	-	36	N.7 灰白	N.6 灰白	1mm以下砂・ 灰多量	N.7 灰白	N.6 灰白	古銅戸前附様 式	
263	PL32 S0023-2	1. 西	S0023	層上	中世	陶器	在池	内口蓋	口蓋部	口/8	口/8	-	-	-	50	N.7 灰白	N.7 灰白	1mm以下砂・ 灰多量	N.7 灰白	N.7 灰白	古銅戸前附様 式	
264	PL32 S0023-1	1. 西	S0023	層上	中世	陶器	在池	内口蓋	口蓋部	底・底部	底口/8 未測	-	16.0>	0.4	-	94	N.5 灰	N.7 灰	1mm以下砂・ 灰多量	N.5 灰	N.7 灰	古銅戸前附様 式
265	PL32 S0023-5	1. 西	S0023	層上	中世	陶器	在池	内口蓋	口蓋部	底・底部	底口/8 未測	-	15.1	-	112	7.5108/7/4 黄肌	7.5107/7/4 黄肌	7.5107/7/4 黄肌	7.5108/7/4 黄肌	7.5107/7/4 黄肌	古銅戸前附様 式	
266	PL32 S0023-4	1. 西	S0023	層上	中世	土器	在池	外鉢	鉢部	底・底部	底口/8 未測	-	28.2>	3.6	-	74	7.5107/8 黄肌	7.5107/7 黄肌	7.5107/7 黄肌	7.5107/8 黄肌	7.5107/7 黄肌	古銅戸前附様 式
267	PL32 S0033-1	30. 4a	S0033	層上	中世	土器	在池	各付	底・底部	底口/8	底口/8	-	2.8>	-	46	10104/2 灰黄肌	10104/2 灰黄肌	10104/2 灰黄肌	10104/2 灰黄肌	10104/2 灰黄肌	古銅戸前附様 式	
268	PL32 S0056-2	30. 4a	S0056	層上	中世	青磁	中池	口蓋	口蓋部	口/8	口/8	-	2.1	4.8>	4	7.5105/3 灰中子	7.5106/2 灰中子	7.5106/2 灰中子	7.5105/3 灰中子	7.5106/2 灰中子	古銅戸前附様 式	
269	PL31 S0065-2	30. 4a	S0065	層上	中世	土器	在池	有少ク ケ	口蓋部	底口/8	底口/8	-	7.6>	1.8	17	10108/2 灰白	10108/2 灰白	10108/2 灰白	10108/2 灰白	10108/2 灰白	古銅戸前附様 式	
270	PL31 S0065-4	30. 4a	S0065	層上・2層	中世	土器	在池	有少ク ケ	口蓋部	底口/8	底口/8	-	4.2>	2.4	14	10107/1 灰白	10107/1 灰白	10107/1 灰白	10107/1 灰白	10107/1 灰白	古銅戸前附様 式	
271	PL31 S0065-3	30. 4a	S0065	層上・2層	中世	土器	在池	有少ク ケ	口蓋部	底口/8	底口/8	-	11.6>	2.6	17	10108/2 灰白	10108/2 灰白	10108/2 灰白	10108/2 灰白	10108/2 灰白	古銅戸前附様 式	
272	PL32 S0065-1	30. 4a	S0065	層上・2層	中世	土器	在池	内口蓋	底部	底口/8	底口/8	-	18.0>	1.5	38	7.5103/2 黄肌	7.5106/4 黄肌	7.5106/4 黄肌	7.5103/2 黄肌	7.5106/4 黄肌	古銅戸前附様 式	
273	—	S0080-1	S0080	層上	中世	土器	在池	有少ク ケ	口蓋部	底・底部	底口/8	-	11.0>	2.7	12	7.5107/4 灰白	7.5108/4 灰白	7.5108/4 灰白	7.5107/4 灰白	7.5108/4 灰白	古銅戸前附様 式	
274	PL32 S0125-1	1. 西	S0125	層上	中世	陶器	在池	口蓋部	口蓋部	口/8	口/8	-	-	-	45	N.7 灰	N.6 灰	1-2mm以下 灰黄肌多量・ 灰黄肌多量・ 元灰	N.7 灰	N.6 灰	古銅戸前附様 式	

付表8

編號 番号	寫真 區號	出土位置		取土 層序	時期	器物類	產出 山系	器種	部位	厚/寸 口徑/寸	法量			外色色調	内色色調	胎土	胎成	外面装飾・ 底付手法	内面装飾・ 底付手法	備考
		管理番号	地区								層位	口径/ cm	底径/ cm							
275	PL32	S0125-2	1西	S0125	埋土	—	中世	陶器	甕	口縁- 体部	口1/8 未満	—	—	41	5YR6/1 灰白	1mm以下白色 灰白・黒色 1mm程度の砂多 量・2mm程度の 砂少量・風化 化変態 粘土質 胎土	中 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	底面縮小
276	PL32	S0126-1	1西	S0126	埋土	—	中世	土器	甕	体部	—	—	71	7.5YR7/4 赤褐色 に赤い帯 を帯びる	7.5YR7/4 赤褐色 に赤い帯 を帯びる	赤褐色 胎土	—	—	—	
277	PL32	1区東1 棟-2	1東	—	1面	—	中世	陶器	甕	底1/8 未満	—	(4.8)	142	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰 第1・2mm迄 は白磁質・ 珪石質胎土 珪石質胎土 珪石質胎土	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	底面縮小	
278	PL32	1区東1 棟-1	1	Z	—	—	中世	磁器	碗	口縁-体 部	口1/8 未満	—	8	5Y5/2 灰白	5Y5/2 灰白	5Y5/2 灰白	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	—
279	—	3区西 Z-1	3西	Z	—	—	中世	磁器	碗	口縁- 体部	口1/8 未満	—	8	5YR/1 灰白	5YR/1 灰白	5YR/1 灰白	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	—
280	—	2区 S0023-5	2	S0023	埋土	—	近世	磁器	小碗	口縁- 底面	口2/8 底2/8	<8.0>	23	N 8 灰色	N 8 灰色	N 8 灰色	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	—
281	PL32	S0023-8	1 1西	S0023	埋土	—	近世	陶器	碗	体-底面 部	底8/8	(2.0)	70	10YR6/1 灰白	10YR6/3 黄褐色 少量	1mm以下風化 胎土・珪石質 胎土	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	底面縮小
282	PL32	S0023-9	1 1西	S0023	埋土	—	近世	陶器	鉢	口縁-体 部	底4/8	(2.2)	29	2.5YR/3 黄褐色	2.5YR/3 黄褐色	2.5YR/3 黄褐色	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	—
283	PL32	S0023-1	1西	S0023	埋土	—	近世	陶器	丸瓶	口縁- 体部	口2/8	<10.2>	52	7.5YR4/3 黄褐色	7.5YR4/3 黄褐色	1mm以下風化 胎土・珪石質 胎土	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	底面縮小
284	PL32	2区 S0023-4	2	S0023	埋土	—	近世	陶器	丸瓶	体-底面 部	底4/8	(1.9)	42	2.5Y7/1 黄褐色	2.5Y7/1 黄褐色	1mm以下風化 胎土・珪石質 胎土	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	底面縮小
285	PL32	2区 S0023-3	2	S0023	埋土	—	近世	陶器	丸瓶	体-底面 部	底4/8	(2.1)	34	2.5Y7/1 黄褐色	2.5Y7/1 黄褐色	1mm以下風化 胎土・珪石質 胎土	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	底面縮小
286	PL32	S0023-1	1 1西	S0023	埋土	—	近世	磁器	皿	体-底面 部	底1/8 未満	(7.3)	24	N 8 灰色	N 8 灰色	N 8 灰色	黄 不具	ロクロナデ 刻目	ロクロナデ 刻目	底面縮小



掲載番号	写真 図版	出土地区		取土 層号	時期	地層性	産地	器種	部位	残存率	口径 cm	底径 cm	高さ cm	重量 g	外装色調	内装色調	胎土	地味	外装装飾・ 底の装飾・ 取付方法	備考	
		区名	遺構・ 位置																		
287	PL32	管理番号 S0023	1区 S0023	1西 S0023	上土	近世	陶器	皿	体-底部	底4/8	—	4.9	(1.7)	—	7.5395/4	7.5384/3	1mm以下砂粒 多量	良	ロクロ子母 取付方法不明 目録参照(器種)	肥田土層1b	
288	PL32	S0023-1c	1区 S0023	1西 S0023	上土	近世	陶器	皿	口縁- 体部	口1/8	<13.8>	—	(2.2)	<14.0>	15	532/2	532/2	灰白粘土少量 粒1~2重	良	肥土層1a 取付方法不明	肥田土層1a
289	PL32	S0023	1区 S0023	1西 S0023	上土	近世	陶器	皿	体-底部	底3/8	—	<8.4>	(3.3)	—	96	5384/1	5384/1	1mm程度砂粒 少量少砂・白 灰・黒色胎 土	良	ロクロ子母 取付方法不明 目録参照(器種)	肥田土層1b 肥田土層1c
290	—	S0023-1d	1区 S0023	1西 S0023	上土	近代	瓦	瓦	—	瓦当	—	—	—	—	53	N-4	N-4	1mm以下石 灰・白砂粒少	良	型押	
291	PL32	S0024-4	1区西 S0024-4	1西 S0024	上土	近世	磁器	皿	体-底部	底1/8	—	<5.0>	(1.9)	—	22	10078/1	10078/1	1mm以下砂少 量・胎土	良	ロクロ子母 取付方法不明 外装目録参照(器種)	肥田土層1a
292	PL32	S0024-5	1区西 S0024-5	1西 S0024	上土	近世	磁器	皿	体-底部	底4/8	—	<4.8>	(2.9)	—	64	輪N-8 灰白 5387/1 灰白	輪N-8 灰白 5387/1 灰白	砂粒目立たず。 灰白胎土	良	肥土層1a クワ型 上下透孔 輪体下部下~ 底部透孔	肥田土層1a
293	PL33	S0024-3	1区西 S0024-3	1西 S0024	上土	近世	磁器	皿	口縁- 底部	口2/8 底4/8	<8.9>	4.0	2.0	<9.1>	42	N-8 灰白	N-8 灰白	1mm以下白色 胎土・胎土 少量・灰白色 胎土	良	ロクロ子母 取付方法不明 透孔	肥田土層1a
294	PL32	S0024-1	1区西 S0024-1	2 S0024	上土	近世末 -近代	磁器	鉢	口縁- 体部	口2/8	<10.0>	—	(4.0)	<10.1>	15	N-8 灰白	N-8 灰白	灰白・灰白色 胎土・胎土 少量	良	ロクロ子母 取付方法不明 透孔	肥田土層1a
295	—	S0024-6	1区西 S0024-6	1西 S0024	上土	近代	磁器	鉢	口縁- 底部	口1/8	<11.5>	<4.4>	(4.9)	<11.6>	60	N-8 灰白	N-8 灰白	1mm以下白色 胎土	良	ロクロ子母 取付方法不明 透孔	肥田土層1a
296	PL32	S0024-2	1区西 S0024-2	1西 S0024	上土	近世	陶器	鉢	体-底部	底1/8 太縁	—	<11.4>	(8.2)	—	75	7.5395/2	7.5385/2	1mm以下砂粒 少量	良	ロクロ子母 取付方法不明 透孔	肥田土層1a
297	PL32	S0024-1	1区西 S0024-1	1西 S0024	上土	近世	土器	鉢	口縁- 体部	口1/8 体部	—	—	—	—	67	5387/6	5387/6	1mm以下白色 胎土・胎土 少量・胎土 少量	良	タタラ作り ロクロ子母 取付方法不明 透孔	肥田土層1a
298	PL32	S0033-2	加- S0033	3a S0033	上土層	近世	陶器	鉢	体-底部	底1/8	—	<10.0>	(5.6)	—	113	2.5385/6	2.5386/6	1mm以下砂 粒・胎土少量	良	ロクロ子母 取付方法不明 透孔	肥田土層1a
299	PL32	S0034-2	3a S0034	3a S0034	上土	近世	陶器	丸罐	体-底部	底8/8	—	5.0	(1.6)	—	45	7.5386/1	7.5387/1	1mm以下砂粒 少量・灰白色 胎土	良	ロクロ子母 取付方法不明 透孔	肥田土層1a

付表8

路線 番号	客体 種別	出上駅名		取上 乗降 乗降	町界	路線 種別	産地	酒種	部位	残存率	口径 (mm)	瓶径 (mm)	法量			重量 g	内装色調	外装色調	内装色調	瓶上	酒底	内装調整・ 成形・瓶輪・ 取付方法	備考
		距離 (cm)	深高 (cm)										最大径 (cm)										
300	PL32	S0034-1	3a	S0034	樽上	—	近世	陶器	体-底部	底7/8	—	4.4	(2.1)	—	42	7.5/84/4	7.5/84/4	1mm以下白色 瓶少量	1mm以下白色 瓶少量	良	出成行→ロク ロナ子 瓶輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	ロクロナ子 瓶 輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	瓶口蓋付連 取付用
301	PL32	S0037-1	3b・ 4a	S0037	樽上	—	近世	陶器	体-底部	底8/8	—	5.0	(1.0)	—	56	2.5/7/2	2.5/7/2	特殊黄緑・ 緑少(いり) 瓶取	特殊黄緑・ 緑少(いり) 瓶取	良	出成行→ロク ロナ子 下内 付以外・水 輪付 体上取 力 輪	ロクロナ子 瓶 輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	連取付用
302	PL32	S0037-2	3b・ 4a	S0037	樽上	—	近世	陶器	体-底部	底8/8	—	4.7	(2.3)	—	59	2.5/8/3	2.5/8/3	特殊黄緑・ 白色調	特殊黄緑・ 白色調	今令 不具	出成行→ロク ロナ子 前 内通射輪 輪	ロクロナ子 瓶 輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	瓶口蓋付連 取付用
303	—	4(K S0043-1	4a	S0043	樽上	—	近世	陶器	口縁- 体部	口1/8 大瓶 小瓶	<7.8>	—	(2.6)	—	6	5/8/2	5/8/2	1mm以下白色 瓶	1mm以下白色 瓶	良	ロクロナ子 瓶 輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	ロクロナ子 瓶 輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	連取付用
304	PL33	S0056-1	4a	S0056	樽上	1	近世	陶器	口縁- 底部	口2/8 底8/8	<13.0>	5.0	6.1	<13.4>	161	2.5/7/1	2.5/7/1	1mm以下白色 瓶・白色瓶少 量・黄	1mm以下白色 瓶・白色瓶少 量・黄	不具	出成行体中央 下・高台瓶下 内通射輪 輪	ロクロナ子 瓶 輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	瓶口蓋付連 取付用
305	—	S0057-3	3b・ 4a	S0057	樽上	—	近世	磁器	つまみ ~体部	つまみ 2/8 <4.4>	—	—	(2.0)	—	18	N.8 瓶口 瓶口	N.8 瓶口 瓶口	良	ロクロナ子 つ つまみ前出 力	ロクロナ子 公 付・油輪 輪	瓶口蓋付連 取付用		
306	PL33	S0057-1	4a	S0057	樽上	—	近世	陶器	体-底部	底3/8	—	<5.9>	(1.9)	—	26	2.5/7/1	2.5/7/1	1mm以下白色 瓶・白色瓶少 量・黄・白色 調	1mm以下白色 瓶・白色瓶少 量・黄・白色 調	良	出成行→ロク ロナ子 体上 下・高台瓶下 内通射輪 輪	ロクロナ子 瓶 輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	連取付用
307	PL33	S0057-2	3b・ 4a	S0057	樽上	—	近世	陶器	体-底部	底7/8	—	4.6	(2.7)	—	74	2.5/8/3	2.5/8/3	1mm以下白色 瓶・黄調	1mm以下白色 瓶・黄調	良	ロクロナ子 公 付・油輪 輪	ロクロナ子 公 付・油輪 輪	瓶口蓋付連 取付用
308	PL33	S0058a・3b・ 4	4a	S0058a	樽上・樽 上・樽	3	近世	小瓶 陶器	口縁- 瓶口	口6/8 底8/8	7.8	3.4	3.4	8.1	53	5/6/3	5/7/2	1mm以下白色 瓶・黄調	1mm以下白色 瓶・黄調	良	出成行→ロク ロナ子 体上 下・高台瓶下 内通射輪 輪	ロクロナ子 瓶 輪 油輪 瓶付輪 瓶取力	連取付用少
309	PL33	S0058a・3b・ 3	4a	S0058a	樽上	4	近世	陶器	瓶口	底8/8	—	5.2	(1.4)	—	40	10/8/3/4	10/8/4/6	1mm以下白色 瓶・黄調	1mm以下白色 瓶・黄調	良	出成行→ロク ロナ子 付 つまみ前出 力	ロクロナ子 付 つまみ前出 力	連取付用少



付表8

編號 番号	写真 図説	管理番号	地上地点		取上 層号	時期	地物種	産地	階層	部位	保存率	法量				外形色調	内面色調	集土	組成	外装調整・ 成層・集積・ 配付手法	備考	
			区域 名称	基点								位置・ 位置	口径 cm	直径 cm	高さ cm							最大径 cm
320	PL33	SD092-1	1	SD092	埋土	—	近世	磁器	伊万里	皿	体-底部	底5/8	—	<3.2>	(1.1)	—	23	N-8 灰白	N-8 灰白	磁器含まず、 膠	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子染 透明磁器細小
321	PL33	SD125-4	1西	SD125	埋土	—	近世・ 近代	土器	在田	口鉢・ 体部	口1/8 水漏	—	—	—	—	34	10YR6/2 灰白	10YR6/3 灰白	1mm以下粒 配、細化、 灰、泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	時雨付層不明	
322	—	SD125-3	1西	SD125	埋土	—	近世	陶器	伊万里	口鉢手 鉢	口1/8 底5/8	底5/8	<5.3>	(2.5)	—	39	2.5YR/2 灰白	2.5YR/2 灰白	1mm以下粒 配、骨付、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器・ V期	
323	PL33	SD129-1	1東	SD129	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美 濃須野	口鉢・ 底部	口1/8 水漏	底5/8	<12.4>	4.9	<12.8>	102	2.5YR/1 灰白	2.5YR/2 灰白	1mm以下粒 配、 少、骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器	
324	PL33	SD148-1	5b	SD148	埋土	—	近世	磁器	伊万里	鉢	口鉢・ 底部	底5/8	—	4.0	(5.0)	108	N-8 灰白	N-8 灰白	灰白色調、 灰白、 骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器	
325	PL33	SD167-1	5b	SD167	埋土	—	近世	陶器	伊万里	口鉢・ 手鉢	口1/8 水漏	底5/8	<11.4>	—	(4.0)	<11.6>	10	2.5YR/3 淡黄	2.5YR/2 淡黄	1mm以下粒 配、 骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器
326	PL33	SD188-3	12c 北	SD188	埋土北	1	近世末	磁器	瀬戸美 濃須野	小碗	口鉢・ 底部	底3/8	<6.2>	<4.0>	4.4	<6.5>	52	7.5Y3/1 明緑	7.5Y3/1 明緑	出流付、骨付、 骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器
327	PL33	SD188-2	12c 北	SD188	埋土20 層北	—	近世	陶器	瀬戸美 濃須野	丸皿	口鉢・ 底部	底1/8	<11.2>	<6.5>	2.9	<11.4>	18	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	1mm以下粒 配、 少、骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器
328	PL33	SD188-1	12c 北	SD188	埋土23 層北	—	近世末	陶器	瀬戸美 濃須野	碗付皿	口鉢・ 底部	底4/8	<12.7>	<8.4>	3.8	<13.0>	104	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	1mm以下粒 配、 骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器
329	—	SD005-3b- 1-4a	3a	SD005	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美 濃須野	小碗	口鉢・ 底部	底1/8 水漏	<10.0>	—	(2.4)	<10.2>	4	7.5YR2/1 重	7.5YR2/1 重	1mm以下粒 配、 骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器
330	PL33	SD001-1	1	SD001	埋土	—	近世	陶器	瀬戸美 濃須野	人丸	口鉢・ 底部	底1/8	<4.2>	<4.0>	3.7	<4.2>	10	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	1mm以下粒 配、 骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器
331	PL33	SD008-1	4a	SD008	埋土	1	近世	磁器	伊万里	小碗	体-脚部	—	—	—	(1.7)	—	28	N-8 灰白	N-8 灰白	灰白色調、 骨、 泥	ロクロ子灰 出流付、骨付砂 付、骨付以外 透明磁器全装 飾	肥田土子灰 透明磁器・ V期



付表9 石川条里遺跡 土製品一覧

【図版94】

掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	器種	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	備考
			地区 名	遺構名・ 地点	層位・ 位置			長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)					
1	PL34	土製品6	1	SK062	埋土	—	土師	4.8	1.7	1.7	11	10YR3/1 黒褐色	—	1mm以下細砂多量 白・黒・赤色粒	やや不良	埴に粘土巻き付け ナデ
2	PL34	土製品3	1	SK177	埋土	1	土師	4.6	2.0	2.0	16	10YR6/2 灰黄褐色	—	1mm以下細砂多量 白・黒色粒多、赤色 粘土少量	やや不良	埴に粘土巻き付け ナデ
3	PL34	土製品1	1	SD001	埋土	3	土師	(2.9)	(1.4)	(1.3)	4	7.5YR7/2 明褐色	—	1mm以下細砂多量	やや不良	埴に粘土巻き付け ナデ
4	PL34	土製品8	1	SD001	埋土	—	土師	<4.8>	1.9	(1.9)	13	7.5YR6/4 ～5/3 にぶい・暗 ～ にぶい・暗	—	1mm以下細砂多量 白・黒・赤色粒多、 微細石黄少量	良	埴に粘土巻き付け ナデ
5	PL34	土製品2	1	SD002	埋土	1	土師	4.6	1.3	1.2	5	5YR3/2 暗水色	—	1mm以下細砂多量 白・黒色粒・石灰 等	良	埴に粘土巻き付け ナデ
6	PL34	土製品7	1	SD088	埋土	—	土師	(4.3)	1.9	2.0	14	5YR4/4 にぶい・ 赤褐色	—	1mm以下細砂多量 白・黒・赤色粒多、 石灰少量	良	埴に粘土巻き付け ナデ
7	PL34	土製品4	1	—	土壁	—	土師	5.9	2.6	2.3	27	10YR7/3 にぶい・ 黄褐色	—	1mm前後砂少量 白・黒・赤色粒多、 石灰少	やや不良	埴に粘土巻き付け ナデ 離れ肌(付着)
8	PL34	土製品5	1	Z	—	—	土師	5.0	2.1	1.9	15	2.5YR6/4 にぶい・暗	—	1mm以下細砂多量 白・黒・赤色粒	良	埴に粘土巻き付け ナデ
9	PL34	土製品9	1	SK356	埋土	1	土師	5.8	2.9	2.6	45	10YR6/2 灰黄褐色	—	1～2mm前後砂少量 白・黒・赤色粒多 量	やや不良	埴に粘土巻き付け ナデ(概ね平坦面 押しあてナデ)
10	PL34	土製品 10	1	SK356	埋土	2	土師	6.8	3.1	3.0	63	7.5YR5/8 明褐色	—	1mm以下細砂少 量、1～2mm砂少 量、白・赤色粒多、黒色 粒少量	良	埴に粘土巻き付け 外面指土肌、ナデ
11	PL34	土製品 11	1	SK356	埋土	3	土師	6.7	2.7	2.7	50	10YR7/3 にぶい・ 黄褐色	—	1mm以下細砂少 量、白・黒・赤色粒	良	埴に粘土巻き付け 指土肌、ナデ
12	PL34	土製品 12	9	SK002	埋土	252	ミニチュ ア土師	口径 3.0	底径 2.0	高さ 2.6	18	10YR5/3 にぶい・ 黄褐色	10YR3/1 黒褐色	1mm前後砂多量 白・黒・赤色粒多、 石灰少量	やや不良	
13	PL34	土製品 15	1	SD086	埋土	—	土製円筒	3.5	1.70	0.90	7	7.5YR6/4 にぶい・暗	7.5YR6/2 灰褐色	1mm以下細砂少 量、1～2mm砂少 量、白・黒・赤色粒・微 細石黄少量	良	周囲研削
14	PL34	土製品 16	12c北	SD188	埋土 北23層	—	土製円筒	3.8	3.5	1.8	25	N3 暗灰	N3 暗灰	1mm以下細砂微 白色粒・石灰	良・微焼	周囲打ち欠き

付表10 石川条里遺跡 玉類一覧

【図版94】

掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	器種	材質	法量				孔径(mm)		穿孔 方法	欠損
			地区 名	遺構・ 地点	層位・ 位置				全長 (mm)	幅・直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	上 (mm)	下 (mm)		
1	PL34	52	1	SD100	埋土	2	勾玉	メノウ	24.5	頭部長 9.8	7.0	3.0	1.4	1.4	片側	
2	PL34	514	9	—	1面7層	4	勾玉	不明(磨石か)	20.2	頭部長 8.1	5.5	1.5	2.0	2.0	片側	裏欠損部有
3	PL34	51	1	SD100	2面	1	碧玉	緑色凝灰岩	44.5	(11.0)	—	3.9	4.0	2.0	両側	半分欠損
4	PL34	53	1	—	2面	5	碧玉	緑色凝灰岩 (やや灰色)	26.5	9.3	—	3.0	3.8	4.5	両側	完形
5	PL34	54	4b	—	南東部崩 壊機軸出	1	碧玉	緑色凝灰岩	16.9	4.3	—	0.6	2.2	1.8	両側	下部欠損
6	PL34	511	9	—	1面	1	碧玉	緑色凝灰岩	22.2	7.5	—	1.6	3.0	2.5	両側	微
7	PL34	512	9	—	1面	2	碧玉	緑色凝灰岩か	16.0	4.3	—	0.3	2.5	2.1	両側	微
8	PL34	513	9	—	1面7a層	3	碧玉	緑色凝灰岩 (15.2)	4.3	—	0.3	2.2	2.2	2.2	両側	下端欠損 玉16と接合
8	PL34	516	9	—	1面7a層	16	碧玉	緑色凝灰岩 (12.2)	4.5	—	0.2	2.0	2.0	2.0	両側	上端欠損 玉13と接合
9	PL34	510	5b	—	北側 機軸出	—	小玉	ガラス(歯白)	—	直径7.5 厚径6.8	4.5	0.2	1.7	1.7	—	完形
10	PL34	515	9	1 トレンチ	2面	15	小玉	滑石か	9.3	6.0	6.4	0.4	2.8	2.8	片側	完形
11	PL34	55	4c	SM005	埋土	—	数珠玉	水晶	—	7.8	4.6	0.2	1.2	1.2	片側	微
12	PL34	56	4c	SM005	埋土	12	数珠玉	水晶	—	7.2	4.1	0.2	1.2	1.2	片側	微
13	PL34	57	4c	SM005	埋土	13	数珠玉	水晶	—	7.2	4.5	0.2	1.0	1.0	片側	1/8欠損
14	PL34	58	4c	SM005	埋土	14	数珠玉	水晶	—	5.8	3.8	0.1	1.2	1.2	片側	完形
15	PL34	59	4c	SM005	埋土	15	数珠玉	水晶	—	6.9	3.8	0.1	1.3	1.3	片側	微

付表 11 石川条里遺跡 石器・石製品一覧

[図版95~99]

掲載 番号	写真 図版	整理番号	出土地点			取上 番号	石材	器種	法量				備考	
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
1	PL35	打製石礫1	1	—	5面	—	黒曜石	打製石礫	2.3	(1.4)	0.4	0.7	先端内60° 側面内140° Bb形	
2	PL35	磨石1	1	—	5面	—	黒曜石	磨石	3.6 刃部長2.4	2.3	0.6 刃角73°	5.8		
3	PL35	打製石斧1	1	SD023	埋土上層	—	安山岩	打製石斧	(10.3)	8.2	3.1	389.3		
4	PL35	打製石斧2	11c	SC101	埋土	25	安山岩	打製石斧	(11.9)	7.2	2.6	363.0		
5	PL35	打製石斧3	9	SK002	埋土底面	—	安山岩	打製石斧	11.4	6.8	2.6	229.8		
6	PL35	刃礫3	1	SD126	埋土	—	緑色凝灰岩	打製大型刃礫	(6.6)	6.5	1.9 刃部長1.1	82.5		
7	PL35	刃礫7	9	SK002	埋土	224	珪質泥岩	打製大型刃礫	9.8 刃部長6.8	7.1 刃部長5.0	1.6 刃角32°	104.7		完存
8	PL35	刃礫1	1	—	2面	—	頁岩	打製大型刃礫	(8.1) 刃部長1.0	6.2 刃部長6.5	1.5 刃角55°	64.7		
9	PL35	刃礫2	1	—	5面	—	砂岩	打製大型刃礫	(5.7)	5.1 刃部長3.2	0.7 刃角20°	25.6		
10	PL35	刃礫4	3b・4a	—	4面	2	珪質泥岩	打製大型刃礫	(6.4) 刃部長1.3	5.1 刃部長4.4	0.8 刃角25°	20.9		
11	PL35	刃礫5	3b・4a	—	4面	—	頁岩	打製大型刃礫	12.6 刃部長3.3	8.8 刃部長7.5	2.4 刃角30°	191.8	完存	
12	PL35	刃礫6	7b・8	—	1面	—	珪質泥岩	打製大型刃礫	(5.1)	5.3 刃部長4.7	1 刃角40°	26.3		
13	PL35	大型船形 石斧1	1	—	2面	—	緑色頁	大型船形石斧	13.6 刃部長1.4	5.7 刃部長5.5	3.8 刃角70°	520.5	断面1・b両向き完存	
14	PL35	定角式 磨製石斧1	3b・4a	SD043	埋土	1	凝灰岩	磨製定角式 石斧	10.3	5.0	1.7	127.3		
15	PL35	磨製石斧 未成品1	1	SD100	埋土	—	玄武岩質 頁岩	磨製石斧 未成品	13.6	(6.9)	2.7 刃角60° 小	379.7		
16	PL35	未成石礫1	1	SD023	埋土下層	—	珪質泥岩	石礫未成品	8.4 (6.2)	4.4 10.1	1.3 6.5	77.3		
17	PL36	凹石3	1	SK017	埋土	—	多孔質 安山岩	凹石	凹範囲 (表)3.5	凹範囲 (表)5.9	凹範囲 (表)3.8深	275.0	凹面円形 研磨	
18	PL36	凹石1	1	SD009	埋土	—	安山岩	凹石	9.6 (表)4.9	9.0 4.3	5.5 3.9	589.7	凹面円形 研磨	
19	PL36	凹石2	1	SD001	埋土	—	安山岩	凹石	11.3 打痕範囲 (1)2.4 (2)2.5	4.3 打痕範囲 (1)2.4 (2)1.8	3.9	288.8	円盤	
20	PL36	凹石2	3b・4a	SD061	埋土	—	凝灰岩	凹石	13.4 打痕範囲 4.0	8.5 打痕範囲 1.5	3.3	576.4		
21	PL36	凹石2	3b・4a	SD061	埋土上層	—	安山岩	凹石	10.5 凹範囲 (表)3.1	7.3 凹範囲 (表)2.6	3.4 凹範囲 (表)0.1深	327.0	凹面不整形 凹石小	
22	PL36	凹石4	5b	SD154	埋土	—	淡緑色 硬砂岩	凹石	12.0 打痕範囲 (1)1.4 (2)2.1	5.1 打痕範囲 (1)1.1 (2)1.0	3.4	291.2		
23	PL36	凹石5	10	SC105	埋土	9	安山岩	凹石	12.9 凹範囲 (表)3.2	9.6 凹範囲 (表)2.3	5.4 凹範囲 (表)0.6深	785.0	凹面不整形 凹石小	
24	PL36	凹石6	9	1トレ	2面7c層	—	安山岩	凹石	2.7 (表)3.6 1.8	2.4 (表)2.4 1.3	0.5深 (表)0.5深 0.3深 0.2深	823.6		
25	PL36	台石3	4c	SC044	1面北	1	安山岩	台石小	(19.0) 研磨範囲 16.0	(16.5) 研磨範囲 13.5	(6.0)	2905.0		
26	PL36	台石1	1	SK001	埋土	—	安山岩	台石	(13.2) 研磨範囲 12.1 12.2	(14.9) 研磨範囲 9.5 8.9	6.4	1636.0		

付表11

採石番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取土 番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
27	PL37	磨り石10	3b-4a	SD061	埋土2層	—	多孔質 安山岩	磨石か	8.6 研磨範囲 (表)7.4 (裏)6.4 (側)16.4 (底)25.1	5.9 研磨範囲 (表)4.1 (裏)4.8 (側)12.9 (底)20.9	3.9	212.1	
28	PL37	砥石13	10	SC105	埋土	1	砂岩	石皿	(14.3) 凹磨面 (表)2.9 2.8 2.2 (裏)3.2	(11.6) 凹磨面 (表)2.2 2.5 2.4 (裏)2.8	3.6 凹磨面 (表)0.3深 1.0深 0.5深 (裏)0.7深	854.0	砥石・磨り石・垂角礫
29	PL37	砥石3	1	SK001	埋土北東	—	凝灰岩	砥石	(4.7)	3.5	1.2	31.6	正面2部・背面2部研磨
30	PL37	砥石4	1	SK002	埋土	—	砂岩	砥石	(6.2)	6.2	2.5	132.3	断面長方形 4面研磨
31	PL37	砥石11	5b	SD147	埋土2層	—	砂岩	砥石	(8.3)	6.7	3.2	203.8	広面凹面
32	PL37	砥石7	1	—	1面	—	泥岩	砥石	(4.4)	(4.0)	0.5	8.6	広面2面研磨 縁角あり
33	PL37	砥石8	1	—	1面	—	やや砂質質 の泥岩	砥石	(8.4)	4.0	1.9	73.5	カツオ型型 全面研磨
34	PL37	砥石18	12c北	SD190	埋土 北 3層	—	砂岩	砥石	(10.2)	5.5	3.3	238.4	
35	PL37	石1・ つきE4	1東	SD129	埋土東	—	多孔質 安山岩	石臼鉢	口径<31.8> 最大径 <32.4>	幅17.0 厚6.0	淵高 (11.6)	819.3	
36	PL37	石1・ つきE5	12c北	SD190	埋土3層	—	安山岩	石臼	口径<31.8> 底径<31.2> 最大径 <32.0>	幅23.2 厚10.0	淵高 11.9	2689.0	
37	PL37	石鉢1	1	SK356	埋土	4	安山岩	石鉢	9.4	(7.7)	3.3	352.4	削形
38	PL37	磨り石1	4b	—	1面	—	不明(貝か)	磨石	2.1	2.1	0.6	2.9	白
—	—	凹石4	2	—	4面	—	安山岩	凹石	(7.9)	7.1	4.7	401.6	凹面不整形 砥石か
—	—	砥石3	1	—	埋土	—	安山岩	砥石	6.8 打痕範囲 3.1	5.7 打痕範囲 3.0	4.3	250.5	
—	—	砥石5	11b	SC058	埋土	112	安山岩	砥石	18.0 打痕範囲 3.9	7.0 打痕範囲 2.7	6.4	1157.3	
—	—	台石2	1	SK094	埋土	—	安山岩	台石	7.0 研磨範囲 4.0	5.9 研磨範囲 1.5	2.3	118.6	
—	—	磨り石1	1	SD023	埋土上層	—	安山岩	磨石	8.1 研磨範囲 (表)4.9 (裏)3.7	7.5 研磨範囲 (表)3.3 (裏)4.0	5.0	361.6	
—	—	磨り石2	1	SD023	埋土下層	—	安山岩	磨石	(5.8) 研磨範囲 (表)5.5 (裏)4.1	7.1 研磨範囲 (表)5.8 (裏)5.4	5.2	344.6	
—	—	磨り石3	1	SD023	埋土西	—	安山岩	磨石	8.6 研磨範囲 (表)6.4 (裏)6.5	8.4 研磨範囲 (表)6.0 (裏)5.4	4.3	392.4	研磨やや不明瞭
—	—	磨り石4	1	SD023	埋土西	—	多孔質 安山岩	磨石	5.8	5.8	4.3	135.3	研磨やや不明瞭
—	—	磨り石5	2	SD024	埋土	—	安山岩	磨石	8.5 研磨範囲 (表)7.3 (裏)6.7 タタキ範囲 (表)1.6 (裏)5.2 1.4	8.3 研磨範囲 (表)7.3 (裏)6.2 タタキ範囲 (表)3.1 (裏)1.2 1.3	2.7	256.7	広面と側面タタキ
—	—	磨り石6	3b-4a	SD058a	埋土3層	—	安山岩	磨石	(8.0) 研磨範囲 (表)6.8 (裏)4.9	10.1 研磨範囲 (表)5.8 (裏)5.4	4.6	390.9	



掲載 番号	写真 掲載	管理番号	出土地点			取上 番号	石材	用途	法量				備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
—	—	磨り石7	3b・4a	SD058b	埋土	—	安山岩	磨石	9.5 研削範囲 (表)4.5 (裏)7.3	6.7 研削範囲 (表)3.2 (裏)6.0	3.0	256.0	研削中・不明瞭
—	—	磨り石8	3b・4a	SD061	埋土1層	—	多孔質 安山岩	磨石	6.6 研削範囲 (表)4.3 (裏)5.6	6.6 研削範囲 (表)4.3 (裏)5.4	2.8	109.7	
—	—	磨り石9	3b・4a	SD061	埋土1層	—	安山岩	磨石	9.0 研削範囲 (表)7.0 (裏)6.9	7.6 研削範囲 (表)5.9 (裏)6.0	4.1	438.1	
—	—	磨り石11	4b・4c	SD066	埋土	—	安山岩	磨石	5 研削範囲 (表)3.7 (裏)3.6	3.6 研削範囲 (表)2.2 (裏)2.5	2.8	72.6	
—	—	磨り石12	1	SK006	埋土	—	黄レイ岩か	磨石	10.0 研削範囲 (表)7.6 (裏)7.6	8.7 研削範囲 (表)5.6 (裏)6.0	4.0	420.3	研削不可瞭
—	—	磨り石13	1	SK006	埋土	—	砂岩	磨石	7.2 研削範囲 (表)6.0 (裏)6.4	5.0 研削範囲 (表)4.2 (裏)4.3	2.0	120.5	
—	—	磨り石14	1	SK012	埋土	—	安山岩	磨石	11.5 研削範囲 (表)9.0 (裏)7.2	8.0 研削範囲 (表)6.6 (裏)4.0	4.9	607.8	
—	—	磨り石15	1	SK012	埋土	—	安山岩	磨石	11.4 9.8 研削範囲 (表)6.7	7.8 8.4 研削範囲 (表)5.8	5.2 6.4	573.0 616.5	1面研削不明
—	—	磨り石17	1	SK179	埋土	—	安山岩	磨石	10.7 研削範囲 (表)5.8 (裏)6.9	8.5 研削範囲 (表)4.8 (裏)5.0	5.3	647.8	
—	—	磨り石18	1	SK256	埋土	—	安山岩	磨石	9.7 研削範囲 (表)6.5	6.8 研削範囲 (表)3.9	4.8	400.0	1面研削不明
—	—	磨り石19	1	SK256	埋土	—	多孔質 安山岩	磨石	10.7 研削範囲 (表)7.0	7.3 研削範囲 (表)5.2	3.9	238.3	1面研削不明
—	—	磨り石20	4b・4c	SK542	埋土	—	安山岩	磨石	7.0 4.4 研削範囲 (表)2.6	5.8 4.0 研削範囲 (表)2.4	2.0 3.9	129.2 93.2	研削中・不明瞭
—	—	磨り石22	1西	SD023	埋土	—	安山岩	磨石	8.4 研削範囲 (表)4.9 (裏)14.6 (裏)25.7 (裏)33.4	7.4 研削範囲 (表)3.9 (裏)13.8 (裏)23.6 (裏)34.0	7.1	615.7	
—	—	磨り石23	1西	SD023	埋土	—	安山岩	磨石	10.7 研削範囲 (表)7.8 (裏)8.0	6.1 研削範囲 (表)4.2 (裏)4.0	4.5	464.6	
—	—	磨り石24	1西	SD023	埋土	—	安山岩	磨石	6.6 研削範囲 (表)4.9 (裏)5.4	6.1 研削範囲 (表)4.1 (裏)4.4	2.6	149.9	
—	—	磨り石25	1東	—	1面	—	多孔質 安山岩	磨石	6.6 研削範囲 (表)5.2 (裏)4.2	5.7 研削範囲 (表)3.9 (裏)3.9	4.5	112.6	
—	—	磨り石26	7b・8	SC063	埋土	219	流紋岩	磨石	8.5 研削範囲 (表)5.9 (裏)5.2	8.0 研削範囲 (表)5.8 (裏)5.6	4.5	420.5	

付表11

採掘番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取土 番号	石材	器種	法量				備考
			地区・ 地名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
—	—	磨り石27	12c北	SD188	埋土23層	—	砂岩	磨石	(5.4) 研磨範囲 (真)5.0)	(4.8) 研磨範囲 (真)4.1)	1.8	65.5	
—	—	砥石1	3b・4a	SD058a	埋土	—	凝灰岩	砥石	7.9	2.9	2.1	76.3	広面2面研磨 ノコギリ切 断面あり
—	—	砥石2	3b・4a	SD061	埋土	—	凝灰岩	砥石	4.4	2.5	2.1	14.2	断面三角 2面のみ研磨
—	—	砥石5	1	SK002	埋土	—	安山岩	砥石	(9.7)	14.0	3.5	83.14	1上面2下面(直交)研磨 磨 痕あり
—	—	砥石6	1	—	東壁	—	頁岩	砥石	3.3	3.3	0.7	10.3	全面削磨 側面1面のみ研 磨 砥石か
—	—	砥石9	2	7 トレンチ	1面	—	泥岩	砥石	3.7	3.1	0.3	4.7	全面削磨 側面1面のみ研 磨
—	—	砥石10	1西	SD024	埋土	—	凝灰岩	砥石	4.4	2.7	1.4	25.0	
—	—	砥石12	12a南	—	平安砂層	—	泥岩	砥石	3.9	2.1	0.8	9.1	広面1面のみ砥石か
—	—	砥石14	9	—	北西	—	頁岩	砥石	2.9	2.1	0.4	2.8	砥石か
—	—	砥石15	1	SD009・ 017	埋土	—	泥岩	砥石	3.3	2.0	0.3	2.7	全面削磨 広面1面のみ残
—	—	砥石16	5b	SD167	埋土	—	泥岩	砥石	3.0	2.4	0.6	6.3	広面1面と側面のみ残
—	—	砥石17	4b・4c	SK542	埋土	—	泥岩	砥石	3.2	2.3	0.4	3.8	全面削磨 砥石か
—	—	石臼・ つき石1	1	SD023	埋土下層	—	多孔質 安山岩	ツキ白か	幅8.3	厚3.9	断面6.9	139.3	
—	—	石臼・ つき石2	3b・4a	SD065	埋土	—	多孔質 安山岩	ツキ白か	幅6.9	厚3.7	断面10.0	145.9	
—	—	石臼・ つき石3	1	—	検出面	—	多孔質 安山岩	ツキ白	幅5.8	厚2.5	断面3.9	30.7	
—	—	石核1	1	SD019	埋土	—	玉髓	石核	8.6	6.8	4.7	204.3	
—	—	石核2	3b・4a	SD063a	埋土	—	チャート	石核	3.1	2.5	1.9	11.6	
—	—	石核3	1	SK004	埋土	—	チャート	石核	2.1	1.7	1.3	3.7	
—	—	石核4	12c北	—	9C3層	—	チャート	石核	4.4	3.6	1.0	16.5	
—	—	石核5	12c北	—	9C3層	—	鉄石英	石核	1.9	3	1.3	6.3	
—	—	石核6	12c中	—	9C3層	—	玉髓	火打石	2.3	4.6	1.6	14.8	断面に細かい縦行痕あり
—	—	UF1	1	—	3面	—	黒曜石	UF	4.6	3.6	0.9	6.3	
—	—	UF2	4b	—	1面南壁	—	黒曜石	UF	2.0	2.8	0.5	2.4	
—	—	RF1	3b・4a	9 トレンチ	北壁	—	黒曜石	RF	1.9	1.6	1.2	3.1	
—	—	RF2	4b	Z	—	—	黒曜石	RF	3.0	2.8	1.6	12.9	
—	—	磨製石 丁(成山)1	1	SD002	北側埋土	—	頁岩	磨製石丁 (成山)	(2.0)	4.0	0.3	3.0	石包丁か
—	—	磨製石 丁(成山)2	4b	5 トレンチ	S層東	—	珪質泥岩	磨製石丁 (成山)	(3.3)	(3.0)	0.6	6.0	
—	—	石莖1	3b・4a	SD061	埋土1層	—	石英	火打石	2.0	1.8	1.4	7.6	水晶結晶状(白濁 角摩研)
—	—	石莖2	1	—	埋土	—	石英	火打石	1.5	4.0	4.0	0.3	石核状(角摩研)
—	—	石莖3	3b・4a	—	2面	—	石英	火打石	2.9	1.9	1.6	13.8	石英入内柱状結晶の薄片 (小片)
—	—	軽石1	3b・4a	SD061	埋土1層	—	軽石	不明	6.2	3.0	2.1	13.1	削、研磨(濃汚)欠損片
—	—	軽石2	3b・4a	SD061	埋土1層	—	軽石	小円礫状	3.5	3.4	2.0	7.4	研磨痕不明瞭 自然円礫の 可能性あり
—	—	軽石3	3b・4a	SD061	埋土1層	—	軽石	小円礫	3.2	2.4	1.9	5.0	自然円礫
—	—	軽石4	3b・4a	SD061	埋土南側	—	軽石	三角菱状	5.7	3.5	3.0	11.3	研磨
—	—	軽石5	4b	SK515	埋土	—	軽石	小円礫状	5.3	2.6	2.0	5.4	研磨? 平分以上欠損
—	—	軽石6	4b	SK515	埋土	—	軽石	不明	2.6	1.9	1.3	1.5	一部研磨 小片
—	—	軽石7	4b	トレンチ	上面	—	軽石	円礫	10.5	8.7	4.7	144.4	自然円礫
—	—	軽石8	3b・4a	SC043	埋土	—	軽石	不明	3.3	3.2	1.6	4.8	研磨 欠損小片
—	—	軽石9	3b・4a	隆高地	—	—	軽石	不明	3.3	2.6	1.1	2.9	研磨? 欠損小片
—	—	軽石10	7b・8	SC063・ 064	埋土	—	軽石	小円礫状	4.6	4.2	2.8	13.8	研磨
—	—	軽石11	5b	SQ001	埋土	6	軽石	小円礫状	4.0	3.2	1.4	5.7	研磨
—	—	軽石12	5b	—	1面7層	—	軽石	小円礫状	34	21	2.2	4.6	研磨
—	—	軽石13	5b	—	1面7層	—	軽石	不明	2.4	1.3	8.0	1.1	欠損小片
—	—	軽石14	5b	—	1面7層	—	軽石	円礫	3.7	2.5	2.3	6.7	自然円礫
—	—	軽石15	5b	1 トレンチ	下層	—	軽石	不明	3.4	3.3	1.6	3.2	削? 欠損小片
—	—	軽石16	5b	—	12a層	—	軽石	不明	2.8	2.3	1.1	1.8	欠損小片

掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
-	-	軽石17	5b	1 トレンチ	14層	-	軽石	小円鏡	4.1	3.2	2.4	7.8	自然円鏡
-	-	軽石18	5b	1 トレンチ	14層	-	軽石	小円鏡	3.6	2.5	1.3	2.7	自然円鏡小片
-	-	軽石19	5b	4 トレンチ	灰色 シルト	-	軽石	小円鏡	4.1	2.5	2.5	5.9	自然円鏡
-	-	軽石20	5b	4 トレンチ	灰色 シルト	-	軽石	円鏡状?	3.9	2.9	2.4	6.9	研削 1/4ほどの破片
-	-	軽石21	5b	WY12	灰色 シルト	-	軽石	小円鏡	2.2	1.8	1.1	1.2	自然円鏡
-	-	軽石22	5b	WY12	灰色 シルト	-	軽石	不明	4.2	3.5	2.6	10.1	研削(浅い溝状) 欠損小片
-	-	軽石23	5b	WY12	灰色 シルト	-	軽石	小	2.6	2.5	1.1	1.9	
-	-	軽石24	7a	-	1面7層	-	軽石	小円鏡	3.2	3.0	1.2	4.0	自然円鏡
-	-	軽石25	7a	-	1面北西	-	軽石	小円鏡	5.1	5.0	2.2	15.0	自然円鏡
-	-	軽石26	11b	-	1面上層	-	軽石	小円鏡	2.7	2.0	1.3	2.1	自然円鏡
-	-	軽石27	11b	-	1面上層	-	軽石	小円鏡	2.3	1.7	1.2	1.0	自然円鏡
-	-	軽石28	3b+4a	SD039	0b, 280 11)内	-	-	-	5.5	4.2	3.9	21.0	加工痕なし
-	-	軽石29	-	5 トレンチ	5層	-	軽石	円鏡	5.9	4.3	2.5	23.7	

※町山跡例199「松原遺跡-発掘中層・石器本文」掲載の各器種の属性項目を参照のこと

付表12 石川条里遺跡 金属製品一覧

[図版100~102]

掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	材質	遺物名称	法量				備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
1	PL38	28033	1	ST001	P64	-	鉄か	釘	3.30	0.60	4.0	1.2	
2	PL38	28021	1	SK007	埋土	-	鉄	釘	3.20	0.50	4.0	0.7	
3	PL38	28023	1	SK012	埋土	2	鉄	釘	5.40	0.45	3.0	1.3	
4	PL38	28024	1	SK012	埋土 1・2層 西半部	-	鉄	釘か	3.30	0.55	3.5	1.3	
5	PL38	28039	1	SK012	埋土1層	-	鉄	釘	4.30	0.60	4.0	1.6	
6	PL38	28028	1	SK042	埋土	1	鉄	釘	4.50	0.35	3.0	2.0	
7	PL38	28001	1	SD001	埋土南側	1	鉄	釘	2.30	0.60	4.0	0.6	
8	PL38	28006	1	SD016	埋土	1	鉄	釘	3.50	0.40	4.0	0.9	
9	PL38	28041	3a	SD034	埋土	-	鉄	釘	2.60	0.65	6.0	1.6	
10	PL38	28016	1	SD080	埋土	4	鉄か	釘	7.40	0.60	4.0	1.9	
11	PL38	28017	1	SD084	埋土	-	鉄か	釘	2.10	0.65	6.0	1.4	小片
12	PL38	28035	1	-	北東 日層中 (ST003 北側)	-	鉄	釘か	4.50	0.65	4.5	1.6	
13	PL38	28036	4b	-	1面	-	鉄	釘	3.55	0.60	3.5	1.4	板状の鉄
14	PL38	28019	1	SK002	埋土2層	-	鉄か	鍔金具	3.50	0.60	1.5	0.5	
15	PL38	28008	1	SD009	埋土	-	鉄	鍔金具	4.40	0.45	7.0	1.6	
16	PL38	28030	1	SK196	埋土	1	鉄	鉄鏃か	11.75	0.70	6.5	5.7	
17	PL38	28004	1	SD002	埋土	2	鉄	鉄鏃	6.50	0.70	7.0	1.2	
18	PL38	28018	1	SD088	埋土	-	鉄か	鉄鏃	7.10	0.45	4.0	1.0	
19	PL38	29001	1西	SD125	埋土	-	鉄	鉄鏃	5.60	7.80	6.0	3.5	
20	PL38	28040	1	Z	-	-	鉄	鉄鏃か	2.20	0.30	3.0	0.3	
21	PL38	28029	1	SK156	埋土	-	鉄	鏃	7.00	4.50	10.0	24.1	板状 鏃か
22	PL38	28027	1	SK017	埋土	-	鉄	刀子	6.30	1.40	2.0	2.0	
23	PL38	28002	1	SD001	埋土	2	鉄	刀子	6.40	1.05	30.0	2.0	
24	PL38	28003	1	SD001	埋土 南東スズ	3	鉄	刀物	4.75	2.65	1.0	2.0	
25	PL38	28015	3b+4a	SD065	埋土	-	鉄	刀子	3.95	0.90	5.0	2.4	2片(1片接合せず)

付表12

掲載番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	材質	遺物名称	法量				備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	
26	PL38	03001	12c北	SD191	埋土9層	1	銅	扇形	21.79(内) 22.44(外)	9.20(内) 9.80(外)	1.00(内) 1.20(外)	64.7(内) 69.0(外)	
27	—	30001	7a	SD138	埋土	—	銅	扇形金具	5.10	1.62	4.6	7.0	
28	—	2807	1	SD017	埋土	2	銅(青銅)	不明銅製品	2.90	0.45	2.2	0.5	2片組合 幅5mmで直線的な板状製品
29	PL38	03002	12c北	SC111	西江 <sup>44</sup> 面(2) 掘り下層	—	青銅	刀子か 小鋸の鞘	2.90	1.60	1.0	2.6	
30	PL39	28049	1	SK001	埋土	1	銅	銭貨	直径2.12	内径0.59	1.1	2.4	秤付元寶(内書)北宋1009 元豐通寶(篆書)北宋1078
31	PL39	28048	1	SK004	埋土3層	4	銅	銭貨	直径2.21	内径0.58	0.7	2.5	元祐通寶(内書)北宋1086
32	PL39	28050	1	SK005	埋土中央 べらト内 上層1層目	—	銅	銭貨	直径2.41	内径0.65	0.6	2.5	元祐通寶(内書)北宋1086
33	PL39	28052	1	SK041	埋土	1	銅	銭貨	直径2.43	内径0.66	0.8	3.0	元祐通寶(内書)北宋1086
34	PL39	28053	1c	SK041	埋土	2	銅	銭貨	直径2.42	内径0.71	0.8	2.8	元祐通寶(内書)北宋1086
35	PL39	28054	1	SK055	埋土	1	銅	銭貨	直径2.22	内径0.60	0.8	1.7	咸平元寶(内書)北宋998
36	PL39	28057	1	SK269	埋土	1	銅	銭貨	直径2.41	内径0.59	1.1	3.0	元豐通寶(篆書)北宋1078
37	PL39	28058	1	SK273	埋土	—	銅	銭貨	直径2.14	内径0.75	1.0	1.8	聖宗通寶(内書)北宋1038
38	PL39	28045	1	SD009	埋土	3	銅	銭貨	直径2.49	内径0.63	1.0	3.6	天禧通寶(内書)北宋1017
39	PL39	28046	1	SD080	埋土	2	銅	銭貨	直径2.48	内径0.58	0.7	2.3	秤付元寶 北宋1009
40	PL39	28061	3b+4a	SM005	埋土	16	銅	銭貨	—	—	1.2	1.0	天聖元寶(内書)北宋1023
41	PL39	28060	1	Z	—	—	銅	銭貨	直径2.37	内径0.65	0.9	2.4	聖宗元寶(篆書)北宋1101
42	PL39	28047	1	SD086	埋土	1	銅	銭貨 タテ4.87 幅1.18	—	内径0.61	2.0	18.4	天禧通寶(内書)
43	PL39	28055	1	SD087	埋土	—	銅	銭貨	直径2.11	内径0.68	0.4	1.4	寛永通寶か
44	PL39	03004	12c北	SD188	埋土上層	—	銅	銭貨	直径2.41	内径0.55	1.1	3.6	寛永通寶
45	PL39	03005	12c	—	表層	—	銅	銭貨	直径2.76	内径0.66	1.1	4.8	寛永通寶
46	PL39	03006	12c	—	表層	—	銅	銭貨	直径2.23	内径0.63	0.7	1.6	寛永通寶
47	PL39	28059	4b	Z	—	—	銅	銭貨	直径2.31	内径0.58	1.2	3.4	寛永通寶
48	PL39	28051	1	SK011	埋土	1	銅	銭貨	直径2.23	—	1.2	1.6	不明(腐食で不測)
49	PL39	28056	1	SL013	埋土	1	銅	銭貨	—	—	0.6	0.5	不明(摩耗で不測)
—	—	28005	1	SD002	埋土	—	鉄	鉄片	2.07 1.91	1.96 1.41	14.5 13.6	13.7	2点 (2点合計)
—	—	28009	3b+4a	SD037	埋土	—	鉄	不明	2.71	1.67	11.6	3.2	断面丸形の先端端曲線状 製品
—	—	28012	3b+4a	SD043	埋土	—	銅	平七毛(模印)	2.67	0.94	7.4	1.0	
—	—	28013	3b+4a	SD043	埋土	—	鉄	鉄片	6.62	5.48	30.2	96.9	
—	—	28014	3b+4a	SD063a	埋土1層	—	鉄	鉄片	7.16 3.55	5.24 2.79	26.5 23.6	124.8	3点 (3点合計)
—	—	28020	1	SK007	埋土	—	鉄	鉄片	1.57 3.03	1.53 2.75	10.9 19.0	13.1	
—	—	28022	1	SK009	埋土1層	—	鉄	鉄片	12.80 8.65	11.10 4.55	71.0 27.0	136.1	5点 (5点合計)
—	—	28025	1	SK012	埋土	—	鉄	刀子	2.44 2.05	2.67 1.87	14.5 9.0	18.1	(2点合計)
—	—	28026	1	SK017	埋土	1	鉄	鉄片	1.34 1.08	1.08 0.6	9.6 9.6	54.6	小片多数 (小片合計)
—	—	28031	1	SL001	埋土	1	鉄	板状鉄製品	—	—	—	22.4	小片多数 (小片合計)
—	—	28032	1	SL001	埋土	2	鉄	板状鉄製品	—	—	—	4.3	板状の鉄 腐食顯著 刀子か 28025に類似
—	—	28034	1	ST001	Pr11	—	鉄	不明	2.25	2.36	11.0	4.2	
—	—	28037	3b+4a	—	1面	—	鉄	鉄片	4.86	4.73	21.8	59.3	
—	—	28038	3b+4a	—	1面	—	鉄	鉄片	7.38	5.28	33.0	97.3	
—	—	28042	3b+4a	—	—	—	鉄	鉄片	8.30	6.80	47.0	130.4	
—	—	28043	1	SD001	埋土裏	—	鉄	刀子か	2.69	2.39	9.9	6.9	
—	—	28044	1	SL001	埋土	—	鉄	刀子か	3.26	2.74	10.5	8.6	
—	—	29002	1西	SD126	埋土	—	銅	平七毛(模印)	6.59	径1.07	—	7.0	
—	—	29003	1西	—	北東隅	—	銅	平七毛(模印)	4.36	1.41	13.3	13.5	

掲載番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	材質	遺物名称	法量				備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	
—	—	29004	3b-4a	—	2面	—	鉄	鉄滓	3.07 2.16	1.52 1.69	9.5 6.7	4.6 6.7 (2点合計)	2点
—	—	29005	3b-4a	—	2面	—	鉄	鉄滓	3.04	2.65	14.0	6.7	
—	—	29006	3b-4a	—	2面	—	鉄	鉄滓	2.62	2.35	10.8	10.1	
—	—	30002	5b	SD146	埋土	—	鉄	鉄滓	2.22	1.91	14.5	8.3	
—	—	03003	12c北	SD190	埋土 2・3層	—	鉄	鉄屑	3.08	2.34	4.7	5.9	

※下線文字は保存処理前の法量

付表13 石川条里遺跡 木製品一覧 ※含長谷部前遺跡群古代木製品(報告書掲載分)

[図版103～132]

掲載番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	器種	種類	木取 (下地)	法量			備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・ 高さ(cm)	
1	PL40	BKB 300117	7b-8	SC063	埋土	84	曲柄鍬か	クリ	榎目	22.3	8.5	2.0	
2	PL40	BKB 310019	11a	SC089	埋土	—	曲柄二又鍬	コナラ属クスノキ部	榎目	37.8	7.8	2.0	ナスビ型か
3	PL40	BKB 310021	11a	SC089	埋土	—	板材	モミ属	榎目	34.9	7.5	1.9	
4	PL40	BKB 310020	11a	SC089	埋土	—	建築部材	コナラ属コナラ部	榎目	63.9	9.2	3.7	
5	PL40	BKB 310039	11c	SC101	埋土	26	建築部材か	サワラ	榎目	43.0	8.9	3.5	
6	PL40	BKB 300079	7b-8	SC061・ 062	埋土	38	杭	ヤマグワ	道板	24.5	5.7	3.4	
7	PL40	BKB 300081	7b-8	SC061・ 062	埋土	40	杭	コナラ属クスノキ部	削出丸木	43.4	6.0	4.7	転用材
8	PL40	BKB 300088	7b-8	SC061	埋土	68	杭	モミ属	削出丸木	48.1	2.9	2.8	転用材
9	PL40	BKB 300087	7b-8	SC061	埋土	67	杭	クリ	分割材	59.0	4.6	4.2	
10	PL41	BKB 300077	7b-8	SC069	埋土	35	杭	クリ	芯持丸木	64.4	—	4.7	
11	PL41	BKB 300103	7b-8	SC062	埋土	34	杭	クリ	分割材	63.8	6.6	4.7	
12	PL41	BKB 300104	7b-8	SC062	埋土	119	杭	コナラ属クスノキ部	削出丸木	20.1	4	3.8	転用材
13	PL41	BKB 300105	7b-8	SC062	埋土	121	杭	クリ	ミカン割	53.1	8.5	6.5	
14	PL41	BKB 300099	7b-8	SC062・ 065交点	埋土	4	杭	クリ	ミカン割	79.0	9.2	5.8	
15	PL41	BKB 300045	7b-8	SC063	埋土	85	杭	コナラ属クスノキ部	ミカン割	29.5	4.1	5.0	
16	PL41	BKB 300044	7b-8	SC063	埋土	83	杭	コナラ属クスノキ部	ミカン割	51.3	7.0	3.9	
17	PL41	BKB 300100	7b-8	SC065	埋土	31	杭	コナラ属クスノキ部	削出丸木	44.6	6.0	5.5	転用材
18	PL41	BKB 300074	7b-8	SC067	埋土	29	杭	コナラ属クスノキ部	芯持丸木	36.9	5.0	5.3	
19	PL41	BKB 300070	7b-8	SC067	埋土	15	杭	コナラ属クスノキ部	芯持丸木	45.1	—	5.0	
20	PL42	BKB 310064	9 (1トレンチ)	SX002	2面	104	直柄鍬	コナラ属クスノキ部	榎目	31.7	24.9	3.7	
21	PL42	BKB 310073	9 (1トレンチ)	SX002	2面	113	曲柄二又鍬	コナラ属クスノキ部	榎目	27.2	7.6	1.1	
22	PL42	BKB 310062	9 (1トレンチ)	SX002	2面	102	建築部材	モミ属	榎目	142.8	17.5	5.4	
23	PL42	BKB 310067	9 (1トレンチ)	SX002	2面	107	建築部材 (柱または小版束)	カヤ	芯持丸木	69.1	12.6	11.7	
24	PL42	BKB 310071	9 (1トレンチ)	SX002	2面	111	建築部材	カエデ属	榎目	85.8	10.2	3.7	
25	PL43	BKB 310120	9 I トレンチ	I	2面	47	杭	コナラ属コナラ部	芯持丸木	13.0	5.4	5.3	

付表13

掲載 番号	写真 図説	管理番号	出土地点			取上 番号	路種	樹種	本取 (手法)	法量			備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置					長さ(m)	幅(m)	厚さ・(柱・ 高さ(m))	
26	PL43	BKB 310114	9	1 トレンチ	2面	41	杭	ヤマグワ	芯持丸木	26.5	7.8	6.1	
27	PL43	BKB 310116	9	1 トレンチ	2面	43	杭	モミ属	分割角材	30.1	5.4	3.7	
28	PL43	BKB 310084	9	1 トレンチ	2面	11	杭	モミ属	芯持丸木	32.6	4.3	3.5	
29	PL43	BKB 310171	9	1 トレンチ	2面	301	杭	ヤマグワ	ミカン割	43.2	6.2	4.2	建築部材転用か
30	PL43	BKB 310210	9	SC107	埋土	3	杭	クリ	削出	44.8	5.5	3.0	
31	PL43	BKB 310186	9	1 トレンチ	2面	317	杭	コナラ属クヌギ類	芯持丸木	50.9	—	6.7	
32	PL43	BKB 310077	9	1 トレンチ	2面	4	杭	コナラ属コナラ類	平截状	49.3	6.0	5.9	転用材か
33	PL43	BKB 310228	9	—	—	3	杭	サワラ	板目	40.7	3.2	2.0	
34	PL43	BKB 310078	9	1 トレンチ	2面	5	杭	クリ	分割材	57.0	5.9	5.9	
35	PL43	BKB 310166	9	1 トレンチ	2面	95	杭	コナラ属クヌギ類	芯持丸木	56.1	—	5.6	
36	PL43	BKB 310134	9	1 トレンチ	2面	63	杭	コナラ属クヌギ類	ミカン割	56.5	4.4	4.2	
37	PL44	BKB 310113	9	1 トレンチ	2面	40	杭	モミ属	芯持丸木	58.4	7.2	7.1	
38	PL44	BKB 310211	9	SC107	埋土	4	杭	クリ	ミカン割	58.9	9.3	6.4	
39	PL44	BKB 310217	9	SC107	埋土	10	杭	モミ属	芯持丸木	64.6	—	8.5	
40	PL44	BKB 310101	9	1 トレンチ	2面	28	杭	コナラ属コナラ類	ミカン割	67.4	5.4	6.9	木屑転用か
41	PL44	BKB 310085	9	1 トレンチ	2面	12	杭	コナラ属コナラ類	分割角材	67.4	10.5	5.8	
42	PL44	BKB 310151	9	1 トレンチ	2面	80	杭	カツラ	芯持丸木	69.0	11.0	9.5	
43	PL44	BKB 310215	9	SC107	埋土	8	杭	モミ属	芯持丸木	69.6	—	6.0	
44	PL44	BKB 310216	9	SC107	埋土	9	杭	カヤ	ミカン割 状	72.2	11.7	7.0	
45	PL45	BKB 310063	9	1 トレンチ	2面	103	杭	コナラ属クヌギ類	芯持丸木	73.1	—	6.8	垂木の転用か
46	PL45	BKB 310209	9	SC107	埋土	2	杭	コナラ属コナラ類	ミカン割	73.6	9.8	6.4	
47	PL45	BKB 310156	9	1 トレンチ	2面	85	杭	コナラ属コナラ類	ミカン割	65.0	9.0	5.8	構架材か建築部材等の 転用か
48	PL45	BKB 310076	9	1 トレンチ	2面	3	杭	モミ属	芯持丸木	74.0	—	10.2	
49	PL45	BKB 310080	9	1 トレンチ	2面	7	杭か	コナラ属コナラ類	割材	74.3	10.2	6.4	断面形状型 建築部材転 用か
50	PL45	BKB 310208	9	SC107	埋土	1	杭	モミ属	芯持丸木	77.0	—	8.6	
51	PL45	BKB 310212	9	SC107	埋土	5	杭	カヤ	平截角材	79.3	10.0	6.8	
52	PL45	BKB 310121	9	1 トレンチ	2面	48	杭	ケンボナン属	ミカン割	84.0	12.4	8.3	
53	PL46	BKB 310221	9	SC106	埋土	7	杭	カヤ	ミカン割	92.0	8.2	5.6	建築部材等の転用か
54	PL46	BKB 310219	9	SC106	埋土	4	杭	カヤ	ミカン割	91.8	9.6	7.2	木屑利用
55	PL46	BKB 310115	9	1 トレンチ	2面	42	杭	モミ属	芯持丸木	89.0	—	6.8	
56	PL46	BKB 310102	9	1 トレンチ	2面	29	杭	クリ	平截	92.4	10.8	4.0	
57	PL46	BKB 310094	9	1 トレンチ	2面	21	杭	クリ	芯持丸木	93.5	—	5.6	
58	PL46	BKB 310155	9	1 トレンチ	2面	84	杭	コナラ属コナラ類	板目	97.6	6.8	4.9	
59	PL46	BKB 310222	9	SC106	埋土	8	杭か	カヤ	ミカン割	102.3	11.4	8.4	構架材か 建築部材等の 転用か

掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	器種	樹種	木取 (干法)	法量			備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・ 高さ(cm)	
60	PL46	BKB 310092	9	1 トレンチ	2面	19	杭	クリ	羊歯状	104.0	12.6	6.6	
61	PL47	BKB 310214	9	SC107	埋土	7	杭	モミ属	芯持丸木	106.0	—	8.5	
62	PL47	BKB 310091	9	1 トレンチ	2面	18	杭	クリ	ミカン割	108.0	10.6	5.6	
63	PL47	BKB 310097	9	1 トレンチ	2面	24	杭	クリ	ミカン割	108.8	8.2	5.6	木屑転用か
64	PL47	BKB 310128	9	1 トレンチ	2面	56	杭	モミ属	芯持丸木	110.3	—	7.8	建築部材等の転用か
65	PL47	BKB 310069	9	1 トレンチ	2面	109	杭	コナラ属コナラ節	芯持丸木	117.5	6.4	5.8	建築部材等の転用か
66	PL48	BKB 310226	9	—	1面6層	1	杭	クリ	板目	119.4	10.2	7.1	
67	PL48	BKB 310220	9	SC106	埋土	5	杭	カヤ	ミカン割	127.6	8.6	5.2	木屑利用 柱材か
68	PL48	BKB 310127	9	1 トレンチ	2面	55	杭	カヤ	ミカン割	137.0	11.5	8.3	柱材か
69	PL48	BKB 310230	9	SC106	埋土	1	杭	クリ	ミカン割	138.6	16.2	10.4	
70	PL49	BKB 310232	9	SC106	埋土	9	杭	クリ	ミカン割	144.3	16.5	7.5	
71	PL49	BKB 310231	9	SC106	埋土	3	杭	コナラ属コナラ節	芯持丸木	158.6	11.8	12.1	柱材か
72	PL51	BKB 300038	11b	SC058	埋土	7	山下敷	サワラ	板目	23.5	7.4	1.5	
73	PL51	BKB 300009	11b	SC058	埋土	23	山下敷	サワラ	板目	34.7	7.7	1.4	
74	PL51	BKB 300036	11b	SC058	埋土	32	山下敷	サワラ	板目	35.6	9.3	1.6	
75	PL51	BKB 300022	11b	SC058	埋土	34	山下敷	サワラ	板目	37.3	11.2	1.5	
76	PL51	BKB 300002	11b	SC058	埋土	31	山下敷	サワラ	板目	40.5	8.1	1.3	
77	PL51	BKB 300037	11b	SC058	埋土	43	山下敷	モミ属	板目	37.8	10.3	1.4	
78	PL51	BKB 300033	11b	SC058	埋土	35	山下敷	サワラ	板目	40.9	8.8	1.5	
79	PL51	BKB 300003	11b	SC058	埋土	26	山下敷	モミ属	板目	42.2	7.4	1.3	
80	PL52	BKB 300020	11b	SC058	埋土	33	山下敷	サワラ	板目	42.0	10.9	1.7	
81	PL52	BKB 300004	11b	SC058	埋土	19	山下敷	サワラ	板目	45.4	10.2	2.0	
82	PL52	BKB 300023	11b	SC058	埋土	6	山下敷	サワラ	板目	47.6	10.5	1.9	指定幅は14cm
83	PL52	BKB 300021	11b	SC058	埋土	4	山下敷	モミ属	板目	55.0	12.2	2.6	建築部材の転用か
84	PL52	BKB 300029	11b	SC058	埋土	8	山下敷	モミ属	板目	58.5	11.6	2.4	継接ぎ有
85	PL53	BKB 310013	12a北	SC081	埋土	14	山下敷	サワラ	板目	18.4	7.6	1.6	
86	PL53	BKB 310006	12a北	SC081	埋土	3	山下敷	サワラ	板目	26.2	13.7	1.7	
87	PL53	BKB 310012	12a北	SC081	埋土	13	山下敷	サワラ	板目	39.7	11.1	1.9	
88	PL53	BKB 310001	12a南	SC086	埋土	3	山下敷	サワラ	板目	40.0	10.0	1.7	
89	PL53	BKB 310029	11c	SC092	埋土	6	山下敷	モミ属	板目	31.2	9.5	1.8	
90	PL53	BKB 310028	11c	SC092	埋土	5	山下敷	サワラ	板目	35.3	10.0	1.2	
91	PL54	BKB 310027	11c	SC092	埋土	4	山下敷	サワラ	板目	44.7	10.0	1.4	
92	PL54	BKB 310024	11c	SC092	埋土	1	山下敷	サワラ	板目	48.0	10.8	2.1	
93	PL54	BKB 310026	11c	SC092	埋土	3	山下敷	サワラ	板目	50.3	11.4	2.3	建築部材の転用か

付表13

掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	路種	欄種	本取 (手法)	法量			備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置					長さ(m)	幅(m)	厚さ・住・ 高さ(m)	
94	PL54	BKB 300028	11b	—	北側6層	3	田下駄	サワラ	板目	49.0	11.7	1.9	継ぎけ有
95	PL54	BHT 300045	長谷1	SC04	埋土	30	田下駄	サワラ	板目	40.2	9.8	2.2	
96	PL54	BHT 300066	長谷1	SC04	埋土	51	田下駄	サワラ	板目	35.8	9.6	1.5	
97	PL55	BHT 300035	長谷1	SC04	埋土	20	田下駄	サワラ	板目	43.7	9.7	2.8	転用材か
98	PL55	BHT 300064	長谷1	SC04	埋土	49	田下駄	サワラ	板目	45.8	10.6	3.2	転用材か
99	PL55	BHT 300032	長谷1	SC04	埋土	17	田下駄	モミ属	板目	49.4	10.4	2.3	
100	PL55	BHT 300031	長谷1	SC04	埋土	16	田下駄	サワラ	板目	49.5	13.7	2.6	
101	PL55	BHT 300081	長谷1	SC11	埋土	10	田下駄	サワラ	板目	46.9	13.2	1.2	狭り有 曲物直板→直板 →田下駄に転用か
102	PL55	BHT 300080	長谷1	SC11	埋土	9	田下駄	サワラ	追板	48.9	13.3	1.3	曲物直板等の転用か
103	PL56	BHT 300075	長谷1	SC11	埋土	4	田下駄	サワラ	板目	28.5	11.7	1.1	
104	PL56	BHT 300096	長谷1	SC11	埋土	25	田下駄	サワラ	板目	40.4	12.4	3.5 (高さ 7.1)	懸状製品の転用か
105	PL56	BHT 300014	長谷1	SC15	埋土	1	田下駄	サワラ	板目	45.0	8.7	1.5	
106	PL56	BHT 300010	長谷1	—	6面	8	田下駄	サワラ	追板	36.2	9.6	1.6	
107	PL56	BHT 300007	長谷1	—	6面	2	田下駄	サワラ	板目	38.7	13.6	2.8	
108	PL56	BKB 300008	11b	SC058	埋土	25	田下駄か	サワラ	板目	31.2	8.3	1.0	
109	PL56	BKB 300007	11b	SC058	埋土	30	田下駄か	サワラ	板目	40.1	4.4	1.4	
110	PL56	BKB 310014	12a北	SC081	埋土	15	田下駄か	サワラ	板目	18.7	5.1	1.3	
111	PL56	BKB 310003	12a南	SC086	埋土	9	田下駄か	サワラ	板目	31.9	6.2	2.2	
112	PL57	BKB 300034	11b	SC058	埋土	39	建築部材か	サワラ	板目	49.1	3.3	1.4	
113	PL57	BKB 300030	11b	SC058	埋土	12	建築部材か	コナラ属クヌギ部	ミカン割	75.7	7.1	3.4	
114	PL57	BKB 300024	11b	—	東端1面	—	建築部材か	サワラ	板目	62.0	4.4	2.4	
115	PL57	BKB 300026	11b	—	東端	—	建築部材か	サワラ	分別角材	57.1	3.9	3.3	
116	PL57	BKB 300025	11b	—	東側	—	建築部材	カヤ	板目	58.6	7.4	3.5	建築部材か
117	PL58	BKB 310007	12a北	SC081	埋土	4	建築部材か	サワラ	板目	38.4	7.0	1.0	
118	PL58	BKB 310011	12a北	SC081	埋土	12	建築部材	サワラ	板目	72.8	14.1	3.5	建築部材か
119	PL58	BKB 310025	11c	SC092	埋土	2	建築部材	モミ属	板目	66.0	13.5	3.1	
120	PL58	BKB 300027	11b	—	北側6層	5	建築部材	サワラ	板目	62.4	19.9	3.2	
121	PL59	BKB 300121	11b	SC058	埋土	17	建築部材か	サワラ	板目	139.6	9.0	4.0	
122	PL59	BKB 300119	11b	SC058	埋土	9	建築部材か	サワラ	板目	156.0	7.9	4.1	
123	PL59	BKB 300120	11b	SC058	埋土	16	建築部材か	コナラ属コナラ部	平風	158.8	12.4	6.0	
124	PL59	BKB 310009	12a北	SC081	埋土	9	建築部材か	モミ属	板目	101.8	9.7	3.3	
125	PL59	BKB 310005	12a北	SC081	埋土	2	建築部材か(柱材か)	サワラ	板目	165.8	9.7	5.9	木屑か
126	PL59	BKB 310223	11c	SC092	埋土	7	建築部材か	モミ属	板目	102.9	18.1	3.2	板状木製品か
127	PL59	BKB 310030	11c	SC092	埋土	9	建築部材	モミ属	板目	103.5	12.2	5.6	構架材か



掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	器種	樹種	木取 (手法)	法量			備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・ 高さ(cm)	
128	PL60	BKB 310234	11c	SC092	埋土	8	建築部材か	サワラ	板目	243.2	14.0	4.0	
129	PL60	BKB 310235	11c	SC093	埋土	2	建築部材か	カヤ	板目	170.5	8.5	6.1	
130	PL60	BHT 300016	長谷1	SC04	埋土	1	建築部材	クリ	板目	202.5	20.5	14.0	
131	PL61	BHT 300052	長谷1	SC04	埋土	37	建築部材か	サワラ	板目	134.0	23.0	3.0	
132	PL61	BHT 300084	長谷1	SC11	埋土	13	建築部材	モミ属	板目	166.5	26.5	8.5	横梁材か
133	PL62	BHT 300076	長谷1	SC11	埋土	5	建築部材(板状)	モミ属	板目	258.5	37.5	7.5	
134	PL63	BHT 300077	長谷1	SC11	埋土	6	建築部材か(板状)	モミ属	板目	266.0	26.5	4.0	
135	PL64	BKB 300005	11b	SC058	埋土	22	建築部材か	サワラ	板目	78.5	9.0	1.9	
136	PL64	BKB 300011	11b	SC058	埋土	42	建築部材か	サワラ	板目	63.7	9.5	1.4	
137	PL64	BKB 300012	11b	SC058	埋土西	—	建築部材か	サワラ	板目	62.9	7.1	2.7	
138	PL64	BKB 300035	11b	SC058	埋土	36	建築部材か	ヒノキ科	板目	36.7	5.7	1.0	
139	PL64	BKB 310010	12a北	SC081	埋土	11	建築部材か	モミ属	板目	56.5	10.3	1.8	
140	PL64	BKB 310008	12a北	SC081	埋土	7	建築部材か	サワラ	板目	59.7	9.8	1.9	
141	—	BKB 300006	11b	SC058	埋土	40	不明木製品	クリ	板目	14.4	7.4	1.2	
142	PL64	BKB 300019	11b	SC058	埋土	20	不明木製品	サワラ	板目	14.5	9.0	1.6	
143	PL64	BKB 310004	12a南	SC086	埋土	—	芯材(枿)	マツ属短輪管束 巻属	芯持丸木	59.0	—	3.0	
144	PL64	BKB 310227	11c	SC100	埋土	2	杭	サワラ	板目	22.7	2.4	1.4	転用材か
145	PL64	BHT 300024	長谷1	SC04	埋土	9	丸木杭	エノキ属	芯持丸木	50.6	—	3.0	
146	PL65	BHT 300043	長谷1	SC04	埋土	28	丸木杭(転用)	マツ属短輪管束 巻属	芯持丸木	162.75	6.5	6.0	壁木脚か
147	PL65	BKB 300122	11b	SC058	埋土	18	杭	サワラ	ミカン割	129.3	4.7	5.4	壁木脚か
148	PL65	BKB 300010	11b	SC058	埋土	14	丸木杭	モミ属	芯持丸木	111.2	—	9.2	
149	PL65	BHT 300034	長谷1	SC04	埋土	19	曲物	サワラ	板目	32.2	11.4	1.1	底板か 枿り有 底板に転用か
150	PL65	BHT 300094	長谷1	SC11	埋土	23	曲物	サワラ	板目	44.3	16.3	1.5	底板か 枿板に転用か
151	PL66	BHT 300078	長谷1	SC11	埋土	7	曲物	サワラ	板目	15.4	9.5	0.6	底板 蓋か
152	PL66	BHT 300112	長谷1	—	6面	—	曲物	サワラ	板目	39.7	39.6	1.2	底板 枿板、蓋に転用か
153	PL66	BKB 280001	1	SK279	埋土	—	曲物	上・サワラ 下・ヒノキ科 内・サワラ	上・板目 下・板目 内・板目	22.7	22.0	13.1	枿板 内・黒色物
154	PL66	BKB 280006	1	SK279	埋土	—	曲物	サワラ	板目	8.5	8.5	1.0	底板
155	PL66	BKBR 30002	12c北	SD189	埋土	—	漆器椀	ブナ属	横木板目	10	9.5	3.9	内面赤漆 外面黒漆に 赤漆椀椀(一部を削り割 取)
156	PL66	BKBR 30001	12c北	SD189	埋土	—	曲物	スギ	板目	11.2	7.5	1.1	底板
—	PL40- 157	BKB 310018	11a	SC089	埋土	—	角材(面取りあり)	クリ	板目	65.0	12.0	4.7	木脚か
—	PL41- 158	BKB 300052	7b・8	SC063	埋土	95	杭	コナラ属クヌギ部	芯持丸木	41.4	5.0	3.8	
—	PL42- 159	BKB 310061	9	1 トレンチ	2面	101	エブリ	エノキ属	板目	—	—	—	
—	PL50- 160	BKB 310122	9	1 トレンチ	2面	49	杭	クリ	ミカン割	27.2	5.0	5.3	

付表13

掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	器種	細種	本取 (手法)	法量			備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・ 高さ(cm)	
—	PL50- 161	BKB 310103	9	1 トレンチ	2面	30	瓶	モミ属	椀目	46.8	7.3	3.0	
—	PL50- 162	BKB 310079	9	1 トレンチ	2面	6	瓶	コナラ属コナラ節	ミカン割	58.2	9.2	5.3	
—	PL50- 163	BKB 310202	9	1 トレンチ	2面	334	瓶	エノキ属	芯持丸木	63.5	6.1	3.0	
—	PL50- 164	BKB 310096	9	1 トレンチ	2面	23	瓶	サワラ	椀目	65.5	4.2	2.8	
—	PL50- 165	BKB 310070	9	1 トレンチ	2面	110	瓶	カヤ	ミカン割	87.0	—	9.5	
—	PL50- 166	BKB 310181	9	1 トレンチ	2面	312	瓶	カヤ	ミカン割	106.5	5.0	5.4	
—	PL50- 167	BKB 310233	9	—	1面7層	1	瓶	カヤ	芯持丸木	206.0	—	10.6	
—	PL57- 168	BKB 300018	11b	SC058	埋土	3	角群(群)	サワラ	椀目	40.5	4.7	3.2	
—	PL06- 169	BKB 280002	1	SK279	埋土	—	瓶か	コナラ属クスギ節	平截	65.4	12.0	5.0	

付表14 長谷鶴前遺跡群 土坑一覧(報告書掲載分)

遺跡番号	位置		調査面	形状		規模(m)			遺物	重複関係 △埋 ▽前	備考	時期	図面番号	
	地区	グリッド		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ						
SH05	2	X/V14	3	円形	D	1.27	1.24	0.60	土器	—	井戸跡	中世後期	141・153	
SK017	2	X/V16・17	2	円形	A	0.32	0.32	0.10	陶器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK020	2	X/V17	2	楕円形	B	0.78	0.46	0.22	土器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK021	2	X/V17	2	楕円形	B	0.56	0.43	0.34	陶器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK022	2	X/V17	2	円形	B	0.30	0.30	0.20	土器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK024	2	X/V18	2	円形	B	0.35	0.34	0.11	陶器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK025	2	X/V18	2	円形	B	0.46	0.45	1.00	陶器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK026	2	X/V18	2	円形	A	0.21	0.20	0.04	陶器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK029	2	X/V18	2	楕円形	A	0.59	0.38	0.10	陶器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK031	2	X/V18	2	円形	A	0.60	0.46	0.14	陶器・石器	—	—	近代	157	
SK041	2	X/V21	2	円形	C	0.43	0.35	0.22	小物・型	—	—	近世末~近代	157	
SK042	2	X/V22	2	楕円形	B	0.62	0.42	0.18	土器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK043	2	X/V18	2	楕円形	F	1.09	0.67	0.30	石器	—	—	近代	157	
SK046	2	X/V18	2	不整形円形	A	0.77	0.64	0.14	土器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK047	2	X/V19	2	不整形円形	F	0.67	0.53	0.18	土器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK051	2	X/V19	2	円形	A	0.95	0.92	0.14	土器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK055	2	X/V18・19	2	円形	C	0.94	0.79	0.34	陶器・石器	—	—	近代	157	
SK058	2	X/V16・17	2	帯状	A	4.84	0.96	0.16	陶器・小物・型・瓦・石器・鉄製品	—	—	近代	157	
SK059	2	X/V23	2	不整形円形	C	1.14	0.77	0.60	石器	△SD26	—	近代	157	
SK064	2	X/V23	2	不整形円形	A	1.46	1.00	0.14	土器	△SD26	—	近代	157	
SK065	2	X/V21	2	円形	B	0.40	0.40	0.30	土器・陶器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK073	2	X/V13	2	楕円形	B	0.94	0.67	0.36	土器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK074	2	X/V13	2	円形	A	0.35	0.30	0.06	石器	—	—	近代	—	
SK075	2	X/V13	2	円形	B	0.39	0.36	0.20	土器	—	土坑	近世末~近代	157	
SK084	3	X/V14	2	円形	—	0.69	0.65	—	土器・陶器・石器	—	—	近代	155	
SK091	3	X/V13	1	楕円形	—	0.56	0.42	—	土器	—	土坑	近世末~近代	155	
SK107	2	X/V17	2	円形	A	0.83	0.77	0.12	石器	—	—	中世後期~近世	156	
SK109	3	X/V25	1	円形	C	1.14	1.11	0.52	陶器	—	—	近世末~近代	155・158	
SK111	3	X/V25	2	不整形円形	B	0.99	0.99	0.87	陶器・磁器・小物・型・石刃	—	—	埋蔵	近代	158・162
SK112	3	X/V24・25	3	円形	C	0.74	0.73	0.60	陶器・瓦	—	—	埋蔵	近代	158・162
SK114	3	X/V18	4	円形	C	0.59	0.51	0.33	磁器・瓦	—	—	埋蔵	近代	158・162
SK115	3	X/V18	5	不整形円形	A	1.34	0.97	0.34	—	—	ST01出入口施設	近代	158・162	
SK120	2	X/V08	3	円形	B	0.27	0.25	0.20	土器	SC01	—	中世後期~近世	142・143	
SK136	2	X/V02	3	円形	B	0.32	0.20	0.10	土器	—	土坑	中世~近世	142	
SK137	2	X/V22	3	円形	B	0.43	0.38	0.90	土器	—	土坑	中世~近世	142	
SK139	2	X/V22	3	楕円形	A	0.82	0.49	0.08	土器	—	土坑	中世~近世	142	
SK157	2	X/V12	3	円形	B	0.34	0.29	0.38	土器	—	土坑	中世~近世	143	
SK164	2	X/V13	3	円形	B	0.28	0.23	0.50	土器	—	土坑	中世~近世	143	
SK170	2	X/V18	3	不整形円形	C	1.50	1.42	0.68	—	△SC01, SD32ab	井戸跡	中世後期	143・152	
SK171	3	X/V14	3	円形	C	1.52	(1.13)	0.88	土器	—	井戸跡	中世後期	141・152	
SK202	2	X/V07・12	3	円形	B	1.98	0.35	0.14	小物・型	—	—	中世	143	
SK214	2	X/V23	4	不整形円形	C	(1.44)	1.18	0.62	—	△SD34	井戸跡	中世後期	143・152	
SK215	2	X/V24	5	円形	C	1.25	1.19	0.50	土器・木製品	—	井戸跡	中世後期	142・152	
SK226	2	X/V07	3	不整形円形	D	0.73	0.70	0.63	石器	△SD49	—	中世後期~近世	143	
SK244	2 (井戸跡)	X/V10・11	3	不整形円形	D	1.43	1.22	1.03	土器	—	井戸跡	中世後期	141・152	
SK245	2 (井戸跡)	X/V06	3	円形	—	0.46	0.36	—	土器	—	土坑	中世	141・143	
SK247	2 (井戸跡)	X/V11	3	円形	D	1.03	95.00	1.06	土器	△SC20	井戸跡	中世後期	141・152	
SK250	2 (井戸跡)	X/V06	3	円形	A	0.89	0.73	0.25	土器・石器	△SC20	—	中世後期~近世	141	
SK254	2	X/V10	3	円形	C	0.96	0.96	0.34	—	△SH06	井戸跡	中世後期	141・153	

付表15 長谷鶴前遺跡群 溝跡一覧

SD 番号	位置 地区	調査年度	掘削方向	形状		規模 (m)			遺物	重複箇所 △印 ▼新 (付)不明	備考	時期	図版番号	
				平面形	断面形	長さ	最大幅	深さ						
01	2	X/VX17・ 18・23	2	西北西→ 東南東	ほぼ直線	C	14.14	0.45	0.19	土器、土製品	—	暗渠	近代	163
02	2	X/VX22・ 23	2	西→東	ほぼ直線	—	8.16	0.59	—	土器	—		近代以降	157
06	2	X/VX13・ 17・18	2	西→東	直線	—	12.36	0.28	—	土器	—		近代以降	156
09	2	X/VX21	2	西→東	ほぼ直線	—	2.31	0.49	—	—	—		近代以降	155・157
11	2	X/VX07	3	西→東 北北西→ 南南東	L字に曲線	B	6.87	0.60	0.37	土器	△SD01、SD49	SC01東縁後の 道路無溝跡	中世後期 ～近世	143・149・ 151
12	2	X/VX17・ 22	3	南→北	ほぼ直線	C	12.35	0.38	0.19	土器・石器・ 石製品	△SD24・40・63	SC01東縁後の 道路無溝跡	中世後期 ～近世	142・148・ 151
13	2	X/VX22・ X02	3	南→北	ほぼ直線	A	1.72	0.24	0.06	—	—	SC01東縁後の 道路無溝跡	中世後期 ～近世	142・143・ 148・151
14	2	X/VX02	3	南→北	ほぼ直線	A	1.83	0.36	0.07	土器	△SD03	SC01東縁後の 道路無溝跡	中世後期 ～近世	142・151
17	2	X/VX02・ 03・07・	2	西→東	ほぼ直線	—	11.93	1.13	—	土器	—		近代以降	143・156・ 157
21	2	X/VX08	3	北→南	ほぼ直線	A	2.46	0.49	0.08	—	—	SC01東縁後の 道路無溝跡	中世後期 ～近世	142・143・ 151
22	3	X/VW20	1	東→西	直線	—	1.50	0.54	0.18	土器	—		近代以降	155・158
23	3	X/VW15	1	西→東	直線	—	5.45	0.63	0.18	土器	—		近代以降	155
24	2	X/VX17・ 22・23・ X02・03	3	南→北	L字に曲線	A	19.86	1.56	0.19	土器・石器・ 石製品	△SD63、SH04 ▼SD12	SD40埋立後の 道路無溝跡	中世後期	142・144・ 147・148
25a	2	X/VX07・ 12・17	3	南→北	直線	C	9.22	0.91	0.49	—	△SD25b	SC01の側溝跡	中世後期	143・147
25b	2	X/VX07・ 12・17	3	南→北	直線	C	9.07	0.84	0.33	—	▼SD25a	SC01の側溝跡	中世後期	143・147
26	2	X/VX22・ 23	2	西→東	直線	E	9.70	0.92	0.09	土器	—	暗渠	近世～ 近代	157・163
27	2	X/VX12・ 13	3	南→北	ほぼ直線	C	5.54	0.33	0.09	—	—	SC01東縁後の 道路無溝跡	中世後期 ～近世	143・151
28	2	X/VX13	3	南→北	ほぼ直線	A	3.33	0.32	0.06	—	—	SC01東縁後の 道路無溝跡	中世後期 ～近世	143・151
29	2	X/VX16・ 17・18	3	西南西→ 東北東	ほぼ直線	A	17.68	2.60	0.16	土器・石器	△SD03ab・38	SC01の排水溝 跡	中世後期	143・147・ 150
30a	2	X/VX17・ 18・22・ 23XVID03	3	南南東→ 北北西	直線	C	11.65	0.94	0.27	—	△SD30b・41b	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・ 149
30b	2	X/VX17・ 18・22・ 23XVID03	3	南南東→ 北北西	直線	C	11.89	1.36	0.63	—	▼SD30a・41a (付)SD41b	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・ 149
31	2	X/VX02・ 03	2	西→東	ほぼ直線	—	11.85	1.70	—	土器	—		近代以降	156
32a	2	X/VX13・ 18・23 XVID03	3	南南東→ 北北西	ほぼ直線	B	26.72	1.37	0.51	土器	△SD29・32b・ 41b ▼SD32a・41a, SK170	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・ 149
32b	2	X/VX13・ 18・23 XVID03	3	南→北	ほぼ直線	B	33.00	1.44	0.50	—	△SD29・41b ▼SD32a・41a, SK170	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・ 149
33	2	X/VX22	3	南→北	直線	A	4.86	0.75	0.14	土器・石器	△SD36 ▼SD14	SD40埋立後の 道路無溝跡	中世後期	142・147・ 148
34	2	X/VX18・ 23 XVID03	3	南南東→ 北北西	直線	C	12.16	1.06	0.27	土器・石器	▼SK214 (付)SD41	SC01の側溝跡	中世後期	143・147・ 149
36	2	X/VX17・ 22・X02	3	南→北	直線	C	16.72	0.89	0.24	土器	△SD40 ▼SD03	SD40埋立後の 道路無溝跡	中世後期	142・147・ 148
38	3	X/VW16・ 17・20・ 21・25	3	西南西→ 東北東	ほぼ直線	C	14.16	1.07	0.32	—	▼SD29	SC01の排水溝 跡	中世後期	141・143・ 147
38a	3	X/VW20・ 24・25	3	西南西→ 東北東	ほぼ直線	C	4.60	0.58	0.19	—	△SD38b	SC01の排水溝 跡	中世後期	141・147・ 150
38b	3	X/VW20・ 25	3	西→東	ほぼ直線	C	2.80	0.54	0.25	—	▼SD38a	SC01の排水溝 跡	中世後期	141・147・ 150
39	3	X/VW05・ 09・10	3	南西→ 北東	ほぼ直線	A	5.27	0.92	0.18	土器	△SD45	道路側溝跡	中世後期	141・144・ 147・150

SD 番号	位置 面	位置 グラフィック	高さ面	傾斜 (%)	形状		規格 (m)			調性	垂石等区 △H ▼高 (m)内径	備考	時期	調査番号
					平面形	断面形	長さ	幅	高さ					
40	2	XWS12・12・17・22・XG2	4	南→北	上字型	B	37.59	4.40	0.98	上落・木炭品・土片・石壁・小製瓦・ウツ骨	△SD99 ▼SD24・36・63・64	石段後の石段基礎	中世前期	135・141・142・144・145・146・147・148
41a	2	XWX17・18・19	3	南→北	碓形	A	12.36	1.46	0.25	上落・漆器	△SD29・32c・41b	SC01の基木溝跡	中世前期	143・147・150
41b	2	XWX17・18・19	3	南→北	碓形	A	13.65	2.33	0.41		▼SD29・32c・41a	SC01の基木溝跡	中世前期	143・147・150
42	3	XWV13・14・19	4	南東→北西	靴型	B	11.79	1.68	0.12			竈跡跡線跡か	中世前期	134・139
43	3	XWV14・19・20	2	南東→北西	碓形	C	14.70	0.65	0.24	上落・内漆			中世前期～近代	163
44	3	XWV09・14・15・2	2	南東→北西	碓形	B	15.07	0.76	0.19	上落・内漆			中世前期～近代	163
45	2 (ナ)	XWV05・09・10・X01	3	西内→東南東	平字型	C	13.68	1.12	0.20	上落・石部・燻灰	▼SD30・65	竈跡跡線跡	中世前期	141・144・147・150
46	2	XWX12	3	西内→東南東	平字型	B	3.93	0.37	0.15			SC01前後期の竈跡跡線跡	中世前期～近世	143・151
47	2	XWS25	5	南→北	直線	C	4.41	0.87	0.39	上落		埋木跡	中世前期	135・139
48	2	XWV02・07	3	南→北	上字型	C	12.72	0.69	0.28	上落	△SD49	SC01前後期の竈跡跡線跡	中世前期	147・148・149・150
49	2	XWV02・07	3	南→北	直線	C	7.92	0.61	0.17	上落	▼SD11・48・58226	SC01の側溝跡	中世前期	147・148・149・150
50	2	XWV03・08・09	3	南→北	上字型	C	11.03	1.59	0.34	上落・内漆	△SD31 ▼SD12	SC01の側溝跡	中世前期	147・148・149・150
51	2	XWV08	3	南→北	直線	B	4.63	0.68	0.21		▼SD30	SC01の側溝跡	中世前期	147・148・149・150
52	2	XWV08・09	3	南→北	直線	C	10.23	0.82	0.27		△SD30 △SD31	SC01の側溝跡	中世前期 以降	147・148・149・150
55	2	XWV04・09	4	西内→東南東 北内→南南東	碓形	A	5.82	1.13	0.16			埋木跡	中世前期	135・136・139
57	2 (ナ)	XWV05	3	南→北	櫛形に型	C	7.86	0.76	0.19	上落・燻灰		竈跡跡線跡	中世前期	141・147・150
59	2 (ナ)	XWV05・10・X01・66	4	南→北	直線	D	9.52	2.55	1.15	上落・木炭品・土片・石壁・燻灰	▼SD40	石段前の石段基礎	中世前期	134・137
60	2 (ナ)	XWV0	3	南→北	碓形	A	3.69	0.38	0.07	上落		竈跡跡線跡	中世前期	141・147・150
63	2	XWS17・22・XG2	3	南→北	上字型	C	18.32	1.46	0.46		△SD40 ▼SD12・24	StC0埋立後の竈跡跡線跡	中世前期	142・147・148
64	2	XWS17・22	3	南→北	碓形	C	7.60	0.83	0.42		△SD40	StC0埋立後の竈跡跡線跡	中世前期	142・147・148
65	2 (ナ)	XWV05・10	3	南東→北西	平字型	A	2.26	0.75	0.08		△SD45	竈跡跡線跡	中世前期	141・147・150

付表16 長谷嶺前遺跡群 竈立柱建物跡一覧

ST 番号	位置 面	位置 グラフィック	高さ面	傾斜 (%)	形状	規格 (m)	規格 (m)		調性	遺物	垂石等区 △H ▼高 (m)内径	時期	調査番号		
							長さ	幅							
03	2	XWV2	3	8・90	4	3段×	6.97	—	—	2.01・2.27	—	—	△SD25a, SC01	中世	140・142・155

付表17 長谷嶺前遺跡群 竈立柱遺構一覧

ST 番号	位置 面	位置 グラフィック	高さ面	傾斜 (%)	規格 (m)			調性	遺物	垂石等区 △H ▼高 (m)内径	時期	調査番号
					長さ	幅	高さ					
01	2	XWV02・09・13・14	3	11.40	5.60	0.13	7.6	上落	(円)SD32	中世前期～近世	140・142・143	

付表 18 長谷館跡跡群 中世土器・土製品一覽(報告書掲載分)

[図版164]

編號 番号	写真 番号	山王地区		取上 層序	時期	地層	産地	種類	部位	残存率 %	寸法		重量 g	外径測定 mm	内径測定 mm	胎土	焼成	外面施装・ 底面・縁部・ 取付方法	内面施装・ 底面・縁部・ 取付方法	備考	
		管理番号	地区名								調査 地点	層位									直径 mm
1	PL74	古・中7	201遺跡 F1,3	上1	中世	土器	在田	かへ5 底部	口縁~ 底部	口2/8 底2/8	-8.2>	-6.0>	12.7	10788/2 底口	10788/2 底口	紫色系陶質 黒色灰泥塗	良	同 同	同 同	同	
2	PL74	古・中8	2 (伴遺下)	上1	中世	土器	在田	かへ5 底部	口縁~ 底部	-8.6>	-6.0>	27.8	7.0785/4 底口	7.0785/4 底口	紫色系陶質 白色灰泥・砂子 引子・灰泥塗	良	同 同	同 同	同		
3	PL74	中9	XIV W25	1層	中世	土器	在田	かへ5 底部	底部	底3/8	-	5.0 (1.5)	2.537/1 底口	2.537/1 底口	多量・灰泥・砂 引子・灰泥塗	不良	同	同	同	同	
4	-	古・中21	SD40	埋上	中世	土器	在田	かへ5 底部	体~ 底部	底3/8	-	5.0 (1.5)	10788/1 底口	10788/2 底口	白色系陶質・白 色灰泥・陶粉	良	同 同	同 同	同		
5	PL74	古・中14	2 トレンチ	上1	中世	土器	在田	かへ5 底部	口縁~ 底部	口2/8 底2/8	-10.4>	-8.0>	19.5	7.0787/4 底口	7.0787/4 底口	淡白色系陶質 黒色灰泥塗	良	同 同	同 同	同	
6	-	古・中24	SK120	埋上	中世	土器	在田	かへ5 底部	口縁~ 底部	口1/8 底1/8	-9.8>	-6.0>	9.9	10786/2 底口	10786/2 底口	白色系陶質・白 色灰泥・陶粉	良	同 同	同 同	同	
7	-	古・中25	2 (伴遺下)	上1	中世	土器	在田	かへ5 底部	口縁~ 底部	口1/8	-8.0>	(1.7)	2.537/2 底口	2.537/2 底口	陶粉・砂少量	良	同	同	同	同	
8	-	古・中26	XIXX18	2層	中世	土器	在田	かへ5 底部	体~ 底部	底1/8	-	-9.0>	10785/1 底口	10785/1 底口	陶粉・赤色 粘土少量	良	同	同	同	同	
9	PL74	古・中16	2 SD40	埋上	中世	陶器	藤原・ 美濃	入口 茶碗	口縁~ 体部	口1/8 底1/8	-12.2>	-	27.0	1078 1.7/1底 口縁	1078 1.7/1底 口縁	紫MS灰白 粘土少量	良	同	同	同	同
10	-	古・中17	SK01	埋上	中世	土器	在田	火鉢口 口縁部	口縁部	口1/8 以下	-	(4.0)	22.4	7.5786/4 底口	7.5786/4 底口	白・赤・灰白 色陶質	良	同	同	同	
11	PL74	古・中15	2 SD4	埋上	中世	土器	在田	香印 口縁部	口縁部	口1/8	-7.7>	(3.4)	11.6	2.537/2 底口	10788/2 底口	赤灰色陶質	良	同	同	同	
12	-	古・中22	2 SD50	埋上	中世	土器 (灰皿)	在田	内耳溝 (出)	口縁部 (出)	口1/8 以下	-	(6.2)	49.4	N.2 底	N.2 底	白・赤・灰色 黒・赤・黒・赤 陶質	不良	同	同	同	
13	PL74	古・中5	2 SD40	埋上	中世	土器	在田	内耳溝 体部	口縁~ 体部	口2/8	-28.2>	(13.9)	512.1	N-1.5 底	7.0787/4 底口	淡白色系陶質・ 白・赤・黒・赤・ 黒・赤・黒・赤 陶質	良	同	同	同	
14	PL74	古・中9	3 SH05	埋上	中世	土器	在田	内耳溝 体部	口縁~ 体部	口1/8 以下	-28.6>	(12.0)	159.3	7.5782/1 底	7.5782/1 底	淡白色系陶質・ 黒・赤・黒・赤 陶質	良	同	同	同	



付表19 長谷鶴前遺跡群 石器・石製品一覧

[図版165、196]

図録番号	写真番号	管理番号	出土地点			取上番号	石材	器種	法量				備考
			地区名	遺構・地点	層位・位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
1	PL74	石・ガラス-8	3	—	—	—	安山岩	凹石	10.3	8.4	5.8	458.7	
2	PL74	石・ガラス-9	2	SD50	埋土	—	軽石	凹石	6.9	(5.3)	4.4	63.5	
3	PL74	石・ガラス-10	2	SD24	埋土	—	軽石	凹石	(5.0)	5.1	3.1	45.1	
4	PL74	石・ガラス-17	2	Z	—	—	黒色多孔質安山岩	凹石	23.3	(16.8)	17.0	3406.0	多刃平銃工具による直銃打ノミ状工具によるケズリ。凹み深さノミ状工具によるケズリ。凹み深さ3.9cm。
5	PL74	石・ガラス-18	2	SD40	埋土	—	安山岩	凹石	20.0	20.5	20.0	4500.0	
6	PL74	石・ガラス-19	2	SD40	埋土	—	黒色多孔質安山岩	五輪塔未成品	18.0	17.6	14.8	3080.0	ノミ状工具によるケズリ「水」もしくは「籠」の6面に銃打による側面調整。炭化物付着。
7	PL74	石・ガラス-20	2	—	3面	—	流紋岩	加工石	20.6	22.3	16.9	10570.0	
8	PL74	石・ガラス-21	2	SD40	埋土	—	流紋岩	加工石	16.2	18.2	9.1	3030.0	
9	—	石・ガラス-22	2	SD40	埋土	—	流紋岩	加工石	17.7	20.0	16.4	7600.0	
10	PL88	石・ガラス-1	3	—	—	—	凝灰岩	礎	(5.0)	6.1	2.4	56.1	
11	—	石・ガラス-2	2	SK43	埋土	—	凝灰岩	砥石	(6.2)	3.1	2.7	86.7	砥石面3面
12	PL88	石・ガラス-3	2	SK226	埋土	—	凝灰岩	砥石	(7.8)	3.6	3.3	111.5	砥石面2面 左右面・下面に工具成形痕跡
13	PL88	石・ガラス-4	2	SD34	埋土	—	凝灰岩	砥石	(7.2)	3.6	2.8	128.0	砥石面4面 下面に工具成形痕跡
14	—	石・ガラス-5	3	XNW20	1面1層	—	凝灰岩	砥石	(6.2)	2.9	2.9	89.7	砥石面4面
15	—	石・ガラス-6	3	XNW15	かく乱	—	凝灰岩	砥石	(4.5)	2.9	3.4	82.1	砥石面4面
16	PL88	石・ガラス-7	3	XNW20	1面1層	—	安山岩	砥石	(7.2)	5.4	(3.0)	161.2	砥石面4面
—	PL88-19	石・ガラス-23	2	—	2面	—	黒曜石	打製石鏝	1.2	0.8	0.2	0.1	先端部
—	PL88-20	石・ガラス-24	3	XNW18	1面1層	—	黒曜石	打製石鏝	1.8	1.1	0.5	0.8	先端部
—	PL88-21	石・ガラス-25	3	XNW19	1面1層	—	黒曜石	打製石鏝	2.2	1.4	0.3	0.9	凹基部
—	PL88-22	石・ガラス-26	3	XNW19	1面	—	頁岩	打製石鏝	2.2	1.3	0.3	1.0	凹基部
—	PL88-23	石・ガラス-27	3	SD08	かく乱	—	チャート	打製石鏝	2.3	1.7	0.3	1.2	凹基部
—	PL88-24	石・ガラス-28	3	XNW19	1面1層	—	チャート	打製石鏝	2.5	1.3	0.4	1.9	先端部
—	PL88-25	石・ガラス-29	2	—	1面	—	頁岩	二次加工削片	4.8	4.4	1.7	39.4	
—	PL88-26	石・ガラス-30	2	XNX18	2面1層	—	砂岩	砥石	8.7	7.3	3.9	386.9	
—	—	SK1-1	2	—	2面1層	—	チャート	砕片	2.7	2.2	1.3	5.8	火打石片か
—	—	SC01	2	SC01	埋土	—	チャート	削片	2.2	1.5	0.6	2.4	火打石か
—	—	SD12-1	2	SD12	埋土	—	鉄石英か	砕片	2.0	1.1	0.6	1.7	火打石か
—	—	SD33-1	2	SD33	埋土	—	凝灰岩	砕片	2.7	0.9	0.6	1.6	
—	—	SD24-1	2	SD24	埋土	—	チャート	砕片	2.5	3.4	1.4	12.2	火打石か
—	—	SD24-2	2	SD24	埋土	—	頁岩	おほじきか	1.8	2.1	0.7	3.9	研削
—	—	SD29-1	2	SD29	埋土	—	安山岩	砥石か	(9.7)	4.4	3.3	217.6	端部に銃打痕か
—	—	SD40-1	2	SD40	埋土	—	玄武岩か	砥石か	14.1	5.1	2.3	286.1	端部に銃打痕か
—	—	SD45-1	2	SD45	埋土	—	不明	すり石か	6.3	4.5	1.8	61.7	
—	—	SK31-1	2	SK31	埋土	—	鉄石英か	砕片	2.7	1.3	1.1	2.8	火打石か
—	—	SK55-1	2	SK55	埋土	—	閃緑岩	不明	6.6	6.4	1.9	85.5	
—	—	SK59-1	2	SK59	埋土	—	チャート	削片	1.8	2.4	0.7	2.7	火打石か
—	—	SK58-1	2	SK58	埋土	—	チャート	不明	3.8	2.3	1.4	15.6	小円盤
—	—	SK74-1	2	SK74	埋土	—	鐘質泥岩か	石槌	3.0	2.2	1.8	11.6	
—	—	SK107-1	2	SK107	埋土	—	チャート	削片	1.5	0.8	0.7	0.7	火打石片か
—	—	SK250-1	2	SK250	埋土	—	凝灰岩	砥石	(7.7)	3.5	3.4	104.7	
—	—	X12-1	2	XNX12	2面	—	石英	石槌	4.5	3.8	3.0	49.5	火打石か
—	—	X24-1	2	XNX24	かく乱	—	凝灰岩か	砕片か	1.9	1.8	1.4	6.2	
—	—	機-1	2	—	2面	—	チャート	砕片	2.3	2.1	1.6	5.9	火打石か
—	—	機-2	2	—	2面	—	閃緑岩	不明	5.3	5.3	4.8	181.8	球状研削痕なし



路線 番号	河川 番号	位置番号	山上地点			取上 番号	石種	露径	径尺				備考		
			樹名	測線・ 地点	測位・ 位置				長さ(m)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)			
		線-3	2	1.5		チャーム	礫石	0.7	1.1	0.3	0.2				
		線-4	2	1.5		チャーム	礫石	2.9	1.8	0.9	3.2	大石,石か			
		線-5	2	2.5		軽石	小石	5.2	3.1	2.2	6.3	粗砂,石あり			
		線-6	2 (山頂上)	3.5		小石	小石,正片石	4.8	4.8	2.2	53.5	粗砂,粗砂,石か			
		Z-1	2	2		チャーム	礫石	1.8	1.4	0.7	2.9	大石,石か			
		Z-2	2	2		チャーム	礫石	3.2	3.9	1.5	18.5	大石,石か			
		IT寄	3	1 トレンテ	1.5 南1号		頁岩	石板	6.0	2.7	0.4	19.5	大石,石塊割		
		上湧1	3		1.2上湧		頁岩	石板	5.4	3.1	0.3				
		SD03-1	3	SD03	埋上		チャーム	礫石	2.1	2.8	1.6	9.5	大石,石か		
		SD03-2	3	SD03	埋上		正統	礫石	1.1	1.9	1.2	2.0	大石,石か		
		SD03-3	3	SD03	埋上		頁岩	石板	4.3	4.8	0.3	9.7	大石		
		SK84-1	3	SK84	埋上		正統	礫石	1.5	1.7	0.3		(2号合流)		
		W09-1	3	X/W09	1.2上湧		頁岩	礫石	4.7	2.7	1.1	18.0			
		W09-2	3	X/W09	1.2上湧		頁岩	石板	2.4	1.6	0.2	1.5			
		W09-3	3	X/W09	1.2上湧		流石か	流石(礫石)	4.0	2.1	0.5	4.3			
		W09-4	3	X/W09	1.2上湧		軽石	小石	7.1	5.4	4.4	72.7	粗砂,石あり		
		W09-5	3	X/W09	1.5		凝灰岩	礫石	3.2	4.2	1.3	22.2			
		W10-1	3	X/W10	1.2上湧		石灰	礫石	2.5	2.1	0.8	4.2	大石,石か		
		W10-2	3	X/W10	1.2上湧		頁岩	石板	5.2	3.0	0.4	8.2			
		W13-1	3	X/W13	1.2上湧		凝灰岩	礫石	1.3	1.3	0.3	0.3			
		W13-2	3	X/W13	1.2上湧		流石	石票	1.9	0.5	0.5	0.9			
		W13-3	3	X/W13	1.2上湧		頁岩	粗砂,石	1.6	1.8	0.3	1.6	石板(礫)		
		W13-4	3	X/W13	1.2上湧		石灰	礫石	2.8	1.6	1.4	6.5	大石,石か		
		W14-1	3	X/W14	かく乱		チャーム	石板	2.5	3.0	1.9	16.1	大石,石か		
		W14-2	3	X/W14	かく乱		チャーム	石板	3.6	2.1	1.7	11.6	大石,石か		
		W14-3	3	X/W14	1.2上湧		凝灰岩か	礫石	1.9	1.5	0.6	1.6	大石,石か		
		W15-1	3	X/W15	1.2上湧		チャーム	礫石	1.6	0.7	0.4	0.4	大石,石か		
		W15-2	3	X/W15	1.2上湧		多孔質(安山)石	小石	4.4	3.3	2.9	26.8	小石割		
		W19-1	3	X/W19 A トレンテ			凝灰岩	礫石	4.8	2.3	0.8	7.3			
		W19-2	3	X/W19	1.2上湧		チャーム	礫石	2.2	2.4	1.1	5.5	大石,石か		
		W19-3	3	X/W19	1.2上湧		凝灰岩	石板	3.5	3.3	2.2	23.4	大石,石か		
		W19-4	3	X/W19	1.2上湧		石灰	礫石	2.4	2.5	0.4	3.0	大石,石か		
		W19-5	3	X/W19	1.2上湧		凝灰岩	礫石	6.8	3.1	2.3	92.2			
		W19-6	3	X/W19	1.2上湧		正統	礫石	1.7	1.9	1.2	3.9	大石,石か		
		W24-1	3	X/W24 A トレンテ			小石	小石	1.9	1.4	1.2	3.7			
		W24-2	3	X/W24 A トレンテ					1.0	0.7	0.4	0.8	0.6	0.4	凝灰岩,礫石,石か
		W24-3	3	X/W24	1.2上湧		正統	礫石	3.0	3.2	1.8	17.4			
		W24-4	3	X/W24	1.2上湧		正統	礫石	2.5	2.8	1.6	10.6	大石,石か		
		W24-5	3	X/W24	1.2上湧		頁岩	石板	10.1	4.2	0.4	27.5			
		W25-1	3	X/W25	1.2上湧		頁岩	石板	3.2	3.4	0.3				
		W25-2	3	X/W25	1.2上湧		頁岩	石板	1.2	2.4	0.1	4.5	(4号合流)		
		W25-3	3	X/W25	1.2上湧		頁岩	石板	1.1	0.6	0.1				
		W25-4	3	X/W25	1.2上湧		頁岩	石板	0.6	1.0	0.1				
		W25-5	3	X/W25	1.2上湧		頁岩	礫石	3.5	2.2	0.6	4.1			
		W25-6	3	X/W25	1.2上湧		頁岩	石板	10.6	3.6	0.4	24.8			
		線 中-1	3	中	1.5		頁岩	礫石	3.6	2.1	1.0	3.7			
		線 北-1	3	北	1.5		チャーム	礫石	1.9	2.1	1.0	4.8	大石,石か		
		線 北-2	3	北	1.5		頁岩	石板	3.0	3.9	0.4	6.2			
		Z-1	3	Z			凝灰岩	粗砂,石	3.6	2.9	0.7	10.6	粗砂,石		
		Z-2	3	Z			チャーム	石板	2.4	2.0	1.5	12.5	大石,石か		

付表20 長谷鶴前遺跡群 金属製品一覧

[図版197]

図録 番号	写真 番号	管理番号	地区名	出土地点 遺構・ 地点	層位・ 位置	取上 番号	材質	遺物名称	法蘭(保存処理前)			備考	
									長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)		重量(g)
1	PL88	30001	3	XNW20	1面I層	—	銅合金	煙管	8.10	最大径1.2	口元径6.0 小口径9.0	11.1	吸口
2	PL88	30003	3	XNW09	1面II層	—	銅	煙管	5.50	最大径1.40	口元径5 小口径10.0	9.2	吸口
3	PL88	30004	3	XNW19	1面II層	—	銅	煙管	6.15	1.38	小口径11.5	16.4	断面 本質吸口入り(長さ 48.8mm, 最大径0.0mm, 口元幅0.4mm, 小口径 8.6mm, 重量1.3g)
4	—	29048	3	XNW09	1面II層	—	鉄	楔	8.20	1.90	8.0	42.1	
5	—	29030	3	XNW09	1面II層	—	鉄	釘	(8.60)	2.40	18.0	112.9	
6	—	29032	3	XNW10	1面II層	—	鉄	釘	(10.8)	2.50	20.0	94.1	
7	—	29035	3	—	—	—	鉄	釘	9.80	2.40	21.0	67.2	
8	PL88	29001	3	XNW15	1面	2	銅	銭貨	2.80	内径0.61	1.3	4.8	甕水通貨
9	—	29008	3	XNW09	1面II層	1	銅	銭貨	2.13	内径0.59	1.0	1.7	甕水通貨
10	PL88	29016	2	—	1面	9	銅	銭貨	2.66	内径0.74	1.2	3.2	文久永貨
11	PL88	29017	2	XNX02	2面IV層	—	銅	銭貨	2.31	内径0.63	1.0	2.3	甕水通貨
12	—	29018	2	—	(北)2面	—	銅	銭貨	2.40	内径0.61	1.1	3.2	空室通貨
13	—	29020	2	—	(北)3面	—	銅	銭貨	2.05	内径0.54	2.3	3.6	浜武通貨
14	PL88	29003	3	XNW09	1面I層	—	銅	銭貨	2.78	—	1.6	6.9	一銭銅貨
15	PL88	29004	3	—	(北)1面	—	銅	銭貨	2.18	—	1.2	3.4	半銭銅貨
16	PL88	29005	3	XNW15	1面I層	—	銅	銭貨	1.74	—	1.1	2.1	半銭銅貨
17	PL88	29010	3	XNW10	1面II層	5	銅	銭貨	1.55	—	0.7	0.8	一厘銅貨
—	—	29002	3	SD08	埋土	—	銅	銭貨	2.20	—	1.7	3.0	半銭
—	—	29006	3	XNW20	1面II層	—	銅	銭貨	(2.40)	—	1.3	1.1	甕水通貨
—	—	29007	3	XNW20	1面II層	—	銅	銭貨	2.30	内径0.60	1.2	2.0	甕水通貨
—	—	29009	3	XNW20	1面II層	—	銅	銭貨	2.50	内径0.60	1.7	3.4	甕水通貨
—	—	29011	3	XNW18	1面II層	—	銅	銭貨	2.30	内径0.60	1.8	1.8	甕水通貨
—	—	29012	3	XNW25	1面II層	—	銅	銭貨	3.20	—	3.0	13.7	二銭
—	—	29013	3	XNW20	1面II層	—	銅	銭貨	2.20	内径0.60	1.3	2.8	甕水通貨
—	—	29014	2	—	1面	—	銅	銭貨	2.30	内径0.60	1.3	1.9	甕水通貨
—	—	29015	2	—	1面	—	銅	銭貨	2.30	内径0.70	1.3	2	甕水通貨
—	—	29019	1	—	道路表層 (北)	—	銅	銭貨	2.40	内径0.60	1.8	2.9	甕水通貨
—	—	29021	2	XNX18	2面	7	鉄	不明鉄製品	5.00	1.30	13.0	26.3	小片あり
—	—	29022	2	SK58	埋土	—	鉄	不明鉄製品	5.70	1.40	8.0	15.7	
—	—	29023	2	SK58	埋土	—	鉄	不明鉄製品	7.50	1.00	14.0	15	
—	—	29024	3	—	(南)1面	—	鉄	不明鉄製品	12.00	6.30	10.0	52.1	
—	—	29025	3	—	西壁 上1面	—	鉄	不明鉄製品	12.30	1.50	20.0	59.6	小片あり
—	—	29026	3	XNW04	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	12.70	6.50	9.0	111.7	
—	—	29027	3	XNW05	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	7.2	1.8	8	16.2	短物か
—	—	29028	3	XNW09	1面I層	—	鉄	不明鉄製品	8.10	3.70	14.0	32.6	
—	—	29029	3	XNW09	1面I層	—	鉄	不明鉄製品	11.40	大径2.10 小径1.00	—	59	
—	—	29031	3	XNW10	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	4.00	6.40	5.0	25.5	
—	—	29033	3	XNW13	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	8.50	4.00	31.0	52.0	
—	—	29034	3	XNW13	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	8.00	2.30	19.0	81.7	小片あり
—	—	29036	3	XNW15	1面I層	—	鉄	不明鉄製品	8.00	1.50	13.0	6.8	
—	—	29037	3	XNW19	1面I層	—	鉄	不明鉄製品	19.00	2.20	19.0	237.2	小片多数
—	—	29038	3	XNW25	1面I層	—	鉄	不明鉄製品	11.80	4.20	16.0	107.1	小片多数
—	—	29039	3	XNW25	1面 上1層	—	鉄	不明鉄製品	21.50	1.00	10.0	79.4	
—	—	29040	3	XNW25	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	11.00	4.00	10.0	34.5	
—	—	29041	3	SD03	埋土	—	鉄	不明鉄製品	(5.80)	4.00	34.0	216.2	
—	—	29042	3	SD03	埋土	—	鉄	不明鉄製品	9.70	4.40	27.0	160.9	
—	—	29043	3	XNW18	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	3.70	1.50	15.0	9.7	2点
—	—	29044	3	XNW19	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	3.10	1.60	13.0	6.9	
—	—	29045	3	XNW09	1面II層	—	銅	不明鉄製品	3.50	1.20	6.0	3.2	2点
—	—	29046	3	XNW24	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	3.60	1.00	6.0	6.2	
—	—	29047	3	XNW09	1面II層	—	銅	不明鉄製品	2.10	2.20	6.0	2.4	
—	—	29049	3	XNW09	1面II層	—	銅	不明鉄製品	1.60	0.90	1.0	1	
—	—	29050	3	SD08	埋土	—	鉄	不明鉄製品	7.84	1.73	8.3	16.1	短か
—	—	29051	3	SD08	埋土	—	鉄	不明鉄製品	7.38	1.26	11.3	12.5	短か
—	—	29052	3	SD08	埋土	—	鉄	不明鉄製品	3.80	0.92	8.4	4.8	短か
—	—	29053	3	XNW05	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	11.50	5.30	11.0	36.1	

掲載 番号	写真 番号	管理番号	出土地点			取上 番号	材質	遺物名称	法量(保存処理前)				備考	
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置				長さ・径(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		
—	—	29054	3	XNW05	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	5.40 3.80	1.50 1.00	14.5 9.5	18.1	3片	
—	—	29055	3	XNW13	1面II層	—	鉄	不明鉄製品	19.00	2.60	0.95	11.2	27.2	
—	—	29056	3	XNW25	1面 1～II層	—	鉄	不明鉄製品	3.50	1.55	14.8	6.0	45.3	小片多数
—	—	30002	3	XNW20	1面	1	銅	不明銅製品	2.00	径2.20	—	6.2	玩具か	

付表21 長谷鶴前遺跡群 中世木製品一覧(報告書掲載分)

[図版166～169]

掲載 番号	写真 図版	管理番号	出土地点			取上 番号	器種	種類	本取 (手法)	法量			備考
			地区名	遺構・ 地点	層位・ 位置					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径・ 高さ(cm)	
1-1~ 4	PL75 .76	BHT 290027	2	SD40	埋土	—	箱状製品(三方)	サワラ	榫目	高さ23.6	26.0	奥行18.8	
2	PL76	BHT 300107	2 (市道下)	SD59	埋土	2	山下駄	サワラ	板目	41.7	6.9	1.4	
3	—	BHT 290018	2	SD40	埋土	—	遺棄下駄	クリ	板目	10.4	3.7	3.4	
4	PL76	BHT 290016	2	SD40	埋土	—	柄杓または曲物底板	サワラ	榫目	8.5	—	1.3	
5	PL76	BHT 290025	2	SK215	埋土	3	柄杓または曲物底板	サワラ	榫目	10.3	6.9	0.7	
6	PL76	BHT 300111	2 (市道下)	SD40	埋土	—	曲物底板	サワラ	透釘	23.6	4.8	1.6	
7	PL76	BHT 300109-2	2 (市道下)	SD59	埋土	—	蓋	サワラ	板目	18.7	8.5	1.4	皿板に転用か
8	—	BHT 300108	2 (市道下)	SD59	埋土	3	板材	サワラ	透釘	15.0	5.4	1.7	板の長さ調整
9	PL77	BHT 300109-3	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	サワラ	榫目	21.8	3.2	0.4	曲物製板か折敷片
10	PL77	BHT 300109-4	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	サワラ	榫目	14.6	2.5	0.3	曲物製板か折敷片
11	PL77	BHT 300109-5	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	スギ	榫目	8.1	1.8	0.2	曲物製板か折敷片
12	PL77	BHT 300109-6	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	ヒノキ	板目	11.4	2.1	0.6	皿板の破片か
13	PL77	BHT 300109-7	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	ヒノキ	榫目	6.2	1.8	0.2	曲物製板か折敷片
14	PL77	BHT 300109-8	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	スギ	榫目	12	1.0	1.0	角材
15	PL77	BHT 300109-1	2 (市道下)	SD59	埋土	—	不明木製品	スギ	榫目	13.8	2.9	1.3	棒材
16	PL77	BHT 300110	2 (市道下)	SD40	埋土	—	不明木製品	サワラ	板目	30.9	6.0	8.5	皿板に使用
17	—	BHT 290026	2	SK215	埋土	—	籠状製品	ヒタケ糸科 之止葉樹	分別	22.4	17.2	0.1	2点隣が長く同定不能
—	PL77- 18	BHT 290021	2	SD41a	埋土	—	漆器	漆塗膜	—	—	—	—	本地産せず

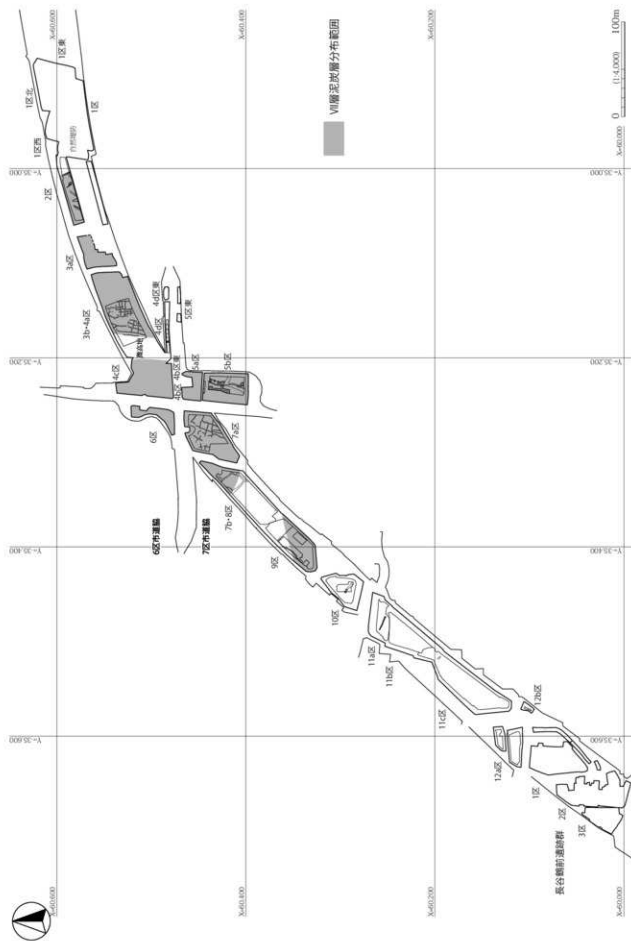


# 石川条里遺跡

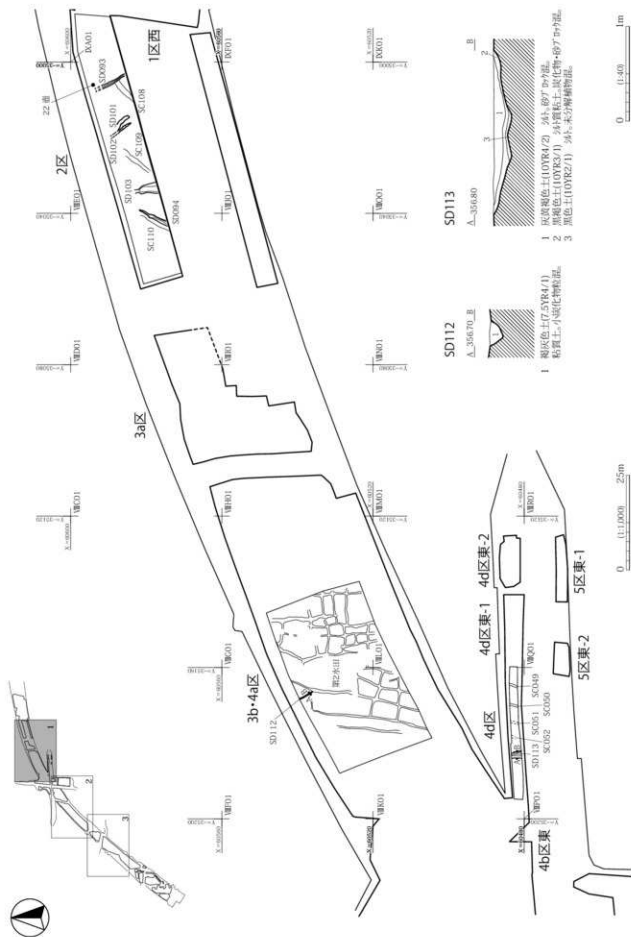
遺構図版

遺物図版

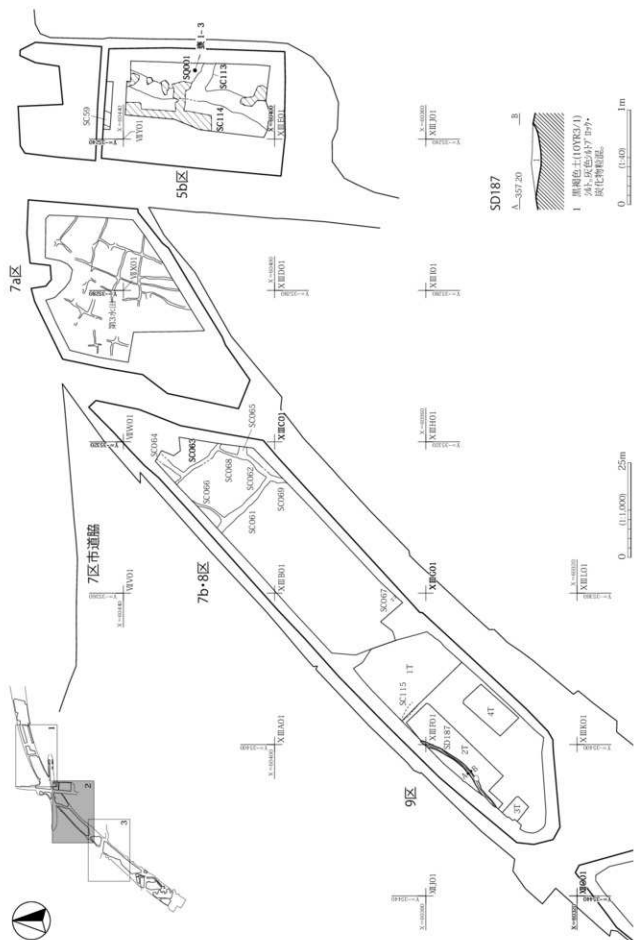




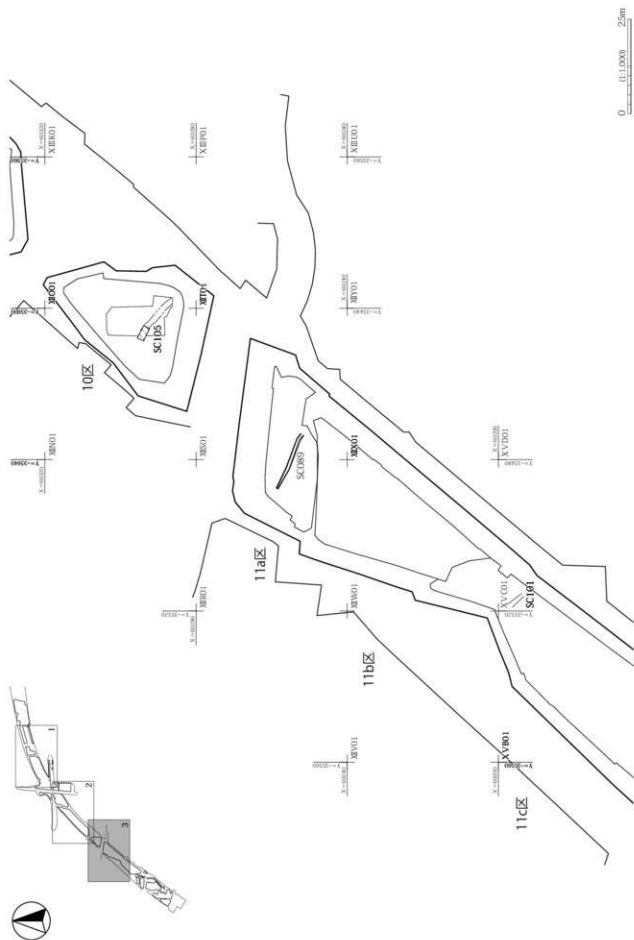
図版2 弥生時代の遺構分布図1

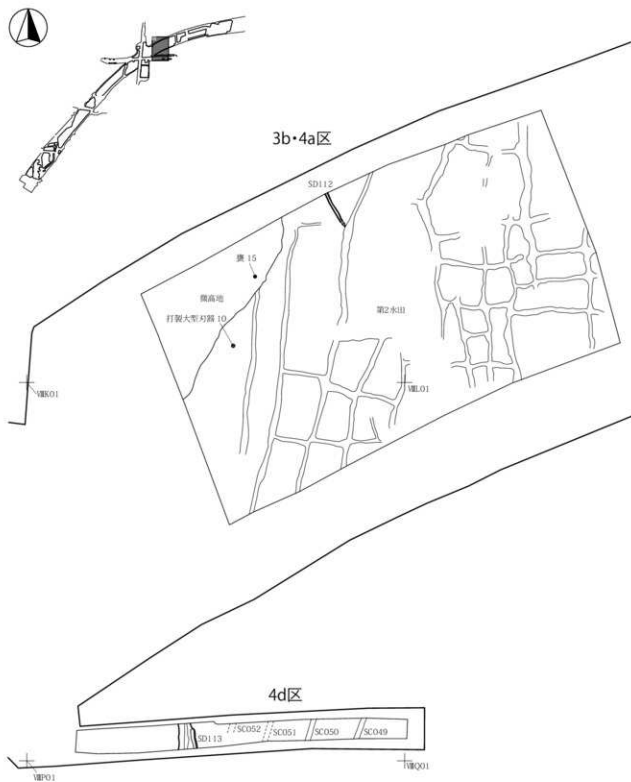






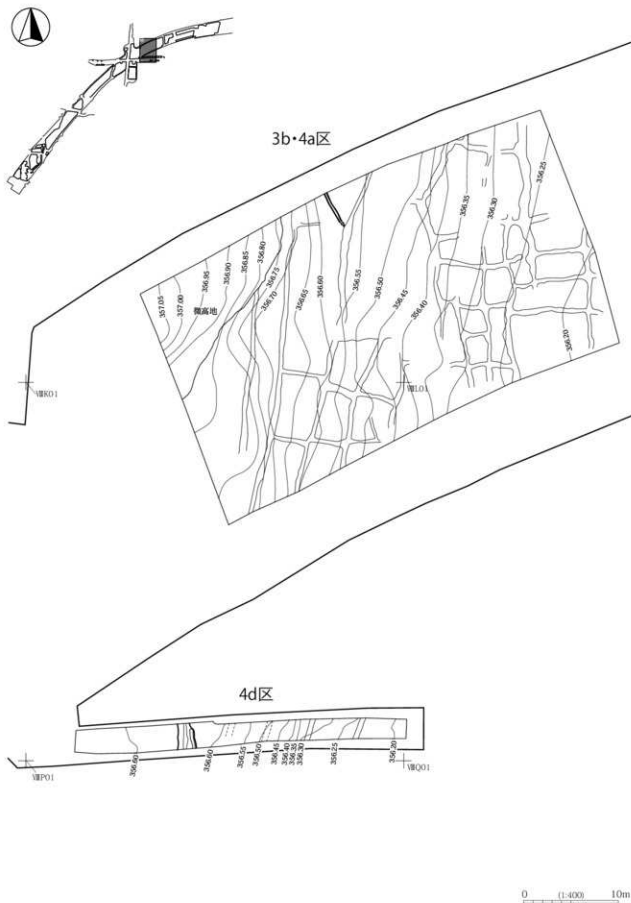
図版 4 弥生時代の遺構分布図3

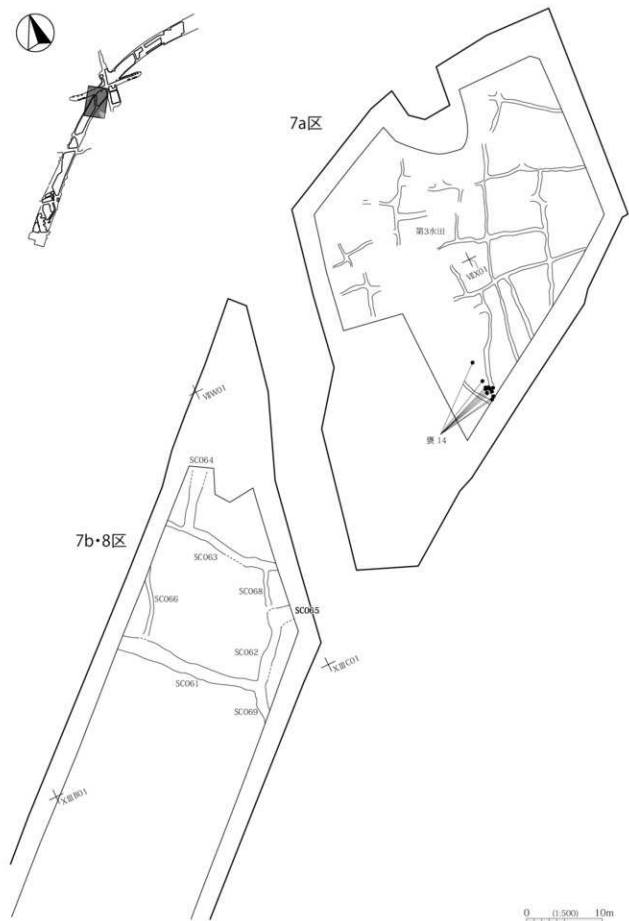




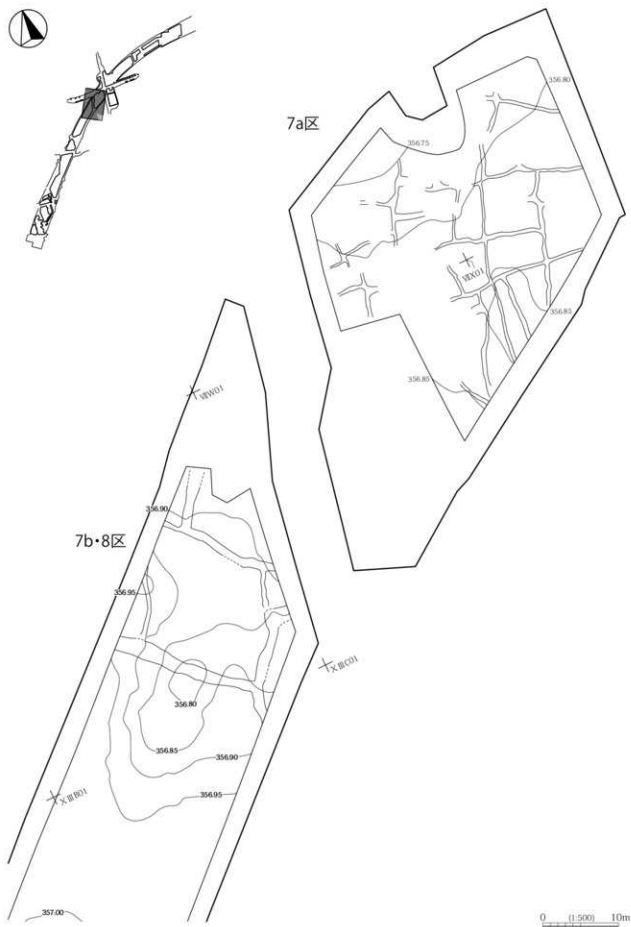
0 (1:400) 10m

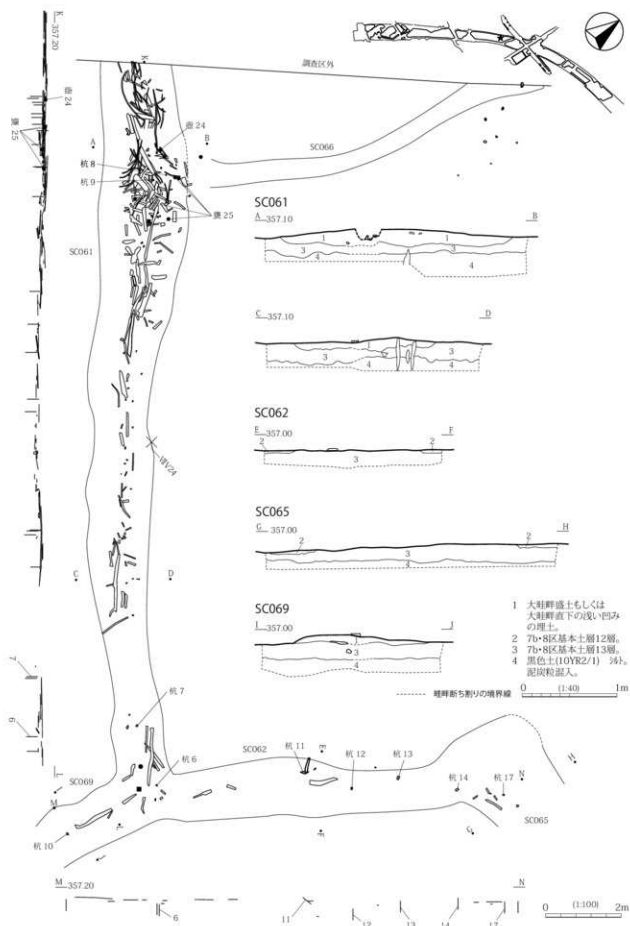
図版6 3b・4a区第2水田等高線図





図版8 7a区第3水田、7b・8区水田跡等高線図



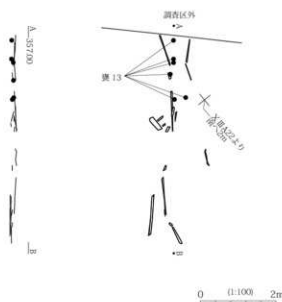




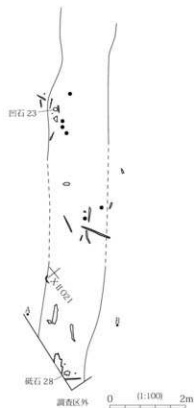




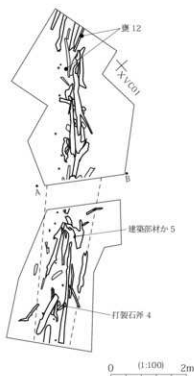
9区SC115



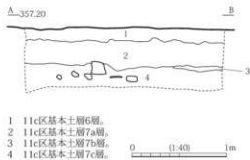
10区SC105



11c区SC101

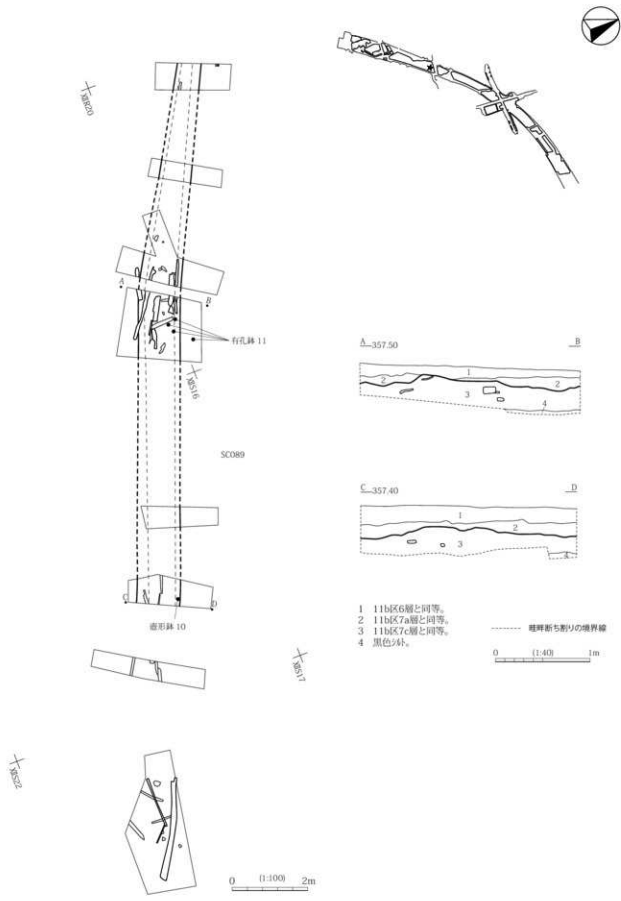


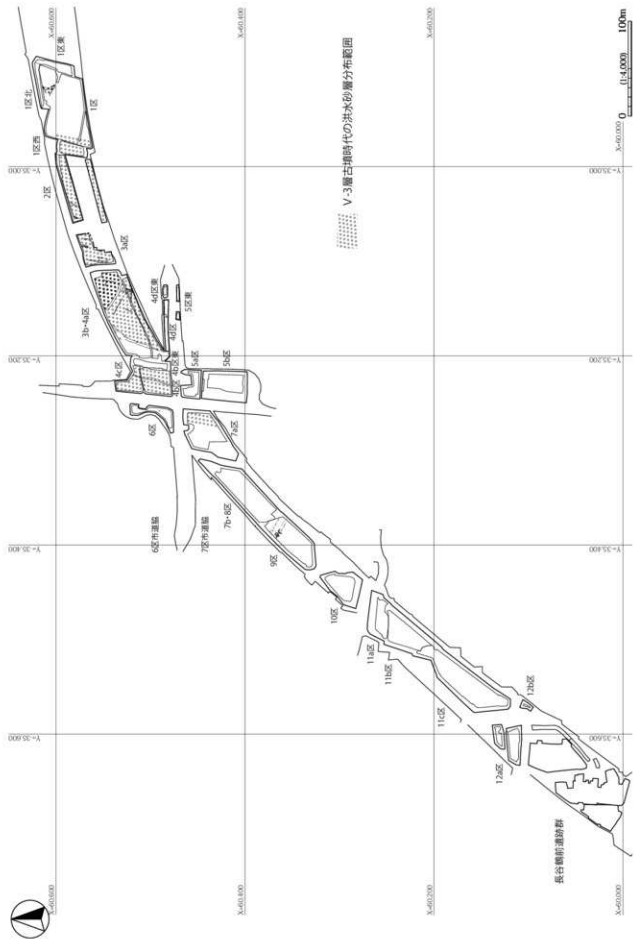
- 1 黒褐色土(10YR3/1) 砂土、黒色砂砂りD砂泥。
- 2 黒色土(10YR1.7/1) 砂土、泥炭層、未分解植物質多泥、白色砂土層堆積。



- 1 11c区基本土層6層。
- 2 11c区基本土層7a層。
- 3 11c区基本土層7b層。
- 4 11c区基本土層7c層。

----- 畦畔断と新川の境界線

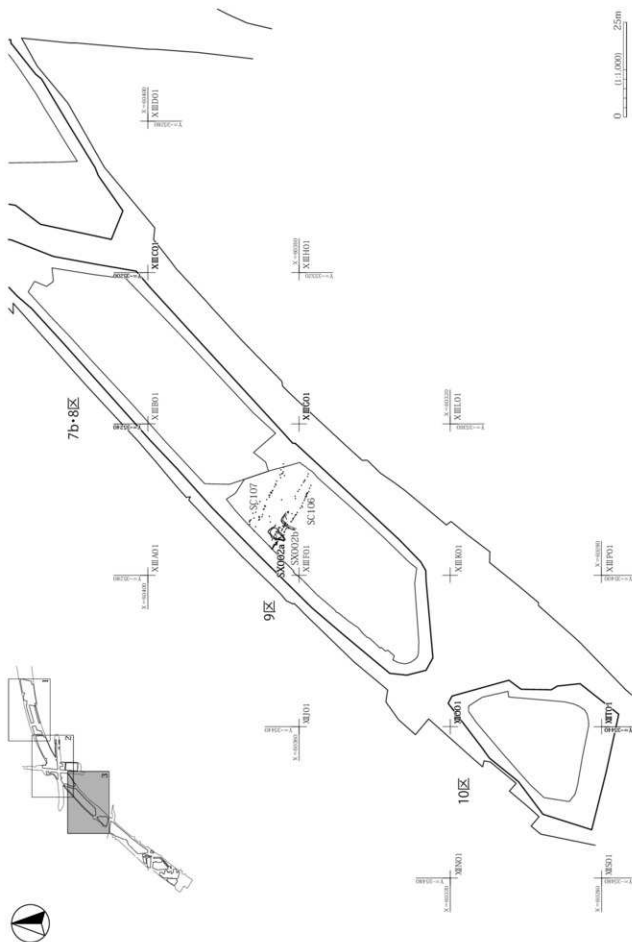


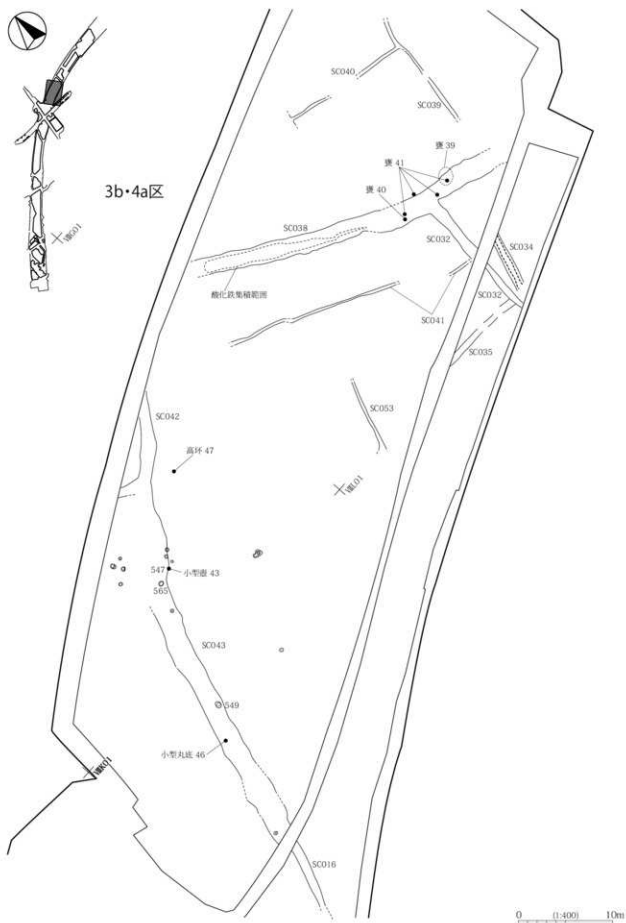




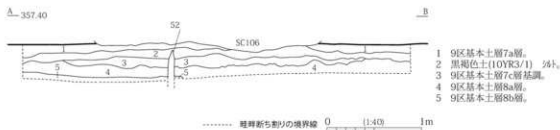


図版 16 古墳時代の遺構分布図3





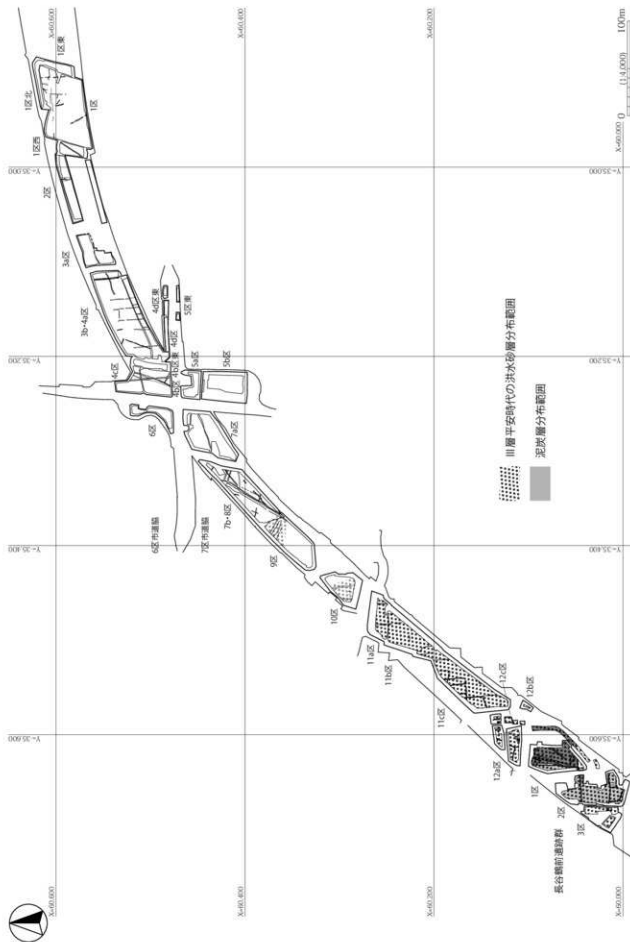
SC106・107

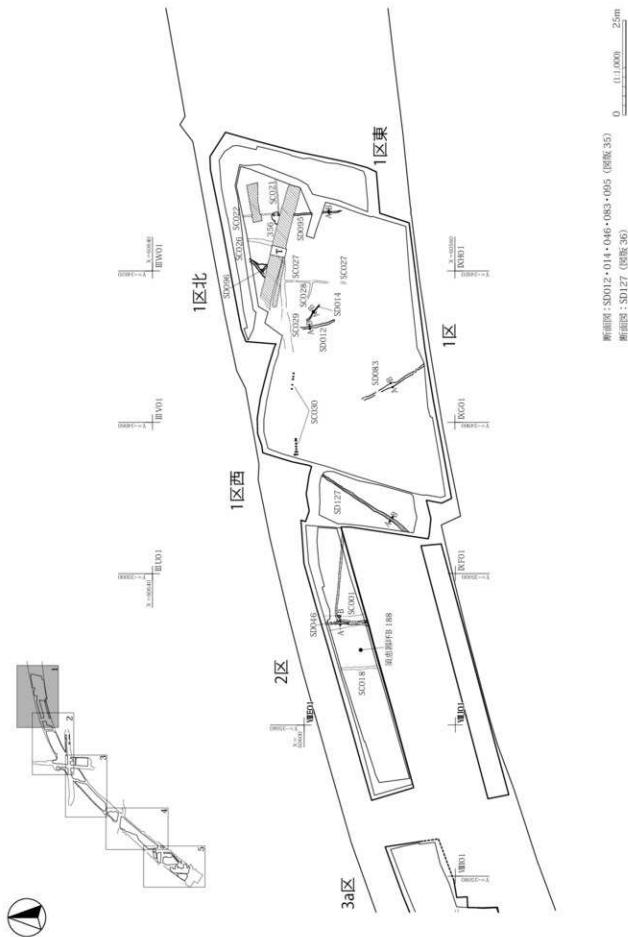


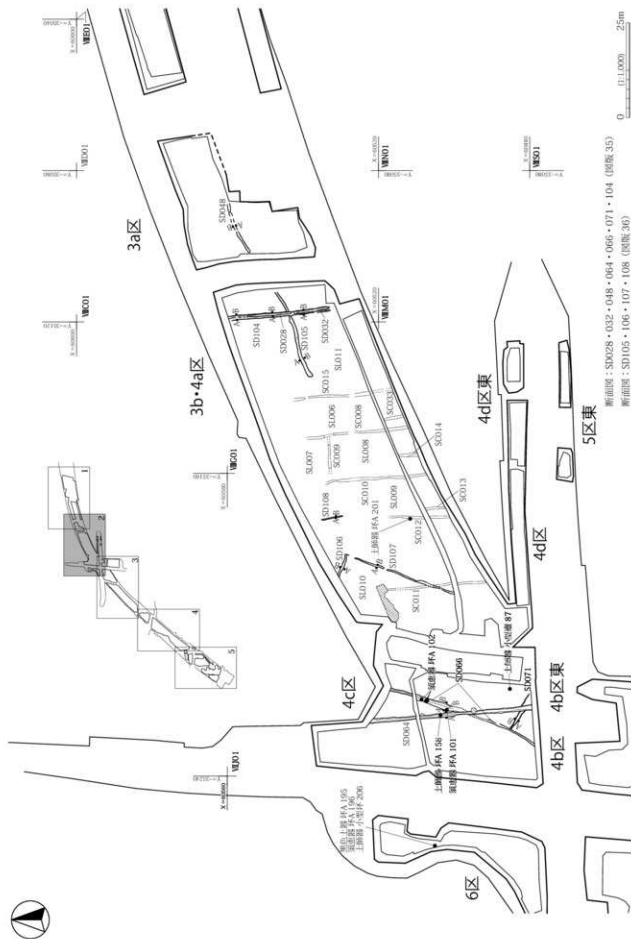








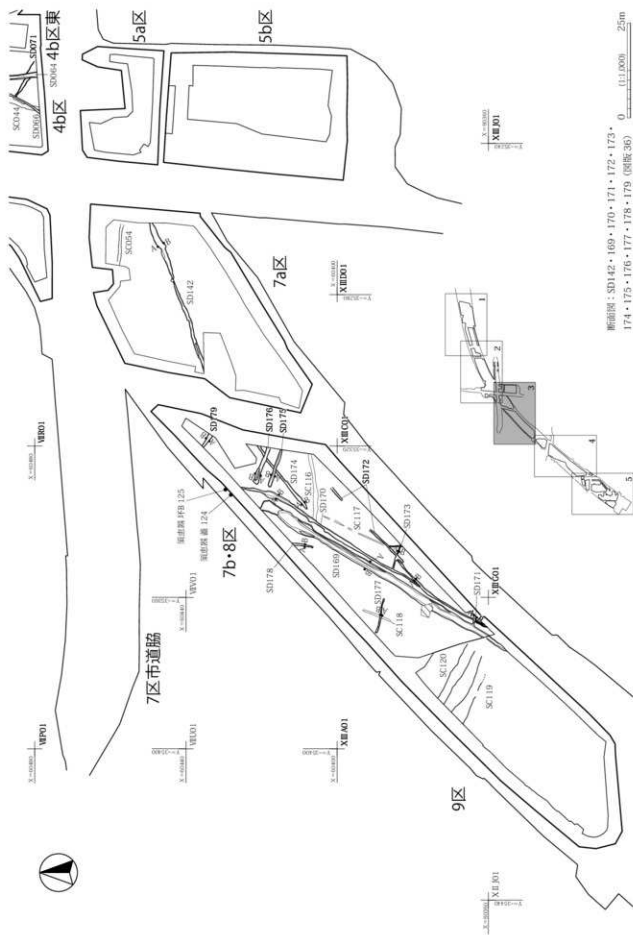


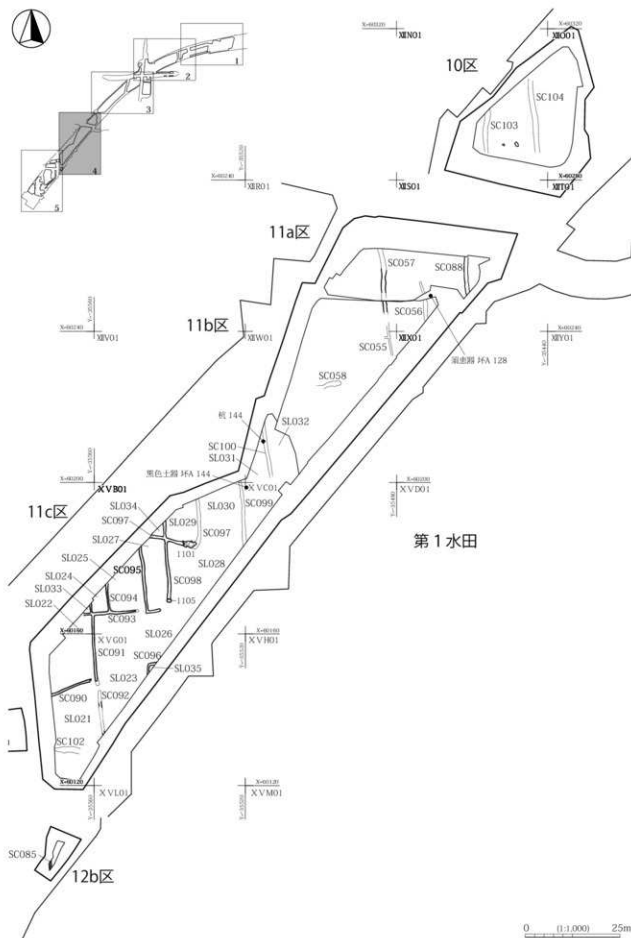


断面図：SD028・032・048・064・066・071・104 (図版 35)

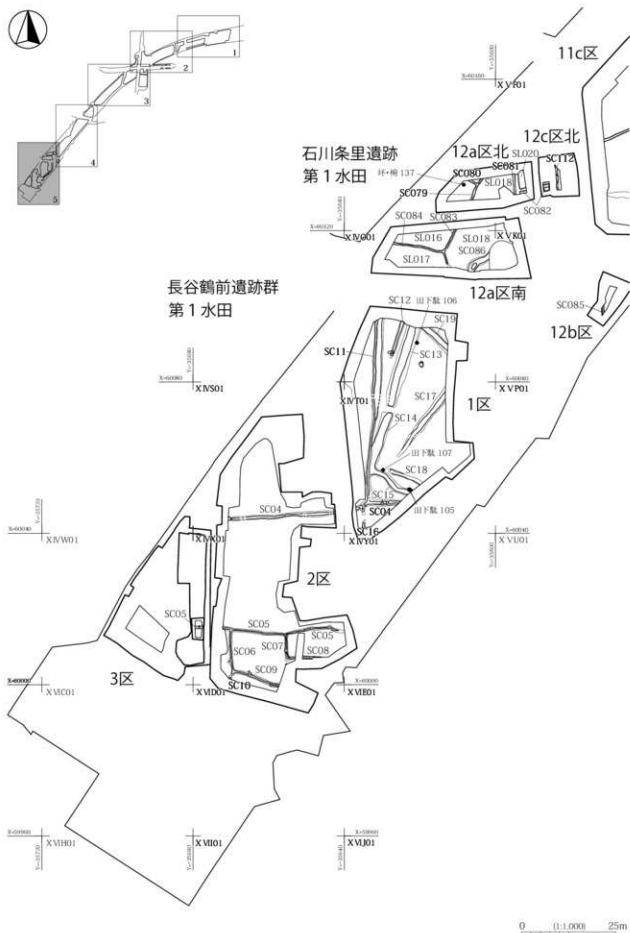
断面図：SD105・106・107・108 (図版 36)

図版 24 古代の遺構分布図 3



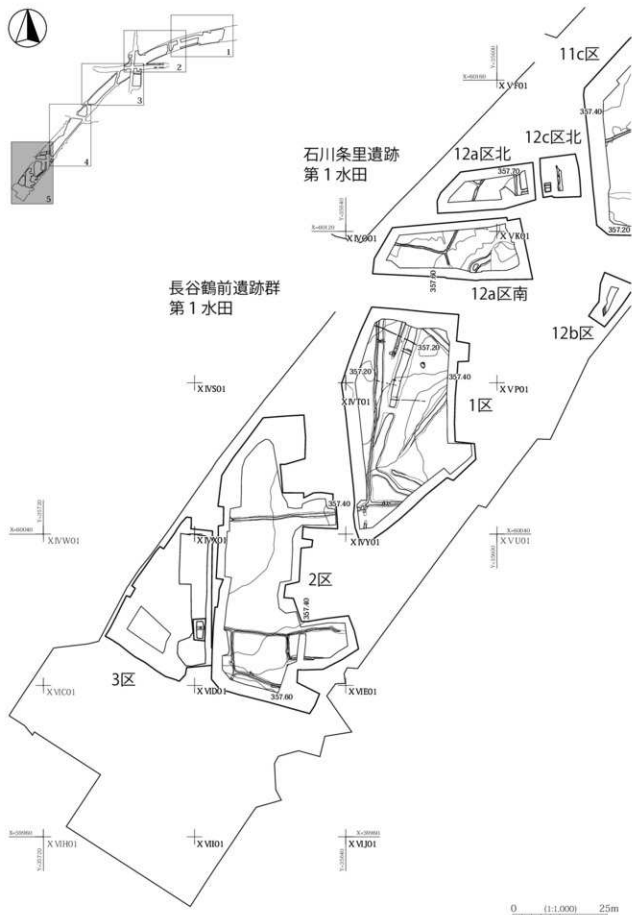


図版 26 古代の遺構分布図 5



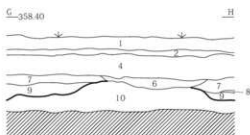




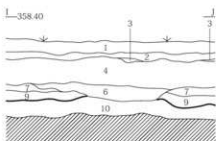


## 11区

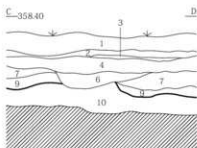
SC097



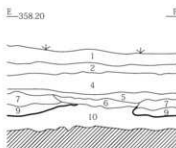
SC098



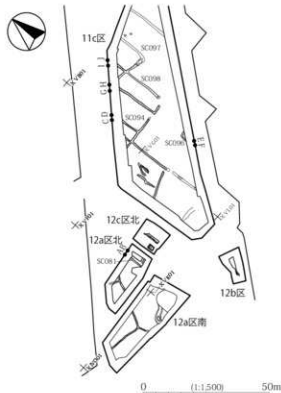
SC094



SC096

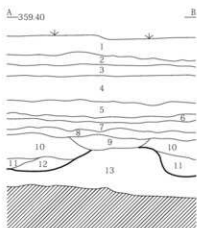


- 1 褐灰色土(10YR4/1) 砂状。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 粗砂多混。
- 3 褐色土(10YR4/4) 砂質砂。還元。粗砂多混。
- 4 灰色黄褐色土(10YR4/3) 砂状。灰色粘土了り多混。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂状。粗砂多混。
- 6 褐灰色土(10YR4/1) 砂状。還元。
- 7 11c区基本土層5c-1層。
- 8 11c区基本土層5c-2層。
- 9 11c区基本土層5c-3層。
- 10 11c区基本土層6層。



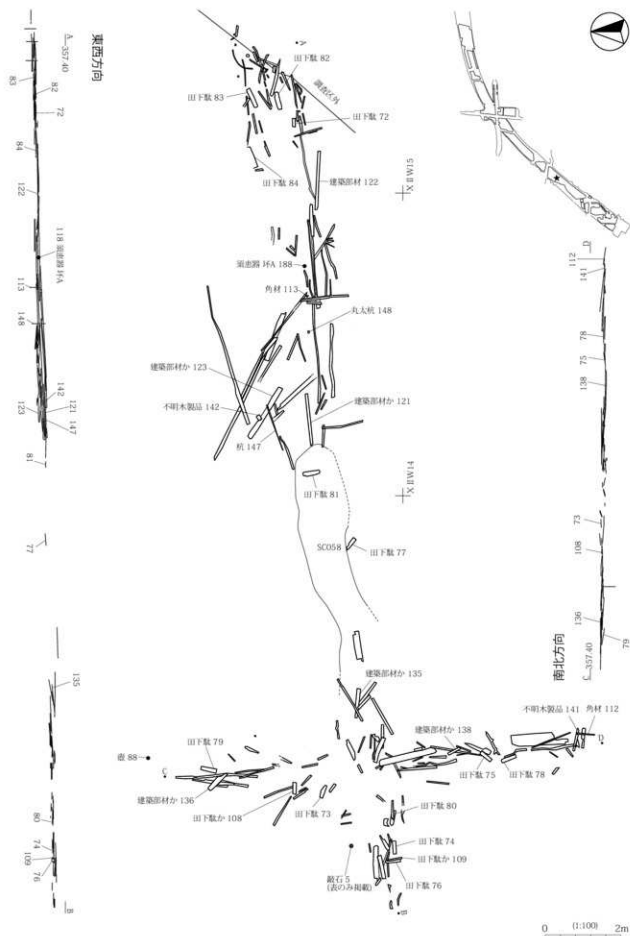
## 12区

SC081



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 砂状。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 粗砂多混。
- 3 褐色土(10YR4/4) 砂質砂。還元。粗砂多混。
- 4 灰色黄褐色土(10YR4/3) 砂状。灰色粘土了り多混。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂状。粗砂多混。
- 6 褐灰色土(10YR4/1) 砂状。還元。
- 7 褐灰色土(10YR4/1) 砂状。還元。
- 8 12a区基本土層8層。
- 9 黑褐色砂。
- 10 12a区基本土層10a層。
- 11 12a区基本土層10b層。
- 12 褐灰色土(10YR4/1) 砂状混砂。了り砂状。
- 13 12a区基本土層11層。

0 (1:40) 1m





△-357.50

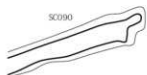


△-357.50

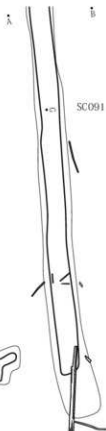
128  
127  
126  
89

91  
119  
92  
93

△



SC090



建築部材 128  
建築部材 127  
建築部材 126  
山下駄 89

X V G 11

SC092

山下駄 90 山下駄 91

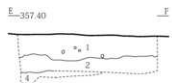
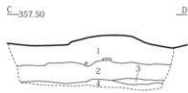
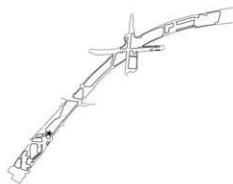
山下駄 92

板材 119 山下駄 93

X V G 16

築地川

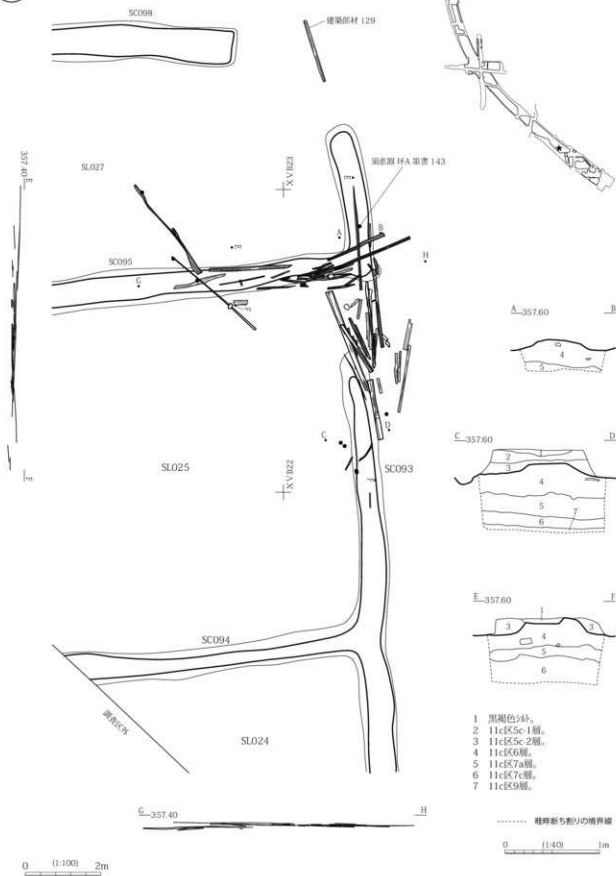
0 (1:100) 2m



- 1 11c区基本土層6層。
- 2 11c区基本土層7a層。
- 3 11c区基本土層7b層。
- 4 11c区基本土層7c層。

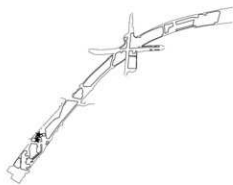
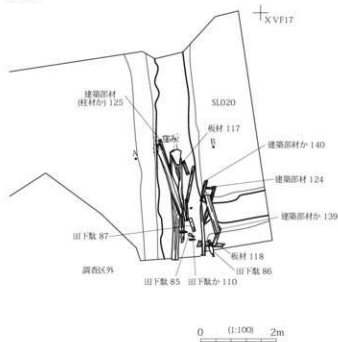
----- 畦畔断ち削りの境界線

0 (1:40) 1m

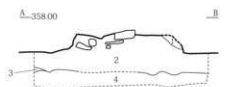
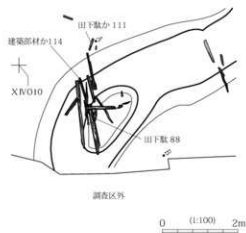




SC081

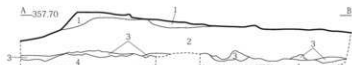


SC086



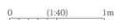
- 1 12a区10層。
- 2 12a区11層。
- 3 12a区12層。
- 4 12a区13層。

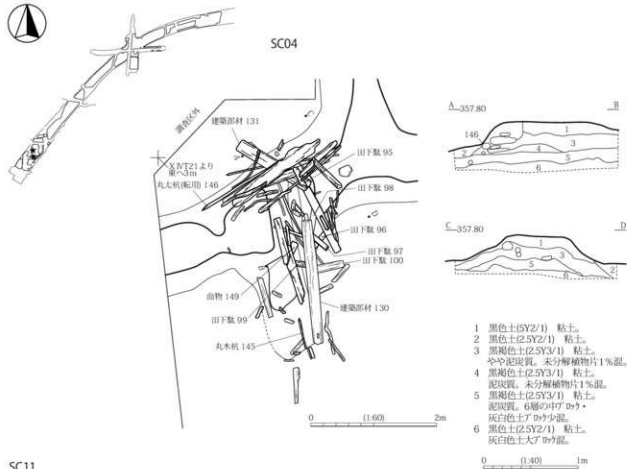
----- 竪断断面の境界線



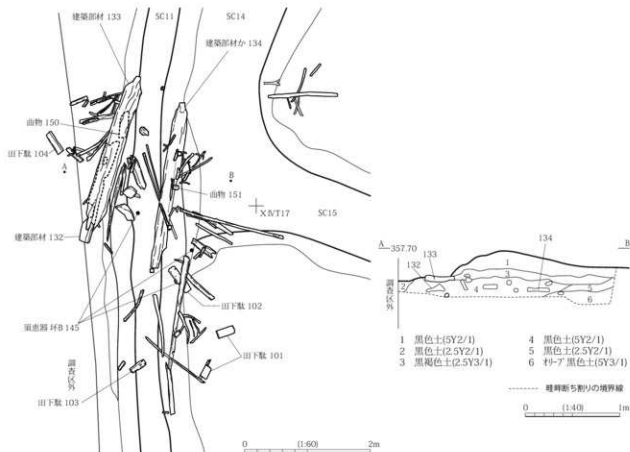
- 1 12a区10層。
- 2 12a区11層。
- 3 12a区12層。
- 4 12a区13層。

----- 竪断断面の境界線



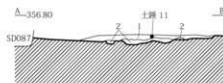
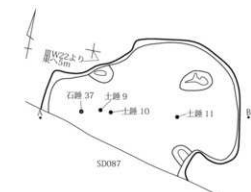


SC11





SK356



- 1 黄灰色土(2.5Y6/1) 5㍉、細砂混。
- 2 褐灰色土(10YR6/1) 細砂質5㍉、還元。

SD012

A-357.00 B



- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質5㍉。

SD014

A-357.20 B



SD028

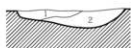
A-357.20 B



- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色土粒少混。

SD032

A-357.20 B



- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色土粒混。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色土粒混、暗褐色土了り少混。

SD046

A-356.80 B



- 1 褐灰色土(10YR5/1) 細砂。

SD048

A-357.00 B



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 5㍉質填壤土。地山土混。

SD064

A-357.40 B



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 砂混。
- 2 褐灰色土(10YR6/1)
- 3 灰黄色土(2.5Y6/2) 5㍉質填壤土。
- 4 褐灰色土(10YR5/1) 還元。

SD066

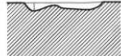
A-357.50 B



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 5㍉質填壤土。
- 2 灰白色土(10YR7/1) 5㍉質填壤土、地山土混。

SD071

A-357.30 B



- 1 褐灰色土(10YR6/1) 黄褐色土混。

SD083

A-357.00 B



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 5㍉質填壤土、褐灰色5㍉7㍉少混。
- 2 黄灰色土(2.5Y5/1) 5㍉質填壤土、灰黄色・黄褐色5㍉7㍉多混。

SD095

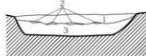
A-356.80 B



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 地山土多混。

SD104

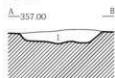
A-357.00 B



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 粘土。
- 2 褐灰色土(10YR5/1) 砂。
- 3 褐灰色土(10YR5/1) 砂質粘土。

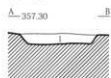
0 (1:40) 1m

SD105



1 褐灰色土(7.5YR5/1)粘土。

SD106



1 褐灰色土(10YR4/1)粘土。に赤・黄褐色粘土B多混。埋め土。

SD107



1 褐灰色土(7.5YR4/1)粘土。

SD108



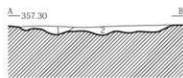
1 褐灰色土(7.5YR4/1)粘土質壤土。灰色粒砂混。還元。  
小粒砂B多混。

SD127



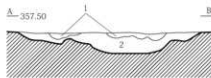
1 黄灰色土(2.5Y4/1)粘土質壤土。灰色粒砂混。還元。  
2 褐灰色土(10YR4/1)褐色細粒砂混。還元。

SD142



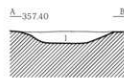
1 褐灰色土(10YR4/1)砂質粘土。黄褐色土・黒褐色土A多混。  
2 褐色土(10YR4/6)粗砂。黄褐色砂多混。灰色砂・黒褐色土B多混。

SD169



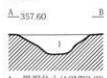
1 粗砂。  
2 黒褐色土 粘土。

SD170



1 黒褐色土(10YR3/2)粘土質壤土。

SD171



1 黒褐色土(10YR3/2)粘土質壤土。

SD172



1 黒褐色土(10YR3/2)粘土質壤土。

SD173



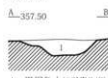
1 黒褐色土(10YR3/2)粘土質壤土。

SD174



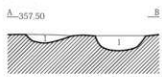
1 黒褐色土(10YR3/2)粘土質壤土。

SD175



1 黒褐色土(10YR3/2)粘土質壤土。

SD176



1 黒褐色土(10YR3/2)粘土質壤土。

SD177

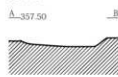


SD178

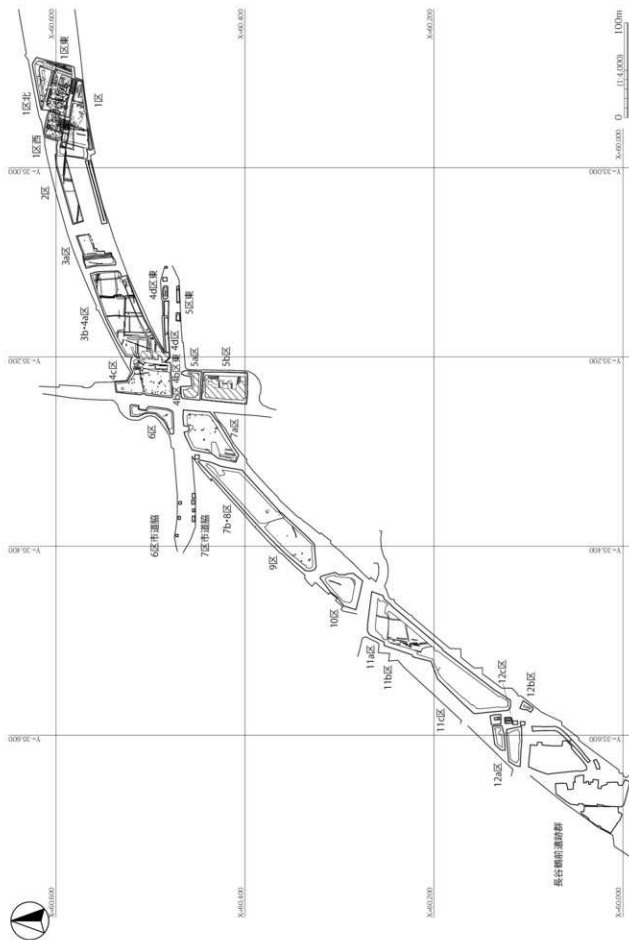


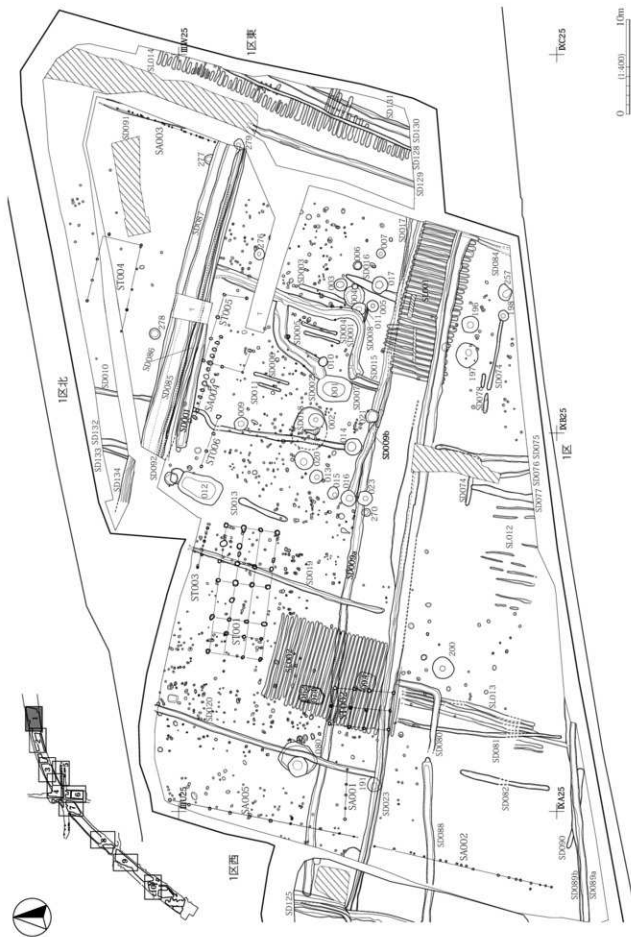
1 黒褐色土(10YR3/2)粘土質壤土。

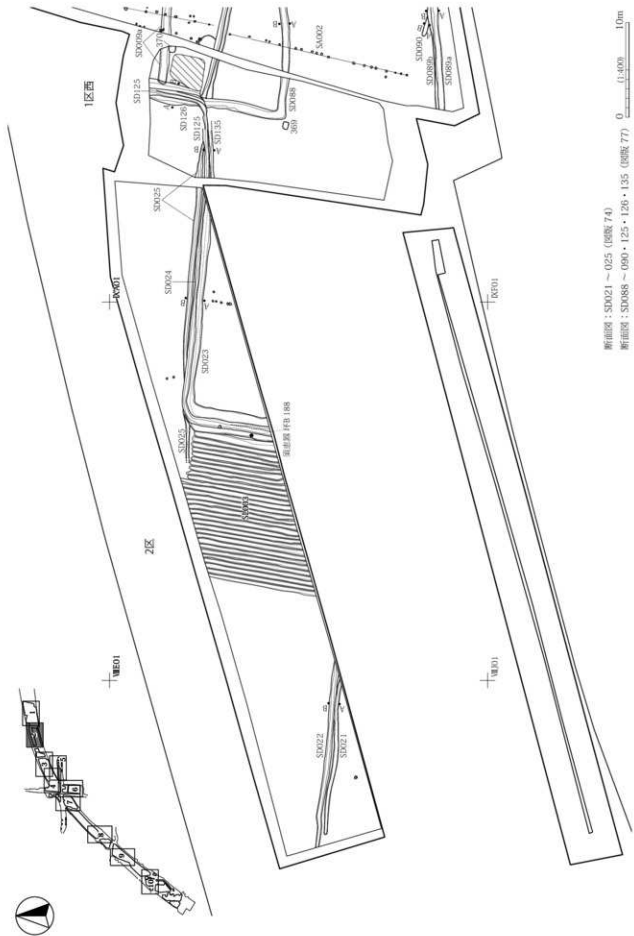
SD179



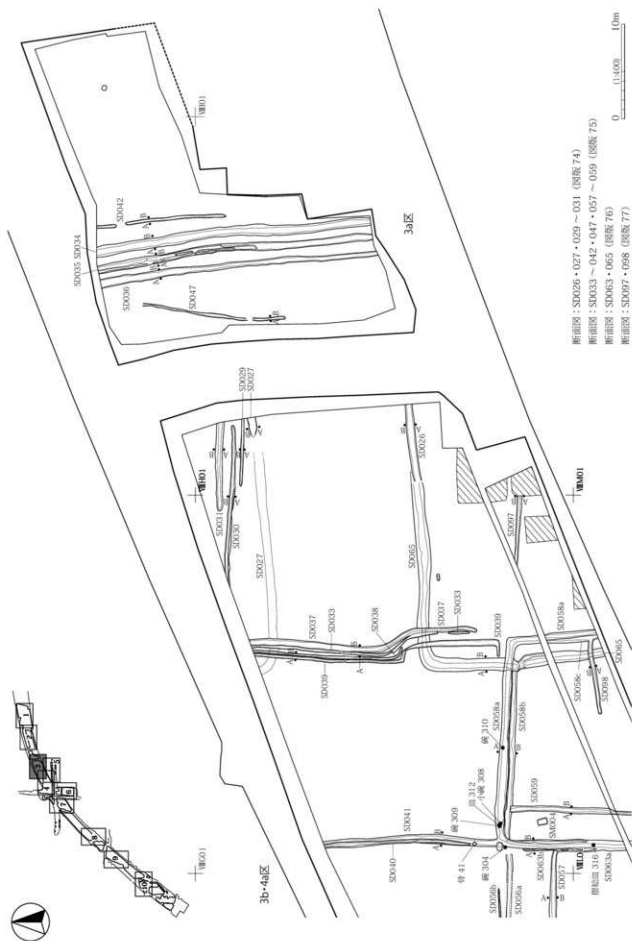
0 (1:40) 3m





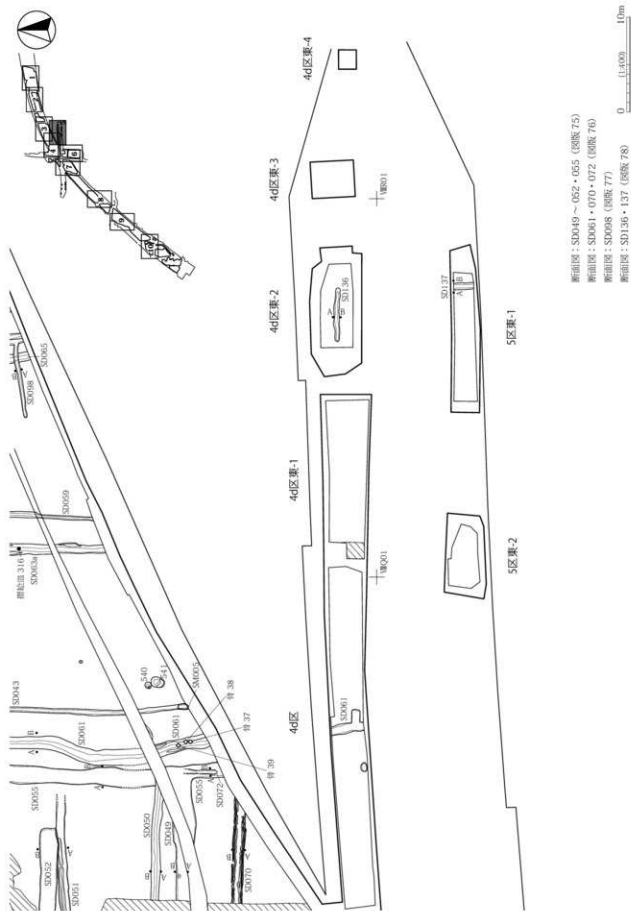


図版 40 中近世の遺構分布図3

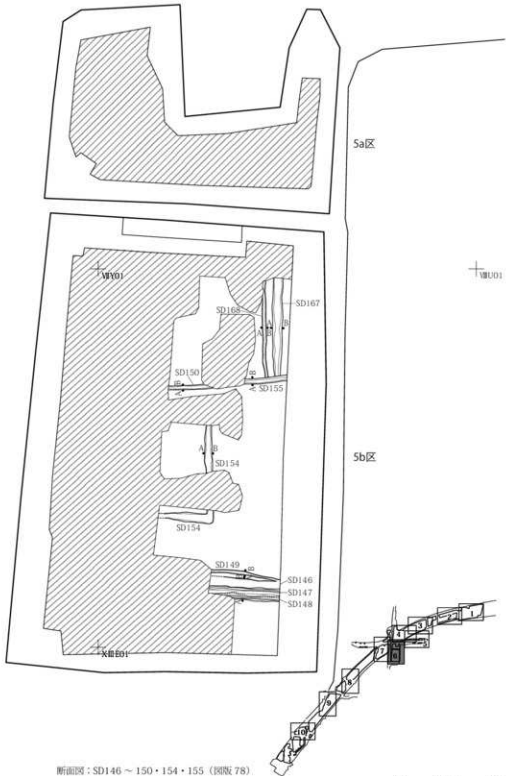
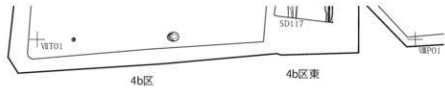




図版 42 中近世の遺構分布図5





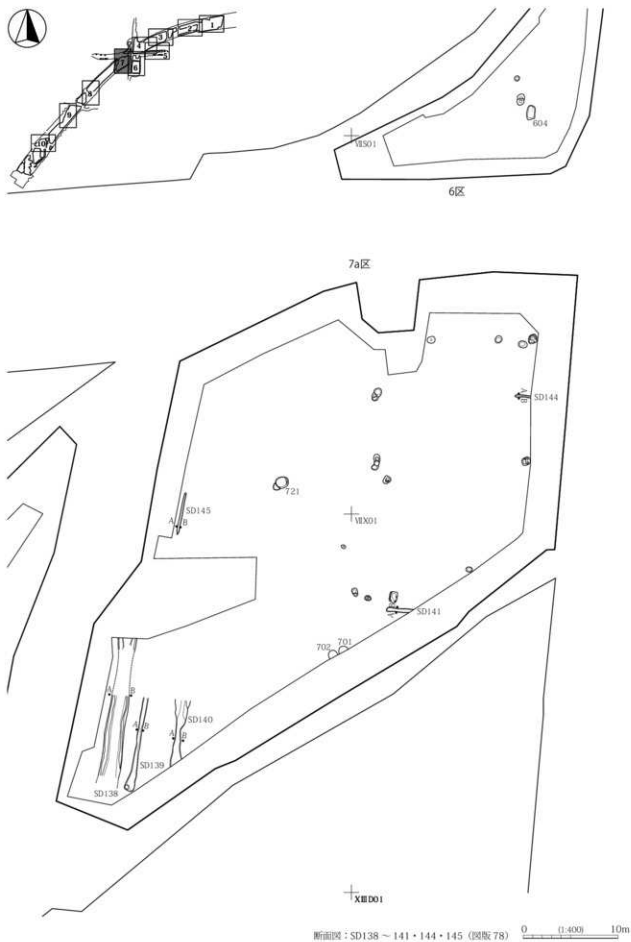


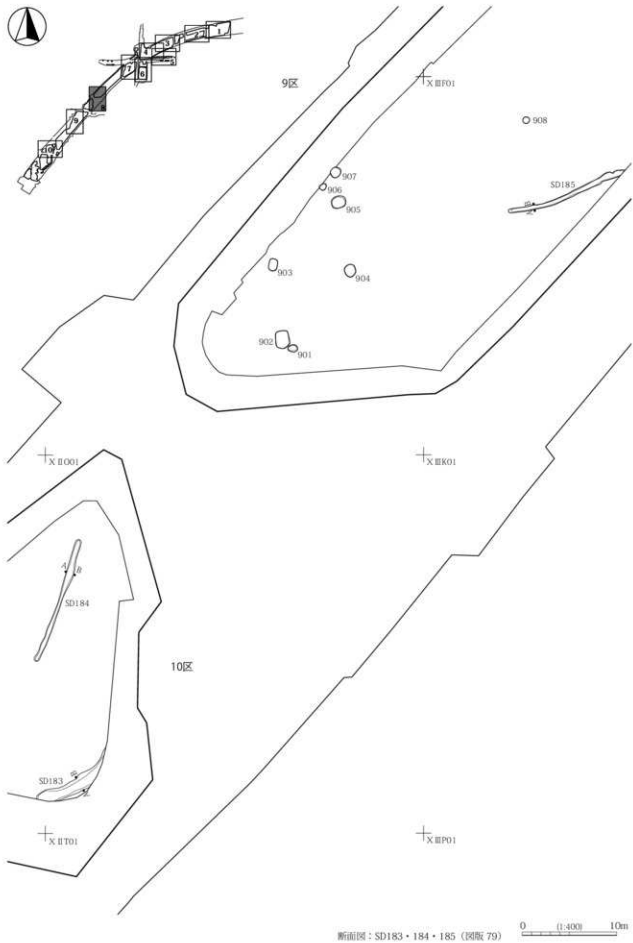
断面図：SD146～150・154・155 (図版 78)

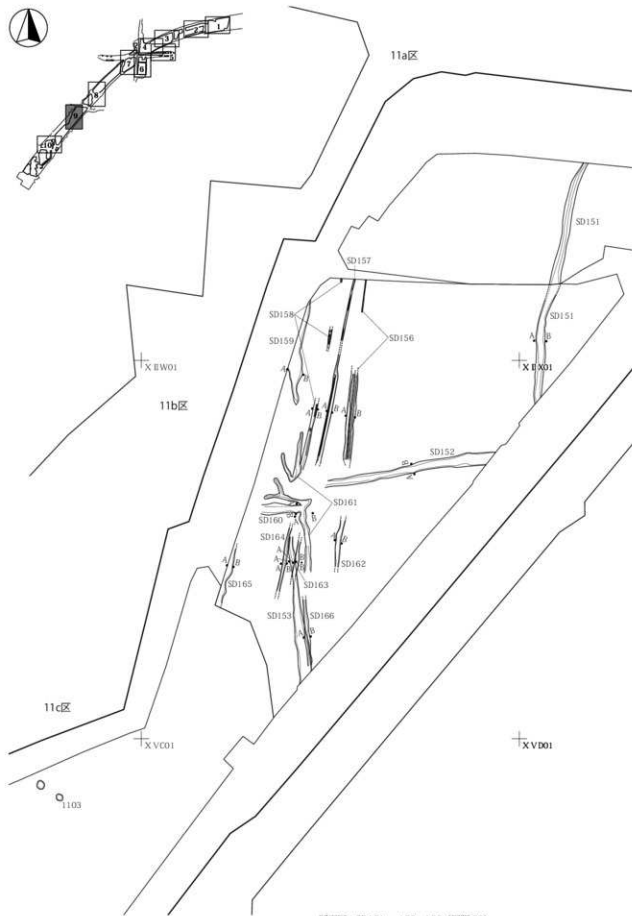
断面図：SD167・168 (図版 79)

0 1:400 10m

図版 44 中近世の遺構分布図 7

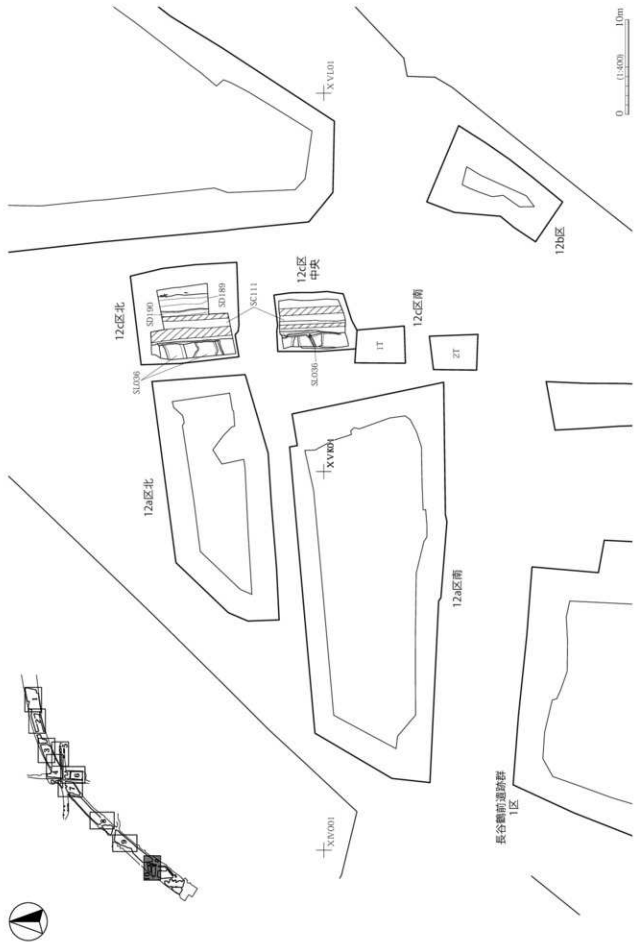




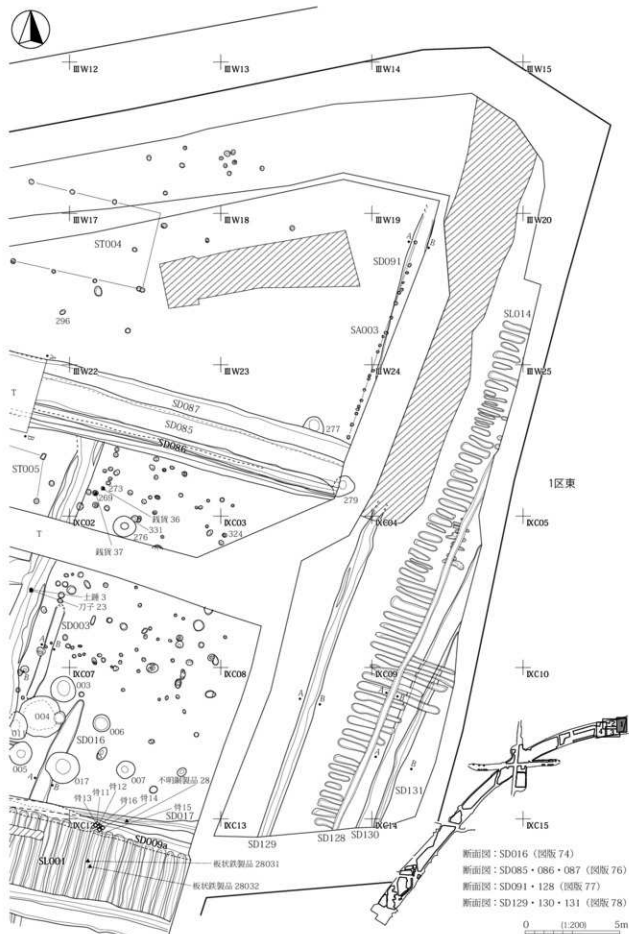


断面図：SD151～153・156（図版78）  
 断面図：SD157～166（図版79）

0 (1:400) 10m



図版 48 1区中近世の遺構分布図 1





図版 50 1区中近世の遺構分布図3

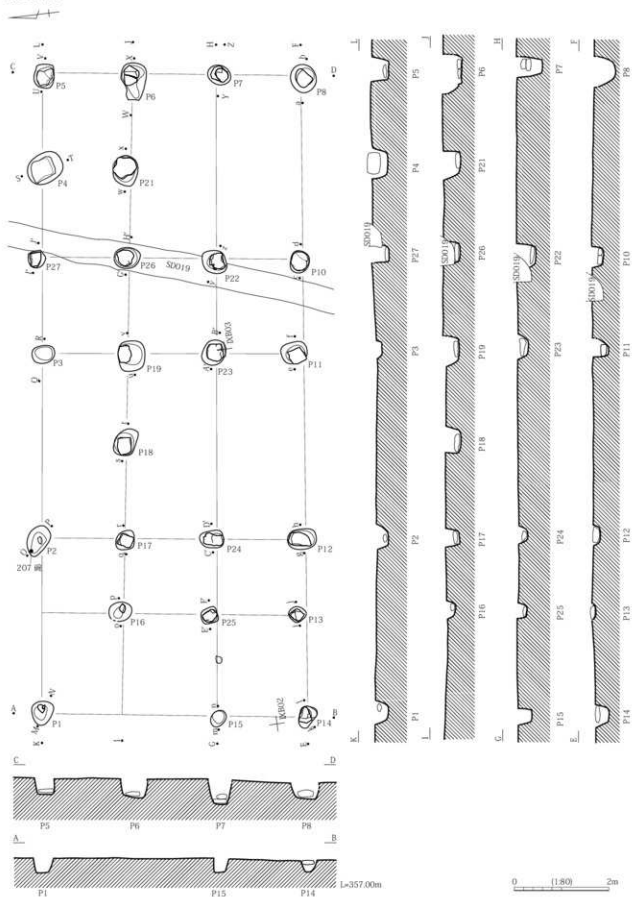


断面図：SD001・003～005・007～009・015～017・019（図版74）  
 断面図：SD074～078（図版76）

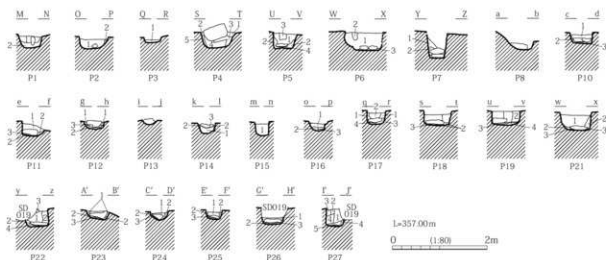




ST001 (1)



ST001 (2)



P1

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 黄褐色土混。中炭片多混。
- 2 褐色土(10YR4/4) 砂。

P2

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 大黄褐色粘質土に砂混。中炭片少混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 砂。

P3

- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 砂。

P4

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 黄褐色土混。大焼土粒・炭粒多混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)
- 3 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘質土。
- 4 褐色土(10YR4/1) 灰白粘質土粒混。焼土粒少混。

P5

- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 中焼土粒少混。大炭粒混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3)
- 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質砂。
- 4 褐色土(10YR4/1)

P6

- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黄褐色土粒混。中焼土粒混。小炭片混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 大炭片多混。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2)

P7

- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黄褐色粘質土混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘質土。

P10

- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 極大黄褐色粘質土粒混。中焼土粒少混。小炭片混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘質土。
- 3 褐色土(10YR4/1)

P11

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色砂質土に砂混。大焼土粒・炭粒多混。
- 2 褐色土(10YR5/1) 粘質土。黄褐色土混。
- 3 褐色土(10YR4/1)

P12

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土・黄褐色砂質土に砂混。大焼土粒・炭多混。
- 2 褐色土(10YR5/1) 粘質土。黄褐色土混。
- 3 褐色土(10YR4/1)

P14

- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/3)
- 2 褐色土(10YR5/1) 黄褐色土混。
- 3 褐色土(10YR4/1)

P15

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質砂。黄褐色砂質土に砂混。大焼土粒・炭多混。

P16

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土・黄褐色砂質土に砂混。大焼土粒・炭多混。
- 2 褐色土(10YR5/1) 粘質土。黄褐色土混。
- 3 褐色土(10YR4/1)

P17

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土・黄褐色砂質土に砂混。大焼土粒・炭多混。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 炭片多混。
- 3 褐色土(10YR5/1) 粘質土。黄褐色土混。
- 4 褐色土(10YR4/1)

P18

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 中焼土粒少混。
- 2 黄褐色土(10YR5/6) 粘質土。
- 3 褐色土(10YR4/1)

P19

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 小明黄褐色土に砂多混。大炭片混。黄褐色土粒少混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土粒少混。
- 3 褐色土(10YR4/1)
- 4 黄褐色土(10YR5/6)

P21

- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 中焼土粒・中黄褐色土少混。小炭片混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘質土。
- 3 褐色土(10YR4/1)

P22

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 大焼土粒・炭少混。褐色土・黄褐色土に砂混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質砂。
- 3 明黄褐色土(10YR6/6) 砂。
- 4 褐色土(10YR4/1)

P23

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)
- 2 明黄褐色土(10YR6/6)
- 3 褐色土(10YR5/1)

P24

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土・黄褐色砂質土に砂混。大焼土粒・炭多混。
- 2 褐色土(10YR5/1) 粘質土。黄褐色土混。
- 3 褐色土(10YR4/1) 炭片少混。

P25

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土・黄褐色砂質土に砂混。大焼土粒・炭多混。
- 2 褐色土(10YR5/1) 粘質土。粘性強。黄褐色土混。
- 3 褐色土(10YR4/1)

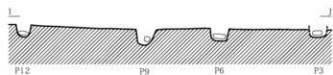
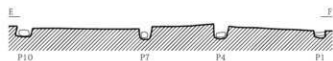
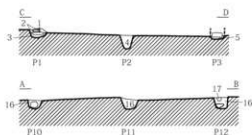
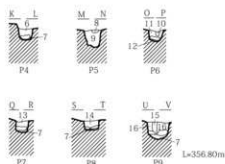
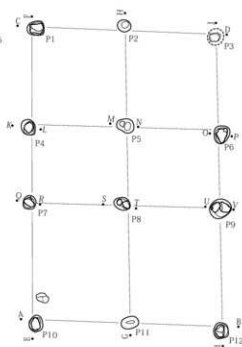
P26

- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 中焼土粒少混。小炭片混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂質。焼土粒・炭多混。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘質土。

P27

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 褐色粘質土に砂多混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂質。焼土粒・炭粒少混。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) 黄褐色土少混。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 砂。
- 5 褐色土(10YR4/1)

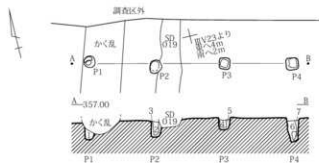
ST002



- 1 暗褐色土(10YR3/3) ㉔, 焼土混, 炭化物多混, 柱痕。
- 2 記載なし
- 3 黒褐色土(10YR3/2) ㉔, 灰黄褐色土㉔7㉔7混。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) ㉔。
- 5 暗褐色土(10YR3/3) ㉔。
- 6 黒褐色土(10YR3/2) 黄褐色土多混, 炭粒少混。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2) ㉔, 褐色砂7㉔7混。
- 8 黒褐色土(10YR3/1) 黄褐色土混, 炭少混。
- 9 記載なし, 黄褐色土(10YR4/3)
- 10 黒褐色土(10YR3/2) 大炭7㉔7・褐色焼土粒混。
- 11 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土多混。
- 12 灰黄褐色土(10YR4/2)
- 13 黒褐色土(10YR3/2) 黄褐色土多混, 微細炭少混。
- 14 黒褐色土(10YR3/1) 黄褐色土多混, 炭粒少混。
- 15 黒褐色土(10YR3/1) 炭片・褐色焼土多混。
- 16 記載なし, 黄褐色土(10YR4/3) 黄褐色土多混。
- 17 黒褐色土(10YR3/2) 褐色・白色焼土多混。

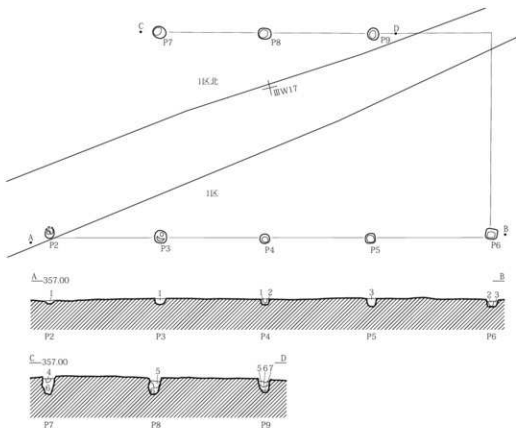
0 180 2m

ST003



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 黄褐色土アD7混。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒少混。
- 3 にぶい・黄褐色土(10YR5/3) 黄褐色土アD7混。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭粒多混。
- 5 にぶい・黄褐色土(10YR4/3) 炭粒少混、黄褐色土混。
- 6 記載なし
- 7 黒褐色土(10YR3/1) 黄褐色土アD7混。

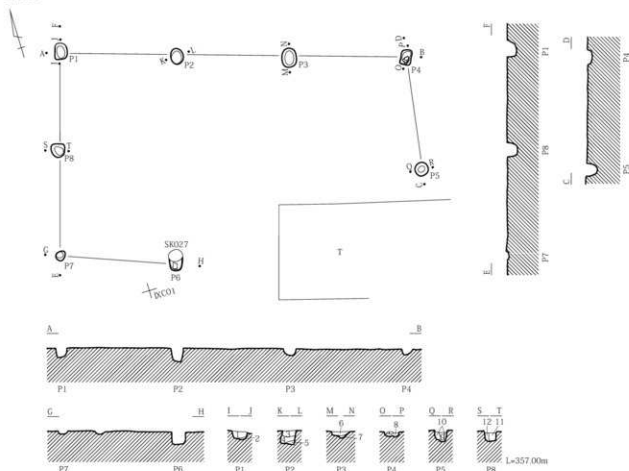
ST004



- 1 にぶい・黄褐色土(10YR4/3) 赤質堆積土。小褐灰色・黒褐色少粘土D7混。
- 2 にぶい・黄褐色土(10YR4/3) 赤質堆積土。小褐灰色・黒褐色少粘土D7多混。
- 3 にぶい・黄褐色土(10YR4/3) 赤質堆積土。大褐灰色・黒褐色少粘土D7混。
- 4 にぶい・黄褐色土(10YR4/3) 赤。灰色・黒褐色少粘土D7混。
- 5 褐灰色土(10YR4/1) 灰色・褐色・黒褐色少粘土D7混。
- 6 黒褐色土(10YR3/2) 褐色・黒褐色少粘土D7混。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色・黒褐色少粘土D7混。

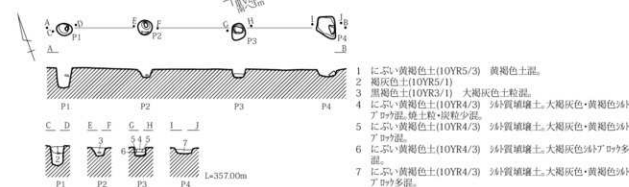
0 1:80 2m

ST005



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。大褐色・黄褐色が多少混。
- 2 褐色土(10YR6/1) 砂質壤土。大褐色が多少混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。小褐色が多少混。
- 4 灰黄褐色土(10YR5/2) 大褐色・黄褐色が多少混。
- 5 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂質壤土。褐色が多少混。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。褐色・黄褐色が多少混。
- 7 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂質壤土。大褐色が多少混。
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。大褐色・黄褐色が多少混。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。粘性あり、しまり弱。大褐色・黒褐色が多少混。
- 10 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。粘性あり、かたくなる。大褐色・黄褐色が多少混。
- 11 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。中褐色・黒褐色が多少混。
- 12 黄褐色土(10YR5/2) 砂質壤土。大褐色が多少混。

ST006



- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 黄褐色土記。
- 2 褐色土(10YR5/1)
- 3 黒褐色土(10YR3/1) 大褐色土粒混。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質壤土。大褐色・黄褐色が多少混。粘土粒・炭粒少量。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質壤土。大褐色・黄褐色が多少混。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質壤土。大褐色が多少混。
- 7 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質壤土。大褐色・黄褐色が多少混。

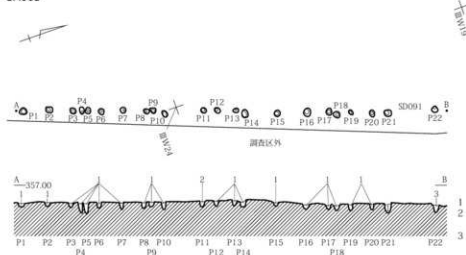
0 (1:80) 2m

## SA001



- 1 にぶい・黄褐色土(10YR5/3) 灰黄褐色粘質土。
- 2 にぶい・黄褐色土(10YR5/3) 黄褐色砂質土多泥。

## SA003



A10

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

3

2

1

調査区外

A

B

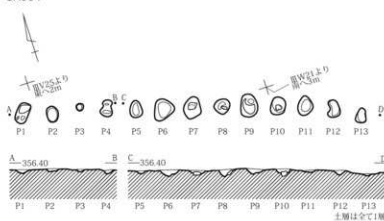
3

2

1

調査区外

## SA004



- 1 灰白色土(10YR7/1) 細砂。褐灰色粘質土の多泥。  
土層は全て1層

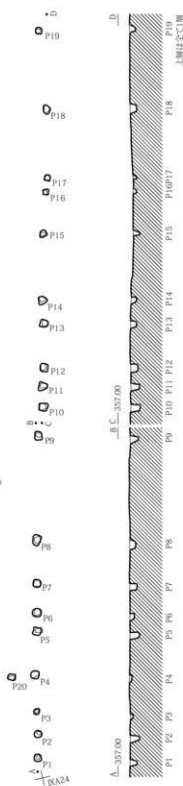
0 (1:80) 2m

SA002



+KA14

+KA19



1 暗褐色土(10YR3/3) 砂質土。炭化物較少量。  
土層は5cm

SA005



+KA25  
P11

P10  
P9  
P8  
P7 +KA05

P6

P5

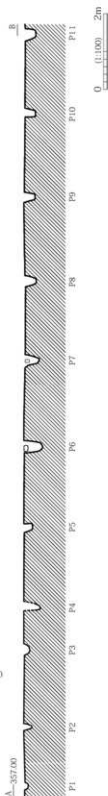
P4

P3

P2

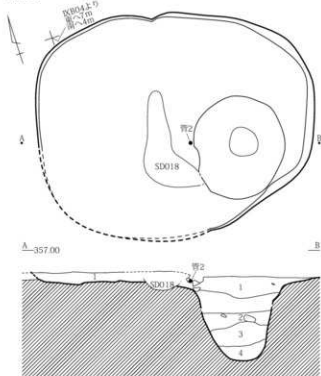
P1

+KA10



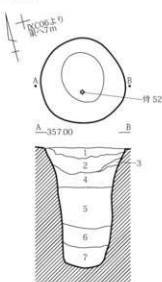


SK002



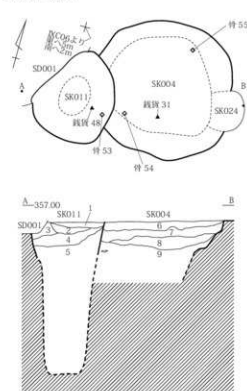
- 1 にふい・黄褐色土(10YR5/3) 少砂。黄褐色土・小児頭～拳大門礫混。炭少混。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 大灰黄褐色土がD+多混。大にふい・黄褐色土がD+多。炭粒少混。埋め土。
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 粘質壤土。大にふい・黄褐色土がD+多混。還元。埋め土。
- 4 灰色土(5Y4/1) 粘質壤土。大にふい・黄褐色土がD+多混。還元。埋め土。

SK003



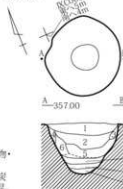
- 1 にふい・黄褐色土(10YR4/3) 褐色土粒・礫混。
- 2 にふい・黄褐色土(10YR4/3) 炭化物・大灰黄褐色土がD+多混。褐色土粒混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。小灰黄褐色土がD+少混。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物微混。褐色土粒・中灰黄褐色土がD+多混。
- 5 灰色土(5Y6/1) 粘質壤土。大褐色土・にふい・黄褐色土がD+多混。
- 6 灰色土(10Y5/1) 粘質壤土。
- 7 暗緑灰色土(10G3/1) 砂質壤土。未分解植物片・砂混。

SK004-SK011



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物・褐色土粒微混。褐色土粒混。
- 2 にふい・黄褐色土(10YR4/3) 炭化物・褐色土粒微混。褐色土粒混。
- 3 にふい・黄褐色土(10YR4/3) 褐色土粒・小皿層了D+多混。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物・褐色土粒・小皿層了D+多混。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物・褐色土粒微混。褐色土粒・小褐色土がD+少混。
- 6 にふい・黄褐色土(10YR4/3) 炭化物少混。褐色土粒混。極小褐色土がD+多混。
- 7 にふい・黄褐色土(10YR4/3) 炭化物少混。褐色土粒多混。極小褐色土がD+多混。
- 8 褐色土(10YR4/4) 小皿層了D+少混。褐色土粒・小褐色土がD+多混。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物微混。褐色土粒混。

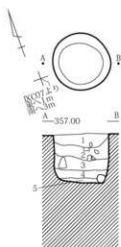
SK005



- 1 にふい・黄褐色土(10YR4/3) 炭化物少混。褐色土粒混。褐色土粒混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。炭化物微混。小皿層了D+小皿層了D+少混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。極小皿層了D+少混。極小皿層了D+多混。
- 4 にふい・黄褐色土(10YR4/3) 褐色土粒・小皿層了D+多混。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。小皿層了D+少混。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。極小皿層了D+多混。
- 7 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質壤土。大にふい・黄褐色土がD+多混。
- 8 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質壤土。大にふい・黄褐色土がD+多混。
- 9 灰黄色土(2.5Y6/2) 粘質壤土。大にふい・黄褐色土がD+多混。

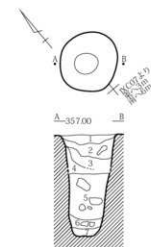
0 1:60 1m

SK006



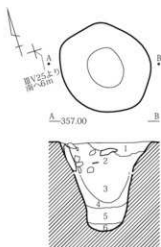
- 1 にふい、黄褐色土(10YR4/3) 炭化物微混、褐色土粒・礫混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物微混、褐色土粒混。礫多混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 中IV層?の?少量。礫混。
- 4 灰?7色土(5Y5/2) 粘質壤土。大緑灰色粘土・青灰色粘土?の?多混。
- 5 黄灰色土(2.5Y5/1) 砂質壤土。砂多混。還元。

SK007



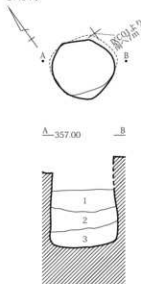
- 1 にふい、黄褐色土(10YR4/3) 炭化物微混、褐色土粒混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物・焼土粒・極小にふい、黄褐色土層?の?微混。褐色土粒混。
- 3 にふい、黄褐色土(10YR4/3) 炭化物微混、褐色土粒混。小にふい、黄褐色土?の?少量混。
- 4 にふい、黄褐色土(10YR4/3) 褐色土粒・小にふい、黄褐色土層?の?多混。
- 5-7 記載なし。

SK009



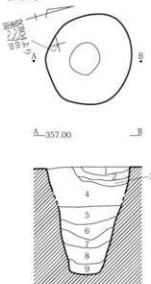
- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質?粘。炭化物少量混。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 砂質?粘。小にふい、黄褐色土?の?人混?微混。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。小にふい、黄褐色土?にふい、黄褐色土?粘質壤土?の?多混。
- 4 褐灰色(10YR6/1) 粘質壤土。大にふい、黄褐色・黒褐色?粘?の?多混。
- 5 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質壤土。小にふい、黄褐色土?粘?の?多混。
- 6 灰色土(10Y5/1) 粘質壤土。砂混。

SK010



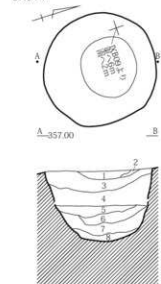
- 1 褐灰色土(10YR6/1) ?粘質壤土。大にふい、黄褐色?粘?の?多混。
- 2 灰色土(5Y6/1) 粘質壤土。
- 3 粘質壤土。粘土主体。還元。

SK013



- 1 褐灰色土(10YR5/1) 粘質壤土。
- 2 明褐色土(7.5YR5/6) 粘質壤土。大にふい、黄褐色?粘?の?少量混。
- 3 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘質壤土。大にふい、黄褐色?粘?の?多混。
- 4 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にふい、黄褐色?粘?の?多混。
- 5 黄灰色土(2.5Y6/1) ?粘質壤土。小灰白色?粘?の?多混。
- 6 黄灰色土(2.5Y5/1) ?粘質壤土。大灰黄褐色?粘?の?多混。
- 7 浅黄灰色土(2.5Y6/1) ?粘質壤土。大にふい、黄褐色?粘?の?多混。
- 8 青灰色土(10BG6/1) 緑灰色粘質壤土。大緑灰色?粘?の?多混。
- 9 暗青灰色土(10BG4/1) 粘質壤土。

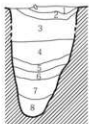
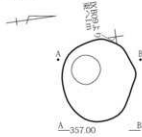
SK014



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘質壤土。小にふい、黄褐色?粘?の?少量混。
- 2 灰黄褐色土(10YR6/2) 炭化物多混。
- 3 褐灰色土(10YR6/1) 粘質壤土。大にふい、黄褐色粘土・にふい、黄褐色?粘?の?多混。
- 4 褐灰色土(10YR5/1) 壤土。大にふい、黄褐色・にふい、黄褐色?粘?の?多混。
- 5 黄灰色土(2.5Y6/1) ?粘質壤土。小にふい、黄褐色?粘?の?少量混。
- 6 暗黄褐色土(2.5Y5/2) ?粘質壤土。大黒褐色?粘?の?多混。
- 7 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘質壤土。大青灰色粘土?粘?の?多混。黒褐色?粘?混。大にふい、黄褐色?粘?の?炭粒少量混。還元。
- 8 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質壤土。大にふい、黄褐色?粘?の?多混。

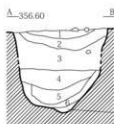
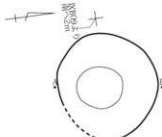
0 1.00 1m

SK015



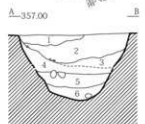
- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘質壤土。
- 2 明褐色土(7.5YR5/6) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。
- 4 褐色土(10YR6/1) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。
- 5 灰色土(10Y5/1) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。
- 6 褐色土(10YR5/1) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。
- 7 灰色土(5Y6/1) 粘質壤土。
- 8 暗青灰色土(10BG4/1)

SK016



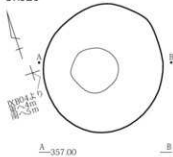
- 1 黒褐色土(10YR3/2) 3粘土。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3粘土。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) 3粘土。褐色土(10YR4/3) 粘質土か。
- 4 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質壤土。大灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。
- 5 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘質壤土。大灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。
- 6 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。
- 7 黒褐色土(2.5Y3/2) 粘質壤土。

SK017



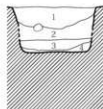
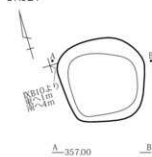
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物微混。褐色土粒混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物微混。褐色土粒・小褐色土(10YR4/2) 粘質土粒混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。小灰白色土(10YR4/2) 粘質土粒混。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 褐色土粒多混。炭化物・極小褐色土(10YR4/3) 粘質土粒混。
- 5 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質壤土。大灰黄褐色土(10YR5/1) 粘質土。
- 6 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質壤土。大灰黄褐色土(10YR5/1) 粘質土。

SK020



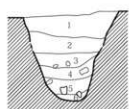
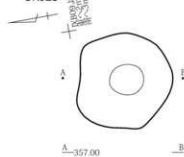
- 1 褐色土(10YR5/1) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。
- 2 明褐色土(7.5YR5/6) 粘質壤土。大褐色土(10YR5/1) 粘質土。
- 3 褐色土(10YR5/1) 粘質壤土。大褐色土(10YR5/1) 粘質土。
- 4 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。埋め土。
- 5 灰色土(10Y5/1) 粘質土。細砂混。
- 6 灰色土(5Y6/1) 粘質土。粘質土。
- 7 灰色土(10Y5/1) 粘質土。砂混。

SK021



- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。小灰黄褐色粘質壤土(10YR4/2) 粘質土。
- 2 褐色土(10YR4/1) 粘質壤土。にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質壤土。大灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。埋め土。
- 4 褐色土(10YR5/1) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。埋め土。

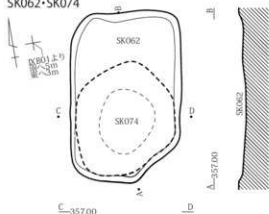
SK023



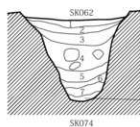
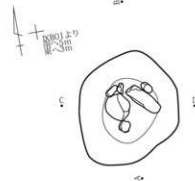
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性强。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。灰黄褐色土(10YR5/1) 粘質土。
- 4 褐色土(10YR5/1) 粘質壤土。大にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。
- 5 褐色土(10YR5/1) 粘質壤土。大青灰色土(10YR5/1) 粘質土。にぶい黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。
- 6 緑灰色土(10CG6/1) 粘質土。

0 (1.00) 1m

SK062・SK074

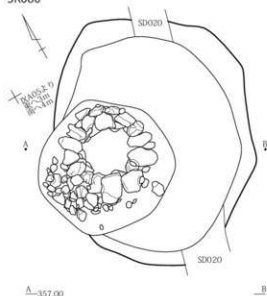


SK074掘出土状況

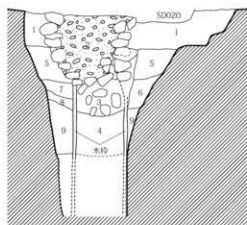


- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 砂。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土質。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質砂。大礫・大褐色・黄褐色砂が多少混。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘質砂。大褐色砂・黄褐色砂が多少混。
- 6 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘質堆積土。大黄褐色砂混。
- 7 黄褐色土(2.5Y5/3) 大黄褐色砂・緑灰色粘土が多少混。
- 8 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘質堆積土。

SK080



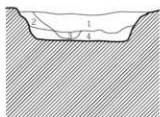
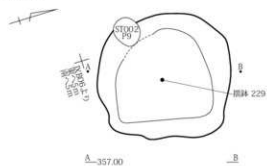
A-357.00



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。アコが構成。埋め土。
- 2 角礫。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質堆積土。大礫混。
- 4 暗青灰色土(5BG4/1) 粘質堆積土。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質堆積土。大礫・ア灰色粘土・にぶい黄褐色粘土が多少混。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR7/4) 粘質堆積土。大暗灰色粘土が多少混。
- 7 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘質堆積土。灰白色・灰色粘土が多少混。
- 8 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質堆積土。大にぶい黄褐色砂が多少混。
- 9 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質堆積土。礫多混。埋め土。

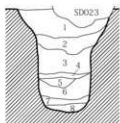
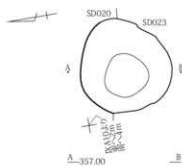
0 1.00 1m

SK094



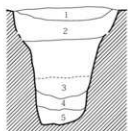
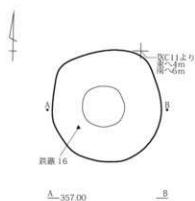
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。大粒土粒・炭化物多混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。暗灰黄色砂が多少混。
- 3 黒褐色土 粘土質砂。
- 4 灰黄褐色土 粘土質砂。

SK191



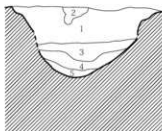
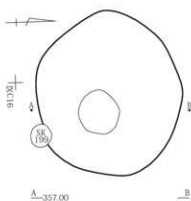
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質。大にぶい黄褐色砂が多少青灰色粘土が多少混。
- 2 褐灰色土(10YR5/1) 粘質壤土。大炭化物混。大にぶい黄褐色砂が多少混。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘質壤土。大にぶい黄褐色砂が多少混。
- 4 灰白色土(10YR7/1) 炭化物層。泥炭質。
- 5 灰色土(7.5Y5/1) 粘質壤土。大炭化物少量。
- 6 灰色土(7.5Y6/1) 粘質壤土。大粒灰色砂が多少混。
- 7 灰色土(7.5Y4/1) 粘質壤土少量。砂・砂礫。
- 8 砂-黒色土(7.5Y3/1) 粘質壤土。未分解植物片混。

SK196



- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂質。黄褐色土少量混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 鉄分少量混。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/3)
- 4 灰色土(7.5Y6/1)
- 5 暗青灰色土(5BG4/1)

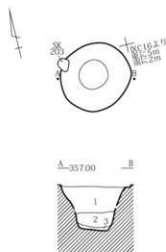
SK197



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色土少量混。
- 2 灰黄褐色土(10YR6/2) 砂質土。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質壤土。砂混。大灰黄褐色砂が多少混。
- 4 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘質壤土。細砂少量混。
- 5 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質土。大にぶい黄褐色砂が多少混。

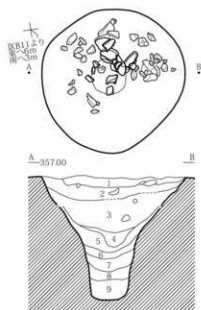
0 1:600 1m

SK198



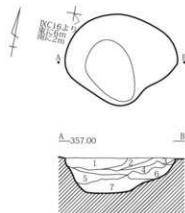
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)
- 2 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質礫壤土。大にふい・黄褐色少砂ア多混。
- 3 砂ア灰色土(2.5GY6/1) 粘質礫壤土。にふい・黄褐色少粘質に混。

SK200



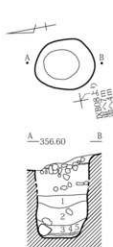
- 1 暗灰黄褐色土(2.5Y5/2) 粘質礫壤土。大黒褐色少砂ア多混。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質礫壤土。大褐灰色・黒褐色少砂ア多混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質礫壤土。大褐灰色・黄褐色少砂ア多混。
- 4 灰色土(N5/1) 粘土。大灰白色少砂ア多混。
- 5 にふい・黄褐色土(10YR7/2) 粘土。
- 6 黄灰色土(2.5Y4/1)と粘土礫状に混。
- 7 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。
- 8 灰色(N4)粘土と砂ア 灰色(2.5GY5/1)粘質礫状に混。
- 9 暗砂ア灰色土(5GY4/1) 粘質礫壤土。還元。

SK257



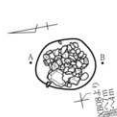
- 1 にふい・黄褐色土(10YR5/4)
- 2 灰黄褐色土(10YR6/2) 灰白色粘質土多混。黄褐色土混。灰片少混。
- 3 にふい・黄褐色土(10YR6/3) 黄褐色土・浅黄褐色土混。
- 4 明黄褐色土(10YR6/6) 明黄褐色土・棕色土ア多混。
- 5 にふい・黄褐色土(10YR6/3)
- 6 にふい・黄褐色土(10YR7/2)
- 7 にふい・黄褐色土(10YR6/3) 灰色粘質土ア多混。

SK270



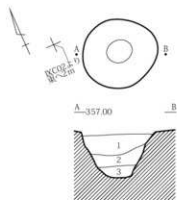
- 1 褐色土(10YR5/1) 粘質礫壤土。大灰黄褐色少砂ア多混。褐色粘土ア多混。
- 2 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘質礫壤土。大灰黄褐色少砂ア多混。灰色粘土ア多混。
- 3 暗緑灰色土(5G4/1) 粘質礫壤土。大にふい・黄褐色少砂ア多混。
- 4 にふい・黄色土(2.5Y6/3) 砂。
- 5 暗緑灰色土(5G4/1) 粘質礫壤土。大にふい・黄褐色少砂ア多混。

SK270上層礫出土状況



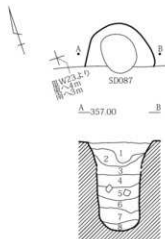
0 (1:60) 1m

SK276



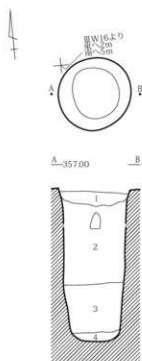
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質壤土。
- 2 大黒褐色・黄褐色(4.7 D)多泥。
- 3 砂・黄褐色土(2.5Y4/3) 粘質。

SK277



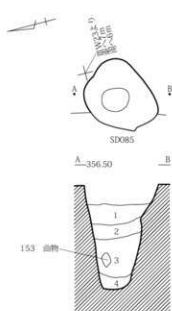
- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大黒褐色・褐色・黄褐色(4.7 D)多泥。
- 2 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘質壤土。
- 3 にろい黄褐色土(10YR4/3) 粘質壤土。大黒褐色・褐色(4.7 D)多泥。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質壤土。
- 5 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質壤土。
- 6 青灰色土(10BG5/1) 粘土。
- 7 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質壤土。
- 8 青灰色土(10BG5/1) 粘質(粘)。砂多混。

SK278



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質壤土。
- 2 小黒褐色(4.7 D)多泥。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 粘質壤土。大粘質。
- 4 灰色土(7.5Y4/1) 粘質壤土。砂混。大礫多混。礫元。

SK279



- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質壤土。大褐色・にろい黄褐色(4.7 D)多泥。
- 2 灰色土(5Y5/1) 粘質壤土。大褐色・灰黄褐色(4.7 D)多泥。
- 3 暗青灰色土(10BG4/1) 粘質壤土。未分解植物片混。
- 4 緑灰色土(5G5/1) 細砂質壤土。細砂多混。

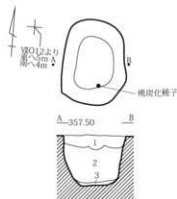
0 1:60 1m

SK507



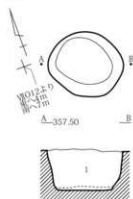
- 1 褐灰色土(10YR5/1) 砂質砂岩。黄褐色砂質土と多少混。
- 2 褐灰色土(10YR5/1) 粘質土。黄褐色・灰黄褐色粘質土と多少混。埋め土。

SK508



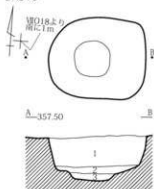
- 1 褐灰色土(10YR6/1) 砂質堆積土。大明褐色砂・褐色砂質堆積土・褐灰色堆積土と多少混。
- 2 褐灰色土(10YR6/1) 砂質堆積土。大明褐色砂・褐色砂質堆積土・褐灰色堆積土と多少混。
- 3 黒色土(2.5Y3/1) 粘土。大明褐色粘土と多少混。

SK509



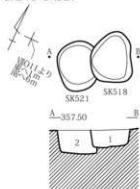
- 1 褐灰色土(10YR6/1) 砂質堆積土。大明褐色堆積土・にぶ・黄色砂質堆積土・明褐色砂と多少混。

SK510



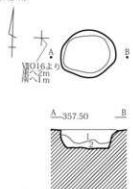
- 1 褐灰色土(10YR5/1) 粘質堆積土。大明褐色砂・褐色砂と多少混。
- 2 灰黄色土(2.5Y6/2) 粘土。大明褐色砂質堆積土・黒色堆積土と多少混。
- 3 黒色土(2.5Y2/1) 粘土。大明褐色粘土と多少混。

SK518・SK521



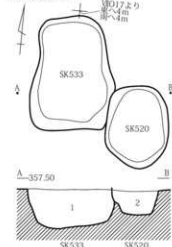
- 1 褐灰色土(10YR5/1) 砂質土。黄褐色土混。
- 2 褐灰色土(10YR5/1) 明黄褐色土と多少混。

SK519



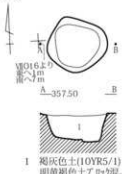
- 1 褐灰色土(10YR5/1) 黄褐色土。褐灰色粘質土少混。
- 2 褐灰色土(10YR5/1) 黄褐色土少混。

SK520・SK533



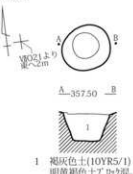
- 1 褐灰色土(10YR5/1) 黄褐色土と多少混。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂質。黄褐色土と多少混。

SK522



- 1 褐灰色土(10YR5/1) 明黄褐色土と多少混。

SK523



- 1 褐灰色土(10YR5/1) 明黄褐色土と多少混。

0 (1:60) 1m

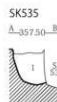
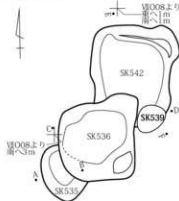


SK525

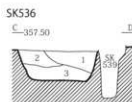


- 1 褐灰色土(10YR4/1) 明黄褐色土了り多混。
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 粘質土。
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 黄褐色土混。

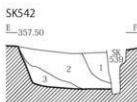
SK535・SK536・SK542



- 1 褐灰色土(10YR5/1) 粘質土。黄褐色土了り多混。



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 砂質少砂。黄褐色土混。大暗褐色土了り少混。
- 2 にぶい黄褐色(10YR6/4) 灰白粘質土了り多混。
- 3 褐灰色土(10YR6/1) 粘質土。黄褐色土了り多混。



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 黄褐色土混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 褐灰粘質土混。
- 3 褐灰色土(10YR5/1) 粘質土。明黄褐色土了り多混。

SK538



- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/3)
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 少砂。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 褐灰色粘土了り大暗褐色土了り明黄褐色土了り多混。

SK540



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 少粘質堆積土。黄褐色少粘質堆積土了り多混。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/1) 粘質土。大明黄褐色了り多混。黒褐色堆積土了り多混。
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 粘土。

SK541



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 少粘質堆積土。大明黄褐色少粘質堆積土・灰白色軽壤土了り多混。
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 粘土。大灰白色・明黄褐色堆積土了り多混。
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 少粘質堆積土。大明黄褐色堆積土・灰白色軽壤土了り多混。

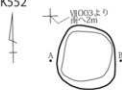
SK548



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘質土。黄褐色土了り多混。

0 1:60 1m

SK552

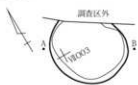


△-357.50 B



1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 34t。  
大枠-ア 褐色土ア 少混。

SK553



△-357.50 B



1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 34t。  
大枠-ア 褐色土ア 少混。

SK554

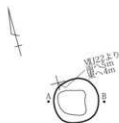


△-357.50 B



1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 34t。  
大枠-ア 褐色土ア 少混。

SK556



△-357.50 B



1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 34t。  
大枠-ア 褐色土ア 少混。

SK557

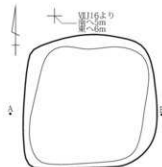


△-357.50 B



1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 34t。  
大枠-ア 褐色土ア 少混。

SK558

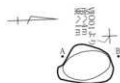


△-357.50 B



1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 34t。大枠-ア  
褐色土ア 少混。埋め土。

SK560



△-356.80 B



1 黄灰色土(2.5Y4/1) 34t。  
大枠-ア 褐色土ア 少混。

SK561



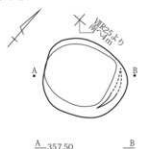
△-356.80 B



1 黄灰色土(2.5Y4/1) 34t。  
大枠-ア 褐色土ア 少混。  
2 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 34t。  
小枠-ア 褐色土ア 少混。

0 1:600 1m

SK721

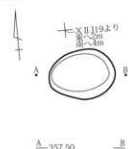


A -357.50 B



- 1 褐色土(10YR4/1) 少混。
- 2 褐色土(10YR4/4) 少混。黒褐色土・灰色土少混。
- 3 黒褐色土(10YR3/1) 少混。黒褐色土・少混。黄褐色土少混。

SK901



A -357.50 B

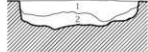


- 1 7a層粘土。
- 2 灰色・8層のロカ少混。

SK902

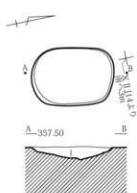


A -357.50 B

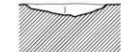


- 1 7a層粘土 大8層のロカ少混。
- 2 7c層粘土 大8層のロカ混。

SK903

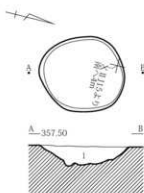


A -357.50 B

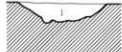


- 1 7a層粘土。

SK904

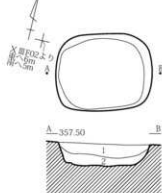


A -357.50 B

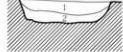


- 1 7a層粘土 大8層のロカ混。

SK905



A -357.50 B



- 1 7層粘土のロカ 大8層のロカ多混。
- 2 大9層のロカ・7層のロカ多混。

SK906

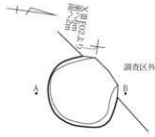


A -357.50 B



- 1 7a層粘土 8層少混。

SK907



A -357.50 B



- 1 7a層粘土 8層少混。
- 2 大8層のロカ・7層のロカ混。

SK908



A -357.50 B

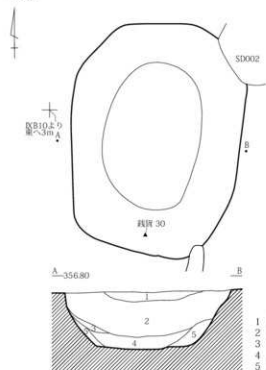


- 1 7c層粘土 大8層のロカ多混。

0 1:60 1m

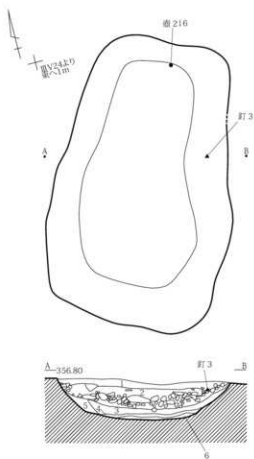
図版 70 中近世の土坑 1

SK001



- 1 黒褐色土(10YR3/1) 埴壇土。小に赤・黄褐色(赤)に赤い黄褐色粘質埴壇土が混入。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 埴壇土。小に赤・黄褐色(赤)に赤い黄褐色粘質埴壇土が混入。
- 3 褐色土(10YR6/1) 粘質埴壇土。大に赤・黄褐色・黒褐色(赤)が混入。
- 4 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質埴壇土。小に赤・黄褐色(赤)が混入。
- 5 灰色土(10Y5/1) 粘質埴壇土。

SK012



- 1 暗褐色土(10YR3/3) 砂土。褐色粘土混入。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土。B++・大炭片・礫多混。
- 3 明黄褐色土(10YR6/6) 明黄褐色土多混。
- 4 褐色土(10YR5/1) 粘質土。
- 5 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質土。
- 6 褐色土(10YR5/1) 粘質土。鉄分混。

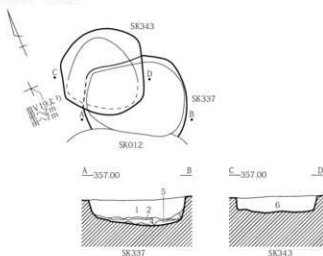
0 (1.60) 1m

SK041



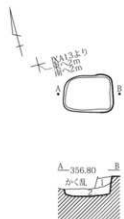
- 1 暗褐色土(10YR3/3)  
黄褐色土多混。焼土粒少混。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)
- 3 にふい、黄褐色土(10YR5/4)  
粘質。焼土粒・炭少混。

SK337・SK343



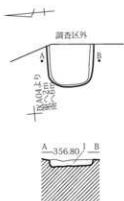
- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 灰白~明黄褐色土アが多混。
- 2 褐色土(7.5YR6/8)
- 3 灰白色土(10YR7/1)
- 4 灰白色土(10YR7/1) 粘質土。
- 5 にふい、黄褐色土(10YR7/2) 砂質土。
- 6 粘質土アで構成。木片・黄褐色土混。

SK369



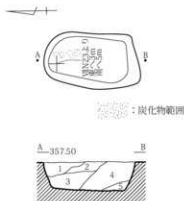
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。  
褐色土アが多混。
- 2 にふい、黄褐色土(10YR4/3)  
砂。褐色土アが多混。灰色土粒混。  
砂微混。

SK370



- 1 暗褐色土(10YR3/3)  
砂。灰色土・褐色土  
アが多混。細粒砂混。

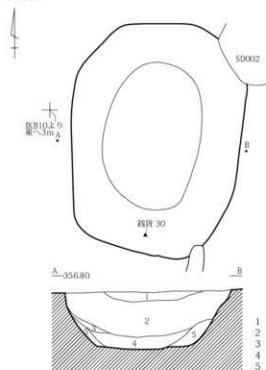
SK604



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 大にふい、黄褐色土  
アが多混。
- 2 にふい、黄褐色土(10YR5/4) 砂質。褐灰  
色土混。
- 3 にふい、黄褐色土(10YR5/4) 砂質。大褐  
灰色土アが多混。
- 4 褐灰色土(10YR4/1)大にふい、黄褐色土ア  
が多混。
- 5 にふい、黄褐色土(10YR5/4) 砂質。炭  
化物アが多混。

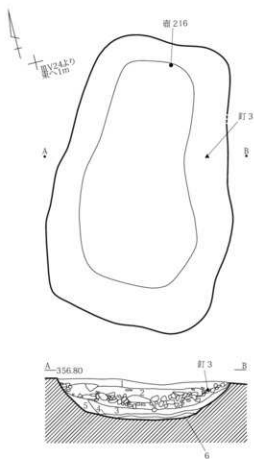
0 (1:60) 1m

SK001



- 1 黒褐色土(10YR3/1) 埴土。小に赤い・黄褐色の砂・に赤い・黄褐色の粘質埴土と砂が混。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 埴土。小に赤い・黄褐色の砂・に赤い・黄褐色の粘質埴土と砂が混。
- 3 褐色土(10YR6/1) 粘質埴土。大に赤い・黄褐色・黒褐色の砂が混。
- 4 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘質埴土。小に赤い・黄褐色の砂が混。
- 5 灰色土(10Y5/1) 粘質埴土。

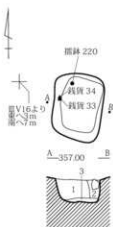
SK012



- 1 暗褐色土(10YR3/3) 砂・褐色粘土混。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/4) 黄土と砂・大炭片・礫多混。
- 3 明黄褐色土(10YR6/6) 明黄褐色土多混。
- 4 褐色土(10YR5/1) 粘質土。
- 5 灰黄褐色土(10YR5/2)
- 6 褐色土(10YR5/1) 粘質土・鉄分混。

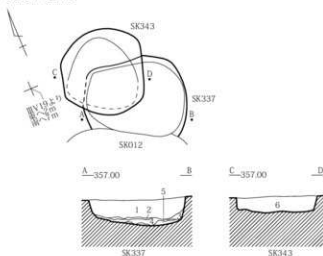
0 1:60 1m

SK041



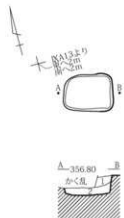
- 1 暗褐色土(10YR3/3)  
黄褐色土多混。黄土粒少混。
- 2 黒褐色土(10YR3/2)
- 3 にふい、黄褐色土(10YR5/4)  
粘質、黄土粒・灰少混。

SK337-SK343



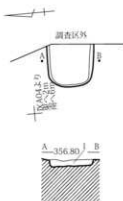
- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 灰白~明黄褐色土に多少混。
- 2 褐色土(7.5YR6/8)
- 3 灰白色土(10YR7/1)
- 4 灰白色土(10YR7/1) 粘質土。
- 5 にふい、黄褐色土(10YR7/2) 砂質土。
- 6 粘質土に多少で構成。木片・黄褐色土混。

SK369



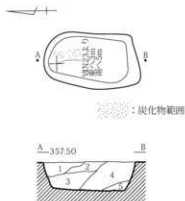
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。褐色土に多少砂混。
- 2 にふい、黄褐色土(10YR4/3) 砂。褐色土に多少・灰色土粒混。砂微混。

SK370



- 1 暗褐色土(10YR3/3) 砂。灰色土・褐色土に多少・細粒砂混。

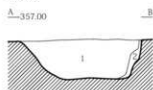
SK604



- 1 褐色土(10YR4/1) 大にふい、黄褐色土に多少混。
- 2 にふい、黄褐色土(10YR5/4) 砂質。褐色土混。
- 3 にふい、黄褐色土(10YR5/4) 砂質。大褐色土に多少混。
- 4 褐色土(10YR4/1)大にふい、黄褐色土に多少混。
- 5 にふい、黄褐色土(10YR5/4) 砂質。炭化物少混。炭化物に多少混。

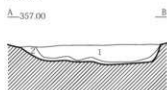
0 (1:600) 1m

SD001



- 1 黒褐色土(10YR3/2)  
2 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘質土、明黄褐色土多混。

SD002



- 1 黒褐色土(10YR3/2)  
2 にぶい黄褐色土(10YR6/3)

SD003



SD004



- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 明褐色土混。

SD005



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 明褐色土混。

SD006・SD011



- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 明褐色土混。

SD007



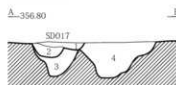
- 1 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒・極小混少混。  
2 灰黄褐色土(10YR5/2) 黄褐色土多混。

SD008



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 褐灰色砂・黄褐色土多混。

SD009・SD017



- 1 黒褐色土(10YR3/2) 焼土(5YR6/8) 小粒多混。  
2 黒褐色土(10YR3/2)  
3 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土混。  
4 黒褐色土(10YR3/2) 冷粘質、炭若干混。

SD010



- 1 黒褐色土(10YR3/2) 粘質弱。  
2 褐色土(10YR4/4) 砂・黒褐色土混。

SD013



- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質砂。

SD015



- 1 黒褐色土(10YR3/2) 黄褐色土混。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色粘質土混。

SD016



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 褐灰色砂・黄褐色土多混。

SD018



- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂。

SD019



- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂・小灰黄褐色土ア多混少混。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。礫混。

SD020



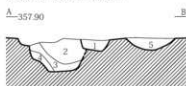
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。

SD021・SD022



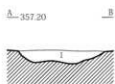
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。  
2 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂。

SD023・SD024・SD025



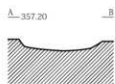
- 1 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂・粘質強。  
3 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂・粘質弱。中炭化物微混。  
4 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂・暗灰黄色粘質土混。  
5 灰黄褐色土(10YR6/2) 砂。

SD026



- 1 褐色土(10YR4/1) 褐色土粒多混。小灰白色粘土ア多混微混。

SD027



SD029



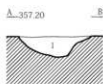
- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色土粒・地山土ア多混少混。

SD030



- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 褐色土粒多混。暗褐色土ア多混少混。  
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 褐色土粒混。褐色土ア多混少混。

SD031

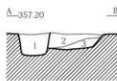


- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。

0 (1:40) 1m

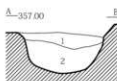


SD033-SD037



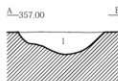
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色・暗褐色土粒混。炭化物・白色粘土が多少混。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 褐色粒混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色粒多混。細砂混。

SD034



- 1 褐灰土(10YR6/1)
- 2 灰黄褐色土(10YR6/2) 地山土が多少混。褐色%补質壤土が多少混。

SD035



- 1 褐灰土(10YR6/1) 粘土。褐色%补質壤土が多少混。

SD036



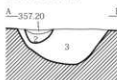
- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘土。黄褐色%补質壤土混。
- 2 褐灰土(10YR6/1) 粘土。
- 3 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘土。褐色%补質壤土が多少混。

SD038-SD039



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒多混。灰白色粘土が多少混。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。灰白色粘土が多少混。

SD040-SD041



- 1 褐灰土(10YR4/1) 粘土。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) %。褐色粘土混。
- 3 褐灰土(10YR6/1) %补質壤土。灰黄褐色%补粒混。

SD042



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) %补質壤土。地山土が多少混。

SD043



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) %补質壤土。
- 2 褐灰土(10YR5/1) 粘土。

SD044



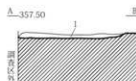
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 褐色土粒混。褐色土が多少混。

SD047



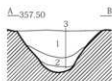
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 黑褐色土粒多混。

SD049



- 1 にふい黄褐色土(10YR6/3) %补質壤土。

SD050



- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 地山土粒・灰白色%补質壤土混。
- 2 褐灰土(10YR6/1) 灰白色%补が多少混。
- 3 灰白色土(10YR7/1) %补質壤土。

SD051-SD052



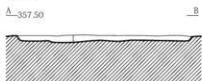
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) %补質壤土。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) %补質壤土。褐色軽壤土が多少混。

SD053



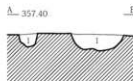
- 1 黑褐色土(10YR3/2) 粘土。

SD055



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) %补質壤土。

SD056



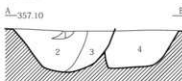
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) %补質壤土。

SD057



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) %补質壤土。
- 2 褐灰土(10YR5/1) 粘土。

SD058



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) %补質壤土。炭化物多混。
- 2 灰白色土(10YR7/1) 粘土。
- 3 褐灰土(10YR5/1) 灰黄褐色%补質壤土多混。
- 4 褐灰土(10YR4/1) %补質壤土。粘土が多少混。

SD059



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) %补質壤土。

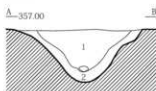
0 (1:40) 1m

SD060



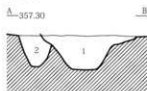
1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂質壤土。

SD061



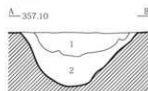
1 褐灰色土(10YR4/1) 砂質壤土。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。

SD063



1 褐灰色土(10YR4/1) 粘土。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土。

SD065



1 褐灰色土(10YR4/1) 砂質壤土。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。

SD067



1 褐灰色土 (10YR5/1) 砂質壤土。褐灰色土ア7混。

SD068



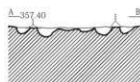
1 褐灰色土(10YR5/1) 砂質壤土。褐灰色土ア7混。

SD069



1 褐灰色土(10YR5/1) 砂質壤土。

SD070



1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂質壤土。灰黄褐色/砂質壤土・黒褐色/砂質壤土ア7混。

SD072



1 灰黄褐色土(10YR4/2) 地山土混。赤褐色土少混。

SD074



1 灰黄褐色土(10YR4/2) 地山土混。赤褐色土少混。

SD075



1 灰黄褐色土(10YR4/2) 地山土混。赤褐色土少混。

SD076



1 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色土粒混。

SD077



1 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色土粒混。

SD078



1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 灰白色土粒混。炭化物少混。

SD080



1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。地山土ア7混。

SD081



1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 褐灰色壤土粒少混。

SD082



1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。黄褐色/砂質壤土・褐灰色/砂質壤土ア7混。

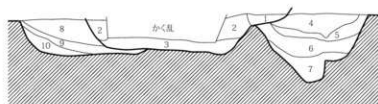
SD084



1 灰黄褐色(10YR4/2) 地山土・細砂混。  
2 黄褐色土(10YR5/6) 地山土多混。

SD085・SD086・SD087

A-357.00



B

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。灰色粘土ア7混。  
2 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 灰色粘土ア7混。  
3 黄灰色土(2.5Y5/1) 灰黄褐色土ア7混。  
4 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂質壤土。灰色粘土ア7混。  
5 灰黄褐色土(10YR5/2) にぶい黄褐色/砂質壤土ア7混。  
6 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。褐灰色粘土ア7混。  
7 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。砂多混。黒褐色粘土ア7混。  
8 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂質壤土。灰黄褐色/砂質壤土ア7混。  
9 褐灰色土(10YR5/1) 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 砂質壤土。  
10 黒褐色土ア7混・褐灰色/砂質壤土ア7混。

0 1:40 1m

SD088

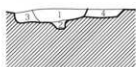
△-356.80 B



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。褐色少粘土多混。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 褐色少砂質壤土・黒褐色少粘土多混。

SD089

△-357.00 B



- SD089a SD089b
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。
  - 2 褐色土(10YR4/1) 灰白色少粘土多混。
  - 3 褐色土(10YR4/1) 灰白色少粘土多混。
  - 4 褐色土(10YR4/1) にぶい黄褐色少粘土多混。

SD090

△-357.00 B



SD091

△-356.80 B



- 1 黄褐色土(10YR5/6) 砂質壤土。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 地山土混。

SD097

△-357.00 B



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。褐色軽粘土多混。

SD098

△-357.20 B



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質壤土。
- 2 褐色土(10YR4/1) 粘土。

SD109-SD110-SD111

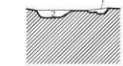
△-357.50 B



- SD109 SD110 SD111
- 1 明黄褐色土(10YR7/6) 褐色少粘土多混。
  - 2 黄褐色土 大褐色少粘土多混。
  - 3 黄褐色土 褐色少粘土多混。

SD114-SD115

△-357.50 B



- SD115 SD114
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土。黒褐色粘土多混。黄灰色砂混。
  - 2 褐色土(10YR4/1) 粘土。黒褐色・黄褐色粘土混。

SD117

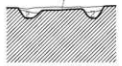
△-357.50 B



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土。黒褐色粘土多混。

SD118

△-357.50 B



- 1 暗褐色土(10YR3/3) 粘土。黒褐色・灰色粘土多混。
- 2 褐色土(10YR5/1) 粘土。褐色粘土・黄褐色土混。

SD119

△-357.50 B



- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黒褐色・灰色粘土混。

SD120

△-357.50 B



- 1 黒褐色土(10YR2/2) 粘土。灰色粘土多混。

SD121

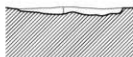
△-357.50 B



- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘土。黒褐色・灰色粘土混。

SD122

△-357.50 B



- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘土。黒褐色・灰色粘土混。

SD123

△-357.50 B



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土。黒褐色粘土多混。

SD124

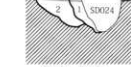
△-357.50 B



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土。黒褐色粘土多混。

SD125-SD135

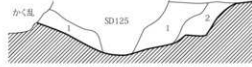
△-357.00 B



- SD135 SD125
- 1 暗褐色土(10YR3/3) 褐色細粒砂混。暗灰色少多混。
  - 2 黒褐色土(10YR3/2) 砂質壤土。灰色・褐色多混。

SD126

△-356.80



- か風
- 1 褐色土(10YR4/1) 砂質壤土。黄褐色細粒砂・大礫混。礫元。
  - 2 黒褐色土(10YR3/2) 砂質壤土。砂多混。暗灰色少混。

SD128

△-356.80 B



- 1 褐色土(10YR4/1)

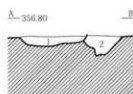
0 (1:40) 1m

SD129



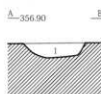
- 1 褐灰色土(10YR6/1) 34t, 赤~入道大礫混。  
2 暗褐色土(7.5YR2/3) 34t, 灰白色土34t混。

SD130-SD131



- 1 黄灰色土(2.5Y5/1) 砂質土。  
2 にぶい黄褐色土(2.5Y6/4) 小灰白色土34t7t9混。還元。

SD132



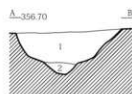
- 1 黒褐色土。

SD133



- 1 黒褐色土。

SD134



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 34t。  
2 黒褐色土(10YR3/1) 粘質34t, 褐色土7t9混。還元。

SD136



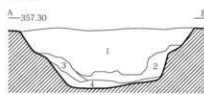
- 1 褐色土 34t, 暗灰色 34t7t9混。  
2 明褐色土(7.5YR5/6) 34t質礫壤土。

SD137



- 1 褐灰色土(10YR5/1) 34t, 褐色細粒砂混。還元。  
2 暗褐色土(10YR3/4) 34t, 暗灰色・黒褐色土4t混。  
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 34t, 暗褐色土34t7t9混。還元。

SD138



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 粘質34t, 白色土・黒色土精混。還元。  
2 灰黄褐色土(10YR4/2) 34t, 白色粗粒砂混。  
3 褐灰色土(10YR4/1) 白色土・黄褐色土粗砂多混。黒褐色土34t7t9混。  
4 黒色土(10YR1.7/1) 粘土, 黒褐色粘土・暗灰色粘土7t9混。白色34t混。

SD139



- 1 黒褐色土(10YR3/1) 34t, 灰色・黄褐色・黒色34t7t9混。

SD140



- 1 黒褐色土(10YR3/1) 34t, 灰色・黄褐色・黒色34t7t9混。

SD141



- 1 黒褐色土(10YR3/1) 34t, 灰色・黄褐色・黒色34t7t9混。

SD144

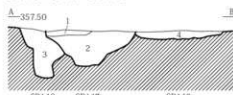


SD145



- 1 黒褐色土(10YR3/1) 34t, 灰色・黄褐色・黒色34t7t9混。

SD146-SD147-SD148



- 1 黄褐色土  
2 褐灰色土 34t,  
3 褐灰色土 34t,  
4 褐灰色土 34t,

SD149



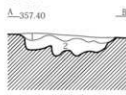
- 1 記載なし

SD150



- 1 記載なし

SD151



- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 山砂。  
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 山砂, 褐灰色土(10YR4/1)・黒色土(10YR2/1)7t9t9少混。

SD152



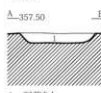
- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 山砂。

SD153



- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 山砂。

SD154



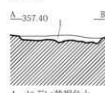
- 1 記載なし

SD155



- 1 記載なし

SD156



- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 細砂。

0 (1:40) 1m

SD157



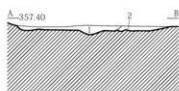
1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂層。

SD158



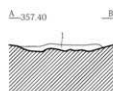
1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂層。

SD159



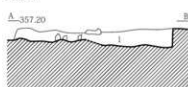
1 褐色土 粗砂。  
2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂層。

SD160



1 灰色土 粘土アのみ。砂混。

SD161



1 黒色土(10YR2/1) 3/4質堆積土。

SD162



SD163



1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 細砂。

SD164



1 細砂。

SD165



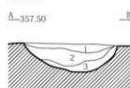
1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 細砂。

SD166



1 褐色土(10YR4/1) 3/4粘、粘土アのみ。にぶい黄褐色土細砂多混。  
2 にぶい黄褐色土が堆積。

SD167



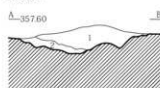
1~3 記載なし

SD168



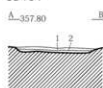
1 記載なし

SD183



1 褐色土(10YR4/6) 粗砂。白色土粒多混。暗褐色3/4粘アのみ。少混。  
2 暗灰色土(N3) 粘土。褐色土アのみ。白色土粒少混。

SD184



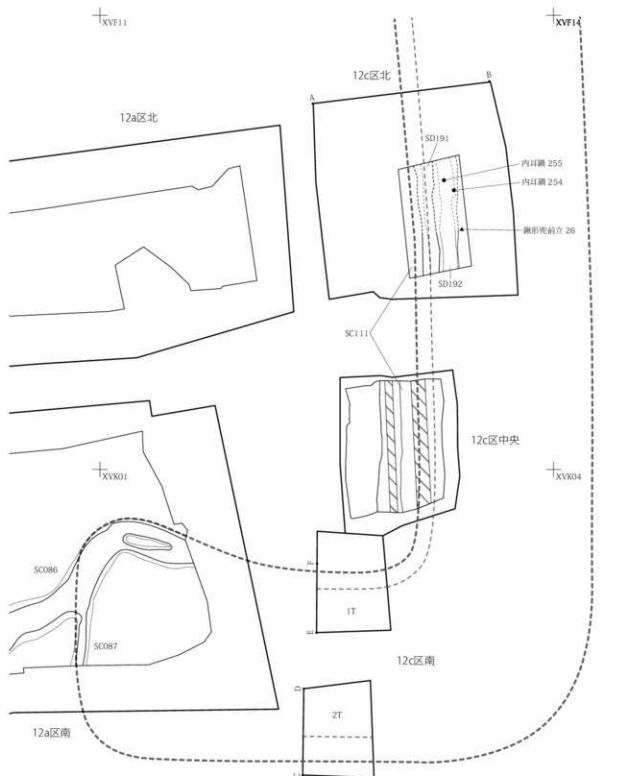
1 褐色土(10YR4/6) 3/4粘、地山アのみ。少混。  
2 にぶい黄褐色土(10YR 6/3) 極細砂。

SD185



1 山砂。

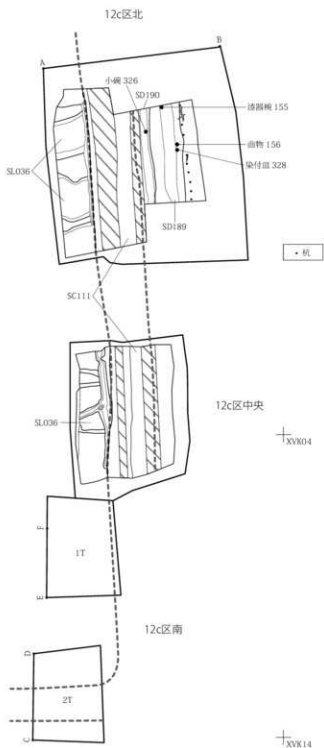
0 (1:40) 1m





+XVF11

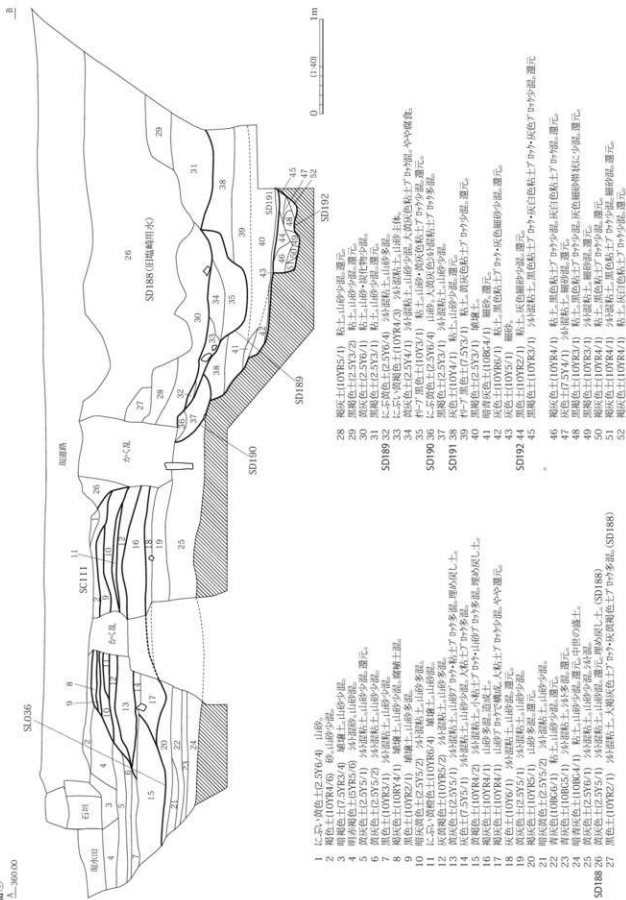
+XVF14



0 1:200 5m

堤跡断面①

A-360/00



- 1 白、黄褐色土(2.5Y6/4) 山砂。
- 2 褐色土(10YR4/6) 砂、山砂少量。
- 3 暗褐色土(7.5YR3/4) 壤土、山砂少量。
- 4 暗赤褐色土(5YR2/6) 外濠粘土、山砂少量。
- 5 黄褐色土(2.5Y5/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 6 黄褐色土(2.5Y5/2) 外濠粘土、山砂少量。
- 7 黒色土(10YR3/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 8 赤褐色土(10R3/4/1) 腐植土、山砂少量。
- 9 黒色土(10YR2/1) 腐植土、山砂少量。
- 10 赤褐色土(10YR3/4) 外濠粘土、山砂少量。
- 11 赤褐色土(10YR3/4) 外濠粘土、山砂少量。
- 12 灰褐色土(10YR5/2) 外濠粘土、山砂少量。
- 13 黄褐色土(2.5Y5/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 14 灰褐色土(2.5Y5/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 15 黄褐色土(10YR4/2) 外濠粘土、山砂少量。
- 16 赤褐色土(10YR4/1) 山砂少量、造成土。
- 17 暗褐色土(10YR4/1) 山砂少量、造成土。
- 18 灰褐色土(10Y6/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 19 灰褐色土(2.5Y5/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 20 暗褐色土(10YR5/2) 外濠粘土、山砂少量。
- 21 黄褐色土(10R6/4/1) 粘土、山砂少量。
- 22 黄褐色土(10R6/4/1) 粘土、山砂少量。
- 23 暗褐色土(10R6/5/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 24 暗褐色土(10R6/4/1) 粘土、山砂少量。
- 25 黄褐色土(2.5Y6/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 26 黄褐色土(2.5Y5/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 27 黒色土(10YR2/1) 外濠粘土、入湖灰褐色土、山砂少量。
- 28 暗褐色土(10YR5/1) 粘土、山砂少量。
- 29 褐色土(2.5Y3/2) 粘土、山砂少量。
- 30 黄褐色土(2.5Y6/1) 粘土、山砂少量。
- 31 黄褐色土(2.5Y3/1) 粘土、山砂少量。
- 32 赤褐色土(2.5Y6/4) 外濠粘土、山砂少量。
- 33 赤褐色土(10YR4/3) 外濠粘土、山砂少量。
- 34 黄褐色土(2.5Y4/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 35 赤褐色土(10Y4/1) 粘土、山砂少量。
- 36 暗褐色土(2.5Y3/1) 腐植土。
- 37 黄褐色土(2.5Y3/1) 粘土、山砂少量。
- 38 灰褐色土(2.5Y3/1) 粘土、山砂少量。
- 39 砂、黄褐色土(2.5Y3/1) 腐植土。
- 40 暗褐色土(2.5Y3/1) 細砂。
- 41 暗褐色土(10R6/4/1) 細砂。
- 42 灰褐色土(10YR6/1) 粘土、黒色粘土、山砂少量。
- 43 灰褐色土(10Y5/1) 細砂。
- 44 黄褐色土(10YR2/1) 粘土、灰褐色細砂少量。
- 45 黄褐色土(10YR3/1) 外濠粘土、黒色粘土、山砂少量。
- 46 暗褐色土(10YR4/1) 粘土、黒色粘土、山砂少量。
- 47 灰褐色土(2.5Y4/1) 外濠粘土、細砂。
- 48 黄褐色土(10YR3/1) 粘土、黒色粘土、山砂少量。
- 49 暗褐色土(10YR3/1) 外濠粘土、細砂。
- 50 暗褐色土(10YR4/1) 粘土、黒色粘土、山砂少量。
- 51 黄褐色土(2.5Y5/1) 外濠粘土、山砂少量。
- 52 暗褐色土(10YR4/1) 外濠粘土、入湖灰褐色土、山砂少量。

SD188 26 黄褐色土(2.5Y5/1) 外濠粘土、山砂少量。  
SD188 27 黒色土(10YR2/1) 外濠粘土、入湖灰褐色土、山砂少量。(SD188)

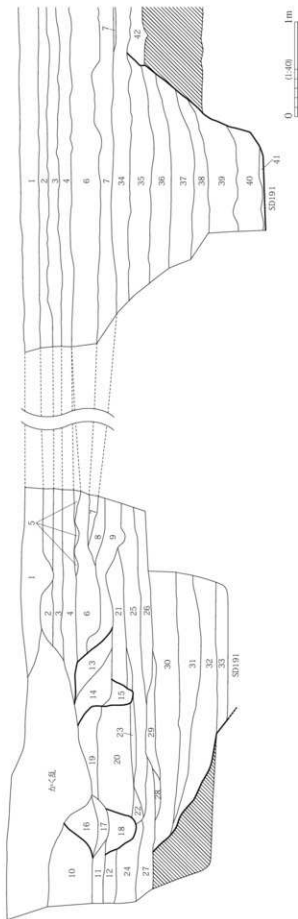


C-359.60

D

E-359.60

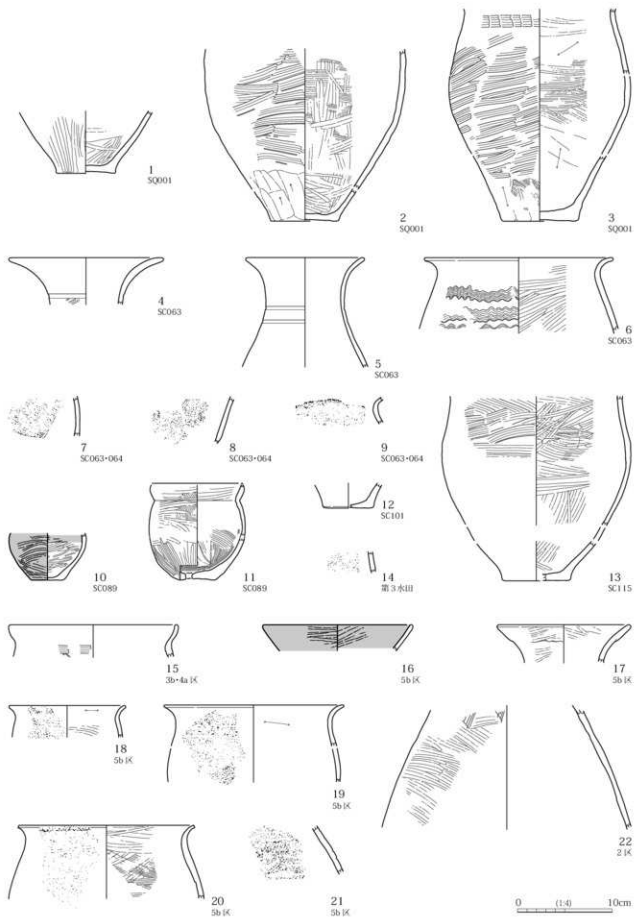
I

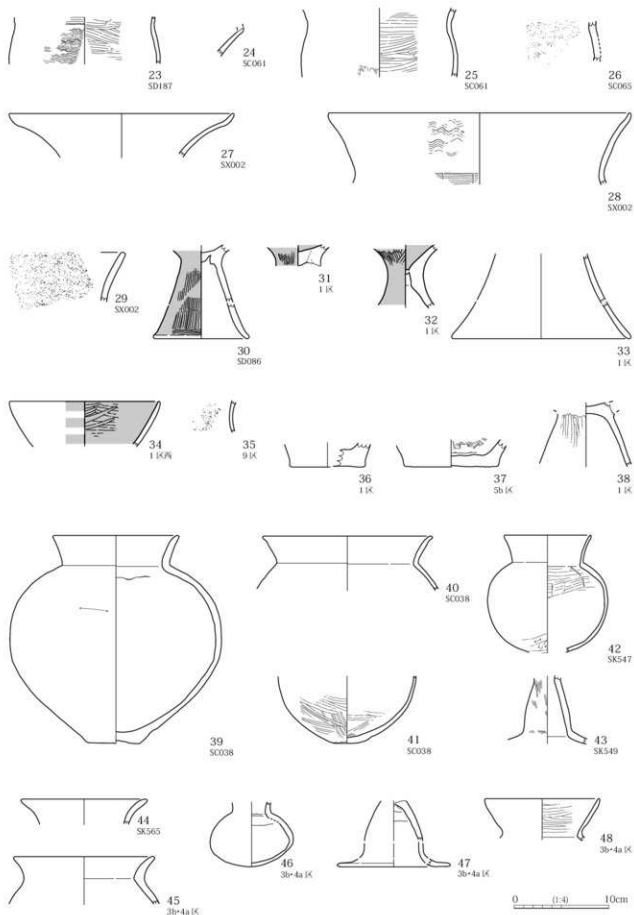


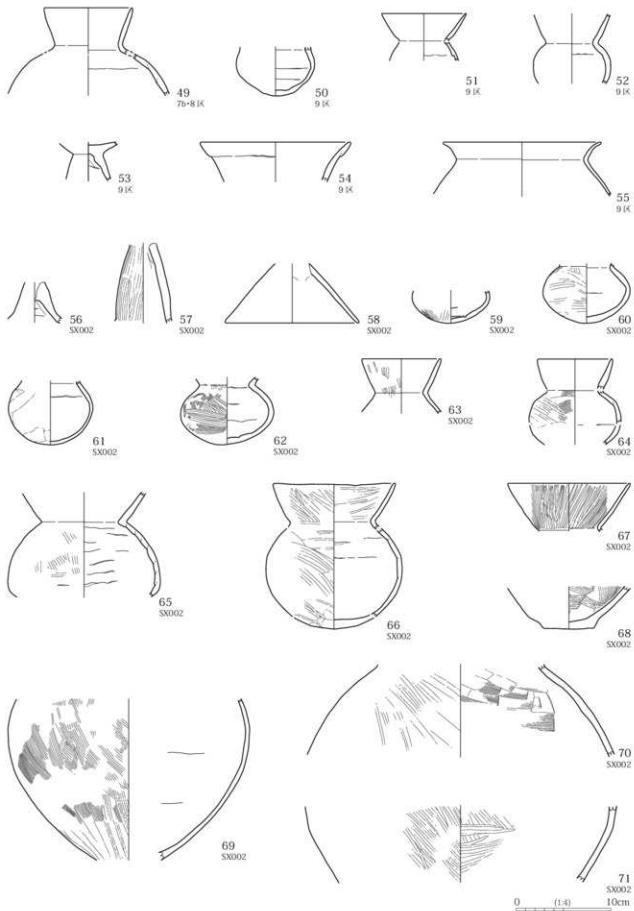
- 1 黄灰色土(2.5Y5/1) 壤壤土, 山砂少混。
- 2 明黄褐色土(10YR7/6) 粘土, 山砂少混。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 壤壤土, 山砂混。
- 4 灰白色土(2.5Y7/1) 粘壤土, 山砂混。
- 5 灰白色土(5Y7/1) 粘土, 山砂少混。
- 6 暗灰棕色土(2.5Y5/2) 壤壤土, 山砂少混。灰白色粘土, 山砂少混。埋砂灰土。
- 7 灰棕色土(7.5Y5/1) 粘壤土, 山砂少混。
- 8 灰棕色土(7.5Y6/1) 粘壤土, 山砂少混。
- 9 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土, 山砂少混。
- 10 红棕色土(2.5Y6/3) 山砂。少粘壤土, 山砂混。
- 11 黄褐色土(2.5Y5/3) 粘壤土, 山砂少混。
- 12 黄褐色土(2.5Y5/1) 粘壤土, 山砂少混。
- 13 棕-了 黄灰色土(5Y6/3) 山砂。道路盛土。
- 14 灰白色土(5Y6/1) 壤壤土, 山砂多混。道路盛土。
- 15 灰白色土(2.5Y6/1) 粘壤土, 山砂多混。道路侧盛土。
- 16 灰白色土(5Y7/2) 粘土, 道路盛土。
- 17 灰白色土(5Y7/1) 粘壤土, 山砂少混。道路侧盛土。
- 18 灰白色土(2.5Y6/1) 粘壤土, 山砂少混。
- 19 灰白色土(2.5Y6/1) 粘壤土, 山砂少混。
- 20 灰白色土(7.5Y6/1) 粘壤土, 山砂多混。盛土。
- 21 灰白色土(7.5Y5/1) 粘壤土, 山砂多混。盛土。

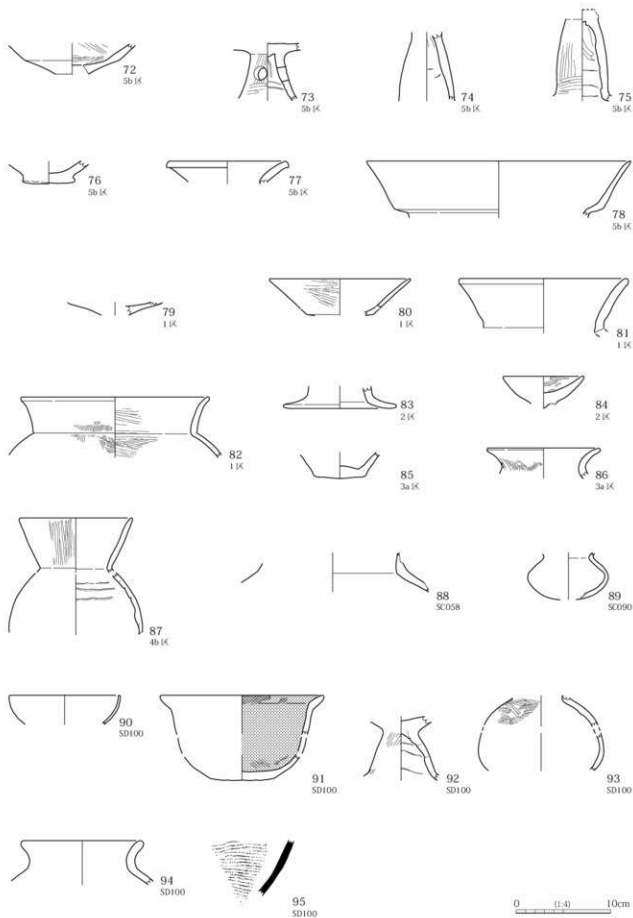
## SD191

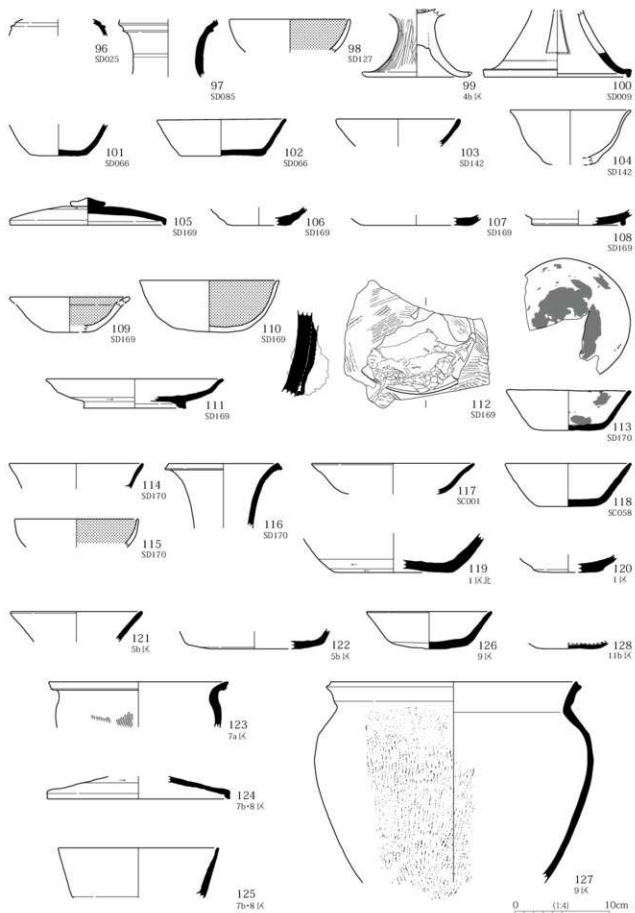
- 22 灰白色土(7.5Y6/1) 粘壤土, 山砂多混。盛土。
- 23 灰白色土(7.5Y6/1) 粘壤土, 山砂多混。盛土。
- 24 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土, 山砂少混。盛土。少粘壤土。
- 25 褐灰土(10YR6/1) 粘土, 山砂少混。
- 26 灰棕-了 色土(7.5Y6/2) 粘土, 山砂少混。
- 27 灰白色土(7.5Y5/1) 粘土, 山砂少混。入山砂, 山砂少混。
- 28 灰白色土(7.5Y6/1) 山砂。山砂少混。少粘壤土。
- 29 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土, 山砂少混。
- 30 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土, 山砂少混。少粘壤土。
- 31 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。入黄褐色粘土, 山砂少混。
- 32 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。小灰质少混。少粘壤土。
- 33 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。细砂-灰质多混。未分解植物片少混。
- 34 灰白色土(5Y4/1) 粘土, 山砂-灰质少混。
- 35 灰棕-了 色土(5Y5/2) 粘土, 山砂少混。
- 36 灰白色土(5Y4/1) 粘土, 灰质少混。
- 37 灰白色土(5Y5/1) 粘土。入黄褐色粘土, 山砂少混。
- 38 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘壤土, 山砂少混。未分解植物片少混。
- 39 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘壤土, 山砂少混。未分解植物片少混。
- 40 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。入黄褐色粘土, 灰质多混。未分解植物片少混。
- 41 明黄褐色土(2.5Y4/2) 壤壤土。
- 42 灰白色土(5Y4/1) 粘土。盛土。

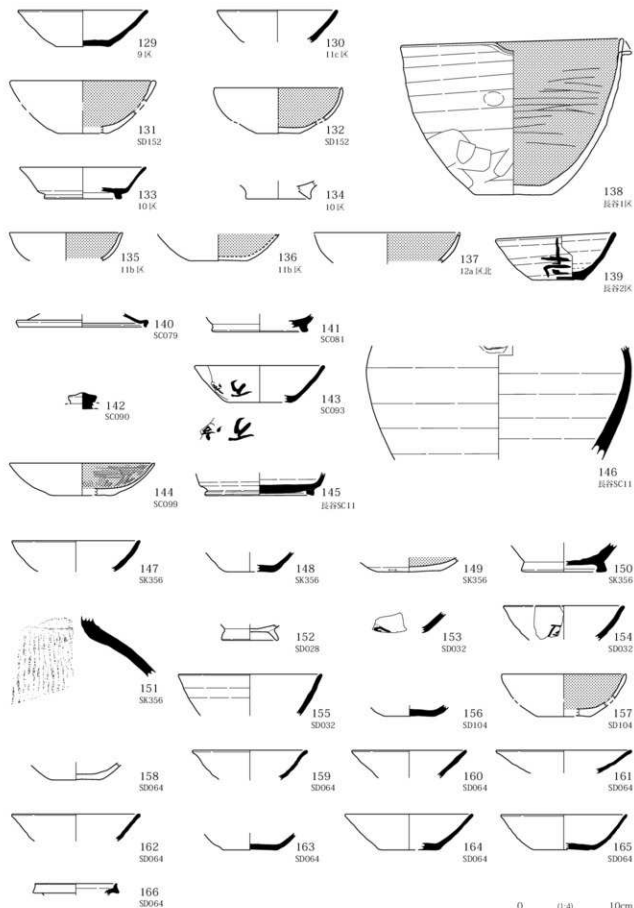


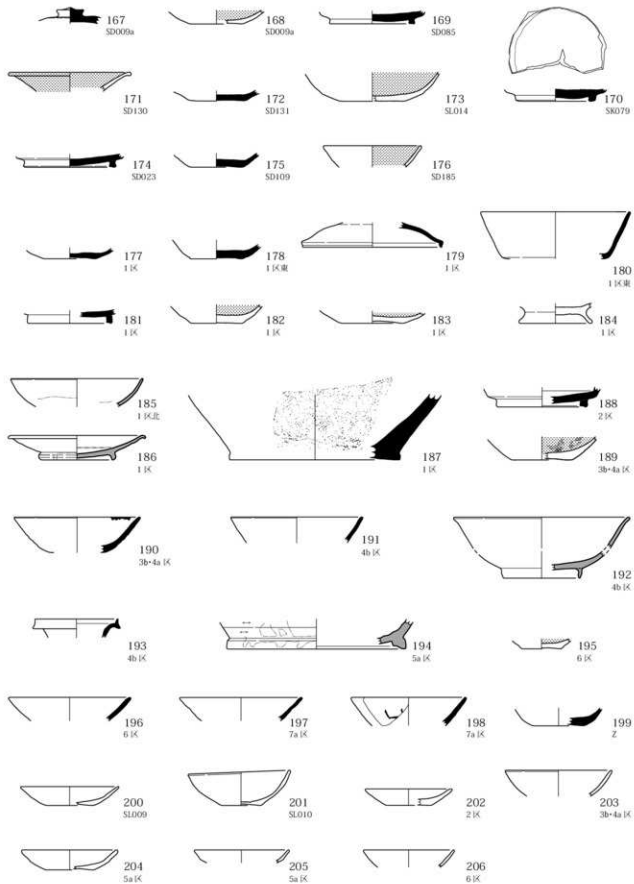






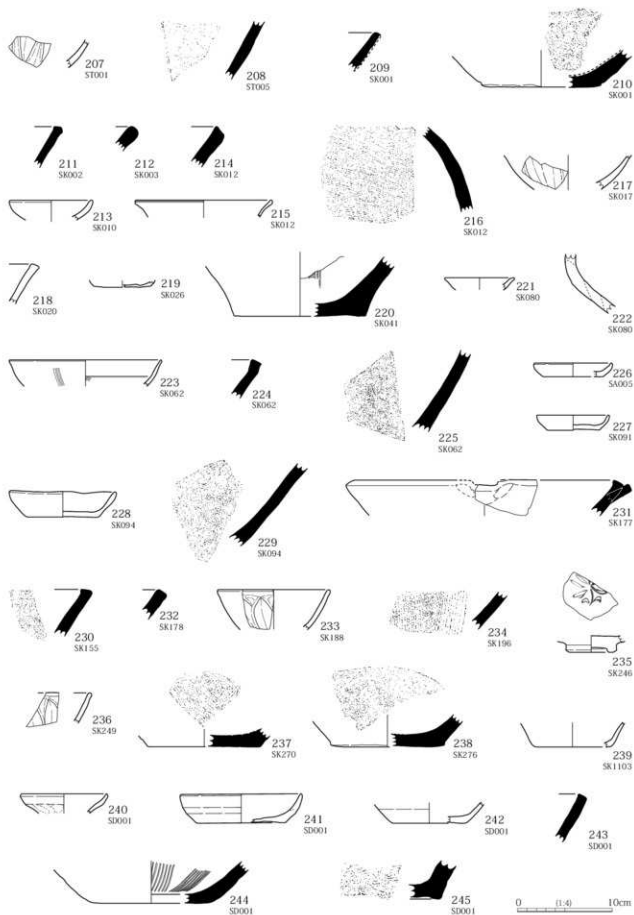


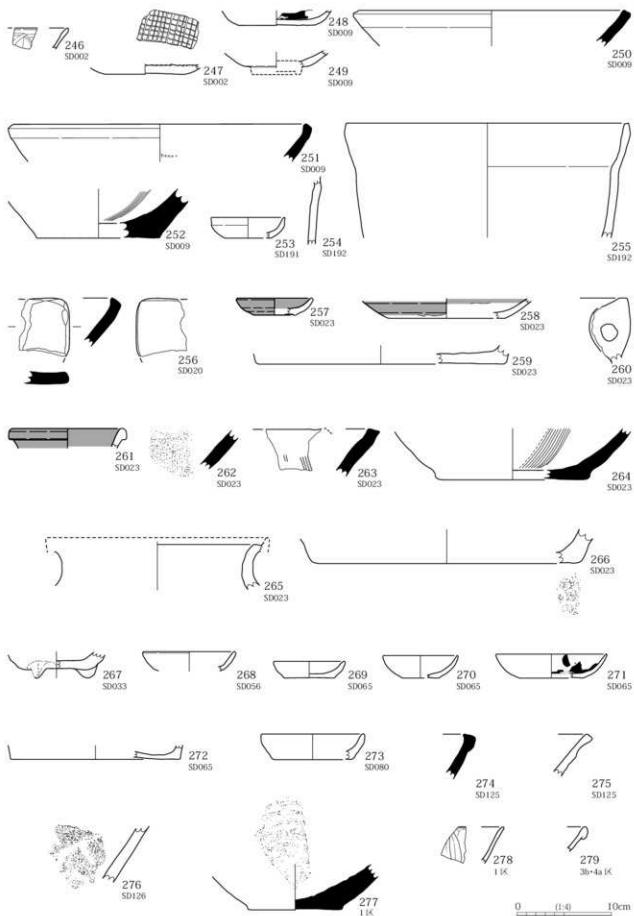


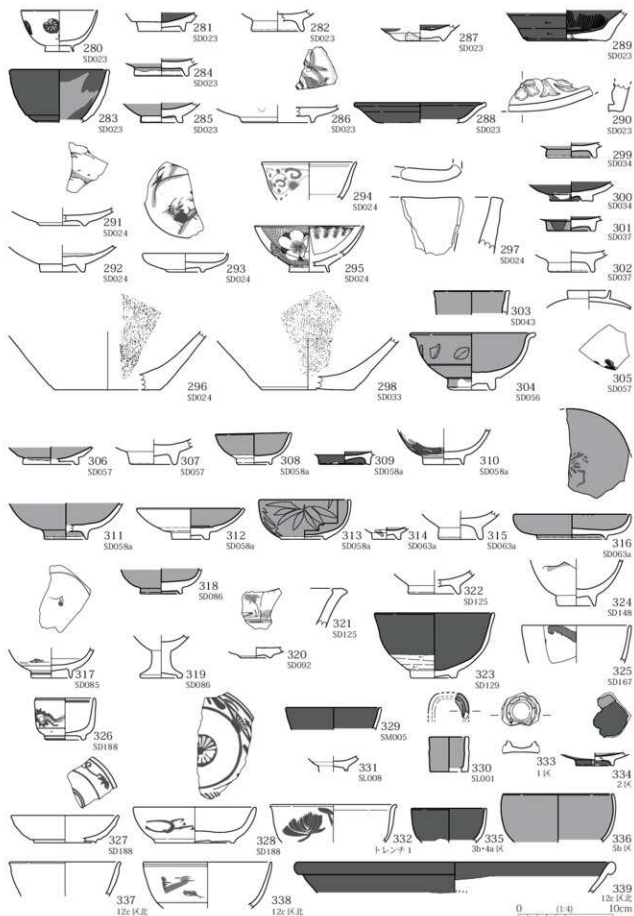


0 (1:4) 10cm

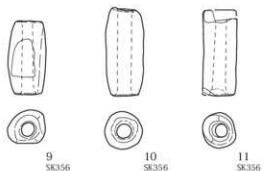
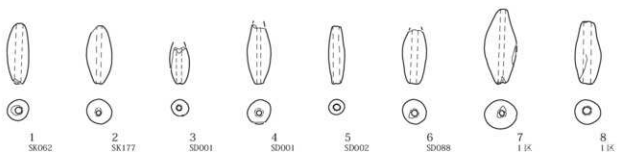








土錘



ミニチュア土器

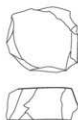


12  
SX002

土製円盤



13  
SD086



14  
SD188

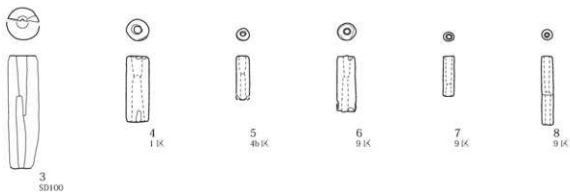
0 (1:3) 10cm  
(1~11)

0 (1:2) 5cm  
(12~14)

勾玉



管玉



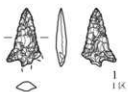
小玉



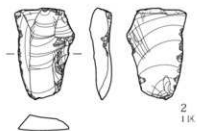
数珠玉

0 (2:3) 5cm

打製石鏃

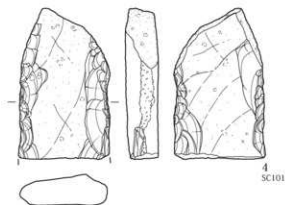
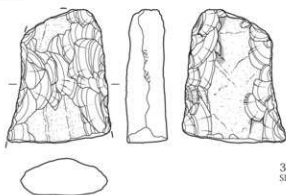


削器

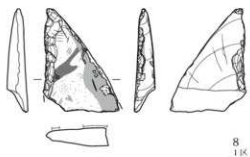
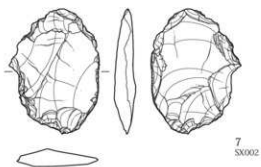
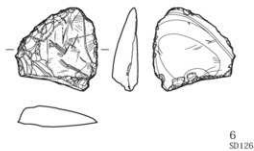
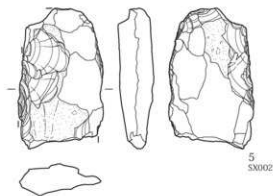


0 (2.3) 5cm

打製石斧

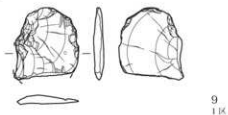


打製大型刃器

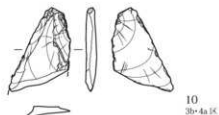


0 (1.3) 10cm

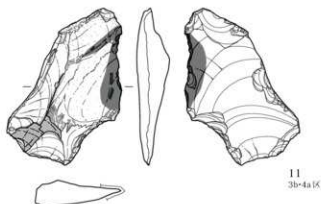
打製大型刃器



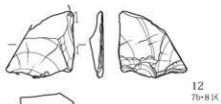
9  
1区



10  
3b・4a区

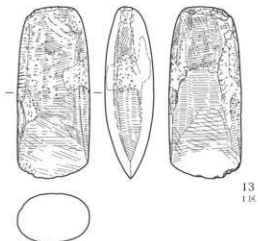


11  
3b・4a区



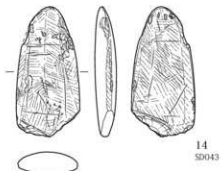
12  
7b・8区

太型始刃石斧



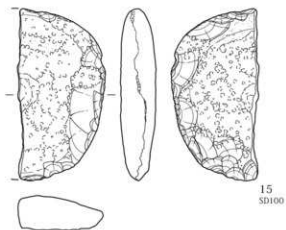
13  
1区

磨製定角式石斧



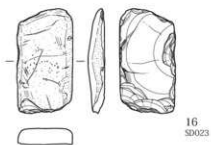
14  
SD043

環状石斧未成品



15  
SD100

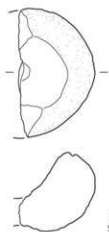
石器未成品



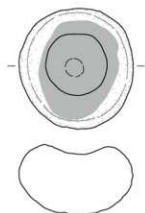
16  
SD203

0 (1:3) 10cm

凹石



17  
SK017



18  
SD009

敲石



19  
SD001



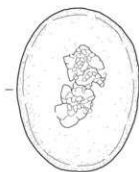
20  
SD061



21  
SD061



22  
SD154



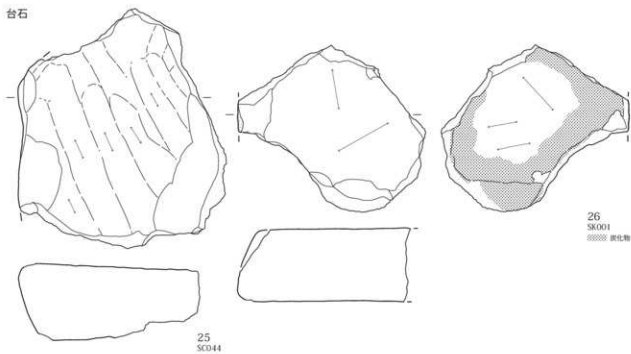
23  
SC105



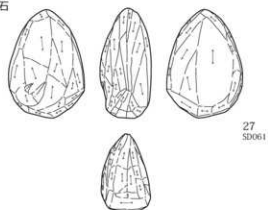
24  
9K

0 (1:3) 10cm

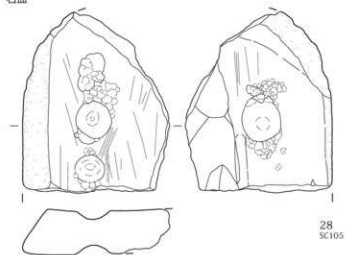
台石



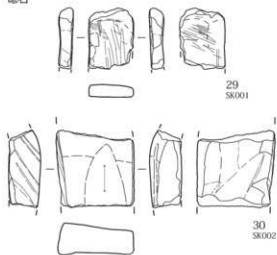
磨石



石皿



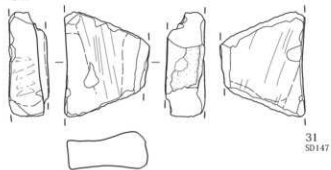
砥石



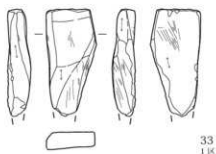
0 (1:3) 10cm



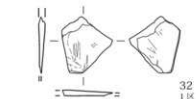
砥石



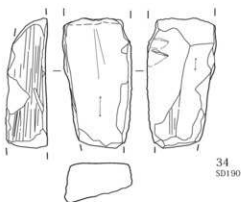
31  
SD147



33  
1K

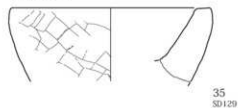


32  
1K



34  
SD190

石臼・つき臼



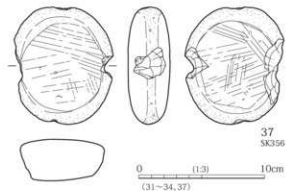
35  
SD129



36  
SD190



石鐘



37  
SK356

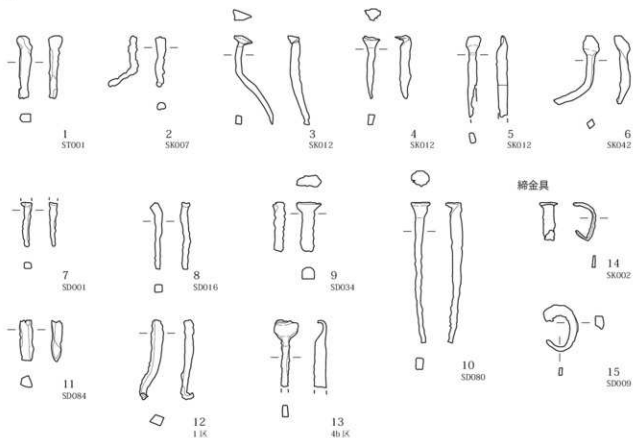
碁石



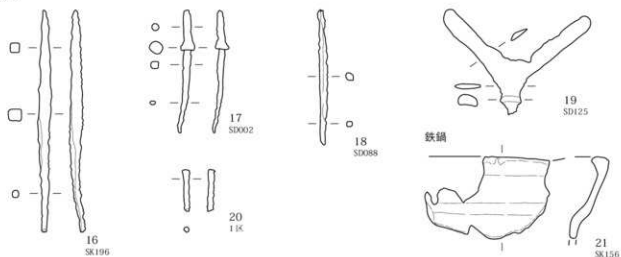
38  
4b1K



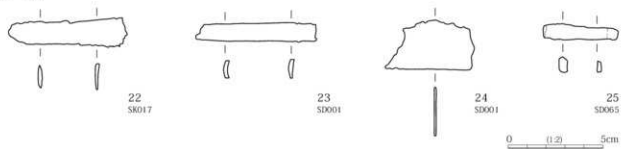
釘



鉄鏝

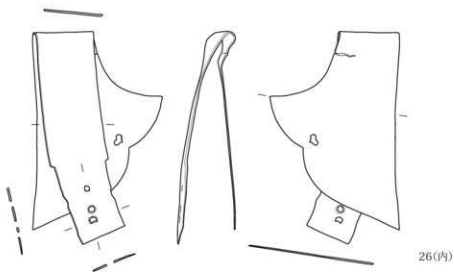
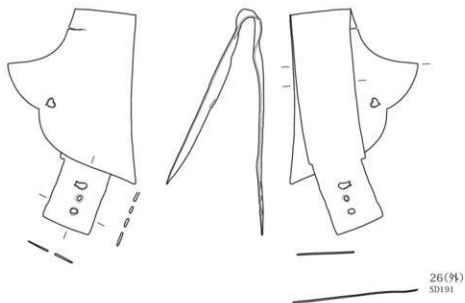


刀子・刃物



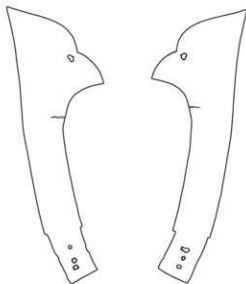
0 (1:2) 5cm

鎌形兜前立



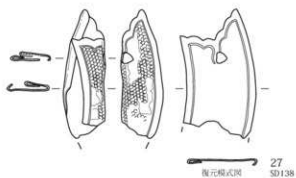
0 (1/2) 5cm

鎌形兜前立復元図

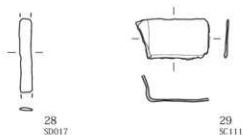


0 (1/2) 10cm

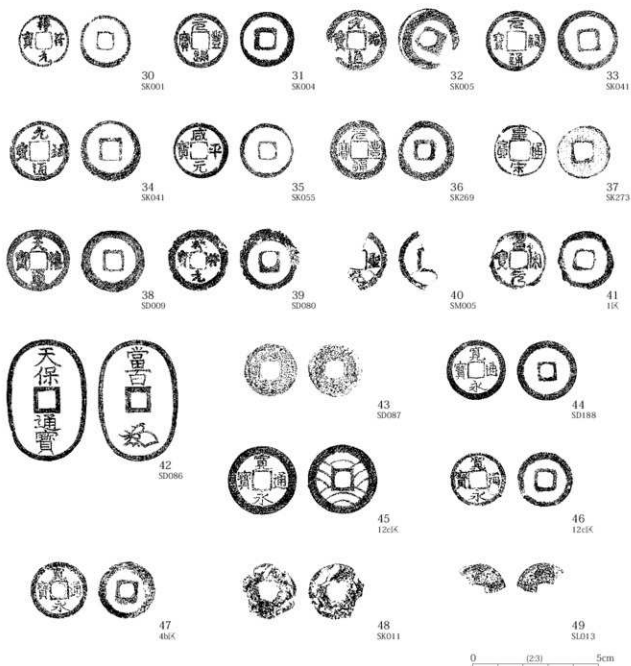
飾り金具



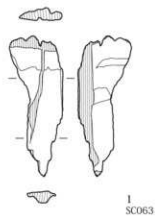
不明銅製品



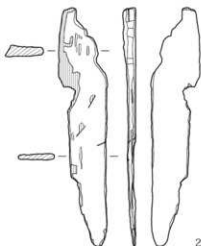
銭貨



農具

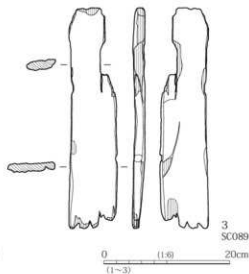


1 SC063



2 SC089

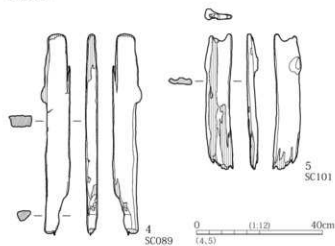
板材



3 SC089

0 (1.8) 20cm  
(1~3)

建築部材

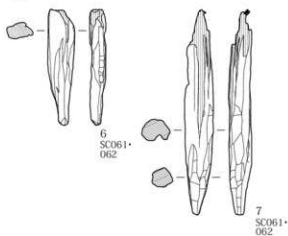


4 SC089

5 SC101

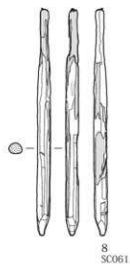
0 (1.12) 40cm  
(4,5)

杭

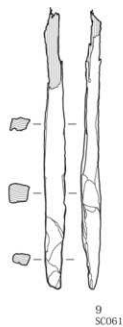


6 SC061・062

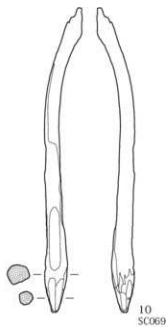
7 SC061・062



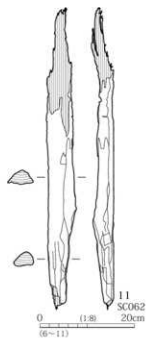
8 SC061



9 SC061



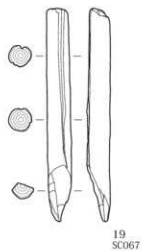
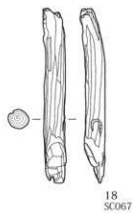
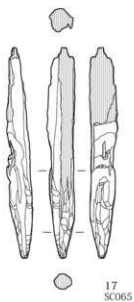
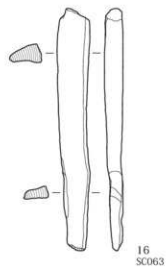
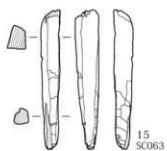
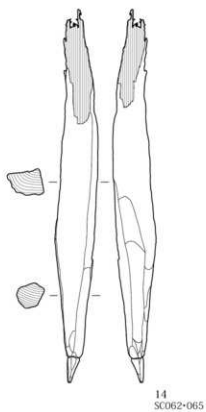
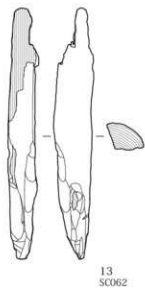
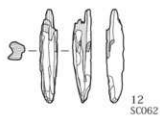
10 SC069



11 SC062

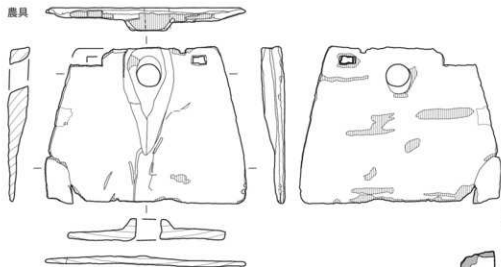
0 (1.8) 20cm  
(6~11)

杭



0 (1:8) 20cm

農具

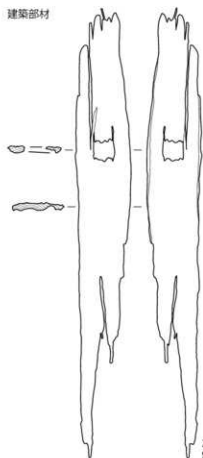


20  
9区 SX002

21  
9区 SX002

0 (1:4) 20cm  
(20, 21)

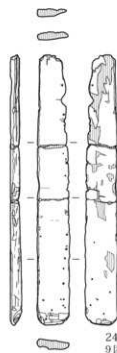
建築部材



22  
9区 SX002

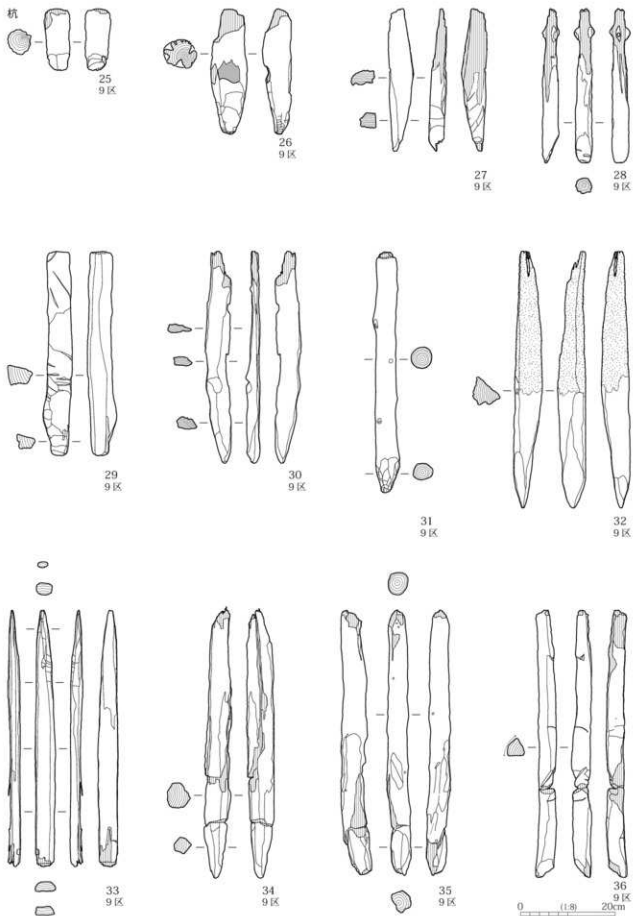


23  
9区 SX002  
■ 虫の跡あり



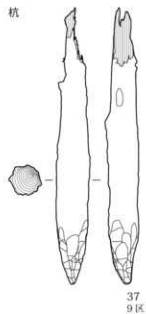
24  
9区 SX002

0 (1:12) 40cm  
(22-24)

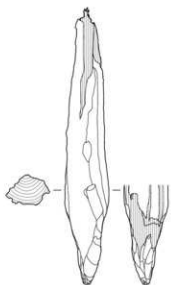




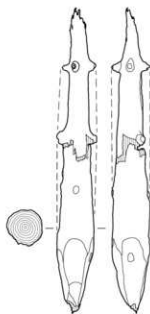
杭



37  
9区



38  
9区



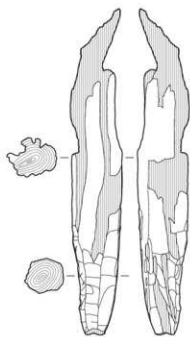
39  
9区



40  
9区



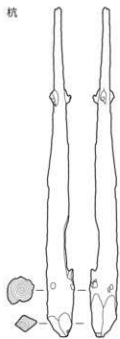
41  
9区



42  
9区

0 (1:8) 20cm

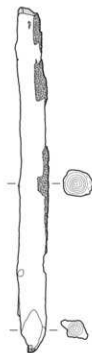
杭



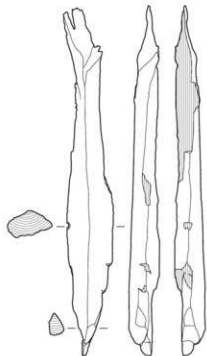
43  
9K



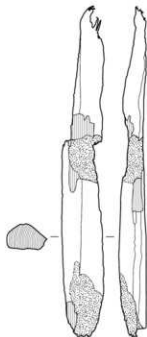
44  
9K



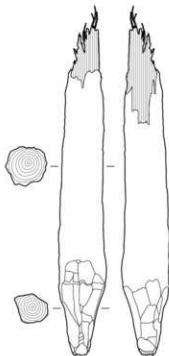
45  
9K



46  
9K



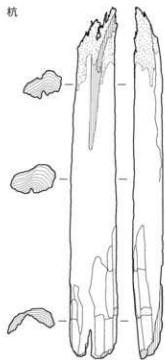
47  
9K



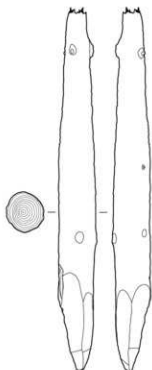
48  
9K

0 (1:8) 20cm

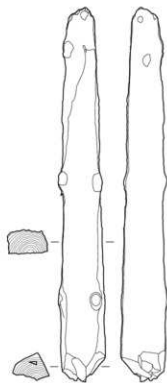
杭



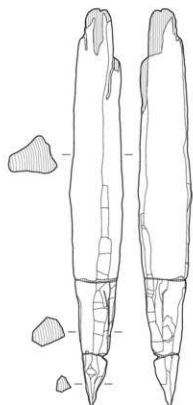
49  
9区



50  
9区



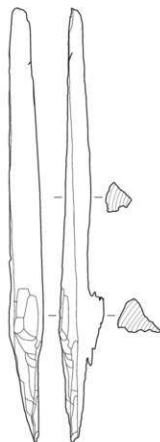
51  
9区



52  
9区



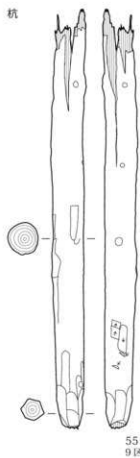
53  
9区



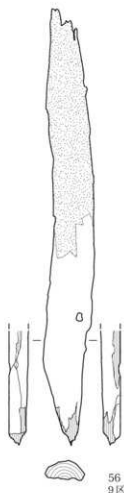
54  
9区

0 (1:8) 20cm

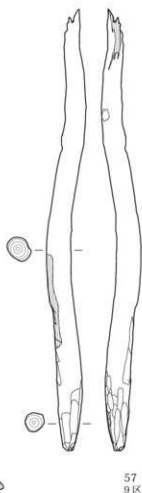
杭



55  
9 K



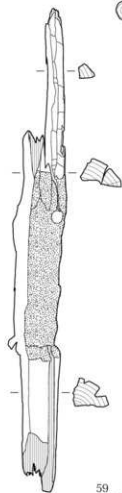
56  
9 K



57  
9 K



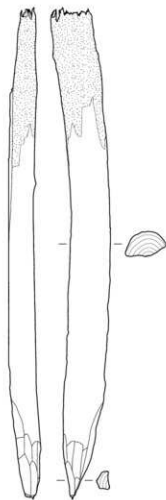
58  
9 K



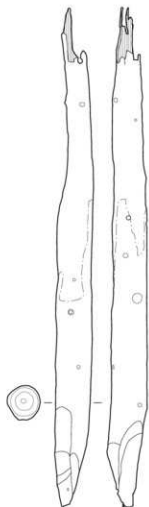
59  
9 K



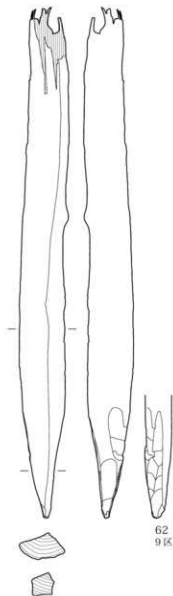
杭



60  
9区



61  
9区



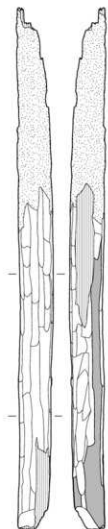
62  
9区

0 (1区) 20cm

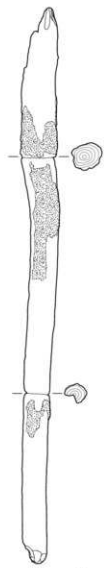
杭



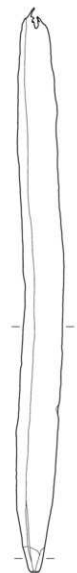
63  
9区



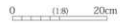
64  
9区



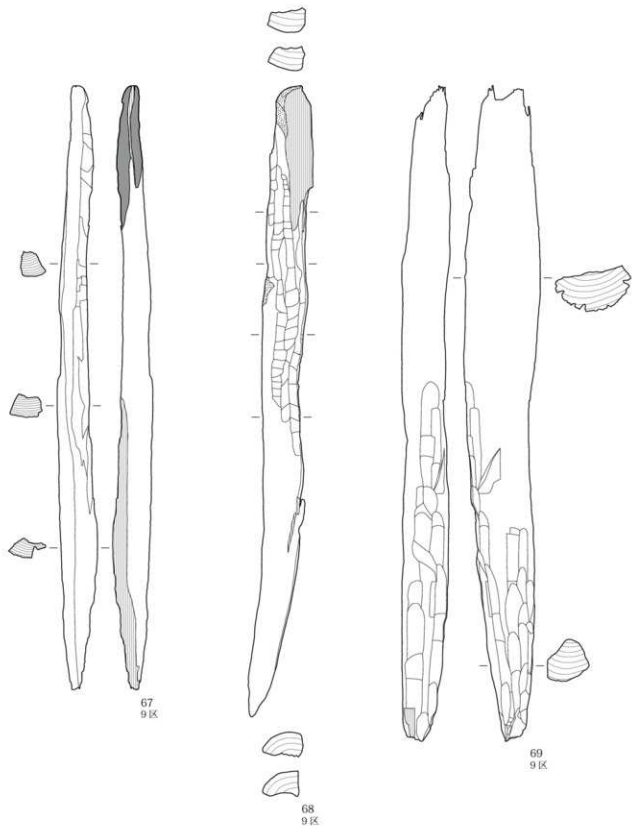
65  
9区



66  
9区



杭

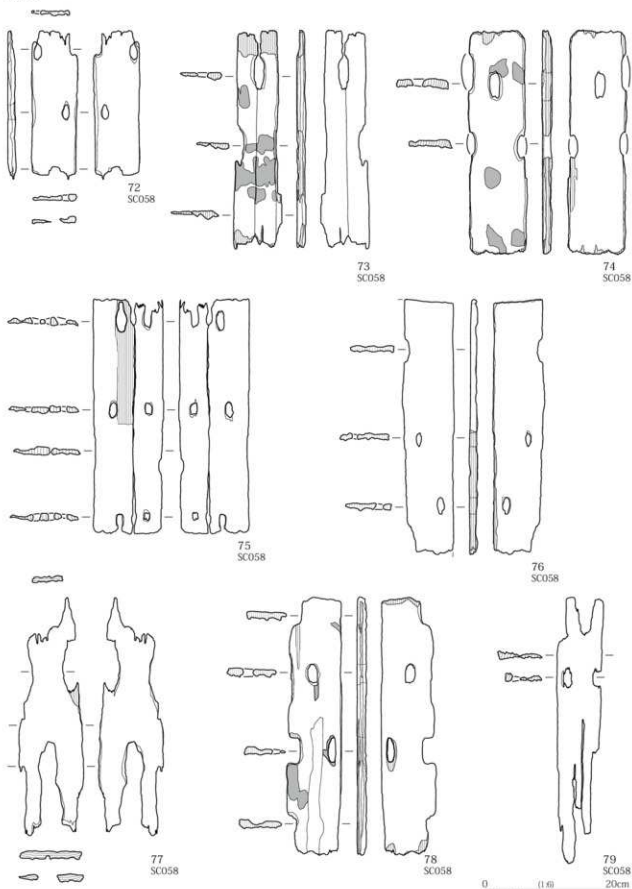


杭

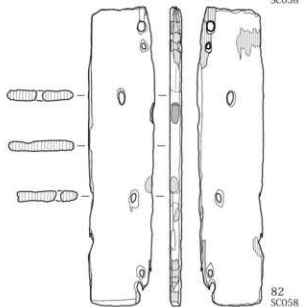
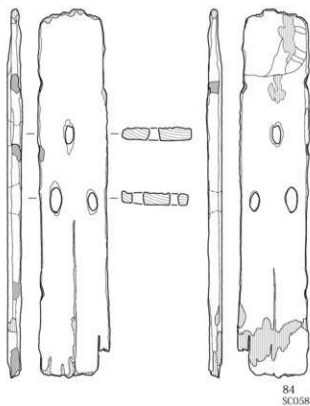
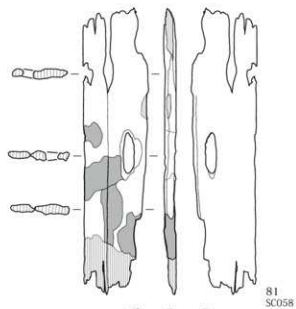
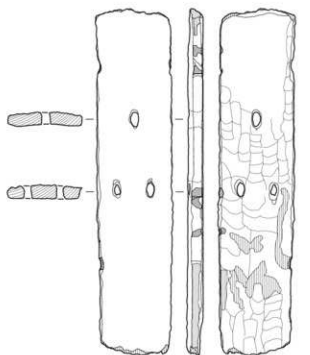




田下駄

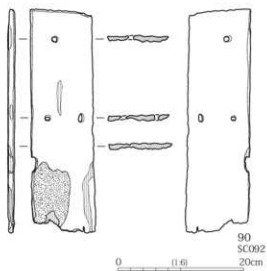
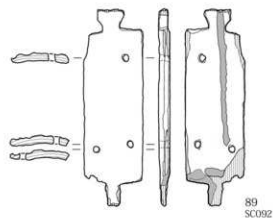
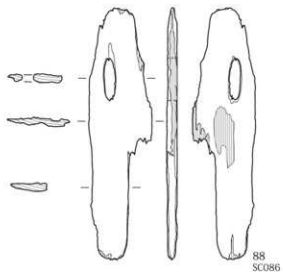
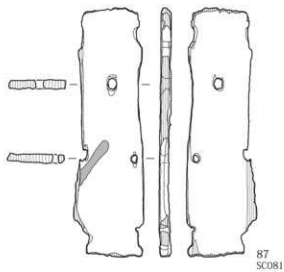
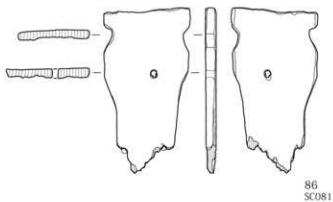
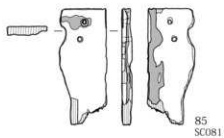


田下駄



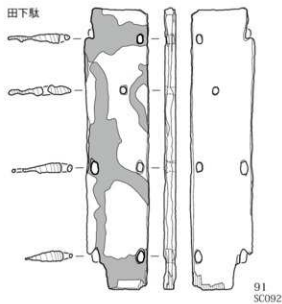
0 (1.0) 20cm

田下駄

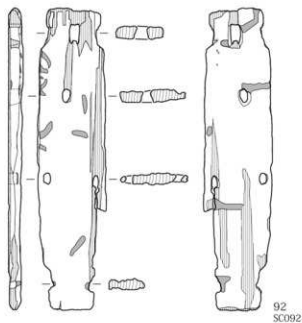


0 (1.6) 20cm

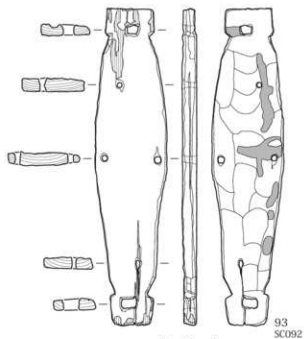
田下駄



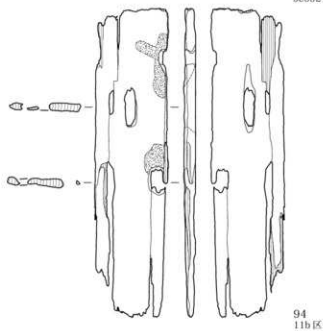
91  
SC092



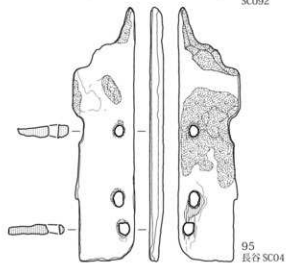
92  
SC092



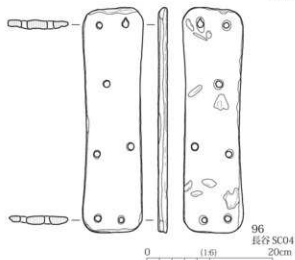
93  
SC092



94  
11b区



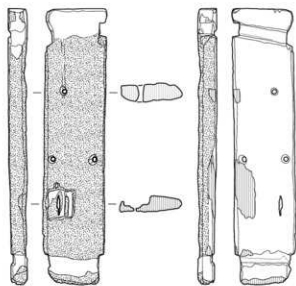
95  
長谷SC04



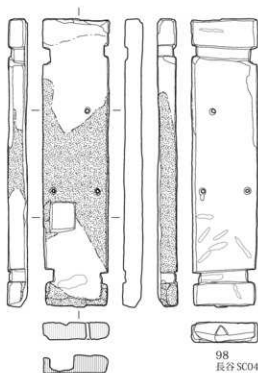
96  
長谷SC04

0 (16) 20cm

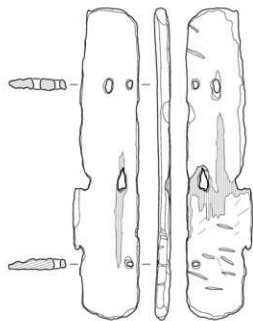
田下駄



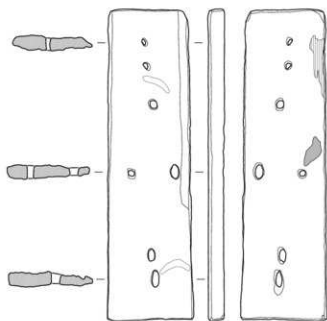
97  
長谷 SC04



98  
長谷 SC04



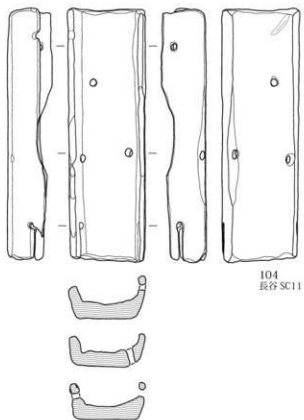
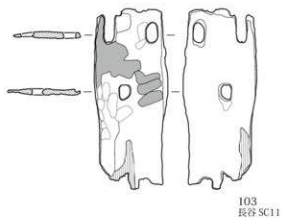
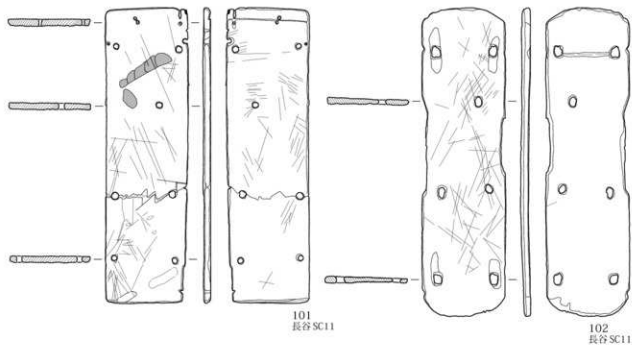
99  
長谷 SC04



100  
長谷 SC04

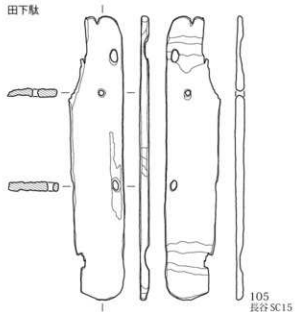
0 (16) 20cm

田下駄

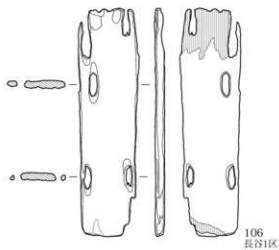


0 (1/6) 20cm

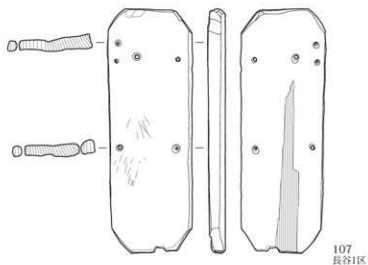
田下駄



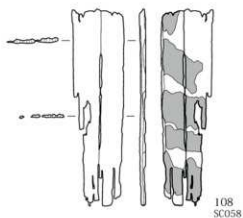
105  
長谷SC15



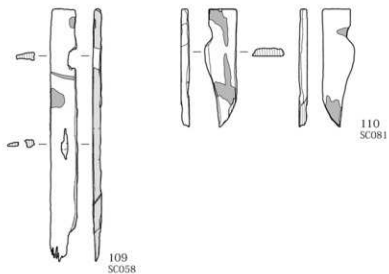
106  
長谷1区



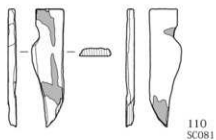
107  
長谷1区



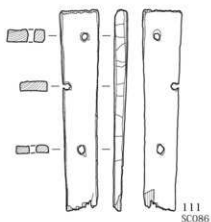
108  
SC058



109  
SC058



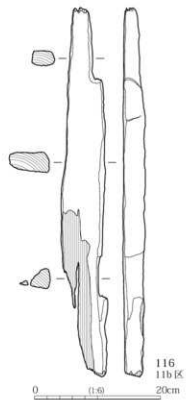
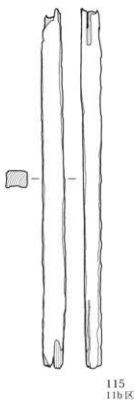
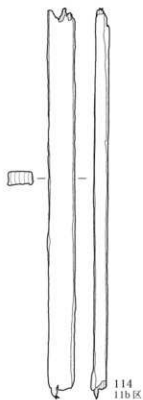
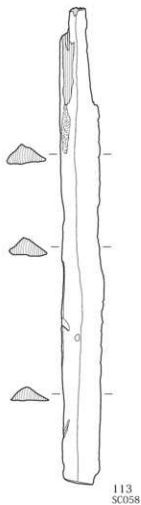
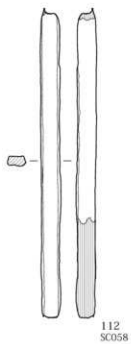
110  
SC081



111  
SC086

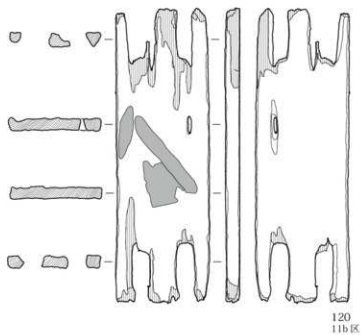
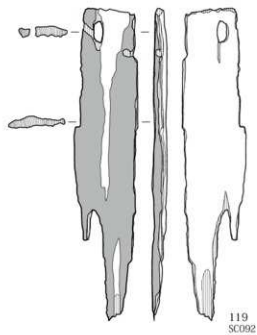
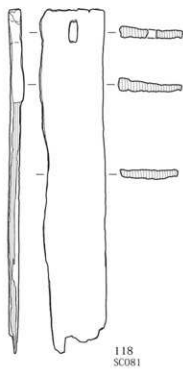
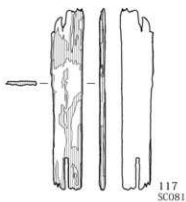
0 (1cm) 20cm

建築部材その他



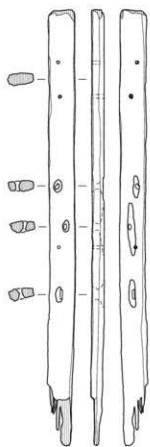


建築部材その他

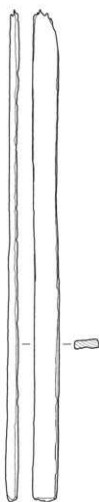


0 (1.8) 20cm

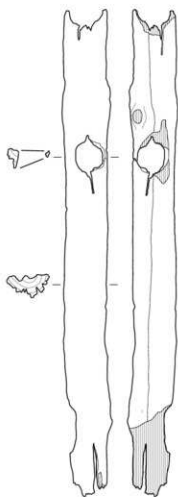
建築部材その他



121  
SC058



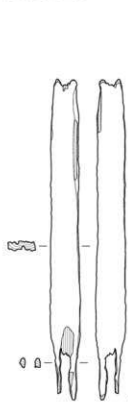
122  
SC058



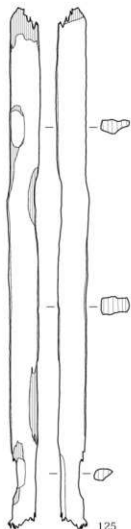
123  
SC058

0 10 20 30 40cm

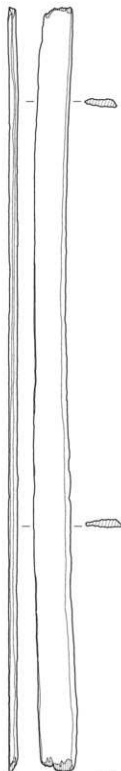
建築部材その他



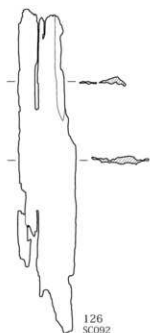
124  
SC081



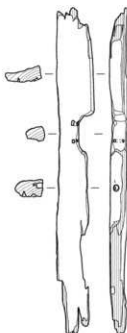
125  
SC081



128  
SC092



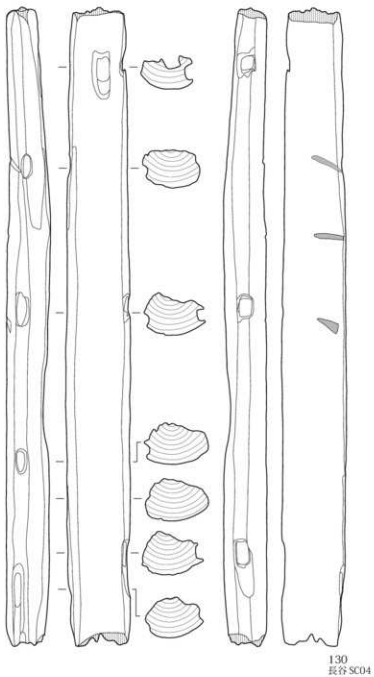
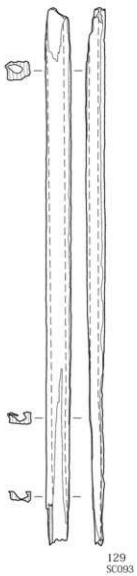
126  
SC092



127  
SC092

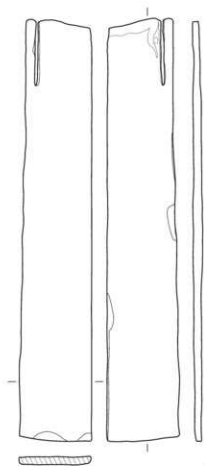
0 (1:2) 40cm

建築部材その他

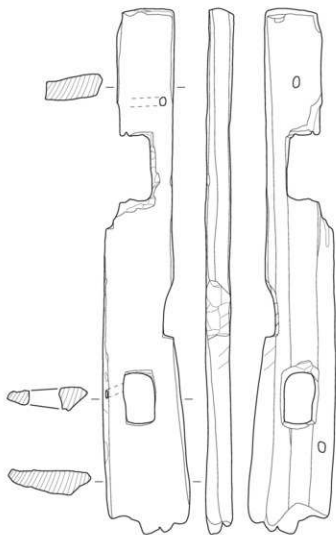


0 1:12 40cm

建築部材その他



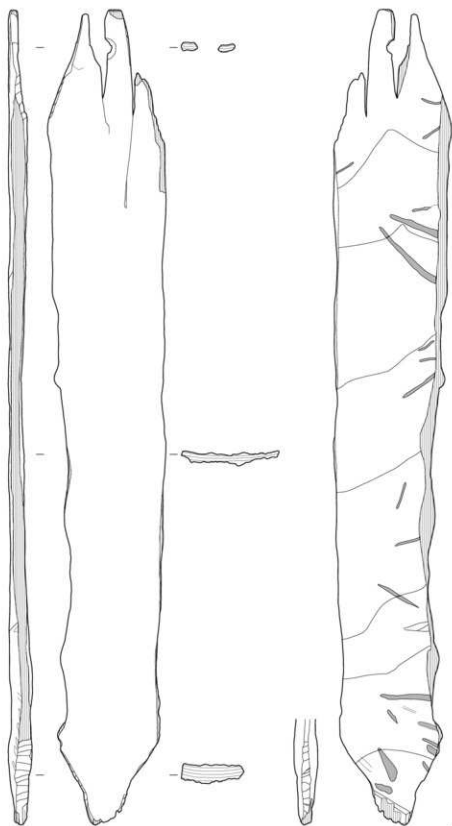
131  
長谷 SC04



132  
長谷 SC11

0 (1:12) 40cm

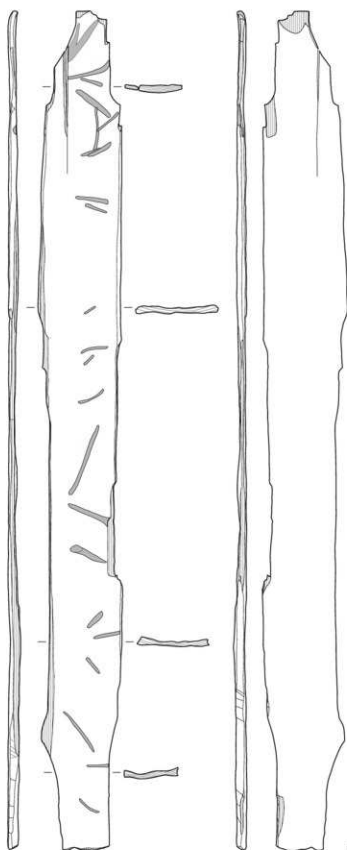
建築部材その他



133  
長谷 SC11

0 0.12 40cm

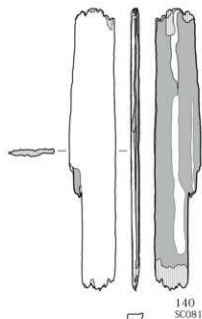
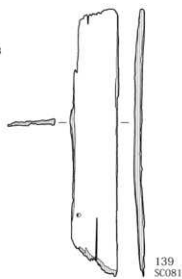
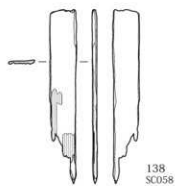
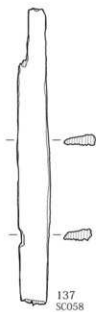
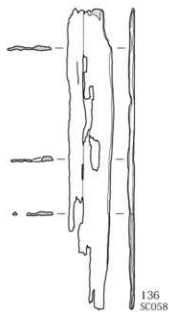
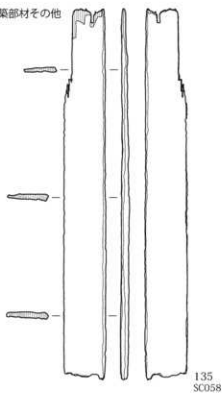
建築部材その他



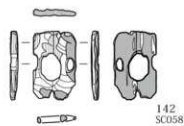
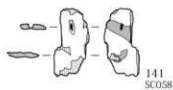
134  
段谷 SC11

0 (1:12) 40cm

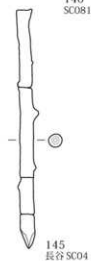
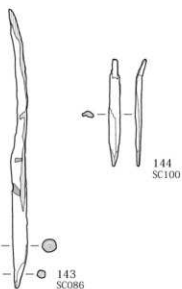
建築部材その他



不明木製品

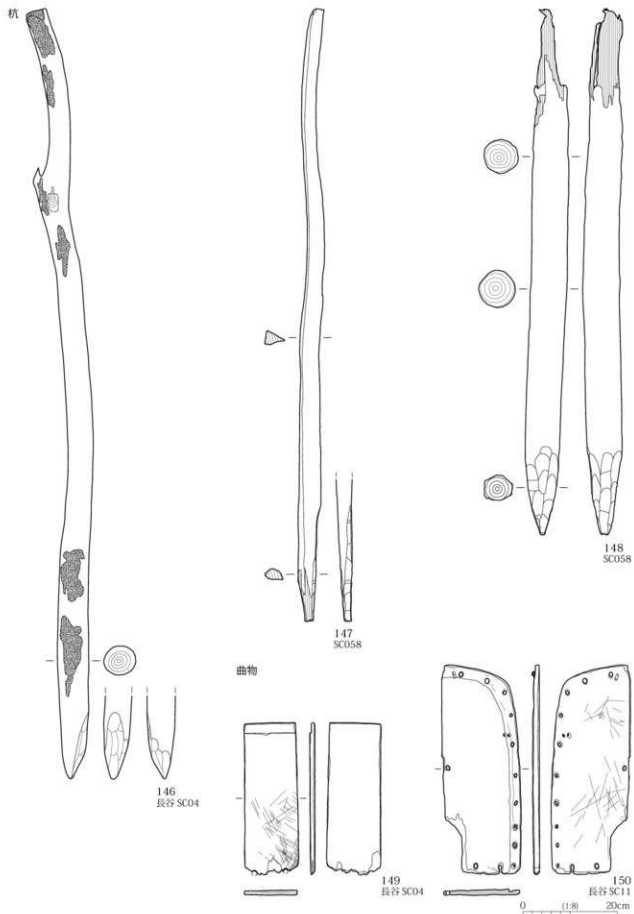


杭

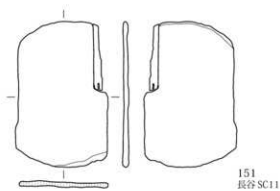


0 (1.8) 20cm

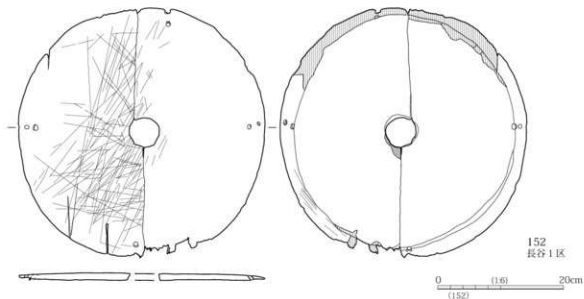




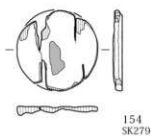
曲物



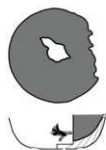
151  
長谷 SC11



152  
長谷 1区

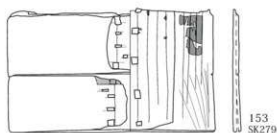


154  
SK279

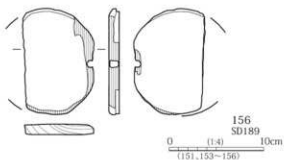


155  
SD189

■ 漆  
■ 漆



153  
SK279



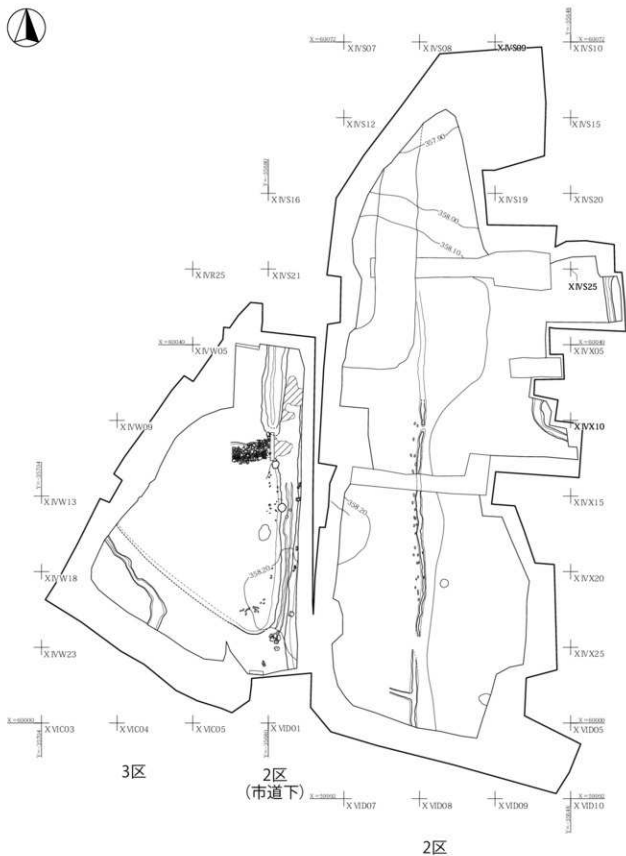
156  
SD189

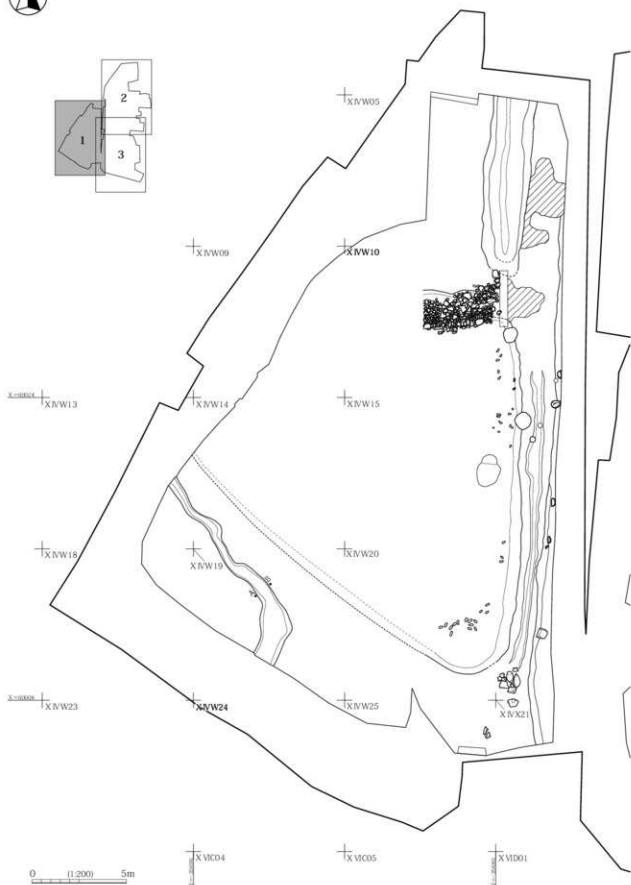
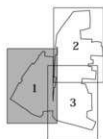
# 長谷鶴前遺跡群

遺構図版

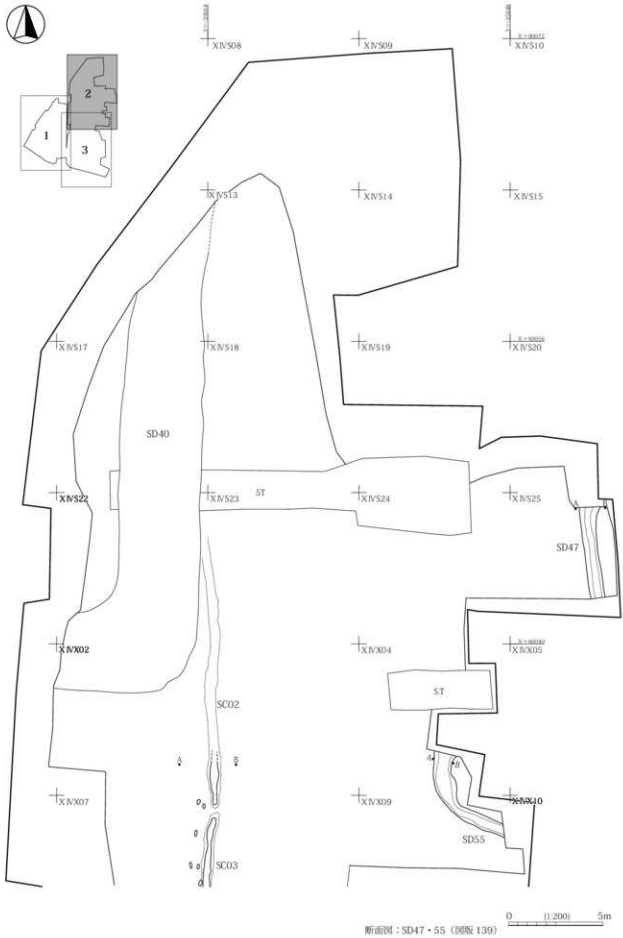
遺物図版



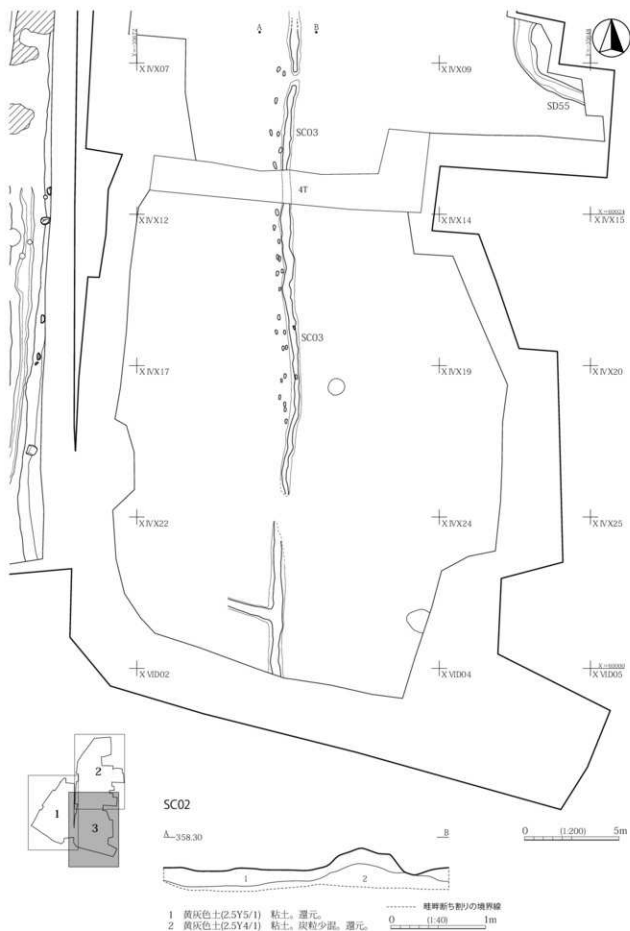




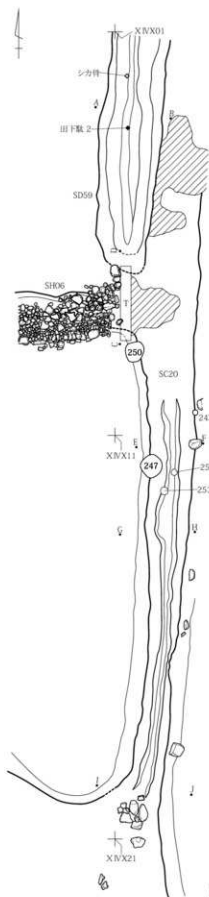
断面図：SD42（図版 139）



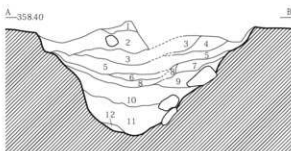
断面図：SD47・55 (図版 139)



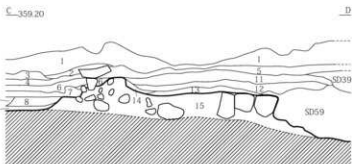




SD59



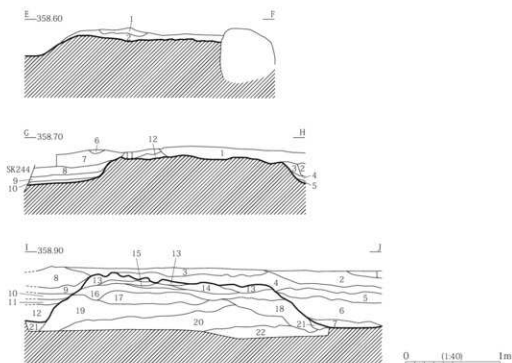
- 1 灰棕-ア色土(5Y4/2) 山砂・炭化物微混。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/2) 山砂混。炭化物少混。
- 3 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質土。大黒色土アア砂アア微混。大灰白色粘土アア少混。
- 4 棕-ア褐色土(2.5Y4/3) 山砂。
- 5 灰白色土(5Y4/1) 粘質土。山砂少混。炭化物微混。
- 6 灰白色土(5Y4/1) 粘質土。山砂混。黒褐色土斑状に混。
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土。炭化物微混。灰白色粘土少混。
- 8 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘質土。黒褐色粘土斑状に少混。
- 9 黒褐色土(10YR2/1) 粘質土。山砂少混。
- 10 黒色土(10YR1.7/1) 泥炭。木片少混。棕-ア褐色粘質土混。
- 12 棕-ア黒色土(7.5Y3/1) 平安砂多混。



- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 山砂。
- 2 黄灰色土(2.5Y4/1) 山砂・中灰色土少混。
- 3 灰棕-ア色土(5Y5/3) 砂質。全体的に酸化。
- 4 灰黄色土(2.5Y6/2) 粘質土。炭化物微混。還元。
- 5 灰黄色土(2.5Y6/2) 粘質土。山砂微混。
- 6 灰白色土(7.5Y6/1) 粘質土。炭化物微混。還元。
- 7 灰白色土(7.5Y6/1) 粘質土。山砂・小黄灰色粘土アア微混。還元。
- 8 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂。還元土。
- 9 暗棕-ア灰色土(2.5GY4/1)と灰白色土(5Y5/1)の混合層。
- 10 灰白色土(7.5Y4/1) 山砂。還元。
- 11 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 山砂。炭化物微混。
- 12 黄灰色土(2.5Y4/1) 山砂。炭化物微混。
- 13 灰白色土(5Y4/1) 粘質土。山砂少混。
- 14 黒褐色土(2.5Y3/2) 山砂少混。炭化物微混。
- 15 灰白色土(5Y5/1) 粘質土。

0 (1:40) 1m

0 (1:150) 5m



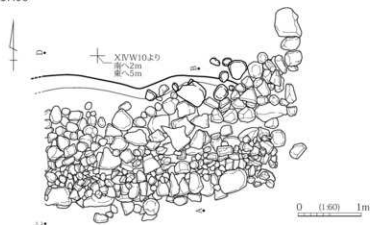
E・F・G・H

- 1 灰色土(7.5Y4/1) 山砂。造成土。
- 2 灰砂-了色土(5Y5/2) 山砂。造成土。
- 3 灰色土(10Y4/1) 山砂。上部は粘質土。
- 4 灰色土(7.5Y6/1) 山砂。
- 5 灰色土(5YR5/1) 粘質土。
- 6 黒褐色土(10YR3/1) 山砂。
- 7 灰砂-了色土(5Y5/3) 山砂。造成土。
- 8 灰色土(7.5Y5/1) 山砂。造成土か。
- 9 灰色土(7.5Y5/1) 砂。
- 10 灰砂-了色土(7.5Y5/2) 粘質土。
- 11 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 山砂。灰白色粘質土混。
- 12 黒褐色土(2.5Y3/2) 山砂。
- 13 黒褐色土(2.5Y3/1) 砂微混。

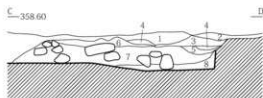
I・J上面

- 1 灰色土(5Y5/1) 山砂。
- 2 黄灰色土(2.5Y4/1) 山砂。
- 3 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂。造成土か。
- 4 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂。小灰黄褐色土アロク少混。造成土か。
- 5 黄灰色土(2.5Y6/2) 山砂。造成土か。
- 6 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂。中灰黄褐色土アロク少混。造成土か。
- 7 黄灰色土(2.5Y4/1) 山砂。
- 8 黄灰色土(2.5Y5/1) 山砂。
- 9 灰色土(5Y4/1) 山砂。中灰黄褐色土アロク微混。
- 10 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂。極小灰黄色粘土アロク少混。
- 11 灰色土(7.5Y4/1) 山砂。
- 12 灰色土(7.5Y5/1) 山砂。
- 13 灰黄褐色土(10YR4/2) 山砂。かたくしまる。
- 14 黒褐色土(2.5Y3/2) 山砂。かたくしまる。
- 15 暗褐色土(10YR3/3) 山砂。かたくしまる。
- 16 黒褐色土(10YR3/1) 山砂。
- 17 黒褐色土(2.5Y3/1) 山砂。炭化物微混。
- 18 黒褐色土(10YR3/1) 粘質土。山砂少混。
- 19 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘質土。山砂少混。
- 20 黒褐色土(10YR3/1) 粘質土。山砂少混。
- 21 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘質土。砂・未分解植物微混。水田耕土。
- 22 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質土。砂・未分解植物微混。

SH06



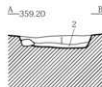
- 1 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。山砂少量。
- 2 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘土。山砂少量。還元。
- 3 黒褐色土(2.5Y5/1) 粘土。大灰黄色片が多少混。
- 4 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。大明棕ア灰土砂が多少混。
- 5 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。大粘土が多少混。山砂混。やや硬質。



- 1 浅黄色土(5Y7/3) 山砂。
- 2 明棕ア灰土(5GY7/1) 砂。海汰良し。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/2) 粘土。山砂多混。海汰やや悪い。
- 4 灰白色土(5Y7/2) 山砂。やや硬質。
- 5 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘土。山砂多混。
- 6 黒褐色土(2.5Y3/2) 粘土。山砂少量。海汰悪い。
- 7 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。大明棕ア灰土砂が多少混。
- 8 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。大粘土が多少混。山砂混。やや硬質。

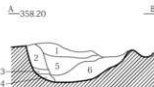
0 (1:40) 1m

SD42



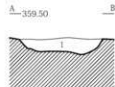
- 1 黒褐色土(10YR3/1) 砂。大砂粒多混。
- 2 黒色土(10YR2/1) 砂粒状砂。

SD47



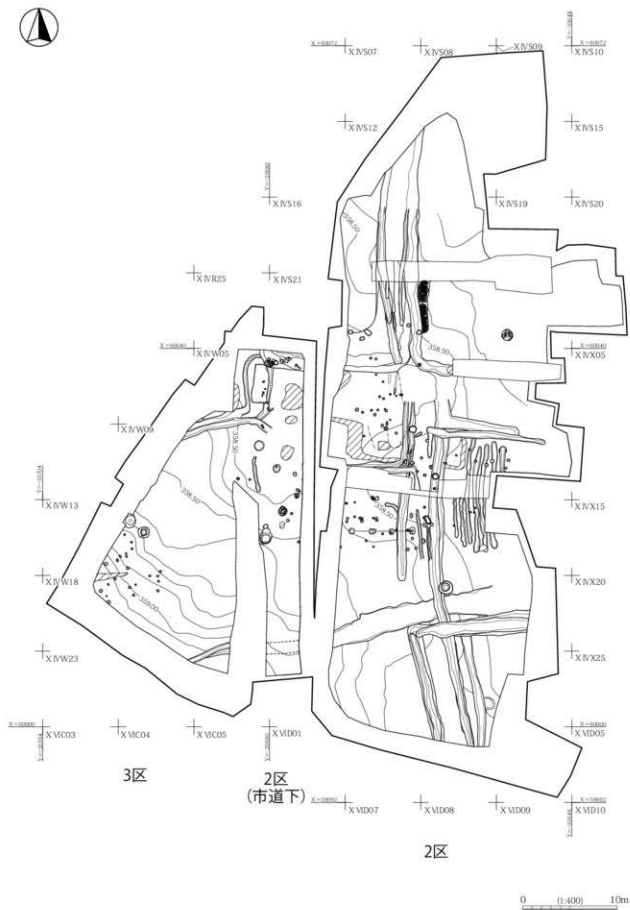
- 1 灰色土(5Y4/1) 粘土。未分解植物片混。
- 2 灰色土(5Y4/1) 山砂多混。未分解植物片混。
- 3 灰棕ア色土(5Y6/2) 細砂。均一。
- 4 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。細砂・未分解植物片少混。
- 5 灰色土(5Y5/1) 粘土。灰白色粘土結核混。
- 6 砂ア黒色土(5Y3/1) 粘土。未分解植物片混。

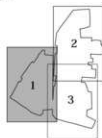
SD55

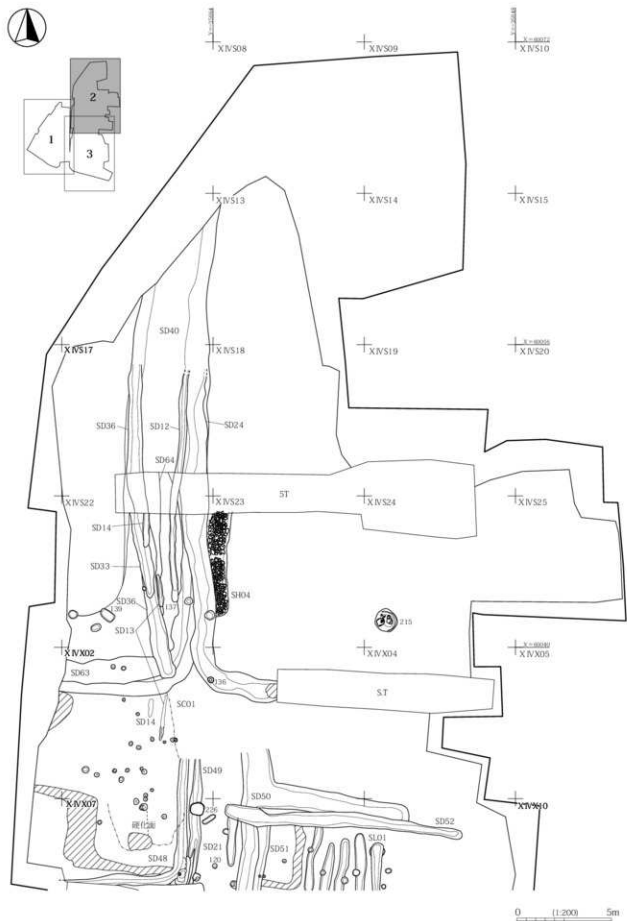


- 1 灰黄色土(2.5Y6/2) 粘土。炭粒少量。やや硬質。

0 (1:40) 1m

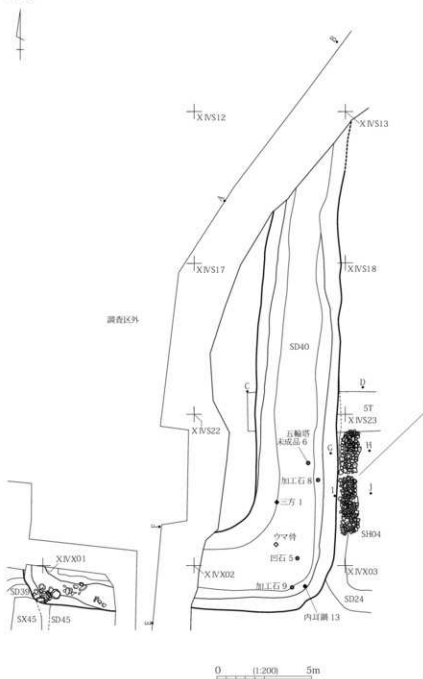




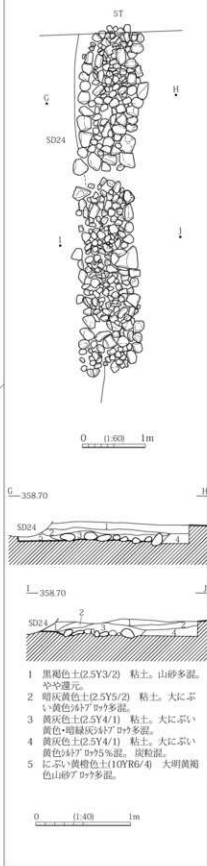




SD40



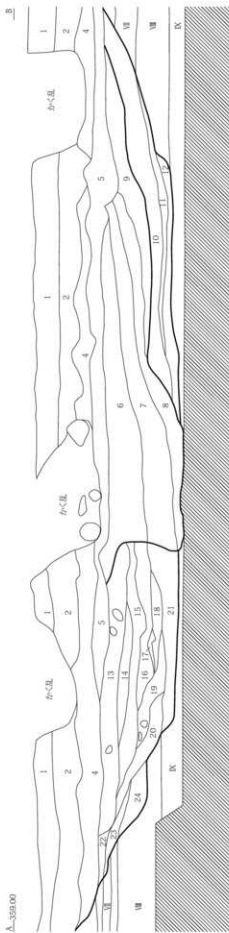
SH04





SD40

△\_599.00

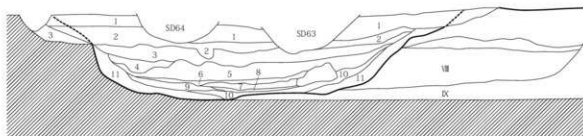


- 1 暗灰褐色土(2.5Y5/2) 粘土, 大量褐色土片が多量。
- 2 暗灰褐色土(2.5Y5/3) 粘土, 山砂の全体的に多量。人間緑灰色粘土・土に灰黄色山砂が多少多量。
- 3 黒灰色土(2.5Y3/1) 粘土, 腐食。
- 4 緑灰色土(5G5/1) 粘土, 山砂の少量。腐化すると褐色にみえる。
- 5 土に灰黄色土(2.5Y6/3) 山砂の層。極小の片多量。全体的に、細砂に近い。
- 6 土に灰黄色土(2.5Y6/3) 山砂の層。極小の片多量。
- 7 暗灰褐色土(2.5Y5/2) 粘土, 山砂の多量。若干腐食。
- 8 土に灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂。極小の層の全体的に多量。
- 9 暗灰色土(2.5Y4/1) 粘土, 山砂の少量。
- 10 黒灰色土(2.5Y4/1) 粘質土。細砂多量。未分解植物片少量。腐植土。
- 11 黒灰色土(2.5Y4/1) 粘質土。細砂多量。未分解植物片少量。
- 12 黄灰色土(10Y5/1) 粘土, 山砂の少量。極小の片少量。
- 13 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土, 細砂少量。
- 14 黒灰色土(2.5Y4/1) 粘土, 細砂少量。未分解植物片多量。やや灰質木片混。
- 15 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土, 未分解植物片少量。若干乾葉。
- 16 黄灰色土(2.5Y7/2) 粘土, 若干乾葉。
- 17 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土, 未分解植物片多量。
- 18 黄灰色土(2.5Y3/1) 粘質土。未分解植物片多量。泥炭質強い。若干細砂に近い。
- 19 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土, 細砂少量。未分解植物片少量。
- 20 黄灰色土(5Y4/1) 粘質土。細砂少量。未分解植物片少量。
- 21 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土, 緑灰色土主体が多少多量。灰質混。やや粘りに近い。
- 22 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土, 山砂の少量。
- 23 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土, 細砂の全体的に少量。やや乾葉混。

SD40

C—358.40

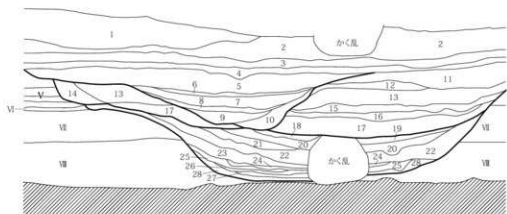
D



- 1 砂・黄色土(2.5Y6/4) 粘土。山砂多混。大粘土了の多混。
- 2 黄灰色(2.5Y6/1) 粘土。
- 3 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘土。炭粒・未分解植物片混。
- 4 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。中灰黄色土了の多混。
- 5 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 粘土。中灰黄色土粘土了の多混。
- 6 灰黄色土(2.5Y6/2) 粘土。
- 7 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。炭粒混。
- 8 灰黄色土(2.5Y6/2) 6層と同質。
- 9 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。炭粒混。
- 10 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 粘土。細砂・未分解植物片少混。
- 11 黄灰色土(2.5Y4/1) 山砂多混。

E—359.50

F



- 1 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。山砂多混。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。山砂多混。中灰色粘土了の多・にふ黄色山砂了の多混。
- 3 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 粘土。未分解植物物。還元。
- 4 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘土。
- 5 灰黄色土(2.5Y6/2) 粘土。山砂多混。
- 6 灰黄色土(2.5Y7/2) 粘土。
- 7 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 另外質土。細砂混。炭粒混。
- 8 灰黄色土(2.5Y7/2) 粘土。明青灰色粘土混。
- 9 浅黄色土(2.5Y7/3) 粘土。
- 10 にふ黄色土(2.5Y6/4) 山砂多混。大青灰色粘土了の多混。埋め土か。
- 11 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土。山砂少混。
- 12 記載なし
- 13 にふ黄色土(2.5Y6/4) 山砂多混。
- 14 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。山砂混。
- 15 浅黄色土(2.5Y7/4) 粘土。山砂多混。
- 16 灰オリーブ色土(5Y5/3) 山砂層。
- 17 浅黄色土(2.5Y7/4) 粘土。
- 18 明黄褐色土(2.5Y7/6) 粘土。炭粒混。
- 19 にふ黄色土(2.5Y6/3) 粘土。炭粒混。
- 20 浅黄色土(2.5Y7/4) 粘土。大浅黄色粘土了の多混。
- 21 黒色土(2.5Y2/1) 粘土。大浅黄色粘土了の多混。
- 22 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘土。
- 23 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。
- 24 浅黄色土(2.5Y7/4) 粘土。
- 25 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。
- 26 浅黄色土(2.5Y7/4) 粘土。
- 27 浅黄色土(2.5Y7/3) 粘土。
- 28 記載なし

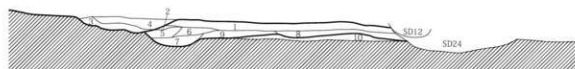
0 (1:40) 1m



SC01

A-358.70

B

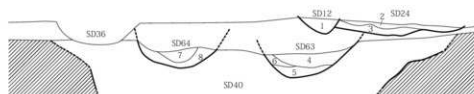


- 1 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。かたくしまる。大黄灰色粘土+砂少混。
- 2 にぶ黄色土(2.5Y6/3) 粘土。かたくしまる。山砂混。
- 3 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。やや泥混。大黄灰色粘土+砂少混。
- 4 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。山砂混。大にぶい黄色土+黒褐色粘土+砂少混。
- 5 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘土。山砂+大黄灰色粘土+砂少混。
- 6 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 粘土。山砂混。
- 7 黄褐色土(2.5Y5/3) 粘土。大オリーブ灰色粘土+砂少混。炭粒少混。
- 8 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。山砂混。大黄灰色粘土+砂少混。
- 9 明黄褐色土(10YR6/6) 粘土。山砂多混。
- 10 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。かたくしまる。山砂少混。還元。

SD12・24・63・64

C-358.70

D

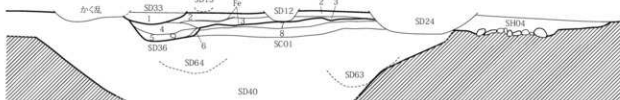


- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土。山砂+大褐色粘土+砂少混。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 粘土。山砂多混。
- 3 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 大黄灰色粘土+砂多混。
- 4 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。大黒褐色粘土+砂少混。
- 5 にぶ黄色土(2.5Y6/3) 砂質土。砂少混。
- 6 記載なし。
- 7 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。炭粒少混。
- 8 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘土。大黄灰色粘土+砂少混。

SC01, SD33・36

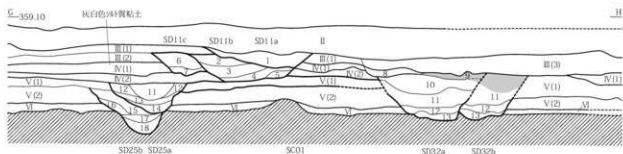
E-358.70

F



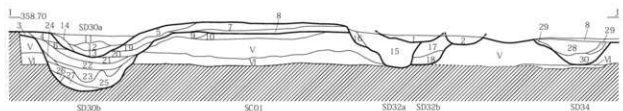
- 1 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。山砂少混。
- 2 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。かたくしまる。山砂少混。還元。
- 3 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土。
- 4 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。山砂多混。
- 5 灰色土(10Y4/1) 粘土。山砂少混。
- 6 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。山砂少混。
- 7 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。かたくしまる。山砂少混。
- 8 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘土。かたくしまる。山砂多混。下層の黒褐色粘土+砂少混。

0 (1:40) 1m



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 山砂多混。SD11a埋土。
- 2 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂多混。大褐灰色土アワケ少混。SD11b埋土。
- 3 黄灰色土(2.5Y5/1) 大褐灰色土アワケ多混。SD11b埋土。
- 4 黄灰色土(2.5Y4/1) 山砂多混。大黄灰色土アワケ多混。SD11b埋土。
- 5 明黄褐色土(10YR7/6) 大明黄褐色土アワケ多混。黄灰色土混。SD11b埋土。
- 6 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 山砂多混。大褐灰色土アワケ少混。SD11c埋土。
- 7 黄灰色土(2.5Y5/1) 山砂多混。大に赤い黄褐色土アワケ多混。SD11c埋土。
- 8 褐灰色土(10YR4/1) 腐植土。山砂多混。還元。
- 9 に赤い黄褐色土(10YR7/4) 山砂多混。
- 10 記載なし
- 11 灰黄褐色土(10YR5/2) 粗砂。硬くしまる。
- 12 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂質粘土。
- 13 褐灰土(10YR5/1) 砂質粘土。粗砂混。
- 14 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂。粘土質。
- 15 褐灰土(10YR5/1) 砂質粘土質土。粗砂混。
- 16 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂質粘土質土。粗砂混。
- 17 褐灰土(10YR5/1) 粘土砂。
- 18 黒褐色土(10YR3/1) 粘土。未分解植物流。

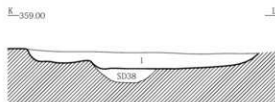
## SC01, SD30・32・34



- 1 に赤い黄褐色土(10YR5/4) 砂礫少混。
- 2 に赤い黄褐色土(10YR5/4) 砂礫・白色土少混。極小白色土アワケ微混。
- 3 褐色土(10YR4/4) 砂礫・極小黄褐色土アワケ少混。
- 4 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 砂礫少混。極小黄褐色土アワケ微混。
- 5 に赤い黄褐色土(10YR5/3) 下部やや赤い質。砂礫少混。酸化した砂礫微混。
- 6 砂アワ褐色土(2.5Y4/3) 砂礫少混。極小黄褐色土アワケ褐色土微混。
- 7 褐色土(10YR4/4) しまり強。砂礫少混。
- 8 砂アワ褐色土(2.5Y4/3) しまり強。砂礫少混。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強。砂礫・V層アワケ少混。
- 10 砂アワ褐色土(2.5Y4/3) 部分的に赤い質土。しまり強。砂礫少混。暗灰黄色粘土混。
- 11 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。細砂微混。
- 12 褐色土(10YR4/4) 山砂。地山層上部に赤い黄褐色土アワケ微混。
- 13 灰黄褐色土(10YR5/2) 山砂。粘土混。
- 14 灰黄褐色土(10YR5/2) 山砂。粘土混。
- 15 灰色土(5Y4/1) 粘質土と細砂の互層。
- 16 砂アワ褐色土(2.5Y4/3) 極小灰色土アワケ少混。小炭化物微混。
- 17 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 山砂。
- 18 灰色土(5Y5/1) 粘質土。小V層アワケ少混。細砂微混。
- 19 黄褐色土(10YR5/6) 砂礫と細砂の互層。大褐灰色粘土アワケ多混。酸化。
- 20 褐色土(10YR4/4) 山砂。極小灰色粘土アワケ微混。立ち上がり付近酸化。
- 21 褐色土(10YR4/4) 山砂。
- 22 灰色土(5Y5/1) 山砂。層下部灰砂アワケ少混。還元。
- 23 灰色土(5Y4/1) 細砂。礫少混。還元。
- 24 灰色土(5Y4/1) 砂。還元。
- 25 灰色土(5Y5/1) 砂。還元。
- 26 砂アワ黒色土(5Y3/1) 山砂。還元。
- 27 灰色土(5Y4/1) 粘質土。硬直し。
- 28 砂アワ黒色土(5Y3/1) 粗砂。山砂混。炭化物粒少混。
- 29 灰砂アワ色土(5Y4/2) 粗砂。炭化物粒少混。
- 30 黒色土(5Y2/1) 粘土。砂アワ微混。

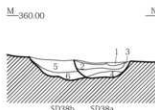
0 1:40 1m

SD29



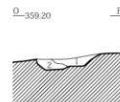
1 にふい黄褐色土(10YR7/4) 砂。大褐色粘土アワテ混。

SD38a・b



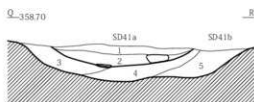
1 褐色土(10YR5/1) 山砂。  
2 褐色土(10YR5/1) 山砂。  
3 褐色土(10YR5/1) 粘土。  
4 灰黄褐色土(10YR5/2) 黄褐色・暗褐色砂質アワテ混。  
5 記載なし  
6 記載なし

SD39



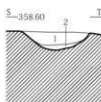
1 にふい黄褐色土(10YR6/4) 山砂。  
2 にふい黄褐色土(10YR6/3) 砂質砂。

SD41a・b



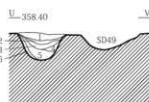
1 褐色土(10YR5/1) 山砂。中風化礫少混。  
2 褐色土(10YR5/1) 山砂。小風化礫少混。  
3 褐色土(10YR6/1) 砂質砂。  
4 褐色土(10YR6/1) 山砂。  
5 褐色土(7.5Y5/1) 山砂。

SD45



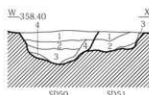
1 褐色土(10YR5/1) 粘土。埋め土か。  
2 砂ア灰色土(5G7/6) 山砂多混。

SD48・SD49



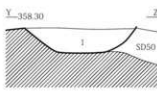
1 にふい黄色土(2.5Y6/4) 細砂。  
2 灰褐色土(5YR6/2) 砂。淘汰良し。  
3 褐色土(5YR5/1) 粘土。淘汰良し。  
4 灰色土(5Y5/1) 砂質土。大山砂ア少混。  
5 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。大山砂ア少混。  
6 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 粘土。大山砂ア少混。

SD50・SD51



1 にふい黄褐色土(10YR6/4) 山砂。  
2 褐色土(10YR5/1) 粘土。  
3 灰褐色土(N4/0) 褐色土ア少混。  
4 黒褐色土(10YR3/1) 大砂ア少混。

SD52



1 灰(N4/0) 埋め土。粗粒砂。

SD57



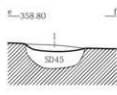
1 記載なし  
2 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。浅黄色粘土ア少・黒褐色粘土ア少混。  
3 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。大浅黄色粘土ア少混。

SD60



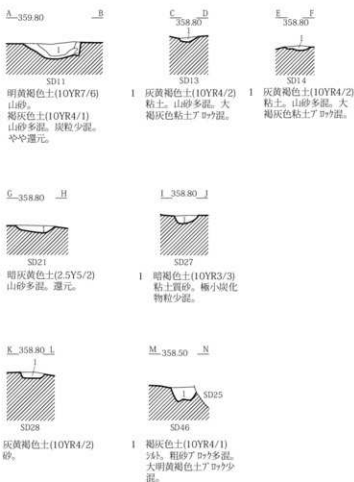
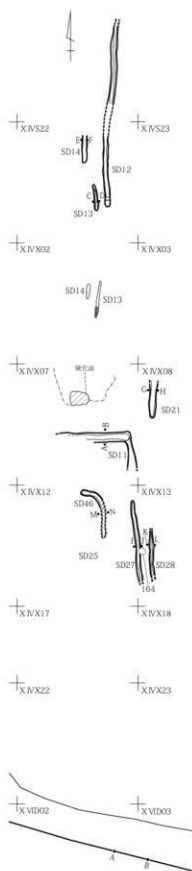
1 黄灰色土(10YR5/1) 粘土。山砂少混。還元。

SD65

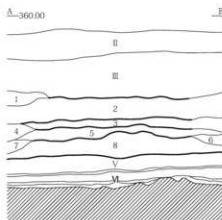


1 明黄褐色土(10YR6/6) 山砂層。

0 (1:40) 1m

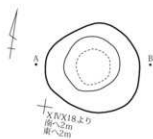


2区南壁道路跡

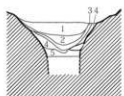


- I~8層=IV層
- 1 に近い黄褐色土(10YR4/3) 山砂。小黄褐色土アロフ少混。
  - 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 山砂。アロフ混。やや還元。
  - 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 山砂。小に多い黄褐色粘土アロフ少混。
  - 4 褐灰色土(10YR4/1) 粘土。山砂少混。
  - 5 褐灰色土(10YR4/1) しまりやや強。粘土アロフ黄褐色砂質土。小炭化物アロフ少混。
  - 6 褐灰色土(10YR4/1) 還元。
  - 7 灰褐色土(10YR4/1) 粘土。
  - 8 褐灰色土(10YR5/1) 粘土。しまりやや強。

SK170

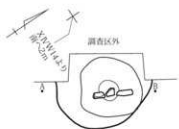


A-358.70 B

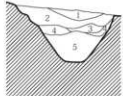


- 1 暗棕子-灰色土(N4/1) 粗砂。
- 2 暗棕子-灰色土(N4/1) 粘土。
- 3 灰色土(N4/0) 砂質粘土。山砂少量。
- 4 暗棕子-灰色土(N3/1) 砂。小炭化物粒混。未分解植物片少量。
- 5 黒色土(N2/1) 粘質砂。

SK171

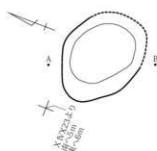


A-359.40 B



- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 山砂混。
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 炭化物少量。
- 3 褐灰色土(10YR5/1)
- 4 褐灰色土(10YR5/1) 暗褐色土D+。褐灰色土D+混。炭化物少量。
- 5 記載なし

SK214



A-358.50 B

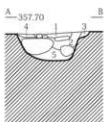


- 1 褐灰色土(10YR4/1) 棕子-色混混。山砂多量。
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 砂質粘土。中茶色土D+少量。

SK215

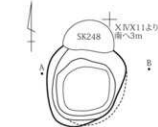


17 鐵製製品

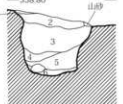


- 1 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土。山砂多量。
- 2 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。未分解植物片少量。
- 3 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土。大黒色粘土D+多量。細砂少量。
- 4 黄灰色土(2.5Y6/1) 粘土。大黒色粘土D+多量。
- 5 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘土。細砂少量。未分解植物片少量。還元。

SK244



A-358.80 B

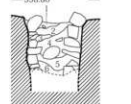


- 1 黒褐色土(2.5Y3/2) 山砂混。炭化物少量。
- 2 黄灰色土(2.5Y4/1) 山砂混。炭化物少量。
- 3 棕子-黒色土(5Y3/1) 山砂混。炭化物少量。
- 4 灰色土(5Y4/1) 山砂-大暗褐色土粒混。
- 5 灰色土(5Y4/1) 山砂。炭化物少量。
- 6 棕子-黒色土(5Y3/1) 粘。

SK247



A-358.80 B

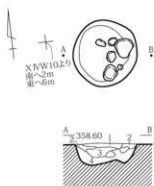


- 1 灰色土(5Y4/1) 粘質土。山砂少量。
- 2 棕子-黒色土(5Y3/1) 粘質土。細砂少量。
- 3 灰色土(5Y4/1) 粘。
- 4 灰色土(5Y4/1) 山砂。
- 5 棕子-黒色土(5Y3/1) 粘。小黒色粘土D+多量。
- 6 棕子-黒色土(5Y3/1) 山砂。黒色粘土D+少量。

0 (100) 2m

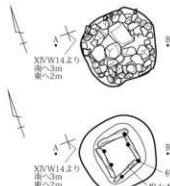


SK254



- 1 灰色土(5Y6/1) 粘土。淘汰よし。
- 2 黄褐色土(2.5Y 5/3) 粘土。山砂多混。
- 3 灰色土(5Y5/1) 粘土。大灰色粘土アツク混。還元。淘汰悪い。
- 4 灰色土(7.5Y5/1) 粘土。山砂多混。大灰色粘土アツク多混。還元。淘汰悪い。

SH05

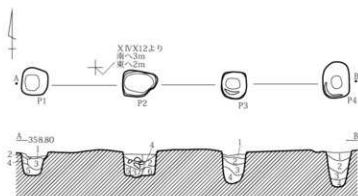


● 杭

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 山砂少混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3)
- 3 赤灰色土(2.5YR5/1) 粗い砂。
- 4 赤灰色土(2.5YR5/1) 砂質。
- 5 褐灰色土(10YR5/1) 粘土。
- 6 褐灰色土(10YR4/1) 砂。

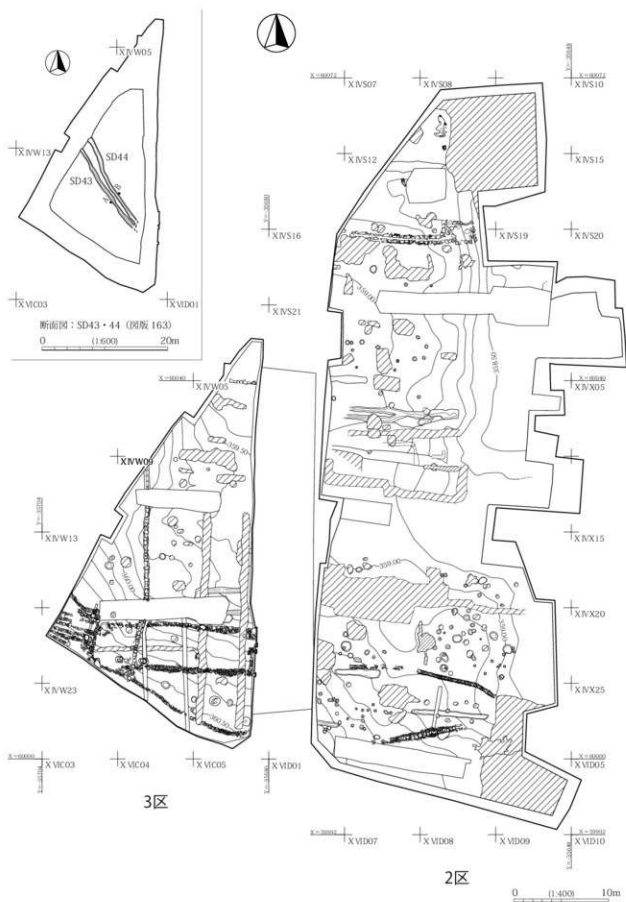
0 (1:60) 2m

ST03

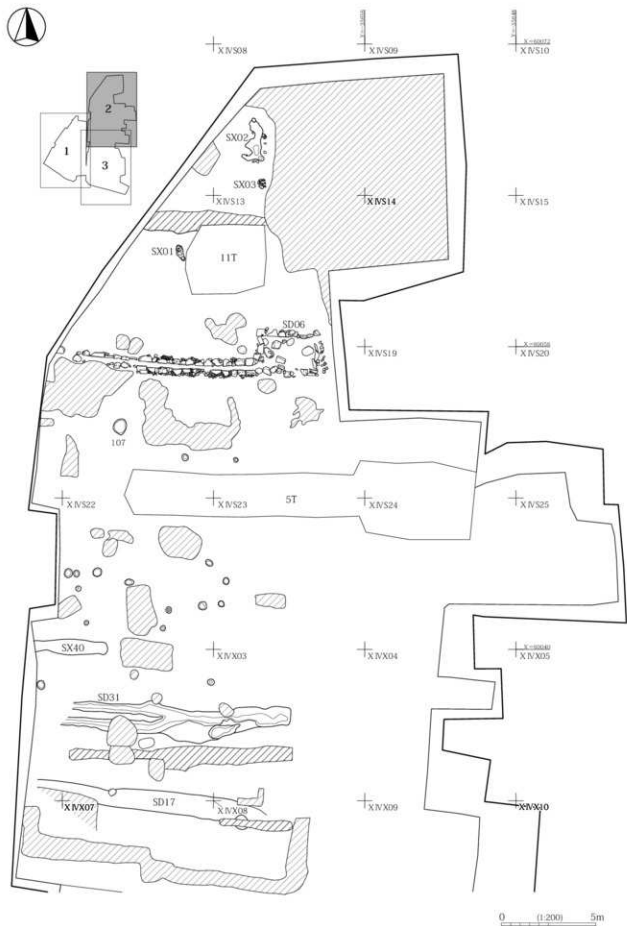


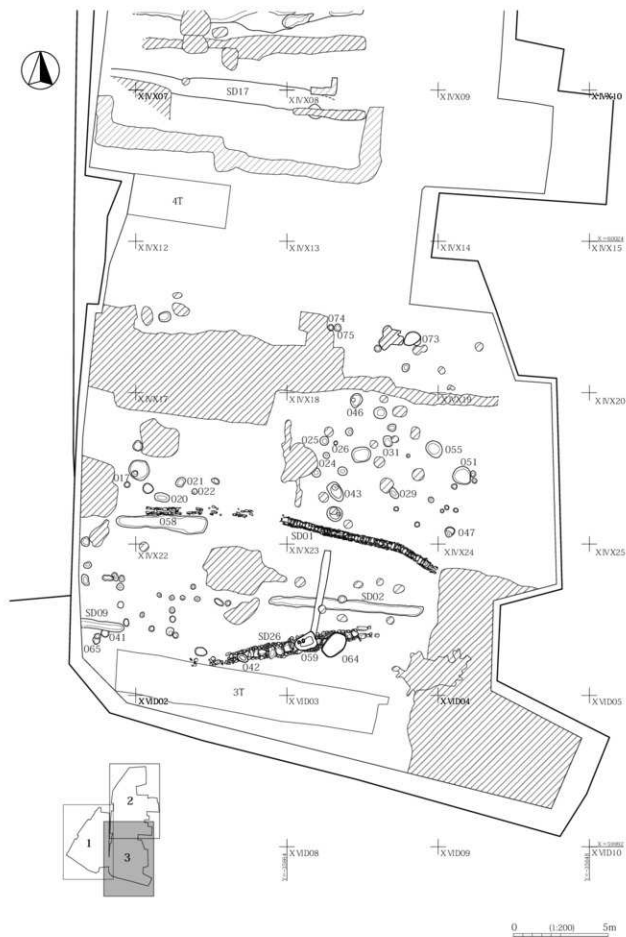
- P1
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 山砂混。極小灰色土アツク少混。
  - 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。細砂・極小黄褐色土アツク少混。
  - 3 灰褐色土(10YR4/1) 細砂混。中灰色粘質土アツク少混。極小黄褐色土アツク微混。
  - 4 灰褐色土(10YR4/1) 細砂・大灰色粘土アツク混。大黄褐色土アツク微混。
  - 5 砂・黒色土(5Y3/2) 細砂・大灰色粘土アツク混。
- P2
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 細砂多混。大黄褐色土アツク・Fe粒少混。
  - 2 灰褐色土(10YR4/1) 細砂混。小灰色粘土アツク少混。
  - 3 砂・黒色土(5Y3/1) 細砂・アツク混。
  - 4 砂・黒色土(5Y3/2) 細砂・黄褐色土アツク混。
  - 5 砂・黒色土(5Y3/2) 細砂混。大黄褐色土アツク多混。
  - 6 砂・黒色土(5Y3/1) 細砂混。
- P3
- 1 P2の1層に類似。
  - 2 灰褐色土(10YR4/1) 細砂混。中灰色粘土アツク少混。
  - 3 砂・黒色土(5Y3/1) 細砂・大灰色粘土アツク混。
  - 4 砂・黒色土(5Y3/2) 細砂混。中灰色粘土アツク少混。
- P4
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 細砂少混。大暗褐色土アツク・小黄褐色土アツク・Fe粒少混。
  - 2 灰褐色土(10YR4/1) 細砂混。中灰色粘土アツク少混。
  - 3 砂・黒色土(5Y3/2) 細砂混。中灰色粘土アツク少混。
  - 4 砂・黒色土(5Y3/1) 細砂多混。中灰色粘土アツク混。

0 (1:80) 2m

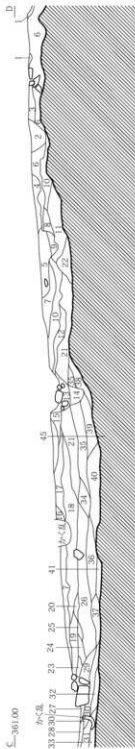












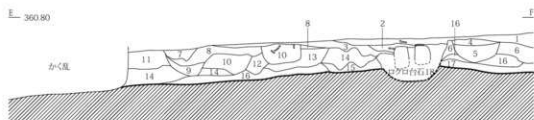
- 1 明黄褐色土(10YR6/6)
- 2 に近い黄褐色土(10YR6/3) 大白色粘土多量。大炭化物・大黄褐色土了D+少泥。
- 3 記載なし
- 4 黄褐色土(10YR5/2) 陶器片多量。
- 5 灰黄褐色土(10YR5/2) 極小白色粘土粒・陶器片多量。
- 6 記載なし
- 7 記載なし
- 8 黄褐色土(10YR4/1) 極小白色粘土小粒子泥。還元。
- 9 灰黄褐色土(10YR5/2) 山砂少泥。
- 10 灰黄褐色土(10YR5/3) 人砂了D+泥。中灰褐色土了D+中・中里褐色土了D+少泥。組成土。
- 11 に近い黄褐色土(10YR5/3)
- 12 記載なし
- 13 灰黄褐色土(10YR5/2) 大暗褐色土・里褐色土・プロック多量。
- 14 灰黄褐色土(10YR4/2) 暗褐色土多量。
- 15 に近い黄褐色土(10YR6/3) 極大炭化物少泥。山砂多量。石英粒泥。
- 16 記載なし
- 17 灰黄褐色土(10YR5/2) 大白色粘土了D+少泥。炭化鉄了D+泥。陶器片多量。組成土。
- 18 記載なし
- 19 記載なし
- 20 記載なし

- 21 に近い黄褐色土(10YR5/3) 山砂・中暗・黄褐色土了D+少泥。
- 22 に近い黄褐色土(10YR5/3) 灰褐色砂質了D+・里褐色土・褐色土泥。
- 23 記載なし
- 24 黄褐色土(10YR5/2) 陶器片小泥。暗褐色土。
- 25 灰黄褐色土(10YR5/2) 灰黄褐色土・小炭褐色土了D+主体。砂泥。
- 26 に近い黄褐色土(10YR5/3) 大灰褐色土・暗褐色土了D+主体。人型外覆層泥。
- 27 に近い黄褐色土(10YR5/4) 山砂少泥。小灰炭褐色土了D+泥。
- 28 灰黄褐色土(10YR5/2) 灰黄褐色土了D+小炭化鉄砂質了D+泥。
- 29 灰黄褐色土(10YR5/2) 中灰化物層泥。小褐色土了D+泥。
- 30 褐色土(10YR5/1) 灰黄褐色土了D+主体。小暗褐色土了D+泥。
- 31 に近い黄褐色土(10YR5/3) 炭化物泥分泥。黄褐色砂質了D+多泥。
- 32 灰黄褐色土(10YR5/2) 灰黄褐色土・暗褐色土了D+主体。砂泥。
- 33 に近い黄褐色土(10YR5/3) 暗褐色土泥。
- 34 灰黄褐色土(10YR4/2) 暗褐色土多量。大灰褐色土・黄褐色土了D+泥。
- 35 灰黄褐色土(10YR5/2) 暗褐色土多量。大灰褐色土・黄褐色土了D+泥。
- 36 に近い黄褐色土(10YR5/3) 大灰褐色土了D+・灰黄褐色砂質了D+少泥。
- 37 褐色土(10YR5/1) 砂質土・中灰褐色土了D+主体。
- 38 灰黄褐色土(10YR5/2) 大暗褐色土粘質了D+泥。
- 39 砂か。
- 40 褐色土(10YR4/1) 小砂質了D+・大灰褐色土了D+少泥。
- 41 褐色土(10YR4/1) 大灰褐色土・黄褐色土了D+主体。



ST01

ST01



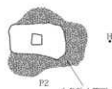
- 1 灰黄褐色土(10YR 5/2) 大白色粘土アロク少混。陶器片多混。造成土。
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 山砂・陶器片少混。やや還元。
- 3 褐灰色土(10YR5/1) 大白色粘土アロク少混。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR6/3) アロク主体。大白色粘土アロク多混。
- 5 灰黄褐色土(10YR 6/2) 礫・陶器片混。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂質土。山砂少混。淘汰良し。
- 7 灰黄褐色土(10YR 5/2) 山砂少混。
- 8 灰黄褐色土(10YR 5/2) 大白色粘土アロク・陶器片多混。中白色粘土粒・中炭化物粒少混。
- 9 褐灰色土(10YR5/1) 山砂・陶器片少混。やや還元。
- 10 灰黄褐色土(10YR 5/2) 大褐色土アロク混。山砂少混。
- 11 灰黄褐色土(10YR 5/2) 山砂・陶器片少混。やや還元。
- 12 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 中炭化物粒少混。
- 13 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 山砂・大炭化物粒少混。淘汰良し。
- 14 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 中炭化物粒少混。山砂・陶器片混。
- 15 黒褐色土(10YR 3/1) 淘汰良し。
- 16 灰黄褐色土(10YR 5/2) 大褐色土アロク多混。
- 17 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 砂質土。淘汰良し。

P1-P2

検出



P1  
+  
XNW19より  
南へ6m



P2  
白色粘土塊

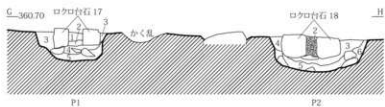
掘方



P1  
+  
XNW19より  
南へ6m



P2



P1

- 1 褐灰色土(10YR 5/1) 中白～黄褐色粘土少混。
- 2 黒褐色土(10YR 3/1) 大粘土ブロック多混。陶器片少混。
- 3 褐灰色土(10YR 5/1) 山砂多混。中白～黄褐色粘土粒少混。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR 5/3) 灰黄褐色粘土アロク混。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR 7/3) 山砂多混。

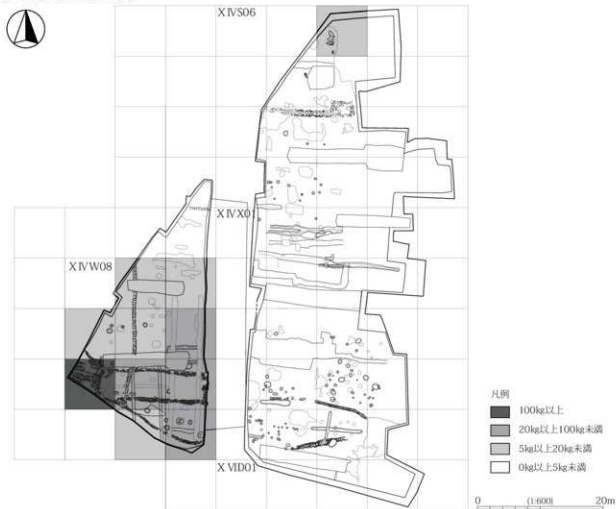
P2

- 1 にぶい黄褐色土(10YR 6/4) 粘土。山砂少混。
- 2 褐灰色土(10YR 6/1) 大黄褐色粘土アロク少混。
- 3 褐灰色土(10YR 4/1) 山砂多混。
- 4 灰黄褐色土(10YR 4/2) 中黄褐色粘土アロク・陶器片少混。
- 5 褐灰色土(10YR 5/1) 粘土。
- 6 褐灰色土(10YR 5/1) 小形黄褐色粘土少混。

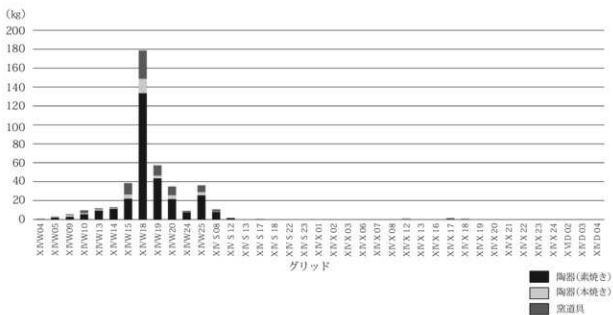
0 (1:40) 1m



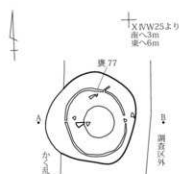
長谷窯関連遺物出土状況



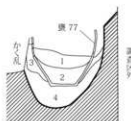
工房関連遺物のグリッド別出土量



SK111

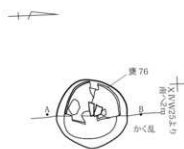


△-361.00

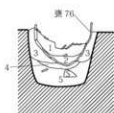


- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。
- 2 明黄褐色土(10YR6/6) 砂。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂。

SK112



△-361.00



- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂。
- 2 明黄褐色土(10YR6/6) 砂。瓦・ガが片混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 硬い、にぶい黄褐色土層の入り混。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土と砂の互層。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂質土。大石多混。

SK114

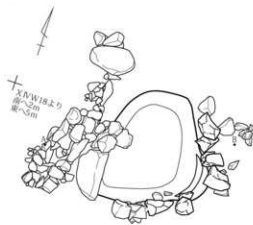


△-360.50



- 1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 砂。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 砂質土。粘炭化物粒混。

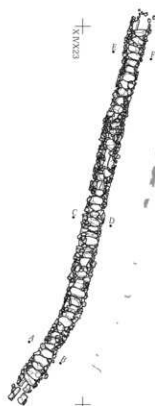
SK115



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 山砂混。大層灰色土の入り混。

0 (1:40) 1m

SD01



0 (1.80) 2m

SD26



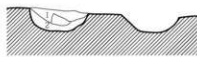
L=359.90

- 1 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3) 小炭化物粒微混。
- 2 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3) 小砂少混。
- 3 暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3) 小砂少混。

0 (1.80) 2m

SD43・SD44

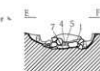
A-359.00



SD43 SD44

- 1 黄褐色土(10YR5/6) 3砂。
- 2 灰土(7.5Y5/1) 3砂。砂多混。

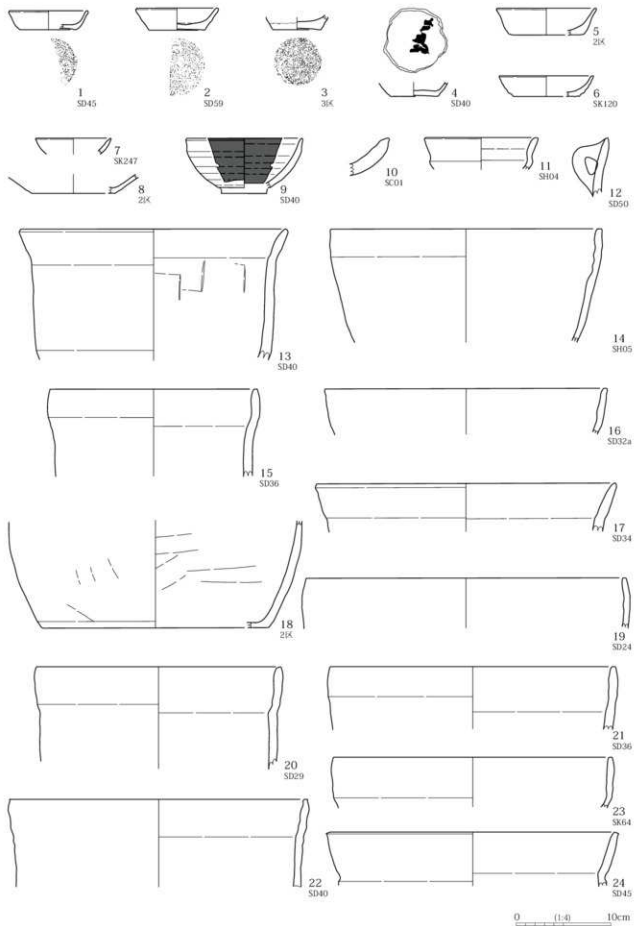
0 (1.40) 1m



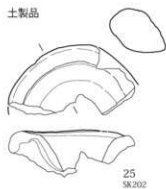
L=359.40m

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 細砂混。中炭化物粒微混。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 小灰黄褐色粘質土混。細砂少混。木片微混。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 極小灰色土・細砂少混。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土。褐色アト微混。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR5/4)
- 6 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 掘方。
- 7 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘細砂混。

0 (1.40) 1m



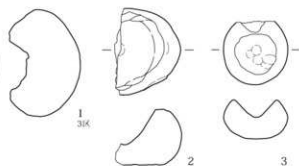
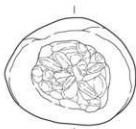
土製品



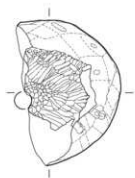
25  
SK202

0 1:4 10cm  
(25)

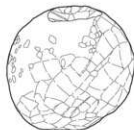
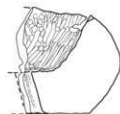
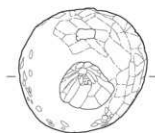
凹石



1 3K  
2 SD50 3 SD24  
0 1:2 10cm  
(1-3)

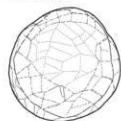


4  
2K

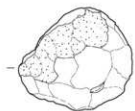
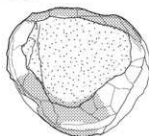


5  
SD40

五輪塔未成品



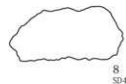
加工石



6  
SD40



7  
2K  
Cif



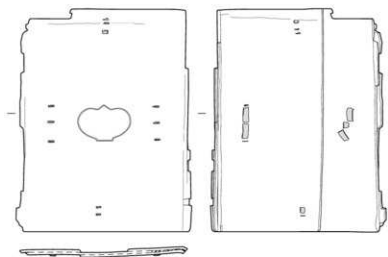
8  
SD40



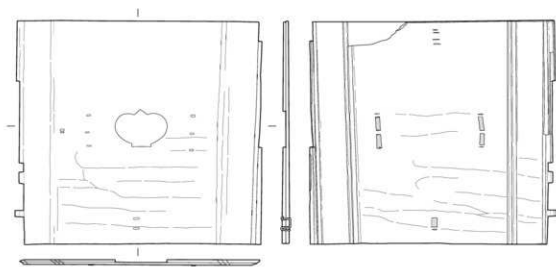
9  
SD40

0 1:6 20cm  
(4-9)

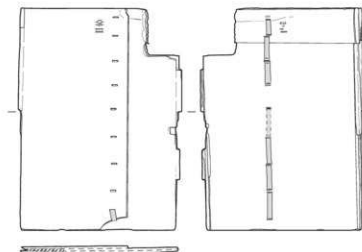
三方



1-1  
SD40



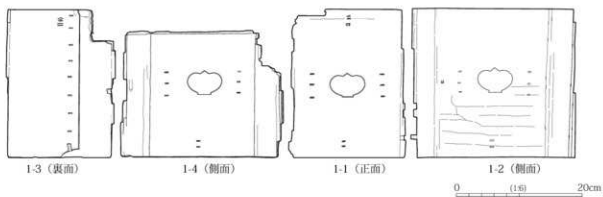
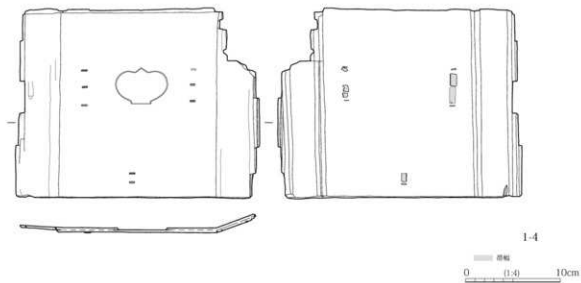
1-2



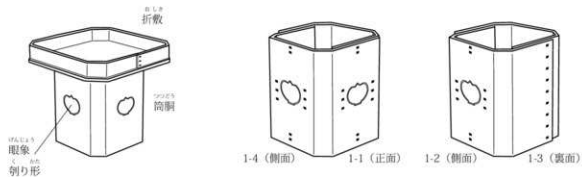
1-3



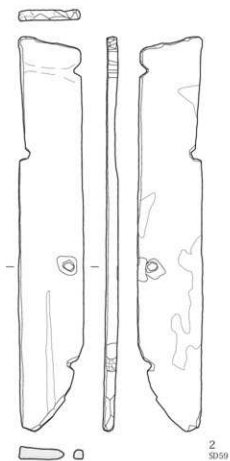
三方



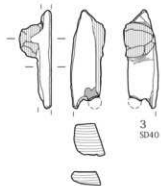
三方復元図



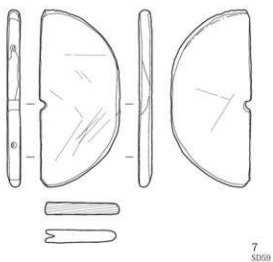
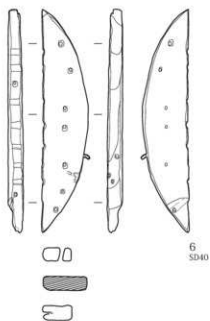
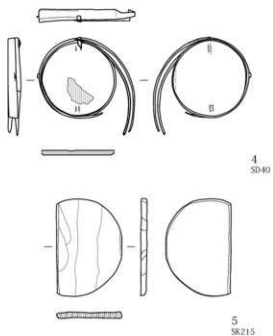
田下駄



連齒下駄



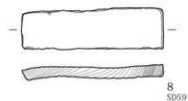
曲物



0 1:4 10cm

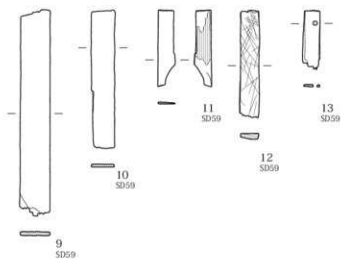


板材



8  
SD59

不明木製品



9  
SD59

10  
SD59

11  
SD59

12  
SD59

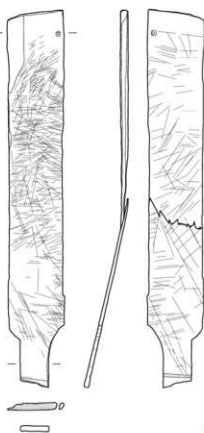
13  
SD59



14  
SD59

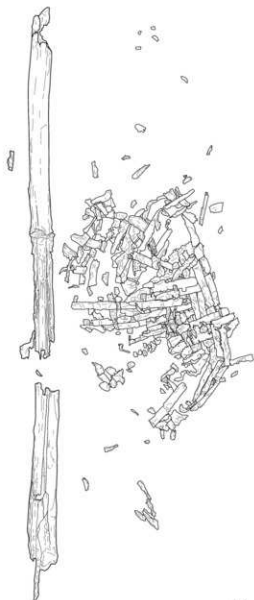


15  
SD59



16  
SD40

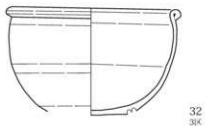
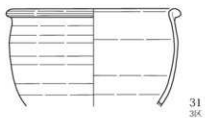
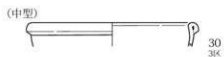
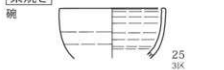
籠状製品



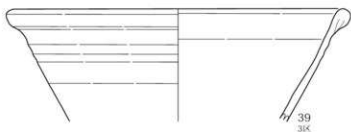
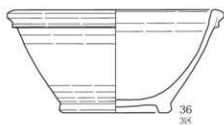
17  
SR215

0 (1:4) 10cm

素焼き



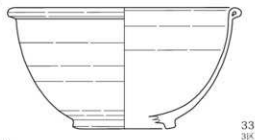
楕鉢  
(小型)



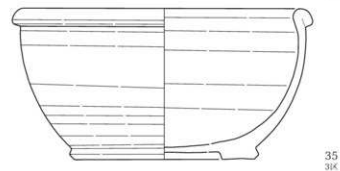
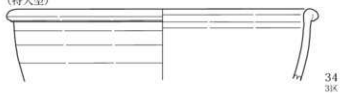
鉢  
(丸型)



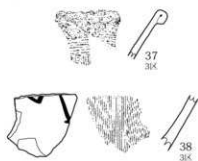
(大型)



(特大型)

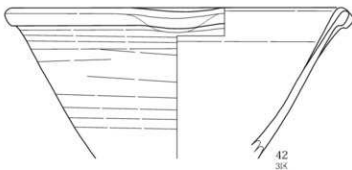
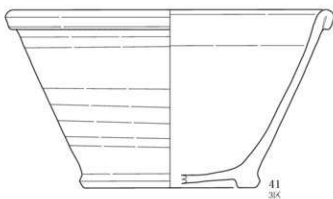
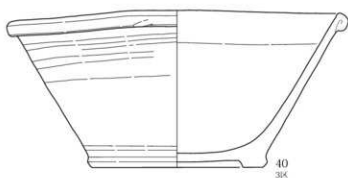


(大型)



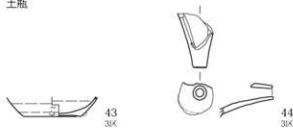
0 1:4 10cm

播鉢  
(大型)



0 1:4 10cm

土瓶



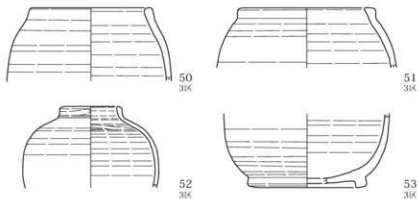
小水注



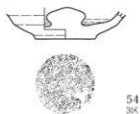
急須蓋



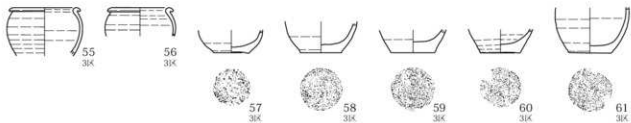
壺



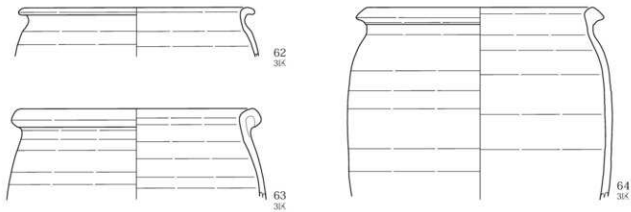
壺蓋



甕  
(小型)

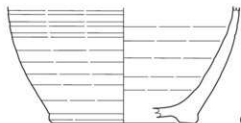


(中型)

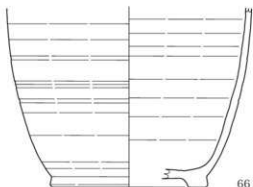


0 (1:4) 10cm

甕  
(中型)



65  
3K

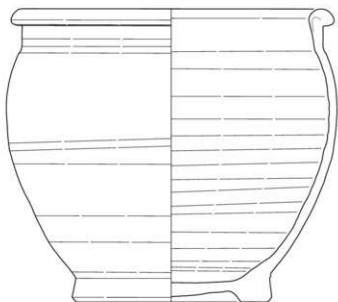


66  
3K

(大型)



67  
3K



68  
3K



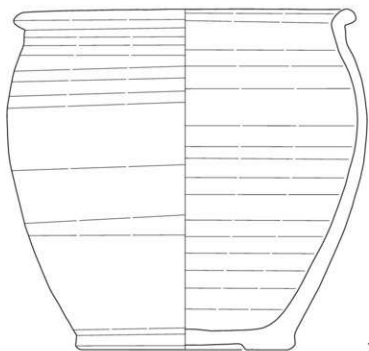
69  
3K



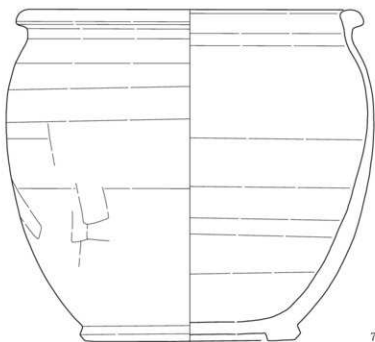
70  
3K02

0 (1:4) 10cm

甕  
(大型)



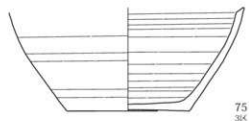
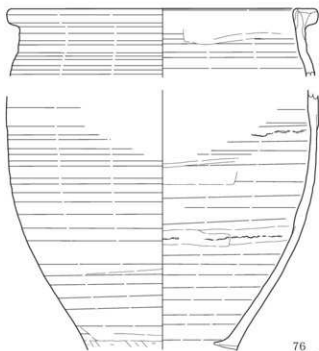
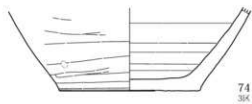
71  
SK114



72  
3K

0 1:4 10cm

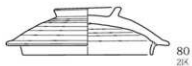
甕  
(特大型)



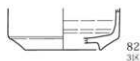
0 (1:4) 10cm  
(78, 79)

0 (1:8) 20cm  
(73~77)

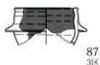
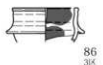
鍋蓋



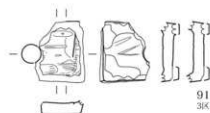
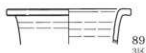
火入れ



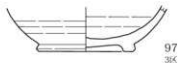
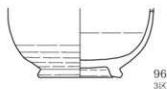
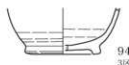
羽釜  
(小型)



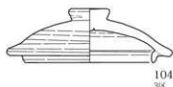
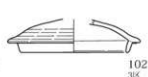
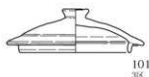
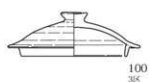
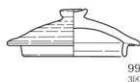
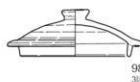
植木鉢



その他の器類



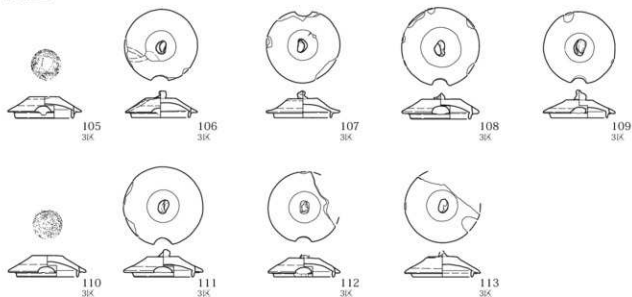
その他の蓋



0 (1:4) 10cm



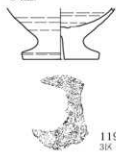
灯明皿蓋



灯明皿



束腰  
(大型)



(环部の深い小型)



(环部の浅い小型)



0 (1:4) 10cm

本焼き

鉢  
(丸型)



126  
3K

(小型)



127  
SK109

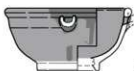


128  
3K

(中型)



131  
3K



129  
SK109



130  
SK109

(大型)



132  
3K



133  
3K

(特大型)



134  
3K



135  
3K



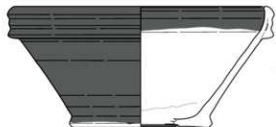
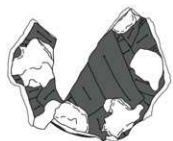
136  
3K

0 10 10cm

権鉢  
(小型)



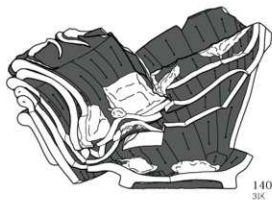
137  
3K



138  
3K



139  
3K



140  
3K

徳利



141  
3K



142  
3K

土瓶



143  
3K

急須



144  
3K

土瓶蓋



145  
3K



146  
3K

急須蓋



147  
SK114



148  
3K



149  
SD23

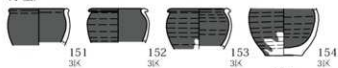


150  
3K

0 (1:4) 10cm

甕

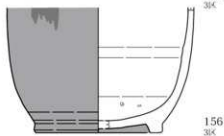
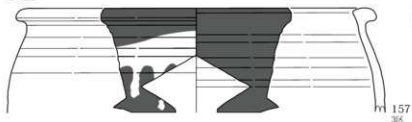
(小型)



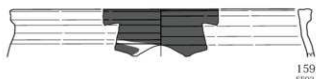
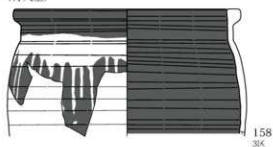
(中型)



(大型)

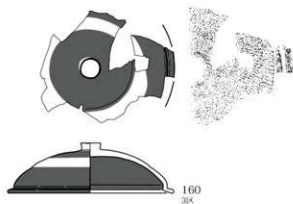


(特大型)

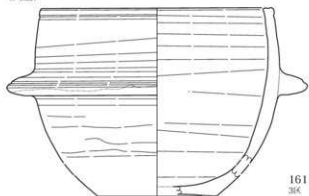


0 (1.8) 20cm  
(158, 159)

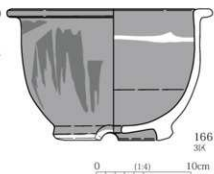
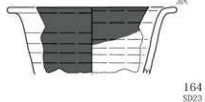
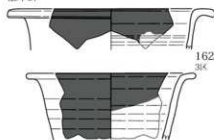
鍋蓋



羽釜  
(大型)



植木鉢



0 (1.4) 10cm

火入れ



167  
3X08



168  
3K



169  
3K58

火鉢



170  
3K

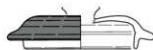
その他の蓋



171  
3K



172  
3K



173  
3K

灯明皿蓋



174  
3K



175  
3K



176  
3K



177  
3K



178  
3K27



179  
3K



180  
3K

灯明皿



181  
3K

乗攪

(坏部の深い小型)



182  
3K



183  
3K

(坏部の浅い小型)



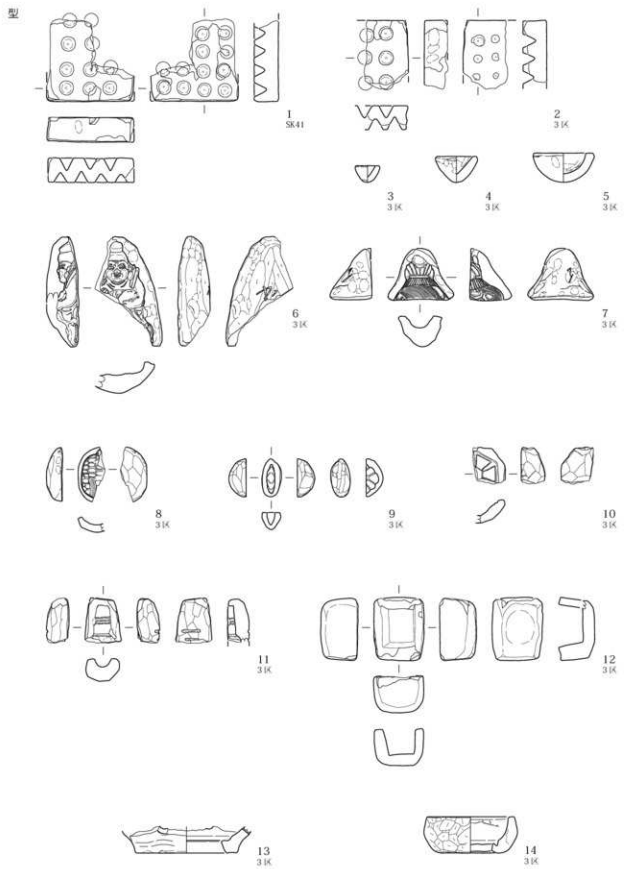
184  
3K

器類不明



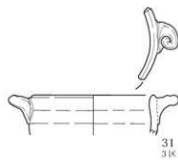
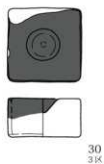
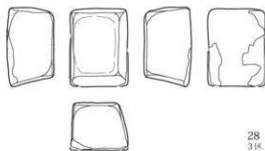
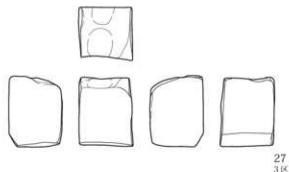
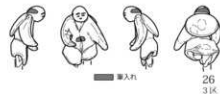
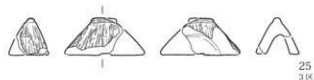
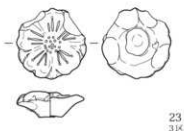
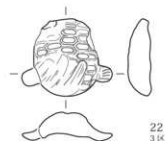
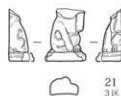
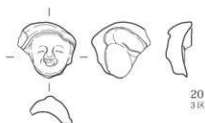
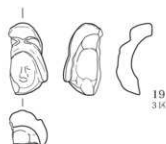
185  
3K

0 (1:4) 10cm



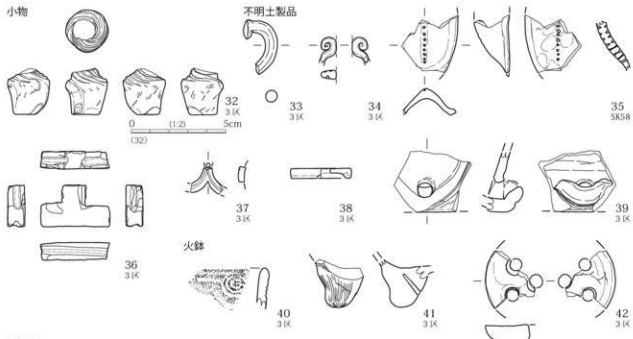
0 1:4 10cm

小物

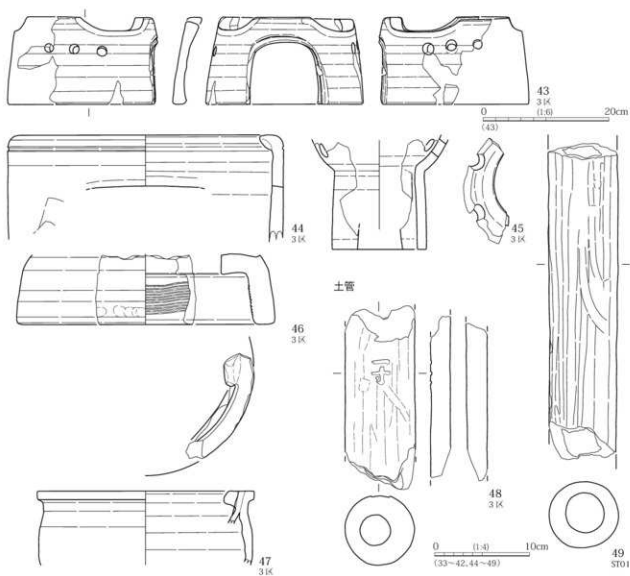


0 1:2 5cm

小物

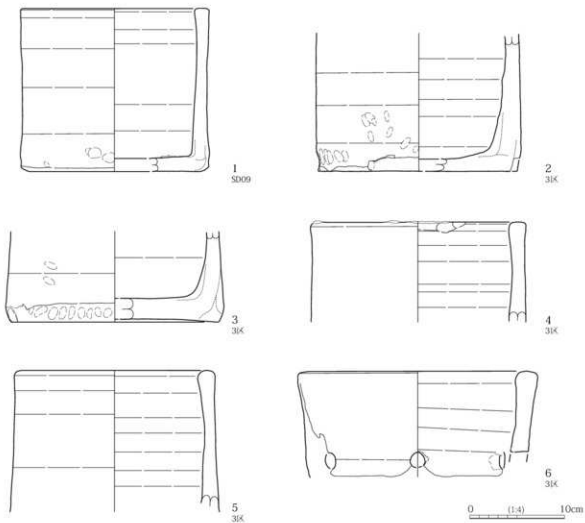


コンロ

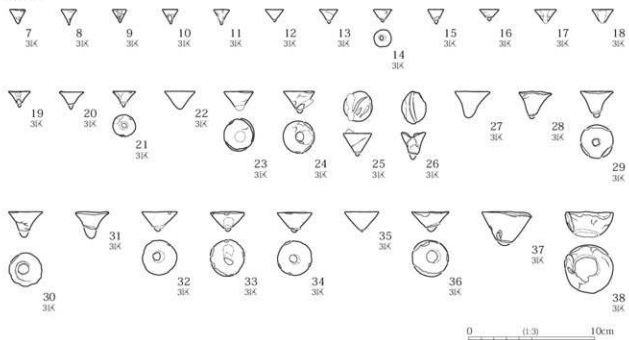




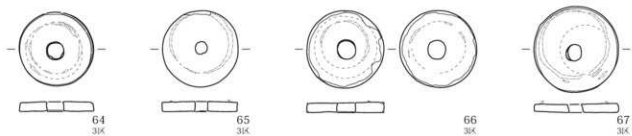
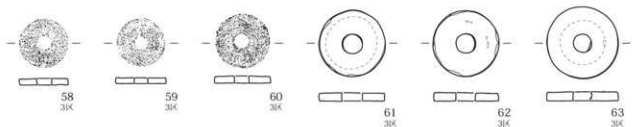
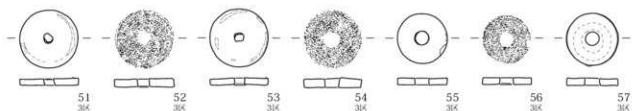
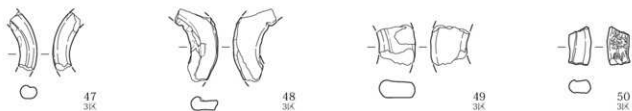
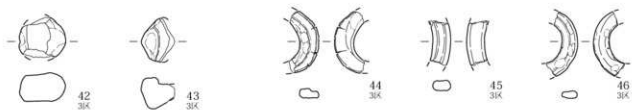
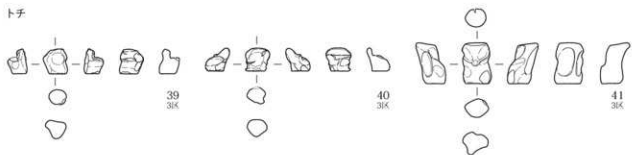
匣鉢



円錐ピン

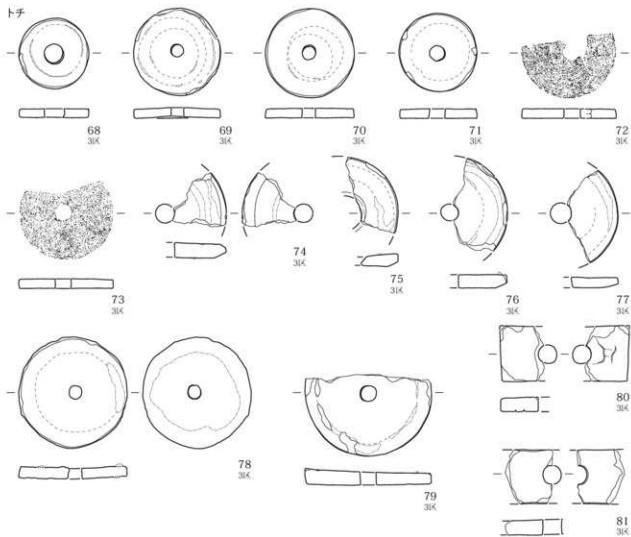


トチ

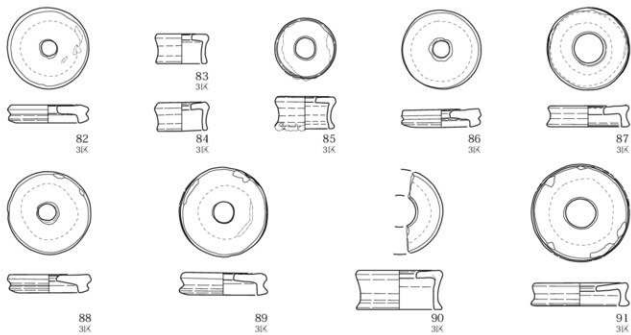


0 (1:4) 10cm

ト子



焼台



0 (1:4) 10cm

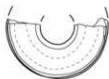
焼台



92  
3K



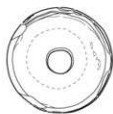
93  
3K



94  
3K



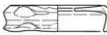
95  
3K



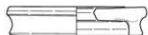
96  
3K



97  
3K



98  
3K



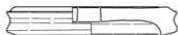
99  
3K



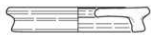
100  
3K



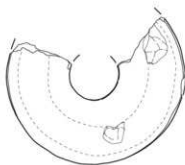
101  
3K



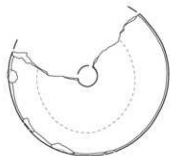
102  
3K



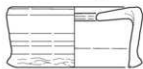
103  
3K



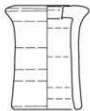
104  
3K



105  
3K



106  
3K



107  
3K



108  
3K



109  
3K



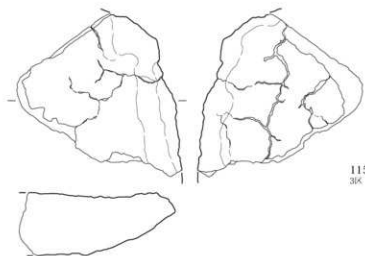
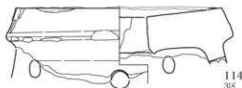
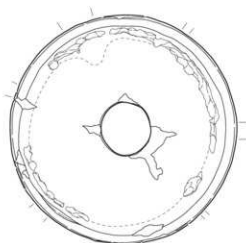
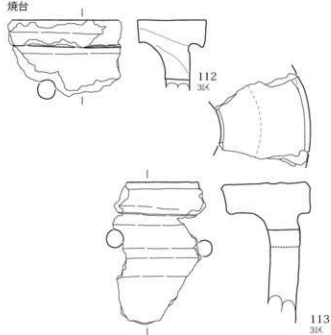
110  
3K



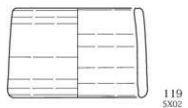
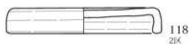
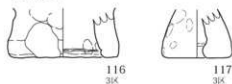
111  
3K

0 1:4 10cm

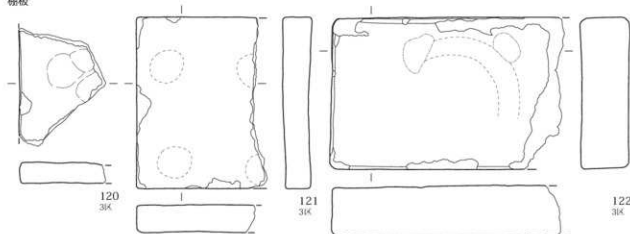
焼台



不明窯道具

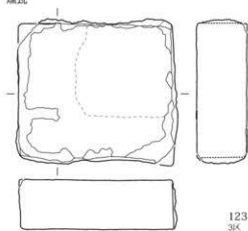


棚板

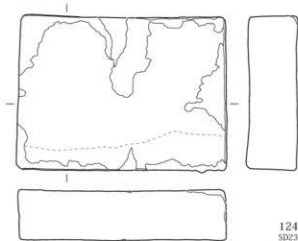


0 1:4 10cm

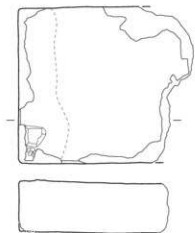
煉瓦



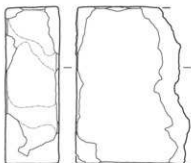
123  
3K



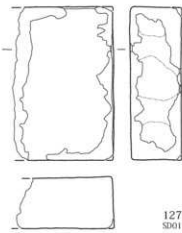
124  
SD23



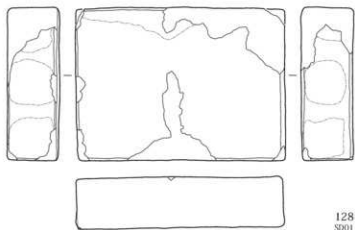
125  
3K



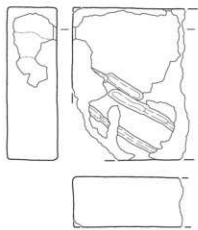
126  
SD01



127  
SD01

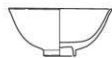


128  
SD01

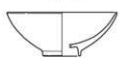


129  
SD01

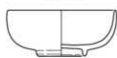
0 1:4 10cm



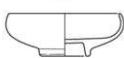
186  
3/4



187  
3/4



188  
3/4



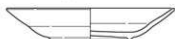
189  
3/4



190  
3/4



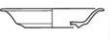
191  
2/4



192  
2/4



193  
3/4

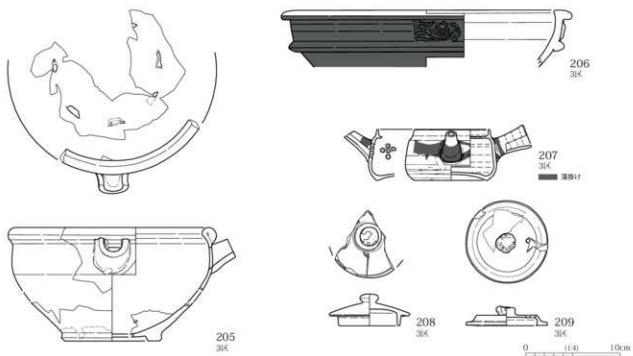
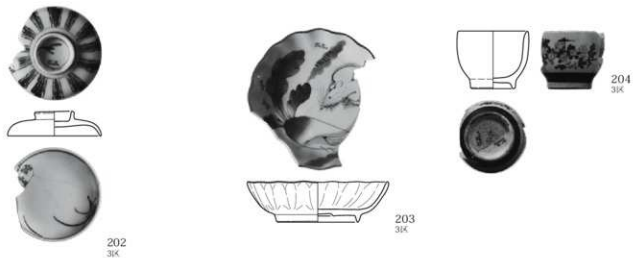
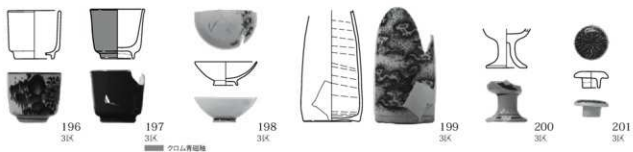


194  
3/4

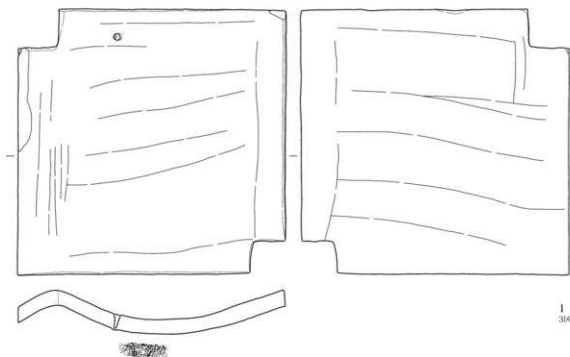


195  
3/4

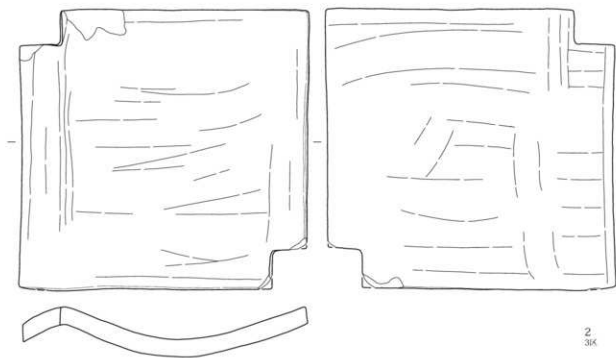






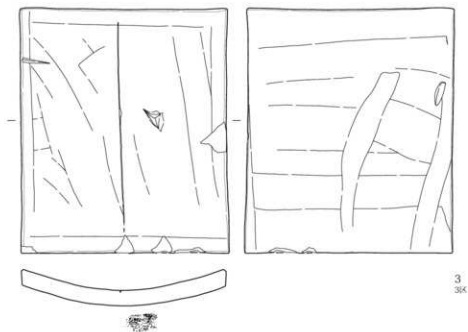


1  
3/4

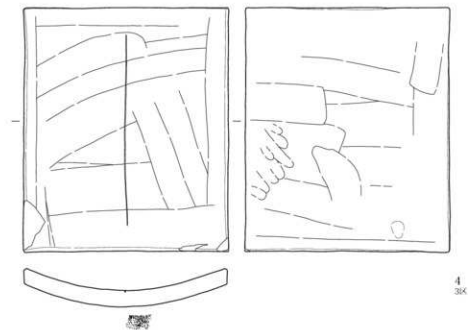


2  
3/4

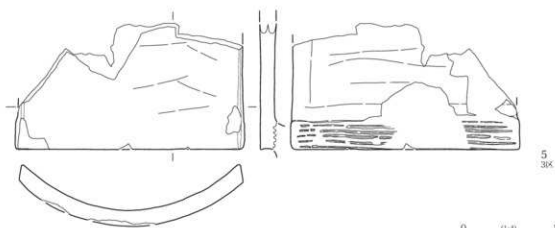
0 (1:4) 10cm



3  
3X

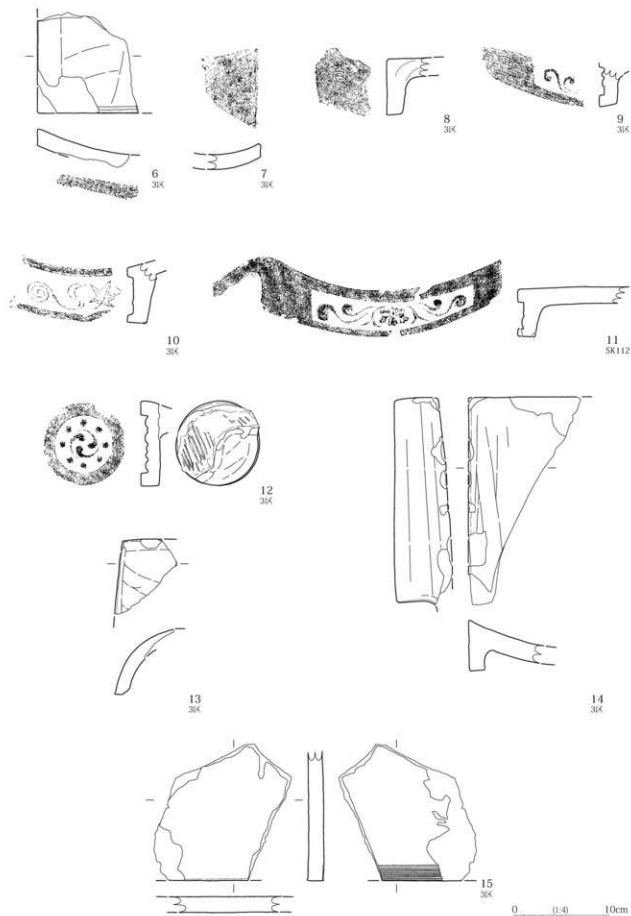


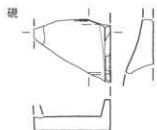
4  
3X



5  
3X

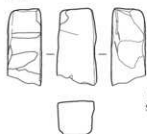
0 1:1 10cm





10  
3/4x

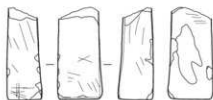
砥石



11  
5/8x3



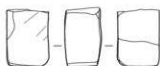
12  
SK226



13  
SD34



14  
3/4x



15  
3/4x

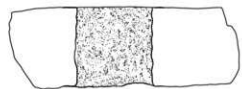
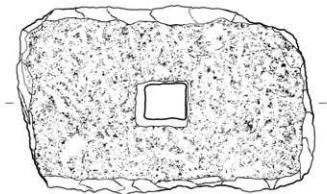
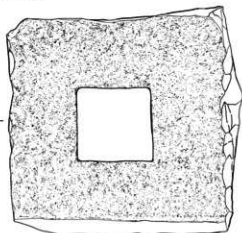


16  
3/4x

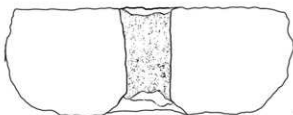


0 (1:3) 10cm

ロクロ台石

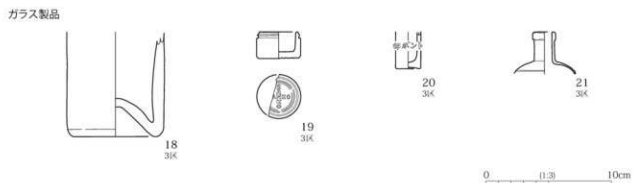
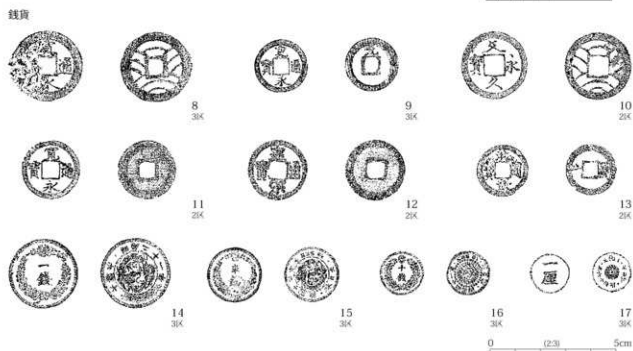
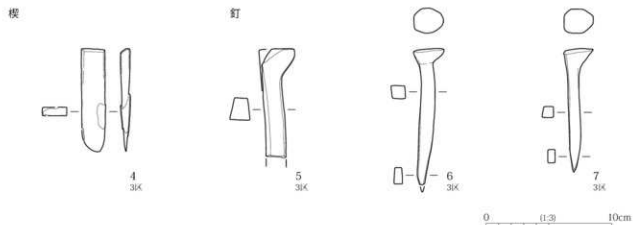
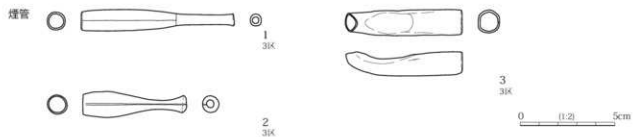


17  
ST01



18  
ST01

0 (1:8) 20cm





# 写真図版







2区第4調査面 (東から)



3b・4a区微高地 (南から)



3b・4a区第2水田検出状況 (北が上)



5b区北壁 (SC059) 断面 (南から)



7a区第3水田検出状況 (南西から)

PL 2 石川糸里遺跡 弥生時代の遺構 2 (水田跡・溝跡・土器集中)



7b・8区弥生時代の畦畔検出状況 (南から)



SC061 芯材出土状況 (南東から)



SC063 土器・芯材出土状況 (南東から)



SC089 芯材出土状況 (南から)



SC101 芯材出土状況 (東から)



SC105 芯材出土状況 (南東から)



SD187 (西から)



SQ001 土器 (1~3) 出土状況 (北から)



3b・4a区畦畔検出状況（東から）



SC038 土器（41・42）出土状況（南から）



SC043 検出状況（北から）



3b・4a区土器（47）出土状況（北から）



9区杭列出土状況（南東から）



SX002 遺物出土状況（南から）



SX002 遺物出土状況アップ（南西から）



SD100 完掘状況（東から）



11c区第1水田検出状況 (南西から)



SC058 芯材出土状況 (東から)



SC058 土器 (118) 出土状況 (東から)



SC093 検出状況 (東から)



SC093 断面 (東から)



SC093・095 芯材出土状況 (南から)



SC094 検出状況 (南から)



SC094 復旧痕跡断面 (南東から)



SC095 断面 (南から)



SC096 検出状況 (北から)



SC097・098 検出状況 (南から)



SC097 復旧痕跡断面 (南東から)



SL030 ウシ足跡検出状況 (東から)



12a区北・南 第1水田検出状況(北上方から)



SC081 芯材出土状況(西から)



SC081 復旧痕跡断面(南から)



SC086 芯材出土状況(東から)



SL016 足跡完掘状況(南から)



長谷鶴前遺跡群 1区第5調査面 (南西から)



長谷鶴前遺跡群 2区第5調査面 (北東から)



SC04 芯材出土状況 (北から)



SC04 断面 (南西から)



SC04 田下駄(98) 出土状況 (北から)



SC04 建築部材(130) 出土状況 (南から)



SC11・14 芯材出土状況 (北から)



長谷1区 SC17・18・19 検出状況 (北から)



SK356 検出状況 (東から)



SD046 完掘状況 (南から)



SD048 完掘状況 (西から)



SD064 完掘状況 (南から)



SD064・066 完掘状況 (南西から)



SD071 全景 (南東から)



SD083 完掘状況 (北から)



SD095 完掘状況 (北から)





SD096 完掘状況 (南から)



SD104 完掘状況 (南から)



SD105 完掘状況 (東から)



SD127 全景 (南から)



SD169・170・171・172 完掘状況 (南西から)



SD174・175・176 完掘状況 (東から)



SD177 完掘状況 (北西から)



SD178 完掘状況 (北東から)



1区第1調査面全景 (北が上)



ST001 完掘状況 (北が上)



ST001P4 礎板石出土状況 (南から)



ST001P12 礎板石出土状況 (南から)



ST001P18 礎板石出土状況 (南から)



ST001P24 礎板石出土状況 (南から)



ST002 完掘状況 (上から)



ST004 完掘状況 (東から)



ST005 完掘状況 (東から)



ST006 完掘状況 (東から)



SA001 完掘状況 (西から)



SA002 完掘状況 (北から)



SA003 完掘状況 (北から)



SA004 完掘状況 (東から)



SK002 断面 (南から)



SK003 断面 (南から)



SK004 上部掘下げ (西から)



SK005 断面 (南から)



SK006 断面（南から）



SK007 断面（南西から）



SK009 断面（南から）



SK010 断面（南西から）



SK011 上部掘下げ（西から）



SK013 断面（東から）



SK014 断面（東から）



SK015 断面（東から）



SK016 上部掘下げ (東から)



SK017 断面 (南から)



SK020 断面 (南から)



SK021 断面 (南から)



SK023 断面 (西から)



SK062 完掘状況 (北から)



SK074 断面 (南から)



SK080 上部掘下げ (南から)



SK080 断面 (南から)



SK094 完掘状況 (東から)



SK191 断面 (西から)



SK196 断面 (南から)



SK197 上部掘下げ (南から)



SK198 断面 (南から)



SK200 断面 (南から)



SK257 完掘状況 (南から)



SK270 裸出土状況 (西から)



SK276 断面 (南から)



SK277 断面 (南から)



SK278 断面 (南から)



SK279 断面 (西から)



SK507 完掘状況 (南から)



SK508 断面 (南から)



SK509 完掘状況 (西から)





SK510 完掘状況 (南から)



SK521 断面・518 完掘状況 (南から)



SK519 断面 (南から)



SK520・533 完掘状況 (北から)



SK522 完掘状況 (南から)



SK523 断面 (南から)



SK525 断面 (東から)



SK535・536・542 完掘状況 (南から)



SK552 断面 (南から)



SK553 完掘状況 (南西から)



SK554 断面 (南西から)



SK556 完掘状況 (南から)



SK558 完掘状況 (南から)



SK560 完掘状況 (東から)



SK561 完掘状況 (東から)



SK721 上部掘下げ (南東から)



SK901 断面 (南東から)



SK902 断面 (西から)



SK903 断面 (東から)



SK904 断面 (東から)



SK905 断面 (南から)



SK906 断面 (東から)



SK907 断面 (東から)



SK908 断面 (北東から)



SK001 完掘状況 (南から)



SK012 断面 (南から)



SK041 断面 (南から)



SK337・343 断面 (南から)



SK337・343 完掘状況 (南から)



SK369 断面 (南から)



SK370 完掘状況 (西から)



SK604 完掘状況 (西から)



SM001 人骨出土状況（南から）



SM002 断面（東から）



SM002 人骨出土状況（南から）



SM003 歯出土状況（南東から）



SM003 完掘状況（南から）



SM004 人骨出土状況（南から）



SM005 検出状況（北から）



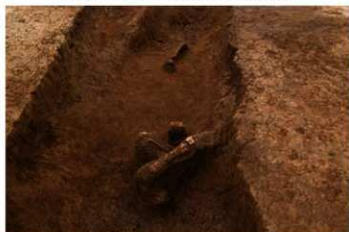
SM005 数珠玉（11～15）出土状況（西から）



SD001~008・011・015 完掘状況 (南から)



SD006・010・011・014 完掘状況 (南から)



SD009 ウマ骨出土状況 (東から)



SD009 完掘状況 (東から)



SD012・013 完掘状況 (南から)



SD016 礎検出状況 (南から)



SD019 礎検出状況 (東から)



SD020 完掘状況 (南から)



SD021・022 完掘状況（西から）



SD023 完掘状況（東から）



SD023・024・025 完掘状況（東から）



SD026・028・032 完掘状況（南から）



SD033・037・038・039 完掘状況（北から）



SD034・035・036・042 完掘状況（北から）



SD050 完掘状況（東から）



SD057・058 完掘状況（北西から）



SD057・058・061・063 完掘状況 (西から)



SD061 完掘状況 (南から)



SD068 完掘状況 (南から)



SD070 完掘状況 (西から)



SD080・088 完掘状況 (東から)



SD081 完掘状況 (南から)



SD085・087 完掘状況 (東から)



SD089・090 完掘状況 (西から)





SD125・126・135 完掘状況 (西から)



SD128・129 完掘状況 (南から)



SD137 完掘状況 (南から)



SD138 完掘状況 (北から)



SD139・140 完掘状況 (南から)



SD146・147・148 完掘状況 (東から)



SD151 完掘状況 (南東から)



SD152 完掘状況 (東から)



SD153 完掘状況 (南から)



SD154 完掘状況 (南から)



SD167・168 完掘状況 (南から)



SD183 完掘状況 (北東から)



SD188・189 完掘状況 (南から)



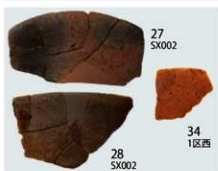
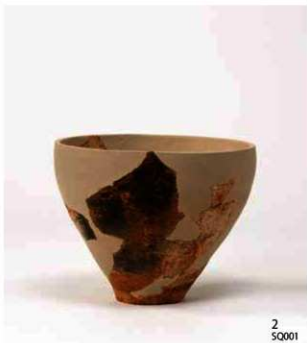
SD191・192 完掘状況 (南から)

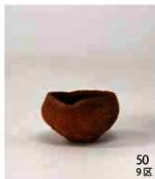


SD191 鍬形兜前立出土状況 (西から)



SD191 断面 (東から)









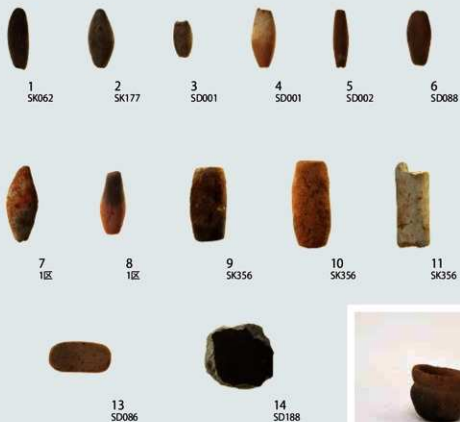








土錘



土製円盤  
ミニチュア土器

勾玉



管玉



小玉  
数珠玉

打製石鏃  
打製石斧



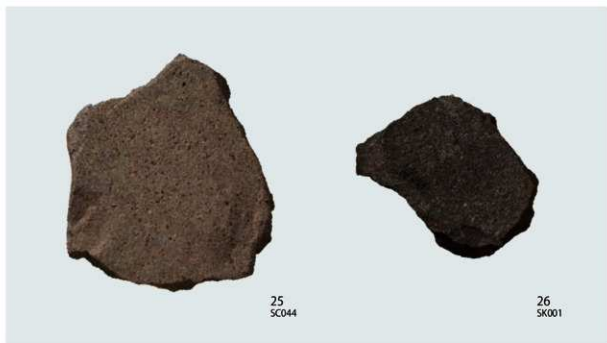
削器

打製大型刃器



磨製大型蛤刃石斧  
磨製定角式石斧  
環狀石斧未成品  
未成石器





石皿  
砥石

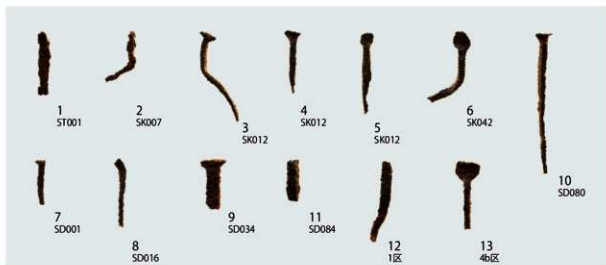


石撻鉢  
石臼



磨石  
石錘  
碁石

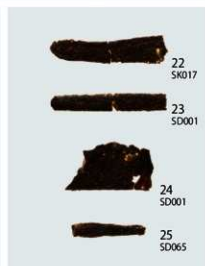
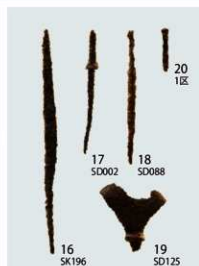




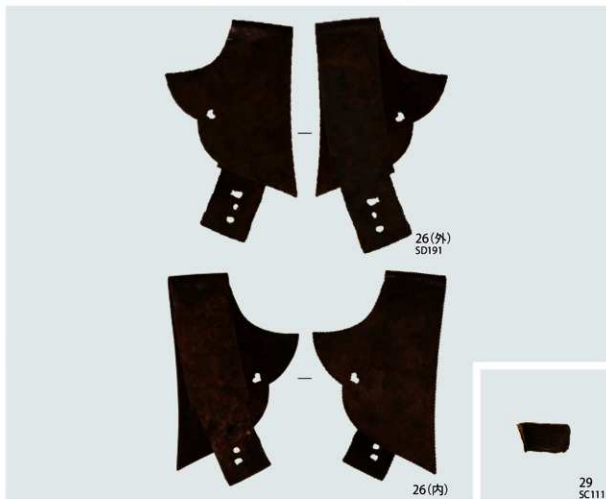
釘



縮金具  
鉄鎌  
刀子  
刃物



鉄鍋



楯形兜前立

不明銅製品

銭貨



30  
SK001



31  
SK004



32  
SK005



33  
SK041



34  
SK041



35  
SK055



36  
SK269



37  
SK273



38  
SD009



39  
SD080



40  
SM005



41  
1区



42  
SD086



43  
SD087



44  
SD188



45  
12c区



46  
12c区



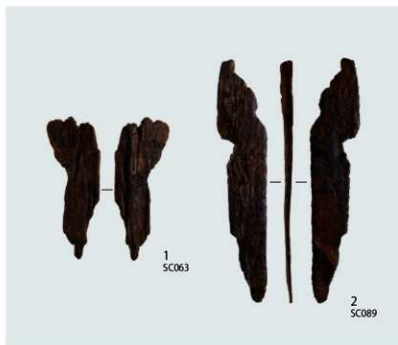
47  
4b区



48  
SK011



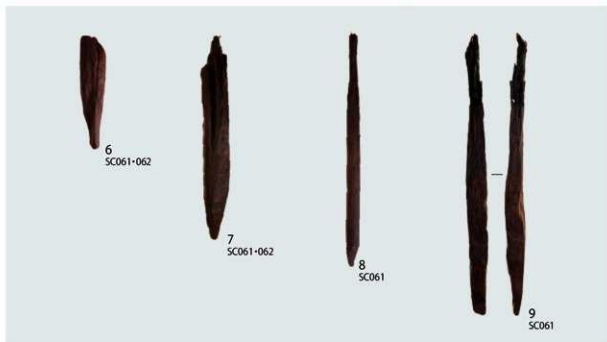
49  
SL013



農具  
板材



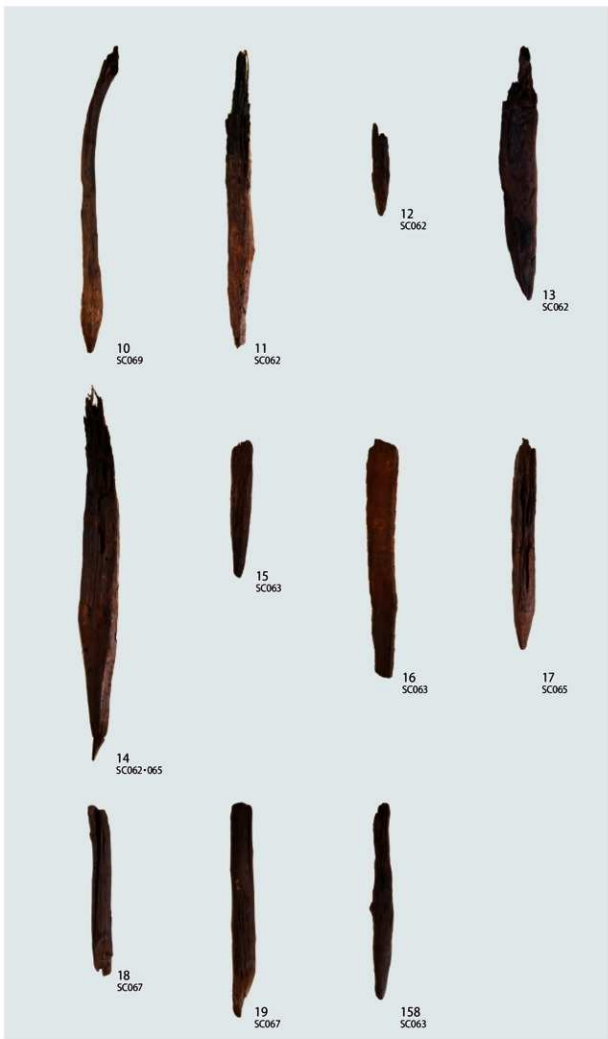
建築部材  
角材



杭



杭



農具



20  
9区SX002



21  
9区SX002



159  
9区

建築部材



22  
9区SX002



23  
9区SX002



24  
9区SX002

杭



25  
9区



26  
9区



27  
9区



28  
9区



29  
9区



30  
9区



31  
9区



32  
9区



33  
9区



34  
9区



35  
9区



36  
9区



37  
9区



38  
9区



39  
9区



40  
9区



41  
9区



42  
9区

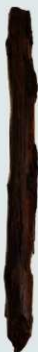


43  
9区



44  
9区

杭



45  
9区



46  
9区



47  
9区



48  
9区



49  
9区



50  
9区



51  
9区



52  
9区



53  
9区



54  
9区



55  
9区



56  
9区



57  
9区



58  
9区



59  
9区



60  
9区

杭



61  
9区



62  
9区



63  
9区



64  
9区



65  
9区



66  
9区



67  
9区



68  
9区



69  
9区



杭



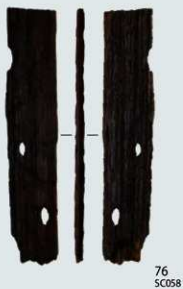
70  
9区

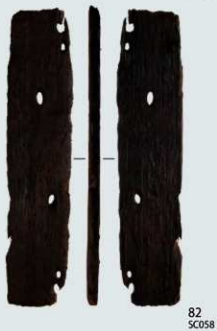
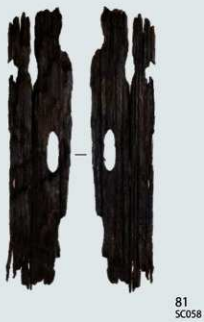
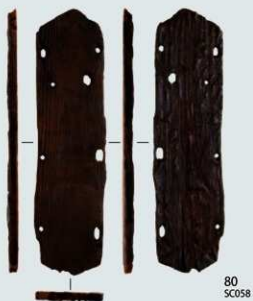


71  
9区



田下駄

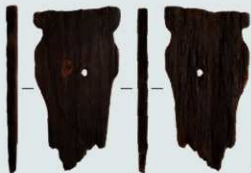




田下駄



85  
SC081



86  
SC081



87  
SC081



88  
SC086



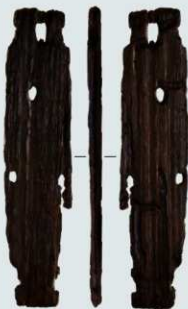
89  
SC092



90  
SC092



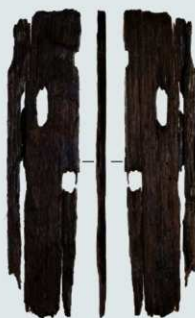
91  
SC092



92  
SC092



93  
SC092



94  
11b区



95  
長谷SC04

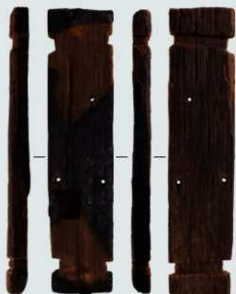


96  
長谷SC04

田下駄



97  
長谷SC04



98  
長谷SC04



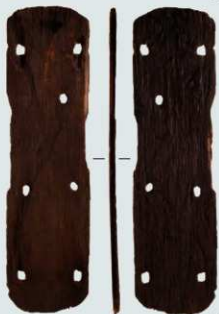
99  
長谷SC04



100  
長谷SC04



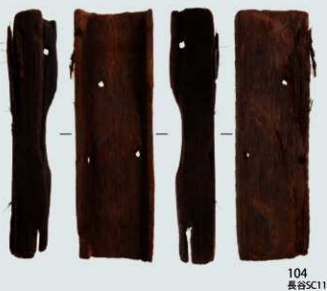
101  
長谷SC11



102  
長谷SC11



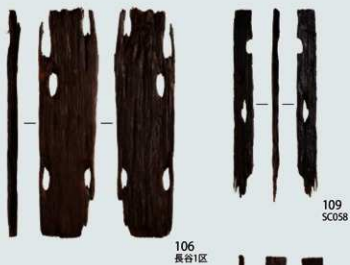
103  
長谷SC11



104  
長谷SC11



105  
長谷SC15



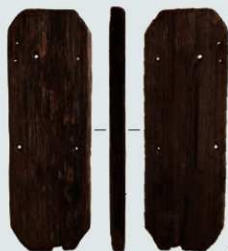
106  
長谷1区



109  
SC058



110  
SC081



107  
長谷1区



108  
SC058



111  
SC086



建築部材  
その他



112  
SC058



113  
SC058



114  
11b区



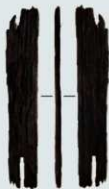
115  
11b区



116  
11b区



168  
SC058



117  
SC081



118  
SC081



119  
SC092



120  
11b区

建築部材  
その他



121  
SC058



122  
SC058



123  
SC058



125  
SC081



124  
SC081



126  
SC092



127  
SC092



128  
SC092



129  
SC093



130  
長谷SC04

建築部材  
その他



131  
長谷SC04



132  
長谷SC11

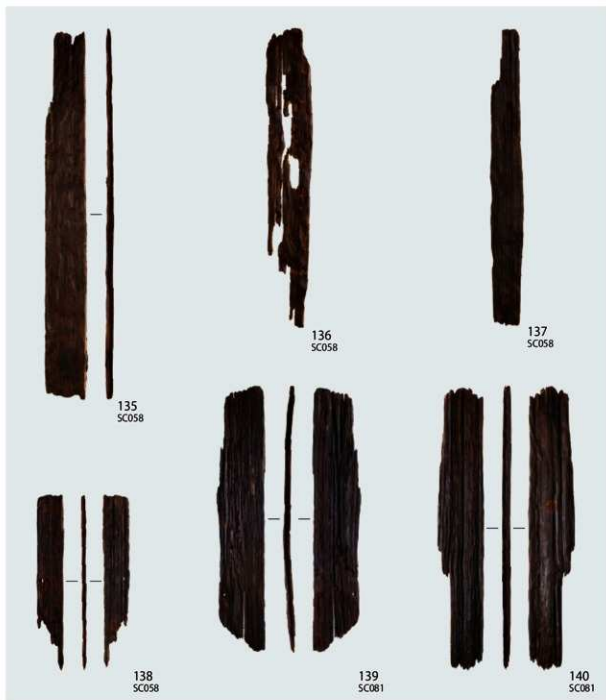


建築部材  
その他

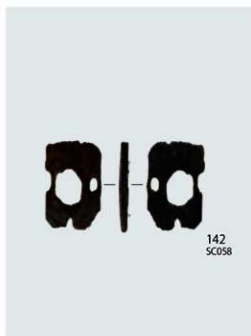


134  
長谷SC11

建築部材  
その他



不明木製品  
杭





杭  
曲物



146  
長谷SC04

147  
SC058

148  
SC058

149  
長谷SC04



150  
長谷SC11

151  
長谷SC11



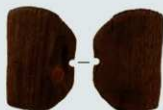
151  
長谷SC11



152  
長谷1区



154  
SK279



156  
SD189



153  
SK279



155  
SD189



169  
SK279



SC03 検出状況（南から）



SC03 足跡検出状況（南西から）



SC20 全景（南から）



SD59 完掘（南から）



SH06 検出状況（南西から）



SD42 完掘状況（西から）



SD47 完掘状況（南から）



SD55 完掘状況（北から）



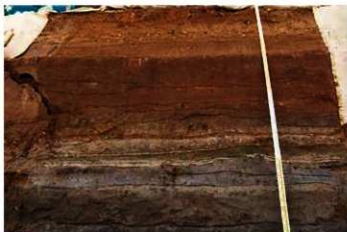
SD40 完掘状況 (南から)



SC01 全景 (南から)



SC01 断面（南から）



2区南壁道路跡断面（北から）



SD11 完掘状況（北から）



SD12・13・14 完掘状況（南から）



SD24 完掘状況（南から）



SD25ab・32ab 完掘状況（北から）



SD29 完掘状況（西から）



SD30ab・32ab・34 完掘状況（南から）



SD33・36 完掘状況 (南から)



SD41ab 調査状況 (東から)



SD45・57 完掘状況 (北から)



SD48・49 完掘状況 (北から)



SD50・51・52 完掘状況 (北から)



ST03 検出状況 (南から)



SK170 上部掘下げ状況 (西から)



SK171 上部断面 (西から)



SK214 完掘状況（西から）



SK215 曲物（5）・籠状製品（17）出土状況（南東から）



SK244 完掘状況（南から）



SK247 礫検出状況（南から）



SK254 掘下げ状況（南から）



SH05 礫検出状況（南から）



SH05 底面根太木出土状況（西から）



SH04 検出状況（南から）



2区第2調査面・3区第1調査面全景(西が上)



ST01 工房跡 (北から)





ST01P1 ロクロ台石 (17) 掘下げ状況 (南から)



ST01P2 ロクロ台石 (18) 掘下げ状況 (南から)



SK111 甕 (77) 出土状況 (南から)



SK112 甕 (76) 出土状況 (南から)



SK114 甕 (71) 出土状況 (東から)



SD01 調査状況 (南東から)



SD26 検出状況 (西から)



SD43・44 完掘状況 (東から)



土器、土製品



凹石



凹石  
五輪塔未成品  
加工石

三方



1-1  
SD40

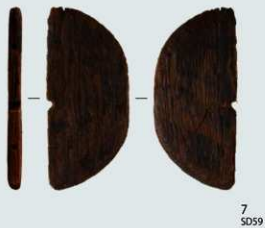
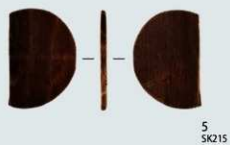


1-2



1-3

三方



田下駄  
曲物

不明木製品



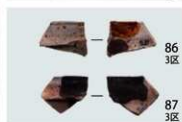
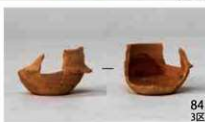
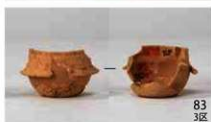
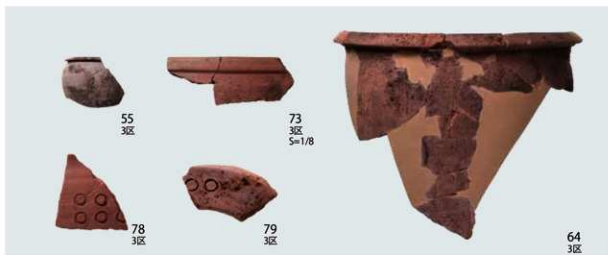
漆器



陶器(素焼き)



陶器(素焼き)



陶器(素焼き)



72  
3区



91  
3区



94  
3区



114  
3区



115  
3区



77  
SK11



118  
SX02



119  
3区



121  
3区



124  
3区



80  
2区



99  
3区



108  
3区



104  
3区



103  
3区



110  
3区



陶器(本焼き)



重ね焼き融着品





素焼き製品  
型



1  
SK41



2  
3区



3  
3区



4  
3区



6  
3区



5  
3区



7  
3区



8  
3区



9  
3区



10  
3区



11  
3区



12  
3区



13  
3区



14  
3区

小物



15  
3区



16  
SK41



17  
3区



18  
3区



19  
3区



20  
3区



21  
3区



22  
3区



23  
3区



24  
SK111



25  
3区



26  
3区

素焼き製品  
小物



28  
3区



29  
3区



30  
3区



31  
3区



32  
3区



33  
3区



34  
3区



35  
SK58

不明土製品

火鉢  
コンロ



40  
3区



42  
3区



44  
3区

土管



45  
3区



47  
3区



48  
3区



49  
5T01

コンロ

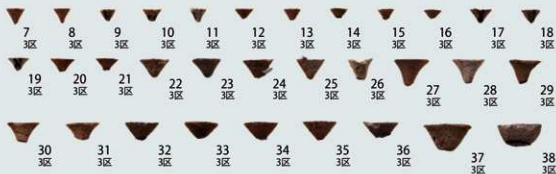


43  
3区

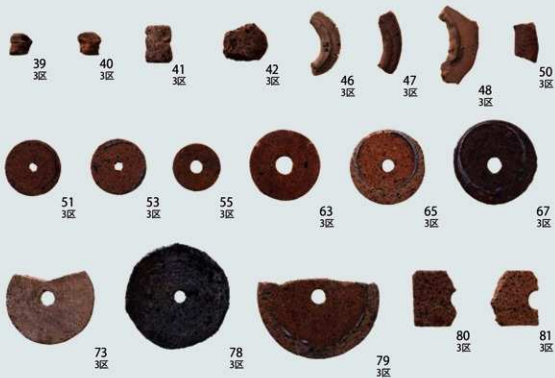
窯道具  
匣鉢



円錐ピン

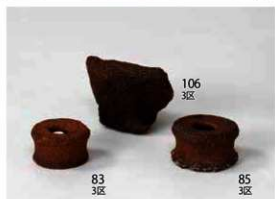
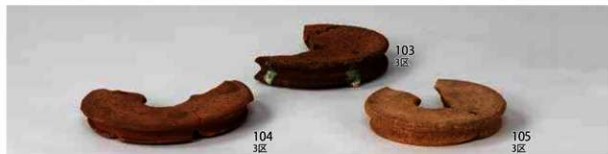


トチ

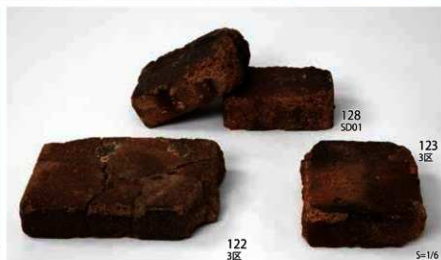




窯道具  
焼台



不明窯道具

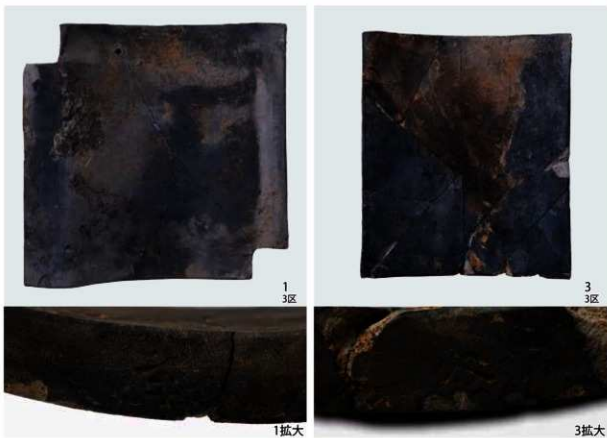


棚板  
煉瓦

ロクロ台石



瓦

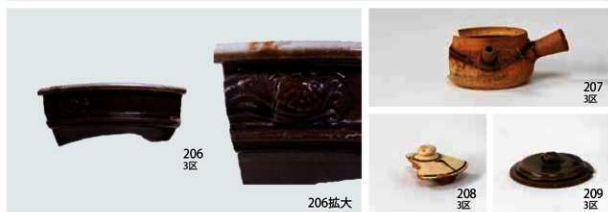




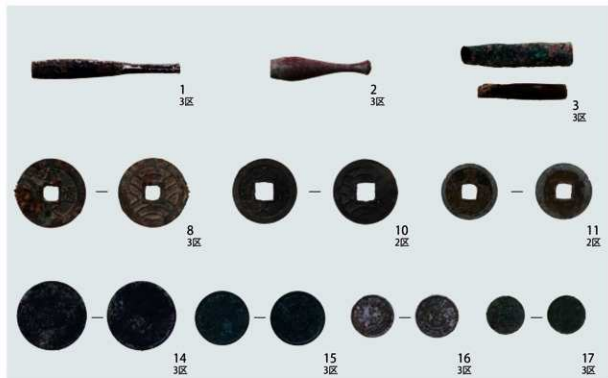
硯  
紙石

打製石鏃

二次加工剥片  
敲石



近代の陶器



煙管

銭貨



## 報告書抄録

ふりがな	いしかわじょうりいせき はせつるさきいせきぐん							
書名	石川条里遺跡 長谷鶴前遺跡群							
副書名	一般国道18号(坂城更埴バイパス)改築事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 ー長野市内1ー							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	134							
著作者名	市川隆之、西香子、馬場伸一郎、柴田洋孝、風間真起子							
編集機関	一般財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL.026-293-5926							
発行年月日	2024年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
石川条里遺跡	長野県 長野市 篠ノ井塩崎 2248 他	20201	E-1	36°32'40" (世界測地系)	138°06'23" (世界測地系)	20160401～20171222	16,000	一般国道18号(坂城更埴バイパス)改築事に伴う事前調査
						20170401～20171208	5,500	
20180401～20181226	13,500							
20190401～20191129	12,100							
20210401～20210608	4,700							
						合計 47,500		
長谷鶴前遺跡群	長野県 長野市 篠ノ井塩崎 26 他	20201	E-3	36°32'27" (世界測地系)	138°06'05" (世界測地系)	20170401～20210608	7,200	
						20180401～20181214	1,300	
						合計 8,500		
所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
石川条里遺跡	生産遺跡	弥生 ～平安	水田跡(水田3、畦畔114)、溝跡40、土坑23、遺物集中2		弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、灰輪陶器、土製品、石器、石製品、玉類、木製品		畦畔の芯材として木製品が多数出土。	
	集落跡	中世 ～近世	掘立柱建物跡6、欄列5、畦畔1、居館堀跡1、溝跡145、土坑454、墓跡5		土器、陶器、磁器、石製品、鉄製品、銅製品、木製品		中世の堀跡から、楕形堂前立が出土。	
要約	本遺跡は千曲川下流域の長野盆地南端に広がる後背湿地に立地する。弥生時代中期後半の水田跡に始まり、洪水砂に被覆された平安時代前期の条里型水田跡等、近世に至るまでの重層的な水田跡を検出した。中世前期の居住遺構と後期の館跡、近世の用水路等を確認し、遺跡の変遷が明らかとなった。							
長谷鶴前遺跡群	生産遺跡	平安	水田跡(水田1、畦畔16)		土器、木製品		畦畔の芯材として木製品が多数出土。	
	集落跡	中世 ～近世	道路跡2、畦畔2、居館堀跡2、溝跡40、土坑282、集石遺構2		土器、陶器、磁器、土製品、石器、石製品、木製品		中世の堀跡から、三方が出土。	
	生産遺跡	近世末 ～近代	工房跡1、暗渠2、溝跡9、土坑107		陶器(原産生産品)、窯道具、陶器(他窯)、磁器、瓦、ガラス製品、銭貨、金属製品		地元窯の長谷焼と窯道具が多数出土。	
要約	本遺跡は石川条里遺跡西側に接する山麓の崖地形に立地する。石川条里遺跡から続く平安時代前期の水田跡、中世後期の館跡、中世～近世の道路跡、近代産業工房跡等の多様な遺構を確認した。							

令和6（2024）年3月15日発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 134

**石川糸里遺跡 長谷鶴前遺跡群**

一般国道18号（坂城更埴バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4  
—長野市内1—

発行者 国土交通省 関東地方整備局  
（一財）長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-Mail maibun@naganobunka.or.jp

印刷者 信毎書籍印刷株式会社  
〒381-0037 長野県長野市西和田1-30-3  
Tel 026-243-2105 Fax 026-243-3494